

---

# 次元の破壊者～死神とマフィアと魔導師

重要大事

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

次元の破壊者〜死神とマフィアと魔導師

### 【Nコード】

N2478J

### 【作者名】

重要大事

### 【あらすじ】

次元の破壊者を止めるために、真之介は様々な次元から選ばれしものを探し見つけ出したのは、死神とボンゴレファミリーというマフィアの10代目ファミリーと時空管理局の魔導師だった。BLEACH、家庭教師ヒットマンREBORN、魔法少女リリカルなのはstrickersのクロスオーバー小説。あと、それら以外の作品の用語も多数出てきます。

## 第1話：真之介という少年

俺は・・・また、守れなかったー！ー・・・！！

墓前で膝を突き、両手を立てて後悔と自責の念に涙する一人の少年。

彼の名は真之介ー！ー・・・

大切な友人を守ることが出来なかった、そのことだけが彼を永遠に苦しめた。

「俺は・・・これから・・・どうすればいいんだよ・・・あいつはもう、俺の力じゃ止められない。もう、どうすることも出来ないのかよ・・・父ちゃん・・・」

父親の墓前の前で、普段人前では見せることのない大粒の涙を垂らし、ポーカーフェイスを気取った彼の顔はもう、言わなくてもわかるくらいの顔をしていた。

事の発端は、半年前に遡る。

真之介の親友の婚約者が交通事故で亡くなった。

彼女を引いたのは国から指定暴力団と認定されている処の組長だった。

訃報を聞いた親友は彼女の棺を見たときから、彼は『負』に落ちた。

この世界では、世界の果てに『悪魔』と呼ばれる次元に干渉する力を宿した意思を持った大樹がある。

だがこの大樹は並みの人間の精神力、もとい覚悟では決して近付くことは不可能。

だが、彼は違った。

負の感情だけに心奪われた彼の覚悟は並みの人間の比ではなかった。

『悪魔』の大樹はこの男の覚悟を認め、最も危険な力・・・すなわち、次元を破壊する力を入れた。

真之介は彼の様子に気づき、力づくで止めようとした。

だが、真之介は彼の驚異的な未知の力に圧倒された。

気がついた時には、もう遅かったー・・・

彼の生まれ育った町は、見るも無残に破壊されるだけでなく、世界そのものが崩壊を始めていた。

彼はその光景を見た瞬間、暫く思考が止まり呆然と立ち尽くしていた。

それから、半年たった今。

世界は崩壊の速度を徐々に増し、最早一刻もない状態にまできていた。

幸い、この墓地はまだ崩壊の影響を免れていた。

真之介は幼い頃に男でひとつ育ててくれた父の墓前で涙を流し、暫くその場で何かを考え込んだ後、彼はある決意をする。

「・・・父ちゃん、俺・・・決めたよ。」

涙をを右手でぬぐい、彼は一目散にある場所に走り出した。

それは・・・『悪魔』の大樹だった。

真之介が大樹に近付こうとすると、大樹はこの上もない圧力をかけてくる。

その威圧に一時は屈しそうになったが、それでも真之介は大樹に歩ずつ近付いていった。

そして、漸く『悪魔』の大樹の前にやってきた。大樹は真之介の心に直接コンタクトを取ってきた。

「(大した小僧だ・・・この俺に近づくことが出来るなど、これ二人目か・・・いいだろう、小僧、貴様の望みは何だ？次元の何を欲する。)」

「(次元の破壊者を止めるための力・・・それ以外はない)」

「(次元の破壊者を、止める・・・！？ふふうっふふはあははは滑稽だな。お前のようなものは始めてみる。最初にこの俺に力を欲したものは、次元を破壊する力。お前はそれを止める力か・・・大した覚悟だ。いいだろう、その力くれてやる・・・但し、それはお前が止めるわけではない。)」

「(何・・・どういう意味だ・・・)」

「(これからお前は次元の破壊者を止めるために別の次元に渡り、それを止めるに相応しいものを選抜してもらおう。それがこの力を手にするという意味だ。)」

「(・・・本当は、直接俺があいつを止めたかったが、仕方ない。それでいい。)」

「（ふん、貴様の願い・・・承った・・・）」

『悪魔』の大樹は真之介の願いを聞き入れると、真之介の脳にこれからの道筋を叩き込み、真之介は同時に次元を渡る力を入れた。

「待つてるよ・・・必ずお前を止めてみせる・・・」

そういうと、真之介は右手を前方に突き出した。

すると、目の前の空間が歪み始め巨大な洞穴のようなものが現れた。

「いくぜ・・・」

真之介は深呼吸をすると、徐にその穴の中に入っていった。

真之介が入り終わると、穴は完全に塞がり、元の空間に戻った。

真之介は力を手にした後、途方もないくらいの時間を費やした。

幾つもの次元を渡り、選ばれしものを探し続けた。

そして、10年後・・・彼は漸く、見つけ出した。



> i  
4  
1  
2  
4  
|  
7  
0  
9  
<

## 第2話：死神との出会い

・・・ここは・・・何処だ？

俺は気が付くと、いた覚えのない草原に居た。

「あれ？何処だここ・・・こんなところに何時来たっけ？いや、つか俺さっきまで部屋で寝てたと思っただけ。ああ分かった、これは夢の中か！驚かすんじゃないよ、全く」

俺はそう思い再び寝ようとしたら、それは予想もしない出来事によって覆されることになる。

「たわけ！夢などではないぞ、一護！」

その女性の声の主は、一護と言う男にそういうと、一護の腹部目掛けて踵落しをした。

「えぶ！！！！なっ・・・！！？」

突然の腹部への攻撃と激痛で一瞬にして目を覚ました少年、黒崎一護は腹部を抱えて悶え苦しんでいた。

「痛ってー何するんだよいきな……って、ルキア!？」

一護がそう言う名の主は、これまで幾度となく力を合わせてきただけではなく、己の世界を変えてくれた異世界、尸魂界出身の死神、朽木ルキアだった。

「何で、俺の夢の中にルキアが出てくるんだよ!？」

「たわけ!夢ではないと存じたはずだ。さっきの痛いみでそれを実感しただろ。」

「てめえ……よくも人の腹に踵落ししやがって……」

「それより一護、貴様の格好をよく見てみるがよい。」

「えっ!？」

一護がルキアにそう言われて自分の服装を見てみると、自分の格好は普段虚と呼ばれる悪霊を退治するときに来ている死神特有の黒い喪服のような衣装、死覇装だった。

背中には、身の丈程の大刀『斬月』さんげつが確かにあった。

「死覇装に斬月……!？何で俺、死神化してるんだよ!？それに

お前まで!!」

「ああ。私も気が付いたら死覇装の格好だった。それに、ここには我々以外にも顔見知りがかなり来ている。」

「えっ、顔見知り!？」

すると、一護は向こうのほうからやってくる馴染みのある霊圧を感じ取った。

「この霊圧・・・まさか!？」

一護の予感は的中した。

向こうのほうからゆっくりと、自分と同じ高校のクラスメイトである、茶渡泰虎・石田雨竜・井上織姫そして、ルキアと同じ尸魂界の死神で護廷十三隊の六番隊副隊長、阿散井恋次あはらいれんじと十番隊長、日番谷冬獅郎やふじろうが歩いてきた。

「チャド!!石田!!井上!!恋次!!冬獅郎!!」

「『日番谷隊長』だ!」

日番谷はそれほど親しくないものや年下部下などに名指しで呼ばれるのを好まない人物であるため、たびたび顔引きつりながら修正する。

「オマエらルキアといい何で此処に……!?!」

「さあな。俺らも気がついたら此処に来ていたからな。」

恋次はそう答えた。

「黒崎、さっきここらの霊圧を探ってみたが、どうもここは僕達の暮らす現世でも、尸魂界のどちらでもないみたいだ。」石田は眼鏡をくいっと直して冷静に一護に話しかけた。

「げっ……現世でも尸魂界でもないって、どういうことだよ!?!」

「それが分かれば苦労しないよ。全く君は目に余るほどの短慮で困るよ黒崎。」

「何だっ!?!」

「やめろ石田……。一護もつまらないことで喧嘩してる場合じゃないだろう。」

「そつだよ黒崎君。落ち着いてこれからのことを考えようよ。」

茶渡につられて井上も一護をなだめようとした。

「……分かってるよ……」

「取り合えず分かっているのは、ここは現世でも尸魂界でもねえっ

てこと。では何故俺達がこの得体のしれねえ場所に居るのか、考えられる節は大きく二つ。一つは、何者かが何らかの方法で俺たちを此処に連れてきたか。二つ目は、現世と尸魂界で空間的な歪みが発生し、このような空間が出来、現在に至るか。」

黙っていた日番谷がそう口にする。

「どちらにしても、あんまいい状況じゃないっすね。」

恋次は浅い溜息を吐いた。

「後者の考えはあまり認めたくはないが、前者の考えは僕も思い至ったところさ。」

「私も石田と同じです日番谷隊長。だとしたら、一体何故我々は此処に連れてこれたのでしょうか？」

「さあな。だが・・・少なくとも、今俺たちの直ぐそばでこそそしてる奴に聞けばなにかわかるかもしれねえな。」

「なっ・・・!?!?」

一護は驚愕した。

日番谷は自分たち以外の僅かな霊圧を感じ取り、霊圧のある方向に鋭い視線を送った。

すると、僅かな霊圧ははっきりとしてきて、日番谷に敬意を表しな

がら姿を現した。

「流石は十番隊隊長。よく分かったな。」

出てきたのは、一護たちと同じ年頃ぐらいの青年だった。

「誰だ、てめえ……」

一護が威嚇するように問い詰めると、青年は徐に答えた。

「おっと失礼挨拶がまだだったな。俺の名は真之介。まあそうかっかするなよ、黒崎一護。此処へお前たちを連れてきたのは他ならぬ俺なんだからよ。」

「なっ、なんだと!!」

恋次がその言葉に対して怒りを露にしたが、直ぐにルキアに止められた。

「止せ恋次。真之介と言ったな、何が狙いだ!」

「狙いなんてそんな厭らしいものじゃねえよ。あんたらにはちよつとしたお願いがあつてきたんだからな。」

「お願い……興味深いね。一体僕たちに何を願いにきたと言っただい?」

石田が眼鏡を直しつつそう言うと、真之介は鼻で笑うと、こう言った。

「それを説明したいから、あんたらはちょっと此処まで来てくれな  
いか。」

「てめえ、そうやって俺達を罠にかけるつもりで……」

「待って、黒崎君。あの人の目、そんな人の目には見えないよ。」

「井上の言うとおりだ。あの男の目、そんな邪険な輩の目をしてい  
ない。もっとこう、何か切に願うものの目だ……」

それが、俺たちとあいつとの出会いであり、後に出会っ選ばれし者  
たちとの出会いの契機だった。

そう、俺達死神と……マフィアと魔導師の……





### 第3話：多次元世界

真之介は、俺達を一箇所に集めて自分を囲むように座らせた。

そして、徐に語り始めた。

「さてと、色々不満はあると思うがまあ俺の話聞け。」

「何でお願いする側の人間が命令口調なんだよ！普通そこは丁寧口調だろうが！！」

恋次が真之介の高飛車な態度に少々怒りを覚えたが、ルキアに説得されて一先ず我慢することにした。

「で、お前は一体何を俺たちに頼みたいんだ？」

一護が真之介にそう聞くと、真之介は改まった顔をして話し出した。

「……実は……俺の……俺の親友を、止めてほしいんだ！」

真之介の口から発せられた意外な発言に、一護たちは些か驚いた。

すると、直ぐに石田が真之介に冷静に尋ねた。

「君の親友を止めてほしい・・・藪から棒に何を言い出すかと思えば、随分と重いお願いだね・・・」

「確かに・・・真之介とか言ったか、もう少し詳しく説明して貰おうか。単刀直入にそんな事言われても、俺たちには自体が全く読めねえよ・・・」

日番谷が補足して言うと、真之介もそれに答えた。

「それもそうだな。あんたらには、事の成り行きがまからないままじゃどうしようもねえな。わかった、話そう。」

真之介は一度空気を吸いなおし、事の成り行きを赤裸々に一護たちに話し始めた。

「話は10年前に遡る。俺の親友には婚約者がいて、結婚を間近に控えた。」

「えっ！？10年前って言うと・・・お前もその親友もまだ子供だらうっ?」

一護はふと浮かんだ疑問を投げかけた。

確かに、現在の真之介の容姿は旗から見れば一護たち同様の年齢、少なくとも高校生くらいである。

もし、その事実が正しければ、真之介もその親友とともに6歳くらいの少女少女だ。

「ああ、言い忘れてた。俺の親友は当時は齡18だ。俺は6歳だったけどな。」

「・・・随分・・・年の差のある親友なんだな・・・」

黙っていた茶渡が額に汗をかきながらそう口にした。

「ああ。で、話に戻るが・・・結婚を間近に控えていたある日、婚約者は国が認定する指定暴力団の組長が運転する車にはねられ・・・帰らぬ人となった。」

「そんな・・・悲しすぎるよ・・・」

井上が今にも泣きそうな顔でそう言った。

「訃報を聞いて婚約者の棺を目にした親友は・・・その瞬間から、婚約者をこんな目に合わせた連中への復讐・・・だけならまだしも、事件とは無関係な者への無差別暴行を繰り返すようになり、親友は完全に怨恨・憎悪・嫉妬・殺意といった負の感情に心を支配されていった・・・そして、その拳句・・・あいつは次元の破壊者となった。」

「次元の・・・破壊者・・・！？よく分かんねえんだけど・・・」

一護が言うと、真之介は改まって話し出した。

「それを説明するためには、多次元世界、もとい『パラレルワールド』を知っているかについて話す必要がある。」

「ああ？何だ、その・・・パーマンワールドって？」

「阿散井・・・パラレルワールドだ・・・」

日番谷に注意されると、恋次は途端に顔を赤くした。

「石田、パラレルワールドって聞いたことはあるが、よく分かんねえんだけど？」

一護がそう尋ねると、石田はやれやれと呆れた様子で説明を شدした。

「パラレルワールド・・・簡単に言えば『可能性のある世界』だよ。」

「可能性のある世界・・・どういうことだ・・・!？」

今度はルキアが尋ねてきた。

「多次元時空論って言ってね、世界は一つではなくて、いろんな可能性を持った世界が多数存在するという考え方だよ。例えば、滅却<sup>クイン</sup>シ

師である僕が死神である世界があったり、黒崎が逆に滅却師である世界があったり、そういう様々な可能性を持ちえた世界が、パラレルワールドだよ。」

「へえー。でも、それとその次元の破壊者とどう関係するんだよ、真之介？」

「・・・一護、今までの話の流れから何か察しないか・・・？」

「えっ！？・・・」

一護が深く考え込むと、石田が何かに気づいたらしく、それを確認する為に真之介に尋ねた。

「真之介君・・・ひょっとして、君がパラレルワールドなどと言う突拍子もないことを聞いたと言うことは、君はもしかして・・・」

「ご名答・・・石田の言う通り、俺はその多次元世界パラレルワールドから来た人間なんだ・・・」

その発言を聞いた瞬間、石田と日番谷以外は驚きを隠せずいた。

「えっ！？っーことは、お前は異世界人って事だよな！」

「平たく言えばそう言うことだ・・・信じられないか!？」

真之介が尋ねると、日番谷はいやと言い、話し出した。

「事実こうして現世でも尸魂界でもねえ処につれてこられているんだ。それに、尸魂界も現世の連中にとっちや異世界そのものだからな・・・さあ、てめえの言う次元の破壊者って言うのが何なのかとつと教える。」

「・・・分かった・・・話すぜ・・・」





## 第4話：マフィアの世界

「次元の破壊者とは、その名の通り様々な次元……つまり、多次元世界を破壊する者のことだ。」  
ルワールド

「パラレルワールドを破壊するって……それで一体何が起ころうて言っただよ？」

「一護の言つとおりだな……いまいち私にも合点がいかない。」

「一護とルキアが共に納得していない状況を見た真之介は、重い瞼を一端閉じてこう話だした。」

「これは他人事じゃないんだぞ……パラレルワールドが破壊されることは、すなわち世界の崩壊を表すんだぜ……」

「なっ……!!」

「一護がその言葉を聴いた瞬間、鳥肌が立った。」

「どっ言っことだ……説明してくれ」

日番谷は腕組みをしながら説明を要求した。

「次元の破壊者、もとい俺の親友は……様々なパラレルワールド

を破壊することで、世界の秩序を崩壊させる。それをあちこちの世界で繰り返すこと、どの世界でも成り立つ絶対的な摂理そのものを崩壊させようとしている……」

「どの世界でも成り立つ摂理……はっ、まっ……まさか!？」

日番谷が何かに気づいたらしく、目を見開いた。

「そう……俺の親友が壊そうとしているのは……死んだものは蘇らないという真実だ……」

「なっ……!?!それじゃ、そいつはその真実を覆して……婚約者を蘇らせる気なのかよ!」

一護がそう語ると、真之介は黙って頷いた。

それから暫くの間沈黙が続いた。

「……しかし、そんなことが可能なのかい……?」

徐に石田が真之介に尋ねた。

「ああ。現に、奴がこの10年の間で様々な世界を破壊してきた影響が最近になって顕著に現れてきた。これからその影響をお前たちに見せる。そうすれば、信じがたいことも信じなくを得なくなるはずだ。」

真之介はそう言い終わると、ゆっくりと立ち上がり右手を前に突き出した。

一護たちは突然の行動に不審に思ったが、真之介は構わずその状態 でいた。

すると、突然真之介の目の前の空間が歪み始め、巨大な穴が出現し だした。

「なっ・・・何がどうなってるんだよ!？」

恋次が驚愕すると、真之介は冷静な口調で穴の中をよく見てみると、 言ってきた。

その言葉通り、全員がその通り穴の中を覗いてみると、そこには三 つの地球があった。

「何だ・・・三つの地球・・・」

一護がそうつつぶやいた。

「この三つの地球のうち、一つがお前たちの住む世界・・・俺は死 神の世界と呼ばせてもらう。そして、残り二つがどんな世界かこれ

から説明する。」

すると、一つの地球がクロースアップされて町の情景が浮かび上がってきた。

「ここは並盛町と言って、一護たちの住む空座町と大差ないくらいのごく平凡な町だ。この町に暮らす一人の少年に着目しよう・・・」

町の情景から一軒の家屋が映し出され、その家からパンを銜えながら全速力で走り出す重力を無視したようなツンツン頭の少年が出てきた。

「彼の名は沢田綱吉、14歳。並盛中学2年。勉強ダメ、スポーツダメ、おまけにひ弱。周囲からは『ダメツナ』と呼ばれているが、実は彼はイタリア最大規模を誇るマフィア、ボンゴレファミリー10代目候補なんだ。」

「えっ!? マフィアって・・・あの洋画とかに出てくる・・・麻薬とか売ってるあれか・・・!?」

「一護の例も多少極端過ぎるかもしれないが、その通りだ。そして、彼は普段はこんなんだが・・・彼の家庭教師、アルコバレーノリボンが打ち出す特殊弾や彼の持つ『死ぬ気丸』という丸薬によって、彼は額に炎を灯し、Xグローブという武器を使いこなす冷静沈着なハイパーツナへと変貌する。」

真之介はその映像を見せてた。

一護たちはその映像を見て絶句した。

確かに、少年はオレンジ色の炎を額に灯し、冷静な判断力を有した男へと変貌していたのだ。

「……さっきまでただのガキだった奴が……こつとも変わるのかよ……」

秀困気を一変させたツナに恋次が驚く。

「だがそれだけではない。あやつ、グローブの炎の推進力を利用して空中を滑空している。」

恋次同様、ルキアも額に汗をかく。

「驚くのはまだ早い。彼には超直感と呼ばれるボンゴレの血統しか持たない物凄い直感力を有していて、いかなる生物の微妙な動きで行動を読めてしまう。そして、彼の武器『Xグローブ』を使った必殺技、『X BURNER』イクスバーナーこれは一護、お前で言うところの普段の『月牙天衝』に匹敵する。」

「まっ……まじかよ……!」

真之介の一言に一護は顔を引きつった。

「この世界を仮にマフィアの世界と呼ばせてもらおう。次はもう一つ

の世界だ・・・」

真之介は一端もとの三つの地球の映像に戻し、もう一つの地球の映像をクロージングアップした。



## 第5話：魔導師の世界

「ここはミッドチルダという都市だが、この世界では質量兵器・・・簡単に言えば物理兵器が禁止されていて、代わりに魔法文明が高度に発達しているのが特徴だ。」

「まっ、魔法って・・・！？そんなことあんのかよ!?!」

常識離れた発言に一護がそう尋ねた。

「嘘だと思っならこれを見る!」

真之介がそう言うと、町並みの映像が切り替わり一人の空を飛ぶ杖を持った女性が映し出された。

「なっ・・・こいつ・・・さっきのガキみたく空を飛んでるぞ・・・」

日番谷は再び目を見開く。

「でもこの人、杖を持つてるから・・・ひょとして魔法少女とかじゃない!?!」

井上が期待をこめて発言するが、一護は漫画とアニメの見過ぎだと呆れて言うが、一護の考えは真之介の発言であっけなく翻る。



「そう、彼女はれっきとした魔法少女だ。」

真之介の言葉を聞いた一護はその場に古典的な倒れ方でそのまま後に倒れた。

「まつ……まさか……魔法が本当に存在するとはね……」

石田は動揺を隠そうとあくまでも冷静を装うとした。

「彼女の名は、高町なのは。23歳、時空管理局武装隊所属の戦技教導官。魔法術式・ミッドチルダ式/魔導師ランク・空戦S+。『エースオブエース』、『誰もが認める無敵のエース』などと呼ばれており、管理局内のみならずミッドチルダでは雑誌に取り上げられるような有名人となっている。その上、怒らせると怖い。」

「へー……大体分かったけど、まさか……こいつにも必殺技とがあるのか？」

一護恐る恐る尋ねてみた。

すると、真之介は鼻で笑いこう言った。

「あるよ……これを見る！」

真之介は映像を切り替えた。

すると、そこに映し出されたのは・・・砲撃を放つなのはの姿だった。

「なっ・・・なんなのだ、この技は・・・!?!」

ルキアの額に汗が流れる。

「これはデイベインバスターと言って、彼女の杖、『レイジングハート』のシューティングモード状態で魔法陣展開し、杖の周囲に生成される帯状魔法陣によって魔力の放出と収束をコントロールし、大威力の砲撃を放つ。攻撃用魔法だが、遠隔封印にも使える。彼女の必殺技だ。ちなみに、威力はさっき見せたX BURNERと同等かそれ以上かもしれない。」

「・・・こんな喰らったら俺・・・間違いなく死ぬんじゃないか、おい。」

一護が怯え気味にそう言った。

すると、突然石田が真之介に尋ねてきた。

「真之介君、さっき彼女のことを説明するとき、時空管理局って言うってけど・・・それは何だい？」

「俺が言ってたパラレルワールドを管理するところだ。だが、時空管理局と言えど、多数存在するパラレルワールド全てを管理することは不可能。したがって、管理できないところないしは危険でない世界は管理外世界として扱っている。そして、この管理外世界というのが、死神の世界とマフィアの世界のことだ。」

「なるほどな……でっ、結局てめえはこの映像を見せて俺たちにどうしろと言っただ？」

日番谷が尋ねると、真之介は臉を再び閉じてこう語りだした。

「さっき次元の影響が顕著に現れてるって言っただろう。つまり、今まで別々の物語を作ってきたこの三つの世界が崩壊し始め、混沌の世界を形成し始めている。」

「混沌の……世界……!?!」

一護が腑に落ちない様子を見せる。

「そう。噛み砕いて言えば……死神の世界にしかない虚や大虚、メンスクランデ破面がマフィアの世界や魔導師の世界に流れ込んだら、どうなると思っ……?」

真之介の言葉を聞いた瞬間、全員が驚愕した。

「なるほど・・・それで、世界の崩壊・・・か・・・」

ルキアは目を見開いたままの状態で口にした。

「死神が整と虚を昇華して、魂魄の量を調整し世界の均衡を保つことと同じことだ。俺の調べでは、今現在この三つの世界の収束現象は徐々に早まってる。このままではあと半年で世界は融合し崩壊する・・・」

「なっ・・・半年って・・・！？おいおい、それじゃあ、このまま黙ってたら・・・俺たちだけでなくて、あいつらまで・・・」

一護が危惧したことを真之介に尋ねると、暫くの沈黙の後真之介は徐に首を縦に振った。

「だからこそ、俺はお前らに頼んでんだよ。俺の親友・・・次元の破壊者をくい止めるためには、選ばれしものが必要だ。そして、選ばれしものってというのが・・・お前ら死神と、あの二つの世界の連中なんだ。」

「なっ・・・何だっ！？」



## 第6話：動き出す死神

「俺たちとあいつらが・・・選ばれしもの・・・!?!?」

一護がそう言うのと、真之介は目を瞑って答えた。

「ああ・・・俺はこの10年間を費やし、俺の代わりに次元の破壊者を止める事のできるものを探して様々な次元を旅してきた。そして、漸く見つけたのがお前らだ・・・次元の破壊者を止めるためには、様々な特異能力を持ったものが必要だったんだ。お前らやあいつらにはそれがある・・・ボンゴレファミリーの持つ死ぬ気の炎、魔導師の持つ魔力、そして死神の持つ霊力。様々な場合を考えると、これが俺の選んだ最善の者たちだと思う。このまま放っておけば・・・お前の言う通り、自分たちだけでなくあいつらも危ないんだ。頼む、俺と一緒に・・・俺の親友を止めて欲しい・・・この通りだ・・・」

真之介は長々とそう言うとその場に日ひざまづき、一護たちに向かって土下座した。

その様子を見た一護たちは、暫くの間何も喋らずじっと真之介を眺めた。

そして、徐に一護が口を開いた。

「・・・真之介・・・俺は世界の崩壊だとか、次元の破壊者とか・・・そんな小難しいことは正直どうだっていいんだ・・・でもよ、お前の親友や他の世界の連中が何も分からず消えていきそうな状況を黙って見過ごすほど、俺はつまらない人間じゃねえーよ。」

一護のその言葉を聴いた瞬間、真之介は切に願った瞳をさせて顔を上げた。

「そつ、それじゃあ・・・」

「ああ・・・俺はお前の頼み、聞いてやるぜ・・・」

一護は実に澄んだ声でそう答えた。

すると、一護の言葉に当てられて他のメンバーも話し出した。

「一護の言う通りだ。私も死神として、できる限りのことはするつもりだ。このような事態だ、早急に手を打たねばならぬな。」

「ルキアがそう言うんじゃ、俺も黙っている訳にはいかねえな。でねえと、護廷十三隊六番隊副隊長の名が泣くぜ。」

「黒崎くんや朽木さんがやるなら、当然私もやらなくちゃ。万が一怪我したときには私が治さないといけないしね。」

「ふん・・・そうだな・・・俺も一護についていく・・・」

「やれやれ・・・あまり黒崎と面倒ごとに関わりたくないんだが、

滅却師の誇りにかけても、この事態を見過ごす訳にはかない。」

「俺も同じだ……」

「お前ら……すまない……」

真之介がまた深く頭を下げると、一護が鼻で笑って謝るなよと言った。

「……よし、そうと決まったらこれからお前らにはやってもらわなきゃいけないことがある。」

「おっ、やってもらわなきゃいけないこと……何だよ一体?」

一護がそう尋ねると、真之介はその場から立ち上がってこう答えた。

「これからお前らにはあの二つの世界の主要人物たちと接触してもらわなければならないけど、いきなり向こうの世界に行っても、さっきの映像だけじゃまだ分からないことが多いはずだ。だから、ここで俺がお前らの脳に直接向こうの二つの世界の詳細な情報を叩き込む。」

「なっ!?!?そっ……そんなこと出来るのかよ!?!?」

「勿論。さあ、お前らは一端その場から立ち上がって、ゆっくりと目を閉じるんだ……」



真之介の言う通りに、一護たちはその場から立ち上がりゆっくりと目を閉じた。

それを確認すると、真之介は再び自分の前方に右手を突き出し、徐々に瞼を閉じて一護たちの脳内に二つの世界の詳細な情報を流し込んでいった。

そして、数十秒後、全ての情報が一護たちの脳内へとインプットされた。

「これでよし・・・どうだ、気分のほうは・・・？」

「ああ、大丈夫だ。しかし、つくづくあのツナって奴は凄いな・・・ たった14歳で命を懸けた修羅場を潜り抜けてきたんだろ・・・」

「確かに・・・でも、彼もそうだが・・・彼の守護者、特に個人的には雲雀恭弥のほうが凄いと思うけどね。」

一護と石田はお互いに脳内に入ってきた情報に対して、思ったことを口にしていた。

「とにかく、情報は手に入れた・・・あとは、向こうの世界に乗り組むだけだぜ・・・」

日番谷がいつもの口調でそう言った。

「よし、それじゃあこれからお前たち全員をマフィアと魔導師の世界に連れて行く。必要な武器や道具は既に持つてるはずだ。」

真之介がそう言った瞬間、あの向こうに映し出された三つの地球が衝突し、一つにまとまりだそうとし始めた。

真之介たちはその光景を見て、驚愕した。

「まずいな・・・収縮が思ったよりも遥かに早いスピードで進行している。急ぐぜ！」

「おう！」

一護の掛け声を聞いた他のメンバーも決意を新たにし、真之介の先導で、一護たちは映像が映し出された穴の中に入っていった。

全員が入り終わると、穴は完全に閉じた。

ついに、死神たちは自分たちにとって未知なる世界へと足を踏み入れていった。



## 第6話：動き出す死神（後書き）

毎週金、土、日更新の予定です。あと、一応受験生なので更新は暫くお休みいたします。

## 第7話：並盛の平穩

一護たちがちょうど行動を開始する少し前、ここ並盛ではいつものような平穩な日常が繰り返されていた。

そんな並盛の一角にたたずむ一軒家に彼、沢田綱吉は暮らしていた。

今日は、日曜だが学校の補習授業に出るために彼の家庭教師である、アルコバレーノリボンに無理矢理たたき起こされた。

「たく・・・リボンの奴、人がせつかくい夢見てるところにい  
きなり顔面キックすることないだろうが・・・はあ、それにしても、  
もう少し夢の続き見たかったのにな・・・はあ、京子ちゃん・・・」

44

ツナが言う京子とは、並中のアイドルと言われる笹川京子のこと、  
ボンゴレ晴の守護者の笹川了平の妹である。

つい最近、10年後の世界から戻ってきてしばらくして、笹川京子  
に長年の恋心を告白しようとしたツナは、京子を河川敷に呼び出し  
て告白したところ、以外にも京子自身もツナに恋心を持っていたこ  
とが判明し、二人は両思いとなりはれて恋人同士となった。

「もう少しのとこで、京子ちゃんとの・・・ディープキスが・・・」

「  
ツナが鼻の下を伸ばしながら階段を下りていると、突然後からリボ  
ーンのメガトンキックを喰らいツナは階段から勢いよく転げ落ちた。

「何鼻の下伸ばしてやがんだ、ダメツナ。とっとしねえと遅刻する  
ぞ。」

「いててて、リボーン！階段下りてるときに蹴りかかるなよ！！怪  
我でもしたらどうすんだよ！！！」

「京子のことばかり考えて周りを見てねえおめえが悪いぞ。やれや  
れ、色ボケも大概にしやがれよ。そんなことじゃ、立派なマフィア  
のボスにはなれねーぞ。」

「だから！俺はマフィアになんかならないってば！！！」

ツナは全面的にリボーンの発言を否定するが、リボーンはいいかげ  
ん認めやがれと形状記憶型カメレオン、レオンを銃にしてツナに銃  
口を突きつけた。

ツナはヒィーという声をだして、必死でリボーンに止めてくれと説  
得した。

これが、彼沢田綱吉の一日の始まりである。

そんなやりとりをし、朝食を済ませたツナは家族にいつてきまーす  
と一言残して学校へと向かった。

「まったく・・・リボンの奴、何があっても俺をマフィアのボスにするつもりだな。(でも・・・俺たちはもう後戻りできないくらい色々と関わりすぎた・・・今更マフィアのボスにならないなんて言っても、聞き入れてくれる訳ないのかもしれないのかな・・・現に、ボンゴレリングを継承したあのときからもう・・・俺は・・・)」

ツナが心の中でそう考え込んでいると、後のほうから聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「十代目!..!」

ツナのことをそう呼ぶのは、自称ツナの右腕でボンゴレ嵐の守護者、獄寺隼人だ。

「あっ!おっ、あはよう・・・獄寺君。」

「おはようございます、十代目!いやー、折角の日曜だって言うのに補修だなんて、マジかったるいすね。」

「はは・・・そっ、そうだね・・・」

ツナと獄寺が話していると、十字路になっている道の右側から左肩にバットのケースを背負った男が歩いてきた。

その男こそ、ツナの親友でボンゴレ雨の守護者、山本武だった。

「おすつ、ツナに獄寺！」

「あつ、お早う山本！」

「けつ、またてめえと一緒にかよ野球バカ！」

獄寺はふてくされてそう言った。

獄寺はツナやリボン、ボンゴレ9代目以外に対しては年上だろうと口が悪い。

但し、最近ツナと付き合い始めた笹川京子に対しては言動を改めて何故か『奥方』と呼ぶようになった。

京子自身、少し恥ずかしいと思っているが満更でもないらしい。

逆にツナは京子以上に恥ずかかっているらしい。

「まあまあいいじゃねえか。それより早くいかねえと補修課題増えちまうぜ。」

「ああ、そうだね。二人とも急ぎよう。」



ツナたちは急いで並中へと走っていった。これが彼らの平穏な日常  
――・・・

だが、このとき既に始まっていた――・・・

世界の崩壊は、刻々と進行しつつあることを彼らは知る由もなかった。



## 第8話：機動六課全員集合

一護やツナ達の暮らす世界とは別のもう一つのある世界。

此処ミッドチルダでは魔法文明が発達し、人々は今現在は平和に暮らしているが、嘗て、JS事件と呼ばれる大規模な事件が発生した。しかし、それを解決して今は役目を終えて解散した組織がある。

その名は、機動六課。

そんな機動六課の前線メンバー全員が今回、4年ぶりに集まることとなった。

最も、集まるうと言い出したのは他でもない、機動六課設立者の八神はやてである。

ちなみに、今回はシャマル・ザフィーラ・リン・アギトの四名は留守番だ。

「いや〜みんな、今回はよう集まってくれたな。わたしは感激やで。」

ビール片手に仁王立ちする女性、八神はやて。

「本当にそうだね。はやてちゃんが集まるうって言うってくれなかったら、こうしてまたみんなと一緒に過ごせなかったしね！」

屈託のない笑みを浮かべる女性、高町なのは。

この世界における重要人物だ。

「なのはの言う通り。はやてのおかげ今日はまたみんなの元気な姿が見られてうれしい。」

なのは同様笑みを浮かべるのは、なのはとはやての親友、フェイト・T・ハラオウン。

「主はやて・・・そろそろ始めましょう、時間が勿体ありません。」

そうはやてに言うのは、彼女の守護者で古代ベルカの騎士、シグナム。

「そやな、それじゃあみんな元気よく・・・乾杯!!」

はやての乾杯につられて全員も乾杯をした。

食事が始まり話が弾むにつれて、なのはの隣に座っていた青い髪の女性のスバルがなのはにお酌してきた。

「ささ、なのはさん。じゃんじゃん飲みましょう!」

スバルはなのはの苦笑いを他所にワインを入れてくる。

見かねた彼女の親友、ティアナはスバルにそれぐらいにきなさいと軽く注意した。

「あははは・・・ありがとう、スバル。でも、私そこまでお酒強くないんだよね・・・」

「えっ！？ごっつ、ごっつ・・・ごめんなさいなのはさん！！私全然そういうの知らなくて！！」

「うんうん。スバルの気持ちは嬉しかったから、そんなに気を落とさなくていいよ。」

「全く・・・大体、あんたはいくつになってもおつちよこちよいというかなんと言うか、見てて冷や冷やさせられるわね。」

親友のティアナが呆れた様子でスバルに言うと、スバルは頬を膨らまし何さーと不満気な顔を浮かべた。

その様子を見ていたなのはは、相変わらず仲がいいなと微笑んでいた。

なのはの横で、ピーマンを除けて食事をしている少女、ヴィヴィオをも二人の様子を見て満足そうだった。

しかし、なのはにピーマンを除けているのが見つかり、ヴィヴィオは叱られてしまった。

一方フェイトは、久しぶりに会った二人の男女、エリオとキャラとこちらも楽しくも会話をしていた。

「でもすっかり大人びちゃって、本当にびっくりしたよエリオ。前までは私の背の半分くらいだったのに、いつの間にかこんなに大きくなって・・・」

「あはは。そんなことないですよ。確かに背は伸びましたけど、心はまだまだ子供っぽいですし・・・」

エリオがそう言うと、隣に座っていた同い年のキャラがこう言った。

「うんうん、そんなことないよ。エリオ君すっかり大人っぽくなってきていると思うよ。声も低くなってるし、身体つきもすっかり大人の男の人っぽいよ。」

「そっ・・・そう、かな・・・」

エリオは若干照れた様子でキャラに返事をした。

「でも、そういうキャラも女性らしくなってきたよ。身体つきも心も・・・そう言えば、胸も少し膨らんだんじゃない？」

フェイトがそう言うと、キャラは顔を真っ赤にして恥ずかしかがっていた。

エリオも歳相応なので、フェイトの発言には少々羞恥心があったらしい。

「うっしやー！！今日は朝まで飲みまくるでー！！！」

酒がすっかり回り、完全に泥酔状態となってしまうたはやて。

興奮状態のはやてはビールをコップではなく酒瓶丸ごとでラッパ飲みしだした。

慌ててシグナムやヴィータが止めにかかるが、言うことなど聞いてはくれない。

そして、はやては酒瓶を置くとー！！！！

「今日は大サービスや！」

そう言っつて、突然服を脱ぎ始めようとした。

その光景を見た全員が食べていたものをのどに詰まらせたり、エリオにいたってはジュースを勢いよく噴出した。

「はっ、はやてちゃん！それはダメー！！！」

なのはが泥酔のはやてを止めようとした。

フェイトも加勢してはやてを抑えようとするが、泥酔状態のはやては隙を見てなのはとフェイトの胸を片方の手を使って揉み始めた。

はやてのセクハラ行為に驚いた二人は、即座に赤面した。

フォワード全員やヴィヴィオは同じように顔を真っ赤にしてその様子を見ていることしかできなかった。

エリオは直ぐに鼻血を出して後ろに椅子ごと倒れてしまった。

「えっ、エリオくん！しっかりして！！」

キャラが心配してエリオに声をかけるが、当の本人はびくともしななかった。

こんな光景が暫くの間つづいたそうなの……

こうして、それぞれの世界ではまったく別々の物語が繰り広げられている。

しかし、そんな世界の均衡が崩れ始めているのは、時空管理局の間ですら知らない。



死神とマフィア、そして魔導師たちが出会った瞬間――・・・

世界はどうなるのか――・・・!?

そして、彼らに何が待ちうけるのかは、誰も知らない――・・・



## 第9話：交わる世界

一方ツナたちは三人は漸く補習授業から解放され、家路へと向かって歩いていった。

「いやーそれにしても、今日の補習はそうとうきつかったな、ツナ」

「うん・・・正直いるだけでもつらかった・・・」

「たく、あの先公の野郎・・・十代目にあんな量の課題をさせやがって！次ぎあつたら一回しばいとおきます。」

「なっ！？そつ、それは流石に不味いよ獄寺君！それは止めよう！」

慌ててツナが止めにかかった。

獄寺は十代目がそう仰るならと言って納得した。

ツナもそれには安堵した。

すると、徐に山本がツナにこんなことを尋ねてきた。

「ところでツナ・・・最近、笹川とは上手くいってんのか？」

その言葉を聴いた瞬間、ツナは見事正面からずっこけた。

直ぐに立ち上がったツナが山本に赤面しながらこう言い出した。

「なっ！！何いきなり言い出すんだよ山本！！」

「いや、何となく気になったんだけどよ・・・何かまずかったか？」

頑是無い表情をする山本。

すると、獄寺が物凄い勢いで――・・・

「てめえ、十代目と奥方の仲に勝手に茶々いれんじゃねえよ」

と反論すると、山本は――・・・

「別に茶々なんて入れてないさ」

と得意の山本節をかましていた。

「でっ、結局どうなんだよ、ツナ。」

「えっ！？いや・・・その・・・うん、順調だよ・・・」

ツナが照れた様子でそう答えた。

「へー凄いじゃんか、ツナ！こうして補習ばかり続いているのに、笹川と上手くいつてるなんて・・・」

「たりめーだ！十代目と奥方の仲はてめえみたいな野球馬鹿には理解できねーんだよ！」

「だから獄寺君！まだ京子ちゃんと結婚した訳でもないのにその呼び方は止めてよー!!」

「いいじゃねえかツナ。笹川も満更いやそうでもないし・・・でっ、キスとかはしたのか・・・？」

山本が悪戯っぽくそう言うと、ツナは一気に蒸発してその場に倒れこんだ。

獄寺が十代目！と慌ててツナに呼びかける傍ら、山本は無邪気に笑っていた。

すると、ツナ達の前方から極限と言いながら走ってくる男の声が聞こえた。

ツナが立ち上がり前を見ると、走ってきたのは晴の守護者の笹川了平だった。

「おお沢田ではないか！」

「お、お兄さん！どうしたんですかこんな日曜に？」

「当然、毎日のロードワークだ！今日は日曜だからな・・・朝の6時からずっと町内を走っておるのだ！！」

「6時って・・・いま11時ですから・・・5時間もですか！！」

「ははは。相変わらず凄いっすね、先輩は・・・」

「けっ！無駄に体力が余るだけの筋肉馬鹿だぜ、まったく！」

獄寺が言つと、了平は「・・・」

「何だとタコ頭カマシ！」

と怒鳴り、獄寺も「・・・」

「やんのか芝生頭！」

と互いに啖呵を切つて睨み合った。

ツナが呆然としてみると、後から彼の愛しい人の声が聞こえてきた。

「あつ、ツナ君にお兄ちゃん！」

ツナたちに声をかけてきたのは、ツナの恋人で了平の実の妹の笹川京子だった。

「きよつ、京子ちゃん！・・・とハルにクローム!?」

ツナの目線の先に居たのは京子だけではなく、京子の親友でケーキ仲間の三浦ハルと霧の守護者であるクローム髑髏だった。

「ツナさんたちは補習の帰りですか？」

そうハルが聞くと、ツナは素直にうん、そうだよと応える。

すると、京子がつこり微笑んでこう話し出した。

「私はね、これからハルちゃんとクロームちゃんと一緒にケーキ屋さんでお茶しようと思って。よっかたらツナ君たちも一緒にどう?」

「えっ!?でも・・・俺達なんか一緒にいいの?」

「ハルは全然構いませんよ!むしろベリーオツケーです!」

「・・・私も・・・全然いいよ・・・ボス」

ハルとクロームがそう言うと、ツナはじゃあお言葉に甘えてといて了平も含んだ計7人で行くことにした。

「うん。じゃあ行こうか、ツナ君!」

京子はツナの右手を握り駆け足で走り出した。

その行動に驚いたツナは、最初は赤面していたものの、京子の何気ない行動に若干照れつつ一緒に走り出した。

二人は屈託のない笑顔で満ち溢れていた。

その様子を見ていた5人、特に了平は男泣きをしていた。

一方、ハルは少し寂しいそうな笑顔を見せていた。

獄寺はハルがツナのことを好きだった事を知っている。

ツナが京子を好きだった事もハル自身もうすうす気づいていた。

でもハルはツナと京子が好きだから、二人が幸せなのが何よりも幸せだといっていたことを覚えていた。

「・・・おい、アホ女・・・」

「はひ！ハルはアホじゃありませんよ、獄寺さん！！」

「・・・ふん、それでいい・・・」

「はひっ？」

ハルは鼻で笑う獄寺の言動がよく分からなかった。



すると、山本が早くいこうぜ、と言う発言で全員はツナと京子たちの方向へ走っていった。

7人がケーキ屋ナミモリーの近くまで来て、全員が他愛もない会話していた矢先だった。

ツナが何か妙な気配を感じた。

隣に居た京子がツナ君どうしたの？と尋ねてきたので、ツナは何でもないと返した。

「( )・・・気のせい・・・だよね・・・」

ツナたちが前へ足を踏み入れた瞬間、それは起こった。

突然、目の前の光景が先程まで居たはずの並盛商店街ではなく、見知らぬビルがたたずむ夜の都市になっていた。



## 第10話：魔導師の戦い

「えっ……!?!?どうなってるの、これ!?!?」

突然、今目の前で起こっている状況を全く理解できていないツナ達。

「さっきまで、並盛商店街を歩いていたと思うんだけど?」

隣にいた京子が呟くと、了平も頭を抱えて「……」

「ここは何処なのだー! 極限分かんぞ!」

と頭を抱えて叫んでいた。

「見たところどっかの都市みたいだけど……誰もいねえな。人の気配がしねえ……」

山本は普段のふざけた様子は見せずに、真剣な眼差しで当りの様子を見ていた。

「一体、何がどうなってるんだよ!」

獄寺が眉間に皺を寄せて怪訝そうにしていると、後から自分達のよく知る人物の声が聞こえてきた。

「どつやら・・・俺達は、そうとうやばい状況に巻き込まれたらしいぜ・・・」

ツナ達が声の主のほうへ振り返ってみると、そこには深刻そうな表情を浮かべたりボンと、雲雀そして何故か大人ランボがいた。

「りっ、リボン！それに・・・雲雀さんに、大人ランボ！！」

ツナは驚きを隠せなかった。

「・・・ねえ、何なのこれ？学校の屋上で昼寝をしてたら、いつの間にかここにきてたんだけど・・・」

「俺もトイレ掃除をしていたら、いつの間にかこんな訳の分からない場所にいたんですよ、ボンゴレ。」

「えっ！？じゃあ、みんなも！！」

ツナがそう言うと、リボンがツナの肩に乗ってこう話し出した。

「ああ。俺も庭でエスプレッソを飲んでいたら、突然こんな処に来ていた。どつやら此処は、並盛でも・・・十年後の世界でもねえみたいだぞ、ツナ」

リボーンの言葉を聴いた瞬間、全員が硬直した。

あの忌まわしい十年後の世界から戻ってきて、漸く平穩が戻ったかと思えたらこの有様だ。

全員の表情が一気に曇る。

「並盛でも十年後の世界でもないって……じゃあ、ここは何処なんだよ、リボーン!!」

「俺にもわからねえのに質問すんなよ、バカツナ。動揺していても何もはじまらねえだろうが。」

「確かに……そうだけど……」

ツナ達が渋々今の状況に納得すると、突然向こう側のほうから凄まじい轟音が聞こえてきた。

全員はその轟音に気づき、音のする方向へ行ってみると、ツナ達の目の前に衝撃的な光景が映し出された。

まるでSF映画やアニメで登場してきそうな人型のロボットが、何対もの手下のロボット達を操作して、自分達よりも年上の女性達に向かって攻撃をしていた。

「なっ、何あれ!?!?!」

ツナが呟くのはもう一つ理由がある。それは、その女性達というのもまるで魔法少女の漫画に出てきそうな派手な格好をして、杖や銃、剣、ハンマーを使って戦っていたのだ。

「何すかね、あいつら・・・!?」

「はひっ！！まるで魔法少女マンガのキャラクターみたいですよ！！」  
ツナ達が動揺している中、なのは達は突然現れたこのロボット達に大分てこずっていた。

なのは達はこれまでガジェット・ドローンと呼ばれるJS事件の際に頻繁に世話になった機械とならやりあったことはあるが、ガジェットとも違う謎のロボットに元六課の全員は苦戦していた。

「何だよこいつ！さっきからちまちまと！！アイゼン！」

ヴィータはハンマー型のアームデバイス、鉄の伯爵くろがね『グラーファイゼン』を振り上げ、勢いよく手下のロボットに頭上にハンマーを叩きつけて撃墜させた。

それを見てなのは達も手下のロボット目掛けて技を繰り出した。

「デイベイン・・・バスター!!!」

なのはの杖、レイジングハートから出される魔力の砲弾が手下ロボットの大半を撃墜させた。

それに続けて、シグナムやティアナも技を繰り出していく。

「紫電・・・一閃!!!」

「ファントムブレイザー!!!」

シグナムの放つ炎の斬撃と、ティアナの銃、クロスミラージュから繰り出す砲弾を喰らい手下のロボット全機を撃墜させることに成功した。

ツナ達はこちらに気づいていないのはたちの様子を見て、啞然とした。

「凄い・・・リボーン!あれってまさか匣兵器とかじゃないよね!」  
「?」

ツナの言う匣兵器ボックスとは、十年後の世界で自分達が散々世話になったオーバーテクノロジーの結晶で、マフィアの世界に伝わるリングから出る死ぬ気の炎を注入し開匣する箱である。

「それはねえな。あのディバインバスターって技には、どの死ぬ気の炎も感じられなかった。」

「えっ、て言うことはつまり……」

獄寺が唾を飲み込んでリボーンに尋ねると、リボーンはあっさりこう言った。

「ああ……奴らはどうやら本モンの魔法をつかってるらしいな……」

リボーンという言葉に全員が驚愕した。

そして、向こうのほうで手下ロボットを撃墜したのはたちが、幹部ロボットに向かって攻撃態勢を見せた。

「さあ、手下のロボットは全機落としたよ……大人しく身柄を拘束してもらおうか。そして、ここが何処なのか白状してもらおうよ……」

なのはがレイジングハートを前へ突き出すと、幹部ロボットは身にまとっていたマントを取ると、右手の中指にはめているリングに神経を集中させた。

すると、リングから紫色の炎が灯された。

その光景になのは達全員が驚いたのは勿論、何より驚いたのはツナ



達だ。

「あれは・・・雲属性のリングー！」

ツナが驚くや否や、獄寺がロボットの何かに気づいた。

「十代目！あのロボットの左胸のほうを見てくださいー！」

そう言うと、獄寺がロボットの左胸に指を向けた。

ツナ達がそこに目線をやると、ロボットの左胸にはツナ達が出ていた匣兵器ボックスが埋め込まれていた。

「ボックスが身体に埋め込まれてる・・・まさかっ！！」

なのはとツナ達の不安を他所に、ロボットは紫色の炎を徐にボックスへ注入した。

すると、ロボットの身体が光り、一瞬周りが見えなくなった。

なのはとツナ達がゆっくり目を開けるとそこには、先程倒したはずのロボットが紫の炎を灯し、幹部ロボットはそれらを束ねる巨大な大樹のような大きさと姿になっていた。



## 第11話：マフィア参戦

「なっ・・・何よ、こいつ!?!」

ティアナの額に汗が流れる。

なのは達の前に現れた謎のロボットは、紫の炎をリングに灯し、その後身体に埋め込まれたボックスに炎を注入すると、巨大な大樹を模した姿になり、際ほど倒したロボット達も同じ紫色の炎を身体に灯して復活した。

傍で見ていたはやては、念話でなのは達に警戒するように促した。

「（なのはちゃん、みんな・・・気いつけや。さっきまでとは雰囲気も殺気も桁違いや!）」

「（分かってるよ、はやてちゃん。皆、気を引き締めてね。私達機動六課の戦い方をあのロボットに存分にみせてやるっ!）」

なのはの念話を聞いたはやてそしてヴィヴィオ以外の全員は、それぞれの最も得意な連携でロボット達へと向かっていった。

スバルとティアナは、ウィングロードでロボットのほうへ移動して、

スバルはナツクル方のデバイス『リボルバーナツクル』でロボットの中央に勢いよく魔力の籠もった拳で殴りかかった。

ロボットは見事に二つに別れたかと思うと、二つに分かれたロボットはそれぞれがまた別のロボットを生み出し数を増やしていった。

「何よこいつ！！四体に増えた！？」

スバルが驚いていると、頭上からーーー・・・

「スバル退きなさい」

という声が聞こえた。

上を見ると、ウィングロードで移動するティアナが、クロスミラージユで後方射撃をロボット目掛けてしてきた。

「クロスファイアー・・・シュート！！」

ティアナはクロスミラージユから先程とは別の技で、ロボット達へ銃弾を発射した。

だが、ティアナの攻撃を喰らったロボット四体は、またさらに数を増やして八体に増えた。

「くっ！？こいつ、無限増殖してる！！」

ティアナが気づいたときには既に、計50体以上のロボットがなのはたちを襲っていた。

「くそ！いくら叩いてもこれじゃきりがねえ！！」

ヴィータが怒りを露にしつつロボットを破壊していく。

「このままじゃ、私や皆の魔力がもたないよ・・・！」

なのはが一瞬の間を見せた瞬間、10体のロボットがなのはの頭上目掛けて奇襲を仕掛けてきた。

「なのはママ！！危ない！！！！」

ヴィヴィオがなのはにそう言うと、なのははしまったと思い頭上に目を配ると、今度は後から同じ10体のロボットが襲い掛かる。

「なのは！！！！」

フェイトがいつにないくらい大きな声で叫ぶ。

それに気づいたなのはは時既に遅し、頭上と後方の敵に対応できなくなってしまう、なのはは目を瞑り、絶体絶命のピンチ陥ったかと思えた。

すると、なのは以外のものは目を疑った。

何者かが後方と頭上のロボットを悉く殴り飛ばしていった。

なのはは何があつたかと目を開くと、そこには、両手に澄んだオレンジ色の炎をグローブに灯し、額に同じ色の炎を灯した少年がなのはの目の前で飛んでいた。

「……大丈夫か……」

なのはに尋ねたのは、ハイパー死ぬ気モードとなったツナだった。

「あつ、はい……あの、あなたは一体!？」

なのはが恐る恐る伺つと、ツナは冷静な口調で答えた。

「説明はあとだ……今は目の前の敵に集中しろ……」

逆になのははツナに注意されてしまった。

「あつ、はい!」

なのはは、その言葉を聴いて再びロボット達に向かって杖を向けた。

「なっ……なんなのあの子……魔法も使わないで、空飛んでるし……それに、あの炎!？」

スバルが油断していると、ロボット数対がスバルに襲い掛かってきた。

「バカ!スバル何してるの、横見なさい!！」

焦ったティアナがスバルに警告する。

それに気づいたスバルは、しまった……と思いどうすることもできないでいると、スバルの目の前に何かが突然現れ、ロボット目掛けて勢いよく……

「マキシムキャノン  
極限太陽!!!!!」

甲高い声を出して拳をロボット達へ突き出したのは、彼の晴のボツクス兵器、晴カンガルー（カングーロ・デル・セレーノ）から出された晴シューズで空を飛び、必殺技のマキシムキャノンを放つ笹川了平だった。

マキシムキャノンを喰らったロボット数対は跡形もなく粉々に砕け散った。

「そのものの、極限大丈夫か!！」

「あつ、はい・・・何とか・・・」

スバルは了平の技の圧倒的な破壊力を目の当たりにして腰が抜けていた。

「何なのだ・・・あやつらは・・・!?!?」

シグナムがツナと了平を怪訝そうに見つめる。

こうして、今・・・マフィアと魔導師が接触してしまった・・・

一体、これから何があるのか!?





## 第12話：共同戦線

なのはたちの窮地に突如として現れた額にオレンジ色の炎を灯す少年と、黄色の炎を出すシューズで空を飛ぶ芝生のような頭をした男。その光景を目撃したはやては、一瞬戸惑いはしたが、彼らが敵ではない寧ろ味方だと直感し、なのはたち全員に念話を送った。

念話を聞いたなのは達は、彼らと共にこの未知なるモノへ再び戦意を向けた。

ツナと了平を目撃したロボットは、まるで待ち望んでいたようにツナと了平に向けて夥しい数の手下ロボで集中攻撃を開始した。

ツナと了平は、その数の多さに圧倒したが直ぐに攻撃を開始した。

「マキシмумキャノン  
極限太陽！！！！」

了平の極限太陽が数百体の手下ロボを粉碎した。

だが、ロボはまた破片の一部から直ぐに再生して襲ってくる。

「何と！？くそっ、これではきりがない！！」

再び極限太陽を放とうとしたそのとき、了平の後から音速の衝撃波

が飛んできた。それは、フェイトのソニックブームだった。

「大丈夫ですか？相手の力は未知数です。ここで体力の消耗は命取りです。」

フェイトが冷静な口調で了平に言った。

「すまぬな。極限助かったぞ。だが、それでは一体どうすればあの夥しい数のポンコツを破壊できる？」

すると、了平とフェイトの傍にツナとなのはがやってきた。

「・・・奴の操るロボは奴自身の核から発せられる雲属性の死ぬ気の炎により無限増殖している・・・奴の核を破壊すれば、こいつらも全て機能を停止する。」

ツナが冷静な口調で了平にそう口にした。

「えっ？それって本当なんですか？」

期待に胸を膨らまし、フェイトが尋ねる。

「この人の言うことは間違っていないみたいだよ、フェイトちゃん。確かに、あの中心のロボからは凄まじい高エネルギー反応が感知されてるし、実際手下のロボをいくら倒してもきりがないよ。だから、これから奴の中心核に大きいのを一発入れれば、全て終わる筈・・・」

「  
なのはがまだ何かを言おうとしたら、黙っていたツナが口を開いた。

「ならばその役、俺が引き受ける……」

ツナが言うと、なのはとフェイトは驚愕した。

「そつ、そんな！？いくら何でもあなた一人でそんな真似させられませんよ！第一かなり危険ですし……ここはやはり私が……！」

「なのは……お前は先程から何発もあのデイバインバスターを使つてかなりエネルギーを消耗しているはずだ。消耗した状態でまともな攻撃が出来るとは、おまえ自身も思っていないだろう……」

「でつ、ですけど……！」

なのはが戸惑っていると、了平が会話に入り込んできた。

「心配はいらん！！沢田は俺が認めた唯一の男だ！極限でかい一発をいれてくれる……！」

自信に満ちた顔で了平が太鼓判を押す。

「なのは、ここは彼に任せてみよう。沢田さんが言ったことは間違っていないし。」

フェイトも了平の言い分に補足する。

「・・・わかったよフェイトちゃん。沢田さんのことを信じるよ。お願いできますか？」

なのはが尋ねると、ツナは一言ああと言った。

「よし、私達は沢田さんの援護をするから。みんな、いい？」

なのはがそう言つと、シグナムやヴィータ、フォワード陣は全員が了承した。

すると、彼女達の後から何処からともなく二人の少年が跳んでいくのが見え、目を疑った。

「けっ！てめえらだけじゃ十代目の足を引つ張るだけだ！十代目を守るのは右腕であるこの俺だ！」

「まあまあ、獄寺落ち着けて。」

ツナと了平の傍に守護者の獄寺、山本が飛んできた。

獄寺は自身のボックス兵器であるSYSTEMA C・A・I・（スイステーマ シー・イー・アイ）に組み込まれているホバーを使い、山本も同じボックス兵器である雨犬Ver・V（カーネ・デイ・ピオツジャ バージョンボンゴレ）の運搬する3本の小刀に雨属性の炎を纏い、その炎圧を利用して飛翔してきた。

その光景を見たヴィータは言葉を失う。

他のものを同様だった。

「何なんだよ連中は！？魔法も使わないのに普通に空は飛ばし、すげー技は出すわで！？」

「だが、私達だけの力だけでは奴の言う通り役不足であることに間違いはない。少々本意だがな……」

シグナムは自分を嘲笑うかのようにそう呟く。

「……皆は、なのは達と一緒に俺の援護を頼む。」

ツナが3人に懇願すると、獄寺はお任せください、十代目と言い、山本・了平はああとか極限だと言って3人はなのはたちと共に手下ロボットの排除に向かった。

「喰らいやがれ、『赤炎の矢』フレイムアロー！！！」

獄寺は左腕に巻きつけられた髑髏を模した火炎放射器、赤炎の矢から嵐と雲属性を組み合わせ分かれしていくフレイムアローを発射する。

「時雨蒼燕流……攻式八の型『篠突く雨』！」

山本は時雨金時に雨属性の炎を纏わせ相手の懐に飛び込み鋭い斬撃で突き上げる篠突く雨を手下ロボにお見舞いした。

二人の攻撃で数百体のロボが一気に数十体へと激減した。

それに刺激された了平は素早い動きで敵の懐に入り込み、数体のロボにそれぞれ3連続パンチを繰り出す。

「<sup>マキナム</sup>極限イングラム！！」

了平の攻撃と同時にロボは破裂し爆発した。

「すごい……でも、私達も負けてられない！」

なのはは自分に喝を入れロボットに攻撃をする。

守護者やなのは達の援護を見たツナは、徐に口を開いた。

「……オペレーションX。<sup>イクス</sup>」





第13話：X

BURNER

ツナのオペレーションXイクスのかけ声とともに、自動的にX BURNERの発射誘導プログラムが開始された。

了解しました、ボス。X BURNER、発射シークエンスを開始します。

ツナが装着しているヘッドフォンと音声で連動しており、情報は耳からも伝えられる。

ツナは後方に右手から放たれる柔の炎という通常の死ぬ気の炎を空中で勢いよく放つ。

「なんや！すごい勢いで炎が！？一体何しよう言つやあの子！！」  
はやてが驚愕していると、そのはやてに意外な奴が相槌を打ってきた。

「まあ、黙ってみてれば分かるぞ。」

そう言葉を掛けたのは紛れもなくリボンだった。

はやては赤ん坊が平然と自分に話しかけていることに驚きを隠せな  
いでいた。

「わああ！？何でこんなところに赤ちゃんが！？しかも、言葉はな  
しとるやん！！」

はやては実に古典的な驚き方をしたが、後ろに隠れていたヴィヴィ  
オはリポーンを見るなり可愛いと言って興味を湧き上がらせた。

「実に古典的な奴だな。おめえ、漫才のセンスゼロだな。」

シユールに自分に対して鋭い駄目だしを貰ったはやては一瞬肩を落  
としたが、再びリポーンにツナの行動について質問した。

「おっと、それはそうと・・・君はあの少年の行動について何かし  
ってんのか？」

「当然だろ。俺はあいつの家庭教師だからな。」

リポーンはそう言うと、何時も通りに鼻でふんと笑った。

その頃、ツナの様子を見たなのは達は、尋常じゃないエネルギー反  
応を感じツナの周りから少し離れ、獄寺たちと共にロボットの撃退  
に専念していた。

「すごい・・・さつきまでとは比べ物にならないくらいの高エネルギー反応が出てる!」

なのはがそう呟くと、獄寺はこう言った。

「よく見ておけ!あれが俺達のボス、ボンゴレ<sup>デーチモ</sup>X世<sup>ちから</sup>の能力だ!」

「ボ・・・ボンゴレ・・・X世<sup>デーチモ</sup>!?!」

獄寺が発言した聞きなれない言葉を聞いたティアナは、首をかしげ疑念を覚えた。

ライトバーナー・・・柔の炎、<sup>ファイアンマホルデージ</sup>15万FVで固定。レフトバーナー・・・柔から剛に変換しつつ、炎エネルギーをグローブクリスタル内に充填。

音声が聞こえると、ツナは左手のXグローブVer・V・Rを身体の中央に持っていき、剛の炎が固定するのを待った。

その間に柔の炎は勢いを強めた。

ディスプレイには両手の炎の出力が表示されており、上は右手のVer・V・Rの炎が赤く、下は左手の通常の炎が緑色で表示される。

幹部ロボットはツナの様子を見ると、手下ロボットを全てツナに向かわせる。

「させるかよ！！」『フレイムアロー赤炎の矢』！！！！」

獄寺はすかさずフレイムアローを放つ。なのはたちも、ツナを援護するため各々が技を出しツナを守っていく。

ターゲットロック。ライトバーナー・・・炎圧再上昇。18万、19万、20万FV。

柔の炎が最高値に達すると、ツナは左手をゆっくりと前に突き出し剛の炎の炎圧を上昇させた。

レフトバーナー・・・炎圧上昇。18万、19万、20万FV・・・  
・ゲージシンメトリー、発射スタンバイ。

ツナの放つ柔と剛の炎が完全に安定した状態だと、ツナがしているコンタクトディスプレイの中心にXの文字が浮かび上がる。

ツナの様子を見た獄寺は、全員に即刻ツナの傍からもっと離れるように促し全員はその場から離れた。

ツナから出される澄んだオレンジの炎に向かい、手下ロボが向かってきたがツナは何の躊躇もなく炎を放った。

「X BURNNER AIR！」  
イクスバーナーエア

ツナの声と共に、巨大な高エネルギーを秘めた剛の炎が前方に打ち出された。

イクスバーナーを真正面から喰らった手下ロボは全機壊滅し、中央にいた幹部ロボットはイクスバーナーに直撃し、死ぬ気の炎を発生させる中心核を貫かれた。

中心核を貫かれた幹部ロボットはその場で爆発を起こし跡形もなくなった。

幹部ロボットが破壊されると、手下ロボットの全機が機能を停止し、自己爆発を起こし消滅した。

イクスバーナーの凄まじい威力を目の当たりにしたなのはたちは、全員腰を抜かしてしまった。

「すつ……凄……あんな技まであるんだ……あの子……」

ウイングロードの上でその場に跪くスバル。

「なんて破壊力なの・・・なのはさんのディバインバスターに匹敵  
いや下手したらそれ以上じゃない！」

冷静にツナのイクスバーナーを分析するティアナ。

「バケモンかよ、あいつ!!！」

終始驚きを隠せないヴィータ。

「・・・凄い・・・こんな技まともに喰らったら・・・確実に死  
んじゃうよ・・・」

なのはは、目を見開き技の威力に圧倒していた。

「なんちゅう破壊力やねん！魔法も使わないであんなもんだせるな  
んて、あの子何モンや？」

はやてがそう言つと、隣のリポーンが直ぐに応答した。

「あいつはイタリア最大規模の由緒あるマフィア・・・ボンゴレフ  
ファミリー十代目ボス、そして俺の生徒の・・・ダメツナこと、沢田  
綱吉だ！」



## 第14話：スキンシップ

ツナのイクスバーナーにより、ロボットは全機消滅。

なのは達とツナは地上に一端降りた。

地上に降りるとなのはは変身を解き、ツナもハイパー化を解いた。

そして、隣で一緒にいるはやてとりボーンのもとに全員が集まった。

「よくやったな、ツナ。ダメツナにしては上出来だな。」

相変わらずリボーンはツナを鼻で笑い馬鹿にする。

「何だよその言い方！こつちは命がけだったんだぞ！！って、そう言えば、京子ちゃんたちは！？」

「おうそうだ！！京子は無事なのかつ！！！！！！」

ツナと了平がりボーンに駆け寄ると、ツナと了平の耳に柔らかい声が入ってきた。

「ツナ君、お兄ちゃん。私達は大丈夫だよ。」

ツナと了平が顔を上げると、そこには二人の愛しい人物、笹川京子



と三浦ハル、クローム髑髏と大人ランボがいた。

「京子ちゃ・・・」

「京子！！！！！！」

ツナが言い切り前に了平が耳に響く声で京子の下に駆け寄り、怪我はしてないかなどと京子のことを心配した。

ツナとなのは達はその光景を見て、過剰すぎるとか、シスコンじゃないのかと密かに思った。

「あっ！ところで君・・・さっきとは全然雰囲気が違うけど・・・本当にさっきの子？」

なのはが優しくツナにそう尋ねた。

「えっ！？あっ、はい・・・そうです。沢田綱吉です・・・失礼ですけど、なのはさんでいいんですよね？」

恐る恐るなのはに聞き返すツナ。

「うん。私は高町なのは。時空管理局に勤める魔導師って・・・言っても分からないかな？」

なのはがそう言うと、リボンがツナの肩に乗ってなのはに話しか

けた。

「簡単に言えば魔法少女だろ。見た感じ20代半ばと見たが、いい年してよくあんな格好で戦えるよな、お前。」

「あはははは・・・結構痛いところ疲れちゃったな・・・」

なのは自分でも気にしていたところをリボンに言われ恥ずかしさを誤魔化す為ただ笑うしかなかった。

他のメンバーもそうだった。

「とっ、とりあえず・・・一段落ついたことやし、一端全員の自己紹介でもしよか！」

はやてが間に慌てて入ってきた。

「そ、そうだねはやてちゃん！そうしようか！！」

なのはは、ツナやみんなにそう促しビルの玄関口のところまで自己紹介を始めた。

トップバッターは、なのはだ。

「じゃあ、改めまして・・・時空管理局武装隊所属で戦技教導官を務めています、高町なのは一等空尉です。でっ、私の後にいるのが、向かって右から八神はやてちゃん、フェイトちゃん、ヴィータちゃん、シグナム。スバルにティアナ、エリオにキャロ。そして、私の娘で高町ヴィヴィオね。」

「高町ヴィヴィオです。よろしくお願いします。」

ヴィヴィオは丁寧にツナ達に挨拶した。

「はひ！なーんで、素直でベリーキュートなんでしょう！！どっかの不貞腐れてる不良とは大違いです。」

ハルは不貞腐れ頭で手を組む獄寺を軽蔑の眼差しで見た。

「んだとー！このアホ女！！もっぺん言ってみやがれ！！！」

獄寺がハルに啖呵を切ると、ハルは獄寺の挑発に案の定乗った。

「何度でも言いますよ！この白髪爺！！！」

二人は一触即発の状態。

それを止めようと、大人ランボが仲裁に入るが逆に二人の怒りの鉄拳をもろにくらいダウン。

「もう！ハルちゃんも獄寺君もやめなよ！！」

ツナや獄寺たちが京子の怒った声を聞いて一瞬驚愕した。

普段怒ることをしない京子がこんな風に怒ったので全員は目を疑った。

「はひ・・・ごめんなさい京子ちゃん・・・」

「もっ・・・申し訳ありません、奥方・・・」

獄寺とハルは青菜に塩をまかれたようにしゅんとなった。

「・・・あつ、そつ、そんな感じかな・・・」

なのはも先程の様子に口を挟めず困惑していたが、京子が二人の喧嘩を止めてくれたおかげで、漸く話を戻せた。

「よし、次は俺達だ。ツナ、お前がやれ！」

リボーンはニヒルな表情でツナに命令した。

ツナは最初は嫌がったが、リボーンにとつとやれと殴られ、仕方なく言う通りにした。

「えっと・・・さつきも言ったけど、俺は沢田綱吉。並盛中学2年でっ、この赤ん坊が俺の家庭教師のリボーン。後にいるのが、向かって左から・・・クラスメイトで俺の彼女の笹川京子ちゃん、そのお兄さんの了平さん、親友の獄寺君と山本。黒陽中のクロームに緑中の三浦ハル。でっ、そこでのびているのが大人ランボです。」

「そうか、綱吉君おおきにな。しかし、こうして見ると・・・」  
はやてが徐にツナ達のほうへ徐に歩いていき、後ろの京子たちのほうへ近寄り、3人の年頃の女の子の顔を覗き込んだ。

クロームは恥ずかしくて目をそらしたが、はやてはクロームのほうを見ていきなりクロームの胸を右手で？んだ。

「うん・・・この子、見た目どおり将来かなりの有望株やな。」

「んなっ!?!?」

リボーン以外の全員ははやての突然の行動に驚きを隠せず赤面した。

「はやてちゃん! なっ、何してるの!?!?」

なのはが顔を真っ赤にして尋ねる。

「何って、スキンシップやんかなのはちゃん。女子言ったらまず胸をもみもみしてお互いを知るんやんか。」

「そんな訳ないですよ！て言うか、クローム完璧に恥ずかしさマックスですよはやてさん！」

ツナがそう言うのと、はやてはクロームを見た。

確かにツナの言う通り、クロームは赤面を超えて気絶寸前であった。

「はひ！クロームちゃん！！」

「大丈夫！？」

京子とハルがクロームを心配していると、はやては隙ありと言って二人の胸を両手で交互に揉み始めた。

京子とハルは当然きやっと言う声を出し顔を赤らめる。

「ほほーん・・・ハルちゃんもいい感じやな・・・京子ちゃんもいい感じに発育中やな〜〜おや？京子ちゃんはハルちゃんよりも感じやすいんかな〜」

悪戯っぽく京子の胸だけ強く揉むと、京子は無抵抗にはやてにもまれ続け、変な声まで上げた。

「あっ！！はっあああ！！あの！！はやて・・・さん！！」

「んな！！！！京子ちゃんの・・・むっ、胸を！！！！！！」

ツナがその光景を見た瞬間、ツナは鼻血を出して後ろに倒れてしまった。

「つつ、ツナ君！？大丈夫、しっかりして！」

「十代目！御気を確かに！！！」

ツナの身体をゆっくりと揺する獄寺。

リボーンはまだまだお子茶魔だなどツナを馬鹿にする。

なのはたちは必死ではやてのセクハラ行為を止めようとした。

それだけで20分もかかった。





## 第15話：小休止

「まったく、主はやて・・・軽率な振る舞いはお止めください。相手は素性も良く知らぬものですよ！」

「まあまあ、そう堅いこといなやシグナム。おっばいくらいいたいたことあらへんやろ。」

はやてが悪びれる様子もなくシグナムにそう言つと、代わりにヴィータが、大したことあるだろうとはやてに注意をした。

「でも本当にびっくりしましたよ。はやて部隊長があんな簡単に女性の胸を揉むなんて・・・」

苦笑いをしながら、エリオがそう言つ。

「ひょっとして、まだお酒が残ってるんじゃないんですか？」

キヤロがそう尋ねると、その言葉を聴いた山本が不思議に思い逆に尋ねてきた。

「酒？あんたら、さっきここのあのロボット達と戦う前までは酒呑んでたのか!？」

「うん・・・みんなが集まって食事してたんだ。でも、泥酔した

はやてちゃんを担いで家まで帰ろうとしたんだ。でも、数分ぐらい皆で歩いていたら、目の前に灰色のオーロラみたいなカーテンが現れて、その中に入ったら此処に来て、さっきのロボットに襲われたんだよ。」

なのはが此処にいた経緯を順を追ってツナ達に説明した。

それを聞いたツナ達は全員同じ考えになった。

「えっ！なのはさんたちもなんですか！？」

ツナがそう言うと、なのはたちも驚いた。

「えっ！？じゃあ、綱吉君たちもなの？」

なのはがそう尋ねると、ツナははいと言って肯定した。

「それにしても、どうしてあのロボットは私達を襲ってきたんですようか？」

ティアナがなのは達年上に尋ねると、シグナムがティアナの質問に応えた。

「わからぬ。理由はともあれ、あのロボットの狙いが我々であったことは間違いないだろう。だが、合点のいかぬ点も多々ある。」

「合点のいかぬ点ですか・・・？」

スバルがいまいち分かっていない感じシグナムに尋ねた。

「ああ。あのロボットは、途中指にはめているリングから紫色の炎を出していただろう。そして、その炎を身体に埋め込まれた穴の開いた箱のようなものに注入した途端、今迄に感じたことの高エネルギー反応を出した。気がついてみたら、あの巨大な姿となり、手下のロボットを無限に増殖させ襲ってきた。あれは一体……？」

「しゅうらかい修羅開匣だ！」

そう言ったのはリボーンだった。なのは達は全員は聞きなれぬ言葉を聴いて何のことだか理解できなかった。

「しゅうらかい修羅開匣……って、言われてもよく分からないな、リボーン君……私達にも分かるように説明してくれる。」

なのはがりボーンにそう尋ねると、リボーンはああと言ってなのは達に説明し始めた。

「しゅうらかい修羅開匣は身体に埋め込まれた匣の開匣によって、肉体そのものを最強兵器に変えるもんだ。」

「そのボックスってというのは何やの？」

はやてがりボーンに尋ねた。

「リングという、かつてのマフィア黎明期に暗黒時代を生き抜くため先人達が闇の力と契約した象徴で、リングから出される死ぬ気の炎によって開匣することのできる箱のことだ。サイズは手のひら大でサイコロ状。中身は匣の属性によって様々で、戦闘を有利にするオプシヨンのような物が入っている。修羅開匣はその超強化版つてところだ。」

「マフィアって！？さっきもそれ私は聞いたけど、一体何やのそれ！？」

「そのままだ。俺はツナをイタリアーのマフィア、ボンゴレファミリー十代目ボスにするのが俺の仕事だ。で、獄寺たちはツナを守る守護者だ。」

リボーンの言葉を聞いた瞬間、なのはたちは暫く何も言えずにただただ驚くしかなかった。

ツナや京子、ハルの3人はリボーンの言葉を聴いて、未だに割り切れない思いでいっぱいになり顔を引きつった。

「・・・なるほど、事情は大体分かりました。ありがとうございます、リボーンさん。」

丁寧な口調でフェイトが礼を言うと、今度は逆にリボーンがなのは達に質問した。

「今度はこっちから聞くぞ。お前らの言う時空管理局っていつのは、何なんだ？」

「えっ!？」

なのはが意外そうな声を出すと、獄寺が怒りをなのはに怒りを露にした。

「えじゃねえよ!俺達の素性は話したんだ。自分達だけ都合のいいこと言ってるじゃねえぞ!」

「タコ頭の言う通りだ。俺達にもその”時空監察医”のことを分かりやすく教える!」

「先輩、”時空管理局”つすよ。」

山本が了平に間違いを指摘した。

「あれっ!?!?そう言えば守護者で思い出したけど、雲雀さんは?来た時は確か一緒だったと思うけど?」

ツナがそう言うと、なのは達の後から見慣れた学ラン姿の少年が歩いてきた。

「僕がどうかしたのかい、沢田綱吉。」

ツナとなのは達が声の方向へ目を向けると、目の据わった独特の雰囲気醸し出す並盛最強の風紀委員長兼、雲の守護者の雲雀恭弥が左手に妖精のような小さな人間を鷲掴みにして目の前に現れた。

「痛いです！いい加減はなしてくださいよっ！！」

その声の主は、留守番をしているはずの八神はやてのユニゾンデバイスの管制人格、リインフォースツウアイEEIだった。

「うるさいよ。大人しくしないと・・・咬み殺すよ！」



## 第16話：Unknown

雲雀が驚掴みにしているものを見て、はやては驚きを隠せず声をあげた。

「リイン！…なんでそないなところにおるん！？留守番してたはずやろ！？」

はやてが驚きを隠せずにリインにそう尋ねた。

「はやてちゃん！！詳しい話はこの人から聞いてください……！！」

雲雀の手の中で必死にもがくりイン。

「はひ！？何ですかあの人は！」

「わあ！妖精さん！！私本物の妖精見る初めて！！」

ハルとは対照的に、始めて見たリインの姿を見て興奮する京子。

「ひ、雲雀さん……一体どうしたんです、それ！？」

ツナが恐る恐るそう尋ねると、雲雀は少々不機嫌そうに応えた。



「さっきその辺を散歩したら、明らかに風紀を乱すものが飛んでいたから捕まえただけだよ。」

「リインの何処が風紀を乱すんですか！」

憤慨するリインが雲雀にそう言うと、雲雀は先程よりも据わった視線でリインを睨み付けてきた。

リインはそれを見た瞬間にこの世にないくらいの恐怖を覚えた。

すると、雲雀のもとになのはが近付いてきて尋ねた。

「雲雀君だっけ。その子は私達の大切な仲間なの。返してくれないかな……」

なのはが雲雀にそう頼むと、雲雀はなのはの後の六課メンバーを見てこう言った。

「別にいいけど……でも、僕の目の前でこれ以上群れたら……」

そう言うと、雲雀は隠し持っていた鋼鉄製のトンファーをなのはの顔に突きつけこう言った。

「誰だろうと咬み殺すから。」

「あつ・・・はい・・・わかりました・・・」

雲雀の行動にかなりの恐怖を感じたなのは。

雲雀はトンファーを下ろし、リインを解放した。

リインは無事解放され泣きながらなのはに飛びついた。

「うえーん！！なのはさん！！怖かったです！！」

「よしよし、大丈夫だよリイン。」

なのはは小さなリインの頭を優しく手でなでた。

「話を戻すぞ・・・結局のところ、時空管理局って言うのは何なんだ！？」

リボーンがそう言うと、フェイトが代弁をした。

「私が説明します。時空管理局・・・簡単に言えば、いろんな世界の秩序を守る平和組織みたいなものですかね。」

「色んな・・・世界・・・ですか！？」

ツナが良く分からない顔をしたのを見て、フェイトはさらに続けた。

「はい。皆さんは地球と言う一つの世界で生活していますが、世界とは本来は無数に存在し、色々な人たちがそこで別々の生活をしています。たとえば、魔法が発達した世界や、あなた方の居る世界など。」

「多次元時空論って奴か・・・ツナ、十年後の世界で入江正一がおめえらに説明したパラレルワールドの話と大体同じと考えいいぞ。」

「えっ！？そうなの・・・なんかもつとこ小難しい話だと思ったけど、正一君が言ってた奴と同じなんだ。」

「けど、魔法が本当にあるとは思いません。けどイメージしてたもんとは大分違うよな」

山本がそう言うと、気絶していた大人ランボが目を覚ましそれに応えた。

「確かにそうですね。俺は星型のステッキを持った魔法少女が鼠を兎に変えるようなものをイメージしてましたが、実際はもつと恐ろしいもんだと目の当たりにしましたからね・・・」

「あれだけが魔法じゃないけどね・・・そこは勘違いしないでね・・・」

リンを連れてなのはが歩きながら、そう応えた。

リンははやての胸に飛び込み小さな身体で抱きついた。

「リイン大丈夫なん？あの雲雀いう子に乱暴されたんか？」

「はい、酷いんですよ！リインのこのか弱い身体にいきなり驚掴みで締め付けてきたんですよ！！」

「お前がか弱い・・・か」

ヴィータがそう言うと、リインはなんですかその間はと言ってヴィータに憤慨した。

「それより、お前ら時空管理局の人間ならこの世界のことも分かるんじゃないのか？」

不意にリボーンがそう尋ねると、なのはは重い顔でこう応えた。

「それが・・・さつきから管理局の方に通信を取っているんだけど、全然連絡がつかない状況なんだ。おまけに、こちらから向こうの世界に帰りたくても、私達自身では世界を移動することは出来ないし、おまけに世界の特定をすることも出来ないのが現状なんだ・・・」

「そつ・・・そんな・・・」

ツナが期待を裏切るなのはの言葉を聴いて肩を深くおろした。

「とにかく、今後の具体策を全員で考えるしかねえな・・・頂垂れ

てる場合じゃねえぞ、ツナ。」

「う……うん……」

ツナが不安そうな表情を見せると、ふとクロームがツナに声を掛け  
てきた。

「ボス……大丈夫……?」

「えっ!? ああ……うん、ありがとうクローム。大丈夫だよ。」

「いずれにしても、帰る手段も連絡する手段もない以上……この  
先の問題は我々には大きな壁だな……」

シグナムがそう言った後、何気なく月明かりを見た瞬間、シグナム  
は驚愕した。

「どうしたんですか、シグナム副隊長?」とエリオがシグナムに尋  
ねると、シグナムは目を見開いたままこう言った。

「何だ……あれは……!?!?」

シグナムの言葉を聴き、全員がシグナムの見る目線に目をやると、  
全員は目を疑った。

夜空に亀裂が生じ、巨大な何かの爪らしきものが姿を現した。

「なっ・・・何だ・・・一体!!??」

ツナは今迄に見たことのない道の姿を目の当たりにし、恐怖を覚えた。

「おい！何か出てくるぜ!？」

山本が言ったとき、爪が空間を引き裂いて巨大な穴が出現した。

その穴の中からは無数の巨大な黒い生き物のようなものが出てきた。

顔を白い髑髏を模した仮面をした、身体の中央に孔の開いたものが。



## 第17話：メノスグランデ

突如ツナとなのはたちの前に現れた巨大な黒い孔の開いた生き物らしきもの。

その数実に7体。

「なっ！？おっ、おい！！何なんだよあれ！！お前ら知らねえのかよー！！」

獄寺がそう言っていると、動揺しながらティアナが応えた。

「私達を知るわけないでしょう！！あんなバケモン、見たこともないわよ！！」

「身体の中央に孔が開いてるな・・・あれは本当に生き物なのか・・・！？？」

リボンがそう言っていると、なのはは既に変身を済ませ、戦闘準備が出来ていた。

「何であるって・・・あれがとても危険な存在だって事はわかるよ・・・」

なのはがそう言っていると、ツナもハイパー化してなのはの隣に並んだ。



「あいつらは・・・倒す・・・それだけだ。」

そう言つて、ツナとなのはは巨大な7体に向かって飛行した。

「なのはさん！」

「ツナ君！！！」

スバルと京子が二人を心配して声を上げた。

「まずいな・・・皆なのはちゃんと綱吉君たちを助けるで。あんな得体の知れない奴にたった二人で向かうのは危険や。あたしも行くで！」

「確かにな・・・相手が正体の知れねえ奴をあいつら二人で相手をするのは、あまりに危険だ。お前ら、ツナとなのはを援護しろ。」

「任せてください、リボンさん！十代目は俺達を守ります。」

そして、元機動六課とボンゴレファミリー十代目ファミリーの全員は武装をして、7体のバケモノに向かつていった。

その様子を心配そうに見つめる京子、ハルそしてヴィヴィオ。

それを見たりボーンがこう言った。

「安心しろ・・・ツナはこんなところで死んだりはしねえよ・・・  
勿論なのはもな・・・」

「リボーン君・・・（ツナ君・・・無茶しないでね・・・）」

京子はただただツナとなのは達の無事をハルとヴィヴィオと共に祈るしかなかった。

「マキシмумキャノン  
極限太陽！！！！」

了平は1体の腹部にマキシмумキャノンを仕掛けた。

だが、了平のマキシмумキャノンを喰らったにもかかわらず、その巨大さゆえびくともしない。

「くっ！！何て奴だ！！俺の拳が全然効かんぞ！」

一方、山本・シグナムの二人は剣の使い手同士協力してバケモノの巨大な足に攻撃をすることにした。

「行くぞ、山本武。お前は左側の足をやれ。私は右足をやる。」

「うっす、了解！！」

山本は雨のボックス兵器、ロンドン・ディ・レオツジャ雨燕を開匣し、匣の雨燕を前衛に構え、水をえぐりながら突入していった。

一方シグナムは、カートリッジシステムを使い、刃に炎を灯し剣を振りかざした。

「時雨蒼燕流・・・特式十の型・・・スコントロ・ディ・ロンドン・ディ・ネ『燕特攻』!!!」

「紫電・・・一閃!!!」

二人は渾身の力で左右の足に切りかかったが、二人の刃はまったく足には入らずはじき返されてしまった。

「何・・・だと!?!」

二人は自分の剣の腕を一瞬疑うほど衝撃を受けた。

その頃、雲雀・大人ランボ・クローム・獄寺の四人はそれぞれが技を出し合って攻撃をしていた。

「『赤炎の矢』!!!」  
フレイムアロー

「『電撃角』!!!」  
エレットウリコ・コルナータ

獄寺と大人ランボは自身の得意技を1体ずつに攻撃をしたが、やはり効果はなし。

「んなは馬鹿な!? 傷一つついちなねえ!!!」

「俺の電撃角をまともに喰らっても全然効果なし・・・こいつは一体!?」  
エレットウリコ・コルナータ

「どきなよ、君達。」

そうやって、雲雀はトンファーに雲属性の炎を灯し、ボツク兵器である雲ハリネズミ（ポルコスピーノ・ヌーヴォオラ）を足場にてバケモノの顔を狙いトンファーを勢いよく振り下ろしたが、バケモノは雲雀の目の前に巨大な手を出し攻撃を回避した。

そして、そのまま雲雀の身体を鷲掴みして数十メートル向こうに投げつけた。

「雲雀!!!」

獄寺が雲雀の方へ気を取られていると、バケモノは巨大な足を上げ

て獄寺を踏み潰そうとした。

「獄寺氏!!!上を見て下さい!!!」

大人ランボが獄寺に叫ぶが、それに気づいた時には既に遅かった。

獄寺がしまったと言って明掛けたとき、間一髪のところスバルが獄寺を助け出した。

「大丈夫、君?間一髪だったけど!」

「すまねえ、助かったぜ!」

獄寺はスバルに軽く礼をした。



## 第18話：はやての決断

「なんて野郎だ！あたしらの攻撃はおるか、ボンゴレの攻撃も効果無しかよー！」

ヴィータが歯を食いしばる。

「僕達の攻撃が効かないなんて、一体こいつは何なんでしょうか、ヴィータ副隊長！」

エリオがキャロの竜、フリードリヒの背中に乗ってヴィータにそう尋ねる。

「あたしにもさっぱりだ。くそ！こいつの正体さえ分かれば・・・少し攻撃パターンを変えられるのにー！」

ヴィータの言葉を聞いた獄寺は、何かに気がつきクロームに向かって声を出した。

「クローム！てめえのボンゴレ匣ボックスで、あいつの正体を見破れぬかもしれねー！」

「わかった！」

獄寺の指示を聞いたクロームはポケットから通常のアニマル型匣兵器を改造したボンゴレ匣を取り出し、霧のボンゴレリングに藍色の炎を灯し、開匣した。

中からは、クロームのボンゴレ匣兵器、霧フクロウVer. V（グーフォ・ディ・ネツビアバージョンボンゴレ）を取り出した。

霧フクロウの額には、ボンゴレファミリーのエンブレムが象られている。

「ムクロウ……形態変化」  
カンピオ・フォルマ

クロームがそう言うと、霧フクロウは身体全体を霧にして、クロームの右目のあたりで別姿へと変貌した。ボンゴレ匣は形態変化することにより、ボンゴレI世とその守護者が使用した武器に姿を変えることができ、クロームのボンゴレ匣は、初代霧の守護者が使った武器。

「D・スペードの魔レンズ」  
ディモン

霧フクロウは形態変化して、宙に浮くレンズへと姿を変えた。

「なっ……何なの、あれ!？」

スバルがそのように驚くと、獄寺は黙って見てると強い口調で言った。



そして、クロームは魔レンズでバケモノの正体を探ろうとした。

だが、そこでクロームは信じられない結果を見ることになる。

「えっ!?!?!?!」

クロームは目を見開いて驚愕する。

「どうした!?!?クローム……あいつの正体がわかったのか!?!?」

獄寺がそう尋ねると、クロームは意外なことを口にした。

「……測定……不能……正体……不明……!?!?」

「なっ!?!?」

誰もがクロームの発言を聞いた瞬間、全員の頭は真っ白になった。

「正体不明って……じゃあこいつは何なのよ!?!?魔法は効かない、死ぬ気の炎も通じない……一体なんのよ、こいつは……!?!?」

ティアナは顔を引きつって平然と立ち尽くす巨大なバケモノを仰ぎ見た。

「……こうなったら、なのはちゃん、綱吉君、みんな……ちょっと下がって……わたしが一発でかいもん食らわしたる……このバケモノに!?!?」

「えっ！？まさか・・・はやてちゃん！？」

なのはがそう言うと、騎士と墮天使が半分ずつの姿をしたはやては黙ってうなずいた。

「そんな！はやて、あれは許可なく使っていていいものじゃ・・・！？」  
フェイトが慌てて警告するが、はやては直ぐに返事をする。

「この状況で許可もくそもあらへんよ、フェイトちゃん。ここで死んだら元もこないや！一発ですべて、終わらせる。なのはちゃん、網吉君・・・ふたりの力を貸してくれへんか！？」

「・・・わかったよ、はやてちゃん。網吉君！」

なのはがそう言うと、ツナも了承しああと軽くうなずいた。

「よし・・・二人は自身の大技であいつらの動きをひるませて、その隙にわたしがデカイモン入れたる！！」

「了解！！」

「ああ・・・」

そう言うと、なのはとツナは一端バケモノから距離をとり、大技の体制に入った。

「いくよ、レイジングハート・・・」

「・・・オペレーションX」<sup>イクス</sup>！！」

なのはとツナはお互いに、自分の大技を出すためバケモノから距離をとり、その体制に入っていた。

ツナは先程謎のロボットを撃退した際に使用したイクスバーナーを打つ準備をし、なのはは、ディバインバスター以上の大技を繰り出すために魔法陣を展開させた。

「手加減無しで行くよ・・・レイジングハート」

そう言うと、なのははレイジングハートエクセリオンモードに変化させ、なのは最大の魔導砲を撃つ準備を開始した。

なのはの魔力が徐々に巨大になっていき、ピンク色をした巨大な魔力の球状砲弾がその姿を現した。

「なっ・・・何なのだあれは!?!」

了平がなのはの技を見た瞬間その口にもらずと、隣に居たフェイトが了平に相槌を打ってきた。

「あれが、私達のエースオブエース・・・なのはの最大最強魔法です。」

一方なのは隣のツナは、イクスバーナーの炎圧を先程よりも上昇させていた。

「レフトバーナー・・・炎圧上昇・・・20万、21万、22万、23万・・・レッドゾーン突入。」

ツナのヘッドフォンから聞こえるオペレーションシステムの警告音。

だが、ツナはそれを無視して炎圧を上げる。

「あの子・・・まだあんなにパワーを上げる気なの！？危険だよ！」

スバルが心配するが、獄寺はスバルに「・・・」

「黙って見ている、十代目はあんなことじゃ倒れねえよ！」

と言って、スバルを押し切った。

なのはとツナが大技を準備すると同時に、はやても魔法陣を展開し、彼女のデバイス「夜天の書」を開いて呪文を唱え始めた。

「ほの白き雪の王・・・銀の翼もて・・・眼下の大地を・・・白銀に染めよ！」

はやてはなのはとツナよりも早く準備を終え、なのはとツナに確認

を促した。

「なのはちゃん！綱吉君！こっちは準備オーケーや。そっちはどうなん！？」

「こつちもスタンバイオーケーだよ、はやてちゃん！」

「・・・ああ、問題ない。」

「よし・・・なのはちゃん！綱吉君！今や！！！」

はやての掛け声と共に、なのはとツナは自身の大技を前方の7体のバケモノ目掛けて発射した。

「全力・・・全開！！スターライト・ブレイカー！！！！！！！！！」

「X BURNER

イクスパーナードハイパーイクスプロージョン  
超爆発！！！」

なのはとツナの大技がほぼ同時に放たれ、前方の7体は二つの攻撃を満遍なく喰らい辺りは異質な巨大なエネルギーが合わさり、凄まじい勢いの反動風が全員に戻ってきた。

そして、その反動に耐えつつなのははやてに合図した。

「はやてちゃん！今だよ！！」

「了解！来よ、氷結の息吹・・・アーテム・デス・アイセス！！」

はやては金色の杖をバケモノ目掛けて振り落とし、オーバーSランクの氷結魔法、アーテム・デス・アイセスを放った。

はやての魔法は爆風の中に入り込み、爆風もろとも7体のバケモノは氷付けになった。



## 第19話：絶体絶命

「なっ・・・氷付けになってやがる・・・!?!?」

獄寺ははやての魔法にただただ目を疑っていた。

「どう、凄いでしょ。うちの八神部隊長の魔法。何たってオーバー  
Sランクの魔導師なんだから!!」

スバルはあたかも自分のように胸高々に自慢する。

「すげーな・・・やっぱり魔法ってすげんだな!!」

山本も改めて魔法の威力に感心する。

「当然だ。主はやての魔法は天下一品だからな。そこらへんの奴と  
では核が違う。」

シグナムははやての魔法を何時も以上に褒め称える。

「おおお極限バケモノを倒したぞ!!!!」

了平は勝利を確信し、右拳を天にかざした。

「やれやれ・・・一時はどうなるかと思いましたよ・・・」

大人ランボも安堵の溜息をつき、その場に座り込んだ。



「やったね・・・はやてちゃん、綱吉君！」

なのはとはやてとツナの三人は集まり、安堵の溜息をついた。

「いや〜操り損ねなくてほんま良かったで。わたしやっぱり一人だと上手く調節出来なくてな！」

「うんうん・・・はやてちゃんは凄いよ！流石は元機動六課部隊長だけあるよ！！！」

なのはは、はやてを流石と褒め称える。

はやては些か照れた様子でそうかな〜と言って嬉しそうにした。

ツナもその二人の様子を見て、眉間に寄せた皺を少しだけ綻ばせた。

だが、彼らの安堵は一瞬で碎け散った。

突然、バケモノを凍らせた氷結魔法が解けて、7体のバケモノは無傷のまま再び彼らの元に姿を現した。その瞬間、彼らの顔から笑顔が消えた。

「うそ・・・やろ・・・！？なのはちゃんと綱吉君、それにあたし

の氷結魔法を喰らって・・・無傷やなんて!？」

「・・・くっ、バケモノが!！」

ツナは顔を引きつり歯を食いしばる。

すると、7体のうちの1体が徐に口を開け、口腔内から紅蓮色の高エネルギー物質を生成しだした。

「なっ・・・何をしようっていうのよ、あいつ!？」

ティアナが怯えながらそう言うと、ツナはふと何かを感じ全員に警告した。

「みんな!!今すぐ離れろ!!!」

ツナが全員にそう言ったそのとき、バケモノは巨大な口から紅蓮色に輝く高エネルギーの光線をツナとなのは達に放ってきた。

「なっ!！」

全員が気づいたときには、その光線の威力に圧倒され、全員は様々な方向へ散り散りに分かれてしまった。

その破壊力は、スターライト・ブレイカーやイクスバーナーの比較にならないほど強力なものだった。

一瞬にして、道路は深くえぐれ、その破壊の後が禍々しく残った。

「くっ・・・何て破壊力だ！？イクスバーナーやなのはのスターライト・ブレイカーと、比較にならないほどだ。あっ！みんな、大丈夫か！？」

ツナが辺りを見回すと、自分の周りには、道路の瓦礫の下敷きになるのはと、気絶する自分の守護者のクロームがいた。

「クローム！なのは！おいつ、しっかりしろ！！」

ツナは必死で瓦礫を退かしなのはを救い出し、なのはの意識を確認する。

すると、なのは、傷だらけになりながらもゆっくりと目を開けた。

「うっ・・・綱吉君・・・ありがとう・・・私は大丈夫だから・・・」

多少朦朧としながら綱吉の肩に掴まりゆっくりと立ち上がる。

「他の皆は！？」

「みんな数メートルぐらい散り散りに吹き飛ばされたらしい。」

ツナとなのはがバケモノのほうに再び目をやると、バケモノはまた先程の光線を放とうとしていた。

しかも、その方向がツナの心を一層乱した。

その方向は、リボーンや京子たちの居る方向だった。

「まずい!!リボーン・・・京子!!ハル!!」

「ヴィヴィオ!!」

二人は急いで残った力でリボーンたちいる方へ移動した。

だが、それと同時にバケモノは紅蓮の光線を放ち、辺りはまた爆風に包まれた。

「・・・一体・・・はっ!?!」

京子が徐に目を開けてみると、そこには自分達を必死に守ろうと盾になったポロポロのツナとなのはの姿があった。

二人は四人の無事を確認すると、その場に倒れこんだ。

「ツナ君!!なのはさん!!」

「なのはママ!!」

京子とヴィヴィオ、リボーンとハルが二人の傍に駆け寄った。

「ツナ君！！ツナ君！！！！しっかりして、ツナ君！！！！」

「ツナさん、しっかりしてください！！目を開けてください！！！！」

京子とハルは大粒の涙を流しながら目をつぶったまま動かないツナのことを心配する。

「なのはママ！！起きてよ！！なのはママ！！！！目を覚まして！！」

ヴィヴィオも同じように大粒の涙を流し必死でなのはを起こそうとする。

「やべーな……………あのバケモノ……………またあの技を出すつもりだぞ……………！？」

リボーンという言葉聞いた瞬間、ツナとなのはは意識を取り戻した。

京子とハル、そしてヴィヴィオは心の底から安堵した。

だが、状況が最悪なものには変わりなかった。

「くそ……………このままあいつにやられるのか……………！？」

ツナが傷だらけの顔を引きつる。

「私達には・・・もう為す術はないの・・・!?」

なのはが深い後悔を口にし、顔をきつったままヴィヴィオを最後まで守り通そうとする。

ツナも、京子とハルを最後まで守り通そうと必死になった。

リポーンは真顔のまま何も言わずその場に立ち尽くした。

バケモノは光線を放つためエネルギーをチャージしていた。

「（もう・・・・・・終わりなのか!?）」

ツナとなのはが諦めかけた、その時だった。

突然、光線を放とうとしていたバケモノの身体が、見事に中央からまっぴたつに斬られ、左右にその斬られた身体が倒れこんだ。

「なっ・・・バケモノの身体がまっぴたつになった!?」

なのはとツナはは一瞬の光景に目を疑った。

「どうなってるんだ・・・一体!?」

「どうやら・・・何とか間に合ったみたいだな!」

「えっ!?!」

二人が声を合わせ見たものは、身の丈ほどの出刃包丁のような大刀を持ち、まるで喪服を思わせるような黒い着物を着た、オレンジ頭の男だった。

「待たせたな………ツナ、なのは……」

そう言うと、オレンジ頭の男はゆっくりと二人の方へ振り返った。





## 第20話：死神推参

絶体絶命のツナとなのは達の危機を救ったのは、オレンジ頭が目立つ黒装束の着物を着た男――

そう、死神代行黒崎一護であつた。

一護は、後に振り返りツナとなのはの安否を確認した。

「待たせて悪かつたな……ツナ、なのは……。よく頑張つたな……」

「お前……何故俺達の名前を知つてる……」

「それに……その姿は一体……あなたは一体何者なの……！？」

目の前の一護の姿と自分達の名前を存じていた一護のことを二人はただただ不思議に思うしかなかった。

「詳しい説明はあとだ……俺達があいつらを片付けるまではな！」

「俺……達……！？」

ツナがそう呟くと、自分の守護者やなのは仲間全員が自分達の元にいつの間にか集合しているのに気がついた。

ツナとなのは、そしてリポーンはその光景に目を疑ったが、直ぐにツナとなのはは全員の無事を確認した。

幸いにも、命に別状はないようだった。

「お前らの仲間は今これで全員のはずだ……うんじゃ、とつとつこいつら片付けちまおうぜ、お前ら!!」

一護がそう言うと、ツナとなのは達の目の前に突然数人の何者かが瞬間移動してきた。

二人はその光景に目を丸くした。

一護の左右には、同じ黒装束をきた男女とその黒装束の上に白い羽織を着た少年、全身を白装束で包む男に、体格のいい大柄の男が立っていた。

「たく……俺達にだけに何荷持つ運びさせるんだよ、一護!!」

赤髪の死神、恋次は不満そうにそう言う。

「まったくだ……我々だけにつらい仕事を押し付けて貴様は正義の味方気取りか!」

黒髪の女死神、ルキアは一護に一喝をいれる。

「別にそんなんじゃないよ！たまたまそういう役回りになったってだけじゃねえか！文句があるなら真之介の野郎に言えよな！！ったく！！！」

一護は二人の発言に少々苛立った。

「とにかく・・・彼らが無事救出出来たんだ・・・早いところメノスの群れを片付けて事情を話そう・・・」

白装束の男、石田は冷静な口調で眼鏡をクイッと直し、全員にそう促した。

「同感だな・・・」

普段は寡黙の身体つきのいい男、茶渡はそう一言だけ言った。

「数はさつき黒崎の斬ったメノスも含めて7体・・・か。一人一体ずつでやれるな・・・」

白い羽織を纏った死神、日番谷は石田と同じ冷静な口調でそう言った。

「そうだな・・・井上、ツナ達全員の治療・・・任せていいか!？」

一護がそう言うと、これまたいつの間にかツナとなのは達の傍にいた長髪の女性、井上織姫が満面の笑みでは「いいと言った承した。」

「そんじゃ・・・いくか！」

一護がメノスたちのもとへ向かおうとしたら、ツナが突然一護の行動を指し止めた。

「待て！奴らの力は未知数だ！！お前達でもまともにやりあえるかどうか！？」

ツナが一護の行動を必死で止めようとするが、一護は自身に満ちた笑みを浮かべツナにこう言った。

「心配すんなよ・・・メノスに関しては、俺らのほうが専門だから・・・直ぐに終わらせるさ・・・いくぜ！！」

そう言って、井上以外の全員は6体のメノスの群れに向かっていった。

ツナとなのは、リボーンは黙ってその光景を見守ることしか出来なかった。

暫くすると、気絶していた守護者や機動六課メンバー全員が目を見ました。

「あっ！みんな・・・目が覚めたんだ・・・良かった！！」

なのはは、涙ぐんだ様子で全員の無事を確認し、安堵した。

「ああ・・・何とか・・・なっ・・・あっ、十代目！あいつらは一体!？」

目を覚ました獄寺が、ツナに尋ねるとツナは黙ってメノスのほうへ目を向けていた。

獄寺や他の全員が同じように目を向けると、彼らの目には見知らぬ装束の者達がメノスの元へ向かっていく光景が目に見えただ。

「なっ・・・何だよ・・・あいつらは!？」

獄寺が怪訝そうにそう言うと、今度はティアナが彼らが6体のメノスに一人一体ずつ分かれて向かう姿を口にした。

「無茶な!？あのバケモノに一人ずつ向かうなど!！」

了平がそう言うと、近くに立っていた井上が大丈夫だよと言ってきてツナとなのは達以外の全員は驚いた。

「大丈夫だよ・・・黒崎君やみんなは、強いから・・・」

井上は根拠のない自信を笑顔にして全員にそう言い聞かせた。

一方、メノスたちに向かって至った一護たち六人は一人ずつ分かれて1体ずつ自分のメノスに向かっていった。

先人を切ったのは、恋次だった。

メノスが叫び声を上げて威嚇するが、恋次は怯むことなく斬魄刀を抜いた。

「うるせんだよ！！ただデカいだけのためえに・・・俺様がびびるかよっ！！！！」

恋次は斬魄刀でメノスの首を真横から斬り落とした。

茶渡は自身の右腕を変化させ、彼の魂の力を具現化した右腕の鎧を出現させて、メノスの仮面目掛けて、右肩の出っ張りの部分を開き、霊子をまとったパンチを繰り出した。

「巨人の一撃！！」  
エル・ティレクト

茶渡が霊力のパンチを繰り出すと、その凄まじい破壊力で容易くメノスの仮面はおろか首を飛ばしてしまった。

石田はと言つと、右腕の服の袖から五角形の滅却十字クインシークロスを取り出し、  
靈子で形成された特殊な形状の弓を出現させ、メノスの頭上高くか  
ら、無数の矢を一斉に放ち攻撃した。

「光の雨リヒト・レーゲン!!!」

石田の靈弓から出される無数の矢を喰らったメノスは跡形もなく消  
え去った。

「・・・君臨者よ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者  
よ 蒼火の壁に双蓮そうれんを刻む 大火の淵を遠天にて待つ・・・破道の  
七十三 『双蓮蒼火墜そうれんそうかづい』」

ルキアは得意の鬼道でメノスの首に向けて強力な青色の爆炎を浴び  
せ、撃退した。

日番谷は口腔内から打ち出そうとする紅蓮色の光線、虚閃セロを打たれ  
る前に高速歩方の瞬歩で移動しメノスの顔を切り刻んだ。

そして、最後に一護は残りのメノスの頭目掛けて自身の斬魄刀、斬  
月を勢いよく振り下ろしメノスを一刀両断した。

彼らの桁違いの実力を目の当たりにしたツナとなのは達は、言葉も  
出ずにただ呆然としていた。





## 第21話：3世界の住人

「なっ・・・俺達が手も足も出なかったバケモンを・・・」

「一瞬で片付けちゃった・・・」

山本となのはは一護たちの桁外れの实力を見せられ、驚愕すること以外何も出来なかった。

リボーンは冷静に一護たちの实力を注意深く拝見していた。

「・・・どうやら・・・奴らの实力は、俺達の实力の比じゃねえこととは間違いないらしいな・・・」

リボーンは帽子を被りなおし口を籠もらせそう言った。

「はい！みんな・・・黒崎君たちが勝利したところでそろそろ全員員の怪我の治療をするからそのまま動かないでね！」

井上はそう言うと、自分のヘアピンに手を当てると何かの名前らしきものの言葉を発した。

「舜桜、あやめ・・・双天帰盾」

そう言うと、井上の左側のヘアピンから二つの光が現れ、ツナやな

のは達負傷したメンバー全員にの間に対象を囲う盾が張られた。

ツナ達は全員動揺したが、暫くして直ぐに、自分の負った傷が治癒されていくことを実感した。

「これは・・・!？」

ツナが驚く隣で、はやては井上の使用した術について心の中で分析を図っていた。

「・・・(回復術か・・・いや違う・・・これは回復術やない・・・時間回帰か、空間回帰か・・・いずれにしても回復とはまた違う何かや・・・そして、これは・・・魔法でも、死ぬ気の炎のどちらでもない・・・一体、あの子は!?)」

はやてが深刻そうに考えていると、メノスを倒した一護たちが突然自分達の前にもっとどて来た。

一瞬で数メートル離れたところから戻ってきた一護達を見た全員は心臓が一気に高ぶった。

「サンキュウーな、井上!すっかり治療任せて・・・」

一護が申し訳なさそうに言うと、井上は全然気にしてないよと言って一護達に微笑んだ。

そして、あつという間に治療を終えて負傷した全員の身体は完全に傷を負う前の状態になっていた。

ツナやなのは達は目を疑った。

「ほっ……本当に……治ってる！？信じられない早さだよ……！？」

なのはは、井上の能力に感服する。

他の全員もそうだ。

了平は前よりも身体が軽くなったと言って、極限と声を上げた。

獄寺はうるせーぞ芝生！と注意したが、聞く耳を持たなかった。

そして、ツナはハイパー化を解き、なのは達も変身を解いて一護たちに向かって話しかけた。

「あつ……ありがとうございます……おかげで俺達全員助かりました……」

ツナが一護に感謝の言葉を掛けた。

「別に礼なんかいらねえさ。俺達はツナやなのは達が無事ならそれで十分だ！」

「てっ、てめえ！何故十代目の名を知ってやがる！！さては、さっきのバケモンを影で操ってた奴らか！！」

獄寺が一護に怒りを向けると、獄寺の言葉に石田が答えた。

「そんな訳ないだろう・・・僕達は君達を助ける理由はあるけれども、襲う理由なんてないよ。それに、先程の状況から判断して僕たちがメノスを裏で糸を引いていると判断するのはおかしいよ。ボンゴレ十代目の右腕と自称する割には、随分と思慮分別に欠けるようだね・・・獄寺隼人。」

石田の発言を聞いたツナや獄寺達は全員が聞く耳を疑った。

リボンも黙して一護たちの方をじっと見ていた。

「おい・・・何で俺の名まで知ってやがる・・・それに、ボンゴレのことも・・・!?!?」

「ボンゴレのことだけじゃねえぞ・・・なのは達が時空管理局の魔導師だつてことも知ってるぜ・・・」

一護がさらっとそう口にする、なのは達もツナ達同様聞く耳を疑った。

「ちょっとあんた！一体何者なのよ!?!私達や彼らのこと・・・おまけにあのバケモンを軽々と倒して・・・!」

そうティアナが不満そうに少々苛立った声色で一護に尋ねると、一護は落ち着いた様子で応えた。

「俺は黒崎一護・・・死神代行だ！」

一護がそう口にするると、全員は驚愕し、ランボはそれだけでなく腰をも抜かし恐怖を感じて、後ずさりした。

「し・・・死神・・・って！？じゃあ、俺達のことを殺しに！？」

ツナが怯えながらそう言うと、一護の隣の恋次が呆れた様子で返事をした。

「んな訳ねーだろ、バカヤロー。生きた人間を殺すなんて真似しねーよ！大体、俺達はお前の考えてるようなそんな恐ろしい存在じゃねえよ。」

「えっ！？そう・・・なんですか！？」

ツナは意外なことを聞いてほっとした。

「ああ。俺達はある人物のお願いで、お前達のもとにやってきたんだが・・・その野郎がまだ到着してねーんだよ。」

一護が呆れた様子で頭を掻きながらあくびをすると、一護たちの頭上から一護たちの知る人物の声が聞こえてきた。

「おーい！遅くなったぜ！！」

一護たちの直ぐ近くに、声の主・・・真之介が降りてきた。ツナ達はこつも連続して驚かされることばかりが続き、肝がどうかしそうだった。

「遅せーぞ！用意するモンがあるから先に行ってるって言って黙って待ってれば、調子こきやがって！！」

「悪い悪い。ちよつと準備に手間取っちまってな・・・でも、おかげで準備は万全整ったぜ。」

不満そうに文句をぶつける一護に軽く返答する真之介。

すると、突然リボーンが痺れを切らし銃弾を真之介の足元に向けて発射した。

真之介以外の全員はリボーンの行動に驚き目を丸くした。

「りっ・・・リボーン！？何してんだよお前！？」

ツナが急いでリボーンを宥めようとするが、リボーンは不機嫌そうに真之介に向けてこつ語りだした。

「自分達だけで何こそ話してやがる。俺達のことはおるか、なのは達のことまで知ってるってことは・・・お前がそいつら死神と俺達に何らかの頼みがあるってことは目に見えてるぞ。だったら、

とつとそいつを俺達に話しやがれ！」

「やれやれ・・・噂通りの男だな・・・アルコールノリボーン。だが、ひとつ言わせて貰うが・・・怒りは自分の見える視野を狭め命を脅かすことになるぜ。」

真之介はリボーンを嘲笑うかのようにそう発言した。

すると、日番谷が徐に話をさっさと進めると真之介に促した。

「おっと、そうだった・・・じゃあ、全員その場で俺の話聞いてくれ。今迄の不可解な出来事についてと今起きてることに關して説明する。」





## 第22話：3世界の危機

真之介はツナとなのは達、そして一護達の傍にゆっくりと腰を下ろしてその場に座り、ツナとなのは達に先ず先程のメノスのことや一番最初になのは達を襲ったロボットについて語りだした。

「先ずはお前達が束になっても敵わなかったあのでかい奴についてだ・・・あれはバケモノっていう名前じゃなくてメノスっていう奴だ。」

「メツ・・・メノス!？」

ツナが怪訝そうにそう言うと、その様子を見た真之介は徐に背中からお絵かき用のスケッチブックとペンを取り出した。

「まあ・・・口で言ったところで理解するのも難しいと思うから、俺が分かりやすく図解してやるよ・・・」

その言葉を聞いた一護は一瞬かなり不安そうな様子を見せた。

「なあ・・・おい、本当に図解すんかよ!？」

「そうだよ・・・安心しろ!俺はどっかの誰かさんと違ってヘタクソなウサギの絵なんか描かねえよ!」

その言葉を聞いたルキアは自分のことつだと気づき、真之介の強烈な拳を食らわした。

真之介の頭には、見事なこぶが浮かび上がった。

「まあ、お前達にはメノスのこと云々説明する前に死神のことについてもっと説明する必要があるからよーく聞いてくれよ。」

そう言うと、真之介は物凄い勢いでスケッチブックに絵と文字を書き始め、書き終わるとそれを全員に見えるように見せた。

「死神とは、現世における霊的守護者のことだ。この世に満ちる善悪入り混じった魂魄を監視する魂の調整者<sup>バランス</sup>だ。お前達の想像するような骸骨の鎌を持ったイメージの死神とは全然違う。」

真之介はそう言うと、死神と大きく書かれた紙を一枚めくり、これはまた見事に描かれたリアルなイメージ上の死神を全員に見せた。

そして、また一枚をめくり今度は整と大きく書かれたページを見せて、再び説明しだした。

「でだ、この世には2種類の魂魄・・・すなわち魂が存在する。一つは整<sup>プラス</sup>と呼ばれる通常の霊。お前達が俗に言う幽霊はすべてこれと断言していい。死神はこの整を魂葬と呼ばれる、人間の言葉で言うところの成仏をさせる」

そして、真之介はスケッチブックをめくり今度は虚<sup>ホロウ</sup>と書かれた文字にそれを指す絵が描かれたページを見せた。

「そしてもう一つが虚ホロウと呼ばれる生者・死者に別無く襲って魂を喰らう所謂悪霊だ。死神はこの虚を昇華・滅却するのが仕事だ。」

真之介はページをさらにめくり、今度は先程ツナ達がまったたく歯が立たなかったメノスの絵が描かれ、隣に大虚メノスグラデーと書かれたページを見せた。

「で、その虚が幾百に折り重なり生まれるのが巨大な虚……メノスだ。通称大虚メノスグラデーと呼ばれ、正式名称をギリアンと言う……ここまですで質問のある奴は？」

真之介が尋ねると、一護が徐に真之介に尋ねた。

「えっと……とりあえずお前の絵が異常に上手い理由から聞いていいか……」

ルキアの描くウサギの絵とは対照的に、真之介の描く絵は実にリアルに描写されとてもあの短時間で描けるような代物じゃない見事な絵だった。

一護の質問を聞くと、真之介はその事に関してノーコメントと言って話を続けた。

「このギリアンと呼ばれるメノスは3種類いるメノスの中の最下層に位置し、人間に例えるなら雑兵に近い。数も多くすべて同じ姿を

しているのが特徴だが、動きは緩慢で知能は獣並み。一護たちなら容易く倒せるレベルだ。」

真之介の発言を聞いてツナとなのは達は顔を引きつった。

自分達が束にかかっていった強力な相手が、真之介の話では雑兵程度だと聞かされショックを受けた。

「・・・あいつが・・・・・・雑兵・・・」

ツナはショックと驚きを隠しきれない様子だった。

「魔法や死ぬ気の炎が効かなかったのは、あいつが巨大な霊的存在だったからだ。魔法も死ぬ気の炎もこの世に存在するものには効果抜群かもしれないが、虚のような霊的存在に関してはたとえ見えていても死神や一部の霊力の強いものでないと太刀打ちできないんだ。別に悔やむ必要は無いさ。」

真之介は、優しくツナとなのは達を宥めた。

「それで・・・俺達がここにやってきたとき、なのは達を襲っていたあのロボットは何者だ？雲属性の死ぬ気の炎を灯し、その上修羅開匣までしたあのロボットは・・・!？」

リポーンがそう真之介に尋ねると、真之介は少し間を置いて徐に説明を始めた。

「ああ・・・あれはお前達の力量を測るために、次元の破壊者が送

り込んだ刺客だ・・・さっきのメノスもな・・・」

「次元の・・・破壊者・・・!?!」

なのはは真之介の言った不可解な言葉に耳を傾けた。

「・・・ああ・・・一護達にはもう説明したから、今度はお前達にも話しておく必要があるな・・・」

真之介は一護たちが受けた説明と全く同じ説明をツナとなのは全員に聞かせた。

ツナとなのは達は、真之介の今までとは違う真剣な眼差しでの説明を黙って聞いていた。

そして、全ての事情を話し終え真之介とツナとなのは達、そして一護達は暫くの間黙って口を閉ざした。

「・・・そんな感じなんだ・・・分かってもらえたか・・・!?!」

徐に真之介がツナとなのは達に尋ねると、ツナは黙っていた口を開け真之介にこう言った。

「次元の破壊者とか・・・世界の崩壊とか・・・俺にはそんな難し

いいことは分からないけど、そいつが色んな世界で何の罪の無い沢山の人たちの生活を壊そうとしていることが、間違ってることは俺にも分かるよ!」

ツナのその言葉を聞いたりポーンはほくそ笑み、黙ってツナの左肩に乗った。

「俺はそいつを許せない!どんな理由だろうと、沢山の人を傷つけてまで通すべき愛なんて無いよ!!真之介君、君のお願いはちゃんと聞き入れたよ。」

「ツナ君!」

「十代目!」

その揺ぎ無い決意を聞いた京子と獄寺はツナのことを何時にも増して大きいな存在だと思った。

他の守護者も全員、ツナと同じ考えに至った。

雲雀は多少違っていたが。

「そうだね・・・世界の平和をまもる云々よりも、沢山の人々が危険にさらされているのに黙って見過ごすわけにもいかないね。はやてちゃん、フェイトちゃん、みんな。私達も真之介君のお願い聞いてあげようか。」

なのはがそう言つと、やはり全員はツナ達同様の考えを示した。

ツナとなのは達の様子を見て、真之介は心の底から嬉しくなり深く

頭を下げて礼をした。

「ところで真之介・・・さっきから気になってたんだが、俺達の居るここって一体何処なんだ!？」

一護がふと先程から気になっていた疑問をぶつけると、真之介は表情を重くした。

そして、徐にこう言った。

「・・・ここは・・・なのは、ツナ、そして一護・・・お前達の住む世界が交じり合って誕生した、狭間の世界だ。」





## 第23話：ギール・D・アイゼンハウアー

「なっ……俺達とツナとなのはの住む世界が入り交じった……狭間の世界って……っーことは!？」

「ああ……お前達に説明したとおり……次元の破壊者の破壊活動の影響により、今三つの世界が一つになろうとしている。このまま放っておけば、世界はおろか……自分の存在そのものも消えてしまうかもしれない……」

真之介の発言を聞いた全員はかなりのショックを受けた。

リボーンと日番谷はそろってポーカーフェイスをし続けた。

「そっ……そんな!？じゃあ、もし次元の破壊者を止められなかったら……俺達……」

ツナがそう言いかけると、一護ツナの言葉に割り込みこう言ってきた。

「止められなかったらじゃねえよ!止めるんだよ!!だから俺達はここに集まったんだろう。そんなくだらねえ心配なんかするんじゃないやねえよ!リボーンにも同じようなこと言われてるはずだぜ、ツナ!」

「い……一護さん……」

一護の堂々とした態度を目の当たりにしたツナや他のメンバーは心

の何処かで抱えていた止められないのではないかと云う、不安を実に陳腐なものだったと思わせられた。

「そつ、そうですね！俺達が止めなくちゃいけないですね。ありがとございます、一護さん！何か、さっきまで抱え込んでいたモンが嘘のように吹っ飛んじゃいました。」

ツナは一護にそう云うと、一護は別に礼なんかいいさと軽くスルーした。

リポーンはそんな一護を見て、密かに大きな期待感を抱いていた。

この男とすれば、ツナは今まで異常に大きく、そして強くなれるという期待を。

「よし！全員の意思が固まったところで、一端此処から避難するぜ！こんな何も無いところじゃ、まともに対策も練れないしな。」

真之介はそう云うと、また例の如く前方の空間を歪ませ全員が入れるぐらいの巨大な穴を作り出した。

「なんと！！空間に穴が開いたではないか！！」

了平は驚きと興奮を同時に表した。

「すごい……空間に穴が開くなんて……一体彼は何者なの……!?」

フェイトがそう口にする、その質問に日番谷が応えた。

「奴は……様々な世界を渡る力を有していて、時空管理局の人間以上に多くの異次元世界を知り尽くした……言わば、時空の旅人つてところだ……」

「時空の旅人……か。なるほど、どうやら我々はまだまだ世界のことに関してはあやつから見れば赤子同然と言うわけか……」

シグナムは自分達時空管理局のことをそうのように自嘲した。

「さあ、全員この穴の中に入って先に進むんだ。暗がりにも進んでいけば、俺の知り合いの住む別の世界がある。そこで全員が今後どうするかを話し合う。」

「分かった！よし、いくぜお前ら！！」

一護が先人を切ろうとすると、恋次がお前が命令すんじゃないと一護の頭に強烈な拳をあびせた。

それに憤慨した一護は恋次のあごにパンチを食らわした。

そして、暫く彼らが喧嘩をしている間にツナとなのは達、そして他の死神メンバーも穴に入り、結局二人は一番最後に穴に入った。

穴から出た全員が一番最初に目にしたものは、とても目を疑うようなものだった。

それは、贅の限りを尽くし荘厳な造りをした豪邸が目の前にはあったのだ。

「なっ・・・何これ！？こんな豪邸今まで見たことも無いよ、俺！」

ツナは少々パニックに陥っていた。

「こんな豪邸・・・一体誰が住んでるんだろう？」

井上が疑問に思っていると、その質問に真っ先に真之介が答えた。

「ここは俺の知り合いの住む世界で一番でかい豪邸だ。ここの主はこの世界の経済のほとんどを支配しているコンツェルン・・・つまり財閥の社長だ。俺が遅れたのは、ここの主に部屋と食事などを提供して欲しいって頼みに行ってたからだ。他にもこれから必要となるようなものとかもな。」

「お前・・・見かけによらず用意周到なんだな・・・」

一護は見かけによらない真之介の先を見据えた行動に少々感心する反面、些か呆れた気にもなった。

「ところで、この家の主には会わなくていいのかい、真之介君？全

員が揃ったことだし、挨拶ぐらいはしたほうがいいと思うけど?」「  
石田がそう言ったので、真之介もそれを了承し、全員は屋敷の中に入ってしまった。

予め許可を取っていたので勝手に入っていても別段問題は無かった。

一同はまるでおとぎ話やテレビや雑誌でしか見たことが無いようなものばかりを見て、胸の高まりを抑えられないでいた。長い屋敷の一本道を進み真之介が玄関を開けて見ると、そこには和やかそうな雰囲気の白い顎鬚と口髭をはやした細柄の老人が出てきた。

「おう！真之介。無事だったんだな！！随分待ちくたびれたぞ！！」

老人は真之介と軽く握手をして真之介達を出迎えた。

「みなの方よく来てくれた。わしはこの家主のギール・D・アイゼンハウアーじゃ・・・うーんそれにしても・・・」

そう言ってアイゼンハウアーはゆっくりとなのはの元に歩いていく。徐になのはの両手を握った。

なのはは、突然の行動に驚き、顔を赤らめた。

「お嬢ちゃん・・・今度わしと夜景の綺麗な海辺のレストランで食事でもせんか？」

アイゼンハウアーの言葉を聴いた瞬間、一護たちは全員その場にずっこけた。

すると、直ぐに真之介がアイゼンハウアーの耳を引っ張りなのはから距離を取った。

「おいイカレエロじじい！！何当たり前のようにナンパなんかしてんだよ！歳を考えろって！！」

「何じゃ・・・こんなに美人の女子が多い中からあの子は俺が貰うから手を出すなって口か！？」

アイゼンハウアーの挑発的な態度に堪忍袋の緒が切れた真之介は、老人であるにもかかわらずアイゼンハウアーを抱え家の中まで投げ飛ばした。

一護達はその光景に啞然とした。

「とつとと棺桶にでも入ってる！！このイカレエロじじい！！！！」

「おい・・・本当に大丈夫なのかよ・・・此処のうち・・・家主あんなだし。」

一護が真之介にそう言う。

「・・・多分・・・大丈夫だ。確かに、傍から見ればイカレたエロじじいだが、宿と食事その他を提供してもらってる以上、文句は言わないでやってくれ。」

「あたし・・・ちょっと心配だな・・・」

なのはが、不安そうにそう言う。

他の女性メンバーもなものは同様にアイゼンハウアーの行動を疑った。

「自分の身は自分で守れよ、女性陣！突然じじいに夜這いかけらるなんてこともないわけじゃねえからな。」

真之介の言葉を聞いた女性人一同は、一人の例外もなく顔を引きつけた。

京子とハルはツナの両腕に腕を巻きつけ怖がっていた。

ツナは多少照れながら大丈夫だよと言って言い聞かせた。

一護や獄寺は本気でこの家本当に大丈夫なのかよと終始心配した。





## 第24話：もう一人の一護

一護たちは真之介に連れられ屋敷の中に入っていった。

中に入った一同は目が点になった。

巨大なリビングに荘厳なインテリアや、巨大なシャンデリアが当たり前のようにあちこちにあったのだ。

「なんちゅうデケー家なんだ！見たことのねーもんばっかりがおいであるぜ！！」

家の光景を見て恋次はただ驚くばかり。

「ボンゴレイタリア本部の数十倍はあるな。」

リボーンは客観的に見た様子を口にした。

「おいおい！本当にこの家俺達が使っちゃまっていいのかよ、じいさん！？」

一護がアイゼンハウアーにそう尋ねる。

「ああ。困ったときはお互い様じゃ。さあさあ、全員食事の準備が出来たからテーブルに集まってくれ！」

アイゼンハウアーはそう言うと、一護たち全員を食事用のテーブル

に案内にし椅子に座らせた。

暫くすると、メイドの人達が豪華な食事を運んできた。

今晚のメニューは魚介類と肉と野菜をふんだんに使用した豪華なメニューだった。

一同はそれを見た瞬間、思わず唾を飲み込んだ。

「さあ、今宵の我々の出会いを祝して……いただきます。」

「いつ……いただきます!!」

そう言うと、一護や恋次、獄寺に山本、了平の5人はテーブルの上にある料理を貪り食べ始めた。

その様子を見たツナ、日番谷を始めとする他の男性陣、なのは達女性陣は呆然とした。

途中、恋次と獄寺が料理の取り合いを始め騒然としたが、しびれを切らしたルキアが怒りの鉄拳を両者の頭に思い切り叩き込み、二人は椅子から落ちて気絶した。

「はひ!!!ルキアさん……見かけによらずベリーデンジャラスです……」

「うん・・・ちょっと意外だったね・・・」

京子とハルは見かけによらず恐ろしい一面を見せたルキアに驚いた。

暫くして、全員が食事をすませお互いの親睦を深め合っていると、真之介が全員に聞こえる声でこう言った。

「さて、互いの親睦を取るのもいいが・・・先に風呂でも済ませておこうぜ！」

「風呂か・・・それもそうだな。今日一日はいろいろと騒々しかったからな・・・」

一護がそう言つと、全員もそれを了承した。すると、ツナがあることに気づいた。

「あれ！？そう言えばまた雲雀さんいなくなってるんだけど!!」

「あいつは群れるのを嫌う奴だからな。どっか一人でそこら辺を散歩でもしてんじゃないかねえか。」

リポーンがあっさりそう言つと、全員はやれやれと溜息を漏らした。すると、今度はアイゼンハウアーが一護達の前に現れた。

「ああすまぬが・・・今は屋敷の風呂は使用できないんじゃないや。じゃ

から、代わりにこの先にわしの会社が経営する健康ランドがある。そこにいって疲れを癒してくるがよい。」

「あんた・・・健康ランドまで経営してるのかよ・・・どんだけだよ。」

一護はアイゼンハウアー財閥がどれだけ凄いものなのかを改めて実感しつつそう言った。

「じゃあ、全員市内の健康ランドに出発するとするとか。必要な着替えは全員に割り振られた部屋のなかに、お前達の世界から持ってきた本物の自分の着替えがあるから、それを持っていけ。」

「真之介君・・・何時の間にそんなことしてたんだ・・・」

ツナはとても複雑な気持ちだった。

「よし！そうと決まったら部屋に行って着替え取ってくるか！」

一護が立ち上がり部屋に向かおうとすると、突然石田に呼び止められた。

「待て黒崎。君は今は魂魄の状態なんだぞ。義骸や本物の自分の身体もないんだ・・・少しは考え給え。」

「あつ・・・そう言えば・・・そうだった・・・」

石田に痛いところをつかれ、一護は困惑した。

「え？一護のあの姿って・・・魂魄なの!？」

スバルが真之介にそう尋ねた。

「ああ・・・死神は皆魂魄の状態なんだ。日番谷もルキアも恋次もな・・・ただし、石田と茶渡と井上は普通の人間の姿だけだな。」

「あの・・・さっき言ってた義骸ってなんなんですか？」

今度はキヤロが真之介に尋ねると、真之介の変わりにルキアが応えた。

「私達死神が現世で活動する際、一般人に同化する際や傷ついた魂魄を回復させるために仮の肉体のことだ。最も、義骸に入ることを極力嫌がる死神もいるがな。」

「へー。死神ってすげなーおい!!」

山本は感心するが、獄寺は何でもありだなと言って呆れた様子を見せた。

「でもよ、確かに自分の肉体が無いのはちょっとな・・・」

一護がそう言うと、真之介は鼻で笑った。

「そう言うと思って・・・つれて来てよかったぜ・・・」

真之介がそう言うと、一護たちの前に突然灰色のオーロラのカーテンが現れ、その中から普段着を着た一護が出てきた。

「痛つてなー、おい！！俺様を誰だと思つてやがるこの野郎！！」

一護の姿をした割には実に軽薄な振る舞いと言動を見せるのは、一護の身体に代わりに入っている改造魂魄、コンであった。

死神メンバー以外は突然もう一人の一護現れたことに驚きを隠せなかった。

「こっ……コン！！」

一護も意外な奴が現れてかなり驚いた。

「あん！？つて、一護じゃねえか！！それにネエさん！！そしてこの……」

コンは周りを見渡し、なのはや京子を見るなり二人のほうへもっダツッシュで飛びかかっていった。

「何と言う禁断の花園！！俺を天国へ連れて行って下さい天使達！！！！！！！！」

コンが鼻血を出しながらなのはや京子達に飛びかかるうとした寸前、一護は代行証で自分の中に入ってるコンの丸薬を抜いた。

「たく……油断も隙もねえ野郎だ！ここの家のじいさんそっくり

だぜー!!」

一護は毎度の事ながらコンの言動に頭を悩ませた。

一同は突然生気の抜けたもう一人の一護を真剣に心配した。

「心配すんなよ。こいつが本物の俺の身体だ!さっきまで入っていたのが俺の身代わりのコンだ。」

そう言うと、一護は床に倒れてる自分を抱えて自分の身体の中に入ってしまった。

死神関係者以外は全員目を疑った。

ランボはパニックに陥り、獄寺は必死に祈祷を唱えていた。

「よし・・・俺は一樣オツケーだけど、ルキアたちはどうすんだ」

そう言いながら一護はコンの丸薬を拾い上着のポケットにしまっているんだ。

「心配すんな。部屋にちゃんと義骸も置いてある。」

一護の質問に真之介はあっさり応えた。

「よし!じゃあ各自着替えを用意して、市内の健康ランドに行こう



か！」

なのはがそう言うと、全員がそれに了承し割り振られた部屋へ向かった。

「そうだそうだ・・・真之介、これを持っていけ！」

アイゼンハウアーはそう言うと、懐から健康ランドで使える無料パスを真之介に人数分手渡した。

「おっ！サンキューーなじじい。」

着替えを用意し、準備の出来た一同は真之介に連れられ市内の健康ランドへと向かった。



## 第25話：お風呂は広いほうが良い

真之介に連れられて、一護達はアイゼンハウアーの経営する市一の設備を誇る健康ランドに足を運んだ。

施設に着いた一護達はその建物の規模、賑い、広さに圧倒した。

「すげーな・・・単なる健康ランドだとばかり思ってたが、とんでもねーでかさだぜ!!」

予想を越えた大きさと賑いに一護は啞然とする。

「ここはじじいが経営する健康ランドの第一店舗なんだ。その後国内に支店を広げていき・・・今じゃあ世界192カ国にまで拡大することに成功した。」

真之介が施設の補足説明をした。

「僕達の世界で考えれば・・・192と言つと、今の国連の加盟国と同じ数つてことだね。」

石田は眼鏡の位置を直しながら驚きを隠すようにそう言った。

「つくづく凄いや・・・それにしても・・・」

ツナがふと後を振り向いてみると、改めてツナはその人数の多さに啞然とした。

「もの凄い大所帯ですね……俺達って……ん!?」

ツナはなのは達のほうを見たとき一瞬違和感を覚えた。

「どうしたんだ……ツナ……!?」

茶渡がいつもの声色で尋ねると、ツナはなのは達六課メンバーの数が多し気がすると言ってきた。

「そう言えば……何か多い気がするな……?」

山本も同じようにそう思っていると、はやてがそれを聞いてくすくすと笑い出し、ツナ達にこう言った。

「何言うてるの二人とも……気がつかへんか?あたしの隣や、隣」

はやてがそう言うので、ツナ達は言われた通りにはやての隣をよく見てみた。

すると、ツナ達は仰天した。

今迄掌サイズだったリインの身体がキャロと同じくらいの背丈になっていたのだ。

「えええ!?リインさんが大きくなってる!?!」

ツナが初めてそう言うまで男性陣は全員そのことに気づかなかつた。獄寺と大人ランボ、了平はその姿を見るなり思わず尻餅をついた。

「ああ・・・そう言えばお前魔力消費が激しいのが欠点だが、でかくなれるんだっただか？」

恋次は思い出したかのようにリインにそう言うと、リインはいいですー、といったもの笑顔を振りまいた。

「つくづく魔法っていうのは・・・何でもありだな・・・」

リボーンはいつもと変わらぬ表情で冷静にそう言った。

数分後、一同は健康ランド内に入場しフロントのところまでやってきた。

「いらつしゃいませ・・・ギール・D・スパへようこ・・・団体様ですか？」

受付の人が女性が一護達を見るなりそう言った。

「えつと・・・大人24人と・・・」

はやてが急いで全員の数を数え始めた。

はやてが大人の人数を言うと、今度は横からフェイトが入ってきた。

「子供2人です・・・」

フェイトがそう言うと、スバルと恋次はある共通の話題を持った。

「子供は・・・リボン君とリン曹長でしょう。えーと・・・ヴィータ副隊長と・・・」

「日番谷隊長は・・・？」

二人がそう言うと、ヴィータと日番谷は不機嫌そうに声をそろえて言った。

「私（俺）は大人だ！」

「・・・あつ、はい！それじゃあ皆さん・・・こちらへどうぞ！」

受付の女性は全員を案内して、浴場まで連れて行った。

真之介は全員分の無料パスを受付に出していたので、少し遅れた。

「・・・・・・・・ふう、よかった！ちゃんと男女別だ。」

エリオは入浴場が男女に分かれていることを確認しほっとした。

「大きいお風呂だって・・・楽しみだね、エリオ君！」

満面の笑みでエリオに話しかけてきたキャラ。

「あっ・・・うん、そうだね！スバルさんやハルさんたちと楽しんできて。」

「えっ！？エリオ君は・・・？」

キャラがそう言うと、エリオは途端に顔を赤くして、自分は男だからとか年齢制限だのと言って弁解したが、キャラはそれを聞くと悪戯っぽく笑い壁に貼られた紙を指差した。

「えっ・・・注意書き・・・えっと、女湯への男児入浴は14歳以下のお子様のみでお願い・・・します？」

「うん！エリオ君ギリギリ14歳！」

キャラは楽しそうにエリオにそう言った。

エリオは当然断ろうとしたが、そこにフェイトが入ってきた。

「せっかくだし一緒に入ろうよ！エリオとのお風呂は私も久しぶりだし・・・入りたいな・・・」

フェイトの言葉を聞いた一護とツナは二人同時に床にこけた。

そして、一護とツナはもの凄い勢いでフェイトのもとまで駆け寄り抗議を شدした。

「あんた何考えてんだよ！！ここは仮にも大衆浴場だぞ！！それに、注意書きにそう書いてあってもエリオはツナと同じ年だし、思春期まっさかりなんだぞ！！」

「そ、そうですね！！この年になって一緒にお風呂入ろうなんて発想は止めてください！！聞いているこっちが恥ずかしくなりますよ！！」

一護とツナは顔を赤らめて激しくフェイトに猛抗議したが、なのはやスバルにティアナ、さらには井上にハルも仲良く入れれば別にいいんじゃないですか、と言って中々事態が解決できないでいた。

すると、強引に恋次がエリオの両脇を抱え無理矢理男湯に運んでいった。

「男は男湯でむさ苦しさや男の付き合いを学ぶんだよ！ちやらちやらした女の世界にいつまでもいたら駄目だ！！」

その光景を見たフェイトとキャラはかなりがっかりした様子だったが、一護とツナは恋次のフォローをありがたく思い胸をなでおろした。



そして、男湯の脱衣所で着替えている男性陣の中で、了平は茶渡の身体つきを見てこう言った。

「おお！！極限に鍛え上げられた素晴らしい筋肉ではないか！！！  
今度の我が並盛ボクシング部の大会に助っ人として出場してもらいたいぞ！！！」

「いや・・・それは無理だと思うが・・・。」

茶渡はかなり困惑していた。そこにツナがフォーローに入った。

「お兄さん・・・茶渡さん、高校生ですよ。」

それを聞いた了平はしまったー！！、と他の客が居るにも関わらず甚だ大きい声を出してしまい係りの人にこっぴどく説教されてしまった。

「あははは・・・それにしても・・・。」

エリオが何か言いたげにしていたので、石田が尋ねた。

「どうしたんだい、エリオ君？何かあったのかい。」

「あ、いえ別に大したことじゃないんですけど・・・僕、こんなに大勢の男性と一緒にいるのはこれが初めてで。」

「そう言えば・・・エリオ氏の周りはみな美しい女性ばかりでしたね・・・」

大人ランボは牛柄の服を脱ぎながら、今更ながら気付いたことを口にした。

「お前も苦勞してんだな・・・エリオ・・・」

一護はエリオの普段置かれている状況に同情した。

「あれ？そう言えば・・・リボーンの奴何処行っただんだ!？」

ツナは先程からリボーンの姿が見えないことを不思議に思ったが、一護達が脱衣を完了して浴場に向かうのを見て、慌てて服を脱いで追いかけていった。

それから彼らはとても悲しい悪夢に遭遇することになるとは・・・  
・・・知る由も無い。



## 第26話：戦うとは

男湯に入った一護達は、その湯の数や広さに興奮を覚えた。

「すげーな、おい！！こんな広い造りになってたのかよ。」

一護は終始感激した。

「湯の数も充実してるな……あっちの世界にもこれくらい広い健康ランドがあれば、俺も休日にゆっくり入りにいけるのにな……」

日番谷は心の中で思ったことを口にし、密かに願っていた。

「よっしゃー！俺が一番乗りだぜ！！」

恋次は子供のように目の前に広がる一番大きい浴槽に飛び込んでいった。

幸いにも他の客は一護達以外今は誰も居なかった。

「けっ！！お子茶魔が！！」

獄寺は舌打ちをして恋次の行動を馬鹿にした。

すると、恋次はそんな獄寺に挑発した。

「あんだとこらー!!びびってんのか、オイ!!」

「あつ!!上等だこの野郎!!」

獄寺は容易に恋次の挑発に乗って同じように湯船に飛び込んでいった。

その様子を見た一護、ツナは似たもの同士と思いつつ呆然とした。

「ははあはは、獄寺の奴楽しいそうだな。」

山本はいつもの山本節をかまして笑っていた。

「やれやれ・・・食事もそうだが、風呂くらい穏やかに出来ないものかね・・・」

石田は未だ風呂の中で喧嘩してる恋次と獄寺を見て頭を抱えていた。

その後、全員は自分の好きな湯に浸かり一日の疲れを取っていた。

山本と大人ランボと石田はジャクジー風呂を。

了平と茶渡は打たれ湯に。

一護、ツナ、日番谷にエリオは普通の湯に使ってリラックスしていた。

「はあくやつと疲れが抜けていくぜ・・・」

一護は塗らしたタオルを頭に乗せ、両腕を広げて寛いでいた。

その隣に居たツナはその様子を見て自分も心が心地良いと感じた。

「ははは・・・大分疲れてるみたいですね、一護さん。」

「まあな・・・お前は疲れてねえのか、ツナ？」

一護はタオルを頭の上から下ろしてツナにそう尋ねた。

「勿論疲れてますよ・・・何しろ今日は散々な目にありましたからね・・・」

ツナはそう言つて、今日一日に起こった凄まじい出来事を頭の中で思い返していた。

「まっ、お前達には災難だったよな・・・ついこの間十年前の世界から無事戻って来て、やつと平穩が訪れたかと思つたらこんな目にあうなんてよ・・・」

「えっ！？一護さん・・・そんなことまで知ってるんですか!？」

ツナは意外なことを知っていた一護に驚きを隠せないで居た。

「まあな・・・大概のことは全部真之介から聞いたからな。お前らが今迄繰り広げてきた凄まじい戦闘のことも・・・その大空のボンゴレリングも、あのおつかねーXANXUSって奴と戦って手に入れた代物だろ。まあ、お前にしてみれば継承なんかしたくなかったかもしれねえがな・・・」

「ええ・・・まあ・・・あつ、そう言えば一護さんはどうして死神になったんですか！？それに代行ってどう言うことですか？」

「うーん・・・話せば長くなるが、俺は生まれつき霊感が強くてな・・・物心ついたころにはもう毎日そこら辺の幽霊と会話したりしてた。そんな時に、うちの町に虚退治にやってきたのが、ルキアだった。ルキアは俺の家族を救おうとして重傷を負った。そこで、俺はルキアに死神の力を託された。力を失ったルキアの代わりに俺が死神業務をすることになったから死神代行。そこから、俺の世界は変わった・・・それからは、壮絶な戦いの毎日だった。何度も死にかけたりもしたしな・・・ってそんなところかな、大体。」

ツナとエリオは一護の話をもとにして、一護の壮絶な戦いの日々を連想してみた。

ツナはちよつと想像しただけで恐ろしくなり湯船の中に潜ってしまった。

すると、今度はエリオが一護に話しかけてきた。

「僕達に比べてみればみれば・・・一護さんは凄いですよ。僕なんか、絶対にそんな戦いの中で勝ち残ることはおるか、きっと怖くて逃げ出しちゃいますよ。」

「そうだね・・・俺達の戦いと比べたら、一護さん達のほうがずっと危険で恐ろしい目に遭うのはわかってるんだ。それを承知で戦いに身を投じているんですよね・・・やっぱり、俺達じゃかなわないですよ。」

ツナとエリオは項垂れた様子だったが、そこに水を指したのは一護の正面にいた日番谷だった。

「同じだ。どんな形だろうが・・・そこに何か守ろうとするものがあれば、俺達は自然と戦いの中に身を投じる。てめえらだって同じだろうが・・・マフィアだろうが魔導師だろうが、自分が守ると誓ったものがあるからお前らはこれまで戦ってこれたんだ。戦いに、違いなんてもんじゃないさ・・・」

一護とツナ、そしてエリオは日番谷の口から出された言葉に終始心を動かされた。

そして、3人は今迄の自分達の戦いの日々を振り返り、再び前を向こうと決心したのである。

「・・・ありがとう・・・冬獅郎君・・・」



ツナがそう言うのと、日番谷は不機嫌になり訂正した。

「ひ・つ・が・や隊長だ!!」

日番谷を強調してツナにそう言った。

ツナは日番谷の形相にかなり怯えた。

すると、獄寺がツナに向かって話しかけてきた。

「十代目！お背中お流します!!」

獄寺は満面の笑みでツナにそう言ってきた。

「いいんじゃないのか、ツナ！流してやるって言ってるじゃ。」

一護もツナに獄寺の行為を勧める。

「・・・そ、そうですね・・・じゃあ、お願いしようかな、獄寺君  
！」

ツナがそう言うのと、獄寺は、はい！お任せください十代目!!、と  
言っただけでも上機嫌だった。

「ああ！だったら僕も、一護さんの背中流します!!」

エリオがそう言うので、一護もその行為に甘えて背中を流してもら

うことにした。

「おい、一護！身体洗ったら露天風呂行こうぜ！！」

恋次が湯船の中でそう言ってきた。

「おお、いいぜ！お前らも行くか！」

一護が全員に尋ねると、全員は賛成して手早く頭と顔と身体を洗い露天風呂に入ることになった。

そして、全員が露天風呂に入って少ししてから、真之介も露天風呂に入ってきた。



## 第27話：観察

「よーてめえら。すかつり満喫してるみたいだな！」

遅れて入ってきた真之介は露天風呂で寛ぐ一護たちにそう言った。

「まあな・・・それにしても本当にデケー健康ランドな此処は・・・

」

改めて一護はこの健康ランドの施設の充実さに感心していた。

「広いのは勿論だし・・・何よりこんな綺麗な星空の下で温泉に入れるなんて思っていなかったよ」

ツナはそう言うと、露天風呂の頭上で輝く満天の星空を真之介に指差した。

他のものも自然と一度は頭上で光輝く星空を見上げ心を落ち着かせていた。

「そうだろ、そうだろ！ここはとにかく湯の数が充実してるだけでなく、こうやって星空が綺麗に見えることから人気が高いんだ。まあ、今日は運が良かったからいいが・・・酷いときは突然雨が降って来たりとか、夜行性の虫がその辺にうじゃうじゃわいて出てきたりもするがな・・・」

「気分壊すようなこと言うな・・・想像しちまったじゃねえか！」

恋次は真之介に気分を害されたとして文句を言った。

すると、壁の向こう側からは楽しそうに話す若い女性の声が聞こえてきた。

「楽しそうだな・・・京子ちゃん・・・何話してるのかな・・・？」

ツナはふと、頭の中で京子の温泉浸かっている姿を妄想してみた。

すると、ちょっと妄想しただけでツナは鼻の下を伸ばして鼻血を少し出していた。

「お前・・・何京子の裸のことなんか考えてんだよ・・・」

隣の一護が呆れた様子でツナにそう言うと、ツナは我に返り、物凄く慌てた様子で一護に尋ねた。

「なっ!?!一護さん・・・どうして分かったんですか!?!」

「お前と京子が恋人同士だってことも、全部真之介から聞いたぜ。ついでにお前がかなりの妄想癖があることもな。」

それを聞いた瞬間、ツナはあまりの恥ずかしさで忽ち顔を赤らめ湯船の中に潜った。

「あははは・・・ツナ、一杯やられたな！」

山本は楽しそうに笑いながらそう言った。

「沢田！！！貴様京子の裸を見たのか！！！」

山本とは対照的に、了平はツナに激怒した。

「見てませんよ、お兄さん！！！俺はそんな最低なことしませんよ！！！」

ツナは必死で了平に潔白を証明しようとした。

その様子を一護と石田と茶渡はただ呆然と見ていた。

「綱吉さん！了平さんも静かにしてください！！仮にも大衆浴場ですし！！！」

エリオが慌てて二人の仲裁に入った。

「俺は上がるぞ・・・」

そう言って、日番谷はタオルを巻いて先に露天風呂を出た。

「何だ、もう上がんのかよ？」

一護は日番谷にそう尋ねた。

「俺は熱いのは苦手なんだよ……」

愛想の無い態度で一護にそう言って、日番谷はさっさと露天風呂を後にした。

その様子を見た獄寺は不貞腐れた様子で舌打ちした。

「けっ！ガキのくせに愛想の無ねー野郎だぜ！！」

「ふん。てめえみたいなのも知らねー短慮なガキが日番谷隊長のことをバカにすんじゃねえよ！！」

恋次が獄寺に反論する。

「んだと、この刺青野郎！！」

「何だと、このタコあたま！！！！」

二人は再び火花を散らし喧嘩を始めた。

その様子を、他のものは呆然と見ているだけだった。

すると、そんな時に女湯から素っ頓狂な言葉が男湯に聞こえてきた。

「はひー！織姫さんのお胸、なんてビツゲストなんでしょー！！！」  
ハルのその言葉を聞いた真之介以外の男達は全員湯船の中にずっこけた。

「あのアホ女ー！何言ってやがるんだよー！！！！」

獄寺はハルの失言に怒りを覚えた。

「好きだよな・・・女って言うのは、そういう・・・って！！？」

一護がふと女湯の壁を見てみると、気付かれないように女湯の壁を這い登ろうとする恋次の姿を目の当たりした。

「おい、恋次！！てめえ何やってんだよ！！！！？？？」

慌てた様子で一護がそう尋ねると、恋次は涼しげな様子でこう言った。

「ああ！？うんなもん決まってるだろ・・・・・・覗き（観察）だよー！」

「字が違いよー！！！！ツーか何で漢字を漢字で読んでんだよー！！！！大体、そんな涼しげな様子で言うなよ腹立つはー！！！！って、人の話し聞けよー！！！！」



恋次は一護の話を無視してどんどん壁を登ろうとしたが、なんとかツナと獄寺、山本・了平・ランボ・石田・茶渡、そして慌てて湯船から上がった一護の8人は力づくで止めようとした。

「放せ！！お前ら！！」

必死で恋次は抵抗するが、一護達も必死で押さえつける。

「うるせーよ！！てめえはそこまで落ちるところまで落ちたのか恋次！！」

一護が必死で恋次の右腕を抑える。

「落ちてねーよ！！俺は……俺の魂に従っただけだ！！」

「そこで魂なんて言葉使うんじゃないよ！！ム力つくから！！」

一護は恋次の軽薄な言動に怒りを覚えた。

「京子ちゃんの裸は見ないで下さい！！てか他の人のも！！」

ツナは恋次の左足を必死で抑えていた。

「俺はガキの女の身体には興味ねーよ！！」

「貴様！！！！京子の裸を侮辱するのか！！！！！！」

了平は恋次の失言に激しく憤る。

そんな男湯から聞こえる声を聞き、なのは達は不思議に思った。

「一護くん達・・・どうしたんだろう、あんなに大きい声だしたりして?」

なのは頭にはてなマークを浮かべた。

「ツナ君もお兄ちゃんもどうしたんだろう?お兄ちゃんはともかく・・・ツナ君まで?」

京子は尋常じゃない様子が窺がえるツナを不思議に思った。

「まったく・・・男というのは騒がしいものだな・・・」

ルキアはいつもの口調で一護達に呆れていた。

一方、一向に女湯を覗こうとすることを止めない恋次とそれを止めようとする一護達はというと。

「真之介!!お前も黙って見てないで手伝えよ。」

一護がそう言うと、真之介は渋々了承し・・・何処から取り出したか知らぬが、彼の右肩にはバズーカが持たれていて、それを見た一同は目が点になった。

「おい・・・お前・・・何でそんなもん持ってるんだよ・・・てか、何に使うんだ？」

一護は恐る恐る尋ねてみると、真之介はサディストの笑みを見せてこう言った。

「俺・・・おいしいところは見逃さねーんだよ。」

真之介はそう言って、バズーカを発射した。

一護たちはよけきれずそのままバズーカに直撃してしまった。

そのおかげで、男湯と女湯を遮る壁は見事に壊れたため、真之介は急いで露天風呂から退散した。

一護達全員はその場に倒れこみ、爆風がはれた時ゆっくりと目を開けた。

「いててて・・・真之介の野郎！！いきなり何しやがっ・・・」

一護達は目の前を良く見てみると、そこには殺意が剥き出しのなのは達が立っていた。

ツナとエリオは目を開けた際に飛び込んできた京子とキャロの生の裸を見た瞬間鼻時を出し気絶した。

「おかしいな……みんな……どうしちゃのかな……」

いつもとは違う低いトーンで話すのはを見て、一同は恐怖した。

「一護……恋次……はともかく、茶渡や石田までもが落ちたものだな……」

ルキアと井上はとても冷ややかな眼差しを一護達に向ける。

「お兄ちゃん……これどういこと？」

京子はいつもの雰囲気を全く醸し出さず、まるでハイパー化したツナのような鋭い目線で了平を睨み付けた。

「獄寺さんも……山本さんも、それにエロい牛柄の人も……最低ですね！」

ハルは拳をボキボキと鳴らしてやる気満々だった。

「ちちちち違いよ……！！俺達は恋次が覗こうとしたのは止めようとしたら……真之介がいきなり……」

一護必死で弁明するが、女性陣には全く聞いてもらえない。

「京子……俺は何もしてないぞ……潔白だ……」

了平もそう言うが、京子は相変わらず鋭い視線で了平を睨む。

「私らの裸見た付けは大層デカイで……クロームちゃん、幻覚張って誰も入らないようにしてくれへんか？」

「……わかった……」

はやての言う通りにしたクロームは幻覚で露天風呂に客が入らないようにすると、女性陣はゆっくりと一護達に近付き、拳を鳴らした。

「……さあ……お前の罪を数えろ……」

はやては鬼のような形相でそう言った。

「うっ……あああああああ……!!!……!!!……!!!」

その後彼らが彼女達に世にも恐ろしいきついお叱りを受けたことは、当然だった。



## 番外編：女は三人以上だと無敵

一護達が風呂に入っているちょうど同じ時、女湯も男湯と同様風呂の規模になのは達一同は驚いていた。

「わぁー！ー！ー！すごーい！ー！」

「はひ！！凄いビッグなお風呂がいっぱいありますね！！！」

スバルとハルは興奮を抑えきれずに二人揃って一目散に目の前の風呂に向かって走り出していった。

「ふふふ。ハルちゃんもスバルさんもすごい楽しそうにしてるね、キャラちゃん！」

「そうですね。スバルさんもハルさんもすごい楽しそうでしたですね、京子さん！」

この短期間ですっかり意気投合した京子とキャラは、二人の無邪気な様子を見て、顔を見合わせ笑っていた。

「ほら二人とも。あんまりはしゃぎすぎると転んで怪我するよ。」

なのはは、興奮の収まらない二人に優しく注意を呼びかけた。

それを聞いた二人は、我に返り少しはしゃぎすぎたとお互いの顔を見合わせ羞恥心を覚え、笑いあった。

「でも・・・こんなにおつきーお風呂なんて思わなかったから私びつくりー！！ああ！！朽木さん、あっちにジャグジー風呂があるよ！！行ってみようよ！！」

「そうだな。なのは殿達はどうする？」

子供のようにはしゃぐ井上に対し、冷静な口調のルキアがなのはにそう尋ねた。

「うーん・・・みんな自分の好きなところに入ればいいんじゃない。あつ、でも・・・頭と身体を洗い終えたら、皆で露天風呂にでも入ろうよ。」

「せやな。じゃあ、みんな好きな風呂にでもはいるうか。リン、ヴィータ、シグナム。まずはあの電気風呂にでも入ってみようか！」

はやての発言を聞いた三人は揃って顔を見合わせた。

本当なら、自分もつと普通の風呂に入りたいものだが、はやてを怒らせたらどうなるか、分からない三人ではなかった。

結局、三人は渋々はやての言う通りにすることになった。



「ヴィータ副隊長も、シグナム副隊長も、おもけにリン曹長も大変ですね・・・」

「・・・あはは・・・うん・・・本当だね・・・」

そんな様子を見たティアナとフェイトは、改めてはやてを守護するものの苦勞を知ったのだ。

そして、各々ははやて達以外は自分の好みの風呂に入っていた。

スバルとハルとクロームは寝ながら楽しめる風呂、ルキアと井上、そしてフェイトはジャグジーへ。

なのは、ヴィヴィオ、京子、ティアナにキャラはオーソドックスな風呂で心身の疲れを落としていた。

「なのはママ・・・早く行こうよ！！露天風呂！！」

「ダメ。まだ身体洗ってないでしょう。ちゃんと綺麗に身体洗ってからね！」

「はい・・・」

なのはに説得にヴィヴィオはかなり不満はあったものの、素直に言うことにした。

それを見てた京子は、ふとなのはにこんなことを尋ねてみた。

「そう言えばなのはさん、ヴィヴィオちゃんのマムって言うてましたけど・・・」

「うん・・・そうだよ・・・」

「じゃあ、という事は・・・なのはさんにはお嬢さんがいるってことですよね？」

「へっ！ー！ー！」

京子の何気ない質問を聞いたなのははすぐさま顔を赤らめた。

それを聞いていた六課一同も思わず呆気に取られた。

「ちちちち・・・違うよ京子ちゃん！！ヴィヴィオは私の養子で本当の子供じゃないから！！それに、私まだ独身だし・・・そんなお嬢さんなんて人は・・・」

「けど、なのはさん・・・ユーノさんとはそういう関係じゃないんですか？」

ティアナの発言は聞いたなのははさらに動揺し、ティアナの口を慌てて押さえて真っ向から否定する姿勢をとった。

それを見ていた京子、キャロ、ヴィヴィオは呆然としていた。

すると、男子風呂のほうから賑やかな声が聞こえてきて、キヤロはその言葉に耳を傾けた。

「エリオ君・・・どうしてるかな・・・？ちゃんと楽しんでるかな・・・？」

「ふふ。キヤロちゃん・・・エリオ君のこと好きなんだ。」

「ええ！！京子さん！！わたし・・・そつ、そ、その・・・えーと！？」

京子の悪意の無い発言を聞いたキヤロはなのは以上に顔はおろか身体中を茹蛸のように赤くし、心臓の鼓動を早めた。

その様子を見たヴィヴィオは、タコさんみたいだと言って笑っていた。

「やっぱりそうなんだ、キヤロちゃん！」

「・・・はい・・・」

キヤロは恥ずかしさが頂点に来ていたが、京子の質問には顔を赤らめながらそう言って肯定した。

「そんなに恥ずかしがるものじゃないでしょ、キヤロ。傍から見ればあんたとエリオなんていいカップルじゃないの」

「てい、ティアさん!!」

キャラはティアナの発言を聞いてさらに胸の鼓動を高め、あまりにも軽はずみなことを言うティアナを注意した。

すると、今度はなのはのほう京子に逆の質問をした。

「じゃあ、今度は私から聞こうかな・・・ずばり、京子ちゃんは綱吉君の何処が好きなの？」

「えっ!!わ・・・わたしは・・・その・・・」

京子が応えずらそうにしていると、ジャグジー風呂から出てきた井上が悪戯っぽく笑ってこう言った。

「京子ちゃんは・・・ズバリ、綱吉君の優しさだよね・・・」

「おっ、織姫さん!!」

突然の織姫の発言に驚きを隠せない京子。

「確かに・・・綱吉君は優しそうな男の子だよ。でも、単純にそれだけの京子ちゃん？」

「うーんと・・・一言では言い表せないですけど、ツナ君の傍にいと凄くホツとするし、何よりも一緒にいるだけでツナ君に包まれる感じがして、それが心地よくて。まるで、私を包む大空って言う感じなんです!」

「なるほどね・・・自分を包み込む大空・・・か。言われてみれば、そんな気がするな、ねえヴィヴィオ！」

「うん！！綱吉お兄ちゃんはお空さま！！！」

ヴィヴィオは頑是無い笑みでそう笑うと、その笑顔を見た一同は思わず暖かい気持ちの笑いを上げた。

「あゝあ・・・京子ちゃんはいいな～～～好きな人に気持ちを伝えられてさ・・・。」

「・・・織姫も誰か好きな人とかいるの!?!？」

不意にフェイトがそう尋ねると、井上は誰よりも驚き後ずさりしたが、それを気にしたなのは達一同はルキア以外を抜いて井上を問い詰めた。

「気になるな・・・織姫ちゃんの好きな人・・・!?!？」

「はひ！ハルもどんな人なのかベリーコンシヤスですよ!!！」

「はよ言ってくれないかな～～～織姫ちゃん？せやないと・・・その超特大の巨乳私が揉み倒すで～～」

なのは、ハル、はやて以外の女性陣も目に見えるかのようななどす黒いオーラを纏いながら必死で抵抗する織姫の口を割ろうとした。

それから、織姫が口を割ったのは直ぐだったとき。

その後、露天風呂でのあの世にも恐ろしい事件が起こったのは言うまでもない。

## 第28話：アスタ・アキ

一護たちが健康ランドで人騒動を起こしている間、彼らの知らないところでは着実に多くのパラレルワールドが破壊されていった。

そして、また一つパラレルワールドを破壊した者達が、光の存在しない暗黒の中に集っていた。

「たくよ・・・あと一体何個世界を破壊すればいいんだよ！もう、俺この仕事飽きてきたぜ・・・」

「文句をたれるな・・・俺は独りで良いと言ったんだ・・・やりたがったのはお前だぞ、コネホ。」

「へいへい・・・スイヤセンでしたね・・・ペロー。」

一人は单身瘦躯で感情の無い言葉を放す伶俐冷徹な男。

もう一人は世界を破壊することに飽きて不満を抱く白髪の男。

「けどよペロー・・・いくら次元の破壊者様の命令だからとは言って・・・いつまでもこんなこと続けてても面白くねえよ。もっとこう・・・スリリングで興奮するようなことはないのか・・・?」

「安心しろ・・・もうじきお前の不満も晴れる・・・見る・・・」

そう言うと、ペローという男はゆっくりと足元の巨大スクリーンを開き、不満をこぼすコネホにそれを見せた。

映像に映し出されたのは、ツナとなのは達を襲ったメノスを容易く撃退する一護たちだった。

「あれま・・・俺達を送ったメノスを簡単に倒しやがったぜ・・・奴ら何者だよ？」

「見て分からないのか・・・死神だ。それも、真之介の連れてきた凄腕のな・・・」

ペローの口から発せられた真之介という言葉を聞いたコネホは、思わず口元を緩めた。

「へー！。仲間を集めてきたって訳か・・・面白れーじゃん。ちよつど、今の仕事に退屈してたところだ。いい気分転換になりそうだぜ・・・」

そう言うと、コネホは闇の中から取り出した刀を腰に携え飛び出そうとしたが、それを直ぐにペローが止めた。

「待て、コネホ。こいつらはまだ俺達が手を出して良い頃合ではない。それに、今のあいつらではお前の望むほどの満足感<sup>ミツミ</sup>は得れない塵ばかりだ・・・」



「けっ！何だよ期待して損しちゃったぜ・・・あゝあ、くっだらね  
」。

コネホはペローの言葉を聴いて一気に熱が冷め、その場に腰を下ろした。

「まあそう言うな・・・言っただろ、今のあいつらではゴミだど。このまま、俺達はいつらの様子をもう少し見れと次元の破壊者様は仰っていた。だから、今は待機だ。あの3世界の住民が今後どういった展開を見せるのかな。」

「おいおい・・・結局それかよ・・・それでもし本当にゴミだったらどうしてくれんだよ！」

「その時はそのときだ・・・」

「はいはい・・・仕方ねー、気長に待つか・・・」

そう言っつて、大あくびを書いてコネホはその場に寝転がり昼寝を始めた。

一方、相変わらずのポーカーフェイスで画面に映し出される一護、ツナ、なのはの様子をまじまじと見つめるペロー。

「・・・」

ペローは何も言わず、ただ黙って闇の中でじっとその映像を眺めていた。

その頃、風呂で世にも恐ろしいことが露天風呂で繰り広げられる中、日番谷は先に風呂から上がり休憩室で一人コーヒー牛乳を飲んでいました。

すると、そこに女湯から出てきたリボンと遭遇した。

「ちゃおっす！日番谷だったか？」

「……………アルコバレーノリボンか……………」

「まあな……………それより、お前……………随分と冷めてるな……………」

「うるせーよ……………もとからだこれは……………」

「ふん……………ところで日番谷、死神って言うのはどれくらい強いんだ！？」

リボンの突然に一瞬不信感を覚えた日番谷は、少し間を空けてから応えた。

「さあな……………だが、とりあえず言えるのは……………人間のそれとは比較にならねえってことは確かじゃねえのか……………それに、俺達隊長格の死神は現世に出るとき極端に霊力を制限される。今もそうだ……………だから、あのときの俺達の力が本調子だとは思っなよ。」

「

「あの黒崎一護っていうのもそうか・・・？」

「いや・・・確かに、奴の実力はあの時の比じゃないが、黒崎はあくまでも死神代行だ。俺達護廷十三隊の死神とは全く違う。」

「・・・そうか・・・」

そう言っつて、リボーンは持っていた牛乳を飲み始めた。

日番谷も同じように残りのコーヒー牛乳を飲み始めた。

すると、男湯から不敵な笑みを浮かべて真之介が出てきた。

「よう、お二人さん！早いな！」

「まあな・・・それより・・・何だか随分と風呂場のほうが騒がしくねえか、おい？」

日番谷が不審に思っつて真之介に尋ねると、真之介は白を切っつて日番谷には何も放さなかつた。

日番谷はそれを見て益々怪しがつた。

リボーンはとつうと、露天風呂での事の成り行きを全て見ていたの  
で当然知つていた。

リボーンは真之介同様不敵な笑みを浮かべ牛乳を啜つた。

その後、真之介とリボーンは日番谷を残し何処かへ行ってしまった。

それから、暫くして男湯からはツナとエリオ以外の六人が顔中に瘤やあおたん、爪でひつかかれた後を顔中につくつてぐったりしながら出てきた。日番谷はそれを見て深く衝撃を受けた。

「お・・・お前ら・・・どうしたんだよ、それ!？」

「はい・・・・・・・・ちよつとした手違いでこんなことに・・・」

恋次がそのように日番谷に釈明すると、一護がそれに対して返答してきた。

「何が手違いだよ・・・女湯覗こうとしてただけだろうが・・・」

「ばつ、バカ!!!一護!!!そつ・・・それを言うなよ!!!」と恋次は大慌てで日番谷に愛想笑いを向けて誤魔化した。

「・・・・・・・・阿散圀・・・・・・・・落ちたな・・・」

日番谷は何時も以上に冷たい視線で恋次のことを見つめた。

恋次は必死で日番谷に誤解を解こうとするが、まるで聞いてくれなかった。

「だいたい、女湯覗こうって魂胆自体ガキみたいなんだよお前は!」

「あんだと一護!!! てめえだってその気ぐらいあつただろうが!!!」

「ねえー!ーよ!!! これっぽちも!!! 何で俺がそんなことしなきゃいけないだよ、このボケ!!!」

「俺がボケならてめえはカスだ!!! 男の本能のかけらもねえカスに、  
いいたいほうだと言わせるかよ!!!」

「んだと!!!!!!」

一護と恋次の言い争いはヒートアップし、ツナとエリオがそれを止めようと必死で一護たちを仲裁しようとした。

「落ち着いてくださいよ、一護さん!!! 恋次さんも止めてください!!!」

「そうですよ、お二人とも!!! 他のお客さんもいることですし・・・」

「止めないでくれ、ツナ!!! こいつは男の風上にもおけねー野郎なんだ!!! 一発ぶん殴る!!!」

「やってみるよ、この阿散困恋次様を殴れるものならな!!!」

二人は完璧に戦闘態勢になって一触即発の状態だった。

それを見たツナは獄寺たちに二人を止めるのを手伝って欲しいと言ってきた。

獄寺たちはそれぞれ四人がかりでふたりのことを抑えようとした。

「いい加減にしるよ、刺青野郎！！十代目の手を煩わすんじゃないよ！！」

「そうつすよ。落ち着いてくださいよ！！」

「黒崎も抑えろ！君は恥ずかしくないのか！！」

「そうだぞ・・・一護。」

獄寺、山本、石田、茶渡の四人は二人を宥めようとしたが、まったく効果が無い。

「うるせー！！勝手に見たくも無い女の身体見たかったんだろって言われて、黙ってられるか！！！！」

一護の怒りが頂点に達したそのとき、女湯から勢いのストレートパンチが一護と恋次の顔面に繰り出され、二人はその場に倒れこんだ。

一同は驚愕し見てみると、そのストレートパンチを繰り出したのは、ルキアとスバルだった。

「邪魔だ！早くそこを退け、下種供。」

「そうよ。あんたらも早くど・い・て。」

その身体中から発せられる怒りのオーラに圧倒され、男共は一人の例外も無く反抗することなくその場を退いた。





## 第29話：模擬戦について

健康ランドで人騒動があったものの、一護達は全員アイゼンハウアー邸に帰宅した。

そして、全員（雲雀も含）は真之介によりリビングに集合させられ、今後の方針について説明を受けた。

「さ〜と、全員揃ったところで今後のことについての方針を話しておこうか・・・まあ、俺としては明日辺りにも死神とボンゴレと魔導師をごちゃ混ぜにした模擬戦をやるうと計画してんだが。」

「模擬戦・・・？それって、なのは達がよくやるあれか!？」

一護にそう言われ、真之介はああと返事をし話を続けた。

「次元の破壊者がいつ襲ってくるかも分からない今、まずはこうして巡り合った3世界の住人同士でお互いの力を試してみようって思っただけ。知らぬと知らないのでは、これからの対策の仕方が大きく違ってくる。」

「なるほどな・・・確かに、真之介の言うことに間違いは無いな・・・」

シグナムがそう言っていると、他のメンバーも納得した様子で同意した。

「よし！そうつと決まったら早速明日結構だ。だが、その前にいく

つか話しておく必要がある・・・一つ目は、これはあくまでも模擬戦。どちらかが気絶ないしは抵抗不能な状態になった瞬間に即終了。異論のある奴はいるか？」

「うんうん。私達も真之介君の言うことに賛成だよ。六課で働いていたときは皆そうしてきてたし。」

「俺も・・・それには賛成だよ。正直戦いはあまり好きじゃないけど、一護さんやなのはさんたちの力をちゃんと見るには良いと思うんだ。」

「俺も良いと思うぜ。別に命賭けるわけじゃねんだし・・・」

一護、ツナ、なのはがそう言うのと全員も三人の意見に賛成した。

雲雀の場合は渋々という感じではあったようだが。

「わかった、それで決まりだな。後話しておく必要があるのは・・・」

「おいおい、もったいぶらずにさっさと話せよ！」

恋次は真之介のはつきりしない様子に不満を掲げ、文句を言い出した。

すると、真之介は言いたいことを思い出して真剣な眼差しで一護達死神組みのほうへ目を向けた。

「……ところで一護……こいつらと実際にあったときから現在に至るまで、何か気が付かなかったか？」

「えっ！？いや別にこれと言って何も………?」

一護はこれまでのことを振り返ってみたものの、全く思い当たる節が無く困惑した。

すると、突然何かに気付いた様子で真之介にこう言った。

「……そう言えば、当たり前のようにことが進んできたけど……どうして、彼らがメノスや死神の姿を見ることが出来るんだい、真之介君!？」

その言葉を聞いた死神組みは驚くのは勿論、ツナやなのは達も石田の意外な発言にきょとんとしていた。

「そう言えばそうだけ。死神やメノスは魂魄……つまり霊体。霊力の無い一般人には見えないはずだ。なのに、何でツナやなのは達には見えてたんだ。俺もそんなことすっかり忘れて普通に会話してたぜ……」

「どう言う事だ真之介!？何故霊力の持たないツナ達が我々やメノスの姿を目視できた、説明しろ。」

一護が驚く中、ルキアは冷静な口調で真之介に弁明を求め、真之介は深く溜息を付いた後説明をした。

「前に言っただろ。世界が一つになるうとしていて……つまり、世界が融合を始めた結果……本来霊力を持たない者が突然メノスや死神が見えるようになったり、魔法や死ぬ気の炎を灯せるようになったりしてきてるんだ。ツナ達だけが影響を受けてるだけじゃないんだよ。」

真之介の言葉を聞いた一同は言葉すら発せられずにいた。

その後、暫くの間沈黙を守った。

そして、徐に真之介が再び模擬戦の説明を شدした。

「ともかく……影響が出てる中でどれだけやれるのか明日しっかりと見させてもらう。模擬戦開始は午前9時からだ。時間に遅れないようにしろよ。場所はこの家の裏庭だ。それじゃあ、今夜はこれで解散！」

そう言っつて真之介は椅子から離れ階段を上っていった。

他のメンバーも大方気持ちの整理が付いた後、それぞれに就寝の挨拶を済ませ自室に戻っていった。

その日の晩、中々寝付けないでいたツナはパジャマ姿のまま、廊下を出てすぐにあるベランダのところで月明かりを眺めながら物思いふけていた。

「はあ〜何だか心配だな・・・俺達・・・この先どうなるんだろ？ちゃんと元の世界に戻れるのかな。」

すると、ツナが左手の握り締めていたツナのボックス兵器、天空ライオンver.v（レオーネ・デイ・チェリーバージョン・ボンゴレ）であるナッツがツナに開けて欲しいと懇願して震えだした。

「ん？何だナッツ、出たいのか・・・わかった、じゃあ出してやるよ。」

そう言うと、ツナは上空のボンゴレリングに炎を灯し、ボックスに注入しナッツを取り出した。

ナッツは外に出ると、直ぐに綱の右肩に居座り、まるでツナのことを励ますかのようにツナの右頬を舐めてきた。

「ははは・・・ナッツくすぐったいよ！でも・・・お前、俺のこと心配してくれてるんだよな・・・ありがと。大丈夫だよ、おかげで少し気分が晴れたよ！」

ツナが笑顔でナッツにそう言うと、ナッツはツナと同じように満面の笑みを浮かべ満足そうだった。

すると、ツナの後から同じように寝付けないでいた一護がやってきた。

「ようツナ！お前も眠れないのか？」

「ああ、一護さん！ええまま・・・一護さんも眠れないんですか？」

「まあな。中々気持ちの整理が付かなくて寝付けねんだ。そういうお前だった同じじゃねえのか？ナッツまで取り出してるってことは、大方ナッツにでも励まされてたんだろ。」

「はははは。一護さんには敵わないですね・・・はい、何だか未来の禍々しい戦いを思い出しちゃうって言うか・・・俺はちゃんと皆を、京子ちゃんを守っていけるのかなって心配なんですよ・・・」

不安そうなツナの様子を見た一護は、鼻で笑うと太鼓判を押すようにな笑みを浮かべツナの肩を軽く叩いてこう言った。

「心配すんじゃないよ、ツナ！お前は強いさ。ただ強いだけじゃねえ・・・守る意思がはつきりしてるものの強さだ。お前は何時だってそうだったんだろ。骸戦でも、ヴァリアー戦でも、白蘭戦でも。思う力は鉄よりも強い。お前にはそいつがちゃんとあるんだ。だから、もっと自信を持てよ。それに、一人じゃねんだ・・・お前の守護者や、そして俺達がいるんだ。安心しろよ！」

「一護さん・・・」

このときはツナは思った。

ああ、この人は本当に強い人なんだと。

自分も一護さんのような人になりたいと。

一護の言葉を聞いたツナはナッツをボックスにしまい、ゆっくりと立ち上がって一護にお礼を言った。

「ありがとうございます、一護さん！何だか俺……やれそうな気になってきました！！」

「そうか……そいつはよかったぜ！！さて……そろそろ寝るか。」

「そうですね！」

一護とツナは一緒に歩き出し、階段のところで一端止まりお互いにお休みを言ったあと自室に戻っていった。

その様子を密かに見ていたリポーンは、今後の一護とツナの様子を楽しみにした。





### 第30話：プレイヤー発表

午前7時。

アイゼンハウアー邸の執事やメイド、料理人は総勢25人分の朝食の準備に奮闘していた。

二階にある一護の部屋では、すっかり疲れきって爆睡している一護と、一護が部屋に戻った際にいつものライオンのぬいぐるみに入れた改造魂魄、コンが躰をたてていた。

幸せそうに眠る彼ら・・・だが、それは実に不快な目覚めへと変貌した。

突然、一護の部屋の外から何やら妙な音が聞こえてきたのを一護は感じ、まだ目が冷め切っていない重そうな瞼を擦りながら不審に思った。

「何だ・・・この音？」

一護がふとドアのほうへ目を向けると、ドアが突然開き外から勢いよく見知らぬ男が一護目掛けて飛び蹴りをしてきた。

「グッモーニンツイツチゴーーーーー!!!!!!」

「へブっ!?!」

突然謎の男に飛び蹴りをされた一護はその勢いでベッドの下へ倒れ

こんだ。

そして、頭をおさえながら事態の確認をしようと前を向いたとき、そこには眼鏡をかけた謎の男の顔が近くにあった。

「おああああああああああ!!!」

「あら、やっとお目覚めのようね一護！本当はサバオリで起こそうと思ったけど、あなたのお父様がよくやるやり方のほうが気分が良いかと思ったんだけど・・・どう、気分は？」

「最悪に決まってんでだろうが!!!っかテーマ誰だよ!?!人が気持ちよく寝てるときに俺の親父みたいなことしやがって、チクシヨ!!!」

一護がかなり不機嫌そうにしてる中、その男は照れちゃって、と言って顔を赤らめたが一護の怒りはさらに募るばかり。

すると、一護の部屋に真之介が入ってきた。

「よう一護！実に最悪な目覚めだな。」

「うるせーよ!!!っかこいつ何なんだよ!?!オカマみたいな口調だし、気持ち悪りーんだよ!!!」

「ああ・・・そいつはじじいの執事で、格闘技の達人・・・セクトウーレ・アモンだ!」

「初めまして・・・そして・・・よろしくねー」

そう言うと、セクトウーレは一護の肩を力づくで押さえ込み一護が必死で抵抗しているにもかかわらず唇を重ねた。

その瞬間、一護は一気に顔を青ざめ生気を抜き取れたような感じになった。

やがて、全員が食堂に集まり各々今日の意気込みや最近怒ったことに関しての何気ない会話を繰り広げ、食事を取っていたが一護一人だけは最後まで食欲が無く青ざめたままだったそうだ。

そして、食事を済ませ準備を整えた後、全員は予定の午前9時よりも早く裏庭に集合した。

そして、午前8時50分に真之介とアイゼンハウアーが一護達の前に姿を現した。

「よし！全員揃ってるな。そんじゃ早速今日の模擬戦の細かなルールを説明するぜ。」

「何でも良いからとっ始めやがれ！俺はいつでもオーケーだぜ！」

獄寺は最初からやる気で満ちていた。

雲雀も横からトンファーを取り出し真之介に早くしろ言ってきた。

「まあそう急ぐなよ。ちゃんと細かなルールを説明しないと、困るのはお前達なんだぞ！」

「ちっ！わかったよ。」

獄寺は舌打ちをして渋々了承した。

そして、真之介は全員に模擬戦の詳細なルールを説明し始めた。

「それじゃあルールを説明するぜ。今回は死神とボンゴレと魔導師のごちゃ混ぜ戦という訳だが、これからバトルフィールドを展開した後、ランダムに選ばれた者たち総勢12人が1から6まであるフィールドに移動してもらい戦う。そして、勝敗をつけたあとで今後の修行方法を決めるというものだ。」

「でもよ真之介……いくら広いこの家でも、流石に戦闘するのはまずいんじゃないのか？」

一護がそう言うと、真之介はにやりと笑い右手の指を鳴らした。

すると、一護達の周りの景色が突然変わりだし、高層ビル群が立ち並ぶフィールドが展開された。

「なっ！？何これ。何で急にビルが出てきたの？」

「一体何をしたの、真之介君？」

突然の事に驚くツナとなのはが真之介に尋ねると、真之介は鼻で笑いこっぴどく応えた。

「超幻覚……。俺が独自に作り上げた高等呪術だ。他人に神経を誤認させることで、あたかもそこにいるような感覚に陥ってしまう

ものだ。言つとくがこれは死神のもでも、霧属性の炎でも、魔法でもない。すなわち、こいつを解けるのは俺だけってことだ。」

「お前……一体何もんだよ……!?!」

一護は真之介の超幻覚に驚く以前に、真之介の存在そのものに驚いていたのだった。

「高層ビルか……ツナ、十年後の世界でやったチヨイスを思い出すな。」

「俺は別に思い出したくは無いけどね……」

リポーンが鼻で笑いそう言うと、ツナはかなり気の抜けた声でリポーンに返答した。

なのは達はいつもやり慣れた雰囲気にな堵した。

一方、一護は何処か浮かぬ顔を浮かべた。

「さあ、取り合えずこれからビルの液晶画面に映し出される対戦表に名前が出るから確認してくれ……まずは第6フィールド……」

そう言うと、一護達の目の前のビルの液晶画面に対戦表が映し出され、第6と書かれたところの対戦相手欄にある顔のイラストが高速で回転し始め、全員は息を呑んだ。

そして、回転が止まり男女のイラストが映し出された。

「対戦相手は・・・スバル・ナカジマ対茶渡泰虎だ！」

「えっ！？私が・・・！？」

「俺が・・・スバルと！？」

その対戦結果を知った了平はかなりそれが羨ましかったのか、スバルに茶渡の対戦にエールを送った。

スバルはただ苦い笑いをしていた。茶渡自身も女性相手にかなり困惑した。

「よし！次だ、次だ。」

液晶画面に映し出される5、4フィードの顔イラストが回転を始め、暫くしてまた止まった。

「第5フィード・・・獄寺隼人对石田雨竜。第4フィード・・・山本武対阿散井恋次だ！」

「なっ！？俺の相手がこんなもやしメガネだと！！！」

「もやしネガネではない！！まったく、失礼だな！」

獄寺は対戦相手である石田がどうも気に入らず、そのように罵声を浴びせたが石田は眼鏡を直して真っ向否定した。

「おっ！俺の相手は恋次さんすか。よろしくっす！」

「おう！こっちこそよろしくな、山本武！！この俺様の強さを見せ

「やるぜ！」

二人はお互いに鼓舞し合い、闘争意識を高めていった。

「次、第3フィールド・・・フェイト・T・ハラウオン対日番谷冬獅郎」

「フェイトさんと日番谷さんが!？」

エリオとキャロはその組合わせに驚いた。

フェイトは日番谷に丁寧な口調でよろしくと言った。日番谷もそれに対し軽くああと言って返した。

「よし!最後の組み分け発表するぜ！」

そう言うと、最後の組み分けが始まり全員は固唾を呑んで見守った。

そして、最後の組み分けが完了し顔イラストが発表された。

第1フィールドで争うのは、一護とツナになった。

「ほう。出来レースみたいだが、順当だな。」

「俺が・・・一護さんと!？」

「まっ、こんなところだな。ツナ、よろしくな！」

「あっ、はい・・・よろしくお願いします。」

ツナはかなりしどろもどろになりながら、一護と軽く握手を済ませた。

すると、残った第2フィールドはというと。

「あの〜真之介君・・・第2フィールドは私なんだけど・・・あのイラストの人誰かな？」

そう、なのはであった。

なのはがそう言うので一護達はなのはの対戦相手のイラストを見てみた。

すつと、それを見た一護は驚きを隠せず真之介に詰め寄った。

「おい、真之介！！何でなのはの対戦相手が斬月のオッサンなんだよ！？」

「斬・・・月・・・誰、それ一護君？」

「俺の斬魄刀だよ、なのは！」

「はぁ？おめえバカか！！刀がどうやって自分の意思で戦うっていうんだよ！！」

獄寺は一護の荒唐無稽な発言に呆れ一護を馬鹿にすると、真之介は何処から取り出したのかは知らない妙な人形を一護達の前に見せた。

一護はその人形を見ると、少し懐かしい気持ちになった。



「お前……それって!？」

「そう……転神体。隠密機動最重要特殊霊具のひとつだ。まあ、もつとも……こいつは俺がそいつを元に改造したものだかな……さっ、一護! さっさとこいつに斬月を刺せ。」

真之介がそう言うので、一護は代行証を使い肉体から飛び出し背中  
の斬月を人形に突き刺した。

すると、人形が光り出してすぐに、一護の隣に長身痩躯の黒装束で  
サングラスのようなものをかけた男が現れた。

死神組み以外の一同はその男の出現に驚き尻餅をついた。

「……久しぶりだな……一護……」

「……オッサン……」

「あの〜ひょつとして……あなたが……斬月さん!？」

恐る恐るなのは尋ねると、斬月は鋭い視線でああと答えた。

他のメンバーは刀からまさか人が出てくるとは到底思っていなかつ  
たらしく、かなりショックだった。

「よし!これで全員だな……それじゃあ、選ばれたもの以外は全  
員用意した観覧席で様子を見てもらう。その後、第一戦でやったも  
の以外で抽選を行う。第一戦組みはモニターに映し出されたファイ  
ルドに移動しろ。午前9時ちょうどに戦闘開始だ。」

真之介の説明の後、なのは達魔導師組みは変身をし、日番谷と恋次は義魂丸を使い死神化し、ツナは死ぬ気丸を使いハイパー化した。

そして、各々がバトルフィールドに移動したあと、他のメンバーも観覧席で六つの映像が映し出されるモニターの様子を見ながら待機した。

「・・・5、4、3、2、1・・・午前9時。それじゃあ、バトルスタ戦闘開始！！」

今此処に・・・壮絶なる3世界の者達の戦いが始まるのであった。



### 第31話：必殺の右腕対巨人の右腕

> i 4 2 1 7 — 7 0 9 <

真之介の超幻覚により作り出された摩天楼が立ち並ぶバトルフィールド。

その六つの場所で、今死神とマフィアと魔導獅の壮絶な戦いが始まるのであった。

その様子をモニターで見守る他のメンバー達。

そんな中、第6フィールドの様子をしきりに気にするティアナ。

見かねたヴィータがティアナにこう言った。

「心配すんなよ。相手がどんなに強くたって、同じ拳を使う者同士の戦いだ……。心配するようない事は起きないさ。」

「……ヴィータ副隊長……」

「おおそつだぞー！茶渡殿は確かに強敵かもしれない。だが、スバルは強い女だ。それを一番分かっているのはお主ではないか、ティアナ！」

ヴィータの言った横から、了平も口を挟んできた。

ティアナは二人に勇気付けられ少し安堵した。

そして、固唾を呑んで第6フィールドの様子を見守ることにした。

「（……………スバル……………頑張りなさいよ！）」

一方、第6フィールド……………土のフィールドでは既に、高層ビルが立ち並ぶ中でスバルと茶渡は互いにかかなりの距離を取って向かい合い戦闘体制に入っていた。

「よろしくお願いします……………スバル・ナカジマー等陸士です。全力でいきますよ、茶渡さん！」

「ああ……………こちらこそ。空座高等学校1年……………茶渡泰虎……………お互いフェアな戦いをしよう。」

そう言うと、茶渡は右腕を変化させいつもの鎧の右腕にした。

それを見たスバルは、一瞬驚いたが直ぐに体制を整えて全速力で声を上げて茶渡に突っ込んでいった。

「おおおおおおお！！！！」

スバルはマツハキャリバーで加速すると、右腕の籠手型アームドデバイス、リボルバーナックルのロードカートリッジを発動させ、ス

ピナーで加速した衝撃波を茶渡に発射した。

「リボルバー……シユート!!」

スバルの攻撃に驚いた茶渡は咄嗟に右手で防御したが、その威力は茶渡自身が思っていたよりも強力だった。

そして、茶渡が怯んでいる隙にウィングロードで背後に回りこみ、スピナーの回転で高めた魔力を右拳を強化させ、茶渡に殴りかかっていった。

「ナツクルダスター!!」

「何!？」

スバルの予想外な攻撃に対して茶渡は咄嗟に霊力の衝撃波で攻撃を和らげようとした。

二つの拳がぶつかった瞬間辺りは土煙が立ちこめ見えなくなった。

観覧席でその様子を窺がっていたティアナと了平はそのハイレベルハイパワーな戦いに啞然とした。

「すごい……これが茶渡さんの実力!？」

「極限何も見えんぞ!!早く二人の様子を見せんか!!」

暫くすると、モニターに映し出された土煙が晴れて辺りが見えるようになった。

二人は一端大きく距離とっていた。

「・・・やるな。女だからと言って少し甘く見ていた・・・。」

「そうですね。女だからなんて思ってたら、簡単にやられちゃいますよ、茶渡さん！」

「・・・ふん、そうだな。なら俺も・・・ここからは手加減なしだ！」

そう言うと、今度は茶渡のほうからスバルに向かっていった。

スバルはその動きにすばやく反応し茶渡の攻撃に迎え撃つことにし、リボルバーナックルのスピナーを高速回転させた。

「マツハキヤリバー!!!」

『プロテクション』

スバルの掛け声と共にマツハキヤリバーはスバルの右腕に防御を展開させ、茶渡の拳を受け止めた。

だが、茶渡の拳は今迄戦ってきた者とは比べ物にもならないくらい重く、直ぐに防御が破壊され咄嗟にスバルはウイングロードで回避した。

「逃がさない。」

そう言うと、茶渡は勢いよく飛び上がりスバルに向けて衝撃波を发射した。

「おおおおおおお!!」

茶渡の衝撃波を何とか回避しようとスバルは必死でウィングロードを走り回った。

そして、どうにか回避に成功した。

「ふゝ危なかった。」

「まだまだ!!」

「えっ!?!」

今度は逆に茶渡がスバルの後に回り込み、その一瞬の隙を狙い衝撃波を発射した。

「『巨人の一撃』エル・ディレクト!!」

茶渡の一撃がスバルの背後に襲い掛かり、攻撃の後衝撃で煙が立ち込めた。

だが、茶渡本人には手応えが無かった。

そして、茶渡が横を見た瞬間に驚愕した。



その目線には僅か数十メートルのビルの欄干でスバルは、両手で練り上げた魔力を左手で保持し、右手で加速つけようとしていた。

「一撃・・・必倒!!!!!!!!!!」

「しまった!!」

「デイバイン・・・バスター!!!!」

スバルは茶渡目掛けて、なのはの必殺技・・・デイバインバスターを撃ち出した。

スバルの撃ったデイバインバスターは見事に茶渡に直撃し、茶渡はそのまま煙をあげながら地面に落ちっていった。

すると、直ぐにスバル自身も地面に降りて警戒した。

一方、モニターでその様子を見ていたティアナは思わずガッツポーズをとって喜んだ。

「スバルの奴・・・あんな技まで隠しておったのか!？」

「ええ、そうよ。あの子の場合、あれはなのはさんのと比べれば攻撃飛距離も短いし、本当に危険なときにしか使わないものだから、めったに見られるものじゃないけどね!」

驚く了平にティアナが丁寧に説明をする。

そして、勝敗はついた・・・かに思えたが、二人の横からルキアが口を挟んできた。

「いや・・・未だ終わってはおらぬ。見ろ！」

ルキアがそう言うので二人はモニターを見ると、そこに映っていたもに二人は言葉を失った。

「・・・・・・・・な、何よ、あれは!?!」

当然、戦いを行っているスバルは二人以上に驚愕し、声が出ずにいた。

スバルの目に映っていたもの・・・

それは・・・

「・・・済まない、隠していた訳じゃないんだ・・・ただ俺はどうしても心の中で相手が女だということに割り切れないでいたんだ。その戸惑いが俺の判断を鈍らせ、お前にはフェアと言っておきながら・・・自分自身が全くフェアでなかったんだ。だが、さっきのお前の一撃で、漸く目が覚めた。どうにかここからは、全力でいけそうだ。」

土埃が晴れると、スバルの目に映ったものは・・・

先程とは明らかに形の異なる腕をした茶渡だった。

「『フラン・テレチャ・デ・ヒガンテ巨人の右腕』・・・これが、俺の右腕の真の姿だ。」



### 第32話：巨人の一撃

スバルの前にその姿を現した茶渡。

その茶渡の右腕のは黒を基調とした、髑髏の様な模様が入った巨大な盾のような形状であった。

その姿をまじまじと見つめるスバル。

「・・・ブラソ・・・デレチャ・デ・・・ヒガンテ・・・!？」

スバルは思わず茶渡の言ったことを復唱した。

そして、ゆっくりとした口調でスバルに向かって茶渡は語りだした。

「俺は本来・・・霊力が元からあったわけじゃなかった。だが、ある時・・・一護が死神として覚醒したことをきっかけに、俺の魂に眠る俺本来の能力も覚醒した。その後、俺は一護と共に仲間を救出するため・・・<sup>ウエコムンド</sup>虚圏と呼ばれる虚が住む世界へと足を運び、そこで俺はこの力を完全に開花させた。どうやらこの力は・・・死神のそれとも、お前の使う魔法でもない。では俺は一体何ものなのか・・・俺は確信した。どうやらこの俺の力は・・・死神よりも寧ろ・・・虚に近いものらしいと」

その説明を驚きを隠せずに聞いていたスバル。

そして、茶渡は徐に巨人の右腕から爆発的な量の霊力を放出し、衝

撃波の発射準備に入った。

「『フラン・デレチャ・デヒガンテ巨人の右腕』……こいつが俺の右腕の真の姿、そしてー」

茶渡の様子を見てスバルはすかさずプロテクションを展開し、攻撃の発生に対処した。

そして、茶渡の準備を整え勢いよく衝撃波を発射した。

「真の力だ」

茶渡は渾身の力をこめて衝撃波をスバルに向けて発射した。

その衝撃波はいとも簡単に周囲の高層ビルを破壊し、破壊されたビルがドミノ倒しのように転がった。

咄嗟に危険と判断したスバルは一端ウィングロードで回避し、出方を窺いながら分析をした。

「くっ！！（凄い……破壊力がまるで違う……私のデイバインバスターとじゃ、比較にならない！！）」

そしてスバルは考えた末、ウィングロードで茶渡の右腕を狙って得意の格闘術、シューティグアーツで攻撃した。

「うおおおおお……！！」

だが、スバルのシューティングアーツは容易く茶渡の右腕に防御された。

スバルはそれを見て驚愕した。

「鈍くなっただか？」

茶渡はそのままの状態です腕から凄まじい衝撃波をスバルに発射し、スバルを数メートル先まで吹っ飛ばした。

スバルはマツハキャリバーのタイヤの吸着機能を利用し、後方のビルの壁に対して垂直方向に走り出した。

すると、いつの間にか茶渡が自分のほうへ右腕を向けてこちらに攻撃しようとした。

「はっ！早い！！」

「おおおおおおおお！！！！」

茶渡の放った一撃により、スバルが走っていた壁は崩壊し凄まじい土埃が辺りにまった。

何とか紙一重で茶渡の攻撃を避けたスバルは、茶渡の衝撃波の威力と反応速度に驚きを隠せずにいた。

「（茶渡さん……なんてパワーなの……おまけに今迄よりも速力が上がってる……！）」

そんなことを考えてるうちに、スバルの真横には既に茶渡が攻撃態勢でいた。

それに気付くとスバルは急いでプロテクションを張ろうとした。

「（やばい・・・防ぎ・・・切れない!!!）」

スバルがプロテクションを張る前に茶渡は全身全霊の力をこめてスバルに向かって勢いよく強烈な一発を浴びせた。

「『巨人の一撃』エル・ディレクト!!!!!!」

茶渡がスバルに向かって巨人の一撃を放つと、辺りは巨大な衝撃波のためにビルのおくつかが崩壊し、あたり一面が何も見えなくなってしまった。

その凄まじい戦闘の様子を観覧席で見ていたティアナ、了平、そしてヴィータは何を言って良いのか分からないでいた。

「・・・・・・・・うそでしょ・・・・・・・・」

「これが・・・・・・・・茶渡殿の真の力・・・だというのか!？」

「まさしくバケモンだぜ、これは・・・」

「あっ!!!スバルは!?!スバルはどうなったの!?!」



ティアナが取り乱す中、モニターから映し出される凄まじい土埃は次第に晴れていき、そして完全に晴れきった光景を見た3人は驚愕した。

そこには、無数に崩壊したビルの真ん中に、完全に腰が抜けてボロボロとなったスバルと、ほとんど無傷の状態の茶渡が立ち尽くしていた。

「どうする……。これでもまだやるか……？」

茶渡はそう尋ねると、スバルは少し涙ぐんだ瞳を輝かせて降参を宣言した。

「……参りました……。降参します……。」

その光景を見たティアナと了平はショックと驚きで頭が真っ白になっっていた。

「……スバルが……。負けた……。!?!？」

「何ということだ……。茶渡殿の拳はあれだけのビルまで破壊してしまうとは……。実に恐ろしい……。!?!?!」

腰が抜けて立てないでいるスバルを見た茶渡は、右腕の姿を元の腕に戻して優しくスバルに手を差し伸べた。

スバルも、茶渡の行為に感謝して、最後は二人で握手をした。

「てへへへ・・・負けちゃいました・・・私の完敗です！」

「いや・・・俺自身も結構危なかった・・・良い勝負だったぞ、スバル。」

こうして、第6フィールド一戦・・・スバル・ナカジマ対茶渡泰虎。

勝者は・・・巨人の右腕を使い圧倒的パワーを炸裂した、茶渡泰虎に決定した。



### 第33話：怒涛の嵐対最後の滅却師

> i 4 2 1 8 — 7 0 9 <

真之介はアイゼンハウアーと共にモニターで第6フィールドの勝敗がつくのをモニターで確認すると、鼻で笑った。

その様子を見たアイゼンハウアーは不思議に思い尋ねてみた。

「何じゃ・・・随分と嬉しそうじゃないか・・・真之介？」

「そう見えるか・・・じじい。」

「ああ・・・まるでこうなることが分かっていたのを知っているかのような表情をしてたからな、お前。」

「・・・ふん・・・そんなんじゃねえよ！ただ・・・夢のハイパーバトルを見られて興奮してるだけさ・・・」

「・・・そうか・・・」

そんなモニターの様子を見て、真之介は心こんなことを思った。

「（・・・もしかしたら、あの二人・・・いや、茶渡と了平とスバルは一緒になって修行したほうが効率が良いのかもしれない・・・）」

一方、観覧席で第5フィールド・・・月のフィールドの様子を窺がっていたリポーンとハルと井上、そして井上の胸の中で満足げな様子でいるコン。

「いよいよ獄寺とあの石田って奴の戦いが始まるな・・・」

「はい・・・。でも、中々二人とも動きませんね・・・」

「石田君も獄寺君も慎重な性格だから・・・相手の出方を窺がっているんじゃないのかな？」

「けっ！何でもいいからとっと始めれば良いくせに・・・ホントみみっちい野郎だぜ！！」

コンはモニターに映る二人の様子を見て、中々戦おうとはしない雰囲気、苛立ちを感じていた。

リポーンは、そんな様子をただ黙ってじっと見つめていた。

そして、場所は変わって第5フィールド。

道路の真ん中で互いに牽制し合い積極的に動こうとしない石田と獄寺。

獄寺は数分続くこの状態に対して額に汗をたらしながら、苛立ちを感じていた。

対する石田は冷静な様子でいつものように眼鏡をくいと直していた。

「おい……いつまでそうしてるつもりだ、てめえ……!!」

「君のほうこそ……いつまでもそうしてたところで何も始まらないと思うけどな。それとも……今になって怖気づいたのかな……獄寺隼人……」

石田の軽い挑発にしびれを切らした獄寺は、ついに怒りの炎を燃やした。

「この野郎!!人の揚げ足ばかり取りやがって……ざけんじゃねえぞ!!!!」

「……お生憎……僕の取り柄は、人の揚げ足を取るることなのさ。それに、君みたいな相手は正直僕も揚げ足を取る甲斐があるっつものだよ……」

「てめえ!!!!!!もう、我慢ならねえ!!!!」

とうとう石田の発言に堪忍袋の緒が切れた獄寺は、懐から計八本のダイナマイトを取り出し、両手に四本ずつ持った。

そして、自動発火させると石田目掛けて投げつけた。

「果てる!! もやしメガネ!!」

六本のダイナマイトは正確に石田目掛けて跳んでいった。

そして、石田のところに行くと同時にダイナマイトは全て爆発した。

だが、これだけで獄寺の攻撃は終わらなかった。

「まだだぜ!!」

そう言うと、今度は先程の倍の数のダイナマイトを取り出し発火させ、黒い煙の上がる石田にのもとへ投げつけた。

「2倍ボム!!」

計十六本のダイナマイトを投げつけると、更に獄寺は懐から計二十四本のダイナマイトを取り出し容赦なく投げつけた。

「そして・・・3倍ボム!!」

二倍ボムとあわせて計四十本のダイナマイトが石田の下へ投げ込まれ大爆発を起こす。

だが、獄寺は念を入れてまた計八本のダイナマイトを取り出した。

「とどめだ・・・ロケットボム!!」

獄寺が投げつけたのは、仕込んだ推進用火薬の噴射であらかじめ決めた方向に2度変化するロケットボムだ。

ロケットボムは爆発して視界の分からない石田のもとへ推進力を上げて飛んでいき、爆発をした。

モニターでその様子を見ていたハルと井上とコンはかなり動揺していた。

「はひ!! 獄寺さんどうしていつもあんなにデンジャラスなんでしょうか!?!」

「石田君……どうしちゃったんだろう……!?!」

「あいつ……容赦ねえな……石田の野郎やれちまったんじゃないか……!?!」

すると、そんな心配する様子の三人に対してリボーンはこう言った。

「いや……まだ終わってねーみたいぞ……お前ら。」

リボーンにそう言われて三人はモニターに映る爆風をよく見てみた。

すると……そこに映っていたものとは。

「どうだ、もやしメガネ! 流石にてめえでも、あれだけのボムを喰らって無事で済む訳じゃねえよな!?!」



爆風がゆっくりと晴れていき、石田の姿が映し出されるかと思いきや、獄寺の目には信じがたい光景が目映った。

「なっ！？何だと・・・！？」

「・・・確かに君の技は強力かもしれない・・・でも、それはあくまでもまともに喰らったらの話だ。ならば、それを喰らわずに上手く対処する方法は無いか・・・あるんだな・・・これが」

獄寺の耳に届く余裕のある石田の声。

そして、完全に爆風が晴れた獄寺の目に映ったものそれは・・・五つの帯で自分自身を縛り付ける石田だった。

そして、ゆっくりとその帯が解かれ無傷の石田が姿を見せた。

「何だよ・・・それ！？てめえ・・・何で無傷なんだよ！？」

「君がダイナマイトを投げる瞬間・・・僕は自分自身に、ギントウ 靈力を溜め込んでいる銀筒を使った捕縛術、グリッ 五架縛を発動させた。」

少し前に戻ると、獄寺が最初のダイナマイトを投げつけた瞬間、石田は銀筒を取り出し五架縛の口上をした。

「銀鞭下りて五手石床に墮つグリッ（ツイエルトクreek・フォン・キーツ・ハルト・フィエルト）、グリッ 五架縛！」

そして、そんなこととも露知らずダイナマイトを投げつけていた獄寺は、かなり呆気に取られてしまった。

「そんな・・・バカな・・・!？」

「やれやれ・・・敵戦力の分析は戦闘の初歩だよ。そんな基本的なことをきちんとなしなから逆に相手に力を利用されるんだよ。もっとも、僕自身は君の能力は大体真之介君から聞いてるから、対処の仕方はごまんとあつたけどね・・・さて」

そう言うと、石田は右腕の袖からキーホルダーなみの大きさをした五角形の滅却十字クインシークロスを取り出し、それを媒介にして特殊な形状の弓を形成した。

「反撃といこうか」



### 第34話：Gの弓矢と銀嶺弧雀

石田の右腕に形成された見知らぬ武器を目にした獄寺は、額に汗を流して石田に尋ねた。

「な・・・何だ・・・そりゃもやしメガネ・・・!?ソレ・・・  
・武器なのか？」

獄寺がそう尋ねると、石田は鼻で笑い形成された銀嶺弧雀を？み、回転させながら応答した。

「・・・『武器か』・・・だって？当然だろう・・・戦士が武器も持たずにどうやって戦うって言うんだい、獄寺隼人。そうか・・・君はまだちゃんと僕の武器を見てなかったんだね。なら、教えておこうか・・・」

そう言うと、石田は徐に銀嶺弧雀の弓を引き・・・それをゆつくりと獄寺のほうへ向けた。

「・・・これが僕の・・・武器・・・霊弓ーー・・・」

そして、動揺する獄寺に向けて石田は銀嶺弧雀の弓を引ききった。

「『銀嶺弧雀』だ」

石田の引いた銀嶺弧雀の矢が獄寺目掛けて飛んできた。

危険を察知した獄寺は咄嗟に嵐のボンゴレ匣ボックスを開匣し、その中に収

められている S I S T E M A C ・ A ・ I ・（スイステーマ シー・  
イー・アイ）に搭載されている嵐属性の炎を帯びたホバーを使い、  
攻撃を何とか回避した。

ホバーで移動しながら獄寺は、銀嶺弧雀を撃つた場所を見て驚愕し  
た。

思った以上の威力を残し地面はひび割れて、獄寺自身も回避してい  
なかったらかなり危なかったと認識するほどだ。

「はっ、はっ……くそ……ッ。あのもやしメガネ……なんて  
モン……使いやがる……！」

「……これが S I S T E M A C ・ A ・ I ・（スイステーマ シ  
ー・イー・アイ）に搭載されている移動用のホバーってやつかい？」

「なっ！」

獄寺はホバーで滑空している自分の直ぐ横を見て驚いた。

自分と違い移動手段となる乗り物を持っていないにも関わらず、石  
田が自分の移動する速さ以上の速度を足だけで出して、そのまま自  
分の真横にしていた。

「遅いね……意外と。」

「んなバカなっ……！！ボックスも使わずに普通の人間がこの速  
度以上のスピードで移動してくるなんて……」

「悪いね。生憎僕はただの人間じゃない……『滅却師』さ。これは『飛廉脚』<sup>ひれんきゃく</sup>という滅却師の高速歩法でね……個人的には、死神の瞬歩（高速歩法）よりも上だと思っっているよ。」

余裕の表情を獄寺の直ぐ隣で見せる石田。

それに対して獄寺は聞き慣れない単語に動揺するばかりだった。

「滅却師だと……！？何だそれ！？知らねーぞうんなもん！！どつかのパンの名前か！！」

その言葉を聞いた瞬間、石田の表情は曇り些かの怒りを覚えた。

「知らない……だけならともかくとして……パンの名前と同じにされるのは心外だな。」

「んだと！！てめえ……調子に乗るんじゃないぞ！！」

獄寺はそう言うと、左腕の赤炎の矢に嵐<sup>フレイムアロー</sup>+雨の弾丸を装填し、貫通力が高い矢をセットし石田に撃ってきた。

「喰らえ！フレイムアロー！！！」

獄寺がフレイムアローを放つと同時に石田は瞬時に飛廉脚で高速移動し攻撃を回避した。

それを見た獄寺はホバーを小回りさせて石田のほうへ矢を撃ち続けた。

「逃がさねえよ！！フレイムアロー！！！」

石田は飛廉脚で移動しながら器用に獄寺の矢をかわし、止まっては銀嶺弧雀で獄寺目掛けて矢を放った。

獄寺はボツクス兵器以外の見知らぬ武器を使い、高速で移動する石田の攻撃方法に戸惑っていた。

モニターでその様子を見ていたハルは目が点になっていた。

「はひ！！石田さん・・・あんなに早く移動できるんですか！？まさにミステリーです！！」

ただただ石田の様子を見て驚くばかりのハルに対して、リボーンは冷静にモニター画面を見つめ、徐に井上に尋ねた。

「織姫・・・石田が言っていた滅却師っていうのは・・・何だ？」

リボーンがそう尋ねると、井上は少し言いずらそうな表情を見せ、徐に重い口を開けた語りだした。

「・・・前に知り合いに聞いた話なんだけど、滅却師っていうのは・・・死神によって滅ぼされた一族なんだ。」

その発言を聞いたリボーンとハルは二人揃って驚きを隠せずにいる。

「死神によって滅ぼされた・・・って・・・どういうことなんです、織姫さん！？」

「うん・・・元々滅却師っていうのは、虚と闘うために集まった霊

力を持つ人間の集団で、人間を襲う虚を死神の住む世界・・・尸魂界へ送ることを良しとせずあくまで虚を消滅させることを目的とした。その行動が尸魂界と現世にある魂魄の量を乱し世界の崩壊が危ぶまれる事態になったため、虚を尸魂界へと送ることを目的とした死神と徹底的に相反し、結果200年前に死神の手により滅ぼされた・・・石田君はその生き残りなの・・・」

織姫の話の聞いたりボーンとハルは言葉が出ずにいた。

リボーンは織姫の話の聞き終えると、黙って帽子を深く被りなおした。

その頃、第5フィールドで繰り広げられる獄寺と石田の戦闘は石田のほうに軍配が上がっていた。

獄寺が肩で息をしボロボロになっているのに対して、石田は以前無傷のままの状態だった。

「どうしたんだい・・・すっかり息が上がっているようだね・・・獄寺隼人。」

「はっ、はっ、はっ、うるせーよ!!--」

「やれやれ・・・相変わらず口が悪いね君は。君を見てるとまるで黒崎のことを思い出すよ。」

「ざけんじゃねえー!!あんなオレンジ頭の奴と一緒にされてたま



るかよ!!」

「へえ……意外とまともな感情だね。どうやら黒崎よりは賢いよ  
うだね……」

「何だと!! てめえ!!!」

「それより……いい加減隠さずに見せてみ給えよ……君にだつ  
てあるはずだよ……弓が。」

「なっ!?!」

石田の意外な発言を聞いた獄寺は驚愕した。

自分のことだけでなく、自分のボンゴレ匣の詳細なことまで知っ  
ているという事実には。

「知っているよ……君のボンゴレ匣であり君の唯一の弓である……  
アーチェリー  
・Gの弓矢を。」

「てめえ……俺のボンゴレ匣のことまで知ってるのかよ!?! いい  
だろう……てめえがそんなに言うなら、望み通り見せてやるぜ……  
・瓜!!」

そう言うと、獄寺の左肩に乗っていたボンゴレのエンブレムを額に  
象った、嵐猫Ver・Vである瓜が獄寺の声に反応し、フレイムア  
ローの上に乗った。

「カンピオ・フォルマ  
形態変化だ!!!」

そう言つと、瓜はゆっくりとフレイムアローと同化していき、初代嵐の守護者が使用した武器へと変貌した。

「アーチエリー Gの弓矢!!」

その姿を目撃した石田は眼鏡を直し、鋭い目線で獄寺の弓矢を見つめていた。

「……それが……か……」



### 第35話：弓矢の果てに

獄寺の左腕に形成された巨大な弓矢……嵐のボンゴレ匣兵器、G  
アーチェリー  
の弓矢。

石田は冷静に獄寺の弓を見ながら、攻撃の出方を窺がっていた。

「……成る程……これがGの弓矢……。やはり実際に見るほうがスケールも迫力も違うか……」

「悠長に分析してるみたいだが……。それも此処で終わりにさせてやる……」

そう言うと、獄寺はGの弓矢を石田に向けてフレイムアローの数倍の威力を持つ赤い炎の矢を放った。

「喰らいやがれ！ 『赤竜巻の矢』トルネード・フレイムアロー！！！！」

「来たか……」

獄寺の放つトルネード・フレイムアローを見た瞬間に石田は飛廉脚で高速移動し、その移動の最中にトルネード・フレイムアローの破壊能力を目の当たりにした。

「（……成る程……破壊力は通常のフレイムアローの数倍はあるな。その上、彼には計五属性の死ぬ気の炎があるから、炎を組合わせたトルネード・フレイムアローを撃ちだすこと可能……迂闊

に手を出すわけにはいかないな・・・なら！」

すると、石田は獄寺と一端距離を取って銀嶺弧雀の矢を放った。

それに対して、獄寺もすかさず炎の矢を放つ。

「てめえの攻撃は喰らうかよ！ガトリングアロー！！」

Gの弓矢から放たれる無数の炎の矢により、銀嶺弧雀の矢はすべて打ち落とされた。

それを見た石田は、困惑することなく飛廉脚で移動し、獄寺の背後を狙う。

「何！？後か！！」

それに気付いた獄寺は瞬時に後に振り返り、雨属性の炎を練り合わせたトルネード・フレイムアローを放つ。

「果てる！！！」

石田の矢と獄寺の矢が同時に放たれると、二人の周りは瞬間的に爆風で見えなくなってしまうた。

モニターでその様子を見ていたりポーン、ハル、井上、コンの四人は二人の互角と言えるような戦いに目が放せないでいた。そして、コンが思わず口を開いた。

「……す……スゲーじゃねえか、あいつ!!石田の攻撃とほぼ同等……いや、破壊力ならあいつのほうが上かもしれねえ!!」

「凄い……石田君も獄寺君もお互いに負けるつもりは無いみたいだね……」

「はひ!!まさに熾烈を極めたマキシмумバトルロイヤルですつ!!」

「……」

何も語らず沈黙しているリポーンを見て、徐に井上が尋ねた。

「どうしたのリポーン君?さっきからずっと黙ってるみたいだけど……」

「……確かに、獄寺の攻撃は石田の弓と同等かそれ以上かも知れねえ……でも……」

「うん?でも……何……!?!?」

「獄寺の奴……ちょうしに乗って相手の力を図り間違えてやがるな……」

リポーンが危惧するように、石田の矢をさっきとは違い全て打ち落とすことに成功している獄寺は、有頂天となって石田の力そのものを図り間違えていた。

「どした、どした、もやしメガネ！！てめえの攻撃はその程度かよー！！」

すると、今度は石田よりも先に獄寺のほうで雲属性の炎を練り合わせて矢の数を増やし石田に攻撃を仕掛けた。

石田もすぐに反応して、銀嶺弧雀の矢を放つ。

雲属性の炎を練り合わせたトルネード・フレイムアローと、銀嶺弧雀から放たれる矢は互いに拮抗していた。

「・・・はっ！全部のトルネード・フレイムアローを撃ち落とそうって訳か！単純明快だな！幼児のようだが、もやしメガネ！」

獄寺は先程は逆に石田のことを罵倒し、余裕の表情を浮かべながら矢を放つ。

「まあ・・・せいぜい頑張れよ！だが一つ教えておくぜ！俺のこの雲属性の炎を練り合わせたトルネード・フレイムアローの連射段数は、100発！いくらてめえの武器の性能がよくても、そこまでの連射段数なんかねえだろ！！さあ・・・どうす・・・」

「・・・そうか・・・それは良かった・・・」

石田の発言を聞いた獄寺は腑に落ちないでいた。

すると、そんな獄寺に石田がさらに続けて話を進めた。

「それじゃあ僕も一つ教えておこう・・・僕の銀嶺弧雀の連射段数は・・・」

すると、石田は口元を緩ませて余裕の表情で獄寺にこう言った。

「1200だ」

「なーーーーー……」

その瞬間、1200本の銀嶺弧雀の矢がトルネード・フレイムアローを突き破り、獄寺目掛けて飛んできた。

獄寺はその光景を見た瞬間頭が真っ白となった。

そして、獄寺は呆気なく1200本の矢を受けてしまった。

攻撃が通ったのをモニターで見っていたリボンや他の3人、そして真之介とアイゼンハウアーはその光景に驚愕した。

「……バカ寺め！調子に乗って冷静さを失いやがって……」

リボンは案の定こうなることを分かっていたのが、攻撃を見事に喰らった獄寺のことを罵り帽子を深く被った。

「ほほ……随分と呆気ない終わり方だったな……」

「まあ……獄寺は所詮人間相手に戦ってきた奴だ。対して石田は虚や破面アラシカルといったバケモノと戦ってきた身だ。能力的にも経験的にも、そして頭腦的にも獄寺とじゃ比にならねーよ！」



「しかし・・・流石にあれはまずいんじゃないのか、真之介！？あれじゃ、獄寺君死んでしまうぞ？」

アイゼンハウアーがそう危惧すると、真之介は瞼を閉じてこういった。

「心配スナよ・・・。石田もプロだ。ちゃんと死なない程度に加減して攻撃してるはずだ。見る！」

真之介がそう言っただけでモニターを指差すと、モニターには銀嶺弧雀を解いて立ち尽くす石田と、銀嶺弧雀の矢を喰らい地面に固定されて身動きの取れずに気絶する獄寺と瓜がいた。

「やれやれ・・・君はもっと賢いと思っていたが、とんだ勘違いだったよ。君の敗因は、もっと冷静に相手の戦力を見極められなかったことだよ。君のような友人を持つと、ボンゴレX世（綱吉君）もさぞ大変なことだろうな・・・」

第5フィールド・・・獄寺隼人对石田雨竜。

勝者は、冷静な判断力で相手の攻撃を見極め勝利を収めた・・・石田雨竜となった。

石田はそのまま獄寺を放置してその場を後にした。

その様子をモニターで確認した後、リポーンは直ぐに第4フィール  
ドの観覧席に移動した。



### 第36話：燕と野良犬

> i 4 2 1 9 — 7 0 9 <

リポーンは獄寺の模擬戦を見終わると、直ぐに第4フィールド・・・火のフィールドで行われる山本と恋次の模擬戦を観覧するために第4観覧室に足を運んだ。

部屋には、六課でスターズの副隊長を務めたシグナムと雲雀が腕組みを師ながら見守っていた。

「ちゃおつす！どうだ・・・様子は？」

「赤ん坊・・・これから始まるみたいだよ・・・あの二人の戦い・・・」

「同じ剣士として、この模擬戦は実に興味深いな。山本の腕は先刻の戦いでその一端は見ているが、阿散井のほうはまだ十分に見えないからな。」

「まあ、いずれにしても・・・山本の奴がどの程度あいつに太刀打ち出来るか・・・それが一番の見ものだな。」

一方、山本と恋次はお互いに刀を抜き一定の距離を保ったまま会話を挟んでいた。

「こうしてお前と剣でやり合う日が来るとはな・・・お互い、悔いのないようにしようぜ・・・」

「そうっすね！俺もあんたの実力を見れるの・・・スッゲー楽しみっすよ！」

「いい根性だぜ・・・六番隊に欲しいぐらいの人材だな・・・いくぜ、山本！！」

「ええ！！俺も全力であんたを倒すぜ！恋次さん！！」

すると、山本は時雨金時に雨属性の炎を灯して全速力で恋次に向かっていった。

恋次もそれを迎え撃つように刀を構えた。

山本は走りながら、まず恋次の攻撃を窺がうために技をひとつ出した。

「時雨蒼燕流・・・攻式一の型 『車軸の雨』！」

山本は恋次の正面目掛けて刀を両手で持ち突進していった。

すると、恋次もそれに即座に反応し自分の刀を体の前に出し攻撃を回避する。

山本は恋次の超絶な反応速度に驚く。

「な……!？」

「大した刺突<sup>つぎ</sup>だ……。だが、その程度の攻撃じゃ……。俺の身体に傷をつけることは出来ねえ！」

恋次はそう言つと瞬歩で山本の前から姿を消した。

「き……。消えた……。!？」

そして、山本は後に殺気を感じ瞬時に自分の後を振り返つて刀を向けると、案の定恋次が背後から襲つてきた。

「ほう……。大した反応だぜ！ますます惜しい人材だぜ！まさか、俺の瞬歩にまで反応するとはな……」

「瞬歩……。!??さっきの瞬間移動か!？」

「ああ。死神にしか仕えない高速歩法だ。本来は人間相手に使うような代物じゃないが、てめえには特別サービスだ。存分に俺の瞬歩を見せてやるぜ！」

そう言つと、恋次はまた山本の前から瞬歩で消えた。

それに動揺する山本。

山本は刀を両手でしっかりと握り、神経を研ぎ澄ませて恋次の殺気を感じ取る。

「……。わかった!!！」

殺気を感じ取った山本は恋次の殺気のする方向目掛けて全速力で駆け出し雨属性の炎を纏った時雨金時を激しい勢いで前方に鋭い刺突を繰り返した。

「時雨蒼燕流……特式十一の型」  
『ベツカタ・ディ・ローンディネ燕の嘴』!!!」

すると、先程まで何もいなかった場所に恋次が姿を現し山本の攻撃に驚きつつも、力づくで山本の攻撃を回避した。

そして二人は互いにその反動で飛ばされ距離を取った。

「やっぱ強え……凄まじい殺気は伊達じゃないな！」

山本は実に嬉しそうな表情をしていた。

それを見た恋次も顔が緩み思わず高笑いを上げた。

「ははははあはははははは！おもしれーぞ！一護と戦ったとき以来だな、こんなに面白いと思ったのは！気に入ったぜ、山本。俺も護廷十三隊六番隊副隊長として、剣士に恥じないような戦いをしてやるぜ！」

「そうこなくっちゃな！でねえとこっちも……倒す甲斐が無いぜ！」

「ふふ……俺を倒すとは……随分デケー口を叩くな。言っておくが……そいつは俺の科白だぜ……」

そう言うと、恋次は構える山本にまっすぐ刀を向けてこう言った。

「俺が戦いを教わった人からの流儀に、倒す相手には名を名乗るって言うのがある。戦いに死ぬと決めた奴なら・・・倒す奴の名くらい、知って死にてー筈だったって言うのが自論だ。」

「・・・・・・・・・・」

「護廷十三隊、六番隊副隊長・・・阿散井恋次！てめえを倒す、男の名だ！！」

それを聞いた山本は、その言葉に歓喜を示し口元を緩めた。

「・・・・・・・・いいぜ・・・その科白、そっくりこつちから返すぜ。ボンゴレファミリー十代目雨の守護者、山本武・・・あんたを倒す、男の名だ！」

そうやって山本と獄寺は一斉に走り出し、斬りかかって行った。

果たして、この剣と剣とのぶつかり合い・・・どちらのほうに軍配が上がるのか・・・

その光景をモニターで見ていたシグナムも、恋次の言葉に刺激されたのか・・・自身の剣であるレバンティンを握り締めて歓喜の振るえを見せていた。

「ふん・・・・・・・・・・私も早くあやつらと本気で戦ってみたいものだ



な・・・」

「ふん・・・」

闘志を燃やし、早く戦いたいと懇願するシグナムと壁に腰をかけたまま腕組みをし続ける雲雀。

そして、モニターで二人の様子を見て鼻で笑うリボン。

「どうやら・・・こいつは想像以上におもしろい戦いになりそうだな・・・」

その頃、同じように第4観覧室に向かい足を運ぶ真之介とアイゼンハウアー。

「えーと・・・確か今度は山本君と恋次君の試合だったか・・・？」

「ああ。同じ刀を使うもの同士、色々面白い展開になりそうだけだな・・・」

「じゃが・・・いくら山本君が強くても・・・人間と死神ではレベルが違いすぎるぞ。」

「そりゃそうだ・・・なんせ恋次あいつには、普通の剣士じゃ考えもしないようなもん持ってるんだから・・・」

そんな会話をしながら二人は第4観覧室へ向かっていった。



### 第37話：朝利雨月の変則四刀

第4フィールド、火のフィールドでは今も尚激しい二人の剣士による鐔迫り合いが繰り広げられていた。

何度も響き渡る刀の金属音。

それが、戦いの激しさを物語っていた。

「いいぜ！いいぜ！最高だ山本！！！」

「ああ！俺も今最高に楽しいぜ、恋次さん！！」

正面から斬りかかっていく山本と恋次。

すると、先に動いたのは恋次だった。

瞬歩で山本の前から消え動揺を誘った。

「また消えたか……」

山本は感覚を目を瞑り研ぎ澄ませて、恋次の殺気を後のほうから感じ取った。

「後か！！」

即座に恋次の剣に対応する山本。

すると、さらに恋次は瞬歩で移動し山本の動きを怯ませようとする。

「本体は……」

恋次は山本の背後から高い位置での斬撃を行おうとし、飛び掛っていった。

「ほおおおおお!!」

「くっ!!」

何とか反応して恋次の斬撃を受け止めた山本。

そしてそのまま山本は技の体制に入った。

「時雨蒼燕流……攻式五の型 『五月雨』さみだれ!!」

山本は通常の剣術で言うところの中斬りを放ちながら、刀を素早く持ち替え、恋次の守りのタイミングを狂わせる変幻自在の斬撃を放った。

恋次はどうか山本の斬撃を瞬歩でかわし、山本から前方に距離を取った。

「やっぱりそう簡単にはいかないか……流石は副隊長だぜ……!」

「褒め言葉として受け取っとくぜ。だが……さっきも言っただろ、今のためえの力じゃ俺は倒せねえ!見せてみるよ……ためえの本

当の実力をな・・・スクアーロや幻騎士を破った、てめえの真の実力をな!!」

恋次の最後のあたりで発した言葉に思わず山本は驚愕した。

そして、頭の中で今まで自分が戦ってきた強敵の数々を思い出し、そして再びそれを胸にしまいこんで恋次のもとへ鋭い視線を向けた。

「じゃあ・・・もし、恋次さんが俺に片膝つかすことが出来たら・・・見せてやってもいいぜ!」

その挑発的な態度に恋次は一瞬頭の中で、自分の目指すべきものの顔が思い浮かんだ。

そして、目標の姿と山本の姿を重ね合わせ、その誘いに乗った。

「いいぜ・・・だが、その代わりこっちも容赦はしねえ!!」

そう言うと、恋次は右手の掌を山本に向けた。

山本は一瞬何をしようとしているか見当がつかなかった。

「破道の三十一・・・『しゃつかほう赤火砲』!!」

恋次がそう言うと、恋次の右手から灼熱の赤い色をした火炎弾が山本目掛けて飛んできた。

山本はそれを見て咄嗟にボックス兵器である渦転斬カテンザを開匣した。

それと同時に大量の水が噴出して水のバリアを張り、恋次の赤火砲を打ち消した。

そして、その隙に山本の背後に回った恋次は山本目掛けて斬りかかって来た。

「もらった!!!」

「まだだぜ!!!」

そう言う山本の顔は笑っていた。

そして、恋次は山本を確かに斬りかかった。

だが、恋次が斬ったのは山本の作り出した雨属性の幻影だった。

「なっ!?!?幻影・・・だと・・・!?!?」

「時雨蒼燕流・・・攻式九の型 『うつし雨』!!!」

山本は逆に恋次の背後を取り、恋次の刀目掛けて全身全霊の力を込めて斬撃を与えた。

恋次はその斬撃を喰らい、山本から距離を取ると、突然全身感覚と両腕の感覚に異変を覚えた。

「何だ・・・手が・・・痺れる・・・!?」

「今の太刀は、アタックコ・デイ・スクアード鮫衝撃つてな・・・暫く痺れて動けないぜ。全身の感覚も鈍くなってるんだろ。衝撃と共に、雨の鎮静の炎を流し込んだ強化版だからな！」

「くっ!」

「どうやら俺の片膝はつかせそうにないっすね、恋次さん。悪りーけど・・・終わらせるぜ！」

すると、山本は右手に光る雨のボンゴレリングに炎を灯し、時雨金時にそれを灯した。

「ひとつ教えておくれ、恋次さん！俺の時雨蒼燕流は・・・完全無欠・最強無敵の剣だぜ!!」

そして、山本は通常ローンディネ・デイ・ピオッシュヤの雨燕を取り出し、恋次に向かって雨燕を前衛に構え、水をえぐるように巻き上げながら突入していった。

「時雨蒼燕流・・・特式十の型 スコントロ・デイ・ローンディネ『燕特攻』!!!」

それを見た恋次の顔は不安の表情でいっぱいだった。

山本は笑いながら恋次のほうへ突き進み勝負をつけようとした。

モニター画面のシグナムも、これで決まりだと確信していた。

だが、その予想は容易く碎かれることになる。

山本の目の前に突然謎の透明な壁が立ち塞がり、山本は突然出てきた透明の壁に顔を激しく叩きつけられそのまま数メートル後に飛ばされた。

「な・・・に・・・!?!?」

「縛道の八十一・・・『断空』<sup>だんくう</sup>。こいつは鬼道って言ってな・・・死神しか仕えない高等呪術だ。もつとも、俺はあまり鬼道は得意じゃないから、実践でこんな上級レベルの鬼道なんざ出せたためしがないがな・・・だが、どうやら今回はどういう訳か出来ちまったみたいだぜ。それより・・・片膝以上に倒れちまったな、山本!」

恋次がそう言うと、山本は悔しそうな目つきでゆっくりと刀を使って立ち上がる。

「やっぱり強えつすね、恋次さん!ここまで俺を追い込んだんだ・・・約束通り、見せてやるぜ!」

山本は懐から兩属性のボンゴレ匣を取り出し開匣した。

その中から出てきたのは、額にボンゴレのエンブレムを象った雨犬 Ver・V (カーネ・ディ・ピオツジャ バージョンボンゴレ) と、雨燕 Ver・V (ローンディネ・ディ・ピオツジャ バージョンボンゴレ) だった。



山本は雨犬の次郎が運搬する雨属性の小刀3本を取り出し、雨属性の炎を纏い刃そのものを巨大化させた。

そして、雨燕の小次郎の名を叫んだ。

「いくぜ・・・小次郎、カンジオ・フォルマ形態変化!!」

そう言うと、小次郎は時雨金時と合体してボンゴレの初代雨の守護者が使用した長刀へと姿を変えた。

「朝利雨月の変則四刀!!」

その姿を間近で見た恋次は、体の奥底から感じる喜びのざわめきを抑えきれずに刀を握り力が強くなった。

「・・・よつやく、姿を現しやがったか・・・」



### 第38話：蛇尾丸

山本はボンゴレ匣である雨燕Ver.V（ローンディネ・ディ・ピオツジャ バージョンボンゴレ）を形態変化させ、初代雨の守護者が使用した長刀と三本の小刀である武器・・・朝利雨月の変則四刀を恋次の前に姿を現した。

「そいつが・・・てめえの真の力が・・・」

「ああ。こいつが俺の真の力・・・朝利雨月の変則四刀だぜ。恋次さん！」

山本は恋次に自信満々な笑みを浮かべ、恋次の闘争心をあおろうとした。

だが、山本がそうする以前に、恋次の闘争心は既に昂ぶっていた。

一方モニターで山本の様子を見ていたシグナムは、突然長刀へと姿を変えた時雨金時を見て、リポーンに尋ねた。

「リポーン・・・あれは何だ・・・山本の時雨金時が長刀へと姿を変えたぞ・・・!?」

「あれは山本のボンゴレ匣であり、初代雨の守護者である朝利雨月が使用した、朝利雨月の変則四刀だ。」

「朝利雨月・・・!?!?」

「ああ。日本人で、ボンゴレI世とは友人関係にあった。奴は剣の腕に秀でており誰もが認めるほどの腕前だったが、本人は音楽をこよなく愛し、自身の剣は一本として持たなかったという。だが、一度ボンゴレI世の危機を聞きつけた際には何のためらいもなく大切な楽器を売り、それを元手に旅費と、そして長刀1本と小刀3本を用意し、I世の元に駆けつけたとされている。」

「それが・・・あの四本の刀という訳か・・・」

「ああ。ちなみに・・・守護者になった経緯や顔立ちは、山本にそっくりだったそうだ・・・」

そして、リボーンの話聞き終えたシグナムは再びモニターに映し出される山本と恋次の姿を見守っていた。

そして、先に動いたのは恋次だった。

恋次は瞬歩で山本の正面ギリギリに入り込み、山本に怒涛の剣戟を与えながら、鬼道を放つ。

「破道の十一『綴雷電』!!!!」

すると、恋次の刀から山本の時雨金時に沿って、電撃が放たれた。

「くっ、何だこれ!? 痺れるぜ!!!!」

山本は咄嗟に三本の小型の炎圧を逆噴射して、空中に飛び上がった。すると、恋次自身も高く飛び上がった。

「空を飛べるのは・・・てめえだけじゃねえ!!」

恋次は山本にいる方向目指して大きく跳躍をした。

山本は常人離れた恋次の跳躍力に驚愕した。

「なっ!?! なんつつ跳躍だ!!」

「はああああああああ!!!!」

恋次は地上で行った剣戟を空中でも山本に容赦なく浴びせた。

次第に体制を崩していく山本と、それを追い詰めようとする恋次。

だが、山本自身もまだ諦めてはいなかった。

「やるっすね・・・でも、俺も未だ負けちゃいないぜ!!」

そう言うと、山本は時雨金時で水を回転するように巻き上げ恋次の攻撃を防ぐ。

「時雨蒼燕流・・・守式七の型 『繁吹き雨』!!」

それにより恋次の怒涛の剣戟は弾かれた。

山本は即座に攻撃の態勢に入り雨の炎で加速し恋次に向かっていった。

「時雨蒼燕流・・・八の型 『篠突く雨』!!」

「何!？」

山本は恋次の懐に炎の最大加速で飛び込み鋭い斬撃で突き上げる。

恋次は咄嗟に刀で防御し、そのまま霊子で足場を作り空中にとどまった。

それを見た山本は、かなり衝撃を受けた。

「へえー!。死神っていうのは、空中でも戦えるって訳か!やっぱスゲーな!!」

「まあな・・・死神は自分の足元に周囲の霊子を集めて足場にすることが出来る。これくらい訳ないぜ!」

「なるほど・・・じゃあ、その状態で止めを刺してやるぜ!」

すると、山本は小刀三本全ての炎圧フルパワーで利用して恋次の懐に突進して行った。

恋次はそれに迎え撃つため刀を両手でしっかりと持った。

「時雨蒼燕流・・・総集奥義・・・」

モニターでその様子を見ていたシグナムは、山本が繰り出そうとしている技に興味津々だった。

「一体・・・何を繰り出そうとしているのだ・・・山本は!？」

「ふん・・・そいつは、おめえがきつとびっくりするもんだぜ。」

業の詳細を知っているリポーンは、鼻でそう笑いシグナムの好奇心を更に仰いだ。

山本は恋次が捉えきれないくらいの速さで恋次の刀目掛けて凄まじい剣戟を食らわした。

恋次もそれに対して同じように剣戟をするが、恋次の剣戟の速度が弱まり威力が落ちてきた。その技の名は・・・。

「『時雨之化』!！」

時雨蒼燕流の全てのまとめの型。

変則四刀と時雨蒼燕流を使い、相手の攻撃全てに当てることで、攻撃のスピードを遅くすることが出来る。

恋次がそれに気付いたときには、時既に遅く・・・勢いに負けてそのまま地面に向かって凄まじい勢いで叩きつけられた。

「よっしゃ！いっちょ上がり！！」

山本は恋次を地面に叩きつけた後、思わず右手でガッツポーズを取った。

そしてそのままゆっくりと地面におり、土煙が立ち込める恋次の周辺を警戒した。

一方、モニター画面でその様子を確認したシグナムもその攻撃に驚愕し、左腕を強く握りしめた。

「こいつは・・・山本の勝ちだな。あれだけの攻撃を喰らって、その上あの高さから落ちたんじゃ・・・恋次の奴もくたばってるだろうぜ、シグナム。」

「そうだな。阿散井も確かに奮闘したが・・・ここはやはり、山本のほうが一枚上手だったってことだな・・・」

すると、第4観覧室に真之介とアイゼンハウアーが入ってきた。

そして、真之介は深い溜息をはいて、リボンとシグナムにこう言った。



「甘いぜ、お二人さん！恋次のうたれ強さは伊達じゃねえんだぞ・・・それに、あいつはまだ山本に見せてないもんがあるんだぜ・・・」

「見せて・・・いないもの・・・だど!？」

気になったシグナムとリボンが改めてモニターを見ると、そこに映っていたのは・・・ぼろぼろになりながらも立ち上がる恋次の姿だった。

その様子に、流石の三人も震え上がった。

「おいおい・・・マジかよ!？あの攻撃を喰らって、しかもあの高さから落ちて無事だなんて!？」

「バカヤロー・・・無事な訳ねーだろうが!!確かに今の一撃は効いたぜ。お陰で身体中が悲鳴を上げてやがる。時雨金時・・・そいつがてめえの刀の名だったな・・・」

「ああ・・・時雨金時。俺が親父から受け継いだかけがえのない相棒だぜ!！」

「・・・そうかよ・・・だったら今度は、俺の刀の名も聞かせてやるぜ。」

そう言うと、恋次は自身の刀を右手で持ち左手で刀身を軽く手で添えるようにした。

その光景を見ていた山本、シグナム、リボーンは固唾を呑んでその様子を見守った。

「咆える・・・『蛇尾丸』！！」

恋次が左手で軽く刀を滑らせた瞬間に、恋次の刀は能力解放と共に刀身にいくつもの節を持ち、伸びて蛇のようにしなる蛇腹剣の形状に変形した。

それを見た山本、リボーン、シグナムの三人は驚愕を飛び越え絶句した。

「か・・・刀の形が!?!」

「でああああああああああ!!」

そう言うと、恋次は蛇尾丸を山本目掛けて伸ばした。

山本は予想外の攻撃に咄嗟の対処が遅れ、蛇尾丸の力に押し負け数十メートル先のビルまで飛ばされ、山本はそのままビルの壁に直撃し、その圧倒的な威力でビルの壁はいとも簡単に破壊され、山本はそのまま気絶してしまった。

「悪りーな・・・斬魄刀まで解放しちゃって。だが、そうでもしねーと、この勝負は正直やばかったぜ!」

第4フィールド・・・山本武対阿散井恋次……

その勝者は、土壇場で斬魄刀を解放し、圧倒的なパワーで山本を気絶させた、阿散井恋次となった。

リボンとシグナムは、暫くの間目を見開いたまま声も出せずにいた。





「なのは！何があった!?!」

一護が一目散になのはの部屋に入ってみると、一護は一瞬啞然とした後物凄い剣幕を浮かべコンに殴りかかっていた。

「くらーーーー!!!!!!」

「いやーーーー!!!!!!」

その瞬間、なのはや部屋の外のツナ達はあまりに理不尽な暴力に目を瞑った。

そして、再び目を開けて飛び込んできたのは、ぬいぐるみにしては青いあざや瘤が多い姿となった惨めなコンだった。

一護は、それを右手で持ち済まなかったとなのはに一言言って部屋を出て行った。

「……ははは……何だっただらう……。一体……!?!」

「けど、なのはさん。またあの変なライオンが忍び込んでくるかもしれないから、戸締まりは用心したほうがいいですよ!」

スバルがそう提案してきたので、なのはもうん。十分気をつけるよ

うにするよ、と言つて了承した。

「あつ！でも寝る前にトイレ行つておこつかな・・・何処にあるか分かるかな、みんな。」

「トイレでしたら、廊下を出て右の奥にありましたよ！」

なのはに質問に無駄に甲高い声でハルが答えた。

それを聞いたなのはは軽く礼をした後、少し小走りになってトイレに向かつていった。

この時、なのはがトイレから戻るまでおよそ15分の間があった。

なのはがトイレから戻つて来る頃には、一同は全員また自室に戻つていた様子だった。

なのはは今度コンが入ってくることを恐れ、先程よりも念入りにドアノブの鍵をチェックし、コンが来ていないことを確認した後、またベッドに戻つていった。

そして、安堵の気持ちのまま再びベッドの布団をめくると。

「いや。待つてたよ・・・」

そこには、完全にパンツ一丁の姿でいた年のわりに肉付きのいい老人……アイゼンハウアーがいた。

「きゃああああああ阿ああああああ……!!!」

先程同様なのはの悲鳴を聞きつけた一護達は大急ぎでなのはの部屋に向かった。

今回は真之介も目を覚まし行ってみた。

「おいおい……うるせーな……何だよ、ネズミかこのやる……」

その時、真之介は一護達同様ショックを隠しきれないでいた。

そして、真之介の頭の中の何かが切れる音がした。

「コーーーーーーラーーーーー!!!……このイカレエロじじい……!!!」

「ケダモノ……!!!」

「ケダモノはてめえだ、ボケ……!!!」

真之介はそう言うと、アイゼンハウアーの身体を容易に持ち上げす



かさず一本背負い。

その後、それだけでは飽き足らず今度は地獄車。

さらに、追い討ちをかけるように強烈なスパークリング。

「おおお！！極限素晴らしいスパークリングだ！！」

全員が啞然とその光景を見ている中、了平一人だけは興奮していた。ボロボロになったアイゼンハウアーを肩に担いだ真之介は、ゆっくりとなのはの部屋を出て壁にアイゼンハウアーを座らせた。

「まっ……待ってくれ……真之介！！！！あれは一種のコミュニケーションで……！！」

「そんなコミュニケーション……誰も望んでねーよ！！」

そう言うと、真之介は右手から何やら黒い物質を生成しそれを徐々に巨大化させそれを使用しアイゼンハウアーの身体を覆い隠した。

「封殺型縛道……『うつしこかんあけ朧虚棺桶』！！」

「ああああああああ！！！！！！」

その術を発動した瞬間、アイゼンハウアーの悲鳴は聞こえなくなり小さな立方体の姿をした黒いサイコロだけが残った。

「お……おい……アイゼンハウアー殺しちゃったのかよ!？」

「心配スナよ。丸い一日暗い闇の中で恐怖を味わってもらっただけだ。封殺って言っても威力は1000分の1に抑えといた。死にはしねえよ!」

「そ……そう……なんだ……」

なのはを始めとする全員は、真之介の感情の変化の仕方や対応、そして見知らぬ術を使う光景に漠然とするしかなかった。そして、漸く一同は安心して眠りにつくことができるのであった。

なのはも自室のベッドの中で今度こそ落ち着き深い眠りに入ったのであった。

そして……なのは夢の中で、奇妙な光景を目の当たりにした。

なのはの目に映し出されたのは、夜空に光り輝く星空が全てを包み込む……そんな幻想的な空間だった。

「……ここは……どこだろう?」

聞こえるかい?なのは。

その声になのはは素早く反応した。

そして、なのはが後を振り返ってみると、そこにいたのは、なのはにとってはかけがえのない存在であり、魔導師となるきっかけを与えてくれた人物の姿に酷似していた。

「……ユーノ……くん?」

ユーノ?何を言ってるの……僕だよー……だよ。

「……?」(聞こえない?)

なのははユーノという青年に酷似した人物が言おうとしていたことを、聞き取ることが出来なかった。

そして、ふと気がつくと、既に朝日は昇り太陽が燦燦としていた。

「……何だったんだろう……今の夢……!?」

このとき、  
なのは後に自分に与えられる力の存在を知る由も無かつ  
た。



### 第39話：雷帝と氷帝

> i 4 2 2 0 — 7 0 9 <

第4フィールドでの決着がついたその頃、フェイトと日番谷が対峙する第3フィールドロー……

水のフィールドでは二人が武器を取り向かい合っていた。

フェイとは空中に浮かび、日番谷は正面のビルの屋上から剣を構えていた。

第3観覧室のモニターでその様子を窺がうエリオ、キャロ、ヴィータ、ティアナ、ルキア。そして、戦いが終わりボロボロの状態で帰ってきたスバルと獄寺がいた。

「フェイトさんと日番谷さんの戦いか……どっちが勝つんだろう……」

「うん……フェイトさん……大丈夫かな!？」

フェイトの秘蔵っ子でもあるエリオとキャロは、この戦いの行く末を特に心配していた。

何よりも二人は、フェイとの安否を第一に考えていた。

すると、そこにスバルが口を挟んできた。

「大丈夫だよ！フェイトと隊長は機動六課のライティング隊の隊長だよ。そんな心配しなくてもきつと・・・」

「いえ・・・油断は禁物よスバル。たとえフェイト隊長だって、相手は死神。それに、あの日番谷つて子・・・ルキアさんから聞いた話じゃ、あの若さで隊長なんですつてよ。」

ティアナの話聞いたスバルとエリオ、キャロ、そして獄寺の四人はタイミングを合わせたかのように同じリアクションを取った。

「んな！？あのガキが隊長！！あんなにチビなのにか！！」

「うそでしょう！！あんなに小さくて若いのに隊長なんて！！」

「貴様ら・・・それはヴィータ殿に対する当て付けにも聞かせるがな・・・」

ルキアのツツコミを聞いたスバルと獄寺はびくりとして、徐に後を振り返ってみた。

そこには、怒りの炎を湧き上がらせるヴィータがいた。

二人は取ってつけた言い訳でその場をごまかした。

「でもルキアさん・・・日番谷さんが隊長だって話は・・・本当な

「んですか？」

「ああ。日番谷隊長は護廷十三隊、十番隊の隊長を務めるれっきとした死神だ。ああ、水を差すようで悪いが・・・日番谷隊長の實力は相当なものだ・・・侮りを以ってかかれば、フェイト殿の勝利は難しいだろうな。」

キャロがルキアにそう問いかけ、ルキアがそのように答えるとエリオとキャロの表情は一気に曇り始めた。

そして、そうこうしているうちに、モニター画面の二人はバトルモード全開でいた。

「よろしくお願ひします・・・フェイト・T・ハラOWN執務官です。お互い頑張りましょう。」

「ああ・・・十番隊隊長、日番谷冬獅郎だ・・・。悪いが、俺は女だからって手加減する気はねえ。」

「お生憎。こちら相手も誰であろうと手加減するつもりはありません・・・。」

「・・・そうか・・・。」

すると、日番谷は自身の力の証明である霊圧を大量に放出しフェイトに圧を加えた。



フェイトは今迄感じたことのない巨大な重圧と、日番谷から感じる強烈な殺気に身体が身動きできないでいた。

「……!?(す……凄い!!隊長とは言っていたけど、あんなに若いのにここまでレベルの違う重圧を感じたのは初めてだ……身体が……動かない!!)」

「どうやら……俺の霊圧にやられて身体が思うように動かねえらしいな……なら……こちらから行くぜ!」

そう言うと、日番谷はビルの屋上から一瞬で姿を消した。

フェイトはその光景を見て驚愕した。

すると次の瞬間、日番谷が突然フェイトの目の前に現れ斬りかかって来た。

フェイトは咄嗟にバルディッシュで日番谷の剣を止めた。

「う……!?(お……重い!!)」

フェイトは一時日番谷の攻撃を受け流し体勢を立て直そうとした。

だが、フェイトの行動を見た日番谷は、攻撃を受け流されてなおも瞬歩で移動し、フェイトに容赦ない剣戟を与え続けた。

「く……このままじゃ……もたない！！バルディッシュー！！」

フェイトの掛け声に反応して、デバイスのバルディッシュ・アサル  
トはすぐに魔法陣を展開した。

日番谷は魔法陣が展開されると一端距離を取ってフェイトの様子を  
窺がった。

「バルディッシュ……プラズマランサー。」

すると、フェイトの周りにいくつもの発射口が展開される。

日番谷は来るかとはばかりに剣を握る力を強くした。

「プラズマランサー……ファイアー！！」

合図と共に発射口から加速発射システムを装填され、発射されるプ  
ラズマの砲弾。

日番谷は剣の一振りで襲い掛かるプラズマをなぎ払う。

だが、それを予測したフェイトは直ぐになぎ払われたプラズマを遠  
隔操作し、再照準させ日番谷に発射した。

日番谷も直ぐに攻撃に対処するために、瞬歩で移動した。

「逃がさない。」

瞬歩で移動する日番谷に追尾してくるプラズマの砲弾。

理解した日番谷は空中に足を止め、プラズマに正面を向けて鬼道を放った。

「縛道の八十一 『断空』！」

すると、日番谷の目の前に透明の防壁が出現し全プラズマランサーを受け止めた。

それを見たフェイトは驚きを隠せないでいた。

すると、フェイトはバルディッシュに自動誘導性を兼ね備えたサーベルを作り出した。

「ハーケンセイバー!!!」

そして、フェイトはハーケンセイバーのサーベルを勢いよく日番谷に向かって投げつけた。

瞬時に刀で受け止めた日番谷。

すると、フェイトは再び魔法陣を展開し強力な電光を放とうとしていた。

「・・・なるほど。ならこつちも、目には目を・・・雷には雷だな・・・」

そう言うと、日番谷は受け止めたハーケンセイバーを力づくで斬りおとし、刀を左手に持ち右手をフェイトに向けた。

「散在する獣の骨 尖塔・紅晶・鋼鉄の車輪 動けば風 止まれば空 槍打つ音色が虚城に満ちる・・・」

すると、日番谷の右掌に激しい光を放つ電光が姿を見せ始めた。

それを見たフェイトは一瞬驚愕したが、躊躇無く自分の純粹電撃魔法を発射した。

「プラズマ・・・スマツシャー!!!!」

「破道の六十三『雷吼炮』!!!」

日番谷もフェイトの攻撃とほぼ同時に雷吼炮を放った。

両者の電光は激しくぶつかり合い、強烈な光を帯びて二つの雷は混ざり合い大爆発を起こした。

ついに・・・雷帝と氷帝の戦いがここに幕を開けたのであった。



### 第39話：雷帝と氷帝（後書き）

今更ながら、感想を送ってくださっている人達に一言です。感想をおくってくれるのは嬉しいのですが、基本私は感想を呼んでも返信はしません。と言うより、そんな暇はありません。本当にすみません。ですから、このことを十分ご理解の方のみ、感想を送ってください。

## 第40話：拮抗する雷氷

モニター画面の外で繰り広げられるフェイトと日番谷の激しい攻防。プラズマスマツシャーと雷吼炮が互いに拮抗した力でぶつかり合い、モニター画面には一瞬強烈な光が入り込んだ。

それを見ていたエリオ達は目を瞑りながら、戦いの激しさを痛感していた。

「す・・・凄い・・・！フェイトさんと互角・・・いや、もしくはそれ以上の力だ！！」

「日番谷さん・・・フェイトさんと同じ電撃魔法を使えるなんて・・・！？」

キャラクがそう言うと、ルキアが口を挟み魔法でないことを説明した。

「あれは魔法ではなく、鬼道というものだ。死神が使う霊術で・・・数字が大きくなれば成る程術の力は増大し、扱いも難しい。先程日番谷隊長が放ったのは、雷を帯びた爆砲を敵に放つ、破道の六十三番・・・雷吼炮だ。」

一方、だるフィールドは技ぶつかり合いにより周囲が見えなくなっていたが次第に光が収まり二人の姿が見えてきた。



二人は、お互いに姿を認識すると、再び高速で移動して向かっていった。

バルディッシュと日番谷の刀が激しくぶつかり合う。

「どつやら・・・そちらも高速移動が出来るらしいな・・・」

「ええ。ソニックムーブといいます。しかし、そちらも凄いですね。魔法も使わずに一体どうやったたらそんな速度で移動できるんですか？それにさっき出したあの技は・・・!？」

「あれは鬼道って言ってな。お前達で言う魔法に近いもんだ。ちなみにもう一つの質問の応えは瞬歩って言ってな。死神が使う高速歩法だ。」

「成る程・・・懇切丁寧にありがとうございます。だったら・・・こちらもそれ以上の速さで叩くまでです！」

すると、高速移動しながら日番谷と放していたフェイトは突然日番谷の目の前から姿を消した。

日番谷が驚く中、フェイトは瞬間的な加速を加えることにより、日番谷の背後に回りこむことに成功した。

「ブリッツラッシュ！」

バルディッシュから出現した雷の刃が日番谷に襲い掛かる。

咄嗟に日番谷は刀でフェイトの攻撃を受け止めた。

「流石ですね・・・シグナムでもこの反応にはそう簡単には着いてこれないと言つのに」

「お生憎・・・こちっはお前来場に場数踏んでんだ。舐めてもらつては困るぜ！」

そう言うと、日番谷は力づくでバルディッシュを振り切るフェイトから距離を取ると、右手の人差し指をフェイトに向け、鬼道を放つた。

「破道の四『白雷』！」

すると、日番谷の人差し指の先から一条の雷を放つ。

フェイトは咄嗟にそれをかわすが、日番谷は直ぐにフェイトの頭上に回りこみ刀を振り落とす。

「はっ!?!(しまった・・・囧か!?!)」

「でやあああああ!?!」

日番谷の凄まじい雄たけびとともに振り落とされる強烈な剣戟。

フェイトはバルデツイシュで防ごうとしたが、力に押し負けそのまま勢いで地面に衝突した。

その瞬間、モニター画面を覗く全員は目を疑った。

「うそ・・・フェイト隊長が力負けしてる・・・!?!?」

「あのガキ!なんてパワーしてやがる!?!おまけに呪文言わなくても術が使えるのかよ!」

スバルと獄寺は日番谷の実力に圧倒し、思わず思ったことを口にする。

すると、獄寺の素朴な疑問にルキアが答える。

「あれは詠唱破棄と言ってな・・・技の威力は多少落ちるが、詠唱を必要としない分速力が倍増する。」

「いずれにしても・・・気を抜けば間違いなくやられるのは、確かだな・・・」

ルキアが説明した後、ヴィータは額に汗を浮かべ眉間に皺を寄せながらモニター画面を覗き込んだ。

エリオとキャロもモニター画面の見ながらフェイトの安否を心配した。

そのフェイトはと言うと、激しく地面に叩きつけられた衝撃で暫く起き上がれないでいた。

そして、瓦礫の中にある身体をゆっくり動かしながら眉間に皺を寄せ日番谷を仰ぎ見た。

「っ……強い……！これが隊長クラスの死神の実力。私が今迄戦ってきたものの中で、一番に入ることとは間違いないみたい。」

「どうしたよ……もうくたばっちまったのか、フェイト・テストロッサ……」

日番谷は空中で足を止めながら、刀を右肩に乗せながらフェイトに質問してきた。

フェイトは、普段熱くなるような性格ではないが、この時ばかりは悔しさのあまり舌打ちをした。

「冷静さを失ってるな……頭に血が上ってるときが一番危険なんだぜ……隊長らしからぬ行為だな。」

「確かに……あなたの仰るとおりです。でも……だからと言ってあなたも……これぐらいで私の実力を見誤らないで下さいね、日番谷さん！」

すると、日番谷の周りに忽然と雷の刃が何本も出現し、日番谷は動揺した。

そして、地面にいるフェイトは徐に日番谷に左掌を向けて、こう言った。

「サンダーブレイド・・・ブレイク!!」

フェイトの掛け声と共に雷の刃が同時に日番谷に襲い掛かる。

これは、サンダーレイジの強化版で命中後に放電を伴って爆発させることで、対象を破壊するサンダーブレイドだ。

「何!?!」

日番谷はサンダーブレイドの気配に気付かずフェイトに対してのみ視線を向けていた。

そのため、サンダーブレイドの攻撃に判断が間に合わず、フェイトの放ったサンダーブレイドは見事に日番谷に全て命中し、大爆発を起こした。

フェイトはその様子を確認すると、ゆっくりとボロボロの身体を引きずり起こしてその場に立った。

「はっ、はっ、はっ、はっ、はっ」

爆発の様子をモニターで確認した獄寺とヴィータは、二人揃ってガッツポーズを取った。

「よっし！全部命中だぜ。あのガキ、あれじゃあ無事な訳がねえよ！！」

「そうだな。フェイトのサンダーブレイドはシグナムでも手こずる大技の一つだ。いかに隊長クラスの死神とは言え、まず無事では済まないだろぜ！」

すると、そんなに二人に水を差すようにルキアが声をかけてきた。

「いや・・・よく見てみる・・・」

そう言われて獄寺たちがモニターを覗くと、そこに映し出されたのは・・・特殊な結界で身を守った日番谷の姿だった。

その様子が一番驚いているのは、他ならぬフェイト自身だった。

「なっ!?!?ほとんど・・・・・・傷が無いなんて・・・!?!?」

「今の危なかったぜ・・・流石に。お陰で左腕が痺れて暫く使えそうにねえな。」

そう言って、日番谷は自分自身を包み込む特殊な結界を解いてフェ

イトがいるところに舞い降りてきた。

「『鏡門』……外部からの攻撃を反射する高等結界だ。お前の技の瞬間、急いで張ったから左手のほうまで手が回らなかった。だが、どうにか全身へのダメージは受けずに済んだ……まともに喰らっていたら、再起不能だった筈だな……」

「成る程……やはり一筋縄ではいかないですね……だったらこっちも……それなりに!!!」

すると、フェイトは何かの呪文らしきものを唱え始めた。

「アルカス・クルタス・エイギアス煌めきたる天神よ……いま導きのもと振りきたれ……バルエル・ザルエル・ブラウゼル……」

フェイトが呪文を唱え始めると、頭上に巨大な魔法陣が展開され、そこからは幾度と無く稲妻の光と雷の轟音が響く。

「なんだ……こいつは!?!」

「撃つは雷、響くは轟雷……アルカス・クルタス・エイギアス……」

その時、魔法陣の中央に巨大な眼球が出現し、そしてそれとともにフェイトはバルディッシュを徐に天に掲げ、こう言い放った。

「サンダー・・・フォール!!」

すると、一斉に魔法陣から無数の稲妻が合図と共に日番谷に襲い掛かってきた。





## 第41話：氷結の竜

日番谷に襲い掛かる無数の稲妻。

日番谷は驚愕しながらも瞬歩で攻撃を回避していく。

すると、フェイトはバリアジャケットをソニックフォームにし両手両足を常時発動可能な高速移動魔法、ソニックセイルを纏わせ、バルディッシュを巨大な魔法刃を持つ大剣に変形させ、日番谷に向かっていった。

「逃がさない・・・」

高速で移動して日番谷に襲い掛かるフェイトと無数の稲妻。

日番谷は眉間に皺を寄せながら必死でそれらを除けようと瞬歩で逃げ回る。

「く・・・！天候を操る魔法に加え、あんな技まで使ってくるとはな・・・!?」

「はああああ！！！！」

すると、フェイトは巨大な剣となったバルディッシュを力いっぱい振り切り、逃げ回る日番谷に向けて物理的破壊力を持った衝撃を飛ば

した。

日番谷は、負傷した左手にそれを受けてしまい一端その場に足を止めた。

「くそ……!!腕が……痛て……!!」

「もらった!」

そして、この機を逃さないとしてフェイトは長く伸ばしたバルディッシュの魔法刃を天に掲げて、掛け声を上げた。

「撃ち抜け、雷神!ジェットザンバー!!!!」

フェイトは渾身の力をこめて日番谷に向けて魔法刃を振り落とした。

それに気がついた日番谷は腕に痛さで対応が出来なくなっていた。

そして、フェイトの渾身の一撃とサンダーフォールの稲妻が同時に日番谷に襲い掛かった。

「はあああああああ!!!!」

「くっ……!!」

攻撃が通った瞬間、凄まじい轟音が鳴り響くと同時に莫大なエネルギー

ギーが放出され大爆発を伴った。

その影響で、周辺のビルはドミノ倒しの要領で倒れこみ、辺りには不揃いな瓦礫の山が宙にまっけていた。

モニターでその様子を見ていたエリオ達は、凄まじい戦いの様子に目が放せずいた。

そして、フェイトの技が決まった瞬間を見たエリオとキャロは、フェイトの勝利を確信して顔を綻ばせた。

「ふう〜〜どうやら、フェイトさんの攻撃が貫通したみたいだね．．．」

「うん．．．あれだけの稲妻とフェイトさんの魔法刃が当たったんだもん．．．日番谷さんもきつと．．．」

「どうだかな．．．まだ油断は禁物だぜ．．．私達はまだ死神の實力のうちの欠片しか見てないんだぜ。」

「ヴイータ副隊長の言う通りよ．．．死神の力は絶大よ。フェイト隊長の攻撃が通ったからと言っても、それである日番谷って子がくたばるとは到底思えないわね．．．」

「でもティア！少なくともさっきみたいなのはほとんど無傷ってことはないでしょ!？」

「．．．ん〜〜まあ〜〜そうだけど．．．」

エリオとキャロ、ヴィータにティアナとスバルは、何処か晴れ晴れとしない心情でモニター画面を見ていた。

エリオとキャロは、先程まで浮かれていた自分に羞恥心を覚え、口を籠もらせた。

その頃、第3観覧室に向かう途中のトイレで用を済ませている真之介とアイゼンハウアーはと言うと、アイゼンハウアーがふと真之介にこんなことを尋ねてきた。

「ところで真之介・・・前々から思ってたんだが、何故死神たちだけにボンゴレのことや魔導獅たちの情報を与え、他のものにはそうしないんだ。いくらなんでも、これじゃあ読者から反感を喰らってもおかしくないぞ。えこひいきしてるとか、ツナ達が可愛そうだって・・・」

「うるせーな。んなことは百も承知だよ。俺が敢えてそうしたのは、後々色々都合がいいからだよ！」

「都合がいい・・・!? 一体なんのだ？」

「それはこれからの楽しみだ・・・読者の皆も、そう言うことだから・・・あしからず。」

そして場所は変わって第3フィールド。

渾身の一撃が見事日番谷に通り、フェイトは息を切らしながらバル  
ディッシュを元の杖に戻し、天に浮かぶ魔法陣を消滅させた。

「はっ、はっ、はっ、はっ……やった……」

そして、徐々に砂埃が晴れてフェイトの瞳に映ったのは、瓦礫の山  
にまぎれながら傷だらけとなって倒れている日番谷だった。

日番谷は何とか瓦礫の中から出てきて、震える手で刀を握り締め  
立ち上がった。

349

「驚きましたね……あの攻撃を喰らってまだ意識があるどころか、  
立ち上がることが出来るなんて……!」

「舐めてもらっては……困るって言っただろ……まさかあんな技  
で出してくるとは、正直思わなかったぜ……」

「私自身も……あの技を使ったのは久しぶりでしてね……かな  
り魔力を消費してしまいましたよ……なにしろ、天候を支配する  
なんてことは……そう出来るものじゃないですからね……」

その言葉を聞いた日番谷は、一瞬考え込み、周囲の霊圧を確認して  
ある決断を下した。

「天候を支配する・・・か・・・確かにそうだよな・・・だがよ・・・  
天候を支配できるのが、てめえの技だけだとは思うなよ・・・」

「えっ!?!」

「本当は使う気なんかなかったんだが・・・阿散井の奴も解放した  
みたいだし、俺もこの場合は仕方ないと思ってる・・・見せてやる  
ぜ、俺たち死神の本当の実力をな!!」

フェイトとモニター画面を覗くエリオ達は日番谷の不審な発言に警  
戒心を覚えた。

ルキアは心中、とうとう使ってしまうのかと些か心配が湧き上  
がった。

そして、日番谷は傷だらけの身体でその場から勢いよく飛び上  
がった。

目を丸くしてそれを見上げるフェイト。

そして、日番谷は空中に飛び上がった状態で自分の斬魄刀を右手  
で構えた。

すると、刀身から溢れた霊圧によって創り出される水と氷が徐々に  
天候を鉛色に染めていく。

「なっ……これは一体！？天候が……」

「霜天に坐せ……！！」

そして、鉛色に染まった天を支配するかのようにフェイトの前に現れたのは、巨大な水と氷の竜だった。

「『氷輪丸』！！」

その姿を目撃した瞬間、フェイトとモニター画面を覗くエリオ達は仰天した。

「なっ……なんだよ……あれは……！！？」

「溢れた霊圧が創り出す……水と氷の竜。そしてそれは、天候さえも支配する。久しぶりに見たな……これが、日番谷隊長が持つ、氷雪系最強の斬魄刀……氷輪丸。」

ルキアが放ったその言葉を聞いたエリオたちは衝撃でいっぱいだった。

そして、モニターの外フェイトもその巨大な流の姿に身体を硬直させ身動きできなかった。

それを見た日番谷は全身全霊の力で氷輪丸をフェイトにぶつけてきた。



「でああああああああああ！！！！！！」

氷輪丸の予想以上の速度に驚きながらも、フェイトはなんとかその場から退散した。

だがしかし、フェイトは氷輪丸の攻撃の一端を受けてしまい、全身水浸しになった。

「なんて・・・水量・・・なんて速さだ！！・・・除けきれな・・・」

そう思っていると、水浸しになっているフェイトの身体が突然凍り始めてきた。

それを見たフェイトは、驚愕し段々と全身が凍りずけになってくることが分かると、恐怖が頭を支配した。

「あああああああああああああ！！！！！！！！！！」

そして、移動しながら凍りずけになっていくフェイトは足を滑らせ瓦礫の山に衝突した。

そして、そのフェイトに向けて刀を突きつける日番谷。

「どつする・・・このままじゃ本当に凍りずけになるぜ・・・素直に降参したら、術は解くぜ・・・」

「・・・ま・・・参り・・・ました・・・」

フェイトは眉間に皺を寄せながら重い表情で日番谷に降伏を宣言した。

こうして、第3フィールド、フェイト・T・ハラOWN対日番谷冬獅郎の戦いの勝者は、ギリギリの場面で氷輪丸を解放してフェイトを降伏させた、日番谷冬獅郎に決定した。

そして・・・いよいよ残り二試合となった。



## 第42話：エースの戦い

第3フィールドの様子をモニターでずっと見ていたエリオとキャラロは、ライトニング部隊の隊長であり自分達の育ての親でもあるフェイトが敗北したことにショックを隠しきれないでいた。

「フェイト……さんが……」

「負け………た……」

「信じられない……日番谷君が……フェイト隊長を負けしちやった……!？」

瞳孔が開き驚愕するエリオとキャラロに、二人ほどではないがやはりショックが大きいスバル。

すると、そんな彼らのもとに恋次と山本がやってきた。

「よーてめえら……。そっちの様子は……。って、聞くまでも無えみてえだな……」

「恋次！お前……。何時の間に！と言うより……。なんだその姿は！？ボロボロではないか？」

「あっはははあはは……。それは俺が頑張って与えた傷なんだぜ、

ルキアさん！でも・・・俺が逆にぼろ負けしたけどな・・・」

その言葉を聞いていた獄寺は、ふいに湧き上がった怒りを抑えきれずに山本につつかかかっていった。

「んだとこの野球バカ！！負けたくせにへらへらと戻ってきやがって！！しかもよりによってこんな入れ墨野郎に負けやがって・・・！！」

「あんだと！！てめえだつて石田にボロカスにやられて気絶してたじゃねえか！！！！」

「んだと！！この刺青野郎！！！！！！」

「やんのか！！タコあたま！！！！！！」

全員はその光景を見てただただ呆れる以外何も出来なかった。

ルキアも既にお手上げ状態になっていた。

すると、そんな第3観覧室に漸く真之介とアイゼンハウアーが入ってきた。

「何だよ・・・もう試合終わってるのかよ・・・じじいの小便が長いからだろうが！」

「やかましいわい。年寄りはお用が近いじゃい・・・あっ、それより試合の結果はどうなった！？」

「」覧の通り・・・日番谷くんの勝利ですよ。」

ティアナが代表してアイゼンハウアーの質問に答えた。

それを聞いた真之介はそうかと一言だけ言って部屋を出て行くことした。

すると、獄寺が喧嘩口調で真之介に攻め立ててきた。

「おい、待てよ!!!何でてめえ俺たちに一言も死神の能力について全く教えてくれねえんだよ!!!これじゃ、俺たちにとっては不利以外のなにものでもねえよ!!!」

獄寺の言いように全員は納得していた。

何故、自分達には全く死神の情報に関して真之介は口を閉ざしたままなのか。

何故死神だけが自分達の情報を得ているのかと。

頭の中にあつた素朴な疑問に全員は苛立ちを覚えていた。

「確かに獄寺の言う通りだな・・・俺たちだけ仲間はずれにされるみたいだな・・・」

「そうだよ。どうして真之介くんは私達には何も教えないで、こんな模擬戦を計画したのさ？」

山本とスバルがそう言うと、真之介は鼻でふんと笑った。

「てめえ！！何が可笑しいんだよ！！！！」

獄寺の怒りのボルテージが益々大きくなっていく。

そんな獄寺を宥めようとする山本。

すると、真之介が獄寺たちの方に振り返り返事をした。

「まつ・・・そいつはこの模擬戦が終わってから追々話さ・・・それより、急がないともう直ぐ第2フィールドと第1フィールドでこの模擬戦のエース同士の戦いが始まるぜ・・・いいのか？」

挑発したような口ぶりで真之介が獄寺にそう言うと、獄寺はふと我に返った。

「なっ！？と言うことは・・・十代目の試合か！」

「そうか、じゃ早くしねえと間に合わないぜ！」

「なのはさんの試合が始まっちゃうってさ、ティア！」

「そうね！じゃあ全員移動しましょう。確か第1・2フィールドの観覧は同じ部屋で見れるでしょう？」

ティアナがそう言うと、真之介はああと一言返した。

そして、全員は第3観覧室を出て第1・2合同観覧室に向かった。

そして、一同がそこに到着すると・・・既に椅子に座ってモニターを覗いていたリボン、京子、了平、ランボ、クローム、雲雀、はやて、シグナム、ヴィヴィオ、井上、石田、茶渡、コンがいた。

「おっ！みんな遅かったな・・・おや？スバルえらいポロポロやな・・・大丈夫か？」

「あつ、はい！大丈夫です！！私頑丈が取り柄ですから・・・あはははあは！！」

「それより獄寺と山本・・・あとで俺のところまで来い・・・ねっちより扱いてやるぜ！」

ニヒルに笑みを浮かべるリボンの態度に獄寺と山本は凍りずいた。ランボとクロームはお気の毒にと心中思った。

「そう言えば・・・なのはと斬月、それに一護とツナの試合はまだやらねえのか!?!」

「これから始まるみたいですよ。ツナ君と一護さんの試合になのさんの試合。」

恋次の問いかけに京子が答えた。



その際、京子は恋次に屈託の無い笑みを浮かべた。

それを見た恋次は一瞬頬を赤らめた。

すると、ルキアがこのロリコンと言って恋次の顎にパンチを食らわした。

「さて……じっくり見せてもらおうか……エースオブエース、高町なのはにどう対応するんかいな……あの斬月というおっさん……」

「なのはママ……負けないで……」

期待に胸膨らますはやてとは対照的に、ヴィヴィオはなのはのことを心の底から心配していた。

一方、ヴィヴィオ同様に京子はツナのことを手を祈るようにさせて心底心配していた。

「ツナ君………頑張って」

ついに、魔導師のエースとボンゴレの十代目ボスに……

黒衣の二人の男が戦いを挑む……



## 第42話：エースの戦い（後書き）

### 次回予告

ついに、なのはと斬月の試合が始まった。

斬月の隙の無い攻撃に、防戦一方のなのは・・・

果たして・・・白き魔王は一体どう対処するのか・・・

次回、次元の破壊者・・・「白き魔王と黒衣の大賢者」

みんな、正解して見ろよ！

### 第43話：白き魔王と黒衣の大賢者

> i 4 2 2 1 | 7 0 9 <

第2フィールド・・・木のフィールドではいよいよ、魔導師たちが注目する高町なのはの試合が始まるうとしていた。

対戦相手は、一護の斬魄刀の本体である斬月。

なのはと斬月はお互いに向き合い沈黙を保っていた。

なのはは、斬月から発せられる異常なまでに巨大な重圧に杖を握り手が震えるほどだった。

額からは、普段めつたに流さないような量の汗を流していた。

「はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、（凄い・・・こうして向かい合ってるだけなのに、あの斬月っていう人が出す殺気とプレッシャーが身体中に伝わってくる・・・正直今まで戦ってきた人の中で一番・・・怖い・・・!）」

「恐怖しているのか・・・高町なのは・・・?」

沈黙を守っていた斬月がふと口を開きなのはに尋ねてきた。

なのはは素直に応える。

「ええ・・・怖いですよ。今までこんな恐怖を感じたことはありませんよ。」

「・・・そうか・・・私は寧ろ興奮している・・・」

「えっ！？興奮・・・？」

「ああ・・・私自身も精神世界の外でお前のような強いものと戦えることに興奮が収まらぬ。高町なのは・・・私を楽しませてくれよ・・・いくぞ。」

そう言うと、斬月はなのはの前から姿を消した。

「きつ・・・消えた！？」

すると、なのはの背後に斬月が斬月を手に取り襲い掛かってきた。

なのははそれに気付いて急いでレイジングハートにプリテクションの展開を支持した。

「レイジングハート！！プロテクション！！」

なのはの周りに魔法の防壁が作り出された。

だが、なのはは予想もしなかったことにさらに驚くことになる。

なんと、プロテクションにいと簡単輝が入り崩壊しようとしていた。

「えっ！？そんな！！」

その瞬間、なのはを守るプロテクションは崩壊した。

なのはは斬月の一撃をどうにかフラッシュムーブで回避したが、斬月も同様に瞬歩で直ぐになのはの背後に再び回る。

「はっ・・・早い！！」

再び斬月の刃がなのはに襲い掛かる。

なのははレイジングハートでそれを受け止めたが、斬月の剣の重さに押し負けてしまいそのまま地面に落下していった。

だが、何とか自力で地面への直撃を避けたなのはは、そのままフラッシュムーブで斬月に向かっていった。

なのはは斬月に向かいながら、エクシードモードになり魔法陣を展開し、レイジングハートの砲撃を斬月に向けて発射した。

「エクセリオン・・・バスター！！」

なのは斬月目掛けてエクセリオンバスターを放った。

だが、それを予期していた斬月は直ぐに瞬歩で移動してなのは正面に現れた。

その光景になのは自身驚きを隠せずに行った。

「そ・・・そんな!？」

斬月はポーかフェイスを保ったまま右足でなのはの身体を数十メートル先のビルに向けて蹴り飛ばした。

なのはは左脇にその衝撃を直撃させられ、物凄い速度でビルの中に叩き込まれた。

ビルからは大量の砂埃が立ち込める。

「どうした・・・その程度で私を捉えられると思ったか・・・」

ビルの中でゆっくりと重い瞼を開けるなのは。

唇は切れて血を流していた。それを徐に拭い取る。

「くっ・・・! 顔色一つ変え無い上に、全く隙の無い攻撃で攻めてくる・・・こんなに一方的に攻められるのは・・・今回はじめて

かも……！」

モニターで第2フィールドの戦いを窺がっていた機動六課一同は言葉  
を失っていた。

その時、第3フィールドからフェイトと日番谷が戻ってきた。

「みんな……もう始まつてる!?!」

「フェイトさん!!無事だったんですね!」

エリオとキャラロがフェイトの無事な姿を確認すると、両目に涙を浮か  
かせフェイトのもとに駆け寄った。

フェイトは二人を優しく抱擁する。

「ごめんね二人とも……負けちゃったよ……」

「いいんですよそんなの!フェイトさんが無事なら……僕達それ  
だけで十分ですから!」

「うふ、ありがとうエリオ、キャラロ。それより、なのはのほうはど  
うなってるの?」

フェイトがそう言うと、六課一同は全員沈黙した。



不思議に思いフェイトは第2フィールドの様子を見てみた。

「なっ……そ……そんな……なのはが押されてる!？」

「信じられへんよ!わたしら六課のエースオブエース、管理局の白き魔王がこんな一方的に押されてるなんて!？」

「やはりあの斬月という男……只者ではありませんね!」

驚愕して瞳孔を開くフェイトとはやてに、冷静を装い斬月の力量を測り取るシグナム。

そして、他のフォワード陣も全員なのはこんな光景に目を疑っていた。

その頃、第1フィールド……金のフィールドでもいよいよ世紀のドリームマッチが行われようとしていた。

ボンゴレ関係者、そして死神関係者は全員第1フィールドのモニターに注目した。

第1フィールドでは、ハイパー化して空に浮かぶツナと同じく空中に足を止める一護がいた。

「やっぱり、ハイパー化すると大分印象が変わんな！普段の柔らかい顔のお前とはまるで違うぜ、ツナ！お互い、良い勝負にしようぜ！」

「ああ・・・俺もお前の実力・・・しっかりと見せてもらっぞ、一護。」

その様子をモニターで見っていたリボンや守護者一同、京子とハルは・・・固唾を呑んでじっと二人の姿を見つめていた。

「いよいよボンゴレとあのオレンジ頭の死神の戦いが始まるな。果たして勝敗はどちらに・・・」

「このアホ牛が！そんなもん言わなくなっちゃって決まってるだろうが！十代目の勝ちで間違いねえよー！！」

「いや・・・そうとも限らねえぞ！」

絶対的確信を抱く獄寺とは対照的にリボンは少し暗い表情を浮かべる。

「えっ！？小僧・・・それってつまり・・・！？」

「ああ・・・この戦いは、ツナにとっては圧倒的に不利なことになるな。」

「ど・・・どういふことだ！？極限沢田が負けると言っのか！？」

「確信は無いが、今のツナの様子を見れば分かるだろう。明らかに右手が痙攣を起こしている。その上死ぬ気の炎の放出量も不安定だ。その証拠に、額の死ぬ気の炎の勢いが弱い。これはつまり・・・ツナが一護に対して恐怖を覚えてる証だぞ。」

「えっ！？ボスが・・・！？」

「んなアホな！？十代目があんなオレンジ頭の死神にですか？それはリポーンさんの見間違いじゃ！？」

「それはねえよ。現に一護の奴をしてみるよ。恐怖するはおるか、むしろ楽しんでる感じだぞ。あれは相当場数を踏んだつわものであることの証だ。一護の力量がどれほどかは知らねえが、気を抜けば間違いなくツナの敗北は目に見える」

リポーンという言葉が獄寺たちのもとに痛く突き刺さってきた。

そして、そんな言葉を聞いた京子は益々心配が募り、先程よりも強く祈りをささげた。

リポーンも、その後は沈黙を守った。

果たして・・・この先どうなるのか・・・！？



### 第43話：白き魔王と黒衣の大賢者（後書き）

#### 次回予告

ついに、ツナと一護の戦いが始まったぞ。

ツナのほうは、超直感を逆に一護に利用されて翻弄されてやる・

焦りを見せるツナと、余裕の表情を見せる一護

この対照的な両者は、一体どんな戦いを繰り広げるのか・・・

次回 次元の破壊者・・・「大空<sup>ツナ</sup>VS黒月（一護）」

みんな、死ぬ気で見ろよ。

## 第44話：大空（ツナ）VS黒月（一護）

> i 4 2 2 2 — 7 0 9 <

ついに、今回の模擬戦のメイン試合となる第1フィールドー…

・  
ボンゴレX世沢田綱吉対死神代行黒崎一護の試合が幕を開けようとしていた。

モニター画面でフィールドの様子を見るボンゴレ関係者と死神関係者達。

ついに、世界を超えた頂上決戦が始まる。

第1フィールドのツナは、ハイパー化をしているにも関わらず、いつもの冷静を上手く維持できない、心情だった。

目の前に立ちはだかる自分よりもたった二つ年上の男を直視するたびに、額から汗が流れ出る。

「どっしたよ、ツナ！汗でびっしょりだぜ…大丈夫かよ!？」

「…問題ない…」

実のところ問題大有りであった。

ツナ自身、先程から右腕の痙攣が止まらない状態だった。

死ぬ気の炎の放出量も不安定である。

それはおそらく、一護が無意識に垂れ流す高濃度の霊圧にあてられたせいだろ。

「……目が……合わせられない……今迄色んな奴と戦ってきたが、こんなに身体がだるいと感じたことはない。XANXUSのときも、白蘭のときも……確かに、白蘭と戦ったときは……絶望と言つものを味わったが、一護の場合はまた違う何かか……だが、此处で怖気づいていても仕方ない！」

すると、ツナは忽然と一護の前から姿を消した。

一護は想像もしていないツナのスピードに驚いた。

すると、ツナは既に一護の後に回り込んでいた。

そして、間髪いれずにツナは一護目掛けて回し蹴りをした。

「はああああああ！！」

ツナの回し蹴りが一護の首元に直撃した……かに思えた。

だが、蹴りを入れる寸前に一護は既に姿を消していた。

そのことに一番驚いているのはツナ自身だ。

そして、ツナが周囲を見渡してみると、僅か数メートル先のビルの欄干に一護の姿を確認した。

「なっ!？」

「驚いたぜ!あそこまで早く移動できるんだな!たいしたもんだぜ、全く・・・でもよ、俺にもそれぐらいの速さで移動するなんてこと、訳ないんだぜ。」

眉間に皺を寄せ後悔の表情を浮かべるツナと、対照的に自信に満ちた表情の一護。

モニター画面で二人の様子を見ていたボンゴレ関係者は絶句した。

「なっ!?!あの野郎・・・何時の間に移動しやがったんだ!？」

「瞬步つて奴だな・・・俺も恋次さんと戦ったから分かるぜ!」

「ボンゴレの攻撃をまるであしらうかのような表情ですね・・・一護氏は・・・」

「ツナの奴・・・完璧に遊ばれてるな・・・」



リボーンは、一護に完全に遊ばれているツナの様子を客観的に判断した。

そして、ここから戦いはヒートアップする。

ツナはグローブの炎を勢いよく噴射して、一護目掛けて飛んでいった。

一護もそれを待ち望んでいたかのように背中 of 斬月を取り出した。

「いいぜ！受けてたとうじゃねえか・・・ツナ！！」

「行くぞ・・・」

ツナは怒涛の連続パンチを一護の斬月目掛けて打ち込んだ。

一護は、ツナの拳が予想していたよりも重い事実 to 眉間の皺を寄せた。

そして、一護は攻撃を回避するために瞬歩で姿を消した。

ツナもすぐに一護の姿を直感で確認するや否や、すぐに上のほうに飛んでいった。

すると、飛んで行く途中で一護が突然ツナの真横に現れ、ツナは驚愕した。

そして、一護は斬月の峰でツナの身体を振り飛ばした。

「だらあー!!」

一護の攻撃を喰らいツナはその勢いで後ろのビルの中にくい込んだ。

そして、徐にツナが目を開け見てみると、一護が右手で斬月の柄の巻き布で斬月を回転させていた。

「なっ!?!」

「いくぜ!!」

そう言うと、一護は回転で勢いをつけた斬月をツナ目掛けて飛ばしてきた。

ツナは咄嗟に炎を逆噴射させて一護の斬撃を回避した。

斬撃によって、ツナが食い込んでいたくい込んでいたビルは容易く崩壊し、多量の砂埃が発ちこめた。

ツナは移動しながら斬撃の破壊力に絶句した。

すると、直ぐに一護が瞬歩でツナの真横につく。

それに気付いたツナは咄嗟に身体を止めて左足で回し蹴りをするが、一護はそれをさせまいと直ぐに瞬歩でツナの背中に回りこんで逆に

ツナに踵落としを仕掛けた。

「甘いぜ、ツナ！」

「なっ！？まさか・・・！？」

そして、一護はツナに渾身の力を込めて踵落としを喰らわせた。

ツナはそのまま地面へと向かい凄まじい衝撃音をたてて地面に激突した。

一護は直ぐにツナが落ちた地面まで降りていった。

モニターでその様子を見ていた京子とハルと獄寺は額に冷や汗を流していた。

「ツナ君！！！」

「ツナさん！！！」

「十代目！！！」

「やべーな・・・ツナの奴、超直感を完璧に一護に利用されてやがる。それに、一護の戦闘能力も凄まじいもんだな。ただの踵落としであれだけの破壊力。もしかしたら、一護はある意味白蘭以上に恐ろしいかもな・・・」

「なっ!?!あの白蘭よりもですか・・・!?!?だとしたら、あいつはもう神にでもなったようなもんじゃないですか、リボンさん!?!」

「死神なんだから神がついて当然だろう。それに、席官クラスの死神は皆あれくらいの戦闘能力を有しておる。ちなみに言うと、一護の戦闘能力は護廷十三隊の隊長なみだ。霊圧だけならそれ以上かも知れんぞ。」

ルキアがそのように補足説明をすると、獄寺達は一気に青ざめた。そして、再びモニター画面に目を戻すとツナは衝撃でひび割れた道路の上からゆっくりと起き上がろうとしていた。

「く・・・!?!?ここまでの破壊力とはな・・・」

そして、徐に重い瞼を開けると、斬月を右肩に乗せてじっと待つ一護が立っていた。

その時、一護はツナに向けて自身の霊圧をぶつけてきた。

すると、ツナは巨大な一護の霊圧に押し負けて立つことが出来なかった。でいた。

「(凄い・・・!?!?!これが一護が放つ霊圧という奴か・・・いやそれだけじゃない!!あの斬月っていう刀から出る霊圧も合わさっ

て余計にそう感じるんだ……!? 霊圧で……大気が焼き切れそうだ……!! 白蘭なんか比較にならないぞ……! 自分の腕が木の枝に見えてきた……! こんなモノで勝てる訳が無い!!」

「どうしたツナ……てめえの覚悟はそれぐらいしかないのかよ!」

「なっ……何!?!」

「情けねえ野郎だ……まるで昔の頃の俺自身と戦ってるみたいでならねえよ! こつちが多少本気でやってみたら、こんなもんかよ! ガツカリだぜ……全く」

「……」

すると、沈黙するツナに一護が徐に次のようなことを話しかけてきた。

「いい子と教えてやるぜ、ツナ……今のてめえの炎には”恐怖”しか映っていねえんだよ。」

「えっ!?!」

「かわすときには俺に”斬られるのが怖い”、攻撃するときには”殴るのが怖い”、誰かを守ろうとする時でさえ”死なれるのが怖い” お前の炎はそんな下らねえ恐怖ばかりを俺に語る……そうじゃない。戦いに必要なのは”恐怖”じゃねえ。そこからは何も生まれねえ。かわすなら”斬らせない”! 誰かを守るなら”死なせない”

「攻撃するなら」殴る」！！」

そう言いながら、一護は徐に斬月を天に翳す様に上に上げて、それをツナに見せるようにした。

”  
「ツナ、見えないか・・・俺の剣に映った・・・」てめえ綱吉を斬る”  
つ  
ていう”覚悟”が！」

その言葉を聞いたツナの脳裏に、これまでの戦いの記憶が走馬灯のように駆け巡った。

骸戦にヴァリアー戦、そして未来での白蘭戦。

一護に言われるまで、ツナはすっかり忘れようとしていた。

今までの戦いは一護が言ったとおり覚悟を明確にし身を投じたものだった。

それをほんの数ヶ月の間でツナは忘れようとしていた。

だが、そんなこと出来なかった。

現にこうして一護やなのは達と共に再び戦いの中に身を投じている以上、覚悟を忘れようとする<sup>こと</sup>事態無理な話だったのだ。

一護に諭され漸く覚悟を決めたツナは、先程とは明らかに違う覚悟の映った死ぬ気の炎を燃やしていた。

そして、一護の霊圧に屈しずに立ち上がりこつ言った。

「待たせたな、一護。漸く俺も覚悟を決めたぜ・・・ここからは、全力で・・・お前を倒す！」

その言葉を聞いた一護は、鼻で笑いゆつくりと斬月を下ろした。

「やりや出来るじゃねえかよ・・・ツナ。・・・忘れるなよ・・・その”覚悟”を・・・」

こうして、覚悟の決めた両者の本当の戦いが今・・・始まるうとしていた。





## 第44話：大空（ツナ）VS黒月（一護）（後書き）

### 次回予告

一護の奴に諭され、ツナも漸く覚悟を取り戻したみてえだな・・・  
一方、その頃なのはと斬月の試合も益々激化していつてるみてえだ  
な・・・

なのはは斬月にディバインバスターを撃つように、ツナは一護にX  
BURNERを撃つように挑発される。

挑発に乗る二人に、一護と斬月は何を繰り返すのか？

次回、次元の破壊者・・・「月牙天衝」

その時みんなは何を目撃する！？

## 第45話：月牙天衝

一方、その頃第2フィールドのなのはと斬月の戦いも激しさを増していた。

なのはは、斬月の攻撃をかわしながら、射程と威力をある程度犠牲にすることでチャージ時間を短縮するショートバスターを放つ。

「シューーート!!!」

レイジングハートから発射されるショートバスターを、相変わらずのポーカーフェイスで全て除けきる斬月。

それを見たなのはすかさず魔法陣を展開し、左手からティアナ愛用の技を出そうとした。

モニターでその様子を見ていたティアナとスバルは一瞬身震いし、驚愕した。

「あ……あれは……!!!」

「ティアのクロスファイアーシユート!?!」

そして、なのは斬月目掛けてクロスファイアーシユートを発射した。

「クロスファイアー・・・シューート!!」

なのはの左手からは、六つの魔法弾が同時に斬月に発射された。

斬月は斬月自身でそれを受け止めるが、間髪いれずに全弾を収束し、集中砲火させた二撃目が発射されてきた。

これには、斬月も目を見開いた。

そして、それと同時に爆発が生じた。すると、なのは直ぐにレイジングハートのストライクフレイムを出現させ、そのまま爆発したところ目掛けて突っ込んで行った。

「ACSDライバー!!」

レイジングハートの先端部に半実体化する魔法刃。

そのままなのは、超高速で斬月目掛け煙の中に飛び込む。

「はあああああ!!!!」

すると、煙が斬月により裁ちきられそのまま斬月は飛び込んでくるなのは魔法刃を受け止め、渾身の霊圧で押し戻してなのはの左腕を？みそのまま地面に投げ飛ばした。

地面に勢いよく、叩きつけられるなのは。

「なかなかいい攻撃だった……だが、まだ甘い！」

「くっ！っ……強い……！！！」

その頃、第1フィールドのツナと一護の戦いも漸く形になってきた。

先程までとは違い、ツナは完全に覚悟を取り戻し一方的にやられていた状況から脱し、一護とほぼ互角の戦いを繰り広げていた。

幾度となくぶつかり合う剣と拳。

それはまるで、嘗てツナが戦った幻騎士戦を思い出させるような。

モニター画面でその様子を見ていたりボーン達は、先程までと様子が変わったツナに驚きながら、ツナの様子を見守り、ルキアたち死神関係者はツナの変わりように驚愕していた。

「何だよあいつ！？さっきまでとはまるで別人みたいに強くなってるぜ……どうなってんだよ一体！？」

「おそらく覚悟を決めたからだろうな。先程までのツナは、例えなら腑抜けた剣士そのものだ。だが、一度覚悟が宿れば、あやつは超人的な能力を開放することができる。まっ、それは一護も同じだ

がな。」

驚つきばなしの恋次に対して、ルキアは冷静にツナの変わりようを説明する。

一護の様子を見ている井上や石田、茶渡は最早この後どうなるのか予測も出来ないでいた。

「ふん……あの一護って奴が、ツナの腑抜けた炎に喝を入れたって訳か……たいした男だな。（やはり、俺の予想は当たったかも知れねえな。一護といれば、ツナはこれまで以上の成長を果たすことが出来る……）」

「よっしゃ!!このまま一気に倒してください、十代目!!」

「ツナ君!!頑張って!!」

「ボス………ファイト。」

モニター画面に向かって京子達が応援のエアールを送る。

それにつられて、六課のメンバーや死神たちも負けじとエアールを送る。

そんな様子を見ていた真之介とアイゼンハウアーは、二人して顔を綻ばせた。

「どうした・・・お前の力はその程度ではない筈だ・・・高町なのは・・・」

斬月は頭上からなのはに向かってそう言うと、なのはは直ぐに飛び上がって斬月に向き合った。

「どうですかね・・・それは買いかぶりと言うものではないでしょうか・・・？」

「それは違うぞ。本当に強いものは自分の力におぼれることの無い強靱な精神を持ち、自分を律し守るもののために全力を尽くす、そういうものを兵と呼ぶ。お前はその兵の器なのだ・・・高町なのは。」

「く・・・！！」

その頃、第1フィールドのツナと一護の方もなのはと斬月同様向かい合って話をしていた。

「・・・成程・・・やはりその瞬歩というのは確かに厄介な技だ・・・だが・・・」

「随分悠長としてるな、ツナ！」

冷静なツナに対して、一護が斬月を肩に乗せてまるで挑発するような態度で話しかけてきた。

「覚悟を取り戻したから、呑気に俺の力を分析してるみたいだが、いいのかよそれで？俺を倒すんじゃないかなかったのか？俺まだ怪我一つしてねえんだぜ！それとも、お前の力はその程度だっていうか!？」

同じように、第2フィールドでは斬月が一護と言った様な台詞をそのままなのにも聞かせ、そして二人はこう言った。

「出せよ、X BURNER」

「出せ・・・ディバインバスターを・・・」

二人の発言を聞いたツナとなのは眉間に皺を寄せ困惑した。一護はさらにツナにこう言って仰ぎたててくる。

「お前の最大技であるイクスバーナーを出せって言ってるんだよ。俺はてめえの全力が見たい。そのためには、やっぱりそいつを撃って貰う方が手っ取り早いしな。俺はてめえを倒すぜ。俺の力を結集させて、てめーの力の全てを一つ残らず叩き潰してやる。」

そう言うと、一護と斬月は同じようにツナとなのはに斬月を切っ先を向けて鋭い目つきで睨み付けた。

すると、ツナが徐に口を開きこう言った。

「・・・いいだろう。それほど強く望むなら、俺のイクスバーナー・・・その目に強く刻ませてやるぜ・・・」

「・・・わかりました。そこまで言うなら見せてあげますよ。但し、

加減はしませんから・・・」

そう言うと、ツナはイクスバーナーの体制になのはは魔法陣を展開し発射準備に入った。

「レイジングハート・・・フルパワーでいくよ・・・」

「オペレーション・・・X」  
イクス

すると、ツナのヘッドフォンのオペレーションシステムが発動し発射準備に入った。

レイジングハートもなのはは要求通り、フルパワーでチャージを開始した。

一護と斬月はその間何もせず大きく距離を取って動かずにいた。

モニターでその様子を見ていた死神、ボンゴレ、六課メンバーは二人の必殺技を同時に見られることに期待を大きく膨らませた。

その光景を見た真之介は、終始口を閉じたままだった。

そして、ツナの炎圧が30万FVを超えた瞬間、ツナの攻撃準備は整い、それと同時になのはのほうも準備が整った。



「いきますよ……」

「いくぜ……一護……」

そして、二人は全ての力を込めた最大遠距離破壊技を一護と斬月に向けて発射した。

「デイバイン……バスター!!!」

「X BURNER!!!」

二人から放たれる超特大の剛の死ぬ気の炎と魔力の砲弾。

ふたつの巨大な砲撃が一護と斬月に向かい襲い掛かってくる。

そして、X BURNERとデイバインバスターが二人の命中する寸前、一護と斬月は肩に乗せていた斬月を大きく振り落とし巨大な光を発生させ、ツナとなのはのX BURNERとデイバインバスターをかき消した。

その光景を見たツナとなのはは勿論、モニター画面で見ていた死神関係者以外のものは全員驚きを隠せずにいた。

「なっ!?!ツナのX BURNERと……」

「なのはちゃんのデイバインバスターがかき消された……何なんや……あの光は!?!」

徐々に光が晴れ、一護と斬月の姿が露になる。

すると、ツナとなのは自分の左腕から血がたれていることに気付いた。

そして、ツナは徐に一護に尋ねた。

「・・・今の光は何だ、お前の斬魄刀の能力か・・・？一護！」

「ああ・・・斬撃の瞬間に俺の霊圧を喰って、刃先から超高密度の霊圧を放出することにより、斬撃そのものを巨大化させて飛ばす。そいつが斬月の能力だ。」

「斬撃を・・・飛ばす・・・!?」

同じように斬月から説明を受けたなのは、その技の巨大さと威力に驚愕していた。

そして、斬月はなのに対してその斬撃の名を聞かせた。

「よく覚えておけなのは・・・その斬撃の名は――」

そして、一護と斬月は同時にツナとなのはに向かって技名を告げた。

「『月牙天衝』」

げつがてんしょう





## 第46話：目覚めるのは

一護と斬月から、技の名を聞かされたツナとなのはは、徐にその技の名を繰り返した。

「月牙・・・天・・・衝!？」

ツナとなのはの様子を見た一護と斬月は、それぞれにさらに話を続けた。

「いや、実際、生でお前の技を見たときは流石に驚いたぜ。真之介からは、俺の月牙天衝と同等の力を持つって聞いていたから、もしかしたら競り負けるかもしれないって思ってたが、どうやら・・・切れない訳では、無さそうだな・・・」

「私は、お前のその技を一護の精神世界で聞いたときから、一度私自身の手で切ってみたいと思い、お前に技を出させるように挑発した。だが・・・その程度が、お前のデイベインバスターの全力なのか・・・!? 笑止、興奮めだ。」

斬月の言葉を聞いたなのはは、悔しさもあつたが何よりも自身の必殺技でもあるデイベインバスターを戦って未だ数分しか経たない黒衣の男に容易く破られてしまったことに、衝撃を受けていた。

モニター画面でその様子を見ていたボンゴレと六課一同は終始瞳孔

を開いていた。

「う……うそ……であろう……!?!?」

「ボンゴレの……必殺技の……」

「X BURNERが……!?!?」

「あんな簡単に……かき消される……なんて……!?!?」

了平・大人ランボ・山本・獄寺の四人は、予想もしていなかった光景に目を疑うだけだった。

他の守護者や京子にハル、そしてリボンも声を出さずにとっと瞳孔を開いていた。

しかし、それは六課のメンバーも同じだった。

「そんな……なののはデイベインバスターを……!?!?」

「あんな大技で簡単に打ち負かすなんて……!?!?」

「一体……あの人は何者なんですか!?!?」

フェイト・ティアナ・リインの三人がそう言うと、他のメンバーも動揺を隠しきれずに思わず口をもらした。

モニター画面でなのは尋常ならぬ様子をじっと見ていたヴィヴィ  
才は、両手の指を組んでなのは勝利を希っていた。

「なのはママ・・・負けないで・・・」

一方、斬月の言葉を聞いたなのはの身体は突然自分でも驚くくらい  
の恐怖心を感じていた。

なのはが握るレイジングハートも、その恐怖心からか、尋常でない  
ほどの振るえしていたのは火を見るよりも明らかだった。

「どうした・・・杖が震えているぞ・・・まさかあの程度のこと  
で恐怖を感じているのか・・・!？」

「恐怖・・・そんな・・・ことが・・・!？」

「どうやら・・・私はとんだ量り違いをしていたのかもしれない・・・  
まさかお前がこの程度の器だったのだとはな・・・残念窮まる。  
ならば、お前のその五体に・・・私が徹底的に恐怖を叩き込んでや  
ろう。」

すると、斬月は斬月を構えてなのは目掛けて再度月牙天衝を放った。

「月牙・・・天衝。」

それを見たなのはは咄嗟にレイジングハートのプロテクションで斬撃の威力をほんの少しだけ弱めたが、それも気休めにしかならず、なのはの周囲は激しい爆音と粉塵が立ち込めた。

「なっ・・・！？あいつ、あんな大技を連発出来るのかよ！？」

「なのはさんー！！！！」

ヴィータとスバルが大声を上げてなのはの安否を気遣う。

すると、モニター画面に映し出された粉塵から、額から血を流し満身創痍の姿となったのはが出てきて、斬月から逃れようとしていた。

「はっ！はっ！はっ！！！！」

肩で息をして必死に逃げ回るなのは。

だが、そんななのはに容赦なく攻撃を仕掛ける斬月。

斬月は瞬歩でなのはに横に付いてなのはに刃を向ける。

驚愕するのは恐怖を抑えてレイジングハートで斬月を受け止める。



「逃げもせず己のデバイスで私の刃を止めたことは褒めてやろう。たいした女だ。だが・・・そんな杖デバイスで防ぎきれるほど・・・斬月わたしは優しくはない。」

すると、斬月の刃がレイジングハートの装甲に輝をいれた。

驚愕するなのは急いでレイジングハートを斬月から離そうとしたが、離れた瞬間に装甲の一部が二つに切られて、破片がなのはの顔を横切った。

「・・・そ・・・そんな！」

危険を感じたなのは全速力で斬月から回避し、その最中でなのは心中動揺を抑え切れずにいた。

「（嘘でしょ！あんなのありなの！！レイジングハートの装甲を切り落とすなんて！）」

そう考えていると、なのはの横から斬月の声が耳に入ってきた。

「教えてやろうか・・・お前は理性で内なる本能を押さえ込んでいるのだ・・・高町なのは。」

「くっ！！！」

なのはは焦燥と恐怖を抱え込んだまま斬月目掛けて魔法砲弾を発射

するが、当然そんな攻撃など斬月に当たるはずも無かった。

そして、攻撃をかわす斬月はさらになのはに続けてこう言った。

「殺気が籠もっていないのだ。敵を心の底から斃すという覚悟が貴様の攻撃にはない。理性で敵を倒し理性でその本能を必死に押さえ込み、敵を殺そうとすることに恐怖を覚えている。だから、こうして簡単に弾かれてしまう。」

すると、斬月はなのはの持つレイジングハートをあしらうかのように簡単に斬月で投げ飛ばした。

レイジングハートはなのはの後方数十メートルまで飛ばされ、なのはは完全に無防備になった。

「は………!? レイジング……ハートが!?!」

「さて、杖は無くなった。どうする? まだそのままに向かってくるか? なに、杖は無くてもいくつかの砲撃魔法の類を撃つことなど、お前には造作も無いだろう。だが、それはもう度胸や勇氣ではないという話だ。はつきりと言っておこう。まだそんな覚悟きせつで私と戦う気ならば、私はお前を殺す。」

斬月の言葉を聞いた瞬間、なのははいても経ってもいられずに斬月から死にもろぐるいで逃げ回った。

逃げ回るなのはの瞳からは恐怖の涙が零れていた。

「（死んじやう！！殺されちゃう！！本当につ！！無茶苦茶だよ！あんな強いなんて・・・思ってもいなかった！！情けない。何なの、私は？どうして逃げるの？今迄の戦いを通して、私が得てきたものは何だったの？私の”覚悟”っていうのは、斬月の言うようにそんな小さなものだったの？嫌だよ・・・嫌だよ！！全く、救いよりの無い甘ったれだよだ）」

斬月の攻撃をまるで恐怖から必死に逃れようとする小さな命の如く、なのはは涙を流し逃げ回る。

それでも、斬月はなのはに隙を見せず攻撃を仕掛けてなのはを追い込む。

そして、なのはが斬月からほんの少し距離を取った瞬間、なのはの目の前に意外な人物の姿が現れた。

君は・・・なぜ逃げるの・・・なのは・・・

突然現れたその人物とは、なのはが模擬戦の前日に夢の中で出会ったユーノに酷似した少年だった。

「・・・君は・・・あの夢くせの・・・！」

どうして君は逃げるの？君はまだ僕の名を呼んでいない。

「えっ!?!」

前を向いて、なのは。今の君には聞こえるはずだよ。斬月に諭されて本当の覚悟を理解した君ならば。君の耳を塞いでいるのは、取るに足らない恐怖心だ。

その言葉を聞いたなのはは、ふと我に帰り斬月に背を向けたまま立ち止まった。

そして、なのはの後でその青年はさらに続けて語りだす。

敵は一人だ。そして君も一人。何を恐怖する必要があるのさ? 恐怖を捨てて、前を見て。進むんだ、そして立ち止まらないで! 後ろを見るな、覚悟を決めて! 叫んで!! 僕の名は・・・

そして、次の瞬間なのは右手を力強く握り締め、斬月に振り返りながらその名を叫んだ。

「・・・澄み渡れ・・・『せいかい星海』!!!!」



## 第47話：星空喜劇

突然、逃げることをやめ立ち止まったなのはを見ている斬月とモーター画面の六課一同。

「何や・・・なのはちゃんに斬月さん。二人とも急に立ち止まったで・・・!？」

「なのはママ・・・」

なのはの様子を心配そうに見つめるヴィヴィオ。

斬月は徐に斬月の刃をなのはに向けて構えを取った。

そして、なのはその頃、精神世界の中で自分に向けて話しかけてくる青年の言葉に耳を傾けていた。

恐怖を捨てて

すると、なのはは声の導きに従い徐々に右手に力を込める。

前を見て。

言葉を聞くにつれてなのはは、自身を支配している恐怖を少しずつ拭い去っていく。

進むんだ

そして、なのはは力の籠もった右手をまるで鞘から刀を取り出すかのような姿勢で静止する。

そして立ち止まらないで！

斬月もモニター画面の六課一同もなのはの行動に目を疑い困惑する。

後ろを見ないで

なのはは青年の言葉を聞けば聞くほど恐怖を失い、代わりに”斬月”に対する覚悟を強めていく。

覚悟を決めて！

青年は最後に自分の名前をなのはの耳に届ける。

叫んで！！僕の名は……

そして、覚悟の決まったなのはは、次の瞬間斬月に振り返りながらその名を叫んだ。

「……澄み渡れ……『星海』！！！」

なのはがその名を叫んだ瞬間、なのはの右手からとてつもない量の光が発生し、斬月を始めとするモニター画面全員目を一瞬で眩ま

した。

突然の光に誰もが驚愕する。

「……ここ……今度は何だよ!?なのはの奴……どうしちゃったんだよ!?!」

ヴィータが片目を開けながらモニター画面のなのはの行動に疑問を抱く。

そして、ボンゴレや死神関係者もなのはの様子を片目で怪訝そうに見つめる。

「何だ……なのはさんの右手が急に……!?!」

「一体、何がどうなってるんでしょうか!?!」

石田とハルは右腕で光を遮るようにモニター画面を覗く。

その光景を後ろの壁によしかかっで見っていた真之介は、眉間に皺を寄せながらただじつと様子を画面を覗くだけだった。

第1フィールドでなのはの異変に気付いた一護とツナは、二人して第2フィールドのほうへ目を向けた。



「何だ……!?この気配……なのはか!?けど、この知らねえ  
霊圧は……何だ!？」

「……まさか……これもなのはものなのか!？」

そして、斬月の視界を突然遮っていた巨大な光は徐々に晴れていき、  
サングラスの下から前方の光景を見ていた斬月の瞳に、なのはの姿  
がゆっくりと現れた。

だが、それはいつものものではなかった。

モニター画面でそれを見ていた六課一同とボンゴレ、死神関係者は  
笑止沈黙した。

彼らが目撃したなのはというのは、空中でしゃがみながら右手に星  
型のチャクラムのような刀を持っていたからだ。

それを見た斬月はふいになのはに尋ねた。

「何だ……それは……?お前の能力のひとつなのか……高町  
なのは……!？」

すると、なのははゆっくりと立ち上がり斬月に対して先程までとは全く違う、覚悟の籠もった瞳でこう応えた。

「ええ……そうです。『星海』……私の斬魄刀の名です。」

「

その言葉を聞いたモニター画面を見ていた全員は、特に死神関係者は驚きを隠せなかった。

「なっ……莫迦な!? 何故なのは殿が……死神でも無いのに、斬魄刀を持っている!?!」

「いや……元来霊力も持たないのが、どうしていきなりこんなことが出来る!?! しかも、斬魄刀の解放なんて真似、いつ何処で覚えたんだよ!?!」

なのはの発言と手に持つ斬魄刀の姿に困惑するルキアと恋次。

すると、シグナムもリインも同様に困惑する。

「確かに……魔導師であるのはが、何故突然死神の力を手に入れたのか……全く見当付かない!?!」

「それに……なのはさんのあの刀の形……刀と言うよりまるで投擲武器の一種、チャクラムに酷似しています。あれが本当に斬魄

刀なんでしょうか!？」

そんななのはの様子を眉間に皺を寄せながらじっと見つめる斬月。

なのはは徐に自身の右手に持つ星型のチャクラムに酷似した刀、星海を顔に近づけ凝視する。

そして、それと同時に全身から伝わってくる魔力以外の力、すなわち死神の持つ霊力というものを実感していた。

「……………」

すると、黙っているのはを見た斬月は、ほくそ笑んで高鳴る興奮を抑え込めることが出来なかった。

「……成る程。どうやって死神の能力ちからを手に入れたのかは知らぬが、漸く面白くなつてきそうだ。これぞ、私が希い求めてきたものだ、高町なのは!」

「そうですか……私もやっとあなたの言葉で目が覚めました。あなたが仰った覚悟の意味を始めて理解出来たんですから。多分此処からは……気を緩めなくて済みそうですよ……」

すると、なのは一瞬で斬月の目の前から姿を消した。

斬月はその速さを見た瞬間、あることに気付いた。

「（今は……『フラッシュムーブ』ではない……『瞬歩』だ  
！！）」

すると、斬月の頭上に瞬歩で移動してきたのはが斬月目掛けて五本の刃を振り落としてきた。

霊圧を察した斬月は瞬く間にその斬撃を押さえ込んだ。

だが、なのはの攻撃には先程まで籠もっていなかった覚悟があり、予想以上に重いものだった。

斬月は咄嗟に振り払いなのはと距離を取った。

すると、なのは星海を握り締めた手を斬月に向けてこう言った。

「……星空喜劇・第一幕『ほしぞらいつまげき・たあめのあまむ天之川』！！」

すると、なのはの頭上から斬月目掛けて無数の刃たちが降り注いできた。

斬月は月牙天衝でそれらを振り払おうとしたが、振り払えば振り払うほどその数は増すばかり。

止むを得ず攻撃を回避しようとするが、刃の流星群は追尾して斬月を追い詰めていく。

そして、その間になのは飛ばされたレイジングハートを拾い、星海

とともに斬月に渾身の一撃を仕掛けようとしていた。

「レイジングハート、星海……一緒に行くよ……」

すると、なのはは魔法陣を展開し星海をエクセリオンモードのレイジングハートの先端に取り付けて、自身のありったけの魔力と霊力を融合させてそれを斬月に向けて発射した。

「これが私の……全力……全開!!!!!!」  
『スターライト・オーシャン明星の星海』!  
「!」

エクセリオンモードのレイジングハートから発射される、強大な魔力と霊力が籠もった砲弾が、逃げ惑う斬月目掛けて発射された。

斬月は瞳孔を開いたままその砲撃に直撃した。

直撃の瞬間、第2フィールド全体はとてつもないほどの爆風と轟音に包まれ、カメラの一部が破損するほどの勢いとなった。

「なっ……!?!?どうなったんだ……一体!?!?」

「斬月さん……やられちゃったのかな!?!?」

茶渡と井上が激しい勢いでモニター画面に差し込む光から目を遠ざ

けながら、斬月の様子を窺がった。

他の全員もなのは放った並外れた攻撃に驚愕しながらモニター画面を覗こうとした。

だが、肝心のモニターは映像が乱れてはつきり映っていない状態だった。

つまり、それだけなのはの攻撃がとてつもない威力を有していたことは、自明の理だった。

そして、ゆっくりと映像が回復してモニター画面いっぱい強烈な光が徐々に晴れ、第2フィールドの様子が見えてきた。

全員固唾呑んでその光景を見てみると・・・使いものにならないくらいに、ボロボロとなった転神体の人形が地面に落ちていた。

そして、それを見たなのはも一気に全身の力が抜けてとうとう空から落下して行った。

「なのは!?!」

「なのはママ!?!」

フェイトとヴィヴィオはその光景を見てかなり動揺するが、そんな二人に対して真之介は鼻で笑った後にこう言った。

「心配すんじゃないやねえよ！全身の力を使い切って気を失っただけだ。よく見てみる……」

真之介はそう言うと二人にモニターを見るように仕向けた。

すると、そこには地面で満身創痍の状態ですやすやと眠っているなのはがいた。

そして、その横には通常の状態となったレイジングハートと、解放前の星型の鍔をした日本刀の姿となった星海があった。

第2フィールド……高町なのは対斬月。

その勝敗は、真の覚悟を宿し己に与えられた斬魄刀を解放し、巨大な力で斬月を圧倒した、高町なのはが勝者となった。

第1フィールドで斬月の霊圧が消えたことを確認した一護は、ゆっくりと目を瞑り決意を固めた。

「そうか……オッサンが負けたのか……ありがとう。ゆっくり休んでくれよな……最後の試合は、この俺が勝って終わりにするぜ……」

そして、一護は改めてツナのほうに目を向けた。

いよいよ、模擬戦も大詰めを迎えようとしていた。





## 第47話：星空喜劇（後書き）

### 次回予告

なのはが自身の斬魄刀を解放して、あの手強い相手の斬月を圧倒したぞ。

ツナも負けじと、ナッツを取り出して応戦するが・・・死神である一護の月牙に大空の調和は効かねえみたいだぞ。

いよいよ、バトルも大詰めを迎えようとした矢先・・・俺たちの前に、予想もしないことが起こった。

次回、次元の破壊者・・・「コネホ襲来！」

みんな、死ぬ気で見ろよ。

## 第48話：コネホ襲来！

「な……なのは……さんが……あの斬月さんに……」

「勝った……！！！」

スバルとティアナはあの強敵である斬月になのはが勝利したことにいまいち実感できないでいた。

そして、他のメンバーも二人と同様の心情だった。

そして、暫くの間沈黙を保ち、そして……ヴィヴィオが満面の笑みで叫び声を上げた。

「なのはママが勝ったんだ！！！！」

その瞬間、六課全員は嬉しさのあまり飛び跳ねたりお互いを抱擁したりハイタッチをしたりなどと幸福でいっぱいだった。

「やったよ、ティア！！なのはさんが勝ったんだよ！！！」

「うるさいわね！！そんなの決まってるじゃないの！！なのはさんが負ける訳無いじゃないの！！！」

スバルとティアナはお互いに抱擁し合い喜びを分かち合い、エリオ

とキャラも同様に喜びを隠し切れずに手を握り合っていた。

リンもヴィータに抱きつき嬉しさのあまり号泣していた。

「うああああん！！一時はどうなるかと思いましたが、なのはちやんが勝って本当によかったです！！」

「こらリン！！鼻水をたらすな、きたねえーなだろ！！」

そんな様子を見ていたフェイトとシグナムは二人揃って笑顔になった。

「流石だなのはだな・・・あの手強い斬月を倒すとはな・・・正直あいつが怖い・・・」

「本当・・・やっぱりなのは強いですね。私なんて・・・こんなにポロポロになった拳句、負けましたからね。」

すると、そんな頂垂れてるフェイトにはやてとヴィヴィオが励ましの言葉を送る。

「うんうん・・・フェイトちゃんもよう頑張ったよ。実際、なのはちゃんやってあんなにポロポロになっているにもかかわらずよくあそこまで戦ったんや！フェイトちゃんも悔やむ必要ないよ！」

「そうだよ、フェイトママもすごい頑張ったよ！私、フェイトママがなのはママと同じくらい頑張ったって知ってるから、だから・・・そんな顔しないで！」

はやての言葉とヴィヴィオの屈託の無い笑顔にすっかり励まされたフェイトは、思わず嬉しさのあまり涙を垂らし、二人に素直な気持ちでお礼を言った。

「ありがとう……はやて……ヴィヴィオ。私、すっごく嬉しい……」

一方、第1フィールドで行われている一護とツナの試合はというと、以前一護のほうに軍配が上がっている状態だった。

モニター画面でその様子を見ていたりボーンを始めとするボンゴレ関係者と死神関係者は、固唾を呑んでじっと見守っていた。

すると、ツナが再び一護に向かって突進してきた。

一護は得意の瞬歩で回避し、再び月牙天衝を放つ。

「月牙……天衝……!!」

ツナは超直感で瞬時に技の軌道を読み、当たる寸前で攻撃を回避する。

一護は直ぐにツナの真横に現れ刀を振りかざす。

だが、負けじとツナも炎を逆噴射させて一護の斬撃を回避する。

「やるな、ツナ！やっぱり一筋縄ではいかねえな！！」

「お前もな……一護……」

二人のそんな様子を見ていたボンゴレ関係者達は手に汗握りながら、ツナの勝利を願っていた。

なのはの試合を見終わり一緒にモニターを覗く六課一同も目が釘付けだった。

「す……凄い……こんな戦い……始めてみたかも……!?!?」

「これが……ボンゴレX世と死神代行の激突……!?!?さっきなのはさんの戦いもそうだったけど、やっぱり……レベルが違うわ。」

「だが、レベルが違うといっても所詮沢田は人間のレベル。死神である黒崎のレベルとはまた次元が違う。この勝負……どちらに軍配が上がるかは自ずと見えているようにも思えるが……」

シグナムがそう言うと、この場合は獄寺が文句を真つ先に言おうとするのだが、今回は何故か京子が真つ先にシグナムの言葉に反論してきた。

「そんなことありませんよ!! ツナ君はそんなに弱い人なんかじゃありません!! ツナ君の強さもろくに知らないのに、勝手なこと言わないでくださいよ!! あっ、ご……ごめんなさい!!! 私ったら何言ってるんだろう!!!」

京子は自分でも驚くぐらいの大声でシグナムに怒鳴りつけたことに羞恥心を覚えた。

そんな京子の意外な行動に全員は驚きを隠せないでいた。

「京子……お前……」

「奥方……」

了平も獄寺も思わず口をもらす。

そして、リボーンはそんな京子の様子に目を向けつつモニター画面のツナに向かって心の中で喝を入れた。

「（京子の奴があんなになっってお前のことを応援してんだ……ツナ、あいつや俺らの期待を裏切んじゃないぞ。）」

その頃、第1フィールドのツナはと言うと……一護の月牙天衝をかわしながら攻撃を仕掛けるも、中々思ったとおりに一護に急所を入れられるずに息を上がらせていた。

既に第1フィールドの大半のビル群は一護の月牙天衝だけで大破されて、跡形もなくなっていた。

「はっ、はっ、はっ、はっ……くそ！……思ったとおり攻撃が当たらない。おまけに俺のX BURNERと違い、一護の月牙天衝は連続で攻撃をすることが可能……一体どうすれば……！？）」

すると、ツナのズボンに繋がれている鎖が動き始めた。

それは、ツナのボンゴレボックス匣兵器であるナッツがツナに開匣するように震えだした。

「ナッツ……わかった、頼む！」

そして、ツナは大空のボンゴレリングに炎を灯し、ボックスを開匣した。

中からは、ツナの動物ボアニマルックスであり武器でもある天空ライオンが飛び出し、ツナの左腕に乗った。

「天空ライオンVer・V（レオネ・ディ・チエーリ バージョンボンゴレ）」

モニターでツナの様子を見ていた六課一同は、ツナのボックス兵器



であるナッツに興味津々だった。

「何あれ・・・！？ライオン！？」

スバルがそう言うと、京子が満面の笑みで返答した。

「はい。あれがツナ君のボックス兵器・・・ナッツ君です！」

「よっしゃ！！ナッツが出れば怖いもんなしだぜ！！そのままオレ  
ンジ頭をぶちのめして下さい、十代目！！」

獄寺がそう言うと、山本も了平も一気に熱が入った。

京子もハルもクローム、モニター画面のツナに向かって励ましのエ  
ールを送る。

だが、リボーンだけは黙り込んだまま重い症状を浮かべていた。

後ろで見ている真之介も同じだった。

「（ナッツを取り出したはいいが・・・果たしてツナよ・・・それ  
で本当に一護に太刀打ちできるのか！？）」

心中真之介はそんなことを考えていた。

そして、ナッツを取り出したツナを見た一護の熱も更に活気付く。

「漸く出しやがったか・・・だったら俺もそれなりの仕方できかせ  
て貰うぜ!!!」

「ああ・・・そうしてもらおうか・・・一護」

その言葉を聞いた一護はすかさずツナ目掛けて月牙天衝を放つ。

その瞬間、ツナはナッツに指示を出す。

「ナッツ・・・!」

そう言うと、ナッツは向かってくる月牙天衝目掛けて雄叫びを上げ  
た。

これは、大空属性の特徴である調和作用を利用したもので、対象を  
周囲の環境と同化させる能力を持つ。

その効果は周囲のものを石化させることだ。

「よし!これで厄介なあおの技を石化させれるぞ!!!」

了平がガッツポーズをだしてモニター画面を覗くが、全員は予想外  
の光景を目撃した。

一護の放った月牙天衝は石化をすることはなくそのままの威力でツ  
ナとナッツに目掛けて飛んできた。

「なっ！？」

ツナは咄嗟に月牙天衝を除けたが、ツナとナッツは驚きを隠せず  
いた。

「（ナッツの雄叫びが効かない・・・！？本来なら、大空属性の調  
和で周囲のものは石化する筈。なのにどうして？）」

納得のいかないツナに対して、一護は不敵な笑みを浮かべてツナに  
語りかけた。

「解せないか？大空属性の調和を込めたナッツの雄叫びが、何で月  
牙天衝には通じないってか。何・・・簡単な話だ。月牙天衝こいつは俺の  
霊力の塊・・・つまり、この世の物質じゃない。現実にある物質を  
石化させるならまだしも、この世のものでない霊力の塊をどうやっ  
て石にすればいいだよ、ツナ？」

「なっ！？」

「今度はもつとデカイの食らわせるぜ・・・ちゃんとガードしねえ  
と、怪我じゃすまねえぜ、ツナ！！」

すると、一護は斬月の巻き布を高速回転させその斬月に霊力を込め  
てツナに回転を加えて投げつけてきた。

「ついさっき思いついたもんだ・・・月牙・・・天嵐！！！」

高速回転した月牙天衝が嵐の如く襲い掛かってきた。

ツナは急いでナッツに指示を出した。

「ナッツ・・・カンビオ・フォルマ形態変化・・・防御モード（モードディフェンダー）  
！！」

すると、左手の甲に乗っかっていたナッツのボンゴレエンブレムが  
光り輝き出し、次第に形を変えていった。

そして、形態変化したその形とは・・・ボンゴレー世が着用してい  
た、ボンゴレー世のマント（マンテッロ・デイ・ボンゴレプリーモ）  
だった。

どうにか、乱雑に襲い掛かる一護の月牙天衝を防いだツナだが、技  
の威力に耐え切れずにナッツは形態を崩し直ぐに元に戻ってしまった。

お陰で、ナッツの身体はボロボロだった。

「ありがとう、ナッツ。無理をさせたな。」

「ガオツ・・・」

疲れ切った様子でツナの肩に乗るナッツ。

その間に一護はツナに容赦ない攻撃を仕掛け続ける。

「どうしたツナ！？俺はまだまだピンピンしてるぜ！！そんなんじ  
ゃ俺は何時まで経っても倒せねえぞ！！」

「くっ!!」

そして、斬月を回転させながら一護はツナとの勝負に決着をつけようと思いついた。

「どうやら万事休すのようだな……なら此処で……終わりにするぜ!!」

そして、一護は再び斬月に霊力を込めてツナに発射しようとした。

「月牙……」

その時だった。

一護とツナがいる第1フィールドの頭上から突然何者かが幻覚を突き抜けて侵入してきた。

それを見た一護とツナ、そしてモニター画面の全員は驚愕した。

「な……なんだ!? 何者かが幻覚を突き破って来たぞ!？」

「莫迦な!? おれの超幻覚はちょっとやそつとの奴じゃ破れねえ筈だ!! それを破るってことは……まさか!？」

一護とツナは一端戦闘を中断して、頭上から進入してきたものを警戒した。

「何だ！？上から誰かが入ってきただと!？」

「気をつける一護・・・何が出てくるか分からない。」

一護に注意を呼びかけて前方に見える土煙を見つめるツナと一護。

すると、煙の中からは白髪の男が姿を現した。

「やれやれ・・・待つのがつてやっぱ退屈なんだよな。寝てるのも悪くは無いが、どうもそれだけじゃつまんねんだよ・・・だからこつそり来てみたら・・・どうやら良い所に出てこられたもんだぜ・・・」

「てめえ!!この幻覚をどうやって破った!?それと一体何もんだよ!!!」

「そう大声をだすんじゃないやねえよ・・・つきつ腹に響く。俺が何者勝手か・・・お前も通だね・・・所詮名前なんてモンは生きていくうちじゃそんな価値あるものでもないんだぜ・・・」

一護の質問をまるで軽く受け流すかのように耳をほじるその男。  
すると、ツナも怒りを露にして尋ねてくる。

「ふざけるな!!質問に答える・・・お前は何者だ!？」

ツナがそう言うと、男は深い溜息をついた後渋々質問に応じた。

「まったく・・・せつかちな奴は好きじゃねえんだけどよ・・・応  
えないほうも気分が悪いしな・・・いいぜ、教えてやるよ。俺は・  
・『アスタ・アキ終末』・・・エルトゥーダ十二使徒の一人・・・コネホ。」

「アスタ・アキ・・・・・・・・・・」

「コネホ!?!」





## 第48話：コネホ襲来！（後書き）

### 次回予告

突然俺たちの前に現れた謎の男・・・コネホ

コネホは強力な結界で一護を退け、ツナと一対一で戦い始めた。

圧倒的なコネホの力に為す術もなく胸に孔を開けられたツナ・・・

一護たちは、こいつにどう立ち向かっていくのか・・・

次回、次元の破壊者・・・「堕ちたる大空」

みんな、今度も正解して見ろよ。

## 第49話：墮ちたる大空

モニター画面で第1フィールドの様子をずっと見ていた全員は、只ならぬ予感を感じ直ぐに第フィールドに直行した。

一方、一護とツナの前に現れたコネホは、大あくびを搔いては疲労したような目で二人を見つめる。

「ところでよ……一つ聞いてもいいか？お前らのどっちが……  
沢田綱吉だ!？」

一護とツナは驚愕した。

二人は眉をひそめ、歯を食いしばってコネホのほうを見た。

「てめえ!!何だつてツナのことを知ってやがる!!大体、てめえは俺たちに何の用があるんだよ!!」

「あまり怒鳴るなよ……別に大したことじゃねえよ。俺はただ……ボンゴレの十代目の実力がどの程度のものなのか知りたいだけだ。まあ……でも、そんなに怒鳴るってことはお前は死神代行の黒崎一護のほうだろうな。」

「なっ!?!てめえ、俺のことまで!?!」

「生憎俺はお前さんには用はない・・・どっか行ってる・・・」

そう言うと、コネホは一護に右人差し指を向けて軽く左のほうへ払った。

すると、一護の身体はまるで何かに引き付けられるかのようにコネホが払った方へとつもないスピードで飛んでいった。

その衝撃で一護はビルに大激突した。

「一護！！お前・・・何故こんなことを！？」

「いちいち理由を尋ねるなよ・・・俺はあまり質問に答えるのは好きじゃないんだ・・・さて、邪魔者はいなくなっただとところでそろそろラウンドといこうか、沢田綱吉。」

すると、コネホは指を鳴らしツナと自分の周りを囲むように強力な結界を張り巡らせた。

その光景を目撃した他のメンバーは、急いでツナの元へ近寄っていたが。

「十代目！！今俺がお助けします！！」

「沢田！！極限待っておれ！！」

すると、ボンゴレの守護者の全員が力を出し合い結界を破壊しようと試みたが、結界は攻撃を受けてもびくともしない。

「なっ！？ボンゴレの攻撃を受けてもびくともしないなんて!？」

「だったら・・・今度は私達が。」

すると、今度はフェイトを中心に六課一同が技を出し合い結界を破壊しようとしたが、結果は同じだった。

そして、死神関係者も試みたが結果いうを破壊することは出来なかった。

「くそ！僕達の攻撃を以つてしても破壊できないのか!？どうなっているんだ？」

「おそらく・・・こいつは対俺達用に構成された高等結界だ。ここはツナがあいつを倒さない限り、結界は破れねえな・・・」

真之介がそう言うと、京子とハルは不安でいっぱいとなりながらもツナの勝利を信じるように祈りをささげた。

「あのコネホって奴・・・そうとうヤバイ臭いがするぜ・・・こいつは、かなりヤベー戦いになりそうだな・・・」

リポーンは結界の中のコネホを凝視しながらツナのほうを一瞥した。

他の全員もこの戦いでツナが勝利することを心から願った。

「さてと・・・観客も出揃ったみたいだし、そろそろ始めようか・・・」

・死のタイトルマッチをな・・・」

気だるそうな目をしていながらもコネホはツナに強烈な殺気を送る。

ツナはその殺気に耐えながらも、ナッツを肩に乗せたまま拳を構えて戦闘体制に入り、そして両者は突進して行った。

「はあああ!!」

「ぬあああ!!!!」

両者の拳はぶつかり合い衝撃音を上げる。

ツナはさらにコネホに間髪いれずに拳の乱打を仕掛ける。

だが、コネホはそれをあしらうかのように容易くかわし続ける。

獄寺達はその光景に驚愕した。

「じゅ・・・十代目の攻撃を!？」

「なんて奴だ!ツナの攻撃を軽く受け流してやがる・・・!？」

そして、攻撃の間を突いてコネホはツナの拳を手で止めると、ツナの顎目掛けて鋭い蹴りを炸裂し空中に突き上げる。

ツナは咄嗟に両腕の炎を逆噴射させ、その勢いでコネホの左頬に蹴りを食らわす。

しかし、鼻血を出しながらもコネホはツナの右足首をつかみ砲丸投げの要領で結界のほうへ投げ飛ばす。

「くつら!!!」

飛ばされたツナは結界に直撃し、結界に罅割れが入るほどだった。

全員はツナとナッツの安否に注意を向けた。

「ツナ君!!!」

「綱吉さん!!!」

ナッツは衝撃に耐えられず気絶しボックスに戻っていった。

ツナは自力で立ち上がり口から唾を吐くように血を吐き出した。

コネホはふいに右耳を気にしてみると、いつの間にか耳からも出血していたことに気付いた。

そして、ツナを見るなりふと不気味な笑みを浮かべ笑い出した。

「へっ……ふふ……ふふふふつはあはははあははは!!!ろくに戦場に出たことも無いガキが俺に喰らいついてくるとはな……成る程、流石は由緒あるボンゴレファミリーの十代目ってところかだが、悪いことは言わねー……直ぐにあんな連中とはお去らばずることをお勧めするぜ。こんな社場い奴らと微温湯に浸かっていたら、その一級品の才能を潰すぜ。なんなら、俺がお前にもっとお勧めの守護者どもを探してやるうか?」

コネホがそう言うと、ツナは一瞬の速さでコネホに向かって強烈な拳をヒットさせた。

コネホは咄嗟に両腕でツナの拳をガードしたが、威力はまるで別物だった。

コネホは腕の衝撃に益々興奮を昂ぶらせ、不敵な笑みを浮かべる。

そして、ツナは額や口から血を流しながら澄んだオレンジ色の瞳を向けながらゆっくりとコネホに向かって歩いてくる。

「お前の推薦などご免だ・・・俺はたとえボンゴレの忌まわしい記憶を受け継ごうが、血を引こうが関係ない。俺は・・・俺の仲間達ファミリーと共に、自分の戦場は自分で切り開く。お前とは違い・・・奪うためではなく、守るために・・・魂ソウルで・・・自分の守りたいもののために戦場に立つ。戦いは好きじゃないが、何かを守るためには戦うしか道は無い。それを邪魔するなら・・・たとえ誰であろうが・・・倒す！」

そう言うと、ツナは炎を逆噴射させてコネホに向かって行った。

ツナは満身創痍でありながらも決してコネホに対して攻撃を止めようとしなない。

そんなツナの戦う様子をリボン達はじっと見守るしかなかった。

コネホはツナの攻撃を受け流しながらほくそ笑み心中こんなことを

考えた。

「（血の命ずるままに戦う俺たちと、魂ソウルの命ずるままに戦うボンゴレX世・・・いや、血で戦う俺たちと血と戦う少年って行ったほうが言いのかね？どうやら根本的に和解なんて無理だって話だなこれは・・・だが、残念ながらお前さん・・・そんなことじゃ一生掛かっても俺には勝てやしねえ）」

「はああああ！！」

そして、ツナの炎を纏った右ストレートがコネホの左頬にクリーンヒットした。

だが、コネホはそれを受け止めたまま余裕の表情でツナに質問をしてきた。

「さてここでクイズだ・・・」守る拳」と殺す拳」、どちらのほうが重いかな？正解は・・・」

すると、コネホは拳に力を込めるかと思いきやツナの注意の際を突いて強烈な蹴りを腹部に当てた。

「殺す蹴り」だ！」

蹴りの勢いで数メートル飛ばされたツナは地面に倒れこみ、腹部を押さえながら悶絶していた。

そして、そんなツナにゆっくりとコネホが近付いてくる。



「言い忘れてたが、此処ではお前さんの得意の超直感効かない。さてクイズの答えだ・・・腕力よりも脚力のほうが遥かに強いからな。え？詐欺だって・・・固いこと言うなよ、たかがクイズだろ。気付かんかね、お前さん・・・無意識のうちに拳に急ブレーキを掛けてしまつてることに。」

そう言うと、悶絶するツナの右腕をコネホは容赦なく踏みつけてくる。

「だあああああああ！！！！」

強烈な痛みで悲鳴を上げるツナとそれを見下ろすコネホ。

結界の外でそれを見ていた全員のうち、女性陣の多くは目を瞑るものもいた。

「ボンゴレの忌まわしい記憶と戦う本能を押さえ込もうとするあまり、拳が俺に届く前に死んじまつてるんだよ！」人を傷つけたくない”、”人を殺したくない”大層立派な考えだ・・・この微温湯お前の世界（地球）ではな。」

コネホは悲鳴を上げるツナの顔を今度は力いっぱい踏みつける。

喋ることもできず一方的に攻撃を受け続けるツナ。

「だが、戦場ではそんなもんは通じない。戦場では・・・迷つたものから死んでいく！戦う本能を誇る俺たちと、それを拒絶するお前達とじゃ、最初から勝負に<sup>はな</sup>なかなりやしねえ！」

「ツナ!!」

「十代目!!」

獄寺や山本の悲痛な叫び声も、結界の中の二人には届かない。

そして、コネホは瀕死の状態のツナの首元を徐に？み自分の目の前に持っていく。

「だが・・・俺もそんなに短気じゃねえんだ・・・このままお前を殺しても何の面白みも無いんでな・・・そうだ、ここは一つ置き土産を置いていくぜ・・・そいつを使いこなせるようになったら、また相手をしてやるからよ。」

すると、コネホは右手の手刀でツナの身体の中心目掛けて孔を開けた。

ツナの身体からは血塗れのコネホの右腕が確かに貫通していた。

全員は、その光景を見た瞬間・・・まるで時間を静止したかのよう  
に動きを止めた。

そして、コネホの力によってビルのはうへ飛ばされた一護も漸く目を覚まして、結界のほうを見てみた。

「いててて……くそ！何て奴だ……一体どうなっ……」

一護はその光景を見た瞬間、言葉を失った。

そして、暫くの沈黙を保った後……一護は叫び声を上げた。

「ツ……ツ……ツナ!!」

その言葉と同時に京子も涙を流しながら悲痛の叫びを上げた。

「ツナ君!!」



## 第49話：墮ちたる大空（後書き）

### 次回予告

コネホの攻撃によって、ツナの身体に孔が開けられた。

怒りを抱いた一護達が結界を解いたコネホに攻撃を仕掛けるが、まるで歯が立たねえ・・・

そんな時、コネホの元にまた新たな刺客がやってきた

次回、次元の破壊者・・・「途切れた結末」

その時、俺たちは何を見る

## 第50話：途切れた結末

一護と京子の悲痛な叫び声が第1フィールドに響き渡る。

獄寺たちや死神関係者、六課一同はあまりの状況に冷静さを保てるものは極少数しかいなかった。

京子とハル、キャロはその光景を見た後その場に膝を付いて泣き崩れた。

コネホは徐にツナの身体から血塗れの右腕を取り出し、ツナをゴミのように投げ捨てた。

そして、張っていた結界を解いた。

「さて……お次は誰が来るかな？ どうせやるなら殺す気満々の奴が……」

コネホがそう言いかけると、雲雀がトンファーに雲属性の炎を灯してコネホに向かってきた。

コネホは相変わらずの気だるい表情で雲雀の攻撃を受け止めた。

「意外だな……お前は一番こついうことには無関心だと思っていたんだがな……」

「何言ってるの？ 僕は風紀を乱す奴を許さないってただだよ。沢田綱吉が倒れたから怒ってるんじゃない。でも……彼が死んじゃう

ことは、僕自身も戦う楽しみがなくなるから・・・多少イラついて  
いるけど。」

「雲雀！！！」

獄寺の声を無視して雲雀とコネホは激しい競り合いを続ける。

そして、雲雀は雲のボンゴレ匣を開匣して雲ハリネズミVer.V  
(カンビオ・フォルマポルコスピーノ・ヌーヴォラバージョンボンゴレ)を取り出し、  
カンビオ・フォルマ形態変化させる。

「ロール・・・カンビオ・フォルマ形態変化・・・」

雲雀がそう言うのと、ロールの額のボンゴレエンブレムが輝きだして  
形を変えていった。

それは、初代ボンゴレ雲の守護者が使った武器。

「アラウディーの手錠」

「そいつが噂のボンゴレ匣か・・・一体、どんな曲芸を見せてくれ  
んだ・・・ええ？」

すると、雲雀は手錠を回転させながら雲属性の増殖で数を増やして  
いき、それらすべてコネホの身体を縛り上げた。

そして、雲雀はトンファーを持ってコネホに突っ込んでいった。

だが、コネホは全くもって余裕の表情だった。

「雲属性の特徴である増殖を使った攻撃・・・大層スゲーもんをもつてるじゃなねえか・・・だが、所詮は人間のレベルだ・・・！」

すると、コネホは身体に巻き付けられた手錠を容易く取り外して雲雀に身体に強烈な蹴りを食らわした。

雲雀はその衝撃で後方に飛ばされビルに激突した。

「てめえ！！！！ほおおおおおお！！！！」

すると、今度は一護がコネホに向かって飛んでいった。

一護はコネホに向かって勢いよく斬月を振り下ろしたが、コネホは軽く左手で刃を受け止めた。

「な！？」

「良い攻撃だぜ・・・黒崎一護。殺す気満々だった・・・だが・・・」

そしてコネホはそのまま斬月を持った一護を軽々と前方のほうに投げつけた。

投げられた衝撃で一護は地面に激しく身体を強打した。

「まだまだ足りねえーよ・・・もっと殺気を出せよ・・・ウルキオラと戦ったときと同じようにあれくらいな」

そして、コネホが不意に振り返ると、井上がツナの元に駆け寄り治療を行おうとしているのが見えた。



「させねえよ！」

コネホは左手から霊圧を固めて放つ技、虚弾<sup>バラ</sup>を井上目掛けて放った。虚閃の20倍の速度で井上に襲い掛かり井上は衝撃でツナの元から弾き飛ばされてしまった。

「井上っ！！！！！！」

一護の叫びもむなしく井上は虚弾の衝撃で気を失った。

「もう我慢らなねえ！！私らも出るぜ、シグナム！」

「ああ・・・女性にまで手を出していながら、黙って見ているほど我々もバカではない・・・いくぞ、テストロツサ」

「了解！」

フェイトとヴィータ、シグナムの3人はバリアジャケットに身を包むと一斉にコネホに向かって行った。

ヴィータはデバイスに自らの魔力を乗せ、シグナムは刀身から衝撃波を放ち、フェイトは形成した雷のサーベルをコネホに飛ばした。

「テートリヒ・シュラーク！」

「陣風！！！！！」

「ハーケンセイバー！！！！！」

三人の攻撃がコネホに向かって襲い掛かった。

だが、コネホは不敵な笑みを浮かべて高速移動し三人の攻撃をかわした。

驚愕する三人。

すると、コネホは三人の背後に虚弾をぶつける。

虚弾を直撃で喰らった三人は前方に飛ばされ気を失った。

日番谷を始めとする死神関係者はコネホの技に驚愕する。

「あれは虚弾！！それにさっきの高速移動は紛れもなく響転ソニート……  
ということとは、奴は破面アラシカルなのか！？」

「どちらにしても……やっかいな相手だぜ！」

いまだ余裕を見せるコネホと一方的に不利な状況の一護達。

すると、コネホは再び不気味な笑みを浮かべると、指先を獄寺たちに向けてそこから蒼い色をした霊圧の集中された破壊の閃光を放つ。

「虚閃だ！！逃げろ、お前ら！！」

一護の叫びも虚しく獄寺たちに向けて虚閃が発射された。

そしてその瞬間強烈な衝撃音と爆風が一護達を襲った。

コネホは何の悪びれる素振りも見せずにはくそ笑んだ。

「悪い悪い・・・手が滑つちまったぜ・・・いや俺も別に態とや  
った訳じゃないん・・・ん!?!」

コネホが虚閃を撃ったほうをよく見てみた。

すると、爆風の中から斬魄刀を持ち獄寺たちを守る真之介が立っ  
ていた。

「莫迦な・・・真之介・・・どうやって俺の虚閃を・・・!?!」

「見ての通りだ・・・弾くと他所が危ねえから同じようなのぶつけ  
て相殺さすえてもらったぜ。まあ、それなりに難しかったけどな・・・」

「な・・・何だと・・・!!」

「信じられないなら・・・一つ撃ってみようか・・・ほれ、返すぜ  
」!

そう言うと、真之介は斬魄刀から吸収したコネホの虚閃をコネホに  
そっくりそのまま弾き返してきた。

コネホはその瞬間目を見開いて死を覚悟した。

だが、その時コネホの前に忽然と单身瘦躯の男が現れ攻撃を手でか  
き消した。

真之介を始めとする全員は驚愕した。

「ペロー……お前……」

すると、そんなコネホの腹部目掛けてペローは容赦ない力で拳を入れてきた。

コネホは予想外の攻撃に驚愕し、悶絶した。

一護達もこの状況に全く理解できなかった。

「な……何しやが……る……ペロー……」

「バカが。勝手な行動しやがって。次元の破壊者様からはまだ手を出すなと言われたはずだろう。それに、今のお前が真之介とやり合って敵うわけがないだろう……」

ペローの発言の中に出てきた次元の破壊者という言葉に一護達は驚きを隠せずにいた。

「一先ず一端引くぞ……」

するとその瞬間……ペローとコネホの頭上から巨大な光が注がれた。

一護達死神関係しやはその光景に驚愕したが、獄寺は怒りを露にフレィムアローで攻撃をしようとしていた。

「待ちやがれ、てめえ!!」

「止める、獄寺!!」

すると、日番谷が頭に血が上る獄寺を差し止めた。

「あの光は反膜<sup>ネガシオン</sup>って言うてな・・・メノスが同属を助けるときに使うものだ。あの光に包まれたが最後、光の内と外は干渉不可能な完全に隔絶された世界となり、最早あいつ等には触ることすらかなわねえ。」

すると、光の内側にいるコネホとペローの地面だけが浮き上がり、ボンゴレと六課メンバーは驚きを隠せずにいる。

「・・・逃げる気か？」

リボーンがニヒルな表情でそう言うと、ペローはほくそ笑み返答した。

「らしくない挑発だな。貴様ら全員がかりで死に底無いのゴミを守りながら俺たちと戦って、どちらに分があるか判らん訳じゃあるまい。今回はこいつが迷惑をかけたな。次元の破壊者様には伝えておく。現時点で真之介が目をつけたものたちは・・・殺すに足らぬ塵<sup>コミ</sup>でしたとな。」

そう言うと、ペローとコネホは上に上がって黒腔<sup>ガルガンタ</sup>の中に入っていき、そのまま穴を閉じた。

後悔の気持ちでいっぱいの一護達だったが、直ぐに気絶している面々を起こし急いでツナの元に駆け寄った。

「おい、ツナ！！しっかりしろ、ツナっ！！！」

「ツナ君！！しっかりして、ツナ君！！ツナ君！！！」

一護と京子を始めとして多くのものがツナのことを心配し声をかける。

すると、うつ伏せで倒れているツナの右腕がかすかに動いた。

全員はそれを見て些か安堵した。

しかし、リボンと一護だけは安堵の中に嫌な予感を感じた。

「（何だ・・・この妙な胸騒ぎは・・・！？）」

すると、ツナが顔を頂垂れたまま突然立ち上がった。

全員はツナの異様な行動に驚きながらもツナのことを凝視した。

「十代目・・・！？」

「ツナさん！？」

「ボス・・・！？」

全員が不思議そうに顔を頂垂れるツナを見つめていると、ツナの額から突然漆黒の黒い炎が発生し始めた。

全員が驚愕する中で一護はツナからな気配を感じ取り、全員に離れるように叫んだ。







あれは最早ツナではない・・・ただの理性を失ったバケモノだと・・・

「ヤベーな・・・ツナの奴、完全に理性を失ってやがる・・・今のあいつに俺たちの声は届かねえ・・・」

そして、その時リボーンの隣にいた一護がツナの異様な姿を見て漸く確信を持って応えた。

「<sup>ホロウ</sup>虚化・・・だと・・・!？」

一護の言葉を聞いた瞬間、死神関係者以外の全員は驚きとショックを隠しきれずにいた。

動揺するボンゴレ関係者と六課一同。すると、エリオが一護に尋ねてきた。

「どう言つことですか、一護さん!? 虚化つて・・・どうして綱吉さんが虚になんかなくなったりするんですか!？」

「そうよ! だって虚つて真之介君の話じゃただの悪霊だった筈じゃない。なのに何で綱吉君が虚になる訳!? 第一・・・あの仮面みたいなもの・・・!？」

スバルがエリオと共に一護に攻め立てるが一護自身も全く状況がつかめず困惑する一方だ。

「俺にだって分かんねーよ!!! 真之介! 一体何がどうなってるんだよ!?! 何でツナが虚化してんだよ!?!」

「おそらく・・・あのコネホって奴が、ツナ之魂魄そのものに直接介入して・・・胸を貫くと同時にツナの”因果の鎖” 諸共ぶちぬいたんだろう！！でなきゃ、奴が虚になんかなる筈がねえ！！」

「そんなことが！？おい、ツナ！！聞こえるか！！俺だ、一護だ！！！！」

だが、虚化が進行するツナの耳に一護の声など聞こえはしない。

獄寺や京子達が同じようにツナの名を叫ぶがやはり同じだった。

すると、ツナが突然一護たちの前から姿を消した。

そう、これは響転だ。一護たちは必死でツナの霊圧をたどるが、その時には既にツナは山本の前に立っていた。

「ツナ！？」

すると、ツナは山本の左腕を一瞬のうちに消し飛ばした。

その瞬間全員の顔色が一気に青ざめた。

そして、左腕を消し飛ばされ大量の血を流す山本はそのまま意識を失い倒れこむ。

「山本！！！！！！」

獄寺は山本の名を叫ぶ。

井上は直ぐに双天帰盾で山本の周りを囲む。

「逃げろお前ら!!!早くしろ!!!」

一護がそう言っていると京子やハルを始めとする女性陣はツナから全速力で逃げる。

それはまるで通り魔の恐怖から逃げるかのように。

「お止めください十代目!!!今あなたが何をしたのか・・・判っているんですか!？」

するとツナはそう言う獄寺に一瞬で虚弾を放ち左腕と肋骨から腸までをそっくり抉り取った。

その光景を目撃したハルと了平たちは悲痛の叫び声を上げた。

「獄寺さん!!!!!!」

「タコ頭っ!!!!!!!!!!!!」

「あやめ!?!」

井上は直ぐにあやめを獄寺のほうまで伸ばし結界を張った。

一護とリボン、そして石田はこの状況にかなり焦っていた。

石田は何とか冷静に状況を確認しようとした。

「まずいな。綱吉君の虚化が異常なほど早いぞ！！響転だけでなくまさか虚弾までも撃てるとはな！このままじゃ綱吉君は僕達を皆殺しにしかねない状況だ。」

「何！？それじゃあどうしろって言うんだよ！？」

「おい、ツナの様子が変わだぞ・・・」

リポーンがそう言うと、ツナは口を開き口腔内からオレンジ色の閃光を生成し、さらには左手からは巨大な漆黒の死ぬ気の炎を発射しようとしていた。

「虚閃と・・・黒いX BURNERだと！？皆もつと遠くに逃げる！！死ぬぞ！！！！！！！！！！」

だが、ツナは容赦なく一護達目掛けて虚閃と黒いX BURNERを発射してきた。

一護達は避けきれずに全員が巻き添えを食いその場にいた全員が満身創痍となった。

直撃を避けたものの二つの技をくらったお陰で、殆どの者が戦闘不能となってしまった。

残ったのは一護・石田・茶渡・恋次・日番谷・リポーン・フェイトの七人だけだった。

「くそ！！残ったのはこんだけかよ！！」

「とんでもねえ破壊力だ・・・直撃してたらずまず死んでたな・・・」

「とにかく、何とかしてツナの野郎を止めねえと・・・マジやばいぜー！！」

「こつなったら・・・俺たちだけであいつを止めるしかねえ・・・ならー！」

そう言うと、日番谷は虚化が進行するツナに向かっていき、鬼道を放った。

「縛道の六十三 『鎖条鎖縛』！！」

日番谷の鬼道により、ツナの全身に太い鎖が蛇のように巻きつき体の自由を奪う。

だが、ツナはそれを腕力だけでぶち破り術を解いた。

それを見た恋次は驚きを隠せずにいた。

「嘘だろう！！六十番台の縛道が・・・腕力だけで破られるのか！？」

「こうなったら・・・私達の攻撃全てで綱吉君を止めましょう!!」  
「やっぱそうするっきゃねえみたいだな!!」

フェイトの提案に承諾した七人は散開してツナに攻撃を仕掛ける。

「咆えろ『蛇尾丸』!!!」

「霜天に坐せ『氷輪丸』!!!」

恋次の蛇尾丸によって身体中を巻きつかれたツナに、日番谷の氷輪丸の氷雪が足場を固める。

すると、今度は茶渡とリボンとフェイトが怒涛の砲撃を食らわす。

「『巨人の一撃』!!!」  
エル・ディレクト

「トライデント・・・スマッシュャー!!!」

「カオスショット!!!」

三人の強力な砲撃がツナ目掛けて飛んでくる。

すると、ツナは鼓膜が破れるぐらいの大声で叫び声を上げた。

すると、茶渡の霊子をまとったパンチ、フェイトの雷撃、リボンのエネルギーの銃弾が石化して粉々に砕け散った。

「大空属性の調和作用か！？まさかこんな広範囲にまで及ぶとはな  
・・・！！！」

すると、ツナは蛇尾丸を自力で解き氷輪の氷を砕くと、ズボンからぶら下がっているボンゴレ匣を取り出し、大空のボンゴレリングから黒い死ぬ気の炎を灯し注入した。

すると、中からは普段のナッツではなく、野生の大人の雄ライオンほどに巨大化し、全身を黒く染めツナと同様黒い死ぬ気の炎を纏ったナッツが現れた。

「まさか・・・ナッツか！？」

「でも・・・これは本当にナッツなのか！？色も姿も雰囲気も・・・まるで違うぞ！」

茶渡がそう言うと、凶暴化したナッツは口腔内から漆黒の炎を茶渡目掛けて放射した。

茶渡は咄嗟に巨人の右腕ブラソ・ニ・デレチャ・デ・ヒガソテで炎をガードしたが、桁違いの炎圧に押し負けてそのまま後方に飛ばされてしまった。

「チャド！！！！」

すると、今度はツナが右手のXグローブから漆黒の炎を細く伸ばし日本刀のような形にした。

それを以って油断しているフェイト目掛けて斬りかかっていった。

「フェイトさん!!!!危ない!!!!」

「しまった!!」

石田にそう言われてフェイトは咄嗟にツナのほうを振り向いたが、その時には既に左肩から上半身にかけてバツサリと太刀傷を受け、後に倒れこんだ。

「フェイト!!!!!!」

そして、ツナがフェイトに止めをさそうとフェイトに斬りかかろうとした――

その時だった。

ツナの斬撃を何者かが斬魄刀でそれを受け止めた。

一護達は目を疑う光景だった。その者は――

「おっと……それ以上やると……私も流石に容赦しないんだけどな……」

「なっ……なのはっ!!」

そう、周りに異変に気付き第1フィールドにやってきたのは……



六課のエースオブエース、高町なのはだった。

## 第51話：大空の喪失（後書き）

### 次回予告

虚化によって俺たちを無差別に襲い出すツナの攻撃を止めたのは、  
だが、ツナの攻撃力はなのはの想像を絶するものだった。

ツナとナッツの圧倒的な破壊力に為す術もなく追い詰められる俺た  
ちの前に、京子がツナを止めようとする。

そんな京子を守るために、一護は覚悟を決めたみたいだぞ。

次回、次元の破壊者・・・「真の虚化」

みんな、死ぬ気で見ろよ

## 第52話：真の虚化

ツナの暴走を止めるために深手を負ったフェイトの危機を救ったのは、満身創痍ながらもツナの斬撃を自身の斬魄刀で受け止めたのはだった。

「なのは！！お前どうして！！！」

「嫌な霊圧を感じて急いでこっちに来てみたんだよ・・・そしたらこんなおぞましい状況。それにこれは本当に、綱吉君なの、一護君！？」

一護は重い表情で顔を縦に振った。

すると、なのはそうかと言って瞳を閉じて深呼吸をし、一気に霊圧を高めた。

「はあああああああ！！！！！」

なのはが放出する霊圧により、ツナは勢いに押され後ずさりした。

普段使ったことのない霊圧を急激に消耗したためになのはの息は完全に上がっていた。

「おい、なのは！！お前・・・無茶すんなよ！！それに・・・やっ

ぱりそれ・・・斬魄刀なのか!？」

「うん、そうだよ。私も未だ使い慣れなくてさ・・・結構疲れるんだよね。それより、早く綱吉君の暴走を止めないと、このままじゃ・・・綱吉君が綱吉君でなくなっちゃう!」

「なのはの言う通りだぞ。今のうちになんとしてでもツナの暴走をとめねえとな。」

すると、ツナの一撃を喰らい出血しているフェイトは、朦朧としながらなのはに声を掛ける。

「なの・・・は・・・気を・・・つけ・・・て・・・」

「・・・大丈夫だよ、フェイトちゃん。直ぐに終わらせるよ。」

そして、なのははバインドをツナとナッツに掛けて、再び斬魄刀を解放した。

「澄み渡れ・・・『星海』!！」

すると、なのはの刀は星型のチャクラムのような形状に変化した。

そして、なのはは瞬歩でツナの元へ移動し星空喜劇を始めた。

「星空喜劇・第二幕・・・『ほしくだき星砕』!！」

すると、ツナとナッツの周囲を囲むように星の結界が構成され、結界の中に閉じ込められたツナとナッツは特殊な作用により身体の自由を奪われた。

なのは今のうちですと言って一護達に攻撃を促した。

「行くぜ蛇尾丸・・・『ひがせつじゅう獠牙絶咬』！！」

「『リキ・レーゲン光の雨』！！！！」

「『じゅうせんか竜霰架』！！！！」

恋次はツナによって折られた節の途切れた蛇尾丸の刀身を一斉にツナに突き立てツナとナッツに攻撃を仕掛け、石田は銀嶺弧雀の弓を連射し、日番谷は刀でツナとナッツを貫き十字架型の氷塊に閉じこめた。

「これでどうだ！！」

だが、一護達の期待は簡単に碎かれる。

氷塊の中でツナとナッツは同時に虚閃を放ちあっという間に四人の攻撃を砕いてしまった。

これには流石の四人も驚愕した。

「バケモノかよ!!! あれだけの攻撃をこつても簡単に防いじまうのかよ!!!」

「私の能力とみんなの力を合わせても全く効果なし!!! これじゃあどうすることも・・・!」

すると、ツナとナッツはなのは・恋次・日番谷に向けて虚閃を同時に放った。

日番谷は急いで断空を使って防御したが、二つの圧倒的な破壊力を持った虚閃に断空が耐え切れず、そのまま虚閃を受けてしまった。

「恋次!!! 冬獅郎!!! なのは!!!!!!」

三人は後方に飛ばされ、身体が動かないほどボロボロの状態となっていました。

「く・・・!!! 身体が・・・言うことを・・・利かない!?!」

「くそ・・・このまま・・・終わっちまうのかよ・・・!!!」

「このままじゃ・・・本当に全滅だぜ!!!」

ツナはそんな三人を見つめて、両手のグローブから黒い炎の剣を生成し向かっていった。

「やめろ!!! ツナ!!!!!!」

一護と石田はなんとか両腕を押さえて止めようとするが、軽く弾かれて後ろに飛ばされてしまう。

そして、再びツナはなのは達目掛けて飛んでいく。

その時だった・・・傷ついた身体で京子がなのは達の前に立ち両手を広げてツナのをほうを見た。

これには、流石の一護たちも驚いた。

「京子ちゃん！！どうして！！??」

「何でデメーがここにいるんだよ！？離れてるって言ったじゃねえか！！」

「止める、京子！！お前がそこにいたら、ツナに殺されるぞ！！それでも良いのか！！」

だが、一護達の説得を全く聴こうとしないどころか・・・京子は大粒の涙を流しながら自我を失い狂気の姿となったツナをじっと見つめ、こっぴど叫んだ。

「もう止めてツナ君！！これ以上みんなを傷つけることは止めて！！私の知ってるツナ君は・・・そんなことするような人じゃないよ！！私の知ってるツナ君は・・・優しく、戦いが嫌いで、ちょっと頼りなくて、びくびくすることもあるけど、いざとなったら凄

く頼りに成る男の子で・・・私の事を一番に気遣ってくれる・・・私の大好きな大空なんだよ・・・！！だから・・・もうこれ以上暴れるのは止めて！！！！ツナ君！！！！！！！！！！」

だが、京子の悲痛の叫びも虚しくツナは京子にも刃を向けてきた。

そして、京子も恐怖を感じ死を覚悟して目を瞑った。

ところが、京子は死んではなかった。ゆっくりと目を開けて見ると、ギリギリのところで一護が斬月の刃でツナの斬撃を受け止め、京子を守っていた。

「一護さん！！」

「一護君・・・あなた！！」

「ツナ・・・てめえ！！自分の彼女の言葉も聞こえなくなっちゃまったのかよ！！こいつがどんな気持ちであんなボロボロの状態で此処にきたと思ってやがる・・・お前はこいつの泣き顔がそんなに見たいいのかよ！！それでもてめえは・・・京子の沢田綱吉こいつ おおつひなのかよ！！！！！！」

そう言うと、一護自身の霊圧を極限まで放出してツナの攻撃を弾き返し後方に吹き飛ばした。

リボーンはそんな一護に近付いてきて、話しかけた。

「流石だな、一護・・・だが・・・このままじゃ本当にどうするこ



ともできねえぞ！どうすんだ？」

リボーンにそう言われると、一護は思い悩んでいた決心を漸くつけ、徐にこう言った。

「俺がツナ（あいつ）を止める・・・虚化には・・・虚化だ！」

「なっ！？まさか黒崎・・・！！」

石田と恋次と日番谷は一護の発言に危惧の念を抱き、リボーンと京子、なのはの三人は発言の意味がよくわからなかった。

なのはが一護に尋ねた。

「一護君・・・一体どういうこと!？」

「直ぐにわかるさ・・・京子、少し離れてる・・・俺が元の沢田綱吉に戻してやるからな」

「は・・・はい・・・」

そう言うと、一護は京子を後に少し下がらせ右手を徐に顔を近づけた。

すると、一護の身体は漆黒の霊圧に覆われなのは達は驚愕した。

そして、霊圧が晴れる出てきたのは・・・目の辺りに血の模様をした二つの縦縞の仮面をし、眼球は黒、瞳は黄色となった一護だった。

なのは達はその姿に言葉を失った。

「・・・ツナと同じ虚の仮面・・・」

そして、虚化した一護は超高速でツナとナッツの元へ移動し、ナッツを斬月の一振りで気絶させた。

そしてそのままナッツはボックス内に戻った。

「凄い・・・一瞬であのライオンを倒した!!」

そして、そのまま一護はツナに駆け寄り怒涛の剣戟を加える。

ツナも負けじと漆黒の炎の剣で応戦するが、今回は明らかに一護のほうが有利だった。

一護は隙を突いてツナの顎に蹴りを入れ、空中に上がるや否や踵落としでツナを追い詰める。

そして、地面に激突したツナに向かって空中からあの技を放つ。

「ツナ・・・ちょっと痛てーかもしれねーけど、我慢しろよ・・・  
月牙・・・天衝!!!!!!」

一護は虚化によって格段にパワーが増大した月牙天衝をツナ目掛けて発射した。

ツナは月牙天衝に直撃し、その場は強烈且つ大量の粉塵が巻き起った。

そして、全員が粉塵を防ぎながらツナのほうへ向けた。

徐々に粉塵が晴れてツナの姿が見え始めた。

そして、完全にツナの姿が露になった。

ツナの虚の仮面は砕かれ、額の黒い炎は消えて身体は一護の月牙天衝で血塗れとなってその場に倒れこんだ。

「ツナ!!」

「ツナ君!!!!!!」

一護は急いで虚化を説いてツナのもとに駆け寄った。

京子もリボンも一目散にツナの元へ近付いていった。

ツナは心身ともどもかなりの深手を負っていた。

一護達は動ける要員でツナを井上のもとに運んでいった。

物語は・・・大きく此処から動き出すことになる。



### 第53話：沈黙

昼間の凄まじい騒動があつたせいか、夜になつても一護達はずっと沈黙を続けていた。

虚化の影響により、ツナは心身ともども疲労しきり自室で眠つたままの状態だつた。

そんなツナの傍で京子は食事もろくに取らずにずっとツナの手を握り締めたまま祈るようにツナが目を覚ますまで動かないでいた。

一方、山本と獄寺は井上の介抱によつて最悪の顛末にはならなかつたものの、ツナ以上に精神的な苦痛を受けて表情は重かつた。

そんな一護達は、ツナと京子を除き真之介によりリビングに集められ今回のことを話し出した。

「……まあ……話を聞けるような心情じゃねえのはわかる。だがよ、こればかりはきちんと聞いてほしい。いいか？」

「……ああ……」

一護が代表して真之介の言うことに了承し、暫くの間を取つた後真之介は徐に話を始めた。

「まずはあのコネホって奴のことだが・・・あいつは次元の破壊者があらゆる次元世界から尋常ならぬ戦闘力を有する選りすぐりを集めて組織した破壊集団、『アスタ・アキ終末』・・・エルトウダ十二使徒の一人だ。」

「十二使徒っていうと・・・あのペローって奴もそうなのかい？」

「ああ。石田の察したとおり・・・。奴らは次元の破壊者が目的を達せするために組織された従順な兵士。その戦闘能力は今日を見たとおり・・・バケモノクラスだ。おそらく、ヴァストローデあのコネホとペローって奴は、見かけは人間だが間違いなく最上級の破面だ。霊圧の強さでわかる。」

その言葉を聞いた一護達は顔が真っ青になった。

だが、破面と言う言葉を聞かされてもピンとこないのは達は困惑した。

そして、徐になのが尋ねた。

「その・・・破面っていうものは何なのかな・・・真之介君？」

「それもそうだな・・・説明しないと何のことかわからないし・・・」

そう言うと、真之介は背中からスケッチブックを取り出し黒マジックで再び精巧な絵を描き始めた。

この瞬間、一護達の空気は一次和んだそうだ。

「……破面アラシカルって言うのは……虚だったものが仮面を外し虚と死神二つの力を手に入れた虚の一団だ。嘗ては数も極めて少なく未 completion だったが、一護達の世界で反乱を起こした奴が接触することで成体の破面が完成した。そいつが昼間の二体だ。」

そう言うと、破面と書かれたページをめくり昼間のコネホとペローの精巧な描写を一護達に見せた。

「ここまででは分かるか？」

「ああわかる、わかる……だから何でそんな絵が異常に上手いんだよ？」

「そこはノーコメントだっついてるだろうが！」

すると、日番谷が真之介の説明に補足するかのように介入し始めた。

「……ともかく、ヴァストローデ級の破面が相手ってことは、こいつは相当厳しい戦況になるってことは……間違いねえな。」

「そのヴァストローデっていうのは……一体どれくらい強いんだ、日番谷。」

リボンがそう言うと、日番谷は眉間に皺を寄せながら溜息を吐いて説明をし始めた。

「・・・前に真之介がメノスの説明の時に”三種類”いる内の最下級がギリアンだって言っただろう。つまり、ギリアンの上にも更に二つの階級が存在する。ギリアンの一つ上、”アジューカーズ”。ギリアンよりもやや小さく数も少ないが、知能が高く戦闘能力はギリアンの数倍。数の多いギリアンをまとめる存在だ。そして最上級のメノス、”ヴァストローデ”。大きさは虚としては極めて小型で人間と同程度。数は極めて少なく虚圏全域に数体しかいないと言われているが・・・はつきり言う、この”ヴァストローデ”級の戦闘能力は隊長格よりも上だ！」

日番谷の発言にボンゴレと六課の一同の表情は凍りついた。

「そ・・・そんな・・・じゃあ、私達のこれから戦う相手は、そんなバケモノばかりってことなの!？」

「・・・残念ながらそう言うことになる。だが、そういうしている時間はない。まずは今回起きた”二つの現象”について明確な処理をしたあと、お前たちには”対終末用プログラム”をやり遂げてもらう必要がある。」

「ん・・・二つの・・・現象・・・? 何だよ真之介それ・・・?」

「気付かねえか、一護? 今回の模擬戦とコネホの襲来によって・・・本来霊力なんて持たないのが突然”斬魄刀を解放”したり、ツナが”虚化”したり、不可解なことが起こっただろう。」

真之介にそう言われ、一護は漸く気がついた。



ボンゴレメンバーはツナの虚化という言葉聞いた瞬間重い表情を浮かべた。

なのは達も今回どうやってなのはが斬魂刀を手に入れたのか分からず仕舞いだった。

なのはは、椅子の横に掛けている自身の刀を持って眉間に皺を寄せた。

「これは悪魔でも俺の仮説に過ぎないが・・・世界が融合を始めた結果、一護達の世界に散在する霊なる力が流れ込み・・・なのはは魂の奥底に眠っていた霊力を目覚めさせることになり、ツナは周りの霊圧とコネホによる攻撃で虚の力が覚醒してしまったんだと思う。」

「そんなことが・・・あるのかよ!？」

「悪魔でも仮説だ。だが・・・なのはの斬魂刀の件はいいとしても問題はツナだ。このままほっといたら、あいつは確実に内なる虚に呑み込まれて自分を失い・・・ボンゴレの全員や俺達を全て皆殺しにするぜ。」

一護達は事の深刻さを真之介に聞かされてショックを隠しきれずにいた。

ハルとクロームは大粒の涙を流しながらお互いに抱き合い、獄寺と了平は悔しさのあまり机を叩いた。

「チクシヨー！！俺が不甲斐ないばかりに・・・十代目をあんな風にしちまつたんだ！！俺は・・・右腕として何も出来なかった！！」

「タコ頭の言う通りだ！！俺たちが非力なばかりに・・・沢田も・・・京子のことも守りきれなかった！！！！俺は兄として・・・晴の守護者として失格だ！！」

「だったら！！何でもつと十代目の力になるようなことしなかったんだよ！！！！」

「何を！！！！貴様こそ・・・右腕として恥じている暇があったら、何故沢田のことをもつと近くで見えていなかったんだ！！それでも貴様はボンゴレ嵐の守護者！！！！！！！！」

「何だと、この芝生頭！！！！！！！！」

「やるのかタコ頭！！！！！！今日は腸が煮えくり返ってムシヤクシヤしてたところだ！！！！！！！！」

獄寺と了平は憤慨しお互に激しいど付き合いを始めてしまった。

山本と大人ランボが止めようとするが、逆に巻き沿いを喰らい喧嘩はさらにエスカレートする一方、途中でヴィータとシグナムが仲裁に入るが中々止めれそうになかった。

と、その時だった。

「やめえねえか！！バカどもが！！！！」

二人に向かって怒鳴り声を上げたのはリボーンだった。

全員はリボーンに注目した。

「守護者同士で喧嘩なんてしても何も解決しねえ！！おめえらが焦ってもツナの虚化が止まるわけじゃねえんだ！！冷静さを取り戻せ。ここで気持ちバラバラの状態でも、奴らには勝てねえ！！頭を冷やして考えろ、ボケ！！」

リボーンにそう言われ漸く二人は冷静さを取り戻し喧嘩を止めた。

そして、また暫し沈黙が流れた後・・・獄寺は齒を喰い縛りながら机を両手で叩きこつ言った。

「けどどうすりゃいいんですか、リボーンさん！！解決策が無い以上・・・俺らにはどうすることも出来ないっすよ！！」

すると、口を閉ざしていた一護が獄寺に向かってこつ言った。

「解決策ならあるぜ・・・賭けみたいなものだかな・・・」

一護のその言葉にボンゴレと六課一同は驚愕した。

そして、リポーンが代表して一護に尋ねた。

「そいつは本当なのか、一護？ツナの虚化を止められるのか……！？」

「……ああ。俺も昔、同じ事をして内なる虚を抑え込んだ身だ。上手くいけば、ツナの虚化を制御できる筈だ」

「えっ！？昔ってことは……一護君も、虚に堕ちかけたことがあるの！？」

なのはがそう尋ねると、深呼吸をして徐に一護は返答した。

「ああ……死神の力を取り戻すときにちょっとな……けど、これしか方法はないんだ！」

一護の発言を聞いた全員はまた暫く沈黙を続けた。

そして、沈黙を破って真之介が机を叩いてこう言った。

「専門家がそう言うんだ……これしかねえなら、そうするしかねえよな。問題は、ツナ自身がどう言う決断をするかだ。一先ず一端お開きだ。ツナが目を覚ました後、全てのことを話す。いいな？」

真之介の提案に一護達は無言で頷いた。

果たして……ツナはどうなるのか！？そして、一護達の運命は？



## 第53話：沈黙（後書き）

### 次回予告

ツナが目覚ましやがった。事の事情を全て聞かされ自暴自棄になるツナ。

そんなツナに喝を入れる一護。一護は嘗ての出来事をツナに語り始める。

ツナは一護の話を聞いて……一体どういう決断をしたのか……

次回、次元の破壊者……「同じだから」

二人の気持ちがいま、絡み合う。

## 第54話：同じだから

その頃、未だ目を覚まさないツナの手を握り締めたままじっとツナのことを心配した様子で見つめる京子。

すると、そんな時井上が京子の下にやってきた。

「……京子ちゃん……入っても良いかな？」

「……織姫さん……」

京子は黙って頷いて井上を部屋に入れた。

井上は京子の隣に座って京子に話しかけた。

「どう……綱吉君の容態……？」

「……まだ……この通り目を覚まさないんです……」

「……そっか……京子ちゃんはずっとそうやって綱吉君の手を握ってるの？」

「……はい……私……本当にツナ君の彼女でいいんですかね？」

「えっ!?!?」

京子の意外な発言に井上は驚いた。

徐に井上が京子の顔を見てみると、京子の瞳には月明かりで光る涙の粒があった。

「私・・・ツナ君の彼女のくせに・・・本当に何も出来なくて・・・ツナ君が傷ついたときでさえ、こうして手を握ることしか出来ない・・・私は・・・ハルちゃんみたいに頭が良い訳でもないし・・・クロームちゃんみたいな幻術が使える訳でもない・・・二人は優しく・・・強くて・・・綺麗で・・・ツナ君を元気にしてくれて・・・大好きなのに・・・なんで私こんな・・・二人に嫉妬してる・・・」

「・・・・・・・・」

「学校やみんなと一緒にいるときはそうは思わないのに・・・一人なったりすると・・・全然駄目になるんです・・・本当・・・そんな自分が嫌になる・・・かつこ悪いし・・・いやらしい女ですよ・・・私って・・・」

京子は胸のうちにしまっていた赤裸々な気持ちを全て井上に吐き出ししていた。

井上と部屋の外で聞いていた一護とリボンとなのはは、黙って話を聞いていた。

涙で顔中をくしゃくしゃにする京子。

すると、井上が優しく微笑み京子に語り始めた。



「……京子ちゃん……こっち向いて……」

「……え？」

すると、井上のほうに向いた京子は優しく京子のことを抱擁し、その状態で京子に話を続けた。

「これ……ある人の受けよりになっちゃうんだけど……あたしはそのままが良いと思うな……京子ちゃんもハルちゃんもクロームちゃんも。綱吉君はまだ一人じゃ立てないから、みんなや京子ちゃんの手が必要なんだよ……妬いて何か格好悪いかな？京子ちゃんはそのように自分の重いところをちゃんと受け止めようとしてるよ。知ってる？逃げ回って相手にぶつけた方がどんなに楽か。逃げるに受け止めようとしているだけ……京子ちゃん充分かっこいいと思うよ……それに、綱吉君にとって京子ちゃんは唯一の”太陽”なんだよ。そんな悲しい顔をしてたら、せつかくの美人が台無しだよ。”大空”が大空にいるためには、太陽の支えが必要なんだよ。だから……綱吉君の前では自信を持って笑ってあげようよ。」

「織姫……さん……う……う……うえ……うえええええ……」

京子は井上にそう言われると、溜まっていた不安と嫉妬が一気に爆発し井上の胸の中で泣き出した。

井上はそんな京子の頭を優しく撫でながらよしよし慰めていた。

部屋の外でそれを聞いていたのはは感嘆し涙を流す。

一護とリボーンは鼻で笑い大した奴だと心の中で思った。と、その時だった。

「うぐ……ぐう……ここ……は……？」

ツナが長い眠りから目を覚ました。

ツナの声を聞いた一護達は大急ぎでツナのところへ駆け寄った。

「ツナ！！目が覚めたんだな……！！」

「ツナ君！！大丈夫！？どこかいたいところとかある！？」

「京子ちゃん……それに一護さん達も……一体……あの後俺は……一体……？」

ツナがそう言うと、全員は一度沈黙し……徐に一護がツナに全てを語ることにした。

「……ツナ……よく聞けよ……あの後何があったのか……そして、この後どうするのか！？」



「けど……けど……俺が……皆を傷つけたことは間違いないんだ……俺は……俺は……ああああああああああああ……ああああああああ……!!!!!!」

一向に落ち着く気配の無いツナに翻弄される京子となのは。

井上とりポーンはそんなツナを黙ってみていた。

すると、一護がしびれを切らしてツナの胸倉をつかんで顔面を思い切り殴りつけた。

その光景に女性陣は驚いた。

「く……黒崎君!? 何して!?!」

「そうですよ一護さん!? 何するんですか!?!」

「一護君……あなた……!?!」

「こつでもしねえと収まんないだろうが……」

一護に何の理由もなく殴られたツナは顔を押さえながら一護の方に振り向く。

「な……に……するんですか……一護さん!?!」



怖さを俺は知ってる。今のお前は・・・まるで昔の頃の俺にそっくりだ。」

「俺が・・・昔の・・・一護さんに・・・」

「ああ・・・ガキの頃におふくろを亡くして暫くの間、色んな感情がこみ上げて・・・溺れそうになっていた。けど、その色んなモンを全部抱え込んで、一人で抱え込むのが自分の義務だって思ってた。でもそれが・・・そんな自分が周りを悲しませていることに、ちっとも気付いていなかった。今のお前みたいに・・・一人で苦しんで、何もかも一人で背負い込んで、てめえの仲間を受け止めさせない弱い奴のことを俺はよく知ってる!!!・・・てめえは、てめえ一人で背負い込むことで・・・周りの奴がどんな思いをするのか、考えたことあるのかよ!!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「一人で背負うなよ・・・お前は一人じゃないんだからよ・・・」

一護の話をまじまじと聞いていたツナは、急に抱え込んでいたものを全てを一護に預けるかのように、一護の胸に飛びつき大声を上げて泣き始めた。

「・・・・・・・・う・・・・・・・・う・・・・・・・・うえ・・・・・・・・うえええ・・・・・・・・上えええ







## 第55話：内なる世界へ

コネホの襲来から一晩明け、ツナは一護の胸の中で子供の頃のように泣いたことを些か恥ずかしく思いながらも、これから自分が何をしなくてはならないかを自覚し、決意を新たに早朝の日の入りを見ていた。

すると、そこに意外な人物がやってきた。

「おはよう、綱吉君！もう身体のほうは大丈夫！？」

「えっ！？あっ・・・なのはさん！」

ツナが後を振り返ると、そこにはいつもの戦技教官服に身を包んだなのはが立っていた。

「どうしたんですか！？まだ5時半ですよ。」

「うーん・・・いつもこれくらいだったから、目が覚めちゃってね。そう言う綱吉君のほうも早いね！」

「ええ・・・あの・・・昨日は本当にすみませんでした！！なのはさんや、フェイトさん達に酷い目に合わせてしまって・・・俺・・・ホントに・・・」

「……うんうん……私別に気にしてないよ。だって態とじゃないんでしょ！それはみんなも判ってくれるよ。それより昨日事はもう忘れて……今日やらなくちゃならないことをしっかりやるほうが、ずっと大切だと思うな。あっ、その前に京子ちゃんや獄寺君達の前でしっかりお早うって言うことが先かな！」

そう言うと、なのはは屈託のない笑顔をつなに浮かべた。

ツナはなのはの笑顔を見ると、まるで京子の笑顔を見ているときと同じように心がとても穏やかになっていった。

そして、自分も同じように笑い返した。

「……そうですね……ありがとうございます、なのはさん！」

「どういたしまして！あっ、でも……私よりも一護君のほうにもっと感謝したほうが良いかもね！」

ツナとなのははそんな他愛の無い話をして、お互いに笑いあった。

そして、全員が起きて食事のために集まってくる中、ツナは獄寺を見かけ話しかけた。

「獄寺君……お早う……」

獄寺は少し間を置いた後、いつものような笑顔を見せてツナに返事をした。

「お早うございます、十代目！！」

ツナは内心ホツとした。

すると、ツナの後から山本がいつものノリで肩を組んで挨拶をしてきた。

獄寺はそれを見るなり山本に怒りをあらわにした。

ツナは心の底から良い友達を持ったと感謝していた。

そんな騒ぎをかぎつけた了平と大人ランボ、クロームと雲雀がやってきた。

雲雀は不機嫌そうにツナにトンファーを見せ、脅迫した。

ツナ達は急いで雲雀の傍から離れ、それぞれの椅子に着席した。

全員が朝食を済ませると、真之介は一護達を集め今日の予定を説明し始めた。

「さてと・・・昨日は色々大変だったが、今すべきことはきちんとやる、それが一番大切だ。今日は・・・昨日のツナの虚化をどうにかするために時間を使おうと思う。その件に関しては、一護のほうから改めて説明してもらおう、一護。」

「ああ・・・今回は死神でもないツナが虚に堕ちかけてしまったことに関して、虚化の解決策を俺の体験から語らせてもらう。ずばり、

内なる虚を抑えるためには・・・ツナ、お前が内なる世界に行つて内なる虚を斃すしかねえ！」

「えっ！？内なる世界へ！？」

「ああ。俺は前に仮面の軍勢ヴァイザードつて言う同じ境遇の奴らによつて、内なる世界へと導かれ、そこで俺は内なる虚と戦い屈服させることが出来た。お前も虚を抑え込むにはそれしかねえ！それでもお前はやる覚悟があるのか？」

一護がツナにそう言つと、ツナは暫くの間口を閉ざした。

全員は不安そうな目でツナのを見つめた。

そして、ツナは覚悟を決めてこう言った。

「・・・正直、かなり怖いですけど・・・一護さんが昨日言ったように、みんなを傷つける怖さよりはずっとましです。俺・・・内なる世界に行つて虚を倒します。それしか方法が無いなら、やり遂げてみせます！」

全員はツナの覚悟に安堵した。

リポーンもいつものように鼻で笑った。

そして、ツナの覚悟を見た一護も鼻で笑い徐にこう言った。



そう言うと、シグナムが手を挙げて積極的に前に出てきた。

「それなら私が入ろう・・・安心しろ、足は引つ張らないようにする。もしも場合を備えてリインも一緒に戦うことにする。それならいいだろう?」

「こつ見えて、リインだってやるときはやる人ですよ。任せてください・・・この”祝福の風”リインフォースの名に恥じぬよう頑張りますから。」

「わかった。じゃあ最後のメンバーはシグナムとリインのワンセットという形で決定だ。何か文句のある奴!?!」

ボンゴレの何人かは多少不満そうだったが、事態が事態ということもありリボーンに説得され渋々了承した。

「よし・・・そんなじゃ・・・」

そう言うと、真之介は昨日の超幻覚を発動させて昨日とは違い今日は荒野野の景色を再現し、周りには巨大な岩が幾つも広がっていた。

そして、ツナは解放前のミント状態のイクスグローブをはいて真之介の前に立った。

そして、一護は最後にツナにこつ言った。

「準備は・・・いいか?」

「……はい……」

「……わかった……真之介……やってくれ……」

「……オツケーだ……」  
「……じゃ、いくぜツナ……」  
「……後悔するなよ。」

そう言うと、真之介は右手をツナの頭のほうへ広げてツナの意識を混濁させた。

その瞬間、ツナの意識は完全になくなり気を失った。

一護は手でツナの両脇を閉じゆっくりと担ぎ込んだ。

そして、心中こんなことを言った。

「（聞こえるか、ツナ……お前はこれから一度完全に虚化する。喰われるな、喰い尽せ。喰われたらそこで……終わりだぜ……」





## 第55話：内なる世界へ（後書き）

### 次回予告

真之介の導きにより、ツナは精神世界へとやってきた。

そこには、ツナと瓜二つのもうひとりのツナが待っていた。

ハイパー化して応戦するツナと、もう一人のツナ。

その頃、外のほうでもいよいよ虚化の進行が始まっていた・・・

次回、次元の破壊者・・・「沢田綱吉VS沢田綱吉」

みんな、正解して見ろよ。

## 第56話：沢田綱吉VS沢田綱吉

ツナは真之介の導きにより、自身の精神世界にやってきた。

ツナがゆっくりと目を開けると、目の前に広がってきたのは――  
・  
・

何にも無い地平線が広がる殺風景な場所だった。

「ここが・・・俺の精神世界・・・何も無いところだな・・・」

ツナがそう思っていると、不意にただならぬ殺気を感じ、急いでハイパー化をして後から飛んできた攻撃を回避した。

そして、離れた場所から自分の後ろを見てみた。

「・・・誰だ・・・!？」

すると、ツナの声に反応し一人の人物が姿を現した。

そして、その姿を見てツナは驚愕した。

「・・・何だ・・・お前は・・・!？」

ツナがそう言うと、その人物はほくそ笑みこう言った。

「何だとは随分じゃねえか・・・王よ・・・俺はてめえそのものな  
んだぜ・・・」

その人物の容姿、声は紛れもなくツナと瓜二つだったが、瞳の色眼  
光は黄色と黒に染まっていた。

一方その頃外の世界では、一護がツナを担いで指定の場所まで持つ  
ていきゆっくりとツナを下ろし寝かせた。

リポーンやなのは達は遠く離れた場所でその様子をじっと見つめて  
いた。

「・・・真之介・・・あいつらが巻き沿い食わないように何重にも  
結界張っておけよ・・・」

「エ~~~~~」

真之介はどうも不満そうだった。そんな真之介に苛立ちを覚える一  
護。

「え~~~~~じゃねえよ！結界張れるのお前くらいだろう  
が！~！それから・・・冬獅郎！」

一護にそう呼ばれて不機嫌そうにする日番谷。

「日番谷隊長だ！」

「ツナの五体に封印・・・やってくれるか？」

日番谷は暫く考え込んだ後、深い溜息を吐いた後止むを得ず了承した。

「・・・あまり得意じゃねえが・・・やってみるぜ・・・」

そう言うと、日番谷は両手を組み合わせ鬼道の詠唱を始めた。

「鉄砂てつさの壁 僧形そうぎょうの塔 灼鉄しゃくてつ?? 湛然たんぜんとして終に音無し・・・」

そして、日番谷は組んだ状態で両手を上に挙げ、地面に叩きつけるように振り下ろした。

「縛道しやくどうの七十五『五柱鉄貫ごちゅうてつかん』!!」

すると、ツナの頭上から五つの五角柱が降ってきてそのままツナの五体に押し掛かった。

それを見たなのは達はつくづく死神の術は凄いと実感した。

だが、獄寺は日番谷の行動に腸が煮えくり返った。

「あのガキ！！！！よくも十代目の身体に変なもの落としやがって！！！！！」

「落ち着け獄寺。あれは日番谷の鬼道だ。安心しろ……」

憤慨してその場から乗り出そうとする獄寺を宥めるリボン。

そんな中、京子を始めとするボンゴレ女性陣はツナの無事を黙って祈り続けていた。

その頃、精神世界でツナはもう一人の自分と接触し、会話をはさんでいた。

もう一人のツナ、もとい虚のツナは眉間に皺を寄せたままのハイパーツナを軽く見下ろす感じで語りだす。

「……どうした？随分浮かねえ顔してるじゃねえか……え？」

「……お前が……虚の俺か……？」

「ふん……だったら……どうするよ？」

「……ここでお前を……倒す！」

ツナは虚のツナに敵を向けて拳に炎を灯す。すると、虚のツナは不敵な笑みを浮かべツナにこう言った。

「・・・へえ・・・」俺を倒す”・・・ねえ。面白ねーじゃんかー  
ー是非そうして貰おうか、王よー!!」

そう言うと、虚のツナは額と両手に漆黒の炎を灯し右手からその炎で造った剣を握り締めた。

ツナはその光景に一瞬目を疑った。

「ーーーーー!! (・・・黒い死ぬ気の炎ー・・・!)

「やってみるよ・・・てめえにそれだけの覚悟があるのならな!!」

そう言うと、剣を持った虚のツナは高く飛び上がり勢いをつけてツナに斬りかかっていった。

ツナはグローブのエンブレムで辛うじてそれを受け止めた。

その瞬間、外の世界ではツナの内在闘争が始まったことにより封印していた五体にも動きが見られた。

一護たちはそれに気付き結界の外で警戒を始めた。

「・・・・・・来たぜ!」

ツナの手足は霊圧を放出しながらゆっくりと動き始める。

「あの〜イクスグローブ・・・隠しといた方がいいじゃないんです

か？」

「無駄だ。逆に暴走半径を広げるだけだ！」

グローブを隠すように促そうとするラインにシグナムがツッコミを入れる。

徐々にツナの身体は動きを激しくし、ついには昨日と動揺の仮面を顔の半分だけ出現させ顔を上げた。

その様子を結界の外で見ていた京子達は思わず目を瞑り、重い表情で再びツナを見つめた。

五柱鉄貫は虚化するツナの力に圧倒され崩壊した。

五柱鉄貫を破壊したツナが額と両手に漆黒の死ぬ気の炎を灯し徐に立ち上がった。

すると、ルキアが徐に立ち上がり斬魄刀を腰に携え、真之介に言った。

「真之介、ここを開ける。私が先導する・・・」

「わかったーーーーー！」

ルキアに言われ真之介は結界を開けた。ルキアが結界の中に入る際、一護は真顔でこう言った。

「殺さないでやれよ、ルキア。」

「・・・私が死ななければな。」

ルキアは一護にそう言っただけで結界の中に入っていった。

虚化したツナはルキアを見るなりグローブから昨日同様漆黒の剣を作り出しルキア目掛けて突進して行った。

ルキアは徐に刀を抜いて改めて自己紹介を始めた。

「十三番隊・・・朽木ルキアだ・・・以後お見知り置きをーーーー」

そして、虚化したツナはルキアに斬りかかっていった。

その頃精神世界でもツナと虚のツナの激闘が始まっていた。

幾度となく交わされるグローブと剣の金属音。

ツナとは対照に虚のツナは余裕の表情を見せ笑っていた。

「お前っ・・・！！何でそんなに笑っていられる!?!」

「決まってるだろう!! てめえをここで潰してーーーー乗っ取るのが楽しみだからだ!!!」



虚のツナはそう言って空中のツナを力づくで地面に叩き付けた。

ツナは激しく地面に叩きつけられ形勢は明らかに虚のツナが有利なものだった。

「何だよ！死ぬ気の炎もろくに使えねえのかよ！！情けねえな、才  
イーーーーー」

「くつーーーーー！！」

「……ツナよ。てめえは知らねえと思うが……」死ぬ気の炎”  
っていうのは実は元をたどれば霊力の一つの形なんだぜ。それをど  
う使うかによって形状も能力も変化する。俺はてめえの魂の一つの  
形であり、てめえの霊力<sup>ちから</sup>。俺はそんなお前の一部だった。ひとつの  
肉体を共有するものの、主従が変われば姿も変わる。生が支配する  
うちは肉に覆われ、死が支配すれば骨になる。同じ道理だ。”因果  
の鎖”が解き放たれたお陰で、俺の力が増大し……支配権が徐々  
に俺に移り始めてる。俺はお前が死ぬ気の炎をとおすとすればする  
ほど、てめえの魂を支配し易くなっていくなだよ。」

「……そうか……それならここで俺がお前を倒せば、俺の魂は  
お前に支配されることなく、お前を俺の一部にすることが出来ると  
言う訳か。」

「てめえが？俺を？無理だね。」

「……そうかーーーーー」

すると、ツナは大空のボンゴレリングに炎を灯し、ボンゴレ匣を開  
匣してナッツを右のグローブのエンブレムに乗せた。

「……無理かどうかは、こいつを見てからもう一度言え！」

「……解んねえ奴だな……無理だって言ってるんだろ。」

そう言うと、虚のツナは指に嵌めていた同じボンゴレリングから黒い死ぬ気の炎を灯し、黒いボンゴレ匣に注入し全身と炎を黒に染めたナッツを取り出し、右手に乗せた。

「!?!?!?!」

「ひい!?!?!?!」

そして、二人は暫くの間にらみ合い……そして同時にナッツに命令をした。

「「ナッツ……カンピオ・フォルマ形態変化、攻撃モード（モードアタック）!?!?!」

## 第56話：沢田綱吉VS沢田綱吉（後書き）

### 次回予告

精神世界で激闘を繰り広げるツナと虚のツナ。

ツナは虚のツナの攻撃に圧倒され、かなり不利な状況に立たされている。

余裕の表情を見せる虚のツナは、ツナに戦う本能について語りだす。

次回、次元の破壊者・・・「戦う本能」

ツナは、その時何を思うのか？

## 第57話：戦う本能

「ナッツ・・・カシヒオ・フォルマ形態変化、攻撃モード（モードアタック）！！」

ツナと虚のツナが同時にそう言うと、外の世界のツナにも異変が起きていた。

ツナは突然攻撃を止め、その場に立ち止まった。

ルキアが警戒していると、ツナの胸から徐々に孔が開き始めていた。

リボーン達は遣る瀬無い表情でじっと見ていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・始まりやがったか。」

一護も結界の外でツナの様子を重い顔で見ている。

嘗て、自分がそうだったことを思い返しながらー・・・

一方、精神世界では二つの強大な力が発生し地響きが起こっていた。

やがて巻き起こった粉塵が晴れて、ツナと虚のツナは右腕に形態変化をさせたナッツ、ボンゴレー世のガントレット（ミテーナ・デイ・

ボンゴレ・プリーモ）を装着した。

ツナは鋭い目線を、虚のツナはへらへらとした表情でお互いに見つめあい、そして同時に攻撃を仕掛けていった。

「お前・・・何故俺と同じ能力ちからを持っているんだ・・・」

「決まってるだろ。俺は沢田綱吉てめえそのものだからだ・・・ツナ！」  
互いの力が交差し、拮抗する。両者は引きこともなく拳と拳をぶつけ合う。

虚のツナは相変わらずの顔色を浮かべ続ける中、ツナは未だ頭に血が上っていた。

「そうカリカリすんなよ！楽しくやろうぜ！！」

「・・・黙れ！・・・」

頭に血が上ったツナは普段の冷静な判断力を失い、力任せに攻撃を仕掛け続けた。

その間に、ツナは頭の中で何故虚のツナが自分と同じ力を持っているのかが納得できなかった。

「（何故だ！？何故奴が俺と同じ力を持つ・・・！？それに・・・あの黒い死ぬ気の炎・・・触れれば触れるだけ、こちらの力が弱くなっていく・・・どうなってるんだ！？）」

その頃、外のほうでは・・・ナッツを攻撃モードにして、胸に孔を開け虚化したツナがルキアに襲い掛かっていた。

ルキアも攻撃をかわしながら鬼道で攻撃を繰り返す。

「破道の三十三、『蒼火墜』！！」

ルキアの蒼火墜がツナの仮面に直撃した。

しかし、ルキアの鬼道をもともしないツナはさらに攻撃を激しくする。

見かねたルキアは、自身の刀を解放した。

「舞え・・・『袖白雪』」

姿を現したのは、刀身も鍔も柄も全て純白の形状に変形し、柄頭に先の長い帯が付いた斬魄刀だった。

「ルキアさんが・・・斬魄刀を解放した!？」

「（白い・・・斬魄刀・・・!？）」

ティアナを中心に六課一同とボンゴレ関係者は驚いた。

なのは冷静に腕組みをしたままルキアの斬魄刀を観察していた。

ルキアは解放すると、刃の先を地面に複数箇所突き、そこから強大な凍気を一斉に雪崩のように放出して、ツナに攻撃をした。

「次の舞・白漣（ぎのまこい・はくれん）」

強大な凍気が一斉にツナに放出され、ツナは完全に氷付けになった。ボンゴレと六課の一同はルキアの予想外の力に目を疑った。

だが、ツナの氷は簡単に砕かれ無傷のままの状態で見られた。

これには、ルキアたちも驚愕した。

「くっ！やはりこの程度では効果無しと言う訳か・・・」

外の世界も白熱した戦いが繰り広げれる中、ツナと虚のツナのほうも過熱になっていた。

肩で息をするツナと、それを仰ぎ見る虚のツナ。

だが、ツナはそれでもいつもの澄んだ橙色の目を変わらず虚のツナに向ける。

「ちっ！何なんだよその目は！！そいつで何でもお見通しっていう

目をしてやがる・・・癪に障るヤロウーだぜ!!」

「・・・・・・・・」

「ふん、まあいいさ・・・その目をもうじき出来なくさせてやるぜ・・・俺とてめえの力の差は天と地ほどにも隔てってるんだ・・・焦らなくても俺が此処でてめえを潰せば、全ては俺の思うがまま・・・何が”大空”だ、何が”ツナ君”だ。てめえの大事なモンも・・・俺が自らの手で奪ってやるさ!!」

その言葉を聞いた瞬間、ツナはとうとう我慢を抑えられなくなった。

「・・・言わせておけば・・・!!」

そして、ツナは左手の炎で加速した後、X BURNERと同等の破壊力を持った究極の一撃を放った。

「ビックバンアクセル!!!」

強大且つ強力な大空の炎の光球が虚のツナ目掛けて飛んできた。

だが、虚のツナはそれを軽くあしらうかのように左手を出していても簡単にビックバンアクセルをかき消した。

「!!!!!!」(左手だけで、ビックバンアクセルを弾いたー・・・)「」

すると、今度は虚のツナが動揺するツナの眼前に飛び込んできて、ツナの左手首を握り右の拳をツナの右拳と交じり合わせて、至近距離でツナと同じ技を放った。



「……………ビックバンアクセル。」

ツナは虚のツナが放つ至近距離でのビックバンアクセルを回避することは出来なかった。

巨大な漆黒の炎が瞬時に周囲に広がって大爆発を起こし精神世界一体は漆黒に染まる。

それに対して、外の世界では未だ虚化したツナとルキアとの戦いが繰り広げられていた。

傷だらけになりながらもルキアは致命傷を負わないようにツナの巨大な大技は何とか回避し、地道に攻撃を行う。

「雷鳴の馬車 糸車の間隙 光もて此を六に別つ……縛道の六十

一 『六杖光牢』」

ルキアの指先から六つの帯状の光がツナの胴を囲うように突き刺さり動きを奪う。

そして、その隙にルキアは袖白雪で応戦をする。

「初の舞・月白つきのまひる！」

刀で円を描いた場所の天地全てを凍らせる月白。

ツナは六杖光牢で動きを止められたままルキアの技により凍らされ

た。

しかし、ツナはまた直ぐに氷が砕かれ鬼道を解いてルキアに襲い掛かる。

結界の外でそれを見ながら恋次は腕時計の針を見ながら秒読みをした。

「・・・3・・・2・・・1・・・10分。真之介！交代だ、ここを開ける！」

「あいよ。」

結界の中で満身創痕の状態で戦い続けるルキア。

虚のツナがルキアに飛び掛ってきたその瞬間、恋次が素早く中に入り込んで襲い掛かるツナの胸部にエルボーを食らわす。

恋次の突然の登場に一瞬驚くルキア。

恋次の攻撃で後方に飛ばされるツナを横目に、恋次はルキアに腕時計を渡し交代を告げる。

「時間だルキア、俺と代われ！」

「済まぬーーーーー・・・」

ルキアはそう言うと、結界の外へ出て行き恋次に戦闘を任せた。

そして、恋次は再び襲い掛かってくるツナを見ると、腰の刀を抜いてルキア同様自己紹介をやり直した。

「・・・阿散井恋次だ・・・てめーを、ブツた斬る！」

恋次と戦い始めるツナを見ながら、一護は心の中で焦りと不安を感じていた。

「・・・モタモタしてんなよツナ。早くしねーと・・・ホントにお前を殺さなくちゃならなくなるんだぜー・・・」

一護と同じように、結界の外でツナの様子を窺がうリボンとなのは。

二人は、神妙な顔つきでこう思った。

「（綱吉君・・・負けちゃ駄目だよ・・・君がここで負けたら、君を慕う皆や・・・そして、京子ちゃんを悲しませることになるんだよ！そんなこと、絶対にあっっちゃ駄目だからね！！）」

「（ツナ・・・こればっかしは俺にもどうすることもできねえ。お前が自分の手で始末しなきゃいけないぞ・・・ここでお前が負ければ、誰よりも悲しむのは・・・他でもない、京子の奴だ。こいつの涙を見たくなきや、とっと勝負をつけやがれ！」

その頃、精神世界で起きた巨大な爆発が漸く収まり、周囲は先程とは比べ物にならないくらいに破壊され、跡形もなくなっていた。

至近距離で虚のツナの技を喰らったツナは、身体中大火傷と出血多量だった。

ナッツは完全にダウンしてボックスの中に戻っていた。

「・・・何だよ、てめーの能力はその程度なのかよ、ツナ」

「・・・お前・・・」

出血多量と大火傷を負いながらも、未だに虚のツナを変わらぬ目で見つめるツナ。

すると、不意に虚のツナが瞬間移動してツナの頭を鷲掴みにして勢いをつけて投げ飛ばした。

ツナはその衝撃で地面に激突する。

「・・・全く、呆れるくらいに脳みその緩い野郎だ。武器をなくしたまま何をポーッと突っ立てやがるんだ？」

「はっ、はっ、はっ、はっ・・・」

すると、徐に虚のツナが右手の炎から黒い鎖のようなものを作り出し、人差し指でまわしながら雄弁とツナに語りだす。

「・・・ツナ・・・」 戦う本能” ってもんが一体どういうものなの  
かを知ってるか？」

「・・・何・・・？」

## 第57話：戦う本能（後書き）

### 次回予告

満身創痍のツナに、雄弁と戦う本能について語りだす虚のツナ。

それを説明するために、王とその騎馬の違いから語りだし、本能と  
言うものを説明する虚のツナ。

戦う本能がないツナを倒し、自身が王とならんと野望を抱く虚のツ  
ナがツナに止めをさそうとする。

その時、ツナの記憶の中に・・・意外な人物が現れる。

次回、次元の破壊者・・・「揺るがぬ王の座」

みんな、死ぬ気で見るよ。

ここで、読者の方にクイズだ。

今回の小説のキーマン、真之介の声を作者は一体誰の声で考えているでしょうか？

- 1 森川智之
- 2 関俊彦
- 3 杉田智和

回答はそのうち・・・

## 第58話：揺るがぬ王の座

外の世界では、息をあげながらルキアが結界の外で一護に休憩時間を尋ねる。

「はっ、はっ、はっ。休憩時間は？」

「シグナムとリインを一人と考えると・・・八人全員でローテンションだから、10分×8で80分だ！」

すると、その言葉に素早く指摘をしたのは石田だった。

「×8ではない。本人を抜いたら7人だろう」

一護は眼鏡を直しながらそう言う石田に腹を立てながら、怒りを我慢してルキアに訂正した。

「10分×7で70分だっ!!」

だが、一護も石田も肝心なことを忘れていた。

そう、結界を張っている役の真之介を計算に含めていたということだ。

「（てめえら・・・俺は結界張る役なんだぞ・・・俺を計算に入れてどうすんだよ、ボケ!!）」



そんな中、ルキアはふと先程のツナとの戦いのことを思い返していた。

「（強かった……！私が思っていたよりも大分……気をつけて戦えよ恋次……さもないと……）」

その頃、結界の中で戦闘を繰り返す恋次と虚化したツナ。

ツナは漆黒の炎の剣で恋次に刺突<sup>しつき</sup>を仕掛ける。

恋次は攻撃を上手い具合で除け、解放した蛇尾丸でツナの左肩に斬りかかる。

「せりゃああああ……！！！！」

恋次の斬撃を受け、肩から血を噴出すツナ。

すると、瞬時にツナの傷口が回復し元の状態に戻った。

これを見たボンゴレと六課一同は驚愕した。

「何だ……傷が回復したではないか！？どういうことだ!？」

了平がそう言うと、横から井上が説明をし始めた。

「あれは”超<sup>ちやう</sup>速<sup>そく</sup>再<sup>さい</sup>生<sup>せい</sup>”<sup>ちやうそくさいせい</sup>”って言って……虚の持つ能力で、攻撃されて損傷した部分を即時に回復する。ボンゴレの皆に分かり易く言えば、前に十年後の世界で雲雀君が戦った真<sup>リアル</sup>六<sup>ろく</sup>弔<sup>ちやう</sup>花<sup>か</sup>のデイジー<sup>ちやうか</sup>ってい

う人が、修羅開匣をして、斬りおとされた腕を晴の活性で復活させたでしょ。あれの超強力版かな。」

「なっ!? あいつの・・・超・・・強化版・・・!?!?」

獄寺を始めとするボンゴレ関係者は驚きを隠せなかった。

自分達の常識を超えた力がこつも簡単に眼前に広がってくることに  
――・・・

一方、恋次も直ぐにそれを理解した。

「ちっ、超速再生かよ・・・メンド臭せー！ー！ー！！！」

そう言うと、恋次は蛇尾丸の刃節を可能な限り伸ばしてツナの左腕を斬りおとし後方に飛ばした。

京子達や獄寺はその光景に身震いをした。

恋次が土煙の立つ前方を警戒していると、煙の中から虚化の影響によって出現した口を持った触手が恋次に向かって襲い掛かってきた。

「!・・・な・・・何だとツ!?!?」

その勢いに押され、恋次は触手の口の中に入り込んでしまった。

全員は恋次の安否を心配した。

「あっ!!! 恋次さんが・・・!!」

「やべーぜ！このままじゃ恋次さん、ツナに食われちゃうぜ！！」  
キャロと山本がそう言うと、それを少し離れた所で聞いていた日番谷は冷静な表情で呟いた。

「いや……まだだぜ……」

すると、触手の口の中に閉じ込められた恋次は霊圧を上げながら、大声でこう叫んだ。

「卍……解……！！」

その瞬間、触手が爆発を起こして強大な霊圧が飛び出し竜巻のように渦巻き始めた。

ボンゴレや六課一同は一体何が起こったのかまったく見当が付かずにいた。

「な……何が起こってやがる……！？」

そして、霊圧の煙が晴れて全員の前に現れたものは――……

「……狒狒王蛇尾丸！！！！」

煙の中から現れた恋次の姿は狒狒の骨と毛皮を身に纏い、斬魄刀は巨大な蛇の骨の様な形状に変化したものだった。

ボンゴレと六課の一同は恋次の姿に驚愕した。

「な・・・何やあれ！？あれも恋次君の能力やのか？」

「巨大な蛇の骨のバケモンが恋次さんの後に・・・一体なんだあれ！？」

山本がそう言うと、再び井上が説明をし始めた。

「あれは『卍解』<sup>ばんかい</sup> って言ってるね、斬魄刀の二段階目の解放なんだよ。」

「えっ！？斬魄刀って・・・一度解放したら終わりじゃないんですか！？」

スバルが愕然としながら尋ねる。

「うん。全ての斬魄刀は、実は二段階の解放が可能で・・・一つ目を『始解』<sup>しかい</sup>、二つ目を『卍解』<sup>ばんかい</sup> っていうの。これが、護廷十三隊の隊長さんになるための、必須事項なんだよ。朽木さんの話じゃ、卍解時の戦闘能力は・・・始解時の五倍から十倍に跳ね上がるんだって。」

「なっ！？十倍って・・・！？そんな力を奴は隠していたのかよ！？」

「やっぱり、侮れないものだね・・・死神の能力<sup>ちから</sup>って・・・」

なのはを始めとして全員が再び死神の力を噛み締めた。

恋次は卍解すると、狒狒王蛇尾丸を操り自身の霊圧を開放し、狒狒王蛇尾丸の口からレーザーのように巨大な霊圧の塊をツナ目掛け発射した。

「『狒骨大砲』!!!!!!!!!!」

その威力は結界を激しく振動させ、中では大爆発を起こした。

ボンゴレと六課一同は途轍もない威力に声も出なかった。

結界の外でそれを見てい一護は意外なことを口にした。

「何だよあいつ……マジじゃねえか……」

「そんなこと……君が一番理解しているんじゃないのかい？」

隣に座っていた石田にそう言われ、一護は再び癩癩を起こした。

虚化したツナの様子を恋次が確認すると、ツナの左腕は既に虚の腕になっていた。

女性陣はショックを隠しきれずにいた。

「……意外と早えーな……虚化がよ」

「（一護の話では……虚化制御の為の内在闘争の限界時間は約1時間前後。真之介を抜いて10分×6で1ターン60分なら……）」

結界の外で心中そう考えてるルキアは、徐にこう言い放った。

「次に私まで回ってきたら………終わりだな。」

その頃、精神世界の方はと言つとー……

雄弁に虚のツナがツナに向けて戦う本能とは何かを尋ねていた。

「戦う……本能……だと!？」

「もつと分かり易く簡単例で説明してやろう……ツナ、ずばり”王とその騎馬の違い”は何だ？」

「王と……騎馬……?」

「”人と馬”だとか、”二本足と四本足”だとか、そういうガキの謎かけをしてんじゃねえぞ。姿も能力もそして力も!全く同じ二つの存在があつたとして!そのどちらかが王となつて戦いを支配し残りのどちらかが騎馬となつて力を添える時、その違いは何だ!?!と訊いてんだ!！」

「………」

「……答えは一つ……」

そう言つと、虚のツナは鎖を振り回すのを止めて鎖を剣にして高ら

かにこう叫んだ。

「本能だ!!! 同じ力を持つ者がより大きな力を発するために必要なもの、王となる者に必要なものは・・・ただ只管に戦いを求め、力を求め、敵を容赦なく叩き潰し、引き千切り、切り刻む、戦いに対する絶対的な渴望だ!!! 俺たちの皮を剥ぎ、肉を抉り、骨を砕いた神経のその奥、原初の階層に刻まれた研ぎ澄まされた殺戮反応だ!!! てめえにはそれが無え!!! 剥き出しの本能って奴がな!!! てめえは理性で戦い理性で敵を倒そうとしてやがる。例えるなら、剣士が剣の先に鞘つけたままで一体誰を斬るってことと同じだ!!! だからてめえは俺より弱えエんだよ!!! ツナ!!!」

そう言うと、虚のツナは持っていた黒い炎の剣をツナの腹部目掛けて垂直に投げつけた。

ツナは徐に腹部を見ると、ツナの腹にはしっかりと黒い炎の剣が身体を貫通していた。

「・・・俺は御免だぜ、ツナ。ボンゴレファミリー（れんちゅう）はどう思ってるか知らねえが、俺は自分よりも弱えエ王を背中に乗せて走り回って、一緒に殺されるのは耐えられねえ。てめえが俺より弱えエなら・・・てめえを潰して・・・」

虚のツナはツナに近付き、腹部に刺した剣を徐に握り締めた状態ですなにか言いきった。

「俺が。。。王になる。。。」

ツナはこの時、朦朧とする意識の中で・・・不意にこんなことを考え始めた。

「（本能？戦う・・・戦いを・・・求める。戦う・・・譲れない・・・戦う・・・本能！！）」

その時、ツナの意識は一端この精神世界でない別のところに移っていった。

ツナが気が付くと、そこは古城がたたずむ閑静な場所だった。

ツナはハイパー状態のまま、仰向けになっていた。

「・・・何処だ？・・・ここは・・・」

「”何処だ”かど？何をぬかしてやがる、カスが！」

ツナは聞き覚えのある声に耳を澄ませた。

そして、急に襲ってきた攻撃を回避して前を向いてみると――・・・

「お・・・お前は・・・！？」





## 第59話：眠りし本能

ツナがもう一つの精神世界の先で目撃したもの……

それは……あの男だった。

「漸く目を覚ましやがったか……カスがつ!!」

「!ザ……ザンザス……!?!」

その男こそ、ツナと共に大空のボンゴレリングの継承を争い、十年後の世界ではミルフィオーレとの戦いで協力してくれたツナの一番の強敵……

ボンゴレ独立暗殺部隊ボス、ザンザスXANXUSであった。

「何で……お前がここに……?それより。ここは一体……!」

すると、XANXUSはそんなツナの様子を知る由も無いまま愛用の銃で攻撃を仕掛けてきた。

それを咄嗟に回避するツナに対し、XANXUSは意外なことを口にした。



「!!」

「何が可笑しいんだ!?!」

すると、XANXUSは笑いを止めてほくそ笑んだ後、ツナに向かってこう断言した。

「理由が必要かよ? 戦いによ。」

XANXUSの意外な言葉を聞いたツナは、正直驚いた。

そして、そのままXANXUSは話を続けた。

「……いい加減認めろよ、沢田綱吉。てめえは戦いを求めている。」

「……何……だ……?」

「てめえは力を欲している! そうだろ沢田綱吉!? 力を求める奴は誰だろうが皆、一人の例外もなく戦いを求めてんだよ! 力を手に入る為に戦いを求めるのか!? 戦うために力を求めているのか!? そんなことは判らねえ……だが! 唯一つ判っていることは、どうやら俺達は……そういう”かたちかたち”に生まれついたらしいってことだ!! 戦いを求め続ける”かたち貌”にな! 沢田綱吉!!」

「!!! - - - - -」

「てめえは本能の裡に戦いを求めてやがる。それ以外に方法は無ねえからだ……力を手にする為にはな!!」



「( - - - ”戦” - - - )」

そして、その瞬間――・・・

ツナの意識はもとの精神世界に戻ってきてた。

そして、徐に黒い炎の剣を右手で握り締めた。

すると、黒い炎の剣は忽ち色を済んだ橙色へと変色していった。

それを見た虚のツナは咄嗟にそれを放し後ろに下がった。

「!!!!!!!!!!!!!!」

虚のツナの右腕の袖のところが少し通常の大空の炎に侵食されていた。

今までとは様子が違うツナの様子に驚きを隠せない虚のツナ。

すると、ツナは突き刺さった剣を血を噴出しながらゆっくりと引きずり出した。

そして、それを右手で持つとそのままの状態で静止した。

やがて、先程とは違う瞳、”戦う本能を秘めた瞳”を虚のツナに見せつけ、剣を一度回転させた後それをしっかりと握り締め、虚のツナ目掛けて突撃して行った。

虚のツナはここで本来ならば防御の体制に入るはずだが、敢えてそれはせずに真正面からツナの攻撃を受けてしまった。

「ちっ」

ツナの剣は見事に虚のツナの身体を貫通し、暫くの沈黙が流れた。

そして、背中の方からツナの澄んだオレンジ色の炎が湧き上がり虚のツナを包み込んで言った。

そして、重い口で虚のツナはこう語りだした。

「……………くそっ……………どうやらてめえにも……………少しは残ってやがったみたいだな……………」戦いを求める本能”ってやつが……………」

そう言うと、虚のツナの身体は大空の炎で燃え上がりだし……………

次第に身体が消え始めていった。

「……………しょうがねえな。俺を倒しやがったんだ……………取り敢えずはてめえを王と認めてやるさ……………だが忘れんなよ、俺とてめえはどちらが王にも騎馬にもなるってことをな。てめえに少しでも隙があれば、俺はいつでもてめえを落として、てめえの頭蓋を踏み砕くぜ……………」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そして、最後に顔が燃え尽きようとした寸前・・・虚のツナは突き刺さった剣先を？みながらこう言い残した。

「・・・それからこいつは助言だ。本当にてめえの一番大事なモンを守り通したきゃ・・・せいぜい奪われねーよ気をつけな!!!」

「!」

ツナは最後の言葉に耳を傾けながら、虚のツナが消えていくことを見送りそれと同時に精神世界は光を帯びて何も見えなくなってしまうた。

その頃、外のほうでは――・・・

シグナムとリインが結界の中に入ってツナと戦っていた。

「くっツ!!!」

シグナムは虚化したツナの攻撃をギリギリでかわして、空中を三回転して着地した。

傍にはリインも一緒だった。

そして、二人は改めてツナの姿を見てみた。

ツナの姿はほとんど通常の虚と同じようなもので、まるでいつもの



ツナらしさを感じるものなど全く無かった。

京子達はそれにショックを受けながらも、最後まで姿を見続けた。

「……うわぁ……」

「ふうー……最早見た目は完全に虚だな……沢田。」

その様子を見ながら結界の外でしゃがんで待機をしていたルキア。

そして、心中こんなことを考えていた。

「（シグナム殿とリン殿が入った時点で既に一時間が経過した……次は私の番か……）」

そう考えながら、ルキアは腕時計を見続ける恋次に質問をした。

「……恋次。一護が虚化の為の内在闘争でかかった時間は……どれくらい分かるか？」

「確か……一護の話じゃ、およそ69分15秒だ。」

「今は……何分だ？」

「69分27秒。」

すると、ほぼ完全に虚化したツナが指先をシグナムのほうへ向けて霊圧を上昇させた。

それと同時に左手からは黒い死ぬ気の炎を融合させていた。

その様子を見て危機感を覚えたルキアは、大声で二人に叫んだ。

「虚閃とX BURNERが同時に来るぞ！二人ともっ！！！」

「ああ、分かっている。リイン・・・ユニゾンだ！」

「はいですー！！！」

そう言うと、シグナムとリインはユニゾンをしようとした。

その様子を見ていた六課フォワード陣は驚いた。

「シグナム副隊長とリイン曹長・・・ユニゾンするんですか!?!」

「当たり前だろ！いくらシグナムとリインでも、ユニゾンなしにあの霊圧と炎圧は防ぎきれねえ！」

スバルの質問にヴィータが答えた。

シグナムとリインがユニゾンを開始しようとしたその時――・・・

突然、ツナの左肩に輝が入った。全員はその光景に驚いた。

「何だ・・・!?!」

ツナの異変に気付いた茶渡は焦った様子で真之介にこう指示した。

「真之介！！今すぐ結界からシグナムとリインを出してやってくれ！！」

真之介は手際よく結果から二人を取り出し結界を閉じた。

ツナは人間ものとは思えないような声を上げながら苦しみ始めた。

そして、いたるところの輝から血を噴出した。

やがて、ツナの身体から光が放出され、結界の中で大爆発を起こしたのだった。

全員はその爆発に驚きながらも、結界の中の土煙のほうを見続けた。

すると、そこには虚化が解けてもとの姿に戻ったツナが血塗れになりながらしっかりとした仮面をつけて立っていた。

虚の身体は徐々に粉々になり消えていった。そして、一護は徐に真之介に言った。

「・・・真之介、結界を。」

「ああ・・・。」

真之介は右手で指を鳴らした。

すると、結界はいとも簡単に解かれた。

その瞬間、無言のツナは額の炎を消して仮面をつけたままその場に倒れ込んだ。

全員が見守る中、一護はゆっくりとツナのほうに近付きこころ尋ねた。

「……気分はどうだ……ツナ。」

すると、暫くしてツナが仮面外してゆっくりと一護のほうへ振り返り柔らかい表情でこころ言った。

「……えエ……悪くは無いです。」

それを訊いた一護は暫く沈黙をした後、同じく柔らかい表情でこころ言った。

「……そうか。」

その瞬間、全員の緊張の糸が一気に緩み心の底から安堵した。

京子達は涙を流しツナの無事を心から喜んだ。

リポーンとなのは心の中でよくやったとツナを褒めた。

この時、ツナは最後のほうで虚のツナに言われたことを思い返しなから、目の前の仮面に向けこころいい残し、眠りに付いた。

「……悪いな……」  
”京子ちゃん”は……俺の命に代えても守  
って見せるわ……」

## 第60話：特別講師

ツナの虚化制御のための内在闘争が無事に決着し、一護達全員は安堵で胸をなでおろした。

そして、それを誰よりも喜んだのは紛れも無い・・・京子だった。

ツナは井上の介抱を受けた後、そのまま死体のようにぐっすり眠ってしまった。

虚化制御の内在闘争が終わったのは、その日の夕暮れ時だった。

何もしていないメンバーも、凄くくたびれた様子だった。

京子はツナの部屋へ行き、眠っているツナの横に座って歓喜の涙を流しながらツナの手を握っていた。

一方、その頃他のメンバーは一端そのまま中庭で真之介の話を聞いていた。

「さてと・・・どうやらツナのほうも上手くいったみたいだし・・・いよいよこっからは、お前達の修行に取り掛かることになる。だが、生憎今日はこんな時間だ。本格的な修行は明日行うことにして・・・今は明日の訓練内容と一護達死神メンバーの詳細な戦闘データを頭に送り込む。ボンゴレと六課の一同は全員目を瞑れ。そのままの体制で俺が脳に直接データを送り込む。それじゃあ・・・いくぜ。」

真之介の言われたとおり、なのは達は目を瞑って真之介の術を大人しく受けていた。

そして数十秒後、脳へのデータ配信は滞りなく無事に終了した。

なのは達は一護達死神メンバーの力量を今ここに性格に認知した後、改めてその力が絶大だと言うことを思い知った。

「やれやれ・・・俺たちはこんな人達と模擬戦をしてたんですね・・・  
・仮に敵方だったら、命は無かったでしょうね。」

「つくづく、僕達は運がよかったですね・・・」

大人ランボやエリオを始めとする一同は、全員苦笑いを浮かべたのであった。

すると、ふと一護が真之介に尋ねた。

「ところで・・・昨日なのはとツナに起こった二つの現象の明確な処理をするって言ってただろ。ツナはともかく、なのは一体どうするんだ？」

「俺の考えでは・・・これからの戦いに向けてなのはの戦力はキーの一つとなる。だから、魔力と同時に斬魄刀を使いこなすようにして貰おうと思ってる。そのために、なのはの修行には特別講師を就

けさせてもらっ。」

「特別講師……？一体誰なの、真之介君？」

なのはがそう言つと、真之介はいつものように指を鳴らした。

すると、なのは達の目の前にあの灰色のオーロラのカーテンが現れ、中から人物が出てきた。それを見た一護達死神メンバーは驚愕した。

「あつ……あなたは……！」

「う……浮竹……隊長！」

そう、その人物こそ……ルキアの直属の上官であり、日番谷同様護廷十三隊十三番隊隊長、浮竹十四郎だった。

「おす、朽木、みんな！心配してたんだぞ！」

温厚な性格な浮竹は、軽く挨拶をして一護達のことを心配してくれた。

「おい、浮竹……なんでお前までもが此処に来てる！？」

「実はね……仕事の途中に彼が俺の部屋までやってきて諸々の事情を話してくれたんだ。それで、日番谷隊長や朽木達が大変な目に遭ってるって聞いてここまでやってきたんだ。ついでに、ある女性の専属講師をしてくれないかとも頼まれてね。」



「じゃあ・・・私の特別講師って・・・!?」

「そうだ。君が高町なのは君だね。護廷十三隊十三番隊長、浮竹十四郎だ。よろしく!」

そう言うと、浮竹はなのはに握手を求めてきた。

なのはもそれに答える為に慌てて手を出した。

「こ、こちらこそ!高町なのは一等空尉です。不束者ですが、よろしく願います!」

二人はお互いに握手をし合い親睦を深めた。

六課の前線メンバーは温厚な浮竹の姿に好感を抱いた。

「ねえ、ティア!何だか性格よさそうだねあの人!」

「そうね!どうやら悪い人ではないことは間違いなさそうね。」

なのはさんとも簡単に打ち解けているしね。」

「何だか・・・心があつたかくなるね、エリオ君!」

「そうだね。まるで綱吉さんと同じ雰囲気があるね。」

だが、一人だけ疑いを持っている人物がいた。それは・・・

「おい、その白髪爺！隊長ってことは当然強いんだろうな！！もし、冗談をかますようなら・・・しばくぞー！！」

紛れも無い獄寺だった。獄寺の発言に対して直ぐに注意を入れるハルとルキア。

「獄寺さん！！初対面の人に向かっていきなり何て事を言ってるんですか！！」

「貴様！浮竹隊長に対してなんて口の聞き方だ！！今すぐに謝れ！！」

「ざけんじゃねー！！いきなり出てきておいてそう簡単に信用できるかよ！！それに、俺は相手が誰であろうと年上はみんな敵なんだよー！！」

そう言つて、三人は喧嘩を始めてしまった。

そんな様子を呆れた様子で見守る一護達と、朗らかに笑う浮竹。

「たく・・・これだから、ガキは困る・・・」

「はははははは。良いじゃないか日番谷隊長。元気があつて結構じゃないか・・・」

浮竹がまだ何か言おうとしたときだった。

突然、浮竹は胸を押さえて口から血を出した。

なのは達は突然の出来事に驚いたが、日番谷とリボーンは至って冷静だった。

ルキアも一端喧嘩を止め浮竹のもとに駆け寄った。

「浮竹隊長！大丈夫ですか！？」

「ああ・・・心配ない・・・。急に持病のほうが・・・みんなも心配掛けてすまないな！」

「持病っていうと・・・結構重いもんなのか、日番谷？」

「いや・・・大したことはない。時々隊首会を休むことはあるが、命に別状は無い。いつものことだ。」

「たく！世話のかかる爺だぜ！！」

「貴様！！まだそれを言うか！！」

再び獄寺とルキアは喧嘩を始め、その仲裁に山本・了平・石田・茶渡が入る。

一護と恋次、日番谷とリボーンは溜息をしながら呆れ返り、なのは達は言葉を失った。

すると、そんな雰囲気をぶち壊すかのように突然誰かの腹の音が鳴った。

「あはははは……みんな悪いな。私や……」

顔を真っ赤にしてはやてが徐に手を挙げた。

すると、一護達もつられるかのように腹の虫が鳴いた。

「腹減ったな……昼間は喰ってる暇なんてなっかたから……」

「おおお！！！！極限に腹がすいたぞ！！！！」

「そろそろ夕飯の時間だし、みんな早く戻ってご飯食べようよ！あつ、浮竹さんも是非一緒に！」

「お、そそかい？じゃあ折角だからお言葉に甘えさせてもらうとするか！」

すると、ヴィヴィオが屈託の無い笑顔で浮竹のもとに近寄り、浮竹の手を引いてきた。

「おじちゃん行こう！みんなでご飯を食べたらすっごく美味しいよ！」

「ああ、勿論だとも！！よし、いっちょやるか！」

そう言うと、浮竹はヴィヴィオを優しく抱きかかえると自分の背中に乗せて肩車をした。

ヴィヴィオはすっかり浮竹の背中ではしゃぎ回っていた。

なのはや他のメンバー達もその光景に心が和んだ。

そして、全員は喧嘩をしている二人を除いて屋敷の中へ向かった。

中に入ると、何故かアイゼンハウアーが割烹着を着て出迎えてくれた。

「おお、いいタイミングだな！お前たち！」

「おいジジイ・・・何だよそのキモい格好は！？」

「キモい言うな！何、たまにはわしが料理を作りたいと思っただけのことじゃよ・・・」

「えっ！？ジイさん・・・料理出来たのかよ！？」

一護を始めとする男性陣はアイゼンハウアーの一言に耳を疑った。アイゼンハウアーは鼻息を出して自信満々に言った。

「ふん！こつ見えてもわしはB級グルメの世界大会で優勝した腕前はある。味は保障する。おや？見かけぬものが一人おるな！？」

「ああ。なのはの特別講師をもらうために連れて来た、死神の浮竹だ。」

「どうも。浮竹十四郎です。真之介君から事情は聞いています。何卒よろしく。」

「そうか。こちらこそよろしく。家主のアイゼンハウアーじゃ……さあて、立ち話はこれくらいにして夕食としよう。今日はわしの作ったご馳走じゃぞー!」

一護達は半信半疑のまま食堂に向かっていった。

そして、テーブルについて彼らの前に運ばれてきたのは、確かにすべてがB級グルメと呼べるような料理だった。

だが、見た目はと匂いは確かに美味そうだった。

「へえ〜これ皆ジイさんが作ったのかよ!？」

「なかなかやるじゃねえか……」

素直に驚く一護に対して、獄寺は相変わらず素直に褒めることはなく些が見下した感じだった。

「ふん。ジイのくせに上出来じゃねえか……」

「ジイのくせには余計じゃ!お前だってまだ赤ん坊の癖に!」  
アイゼンハウアーはリボーンの一言に頬を膨らませて不機嫌になった。

そして、真之介のいただきますの一声で全員はアイゼンは一の料理を口にしてみた。

「どげじや、わしの料理は？」

「……………美味い……………」

日番谷はゆっくり食べた感想を率直に言った。

恋次と了平は貪り食いながらこんなことを口にした。

「うめえ！！くそ……爺の癖に、こんな美味いもん作りやがって  
！！！！」

「許せん！！実に極限許しがたいぞ！！！」

「何で美味いっていいながら怒られなきやならんだ！可笑しいだ  
ろっ！！！」

一護達はそんな会話をしながら穏やかな夕食を済ますのであった。





## 第60話：特別講師（後書き）

### 次回予告

浮竹が新たに加わり、いよいよ明日から本格的な修行が始まる。

どうやら、修行内容はそれぞれの戦力に合わせて行うものらしい。

一方、眠りから目を覚ましたツナと俺は・・・今日あったことに関して振り返る。

そして、ツナの今後の修行は、どんな展開を見せるのか？

次回、次元の破壊者・・・「対終末用プログラム」

みんな、正解して見ろよ！

## 第61話：対終末用プログラム

全員が食事を済ませ、一息ついているその頃、ツナも漸く目を覚まし精神世界での戦いを振り返っていた。

その時、京子はなのはに呼ばれ席を外していた。

「・・・戦う・・・本能か・・・」

すると、その時ドアが開きリボーンが様子を見に来た。

「どうやら目が覚めたみたいだな・・・ツナ。」

「リボーン・・・。」

リボーンはツナの傍に座ると、今日精神世界で何が起こったのかを問いただした。

「色々と収集がつかないこともあるが、とりあえず今日精神世界であったことを・・・全部話せ・・・」

「うん・・・俺は自分の精神世界で、もう一人の俺に出会った。姿も能力も、そして力も同じ自分に。俺はあいつと戦いながら、”戦う本能”とは何かと聞かれたよ。」

「・・・・・・・・」

「そしたら、あいつは王と騎馬の違いを例にして説明してくれた。戦う本能とは、容赦なく敵を倒すために必要な殺戮反応だと。俺にはそれが無いから自分よりも弱いとも言われた。で、やれれそうになった寸前・・・俺の意識は別のところに移って、そこでXANXUSとも出会った。」

「・・・XANXUSとか!？」

「うん・・・あいつは俺に言ってきた。お前は本能のうちに戦いを求めている。俺たちは戦い求め続ける貌かたちに生まれついたって。制する力を手に入れたければ、戦う以外に道は無いって。その時、俺は無意識の中に戦うこと既に受け入れていたことに気付いた。どんな形であれ、俺は一生戦い続けることになる。でも、例えそんな道でも・・・大切なものを守るためなら、俺は喜んで戦いに身を投じるよ。それが俺の”覚悟”だ。」

その言葉を聞いたりリボーンは、心の中でいつの間にか成長しやがったなっと思いつつも、いつもの様に鼻で笑いそんなツナを馬鹿にするようにこう言った。

「ふん、ダメツナのくせに格好つけんじゃねえよ!」

リボーンはそう言うと軽くツナの顔面に蹴りを入れた。

痛がるツナを尻目に多少上機嫌でその場を後にした。

ツナもそんなリボーンの姿を見ながら、自分も軽く笑みを浮かべた。

その頃、リビングでは明日からの本格修行のための詳しい話し合いが行われていた。

「それじゃあ明日の修行のための話し合いを始める。今回全員にやってもらおう”対終末用プログラム”はお前たちの個人の能力、そしてチーム内での総合的な能力を高めるために行うものだ。時間が無いから、今回は俺の独断と偏見で修行のためのチーム編成を組んだ。今から発表するぞ。」

全員は真之介が取り出したメモ帳を見ながら、固唾を呑んでそのときを待った。

「まずは・・・直接フロント組み。所謂打撃専門のチームだ・・・メンツは、茶渡と了平にスバルだ。」

「おお！！茶渡殿とスバルと一緒に修行が出来るのか！！極限素晴らしいではないか！！」

「あはは・・・何だか嬉しいような、ちょっと怖いような気がするのは気のせいかな・・・」

「・・・まあ、分からんでもないがな・・・」

大喜びの了平に対して、少々困惑気味の茶渡とスバル。

すると、真之介は真剣な眼差しで更に続けた。

「お前たちは互いに自分の技を磨きながら、各々の能力を結集させた必殺の一撃を創り上げてもらう。出来るか!？」

「当然だ! 俺と茶渡殿とスバルの力を以ってすれば、最強の一撃の一つや二つどうってことない!」

了平の自身の籠もった発言を聞いた茶渡とスバルもまた同感だった。

真之介はそれを聞いて安心した。

「決まりだな。じゃ、どんどん行くぜ! 次は間接フロント。つまり、後方支援だ。こいつは敵に幻覚や幻影などで敵を惑わしたり、特殊技で相手を翻弄する役割。俺が思うに、この担当はずばり……ティアナにクローム、ルキアと井上が適任だと思うが、どうだろうか?」

そう言われると、四人は顔を見渡し考え込んだ。

確かに、幻覚と幻影という分野においてはティアナとクロームは適任かもしれないが、ルキアと井上は本当にこの位置で良いのか、それが問題だった。

「ティアナとクロームはともかく……私と井上は本当にこのポジションで良いのか? 私もある程度の鬼道や斬術は出来るが、二人に返って迷惑は掛けないだろうか?」

「私も……治療とか、守ることなら出来るけど……攻撃はあま

り得意じゃないから。それに朽木さんと違って、もつと皆に迷惑を掛けちゃうよきつと・・・」

そう言つて、頂垂れてる二人を見て浮竹は優しい笑みを浮かべて二人に話を始めた。

「それは違うよ、二人とも。たとえ己の力が非力でも、大切なことはもつと違うところにあるんじゃないのかな。能力は違えど、互いに思い合い、心を一つにすることのほうが、ずっと素晴らしいと思うよ。現に、二人は自分の弱いところを理解し、それをちゃんと相手に伝えていく。ならば、仲間のみんなはその弱いところを補い、助け合えば良い。だから、自分をそんなに卑下することは無いんだよ。俺たちは、そのための仲間だ。」

「浮竹隊長・・・はい、そうですね！大事なことを思い出させてくれて、有難うございます。井上！」

「うん！私・・・朽木さんやティアナさんにクロームちゃんと一緒に、全力で頑張ります！！」

「私も・・・ボスやみんなの力になれるかどうか不安だけど、精一杯頑張ってみる。」

「任せてください、浮竹さん！あたし達四人が、最高の後方支援だつてことを、みんなに証明して見せますよ！」

ティアナの最後の一言に浮竹も、そしてスバルやなのはも安心した。

リボーンはこのとき、流石経験豊富な隊長だなと感心したものだ。

「分かった！じゃ、ここも決定だな。それじゃ・・・どんどんメン  
バーを発表していくぜ。」

ここからは次のとおりになる。

特殊戦闘フロント・・・日番谷、フェイト、エリオ、大人ランボ。

近距離・遠距離フロント・・・石田、シグナム、山本、キャロ。

迎撃粉碎フロント・・・獄寺、ヴィータ、恋次。

独立防衛フロント・・・雲雀。

非常砲撃フロント・・・はやて、リイン、リボンそして・・・

「この非常砲撃フロントにはもう一人・・・俺が入ることにする。」

そう言ったのはなんと真之介だった。

全員は真之介の発言に驚愕した。

はやてはそんな真之介に慌てた様子で尋ねた。

「ちょ、ちょっと待ってや！！何でまた真之介君が私らと一緒に修行せなあかんの！？」

「確かに、一体どういう風の吹き回しだ・・・真之介？」

「勘違いすんじゃない。俺ははやてとリインを直接鍛えるために専属コーチをしてやるって言ってるんだ。この手でオーバースラング魔導師を俺どうやって苛めようか、今から楽しみで仕方ないぜ！」

この瞬間、一護は・・・ああ、こいつSなんだと思い軽く引いたのであった。

はやては真之介の発現を聞くと、怯えるどころか逆にその挑発を受け、臨むところだという姿勢を見せた。

そして、残る一護とツナとなのははというと・・・

「そして、残る主要戦力フロント・・・それは、一護とツナとなのはだ。但し、三人全員で修行をする前に・・・なのはは先に浮竹とともに自身の斬魄刀を使いこなすようにし、一護はツナの虚化保持の訓練につきつきりで面倒見てくれ。」

「分かった。あいつには俺からそう言っとく。それより、気になることがあるんだけどよ！？」

「ああ？何だよ一体！？」



「いや、雲雀は単独防衛フロントってことで一人だけだよ……一体誰がこいつの修行の面倒見るんだよ？」

「心配すんな。そいつは明日になったら分かる……必ず雲雀はこの修行で最強の男になる。最強の男の手によって」

全員は最後の言葉の意味をあまり理解できなかった。

雲雀自身は戦えれば何でも言いという感じだったが……この後、雲雀の身にとんでもないことが起こるのは……次回以降になるだろう。

その頃、アスタ・アキ終末のアジトでは、暗い廊下を物静かに歩く二人の人影があった。

「……随分と機嫌がいいな……何があった……？」

「別に。私はいつでも平常心なつもりさ。君と同じようにね……ペロー……。」

「複製斬魄刀コピーざんぱくとうを持って……一体何処へ行く？」

「なに……ちょっと、面白い人材を見つけたからね……その人達と遊んでくるだけさ……。」

「お前はそうやって遊びと殺しの区別もつかないから困るんだ。ゴ

「その連中と今関わる必要はない。後でまとめて始末すんだ。それまで待てないのか？」

「君は実に忠実だよ・・・でも、好奇心を抑えられないのがそんなに悪いことだとは思わないな。」

「俺に”こころ”はない・・・そんな下らん感情など、理解できぬ。」

「それもある意味悲しいことだよ。強い力を持つが故に、あるものを代償に生きてきている。君の場合はそれと言うわけか。まっ、とにかくこれを見たまえ。」

そう言うと、その男は無表情のペローにある映像を映し出した。

そこには、二人の女性の個人データが表記されていた。

「これは・・・ボンゴレ霧の守護者のクローム髑髏に、ティアナ・ランスター執務官か。」

「彼女達はとても素晴らしい幻術の使い手だ。将来もかなり期待できる。だから・・・そんな二人に、私が取って置きのプレゼントを差し上げようと思ってね・・・あの二人に、最高の”催眠”をね・・・」

「程ほどにしておけよ・・・いずれ機会は近いうちにやってくる。それまでは殺すなと命を受けていることも忘れるな・・・オベージヤ。」

「ああ……分かっているよ……ペロー。」

そう言うと、オベージヤは不敵な笑みを浮かべペローの前を立ち去った。

果たして、何を考えているのか？

## 第61話：対終末用プログラム（後書き）

### 次回予告

いよいよ、本格的な修行がスタートした。

ツナの場合は、まず一護とともに虚化を長時間キープするための保持訓練からだが・・・

相変わらず飲み込みの悪いツナ。一護はそんなツナに容赦なく厳しい方法で当たってくる。

その頃、雲雀の修行が・・・とんでもないことになっていた。

次回、次元の破壊者・・・「雲雀が恐怖するとき」

雲雀の身に、何が起こったのか!?

## 第62話：雲雀が恐怖するとき

何事もなく一夜明け、一護は珍しく早起きをした。

と言うのも、前回みたいに実に不快な目覚めはしなくなかったからであった。

早起きついでに、一護はまだ寝ているツナを起こしに行ったのであった。

「ツナ・・・朝だぜ！さつさと起きろ！」

そうやって一護は鍵のかかっているツナの部屋のドアを開いてツナに呼びかけた。

ツナは布団にもぐりこんだまま眠ったままの状態だった。

一護はそんなツナを起こそうと、強引に布団をめくり返した。

「コラ！さつさと起きろ！！今日からお前の虚化保持の訓練・・・  
・・・！」

その時、一護は一体何の光景を見たのでしょうか？

次の選択肢から選んでね。

一番、寝ていたのがツナではなくセクトウレだった。

二番、ツナと誰かが同じベッドで寝ていた。

三番、白骨化した遺体を抱いて寝ていた。さて、正解は……

「お……お前ら……何やってんだよ……!!!!?」  
「???」

一護の大声になのはとフェイトが反応し、駆け足でツナの部屋までやってきた。

「一護君!! 一体どうしたの?」

「何か事件でもあったの!？」

「どうもこうもあったもんじゃねえよ!! こいつを見てみるよ!!」

そう言うと、赤面した一護がなのはとフェイトにそう言ってベッドのほうを指差した。

状況もよく分からないまま言われたとおりベッドのほうをしてみると、なのはとフェイトは一護同様赤面した。



ツナはこのことがあって数時間は魂が抜けたままの状態だった。

京子は顔を赤くしながらも、ツナと一緒にベッドで寝られたことを嬉しく思った。

そして、今日から本格的に対終末用プログラムが開始される。

全員は真之介によって指示された場所へ移動し、それぞれのメンバーと共にウォーミングアップを始めた。

ツナは一護に昨日話されたように、中庭に作り出された超幻覚空間で虚化保持の訓練を受けることになった。

「そう言えば・・・雲雀さん一人ですけど、誰と修行するんですかね!？」

「真之介の話じゃ・・・そのための専属コーチを連れて来たらしいぜ・・・」

「えっ!?!それじゃあまたディーノさんが!？」

「いや、それは無えな!今回は雲雀を最強の男にするために、同じ最強の男を呼んだみたいなんだ。俺には、どうも・・・その”最強”つってのが引つかかるんだよな?それにあいつの言ってた・・・”雲雀がはじめて恐怖を覚える男だ”つて言うのが気にかかるんだ



よな〜〜」

「（雲雀さん・・・あれ以上強くなっても逆に困るだけだな・・・！〜）」

ツナは心の中で怯えながらそんなことを思っていた。

一方、その頃なのはは自動車教習所並みの広さのある地下練習場で浮竹と向かい合い、浮竹の話聞いていた。

「さて、まずは簡単に質問をしてみようかな？なのは君、君は必ずばり”斬魄刀”とは一体どんなものなのか、君なりの意見を聞かせてもらうかな。」

「あははは・・・いきなり難しい質問ですね。う〜ん、何て言えばいいだろう・・・すみません浮竹さん、上手く言葉に出来ないですね。」

「あははは、そうか。まあ、こんな質問をいきなりぶつけたのも酷だっただろうな。いいだろう、俺から説明してあげよう。斬魄刀とは・・・本来、個々の死神の魂によって形作られるものだ。」

「個々の死神の魂によって・・・ですか!？」

「そうだ。その形状・能力は、持ち主の死神によって全て異なる。そして、斬魄刀の最も特徴的なことは、それぞれが名前を持って生きていと言ったことだよ。」

「名前・・・あつ！」

「そう、君の斬魄刀・・・『星海』がそうであるようにね。君も朽木や一護君たちの斬魄刀を多少見たから、分かるだろう？ 斬魄刀はモノじゃないんだ。皆命を持って生きているんだ。だが、中にはそれを分らずに道具のように扱うものも多々いる。君はまず、斬魄刀が決して”道具”ではないことを理解してもらいたい」

「あつ、はい！」

「よし！その様子なら、心配することもなさそうだな。さて、次は斬魄刀の解放についてだ。ある程度は話をしたと朽木からは聞いている。今回は、第一段階の始解に必要な条件に関して話そうか。始解に必要なのは、斬魄刀の”対話”と”同調”だ。つまり、こちら側が斬魄刀の住む世界に行き、心を通わせることだ。君はそれをしたから、始解を可能にした。ここまではいいかな？」

「大丈夫です。浮竹さんの説明で、漸く疑問が解消されました。私があの時あった青年は星海君であり、私の魂そのものだったんですね。」

「うん。どうやら大分分かってきたようだね。それじゃあ早速・・・魔法を一先ず使わずに、斬魄刀を解放して俺と勝負をしてみようか、いいかい？」

「ええ！？いきなり結構厳しいこと言っんですね、浮竹さん・・・」

なのはは困惑しながらも、浮竹の指導のもとで斬魄刀の修行を開始するのであった。

その頃、ツナはというとー……

「あああああああああ……！！！！！！！！！！」

一護と共に虚化保持のための訓練を開始したが、直ぐに虚化を抑えられなくなって勝手に虚化を解いてしまう。

「勝手に虚化解くなって言うてるだろうが、ボケ！！！！」

「じぶっ！……」

一護はそんなツナに容赦ない蹴りを顎目掛けて喰らわせた。

ツナは必死で虚化の苦しさを一護に訴える。

「だって一護さん！！今のは解がなかったら間違いなくヤバかったですよ！！！！」

「うっせーよっ！ヤバいところまでやんのが修行だろうが！！生半可な覚悟なら止めちまえ、ボケ！！！！」

「そんなー！！！！（うっせーうっせー……一護さん、リボーン以上にスパルタかも……）」

ツナはいつもの雰囲気の一護とは違う一面を見てから、心の中でリボーン以上にスパルタだと思ったりもした。

一方、雲雀はと言うと、屋敷の同じく地下にある広い訓練室で修行の相手を待っていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

中々相手が現れず、次第にイラつき始める雲雀。

そして、誰もいない部屋に向ってこう言った。

「・・・・・・・・ねえ・・・・・・・・いつまで僕を待たせれば気が済むの。いい加減に出てこないと、僕は帰るよ・・・・」

そう言ったその特だった。

突然、雲雀は今まで感じたことの無い巨大な殺気を感じ身動きが出来なくなっていた。

そして、それと同時に・・・・生まれ初めて恐怖というものも感じたのであった。

「・・・・・・・・な・・・・・・・・何だ・・・・・・・・これは!?!?何がいるんだ・・・・・・・・!?!?」

雲雀は全身から今まで流したことの無い多量の汗を流していた。

そして、部屋中を見渡し誰か自分以外のものがないかどうかを徹

底的に探し始めた。

だが、そんな人物は何処にもいない。

「（・・・おかしい・・・さっきから探して探しても僕意外の奴は  
いない・・・なのに・・・何で、殺気が出ている！？しかも、距離  
がどんどん縮んでいく感じだ。まるで・・・ずっと喉元に刃を突き  
つけられているみたいだ・・・）」

「お前か？」

すると、突然雲雀の耳元から聞き覚えの無い不気味な声が聞こえて  
きた。

雲雀は咄嗟に身をよじって後を振り返った。

すると、雲雀の目に映ってきたのは・・・影だけだったが、とても  
この世のものとは思えない凶器に満ちた目だった。

雲雀は暫く目をかっとな開いたままその目を凝視した。

いや、目を背けられなかったと言っほづが正しいか。

「・・・どうした、いつまでそっちを見てやがる？」

「えっ？」

その瞬間、雲雀は誰かに後から刀で突き刺された感覚を覚えた。

感覚だけなのに、雲雀ははっきりとその痛みも、吹き出る血をこの目で確認した。

だが、身体には何処も傷など無い。

雲雀は肩で息をしながら、胸を押さえた。

「……はあっ！はあっ！はっ！はっ！（な……何だ今は……！？僕は、確かに刺されて……「殺気」か……！？まさか……！ただの殺気であんな……）」

「雲雀恭弥だな？」

その時、雲雀の後から鈴の音と共に、先程聞いた不気味な声が耳に入ってきた。

雲雀は恐怖で後ろを見れず、前を向いたまま尋ねた。

「何で……僕の名前を……君、一体……」

「なんだ、あの真之介って奴から聞いてんじゃねえのか？」

「何!？」

その時、雲雀は修行の前に修行の相手はどんな奴かを真之介に尋ね

ていたことを思い出した。

雲雀は、相手は強いのかと聞くと、真之介は「……」

「会えば分かるさ……奴の強さをお前の頭が理解できるまで、お前が生きていればの話だがな」と。

そして、恐怖を感じながらも雲雀は徐に後を振り返ってみた。

そこに立っていたのは「……………」

「護廷十三隊……十一番隊隊長、更木剣八むらぎけんぱちだ。てめえと、殺し合いに来た。」

雲雀の目の前に立っていたのは……右目に眼帯をし、髪の毛は1本に束ねてあり1つ1つのまとまりに1個ずつ鈴が編み込まれていて、顔の左側には大きな傷がある、死覇装がボロボロの大柄な男だった。





## 第62話：雲雀が恐怖するとき（後書き）

### 次回予告

恐怖する雲雀の前に現れた雲雀の修行相手・・・それは、尸魂界最凶の戦闘凶・・・更木剣八だった。

感じたことのない恐怖を覚えながらも、雲雀は武器を取って戦いを挑む。

一方その頃、他のメンバー達のほうも・・・いい感じに修行を始めたらしいな

さうで、一体どんな風になるのやら・・・

次回、次元の破壊者・・・「アンデッド」

みんな、死ぬ気で見るよ。

### 第63話：アンデッド

雲雀の前に現れた殺気に満ちた大柄な男。

間違はなく一護達と同様死神なのだが……

それとは比較にならない威圧感と恐怖を持ち合わせながら、本当に命を刈り繰るかのようにゆっくりと雲雀に近付いてきた。

雲雀は、あの時同様視線を返る事ができずにいた。

額からは尋常ならぬ汗が流れ出てくる。

「（更木剣八……こいつが……黒崎一護同様の死神で……十一番隊長……！……流石に隊長格か……！僕が心を乱すほどの殺気と霊圧を出してきている……やっぱり今迄感じていたものは……こいつの……）」

雲雀が恐怖に堪えながらも冷静に剣八の様子を窺がっていると、剣八は不気味な笑みを浮かべ雲雀に語りかけてきた。

「……どうした？言っただけ俺は。てめえと殺し合いに来た……ってな。」

「なっ……!？」

「何の返事も無えってことは・・・始めちまってもいいのか？」

「!?!?!」

剣八の威圧に恐怖した雲雀は咄嗟にトンファーを取り出し、雲属性の紫色の炎を灯した。

すると、剣八はそれを見ると多少興味が湧き上がり雲雀に尋ねた。

「ほお〜面白れーもん持ってんじやんか・・・で、そいつでどうやって俺と殺り合っただ・・・？」

「・・・悪いけど、僕はあなたになんか負けるつもりは無いよ・・・僕があなたを咬み殺してそれで終わる・・・」

「いい根性じゃねえか。その意気だぜ。俺は『てめえと殺し合い』に来たんだからな、安心したぜ。てめえの仲間だの沢田何たらだのが何処で死のうが興味は無えからな。」

「・・・お生憎・・・僕も同じさ。」

そう言うと、雲雀は雲のボンゴリングの炎を今迄以上に巨大にして、トンファーに灯る炎をさらに巨大化させた。

だが、それでも雲雀の身体はいつもの戦うときとは違い、全身から恐怖が滲み出ていた。

「ふーっ、ふーっ・・・ふーっ・・・」

剣八は雲雀の構えを見るなり鼻で笑いこっ言った。

「・・・悪くねえな。構えは割としっかりしていて、殆ど隙も無い。殺気もそれなりに出てやがるな。そこらの雑魚相手じゃ相手にならんだろうな。とても中学生のレベルとは思えないぜ。」

「・・・褒め言葉として受け取っておくよ」

「・・・だが俺と殺り合うには・・・ちよいと食い足りねえな・・・  
どうだ、一つハンデをやるうか。」

そう言うと、剣八は胸元の死覇装を開き雲雀にこっ言った。

「てめえから先に攻撃させてやるよ。どこでも好きな所を攻撃して  
来い。」

「-----な・・・!?!?」

「どうだ・・・?文字通り出血大サービスって奴だぜ・・・」

「ふざけないでよ!な・・・何言ってるの・・・?構えてもいない  
奴に攻撃出来ないよ!僕をバカにしてるの?」

「バカになんてしてねえさ。ただのサービスだ。構えてねえ奴に攻  
撃しねえって心構えは立派だが、そんな小奇麗なモンは別の機会に  
とっつけよ。」

「く………!」

「……そう気負うなよ、楽しくやるうぜ。殺そうが殺されようが……所詮は暇潰しだろうが。」

その言葉を聞いた瞬間、雲雀の頭は”恐怖”と言つ言葉で支配された。

雲雀の握る手は振るえを覚え、身体は硬直した。

「ホラ来いよ。首でも腹でも目玉でも、何ならこの一撃で俺を殺したつていい。ビビッてんじゃねえよ!!来い!!!!」

「く……あなたはここで咬み殺す!!」

そう言つて、雲雀は仕込みトンファーから仕込み鎌を取り出し、剣八向けて突進して行った。

さて、この勝負はどうなるのやら、この話はまた次にしよう。

その頃、別の場所で修行を開始し始めた直接フロント組み……

茶渡と了平とスバルは一先ず三人で修行方法に関しての話し合いを円くなって座り考え込んでいた。

「うっっん!!!俺たち三人の力を合わせた究極の一撃を完成させるとは言われたものの・・・まず何からすればよいかさっぱり分からんぞ!!!」

「やっぱり・・・ここは一度三人の力を図って、その上で技の完成を目指したほうがいいんじゃないですかね？」

「確かに・・・俺とスバルは一度戦っているから大体の力は分かっているが、了平に関しては俺たちはあまり分かっていないからな。」

「おお!!!だったら話は早いぞ、二人とも!!!極限何も思いつかぬ以上先ずは力量を正確に図り取るほうが先決だ!早速三人同士で戦って熱く語り合おうではないか!!!」

「あはは・・・気合・・・すごい入っちゃってるね・・・了平君・・・」

「まあ・・・何もしないよりは良いだろう・・・」

「極限!!!!!!!!!!!!!!」

了平の極限という叫び声は、いつも以上に熱がこもっており、それはまるで野生の動物の雄叫びに似ていた。

それに対して、物静かに話し合っているのは――・・・

間接フロント組み、ルキア・井上・クローム・ティアナだった。

「さて、現時点で我々の戦力を考えた結果・・・幻覚・幻影を使えるのはティアナとクローム。この場合、それぞれ二対二対のチーム戦をするなら、私と井上は別々となってそのどちらかにティアナとクロームが付くのが定石だと思うが？」

「そうですね。私もそれに異論はありませんし・・・後は井上さんとクロームちゃんの判断に任せるけど・・・」

「うん。私もそれで良いと思うな！クロームちゃんはどうか？」

「・・・私も・・・良いと思う・・・」

「オツケー。じゃあ異論は無しってことで決定ね！じゃあ、早速チーム訳しましょう！」

そう言うと、ティアナは全員を立てせて、チーム訳のためのじゃんけんを始めた。

その結果、次のようなペアとなった。

ルキア・クロームチーム対井上・ティアナチームとなった。

続いて特殊戦闘フロント。

こちらにも既にチーム分けは完了し、次の通りとなった。

大人ランボ・フェイト・エリオの三人組対日番谷の一人だ。

戦力的なことも考えてとのフェイトの提案からだった。

まさに、雷光対氷結である。

「何だか凄いことになりましたね、フェイトさん。僕たち三人と日番谷さん一人の組み合わせだなんて・・・」

「けど、そうでもしないと勝てそうにないからね。ランボさんも大丈夫ですか？」

「俺はいつでも準備万端ですよ、フェイト氏。いよいよ、俺の本当の力を見せるときがやってきたか・・・」

「時間が勿体無え・・・さっさと始めようぜ・・・」

さらに、遠距離・近距離フロントの石田・山本・シグナム・キャロの場合。

チーム分けは・・・石田・シグナムVS山本・キャロとなった。

二チームはそれぞれの配置につき戦闘態勢に入った。



「中々興味深い組み合わせになったね。まさに世界を超えて実現した夢のタイトルマッチってところだね。」

「そうだな。悪いが山本、キャロ。この勝負は取らせて貰うぞ・・・私の剣と石田の弓でお前たちの攻撃を完膚なきまでに叩き潰してみせよう。」

「あははは。自信満々っすね！けど、俺たちだってそう簡単に負けやしないさ・・・頼むぜ、キャロ！」

「はい！相手がシグナム副隊長だろうが関係ありません。全力でぶつかるだけです！」

いよいよ・・・本格的な修行が始まるうとしていた。この勝負の詳細は次回に――・・・



## 第63話：アンデッド（後書き）

### 次回予告

いよいよ、各所で力比べの戦いが始まったみたいだぞ。

最初にやり始めたのは・・・了平達直接フロント組みだ。

三人はそれぞれで分かれて個人戦を繰り広げてるみたいだが、了平の実力に、二人はどう反応するのか？

次回、次元の破壊者・・・「極限な戦い」

みんな、正解して見るよ。

## 第64話：極限な戦い

一護達がそれぞれの修行を開始し始めたその頃、主に食事一般を任された京子・ハル・ヴィヴィオの三人は、邸内のキッチンを借りて三人で今日の昼食を作っていた。

「わああ！！ヴィヴィオちゃん、すつごく上手！！」

「はひ！！ホントにお上手ですね！いつもなのはさんのお手伝いをしているんですか？」

「うん！なのはママがいるときは一緒にご飯を作るの。そうじゃないときでも、私が一人でご飯を作ってあげることもあるんだよ！」

「凄いね！私なんかヴィヴィオちゃんとちょうど同じ年頃ときは、そんなにお料理できなかったもん。」

「そうですね！包丁使いも手際の良さもベリーワンダフォーですね！」

「えへへへ・・・」

そんな会話をしていると、アイゼンハウアーの執事のセクトウレが沢山のりんごの入った籠を抱えて三人の下にやってきた。

そして、徐に床にりんごの籠を下ろした。

「三人とも！さつき庭で取れた新鮮なりんごよ！せつかくだからこれアップルパイでも作りましようよ！」

「はひ！いいですね！」

「これでアップルパイを作ったら、どんなのになるか楽しみだね！」

「早く作ろうよ、京子お姉ちゃん！ハルお姉ちゃん！」

三人とセクトウーレは意気投合し、昼食を作る傍らアップルパイ作りも同時に進行する事になり四人の熱はさらに燃え上がったのであった。

では、修行会場まで戻ろう。

まずは、直接フロント組み。

茶渡と了平とスバルは三人ばらばらとなつての個人戦となつた。

三人は大体同じぐらいの距離を保ちながら、フィールドに作られた岩場に乗っかった。

「よーし！！極限燃えて来たぞ！！！！！！いよいよ、茶渡殿とスバルと戦えるのか・・・うう~~~~~~~~極限つ！！！！！！」

!!」

「あははは……相変わらず凄い声……」

「……まあ……静か過ぎるよりもいいがな……さっ、気持ち  
を切り替えてそろそろ始めようか……」

茶渡はそう言うと、右腕を変化させいつもの赤と黒の鎧にした。

それを見ると、了平もスバルも真剣な眼差しとなり、それぞれ武装  
を始めた。

「……いくよ、マツハキヤリバー!」

スバルがそう言うと、マツハキヤリバーは応答しスバルはバリアジ  
ヤケットを身に付け、戦闘態勢に入った。

「さて……俺も本気でいかせて貰うとするか……」

了平は何時になく真剣な表情を見せると、懐から晴のボンゴレ匣を  
取り出し、晴のボンゴレリングに炎を灯し注入した。

「いでよ……漢我流カンガリユウ!!!」

そう言うと、了平のボンゴレ匣からは晴属性の武装されたカンガル  
ーが出てきた。

茶渡とスバルは間近で見る了平のボックス兵器に警戒をした。

「あれが、了平のボンゴレ匣……晴カンガルーver.v

(カンゲーロ・デル・セレーノバージョンボンゴレ)。「

「意外と・・・かわいい・・・かも。」

「よく見ておけ、二人とも！！この漢我流は俺の支援型匣であり、俺と共に歩んできた相棒だ！今その力を存分に見せてやるぞ！！我流！！射出だ！！」

了平がそう言うと、我流は腹部の袋から晴属性の炎の色を灯し、そこから了平の両手両足目掛けて炎を宿す「晴グローブ」と「晴シューズ」を射出した。

二つの武器が了平に装着され、三人の武装は完了した。

「よし、始めようか・・・取り合えずタイムリミットは昼までだ。気絶、あるいは戦闘不能となった時点で終了だ。」

「はい！」

「おっっっ！！！」

「よし・・・始めよう！」

午前10時ちょうど。

いよいよ直接フロント組みの修行が開始された。

三人は、同時に飛び出し渾身の力を込めて殴りかかっていった。

「うおおおおおおお!!!」

「リボルバー……キャノン!!!!!!」

マキシムキャノン  
「極限太陽!!!!!!」

三人の技がほぼ同時にぶつかり合ったその瞬間、途轍もないエネルギーを出しながら強烈な光が発生し、同時に巨大な爆発も起こったのであった。

爆発の勢いにより、三人は反動で後ろに飛ばされ岩に激突した。

そして、ゆっくりと立ち上がったて再び戦闘を開始する。

まず、最初に動いたのは了平だった。

了平は晴シューズの推進力でスバルの元まで移動し、立ち上がるうとするスバルを見つけるや否や攻撃の態勢を見せ、そして仕掛けた。

「喰らえ!!!マキシム極限スパーク!!!!!!」

了平はスバル目掛けて怒涛のスパークを繰り出してきた。

スバルは両手でガードしながら攻撃の機会を窺っていたが、中々了平も隙を見せない。



そのため、スバルは作戦を変えて一時ウィングロードで回避した。

「くっ……ウィングロード!!!」

スバルの指示を受けてマツハキャリバーはウィングロードを展開し、スバルは空中へと走っていった。

「何！おのれ逃がさんぞ！！」

「お前もな……」

すると、了平の後から茶渡の低い声が聞こえてきた。身をよじつて後に振り返ると、茶渡は右腕を「巨人の右腕」フラン・テレチャ・デ・ヒガンテに変化させて、靈力を極限まで高めて了平に向ってきた。

「なっ!?!」

「あれは……『巨人の右腕』!?!」フラン・テレチャ・デ・ヒガンテ

「いくぞ……『巨人の一撃』!!!!!!」エル・ディレクト

巨人の右腕から放たれる尋常ならぬ破壊力を持った靈力のパンチが了平に襲い掛かってきた。

了平はなんとか晴シューズの推進力で急所を回避したものの、額からは物凄い量の汗が流れていた。

「はっ、はっ、はっ！危なかった……直撃をしていたら一環の終わりだったぞ……!」

すると、スバルは了平が自分に対して後を見せているこの機会を逃がすまいと、一気にマツハキヤリバーで加速して了平に突っ込んでいった。

「うおおおおおおお！！！！！！」

スバルは右腕のスピナーを高速回転させ魔力を高める。

スバルの声に反応した了平は焦って後を振り返った。

「しまった！！スバルのことを極限忘れていた！！！」

「リボルバー………キャノン！！！！！！」

スバルの攻撃が了平に直撃し、了平はその衝撃で後方数メートルまで飛ばされた。

そして、そのまま岩に激突してしまった。

満身創痍の了平の様子を見たスバルは、勝ち誇ったように拳を高く挙げた。

「よし！！あんまりポーっとしてると………こっぴつ目に合っただよ、了平君！」

「その科白………そっくりお前に返してやるっか………」

「えっ!?!」

すると、了平と同様気を取られてスバルは自分の後に茶渡がいることに気が付いていなかった。

「あっ!?! ちょよ……ちょよと待って……!?!」

「もう遅い……『巨人の砲撃』エル・ブラスト!?!」

茶渡はつい最近考え出し、完成させた右腕のほうの新技をスバル目掛けて発射した。

威力は巨人の一撃程ではないが、速力に関して言えばおよそ十倍近くなっていた。

スバルは咄嗟にリボルバーシユートを撃って威力を緩和させたが、衝撃を受けてやはり了平同様後ろに飛ばされた。

「かつは!?!」

激しく岩に激突し悶絶するスバル。

たまたまた了平と同じところに飛ばされたスバル。

それを見た了平はスバルに対してこんな提案を試してみた。

「スバル……茶渡殿の相手に個人戦は禁物だ! 一度ここは不本意だが、共同で茶渡殿を倒そう!」

「そうね……やっぱり、茶渡さん相手に一人は厳しいかな……」

うん、その考えに賛成する！」

「よし分かった！！だったら、暫くの間茶渡殿の動きを足止めしてくれないか！？俺に考えがある……」

「……オツケー……やってみるよ……」

果たして、この二人は一体どんな共同戦線を見せてくれるのだろうか？楽しみである……

一方、その頃中庭で一護の厳しい指導の下、ツナは虚化保持の訓練を行っていた。

その様子を、アイゼンハウアーが離れたところで腕時計を見ながら見物していた。

「早くしろッ、ツナ！もう一回だ！！」

「くっ……わかってる！！」

ツナはこのとき既にハイパー化の状態だった。

思った以上に虚化の制御に戸惑い、身体と精神の疲労もいつもの数倍以上に激しかった。

ツナは徐に立ち止まり、額に汗を流しながら、ツナは左手を顔に近

づけ虚化した。

すると、その瞬間同じく虚化した一護がツナ目掛けて蹴りをしてきた。

ツナは直ぐにそれを左腕で防御した。

「くっ!!」

「仮面を出してから初動が遅いって言うてるだろうが!!一撃で決められたらお終いだぞ!!」

そう言うと、一護は怒涛の蹴りの乱撃をツナに仕掛けてきた。

ツナはその衝撃に耐えられなくなり、後方に飛ばされ岩を砕きながら宙に舞い上がった。

そして、あっという間に虚の仮面は砕けてしまった。

「5秒じゃ!!」

そう聞かされると、一護は一度虚化を解いてアイゼンハウアーの下へ近寄っていった。

「まあ、俺の当初の頃よりはましか・・・じゃねえよ!!!!おい、ツナ!!何だよこの短さは!!!!お前本当にやる気あんのかよ!!!!」

一護は数メートル先の岩場で倒れこんでいるツナに大声で怒鳴りつけた。

ツナはゆっくりと身体を前に起こしながら立ち上がり眉間に皺を寄せながらこう言った。

「……あるに……決まってる……!!」

「だったらもう少し死ぬ気でやれよ!!死ぬ気のお前にこんなこというのもなんだけどな。ほら、もう一度!!」

「やれやれ……ついこの間まで同じ事言われてたのは……何処のどいつじゃ。」

「何か言ったか!？」

一護はアイゼンハウアーは発言を聞くや否や鋭い剣幕で睨み付けてきた。

アイゼンハウアーはそっぽを向いて知らない振りをしたのであった。

この修行……先が思いやられるものになりそうだった……。



## 第64話：極限な戦い（後書き）

### 次回予告

どうやらツナの修行のほうは・・・あまり上手く言っていないようだ  
な・・・

そんなツナとは対照的に、間接フロントのルキアたちの修行がついに始まった。

幻術を駆使した戦法を繰り出す両者の勝敗は・・・どうように決するの・・・

次回、次元の破壊者・・・「幻術と幻影」

ティアナとクロームの力比べに注目だぞ！

ここでこの間のクイズの答え発表だ。



正解は・・・三番、杉田智和。

イメージとしては、不真面目なときは銀さん風、まじめなときはク  
ロノ風というふうに使って書いています。

## 第65話：幻術と幻影

場所は変わって今度は、間接フロント組みのチーム戦の会場。

ルキア・クロームチーム対井上・ティアナチームの戦いが今始まるうとしていた。

ルキアとクロームはお互いに話し合い、作戦を立てていた。

「いいか、クローム。私が先行して様子を窺がう。お前は後方で幻術を使い二人の動きを翻弄してくれ。また機会があると思ったら、私の指示がなくても攻撃して構わん。」

「わかった……やってみる……」

「よし、頼むぞ！」

一方、井上とティアナも同じように作戦を立てていた。

中心となっていたのは、執務官でもあるティアナだった。

「じゃあ、まずは私が相手の動きを見ます。井上さんはあっち側の隙を突いて攻撃をしてください。それから、もし私が身動き取れな

いような状況になったら、その時は井上さん・・・あなた一人で戦うことになりますか・・・」

「うん、わかった！大丈夫だよ、ティアナさんは強いことはスバルさんから聞いてるし、なんとかなるよ。」

「たく・・・あのバカは・・・もう・・・」

ティアナは照れ隠しをしながらも、スバルの何気ない言動を心の中ではとても嬉しく思っていた。

そして、午前十時を過ぎたとき・・・修行の合図を告げる鐘が鳴った。

ティアナはそれを聞くとクロスミラージュを取り出した。

「さて、ぼちぼち始めましょうかね・・・頼むわよ、クロスミラージュ！」

ティアナがそう言うと、クロスミラージュは応答し、バリアジャケットを身に纏わせ自身は二丁拳銃の姿になった。

そして、ティアナは井上に合図してルキアたちのほうへ向かって行った。

「いきますよ、井上さん！」

「うん！」

ティアナはそう言うと、クロスミラーージュに搭載された移動補助機能であるアンカーショットをこのフィールド上に散在する廃ビルの壁目掛けて発射して固定し、井上を連れてワイヤーを巻き取りながら移動した。

ルキアとクロームも同じように自分の足を伝って廃ビルをジャンプしていき、地上まで降下した。

ルキアとクロームが地上に降り立つと、井上とティアナの姿は無かった。

「誰も……いない……!?」

「気をつける、クローム……何が出てくるか分からぬぞ。」

すると、ルキアの予想したとおりのことが起こった。

ビル陰から複数の魔力の弾丸が同時制御によって二人に襲い掛かってきた。

ルキアとクロームはそれをかわしながら、ティアナと井上を探した。

「くそ！何処だ、井上！ティアナ！」

「ここだよ、朽木さん！」

すると、ルキアの目の前に井上の姿が現れた。

二人は些か不審に思った。

そう・・・これもティアナの策略だった。

「なぐぐぐんてね・・・正体は私よ!」

すると、井上は姿を変えてティアナの姿となった。

実はこれ、ティアナの高位幻術魔法・・・フェイク・シルエットを応用させて自身の姿を井上に変化させ、二人の動きを捉えるのが目的だった。

「なっ!?!これは・・・」

「・・・幻術!?!」

「二人とも残念だったわね!まんまと罠に嵌ってくれたおかげで後を取る事ができたわ!」

その時、ルキアとクロームは自分達の目の前にいるティアナも幻影だということに気付き、後に振り返ってみた。

すると、二人の頭上には本物のティアナがクロスミラージユを構えていた。

そして、ティアナはそれを発射する。

「シュートバレット!!」

クロスミラージュから発射される圧縮した魔力の弾丸が、加速を加えながら二人に襲い掛かる。

ルキアとクロームはそれを皮一枚で除けた。

そして、ルキアも負けじとティアナに鬼道を放つ。

「破道の三十一 『赤火砲』!!」

ルキアの掌から発射される灼熱の赤い砲撃がティアナに目掛け襲い掛かる。

すると、ティアナの目の前に二人の予想もしないものが立ちはだかっただ。

「三天結盾!!」

井上の盾舜六花の一つでもある三天結盾がティアナの前に盾を張り、ルキアの鬼道を防いだ。

ルキアはそれに悔しがる。

ティアナはゆっくりと地面に着地すると、軽く井上に感謝する。

「どうもありがとう、井上さん。さて……どんどん行くわよ！」  
そう言うと、ティアナは魔法陣を展開してさらに自分の幻覚を増殖させ二人を翻弄する。

ルキアとクロームは自分の話周りを囲む無数のティアナに焦りを見せる。

「くっ！ここまでの幻覚は初めてだ……クローム、どれが本物のティアナか分かるか!？」

「こんなに沢山あったら、幻覚だと見破るのも大変……時間がかるかな。」

「問答している暇は無いわよ！喰らいなさい……クロスファイア……シュート……!」

そう言うと、無数のティアナのクロスファイアーシュートがルキアとクロームに襲い掛かってきた。

ティアナはこのとき、若干既に勝敗がつくと思っっていた。

しかし、それは見事に外れることになる。

「させないわ!!」

すると、クロームは霧のボンゴレリングに藍色の炎を灯し、霧のボンゴレリングで強化した「有幻覚<sup>ゆうげんかく</sup>」を作り出し、三叉槍を地面に突く事でルキアとクロームの周りに四本の巨大な火柱を生成した。それによって、ティアナのクロスファイアーシュートは悉く消されて

しまった。

「！巨大な火柱！！まさかあれがクロームちゃんの幻覚！？（でも  
そうだとして・・・実体でもある私の弾丸までもかき消すあの力・  
・やっぱり只者じゃないわ！）」

巨大な火柱が消え、ルキアはクロームに助かったと感謝をした。

「済まぬクローム。おかげで助かったぞ。」

「いや・・・その・・・」

「そう照れぬな。さっ、気持ちを切り替えていくぞ・・・クローム、  
幻術には幻術だ！」

「分かった！」

そう言うと、クロームは懐から自身のボックス兵器である霧フクロ  
ウ（グーフォ・ディ・ネツビア）の匣を取り出し、開匣した。

そして、取り出した霧フクロウ（グーフォ・ディ・ネツビア）の力  
により、ルキアは先程のティアナ同様無数の数になった。

これには、流石のティアナも井上も驚いた。

「嘘でしょ！こんな簡単に・・・こんな数を・・・！？」



「驚くのはまだ早いぞティアナ・・・貴様にもクロームの幻術の凄さをその身を持って教えてやるぞ。」

そう言うと、無数のルキアは無数のティアナに右人差し指を見せ、指先から鬼道を放った。

「破道の四 『白雷』！」

無数のルキアの指先から発射される白い雷撃は幻覚のティアナを次々に消していき、ついに本物のティアナ一人となった。

ティアナは徐々に無数のルキアに追い詰められる。

「私の幻影が全部消された！？まさかさっきのは全部・・・本物！？」

すると、クロームが槍を持ちながらルキアの横に出てきて説明し始めた。

「幻覚の中に霧属性の炎の性質、『構築』の力を混ぜ合わせることで、より作り出されるリアリティーを持った幻術・・・『有幻覚』。本物のルキアさんの本物の鬼道を全ての幻覚に混ぜたことで、同じ本物の技が出せる・・・」

「（凄い・・・幻術をここまで使いこなす魔導師なんて見たこと無いのに、まさかこんな小さな女の子がこんな高度な幻術を扱うなんて・・・クローム髑髏・・・やっぱり侮れないわね・・・）」

「どうやらフェイク・シルエットの使いすぎで魔力を多少消費したようだな・・・あまり我々のほうも舐めてもらっては困るな、ティアナ・井上。」

ルキアはそう言うと、しゃがみ込んで息を切らすティアナと後で不安そうな表情を見せる井上を自信に満ちた表情を見せた。

そして、徐に腰の刀に手をつけ抜き始めた。

「さぁーーーーー挽回といこうか、クローム！」

「はい！」

刀を抜いたルキアと、その隣で槍を構えるクローム。

幻術を駆使したこの二チームの戦いは、一体どちらのほうに軍配が上がるのか、楽しみになってきた。

一方、その頃・・・非常砲撃フロントのはやて、ライン、リボン、そして・・・真之介の四人は特注の広さを誇る訓練場に来て、真之介の造り出した超幻覚により周囲は無限に広がる宇宙空間となった。

「いや~~~~驚いたな！真之介君・・・ここまでやれるんやな・・・

「!!」

「凄い幻覚ですね、はやてちゃん!」

「この幻覚・・・ひよっとしたらクロームや骸の力よりも強力かもしれないな・・・」

三人がそう言うと、真之介は徐に三人に近付き今日の修行内容を告げた。

「それじゃあ、今日の修行内容を発表するぜ。今日の昼までは俺とはやてとリインの模擬戦をやって、午後からはリボーンの模擬戦を行うことにする。リボーンはそれまで空きがあるから、一護とツナの修行の様子でも見てやってくれ。」

「ああ・・・そうさせてもらぞ。」

そう言うと、リボーンは訓練場から出て行き一護とツナが修行をする中庭のほうへ行った。

そして、残ったはやて、リイン、真之介の三人は暫くの沈黙をした後、会話をはさんだ。

「さて・・・そんじゃ早速始めようぜ・・・俺が催す『サディステツイク真之介レクチャー』をな・・・」

「お言葉を返すようだけど・・・私もどっちかっていったら、結構なSやで。後悔すんのはどっちかな?」

真之介とはやて・リインは互いに反目し合い、火花を散らしあった。

次回・・・いよいよ激突。

## 第65話：幻術と幻影（後書き）

### 次回予告

俺がツナの様子を見に行っている間、真之介とはやて達の模擬戦が始まった。

オーバーSランク魔導師のはやてと、まったく未知数の力の真之介。

果たして、真之介はどんな手ではやてと挑むのか！？

次回、次元の破壊者・・・「真之介の戦い方」

みんな、死ぬ気で見れよ。

## 第66話：真之介の戦い方

リボーンは真之介の言葉に甘えて、一目散に中庭のほうへ急いだ。

そして、中庭のほうにつくとー……

リボーンは直ぐに一護に厳しくされているツナの様子を窺がえた。

リボーンはアイゼンハウアーを見つけると、その隣に立った。

「どうだ、ツナの様子は!？」

「まだまだじゃよ。虚化の保持時間はそう簡単に延びんと言っておったから、こればかりは時間がかかるぞ。」

「……まっ、そう簡単にさらつとツナが虚化を使いこなすとも思えないしな……それにしても……」

そう言うと、リボーンは虚化するツナに同じように虚化して滅多打ちにする一護を見て、鼻で笑った。

「一護の奴……中々家庭教師としての素質あんな。あれくらいボロボロにしてもらったほうが、返ってツナのためにはなるしな……」

「……………（こやつ……………見た目以上の鬼畜だな……………」

アイゼンハウアーは心の中でリボーンの性格の悪さを改めて思い知った。

一方、リボーンを除いた非常砲撃フロントの残りのメンバーはと言うと、広大な宇宙空間のフィールド上を背景に、真之介とはやてとリインが向かい合う。

「いいんかい、真之介君……………こっちはリインも含めた完全な状態やで。それでも、一人で戦う気なのかいな!？」

「てめえらなんて……………俺一人で充分だ!なんなら……………こっちはハンディキャップをつけてもいいぜ!」

挑発的な真之介の態度に、はやてとリインはとうとう堪忍袋の緒が切れた。

「いい……………やる……………こうなったら、全力で君を叩き潰したるわ……………この八神はやてと、リインフォース?がな。いくで、リイン!」

「はいです……………!」

そう言うと、はやては騎士甲冑のバリアジャケットに身を包み、リインとユニゾンをした。

「リイン・・・ユニゾンインー!!」

はやてがそう言うのと、リインははやてとユニゾンした。

ユニゾンしたことによってはやての魔力は普段の力を遥かに超えるものとなり、髪の色は白く変色する。

「じっくり見させてもらうぜ・・・オーバーSランクの魔導師の力つて奴をな・・・じゃあ、俺もそろそろいくか」

すると、真之介は懐から機械のような籠手を取り出し、それを自分の左腕に装着した。

そして、今度は自分の腰元の方を手でいじりだし、何かを探し始めた。

「今日は・・・『4番』にするでしょう・・・」

すると、真之介は腰元のベルトからローマ字で『?』と書かれた小型で薄いメモリーチップを取り出した。

「何や!?! そんなもの・・・どうやって使うんや?」

「直ぐに分かるさ・・・」

そう言うのと、真之介は先程左腕に取り付けた籠手の差込口にそのメモリーチップを嵌め込んだ。

そして、嵌め込み終わると籠手につけられている0から9までの数字



のうち、4番を押した。

「4 number strike stand by ready?  
y?」

箆手から聞こえてくる音声を確認すると、真之介は数字の隣についてある『Enter』ボタンを押した。

「Awaking」

その瞬間、真之介の箆手は変形し始めた。

そして、はやてが驚くことを良いことにー……

真之介の箆手はティアナのクロスミラージュよりも一回り大きい独特なデザインをした銃に姿を変えた。

「な……何や……それ……!?!?」

「俺の武器……?」クアトロ・ブラスター「機関銃」。今回はこいつでめえをノックダウンさせてやる……」

「言いたい放題言ってくれるやないか……その言葉……代償は高いで!……!」

そう言つと、はやては空中高く舞い上がると、自身のデバイスであ

る夜天の書を取り出すと、魔法陣を展開して詠唱を開始した。

真之介はその様子を余裕の表情で見っていた。

「彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け・  
・・・・」

すると、真之介の頭上高くに魔方陣と六つの光が展開されて――  
・  
・

そこからは強大な魔力反応が窺がえた。

「石化の槍・・・・・ミストルティン!!!!」

すると、はやてが杖を振り下ろした瞬間、真之介の頭上の魔方陣と六つの光から同時に光が照射された。

はやての放ったこの技は、遠隔発生型の砲撃魔法にして、敵を石化させ破壊することが出来る・・・ミストルティン。

合計七つの光が真之介の頭上目掛けて飛んでくる。

だが、当の真之介は全く焦る様子も見せず左手の銃を右手に持ち替えて再び腰元から違うメモリーチップを取り出し、銃に差し込んだ。

「ミストルティン……結構怖い技だな……けど、こいつの前では何の意味も持た無えよ!!」

すると、真之介は銃についている1から9の番号のうち……今度は『110』とうち、エンターを押した。

「110……light blaster ready……FIRE!!」

その瞬間、真之介の銃から巨大な光の砲撃がはやての放ったミストルティンに向って発射された。

真之介の放った砲撃はミストルティンの七つの光を全て吸収し、無力化して何事も無かったかのようにした。

「なっ!? 私のフルパワーの……ミストルティンが……  
……!?!? 何なんや……それは!?!」

「『ライト・プラスター光の砲撃』。この世の全ての物理的現象・エネルギーをすべて吸収し、無力化する。てめえの魔法も俺から言わせてみればこの世の物質だ……消すことも出すことも容易い……」

「くっ~~~~~~~~!!」

はやては歯を食いしばって激しく悔しがった。

そんなはやてを見て嬉しくなったのか、今度は真之介のほうがり笑みを浮かべて、はやてに銃口を向けてきた。

「お次はこっちからいくぜ……言っとくが、除けようなんて考え

は止したほうがいいぜ・・・」

「何!?!?どう言う・・・意味や・・・!?!?」

すると、疑問に答えるかのように真之介は腰元からさらなるメモリーチップを取り出して銃に装填。

番号を今度は『177』と打って、エンターを押した。

「177・・・infinity volcano jet・・・  
ready・・・FARE!!」

すると、銃口から凄まじい熱反応と共に灼熱色の炎の銃弾がはやて目掛け放たれた。

「『インファイニティ・ホルカノ・ジエッタ  
無限砲撃火炎弾』!!」

真之介の銃から発射される灼熱の銃弾がはやてに襲い掛かる。

はやては咄嗟にそれを回避しようと高速で移動したが、真之介の銃弾は無限と言っただけ合って無尽蔵に連射され、徐々に逃げ回るはやてを追い詰めていく。

「ちよっ・・・ちよつとまった!!いくらなんでもこんな技はズルイやる!?!?」

「いいこと教えてやるぜ、はやて・・・」狡猾な世の中を良く抜くためには、己もまた狡猾にならなければいけない”んだよ!!ズル

「いなんて言葉は通じねえ!!」

そう言うと、真之介は容赦なく灼熱の火炎弾をはやてに発射し続けた。

はやても段々逃げ回るたびに魔力が消耗していき、どんどん窮地に追いやられていく・・・果たして、この勝負の行方はいかにー・・・

その頃、特殊戦闘フロントの修行も・・・白熱を極めていた。

日番谷は一人であるにも関わらず、フェイト・エリオ・大人ランボ相手にも負けることなく、勝負をし続けていた。

三人はこのとき、氷輪丸の影響で身体中を氷結させられ、いたるところが凍り付いていた。

「つ・・・・・・強い・・・!!」

「私が前に戦ったときよりも・・・・・・格段にレベルが上がってる!?!」

「まさか・・・・・・ここまで力の差が・・・あるとは・・・」

三人は氷付けになりながらも、必死で日番谷に喰らい突こうとして、何とか立ち上がろうとしていた。

一方、日番谷も三人の雷撃を喰らい、満身創痍になりながらも氷輪丸で対抗し、何とか凌いでいた。

「はっ、はっ、はっ、はっ!」

この決着は、次回の話ですとしよう……



## 第66話：真之介の戦い方（後書き）

### 次回予告

特殊戦闘フロントで繰り広げられる壮絶な戦い・・・

圧倒的に不利な状況にも関わらず、必死で抵抗する日番谷と、それに対抗する三人。

そんな中、ランボがボンゴレ陣を開陣し、フェイトとエリオも融合技を出して日番谷を気絶寸前までに追い込む。

だが、日番谷のほうも・・・負けじと、とつとつ奥の手を出してきた。

次回、次元の破壊者・・・「大紅蓮氷輪丸」

みんな、卍解して見るよ。



## お知らせ

どうも、重要大事です。

実は今回・・・「次元の破壊者」の映画風ポスターを作ってみました。

また、いつも読んでくださっている皆様には、アンケートで次元の破壊者の声は誰がいいのを取ってみたいと思います。

その集計結果は、追々発表いたします。

あと、実は私ヤフーブログで「サムライ・ドラ」という小説を連載しているんですが、そちらの方も今後この小説で連載していいことと考えています。暇がありましたら、ヤフーブログ・現代の猫侍で連載中のサムライ・ドラ、呼んでみてください。

> i 4 7 2 6 | 7 0 9 <

## 第67話：大紅蓮氷輪丸

特殊戦闘フロントの四人が戦闘を繰り広げる水分が非常に多く含まれているバトルフィールでは、日番谷vsフェイト・エリオ・大人ランボにより激しい攻防が続いていた。

バトル開始から1時間が経過した時点で、軍配は日番谷のほうに上がっていた。

三人は日番谷の氷結攻撃に苦戦し、身体中は氷でいっぱいだった。

日番谷のほうも、三人の強烈な電撃を浴びて身体中に電気が走り、表面は黒焦げになっていた。

「はっ、はっ、はっ、はっ（くそ・・・思ったよりも手強い相手だな・・・身体中が痺れて上手く動かせねえ・・・このまま長期戦はこちらにとって明らかに不利となる。一気に片つけるか・・・だが、俺の霊圧もかなり消費してる・・・下手に攻撃をすれば、逆にあいづらの思う壺だ・・・）」

日番谷が心の中でそう考えていると、同じようにフェイトとエリオが念話で作戦を立てていた。

「（エリオ・・・まだカートリッジは残ってる！？）」

「（はい・・・まだ少しは余裕があります。）」

「（そう・・・だったら、ここで一か八かだけど・・・勝負を掛けてみようと思う。実際、日番谷さんも私たち三人も体力的にもそろそろ限界が来てる。ここは大人ランボさんにも協力してもらって、勝負してみよう・・・）」

「（・・・了解・・・しました!）」

念話が終わると、フェイトは息を切らし辛そうに膝を突いている大人ランボに話しかけた。

「大人ランボさん・・・私話・・・聞いてくれますか?」

フェイトが優しい声でそう言うと、大人ランボはそのままの状態ではフェイトの言葉に耳を傾けた。

「何でしょうか・・・フェイト氏!？」

「もう私達の力も・・・日番谷さんの力も然程残っていません。長期戦はどちらにとっても分が悪い。だから、ここで私達が一気に勝負を仕掛けます。だから、大人ランボさんも協力してくださいませんか?これから言う作戦は、あなたの強力なしでは成し遂げられません・・・」

「・・・わかりました・・・話してみてください。」

そう言うと、三人は一端日番谷の前から姿を消して作戦を練り始めた。

日番谷のほうも追う力など残っていない、その場に膝をついて身体中の痛みを必死で堪えていた。

その頃、三人は円くなったフェイトの立てた作戦を確認していた。

「いいですか、作戦はこう。まず、私とエリオが囿になって日番谷さんに向っていく。その間に大人ランボさんはボンゴレ匣を開匣して、待機しててください。で、日番谷さんに気付かれないようにエリオは大人ランボさんのところに戻って、全部のカートリッジを使って大人ランボさんの攻撃力を付加させて。キャラほどではないけど・・・幸い、ここは魔法と霊力の付加が自由に出来るみたい。だから、この勝負の雌雄を決するのは・・・大人ランボさん、あなたの攻撃にかかっています。いいですか？」

「了解です。俺も曲がりなりにもボンゴレファミリー雷の守護者だ。俺の一撃で全てを決めてみせますよ。」

「わかりました・・・エリオ、あなたも良い!？」

「はい! 頑張つて日番谷を倒しましょう、フェイトさん・大人ランボさん! みんなで力を合わせれば、どんな強敵にも勝てますよ!」

「うん・・・そうだね。じゃあ、作戦開始するよ!」

フェイトがそう言うと、大人ランボを残してフェイトとエリオは杖を取って日番谷のもとへ飛んでいった。

大人ランボは言われたとおり雷のボンゴレリングに炎を灯し、雷の

ボンゴレ匣を開匣した。

中からは、額にボンゴレエンブレムを象った巨大な雷牛Ver・V（ブーフアロ・フルミネ バージョンボンゴレ）が出ていた。

そして、大人ランボは右手で頭をなで始めた。

「この姿で見るのは初めてだな・・・牛丼。頼んだぜ・・・」

一方、その頃フェイトとエリオは苦戦をしながらも日番谷と対峙していた。

日番谷は先刻受けた傷の具合が思わしくなく身体の動きが鈍っていた。

「くっ！！『流氷雪破閃』！！」

日番谷は刀で地面を抉り、そこから無数の氷の塊をフェイトとエリオにぶつけて来た。

二人はソニックムーブでどうにかかわしながら日番谷に攻撃を仕掛ける。

先に動いたのエリオだった。

「ルフトメツサー！！」

斬撃の際、魔力によって周囲の空気を圧縮・加速し、空気の刃を飛

ばずルフトメツサー。

所謂月牙の小規模版だ。

エリオの斬撃が日番谷の技を貫きそのまま本人に当たっていった。

身体の痺れで瞬歩もままならなかった日番谷は回避することは出来ず直撃した。

そして、激しい土埃が立ち上った。

「今だよエリオ！大人ランボさんのところへ！！」

「はい！！」

エリオはソニックムーブで大人ランボのところまで移動し、大人ランボに指示を出した。

「今です大人ランボさん！！この機を逃したら後がありません！！早く、形態変化を！！」

「了解ですよ、エリオ氏。いくぜ牛井……形態変化！！」  
カンビオ・フォルマ

大人ランボの指示を受けた牛井は、その場で激しい雷の炎を出しながら形を変えていき、ランボの身体に装着された。

それは初代雷の守護者が用いた武器……身体に纏われた雷を帯びた盾。

その名は――・・・

「ランポウの盾」シールド

「これが大人ランボさんの・・・ボンゴレ匣・・・!!」

「さあ、エリオ氏・・・一気に勝負をつけましょう！フェイト氏の負担をあまりかけるまけにもいきません！」

「は・・・はい!!了解です・・・ストラダ、大人ランボさんに僕達全ての力を託すよ！」

エリオがそう言うと、ストラダもそれに合意した。

そして、エリオは残り全てのカートリッジを消費してカートリッジのロードを始めた。

「いくよ、ストラダ・・・カートリッジロード!!」

エリオの掛け声と共にストラダは全てのカートリッジをロードした。

それと同時に魔法陣が展開され、エリオは空高くストラダを掲げそれを勢いよく回し出した。

そして、大人ランボに向って全ての力を託した。

「大人ランボさん、少し痛いかもしれませんが・・・我慢してくださいね。」

そして、エリオは勢いをつけたストラダーダの先端を大人ランボの背中に突き刺した。

すると、その瞬間ランボの身体は金色に変色し、自身の緑色の雷とエリオの黄色の雷を同時に帯びた。

その光景をフェイトと戦いながら見ていた日番谷は顔を引きつった。

「なんだ・・・ありゃ!？」

すると、フェイトは日番谷から離れて空へと避難した。

そして、フェイトが回避したことを確認した大人ランボは大声を上げながら超高速で走ってきた。

それは最早ソニックムーブと同等だった。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおお!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!  
!!!!!!」

大人ランボの走りは言わば走る電撃だった。

「ついでにこいつもいくぜ・・・サンダーセット!!!」



大人ランボは頭の両方に牛の角を突けその角に雷を落とした。

直ぐに大人ランボの攻撃から回避しようとした日番谷だが、ほんの一瞬の間を取られフェイトにバインドをかけられ動けなくなっていた。

「し……しまった!!」

「行って下さい、大人ランボさん!!これでとどめです!」

フェイトは空の上から電光石火の如く走る大人ランボにエールを送る。

それに答えようと大人ランボもこう言う。

「承知いたしました、フェイト氏。」

そして、身動きの取れない日番谷の中心目掛けて、大人ランボは二本の角と盾を向けて必殺の攻撃を仕掛けた。

「喰らえ……雷の角改……」  
コルナ・フルミネ

「くっ!!」

「ヴェルデット・フルミネ雷の制裁!!」

大人ランボの緑と黄色の雷が日番谷の身体に声も上がらないような強烈な電撃が直撃した。

攻撃がクリーンヒットしたと同時に周囲は巨大な雷の光で覆われ、数分間は何も見えなくなつた。

フェイトはエリオの近くまで行き、エリオを身を盾にして守つていた。

やがて、光が完全に晴れると大人ランボは黒焦げになりながらその場に倒れていた。

日番谷は衝撃が巨大過ぎて後方数メートルまで飛ばされ、身体から湯気を出し倒れていた。

「「大人ランボさん!!」」

二人はすぐさま大人ランボの下へ駆け寄り意識を確認した。

すると、大人ランボは徐に目を開けた。

二人はそれを見るなり安堵の溜息をついた。

「や・・・やったん・・・ですね。」

「はい！大人ランボさんの攻撃が日番谷さんに直撃したんです。」

「凄いですよ大人ランボさん！！僕でもあんな凄い電撃は出せたとないのに!!」

フェイトをはじめ三人は日番谷を見事倒せたことに興奮が収まらな  
いでいた。

大人ランボも顔を緩め二人の笑顔につられて一緒に笑顔になった。

だが、倒したというにはまだ早かった。

日番谷は三人が束の間の喜びに浸っている間にかく自力で起き  
上がり、そして息を切らしながら最後の力を振り出し切った。

「……………卍解」

解放と同時に、刀を持った腕から連なる巨大な翼を持つ西洋風の氷  
の龍、及び三つの巨大な花のような氷の結晶となり、刀身の鏢が微  
妙に変化した。

「『だいくれんひょうりんまる大紅蓮氷輪丸』」

その姿を目撃した三人は全身を凍りつかせ驚愕した。

「しまった！日番谷の卍解があるのをすっかり忘れてた！」

フェイトは深い後悔を口にしながら日番谷の卍解を目の当たりにし  
た。

「悪いな……十番隊の隊長はてめえらが思ってる以上に多夫なん

だよ。詰めが甘かったな・・・終わらせる。」

すると、三人の周囲に氷柱が大量に発生し囲まれてしまった。

三人は何が始まるか不安になる。

「……………これは……………!？」

「悪いな……………このフィールドで分があるのはお前たちだけじゃないらしい。ここの大気中の水分は俺にとって全てが武器。仕込む時間は無くてもいいみたいだ。じゃ、終いにするぞ。風邪引かねえよ  
うにな。」

そう言うと、日番谷は刀を三人に向けて徐に刀を左に回した。

「『千年氷牢』せんねんこぼり」

その瞬間、氷柱は三人を閉じ込め巨大な氷塊を生成した。

三人はその中で全く身動きとれず勝負に敗北した。



## 第68話：忘れた頃に

特殊戦闘フロントでの戦いが終結を迎えていた頃よりも数十分以上遡って、恋次・獄寺・ヴィータの迎撃粉碎フロント組みの三人が修行場としていた大図書室に視点を向けてみよう。

というのも、ここを修行場にしようと思ったのは半ば獄寺のほうだったが一……

「という訳で……これからの修行は次のステップを踏んでやっていく！まず第一に……についておい、刺青野郎とクソガキ！！てめえら人の話聞いているのかよ！！」

獄寺は話を無視して机に突っ伏し涎をたらして爆睡してる恋次と、その隣に座ってデバイスを磨いているヴィータに怒鳴りつけた。

獄寺の声に反応して恋次は目を覚ました。

「たくウルーせーな！何だよデケーー声出しやがって！！」

「まったくだな。仮にもここは図書室だぞ。静かにしないでどうするんだお前。」

「てめえらが人の話を無視して好き勝手なことやってるから注意してるだけだろうが！！特に、刺青野郎は俺の講義の最中に鼾かきながら眠りやがって！！」

「しゃーねーだろ・・・俺は頭よりも身体で覚えるほうが性に合っ  
てんだよ。てめえの小難しくくてクソつまんねえ話聞いたところで、  
何も頭に入っていかねえよ!!!」

その開き直った態度を見た瞬間、獄寺の頭の血管が切れる音が聞こ  
えた。

そして、怒りを露にした。

「俺の講義が・・・つまんねえだど!!!てめえ!!!さっきから  
聞いてりゃ言いたい放題言いやがって!!!」

「実際そうじゃねえか!ホワイトボードに訳わかんねえ数式ばっか  
り書いて、肝心の作戦が何処にもねえじゃねえか!」

「あれには今後の修行の理論が全て叩き込まれてんだよ!全ては理  
論から成り立ってるんだよ!!!」

「その理論も、てめえの説明じゃ全く理解出来やしねえって言うて  
るだろうが!!!」

「何だど!!!この刺青野郎!!!」

「やんのか!!!このガリベンタコあたま!!!」

「誰がガリベンだ!!!それに、前から言ってるんだろつが!!!てめ  
えにタコあたま言われる筋合いなんかねえ!!!」

こうして、恋次と獄寺の口論は激しさを増し、とつとつど付き合いにまで発展した。

呆れながらも見かねたヴィータが二人の間に入りとめようとした。

「お前ら二人ともいい加減にしろよ！！修行しないとイケないんだろっが！！」

「うっせー！！ガキは黙ってる！！」

二人の声の揃った発言を聞いたヴィータは、一気に頭に血を上らせ激怒した。

「てめえら！！あたしは立派な大人だ！！」

そう言うと、ヴィータも二人の間に入ってど付き合いを始めていった。

三人は子ども喧嘩のように顔を引っ張ったり、頭をかじったりして、一歩も譲らずにいた。

そして、ある程度のところまでいくと・・・三人はお互いに同じぐらいの距離を取った。

「もう勘弁ならねー！！！！こうなったら俺がまとめててめえらに喝を入れてやるぜ！！！！刺青野郎、てめえには前々から一度ぶっ倒し



たいと思っっていたしな!!」

「面白れーじゃねえか!!この阿散井恋次様に戦いを挑んだことを後悔させてやるぜ!!」

「てめえら!!あたしを無視して戦おうとすんじゃねえ!!」

そして、三人はそれぞれ武器を取り出し戦闘態勢に入った。

恋次は始解し蛇尾丸を、獄寺はフレイムアローを、ヴィータは変身をしてグラフィゼンを。

そして、三人は一斉に飛び掛って向って行った。

「くくぶつ………潰す!!!!」

こうして大図書室の中で三人は、喧嘩の領域を超えた壮絶な戦いを繰り広げることとなったのだ。

さて、再び場所を移して雲雀と剣八の様子を見てみよう。

雲雀は目の前の光景を信じられずにいた。

渾身の力を振り絞って仕込み鎌で斬りつけた筈の剣八の身体は傷は血はおるか傷一つ入っていなかった。

その代わりに、雲雀のトンファーを握る腕から血が流れ出ていた。

床にはその証拠の血の斑点がくつきりと残った。

「（・・・嘘だろ・・・僕は本気で斬りつけようと振り落とした筈だ・・・なんで・・・キズ一つついてないんだ・・・！なんで・・・攻撃した僕の手の方が・・・裂けて血を出しているんだ・・・！！こんな・・・！！）」

「何だ・・・おい。」

「なっ!?!?」

雲雀が驚愕していると、剣八は不満そうな声を上げながら雲雀語りかけ、深い溜息を吐いてこう言った。

「・・・この程度かよ。興奮めだな。」

そう言うと、剣八は自分の肉に食い込む雲雀の仕込み鎌を素手で取り出した。

その光景を見た雲雀は冷や汗をかいて一度後のほうへ回避した。

「（何だ、今は・・・!?!?こいつ、今一体何をしたんだ・・・!!素手で身体に食い込んだ僕の仕込み鎌の刃を・・・そんな莫迦なことが・・・!!!）」

雲雀が冷静さを失い、瞳孔を開いて驚きを隠せないでいると、剣八が雲雀にこう言って来た。

「教えてやるうか、なぜてめえのトンファーが俺に傷をつけねえか……」

「なっ……何!？」

「てめえら人間と違って、死神の戦いつていうのは……言わば霊圧の競り合い。つまり、霊圧同士ぶつかれば圧し負けた方がケガをする。だが、てめえは霊圧じゃなく炎圧で勝負をしてきた。けどな、同じ圧がつくもんに変わりはねえ。要は、てめえが敵を殺すために死ぬ気の炎を極限まで灯らせ強化した仕込み鎌より、俺が無意識に垂れ流してる霊圧の方が強い。それだけの話だ。」

その言葉を聞いた雲雀は愕然とした。

今まで自分が出してきたム力つきの炎よりも、目の前にいる男が無意識に出している圧のほうが大きいという事実には、衝撃を覚えた。

「全く……この程度の奴を殺すために、態々あつちの世界からやって来たのかよ俺は。話が随分違うじゃねえか……おい。こんなの、笑い話にしたって出来が悪いぜ。」

そう言うと、剣八は帯にぶら下がっている独特の鰐が特徴の刀を徐に取り出した。

刀の刀身は、最早何も斬れないのではないというくらいに酷く刃毀れをしていた。

「次はこっちから行くぜ。せめて、俺の刀の錆おとしぐらいはさせてくれよ……頼むぜ、雲雀。」



「流石だな、山本。伊達にボンゴレが誇る剣士と言われるだけのことはある。」

「あはは。そいつはどうも！」

「だが、その程度ではまだまだ私には及ばぬ！」

すると、時雨金時とぶつかり合う自身のデバイス、レバンティンにカートリッジをロードさせ灼熱の炎を灯す。

山本もそれに勘好き同じように刀身に灯る雨属性の炎をさらに強化させようとする。

「紫電一閃！！」

シグナムは至近距離での斬撃を加えようとする。山本も負けじと自身の技を繰り出す。

「時雨蒼燕流・・・攻式八の型 『篠突く雨』！！」

至近距離でぶつかりあう鋭い剣筋。

それらがぶつかり合うことで互いに技を打ち消しあい相殺される。

そんな様子を見ながらも、石田とキャロの攻防は続く。

「『魂の光線』！！」  
ゼレ・シュトラール

「フリード、ブラストレイ!!!」

石田は銀嶺弧雀から新しく作り上げた技で、霊子を一つに収束させ矢自体を巨大な光線のようにするゼーレ・シュトラールを、キャロは自身の魔法でフリード自身の炎を強化させるブラストレイを放つ。巨大な力が拮抗しその場で爆発が起こる。

二人は一度それぞれのパートナーの元へ戻り牽制をする。

「なかなかやるね。見かけによらず結構強いんだね、キャロちゃん。」

「こう見えても、六課ではなのはさん達にみっちり鍛えられましたから、あなたが思ってる以上に私は強いですよ。」

「ほう、随分と大口を叩くようになったなキャロ。まあ、自分を高く評価することは大事だが・・・だが、過大評価も程ほどにしておくことだな。」

「そいつは違うぜ。キャロは過大評価なんてことはしてねえさ。ただ冷静に自分の力を分析してるだけだぜ。」

石田・シグナム、山本・キャロの二チームは一步も引かぬ状態でお互いに牽制をし合う。

いよいよ、次回・・・戦いが益々ヒートアップをする。



## 第68話：忘れた頃に（後書き）

### 次回予告

遠距離・近距離フロントの山本達は、いい感じに修行を進めているみたいだな。

山本もキャロの補助魔法で時雨金時の威力を上げて、シグナムと石田に立ち向かっていく。

苦戦を強いるシグナム・・・それを見た石田は、秘策のあるものを使うことに。

次回、次元の破壊者・・・「魂を切り裂くもの」

石田の隠し武器に注目だぞ。



## 第69話：魂を切り裂くもの

近距離・遠距離フロントの四人は、一步も譲らぬ互角の戦いを繰り広げていた。

石田・シグナムチーム対山本・キャロチーム。

二チームは互いに凝視し、動きを止める。

そして、徐にシグナムが相手に聞こえぬ声で石田にこう言った。

「石田、キャロの実力はお前の見たとおり決して甘くは無い。ここは連携して戦ったほうが都合がいい。私が先に山本を引きずり出して、キャロの補助を誘い出す。そしたらお前は隙を見て二人に攻撃を仕掛けてくれ。」

「わかりました。それで、シグナムさんはそのまま本当に彼らの攻撃に耐えられるんですか？」

「案ずるでない。『烈火の将 剣の騎士シグナム』はお前が心配するような軟な剣士ではない。お前は私のことなど気にすることなく攻撃の機会を窺がってくれればいい。」

「・・・了解。それじゃ、僕はあなたを信じていますから。」

一方、その頃山本とキャロも作戦を立てながら石田たちには聞こえぬように話をしていた。

「山本さん、よく聞いてください。おそらく向こうは先にシグナム副隊長が先手を切って攻めてくるはずです。そうなることも予想して、私が山本さんの剣に補助魔法を加えて技を強化します。それで一気にシグナム副隊長を倒してください。」

「オツケー。そうしてもらえるとこっちも有りがてーぜ。普通の雨属性の時雨蒼燕流<sup>こいつ</sup>じゃ、あの人には太刀打ちできそうにねえしな。任せたぜ、キャラー！」

「はい！」

山本は屈託の無い笑みでキャラにそう言った。

キャラも山本の笑みにつられて同じように笑みを浮かべる。

そして、暫くするとキャラの予想通り、シグナムが一人でこちらに向ってきた。

「早速思ったとおりになっただな・・・行くぜ、キャラー！」

「了解です！」

山本は自身の小刀から雨属性の炎を噴射させシグナムの元に向かい、キャラはフリードの背中に乗って上空から石田の動きを警戒しつつ山本の後につく。

勢いよく向ってくるシグナムと、それを迎え撃とうとする山本。

そして、両者の距離が縮まった瞬間、シグナムが先手を切って山本に激しい剣戟を仕掛ける。

「陣風一閃……『煉獄の嵐』!!」

シグナムは陣風を強化させた灼熱の剣戟を山本目掛け飛ばしていった。

山本はそれに臆することなくその場に立ち止まり、時雨蒼燕流の回避奥義を行った。

「時雨蒼燕流……守式四の型 『五風十雨!』」

山本は相手の呼吸に合わせて攻撃を回避する五風十雨と小刀の推進力でシグナムの剣戟を超高速でかわす。

そして、全て交わし終わると余裕の表情で地面に着地する。

「全部かわしたぜ!」

「ならばこれでどうだ……レバンティン!」

「シユランゲフオルム連結刃形態!!」

すると、レバンティンはまるで解放した恋次の蛇尾丸のように刃自

体が伸びて山本に襲い掛かる。

それを上空から見ていたキャラロは、山本に補助魔法を施そうと詠唱を開始する。

「我が乞うは、城砦の守り。若き剣士に、清銀の盾を。」

「エンチエント・デイフェンスゲイン」

キャラロの防御力強化魔法によって、山本の時雨金時は通常の数倍以上の防御力を手に入れ、レバンティンの攻撃を容易に耐え抜いた。

そして、さらにキャラロはさらなる補助魔法を山本に加える。

「我が乞うは、清銀の剣。若き剣士の刃に、祝福の光を。猛きその身に、力を与える祈りの光を。」

「エンチエントアップ・フィールドインベイド、ブーストアップ・ストラクチャー。」

キャラロは両腕に力を集めると、山本の剣に向けてその力を全て加えていった。

「ツインブースト、スラッシュ&ストライク！」

キャラロの補助魔法を時雨金時に貰った山本は炎の推進力を最大まで加速させ、シグナムの元へ飛んでいった。

「時雨蒼燕流・・・特式十三の型・・・」

シグナムは山本の言った十三の型という言葉に驚愕した。

「十三だと！？そんなものお前の技には無いはずだ！」

「即興で作ったやつさ！試しに喰らってみれば分かるぜ。いくぜ・・・」

そう言うと、山本は加速をやめることもなくシグナムに向っていく。

シグナムを鼻で笑うと山本に向かい加速する。

「ならばその前に叩き落すまでだ！」

すると、シグナムは再びレバンティンの刃を伸ばし、底に魔力を付加させ強化させて山本に攻撃する。

「飛竜・・・一閃！！」

「『ヒオツジャ・ティ・パッセシエラ村雨』！！！！」

山本は魔法で強化した雨の炎が灯った時雨金時の炎を巨大化させ一護の斬月と同じぐらいの大刀を作り出しシグナムに向って渾身の一撃を振り下ろした。

「おおおおおお！！！！！！！！！！」

山本の巨大な雨の刃がシグナムの攻撃をもともせず打ち消し、そのままシグナムに直撃した。

その瞬間、雨属性の炎が広がり空からは突然大雨が降ってきた。

シグナムは沈静作用と衝撃によって動きが極限まで鈍くなって、その場に倒れ込んだまま動けずにいた。

後でその様子を見ていた石田は考え出した。

「何て技だ・・・あのシグナムさんがあそこまで追い詰められるものなのか！？山本武、即興であんな技を作り出すとは、流石だ。隙を見て攻撃をしるとは言われたものの・・・流石に見捨てるわけにもいかないしな。」

すると、石田は目を瞑って先程から感じている周囲の妙な力を注意深く探索し深く考えた挙句、結論を出した。

「どつやら、ここでは僕達全ての戦闘能力が数倍にも付加されるらしい。だとしたら、山本君のあの技も”切れる”かもしれない・・・  
・・・仕方無いー！ー！ー！ー！ー！」

石田はそう言うと、後の方からあるものを一本取り出し飛廉脚で移動していった。

一方、どうにか起き上がったシグナムは諦めずに山本に剣を向けた。

「そんなになっても・・・やっぱ諦めないんすね、シグナムさん！」

「当たり前だ！剣士が負けを認めるのは己の命が尽きるまでだ。私はまだ負けてはおらぬ！」

「成る程、言われてみればそうだな・・・でも、今回はチーム戦だ。俺の剣に、キャロの魔法が加わった時雨蒼燕流はまさに、完全無欠・最強無敵だ！」

そう言うと、山本はシグナムに向って突進しながら巨大化させた雨の刃を振り下ろした。

シグナムは眉間に皺を寄せてここまでかと思いついた。

だが、その時だった。

突然、山本の雨の刃が崩壊し元の刀身に戻った。

これを見た山本、シグナム、キャロは驚き、山本は一度攻撃を止め後ろに下がった。

「何だ、どうなってんだ！？何で急に雨の炎の刃が・・・！？」

すると、そんな山本の前に石田が現れた。

山本とキャロが石田を見てみると、石田は左手で妙なものを振り回していた。

シグナムを含めて山本達は驚愕した。

そして、シグナムが尋ねた。

「石田・・・お前・・・それは一体!？」

「おや?真之介君の情報が漏れていたのかな。それとも、僕のこと  
は大して気にもかけていなかったから、この武器が何なのかを理解  
できないようだね。なら教えてあげるよ。」

そう言うと、石田は振り回すのをやめて、山本に見せ付けるように  
こう言った。

「『魂を切り裂くもの(ゼーレシュナイダー)』。滅却師唯一の、  
刃を持った武器だよ。」

石田がそう言うゼーレシュナイダーの外見は、柄から青い光が出て  
刃となっているもので、山本達は目を見開いて驚いていた。

石田はそんな山本を見て、こう言った。

「さて・・・・・・続きといこうか。」





## 第69話：魂を切り裂くもの（後書き）

### 次回予告

石田が取り出した刃を持った武器、ゼーレシュナイダー。

それは、刀身の表面を霊子が一秒に300万回も往復するチャーンソーに近いものだった。

石田の救援によって難を脱し、反撃を開始するシグナムと石田。それに負けじと山本とキャロも全力でぶつかり合う。

いよいよ、雌雄を決する時が来た。

次回、次元の破壊者・・・「弓矢使い二人」

みんな、死ぬ気で見るよ。

## 第70話：弓矢使い二人

石田の救援により、どうにか難を脱したシグナム。

そして、シグナムも含めた山本・キャロの三人に自身の持つ秘策を見せつける石田。

石田の秘策、ゼーレシュナイダーの名を聞いた瞬間、山本とキャロは目を見開きながら復唱した。

「ゼーレ……」

「シュナイダー……」

すると、そんな石田に向って傷だらけのシグナムが鼻で笑った後、こつ尋ねてきた。

「ふん……全く、私のことなど構まわず隙を突けと言った筈だぞ。助けに來いと言った覚えはないな。」

「すみませんが、今の僕は仲間を見捨ててまでも攻撃できるような男じゃない。昔の自分ならまだしも、黒崎と出会ったあの瞬間トキから、僕の中で何かが変わり始めたらしい。どうでしょう？ここは一つ・  
・一緒にやりませんか？」

石田がそう提案すると、シグナムは暫く沈黙した後目を瞑り笑いながらこつ言った。

「やれやれ。私も焼きが回ったものだな。だが、それも悪くは無いな。」

シグナムがそう言うと、石田も鼻で笑って承の合図をした。

そんな、二人の様子を見ていた山本とキャロは互いに同じ気持ちになった。

ここであの二人が共同するなら、こちらはそれ以上の協力で倒すまでだと。

「いいんじゃないっすか。漸くこれでチーム戦らしくなってきたぜ！でもよ、肝心なのはコンビネーションって奴だっただけを、忘れてもらっては困るぜ！」

「心遣いありがとう、山本君。でも、コンビネーションに長けているのがそちらだけとは思わないことだね。」

そう言うと、石田は飛廉脚で山本の後方に移動しゼーレシュナイダーを振り上げた。

素早く気配を感じ取った山本は身をよじって、キャロによって強化された雨の炎の刃を石田のゼーレシュナイダーとぶつけ合った。

石田は素早くもとの位置まで移動する。

「ははは。残念でしたね、石田さん。俺の後ろを取るのとは簡単

なものじゃないぜ！」

「おや？君はどうやら思い違いをしてるようだね。僕が君の後ろに回ったのは君を攻撃するためじゃない。」君の雨の刃を切るためだよ」

すると、山本の巨大な雨の刀身が真つ二つに割れ、元の時雨金時の刀身に戻ってしまった。

その様子を見た山本、キャロ、シグナムは驚愕した。

石田はそんな山本に説明をしだす。

「さっきのを忘れたのかい。あれはまぐれや一時的な霊圧の上昇なんかじゃない。ゼーレシユナイダーとは、形式としてはチェインソーに近い武器でね、霊子で構成された刀身表面を秒間300万回霊子が往復する。だが、本来霊子結合を高速振動によって破壊するのがこの武器の意義だが、君の時雨金時の刀身表面はキャロちゃん補助魔法で強化された死ぬ気の炎と魔法の強化版。霊子でもないものを破壊するなど到底出来ぬ。だが、現に僕はこうして君の雨の刃を切ることが出来た・・・何故だかわかるかい？」

「えっ!?!」

「それは・・・僕達自身も自分の能力以外の力にあてられているからだ。」

石田の発言を聞いた瞬間、三人は驚きを隠せずにいた。

「滅却師は靈圧知覚が高くてね、戦う前からもこのフィールド全体の靈圧を探っていた。だが、その時から僕は自分の中の靈圧以外の力を感じ取れるようになった。そして、その場で僕は仮説を立てた。もしかしたら、僕達自身は自分の能力以外の力に目覚め始めているんじゃないか」と。何の確証も無いものだが、ゼーレシユナイダーで君の刃を切れたということは、どうやら読みが当たったらしいな。」

「成る程。確かにそれは間違っではないな・・・だとしたら、私の力も強化するかも知れぬ。」

シグナムはレバンティンを一度鞘に収めると、目を瞑って神経を集中させた。

すると、シグナムの身体の表面を白い幕のようなが集まりだした。

そして、シグナムはその白い幕をレバンティンに収束させると、一気に抜刀してそれらを全て解放した。

「靈子・・・一閃!!」

解放したシグナムの剣戟は靈子で出来た斬撃となって山本に襲い掛かってきた。

キヤロは直ぐにプロテクションを山本の前に張って防御したが、それを遙かに上回る力のために防御壁には輝が入り砕かれてしまった。

山本は直撃を避けるために一度キャラのところまで上昇した。

「何だ今は・・・!?まるで一護さんの月牙天衝そっくりだった!?」

「どういうことでしょうか!?!」

「思ったとおりだ。シグナムさんも僕のように霊子を収束して己の力にできるようになってる。だとしたら、この勝負はどちらが勝つかはまだわからないよ。」

「そうだな。都合よくこんな力を出せるとは思いつかなかったからな。ここで一気に反撃といくぞ、石田!」

すると、二人は二人の下まで飛び上がり一斉に攻撃を開始した。

山本は石田が、キャラはシグナムが攻撃を加える。

苦戦する二人はどうか回避し、一緒になって逆に攻めようとする。

「負けっぱなしは趣味じゃねえんだ!いくぜ、キャラ!」

「了解!我が乞うは、沈黙の刃、若き剣士に、鎮静の雨を。」

「エンチエントアップ・レインフォーカス」

すると、キャラは補助魔法で山本の雨の炎を一層強化して、強大な雨のバリアを球体にして山本を包み込んだ。

そして、山本は其中でボンゴレ匣を開匣し、小次郎を形態変化させ朝里雨月の変則四刀にした。

そして、雨バリアに包まれた状態で山本は石田たち目掛けて突っ込んで行った。

「時雨蒼燕流、特式十四の型 『燕の一撃』ソル・コルボ・デラ・ローンディネ！！！」

山本は長刀を回転させ周囲に雨の炎を放出していく。

すると、二人の動きが極限まで鈍くなり身体の自由が利かなくなつた。

「くそ！これでは攻撃もままならない！」

「案ずるな石田。この程度の攻撃、私が気合で吹き飛ばすまでだ！レバンティン！！！」

すると、シグナムは鈍つたから身体を自力で動かし鞘を抜き出しレバンティンの柄頭と合体させた。

すると、レバンティンは合体したことで弓の形状となり、刀身の一部を利用した流用して矢を生成し、魔法と霊子をコーティングしたものを山本目掛け発射した。



「翔けよ、隼！シユツルムファルケン＋！！」

山本に向けて放たれた音速を越えて飛翔し、雨のバリアに直撃するや否や輝が入った。

すると、石田とシグナムの動きも多少元に戻り石田は山本のバリアを破壊するため高速移動し輝に向かってゼーレシユナイダーを振り落とした。

雨のバリアは見事破壊された。

山本は一度キャロのところまで戻った。

「何つーコンビネーションだ。あっちも負ける気は更々無いみたいだな。」

「そうですね。」

「でもよ、キャロの補助魔法で一層強化されたこの時雨金時の雨の刃とバリアがある限り、石田さんとシグナムさんの剣じゃ俺たちは切れないぜ。勝敗は見えてる！」

すると、石田はそれを聞くと山本の最後の言葉を復唱した。

「勝敗は見えてる・・・？・・・少し、勘違いをしてるようだね。ゼーレシユナイダーの霊圧振動は斬る為のものじゃない。振動によって斬った対象の霊子結合を弛緩させ奪いやすくする為だ。」

すると、山本の時雨金時に灯る捕縄魔法の付いた雨の炎がゼーレシユナイダーに吸い寄せられていった。

山本とキャラはそれを見て驚愕した。

「滅却師の戦いとは、周囲の霊子を収束し自らの武器として戦うこと。それを最も強く具現化したのがこのゼーレシユナイダーだ。だが、今回は霊子だけでなく君の死ぬ気の炎も収束できるみたいだ。今の君の死ぬ気の炎は、今までの半分以下だ。」

「くっ……そー……！！！！！！」

山本は焦りと悔しさのあまり冷静さを失い石田に飛び込んでいった。

キャラはそれを止めようと移動しようとしたが、いつの間にかシグナムにより自身とフリードにもバインドがつけられていた。

シグナムがキャラの近くまで来た。

「バ、バインド……！！」

「隙を私に見せたのが運のつきだったな。お前はそこで最後に山本と石田の勝敗を見届けている。最も、既に勝負は付いたも同じだがな。」

「うおおおおお……！！」

興奮する山本に対して、石田は冷静さを失わずにさらに続ける。

「それともう一つ勘違いだ。ゼーレシュナイダーは剣じゃない。」

そう言うと、石田は銀嶺弧雀にゼーレシュナイダーを矢として使い山本に狙いを定めた。

「なっ!?!」

「滅却師は、弓矢以外は遣わない」

「まさか・・・あれも弓!?!」

「・・・済まない、僕たちの勝ちだ。山本君、キャロちゃん。勝利は確かに、コンビネーションの差だったよ。」

そして、石田は徐にゼーレシュナイダーを放した。

そして、山本の時雨金時に直撃した。

刀身に当たり力負けした山本はそのまま勢いによって後ろに飛ばされ、地面に落下してしまった。



## 第70話：弓矢使い二人（後書き）

### 次回予告

ゼーレシュナイダーで山本に止めを刺して、勝利をつかんだ石田とシグナム。

二人が、勝負を追えた頃・・・直接フロント組みの了平達の戦いは続いていた。

強力な茶渡の力に対抗するため、了平とスバルは協力し戦う。

茶渡を引き付けるスバルと、ボンゴレ匣で形勢逆転を狙った了平だったが・・・

二人はその時・・・とんでもないものを目撃することになる。

次回、次元の破壊者・・・「攻撃の力」

みんな、正解して見ろよ。

## 第71話：攻撃の力

石田・シグナムチームが勝利を収めた頃、いまだ直接フロント組みの勝負は続いていた。

茶渡の強力な力を危惧した了平とスバルは一時手を組み、先に茶渡を倒すことを計画した。

「それで・・・一体どんな作戦があるの、了平君!？」

「ああ・・・お前も知っていると思うが、俺の炎は晴属性。つまり”活性”を司る。其の効果をえば、受けた傷を回復させることも可能だ。」

「うんうん。それでそれで!？」

「それで俺の傷を治し、お前が茶渡殿の注意を引き付けている間に俺がボンゴレ匣を開匣し、一気に勝負をかける!但し、俺の場合は僅か3分が限界なのだ。だが、それでも勝つ自信はある!」

「分かった!それで何とかやってみよう!」

その間、茶渡は二人が攻撃してこないことに不信感を覚えながら、岩場に立っていた。

「・・・妙だな。了平もスバルも・・・まるで攻めてこようとした。もしかしたら、俺を先に倒すために二人で共同するつもりなのでは!？」

すると、茶渡の耳から聞き覚えのあるスピナーの回転する音が聞こえてきた。

茶渡がふと後を振り返ってみると、スバルがウィングロードに乗って攻撃をしようと向ってきた。

「うおおおおおおおおお!!!」

「くっ!!!」

茶渡は巨人の右腕から霊子を放出させ、スバルに向けてパンチを放とうとした。

すると、それを見たスバルは大声で了平のボックス兵器の名前を呼んだ。

「我流!!!」

それを聞いた我流は型に武装された大砲から晴属性の炎をスバルのマツハキャリバー目掛け発射した。

すると、炎を纏ったマツハキャリバーの速力は尋常ならないほどに上昇し、魔力効率も上がった。

そして、茶渡の攻撃を喰らう前に茶渡の背後に回ることに成功した。

「何!？」

「うおりりやあーーーーー!!!!!!」

スバルは渾身の力を込めて茶渡の右腕を殴りつけた。

そして、右腕を押さえながら後方に飛ばされる茶渡を見て、スバルは再び大声で我流を叫ぶ。

「我流!!!!次もお願い!!!!」

スバルにそう言われると、我流は再び大砲から炎を発射し、今度はスバルの右腕に集中させた。

晴の炎が宿ったりリボルバーナックルと、マツハキヤリバーは茶渡の予想を大きく覆す。

スバルは瞬歩に及ぶほどの速度で茶渡の正面に移動し、同等の連続パンチを繰り返す。

「マキシマム・リボルバー!!!!」

目にも止まらぬ死ぬ気の炎と魔力を帯びた右ストレートが茶渡の腹部に容赦なく入り続ける。



「が……ッ」

腹部に来る強烈な衝撃が茶渡の体力を徐々に削る。

そして、身体がバランスを崩したのを見たスバルは、至近距離で自身の必殺技を改良したものを出す。

「一撃……必殺!!!!」

スバルはマツハキヤリバーのスピナーを晴の炎により極限まで高速回転させ、魔力と死ぬ気の炎を合わせた完全オリジナルの砲撃を茶渡目掛け発射する。

「マキシمام……バスター!!!!!!」

スバルの青色の魔力と、晴属性の炎が併さったマキシمامバスターの威力は凄まじく、茶渡の巨人の右腕を持ってしても簡単に吹き飛ばすほどの強力な技だった。

茶渡は技の威力に負け、宙高く浮かび上がった。

「今だよ、了平君!!!!」

スバルが大声でそう言うと、傷を完治させ服を脱いでスタンバイをしていた了平は同じように大声を出して返事をした。

「おおお!!! 極限分かったぞ!!! よし、いくぞ我流……射出!!!」

！」

了平がそう言うと、我流は大砲から晴の炎を了平の全身に向けて発射した。

晴の炎を全身に纏った了平は続けて我流に指示を下す。

「我流！！！！カンビオ・フォルマ形態変化！！！！」

すると、我流の身体は光り輝き始め形を変えて了平の両腕と頭に装着した。

ボンゴレ初代晴の守護者は、嘗て敵なしと恐れられた無配のボクサーだった。

だが、ある時試合中に謝って選手を殺してしまい、それ以降二度とリングに上がることなく神に仕える仕事に従事した。

だが、ファミリーの危機が訪れると、自身に3分間という時間制限を設けて戦ったという。

そう・・・了平のボンゴレ匣とは――・・・

「ナツクルの極限マキツムブレイク！！」

了平の頭にはボクサーが試合の時につけるヘッドと、ボクサーグローブが装着された。

そして、全身の超活性能力をフルに使い、茶渡のもとまで高速移動した。

そして、滞空しながら地面に落ちようとする茶渡の上に行き、了平は全身の力全てを拳に集中させ、巨人の右腕にパンチを喰らわした。

「マキナム極限マグナム!!!」

強烈を越し、言葉では言い表せそうにも無いほどのパンチが茶渡の右腕に直撃し、茶渡は口から少し出しながらそのまま地面に叩きつけられた。

叩きつけられた衝撃は二人の予想以上にも大きく凄まじいものだった。

「や・・・やったの!?!」

「くっ・・・手応えは合った。後は茶渡殿次第だ!!!」

了平はウィングロードから降り地面に立つスバルのもとまで移動した。

そのとき、丁度了平の身体も限界に達し、了平はそのまま汗だくなって両手をつき、息を切らした。

「はっ、はっ、はっ、はっ、くそ！！思った以上に時間が早いぞ！！」

「仕方ないよ。あれだけの力を出せば直ぐに肉体の限界がやってくるよ！でも、これで茶渡さんも無事ではすまないはずだよ！！」

「ああ……………そうだな……………」

そして、二人は徐々に晴れていく土煙を見ながら茶渡の様子を注意深く警戒した。

そして、二人は土煙の中から血を流しながらよろよろになって歩いてくる茶渡の姿を目撃した。

「くっ！！やはり相当手強い敵だな、茶渡殿は！！」

「本当……………ある意味なのはさんよりも怖いかも……………！！」

そんな二人を他所に、茶渡は腹部を押さえながらゆっくりと二人の正面まで歩いてくる。

そして、息を切らしながら二人にこう語りはじめた。

「今のは……………かなり効いたな……………目が眩んでよく前が見えない。だが、俺もまだ諦めた訳ではない。本当は、この力を使うことは危険と判断していたんだが、ここまで来て……………そんな悠長なこと言ってる場合ではない。」

「……………この力……………！？どういうことだ、茶渡殿！？」

了平が驚いた様子でそう言うと、茶渡は暫く黙った後、徐に語りだした。

「・・・済まない。了平、スバル。俺はお前たちに・・・一つ伝え損ねていたみたいだ・・・。この巨人の右腕は確かに、俺の右腕の真の姿・・・」

「・・・はい・・・」

スバルが茶渡の説明に相槌を打ってくる。

そして、茶渡はさらに話を進める。

「そしてこの右腕には確かに、じいちゃん（アブウエロ）の魂が宿っている・・・俺がじいちゃんに教わったのは、『守るため』の力の遣い方・・・じいちゃんは俺に言った。『お前のその大きく強い拳は、何のためにあるのか、それを知りなさい』と。そう、俺が分かっていなかっただけで・・・力を手にしたその時から、この右腕に宿っていたのは・・・」

「・・・・・・」

「『防御の力』だったんだ。」

それを聞いた二人は、自分の中の勘違いに漸く気が付いた。

そう、茶渡の右腕は攻撃の力ではなかったのだ。

「そ・・・それじゃあ・・・まさか!？」

「・・・ああ。スバルの察した通り、俺の持つ『攻撃の力』の力が宿っているのは・・・左腕のほうだ。それがこれだ。名を”ディアブロー”ー」

すると、茶渡は自身の左腕を変化させた。

巨人の右腕と比較するとシンプルな形状で対照的に白い色をしていった。

「『悪魔ブラス・イスキエルダ・デル・ディアブロの左腕』」

茶渡の変化した左腕とその名を聞いた了平とスバルは、思わずその名を再び口にした。

「・・・『悪魔ディアブロ』・・・」

「『悪魔あくま』ですって・・・？」

二人は、徐に近付いてくる茶渡の威圧に腰か抜け動くことが出来なくなっていた。

そして、茶渡はそんな二人の座る地面に向けて左腕の鎧で、靈子をまとった強烈なパンチをした。

「『魔人の一撃』（ラ・ムエルテ）」

茶渡がパンチを放った瞬間、地面は巨大な地響きと共に、口を開けた髑髏のような形になるように抉れてしまった。

そして、直ぐに地面が割れて足元が崩れていった。

茶渡は二人を抱えてすぐさま避難をした。

そして、安全な場所まで連れて行き二人に尋ねた。

「それでも・・・まだおれと勝負をするか・・・？」

二人は暫くの沈黙の後、二人同時に茶渡に向けて頭を下げて手を床に着いた。

「勘弁して下さい！！」

こうして、直接フロント組みの試合を無事に終わった。

そして、そんな全員のお昼の鐘の音が入ってきた。

「午前中の修行はここまでにしよう。今の試合で俺たち全員の力量は大方？めた。午後からは本格的にコンビネーション技の開発に専念しよう。」

「わ・・・わかり・・・ました・・・」

二人は腰が抜けると共に、下を回す力も抜けてしまい上手く喋れな

くなっていた。

茶渡はそんな二人を見て、少しやりすぎたと思いつつ両腕を元に戻した。

そして、二人をゆっくりと立たせ修行場を後にした。





## 第71話：攻撃の力（後書き）

### 次回予告

全員が午前中の修行を終え、昼食を取りに戻ってきた。

ツナが一護にみっちりしごかれ傷だらけになって戻ってきたのを見て、京子は心配になる。

京子はそんなツナに対して、ツナの修行を見せてほしいと言ってきた。

当然頑なになって断るツナと、それに賛同する了平たち。

そのとき、一護は心中こんなことを抱いた。

次回、次元の破壊者・・・「ランチタイム」

一護は一体・・・何を思ったのだろうか！？

## 第72話：ランチタイム

お昼の鐘を聞いた全員は一度修行を中断し、食堂のほうへ戻っていた。

一護はツナとリボンとアイゼンハウアーと共に廊下を歩いていた。ツナは虚化と一護の扱きにより顔と身体中は痣と傷でいっぱいだった。

溜息について重い表情をするツナを見て一護は喝を入れる。

「情けねーな、おい！あの程度のことでもう溜息かよ！」

「だって一護さん……あれは最早修行っていうより苛めに近かったですよ！」

「うるせーよ！俺も昔はあーやって扱かれたんだよ！それに、お前だっていつもあんな感じでリボンに苛められて慣れてるはずだけどな。」

「一護の言う通りだぞ、ツナ。あれくらい苛めてもらったほうがお前のためにはなる。一護、構わず苛めてやってくれ。駄目ならば殺していいぞ。」

「リボン……それはやめろよ……！」

「やれやれ・・・つくづく鬼畜な赤ん坊じゃな・・・お前は。」

アイゼンハウアーがそう言うと、リボーンはいつもどおり鼻でふんと笑った。

そして、四人が廊下を歩いていると、日番谷達特殊戦闘フロント組みに遭遇した。

日番谷は身体中黒焦げになり、フェイトたち三人は氷が完全に溶け切らずあちこちに氷塊がついていた。

「と・・・冬獅郎！？それにフェイトたちまで・・・どうしたんだよ、一体!?!」

「大人ランボにエリオ君もかなり凄いいことになっちゃってるけど、大丈夫!?!」

「ええ・・・身体中痺れと寒さでどうかしそうですよ、ボンゴレ・・・」

「いや～～～日番谷さんの技をもろに喰らっちゃいまして・・・見えての通りこのありさまですよ・・・」

エリオがそう言うと、ツナは黙ったままの日番谷の方を向いて心の中できこう思った。

「（そう言えば、一護さんの話じゃ・・・冬獅郎君ってかなり強いんだっけ。あのフェイトさんやエリオ君に大人ランボを相手にして、

勝っちゃうなんて・・・やっぱり凄いなだ!!」

すると、今度は右側と左側の廊下からは直接フロント組みと間接フロント組みが歩いてきた。

「おお、沢田!! 修行のほうは上手くいつておるか?」

「ああ、お兄さん! どうしたんですか一体その身体! ? ボロボロじゃないですか。スバルさんまで!」

「いやはは・・・茶渡さんに思いつきりぶちのめされちゃった・・・私達・・・」

「やはり茶渡殿は強敵だった。極限ブレイクを遣っても倒せなかったしな。」

それを聞いたティアナとクロームは驚きを隠せずにいた。

「嘘でしょう! ? だってその極限ブレイクって・・・君の最大技なんでしょう! ?」

「そうなんだけど・・・私も平君も、このとおりコテンパンにやれちゃって訳だよ、ティア。」

すると、一護がルキアと井上に修行の成果を尋ねてきた。

「そついや、ルキアたちのほうはどうなんだ?」

「ああ。午前中は二対二のチーム戦を行った。私とクローム。井上とティアナのチームだな。」

「お互いに力が拮抗してたから、勝敗は結局引き分けになっちゃったんだ！」

一護達がそんな話をしていると、今度は石田達とはやて達がやってきた。

はやては真之介に敗北し、悔しがっていた。

「真之介・・・お前、はやてに勝ったのか!？」

「当たり前だろ!オーバーSランクの魔導師をいたぶるのは楽しかったぜ。もう少しスパイが利いてれば深みが出たんだろうけどな・・・」

「く~~~~~~~~!!!その上から視線がかなり腹立つ!!!!!!」

「はいです!!!!今度は絶対に負けませんよ!!!!」

はやてが負けたという事実を知ったスバルたちは驚きを隠せなかった。

オーバーSランクの魔導師で、六課立ち上げの第一人者であるはやてが負けたという知らせは、全員の心をかなり動揺させた。

すると、そんな全員のもとにこいつらが戻ってきた。

大図書室で大喧嘩をして、身体中から湯気を出し真っ黒になった恋次、獄寺、ヴィータが。

「お．．．お疲れ．．．さまです．．．十代目．．．」

「よ．．．一護．．．ルキア．．．修行は．．．上手くいってるか？」

獄寺達の姿を見た一護達はそろって同じ声を出して驚いた。

そして、徐に一護とツナが尋ねてみた。

「ど．．．どうしたのその身体と顔!？」

「恋次!お前ら一体何したんだよ!？」

すると、ヴィータが代弁して返事をしてくれた。

「それが．．．つまんねえことで派手に喧嘩しちゃってな．．．お陰で図書室は大破しちゃったぜ．．．」

「たく!こいつらが俺の立てた修行プランを無視して好き勝手やるからこうなったんすよ!」

「何だと!!元はと言えばてめえが分かり易く説明しねえからこんなことになったんだろぅが!!!!」

「うつせーよ！！！てめえらの腐った脳みそにも分かるようにボードに書いてやっただろぅが！！」

「私の脳みそは腐ってねーよ！！！！」

こうして三人はまた喧嘩を始めてしまった。

一護達は最早呆れることしか出来なかった。

「やれやれ・・・壊した図書室は一体誰が直すと思ってるんじゃ・・・」

アイゼンハウアーは一人深い溜め息をつく。

そして、三人の喧嘩を止めた後全員は食堂へ向った。

食堂のテーブルには既に京子達がつった手料理が並べられていた。

一護達は揃って同じ言葉を口にして感嘆した。

「凄いや！！これみんな京子ちゃんたちが作ったの！？」

「うん！私とハルちゃんとヴィヴィオちゃんが一生懸命作ったんだよー」

「ツナさんたちも遠慮なく食べてくださいね！」

京子とハルがそう言うと、一護達は待ちきれないとばかりに席に着



き、直ぐに食べようとしたが・・・ヴィヴィオがこんなことを言いたが為に、直ぐに食せなかった。

「待って！なのはママと浮竹おじちゃんに来てからだよ皆！」

恋次などは口に入れようとしたものを一端さらに戻し、仕方なく待つことにした。

獄寺がブツブツ文句を言っていると、漸くなのはと浮竹が戻ってきた。

全員はなのはの姿に目を疑った。

いつも綺麗に整えられている髪と肌は黒く焼け焦げ、身体中痣と傷でいっぱいだった。

「な・・・なのはさん!？」

「どうしたのその身体!？まさか・・・修行でついたの、なのは!？」

「にやははは・・・浮竹さんにこっぴどく扱かれちゃってね、この有様。六課にいた頃の訓練されるスバルたちの気持ちが漸く分かったよ。」

「いや〜俺もちょっとやりすぎたかも知れんな・・・はははははははははは!?!?!」

浮竹は涼しげな顔で頭を抱えながら笑っていた。

このとき全員は思った。

一体どんな訓練をしたのかは知らないが、この男・・・意外と恐ろしい奴だと。

「さ、全員が揃ったところで昼食にしようぜ。腹減ってしょうがねえ・・・」

真之介がそう言うと、全員は着席しただきますをしたあと食事にかぶりついた。

ツナ達男性陣は京子達がついた料理を深く噛み締めながら食べるように食べていった。

女性陣も、京子達に素直にとても美味しいと言って感謝していた。

ヴィヴィオはなのはに褒められかなりご満悦な様子だった。

すると、ツナがこんなことを口にした。

「あれ？そう言えば雲雀さん・・・まだ修行してるのかな？」

「そう言えば真之介・・・雲雀の修行相手って誰なんだ!？」

一護が食べながらそう尋ねると、真之介はさらっと口に物を含めながら応えた。

「ああ・・・更木剣八だ。」

その言葉を聞いた瞬間、一護達死神メンバーは口に入れたものを吐き出したり、喉に詰まらせたりした。

ツナ達は真之介の言った人物を知らぬため、きよとんとしていた。

「お前！！！剣八を連れて来たのかよ！！！何考えてんだよ！！！」

「いいじゃねえか。そうすれば間違いなくあいつは最強になるに違いないええよ！」

「いやいや！！そう言う問題じゃねっての！！！」

一護と恋次が慌てた様子で真之介に問い詰めていると、横からツナが一護に尋ねてきた。

「あの〜一護さん……その剣八って、どんな人なんですか！？」

「人っていうか、死神だ！しかも護廷十三隊十一番隊隊長で、尸魂界最凶の戦闘狂！戦うためなら死も苦痛も愉しむっていうバケモンだぞ！！俺が前に戦ったときは、斬月の刃を肉に食い込ませても・・血はおるか傷一つ入らなかつたんだぞ。そんな相手と戦ったら、間違いなく雲雀は死ぬぞ！！！」

その言葉を聞いたボンゴレ関係者と六課一同は食べることをやめて、身体中から寒気を感じた。

「そ・・・そんな・・・！？じゃあ、雲雀さんが危ないじゃないですか！！！」

「だからそう言っただよー!」

話が長くなりそうなので・・・後半につづく。



### 第73話：ランチタイム 後半

一護は必死に真之介に向って今すぐ戦いをやめさせると説得するが、聞き入れてもらえない。

それどころか、真之介は逆にこう言い返してきた。

「お前だって知ってるはずだぜ。戦場踏み入った剣八と雲雀は最早、生肉を放られた”ケダモノ”だぞ。割って入れれば諸共に喰われて死ぬ。ケダモノに喰われて死ぬなんて、如何にもバカらしいじゃねえか。」

「だ・・・だけど!!」

「それに、雲雀は剣八と戦ったぐらいじゃ死なねえよ。何の確証もないが、ここで死ぬような男じゃないと思ってる。剣八も雲雀との戦いを存分に愉しめるはずだ。あいつらのことだ、飯食うのも忘れて夢中で戦い続けるぜ、きつと。」

全員はそのことを頭の中で考えて、遣る瀬無い気持ちもあつたが仕方なく了承することにした。

そして、再び食事を開始した。

暫くすると、京子が何気にツナの傷だらけな顔を見て心配そうな顔で尋ねた。

「ツナ君……顔……大丈夫？」

「えっ!? ああ……大したことないから! 全然大丈夫だから、ホント!」

「本当にそう……修行でまた無茶ばかりしてない？」

「う……うん! 大丈夫だよ……一護さん、厳しいけど無茶はさせてないよ、ねえ……一護さん!」

「あ……ああ。そうだな……(まったく、急にこっちに振るなよ。それに、お前……嘘つくの下手だな。俺は確かに扱き方は酷いが、無茶はなるべくさせないようにしてる。だが、ツナは進んで無茶しやがる。こんなにボロボロになっちまうのも、半分以上はお前の無茶のせいなんだぜ。)」

「そう……」

京子はツナに言いくるめられて悲しそうな顔をしたまま、食事を取った。

隣に座っていたハルも同じだった。

一護となのはそんな二人の様子に敏感に察知していた。

リボンも、その様子に気付きながら黙って食事を続けた。

そして、その後午後の訓練も終わり夜も徐々に深まっていったその日、ツナは邸内の風呂から上がり獄寺たちに今日の修行の成果を聞いていた。

「どう？そっちのほうは・・・上手くいつてる!？」

「おお!こっちは早くも茶渡殿とスバルと共に技の開発に取り掛かっているとこだ。午後の段階で、だいたい5割型構想は完成している。」

「俺も、キャラの補助魔法で新しい型を二つ作ったし、午後の訓練でシグナムさんのコンビネーションも行ったお陰でコンビ技が出てきたぜ。」

「俺もエリオ氏の技と協力することで、今迄以上の力を持った電撃角が出来上がりましたよ。」

「へえ~~~~三人とも凄いや!!もうそこまで。ああ、そう言えば獄寺君のほうは？」

ツナがそう言うと、獄寺は何もいえないらしく口を籠もらせ沈黙した。

ツナもそれを見て、ああ上手くいつてないんだと理解した。

すると、今度は了平がツナに修行の成果を聞いた。



「沢田はどんなのだ、一護殿との修行は？虚化維持は上手くいって  
おるのか？」

「いいえ。俺が思ってた以上に虚化の維持って難しくて・・・まだ  
たった4、5秒ぐらいしかもたないんです。それに引き換え一護さ  
んは自由に仮面を着けたり外したりして、完璧に虚化を使いこなし  
てる。今日一日の修行で身体中が悲鳴を上げて、今もかなり痛いん  
ですよ。」

「あのオレンジ頭！！十代目にこんなになるまでやらせやがって！  
！！いつかぶっ飛ばしてやる！！」

「そ、それは止めようよ獄寺君！！」

初日はこんな感じで終わった。

俺と獄寺君以外のみんなは・・・それなりに上手くいってるみたい  
で正直うらやましかった。

そして、こんな日に限って・・・俺の修行を大きく狂わせる出来事  
が突然やってきた。

「あ・・・突然なんですが・・・」

「話があるんだけど・・・」

すると、ツナ達の下に京子とハルが神妙な顔つきをしてやって来た。

ツナはすぐにその声に反応して後を振り返った。

「京子ちゃん！ハルも！！」

「おう、京子。」

「よう、お疲れ！」

了平と山本がそう言っても、二人は顔色一つ変えない。

そんな二人を見てツナ達は心配になって来た。

「ど、どうしたの？何かあったの？……えーと、俺達……何かしたかな！？」

「俺は……何もしておらんぞ！」

「誓って俺も、奥方達には何もしておりません……十代目！」

「お……俺だって！」

「俺もですよ！」

男どもは必死で何もしていないと釈明をする。

すると、ハルが黙っていた口を開きツナ達に語りだした。

「誤魔化しても仕方ないので、単刀直入に言います。」

「えっ？う……うん……」

ツナ達がハルのいうことに耳を傾けると、暫くの沈黙の後ハルは真剣な様子でこう言った。

「ハル達にも・・・ツナさんの虚化のことや、修行の様子を・・・もっと詳しく見せてほしいんです。」

ハルの発言を聞いたツナ達全員は言葉を失った。

そして、暫くの沈黙が流れた後、ツナが慌てた様子で喋りだした。

「ちょ・・・な、なななな・・・何言ってるの!?!」

「アホ女!! てめえ自分が何を言ってるのか分かってるのか!?!」

獄寺がそう怒鳴りつけると、京子とハルは拳を強く握り締めて、ハルがそんな獄寺にこう言った。

「これはハルからのお願いなんです! ツナさんの様子が心配で、修行の様子を見たいって言ってきたのは・・・京子ちゃんのほうなんです!」

「えっ!?! 京子ちゃんか!?!」

ツナが意外なことを聞いて驚いていると、そんなツナに向かって京子が心配そうな眼差しと声色で話しかけてきた。

「ツナ君・・・私・・・ツナ君が、そんなになつてまで傷つくツナ君をこれ以上見たくないの! 虚化とか・・・よく分かんないけど、でも・・・ツナ君の傍で修行の様子を見れば、きっとツナ君と同じ

傷みを分かち合えると思うの。私達は直接戦うことは出来ないけど、  
・・痛みを共有することは出来ると思うの！私達も・・・一緒に戦  
いたいのに！」

「京子・・・ちゃん・・・」

「京子・・・」

「奥方・・・」

ツナと了平と獄寺は、明らかにいつものと違っていて、覚悟のある  
目をした京子に衝撃を受けた。

ツナは心の中でそんな京子の言葉に対する葛藤が生まれた。

「（京子ちゃんがそんなこと・・・でも・・・でも駄目だ。京子ち  
ゃん達を危険なところに巻き込んだじゃ。ボンゴレのことを教えたこ  
とだけでも遣る瀬無いのに、まして虚化のことなんか知らなくてい  
いんだ。）」

ツナは心の葛藤の末、京子に向って重苦しい表情をなるべく避け、  
精一杯の誤魔化しで京子に返事をした。

「気持ち嬉しいけど・・・ホントに危険なんだ。もし、俺の修行  
を見て京子ちゃん達がそれこそ大怪我とかしたら俺は嫌だし、何よ  
りも知らなくてもいいことなんだよ、今回のことは。もう、ボンゴ  
レのことだけでも知ってもらってるのにこれ以上危険な目に合わす  
のは耐えられないよ。だから・・・俺を信じて、もう少し・・・我

慢してくれないかな？」

ツナの言葉を聞いた京子の表情は、一気に曇り始め、悲しみの表情一色となった。

ハルも京子と同じ気持ちになった。

獄寺も了平もツナの後に続けて二人に説得を促した。

だが、ハルは諦めずに交渉し続けた。

「けど！！京子ちゃんは今こんなにツナさんのこと心配してるんです！！少しは京子ちゃんの気持ちも考えて！！」

「……いいよ、ハルちゃん。」

すると、そんなハルを見かねた京子が顔を地面に向けたまま辛い気持ちを抑えてそう言った。

「え？……京子ちゃん……」

「本当に……もういいの………ありがとう、ハルちゃん………ごめんねツナ君……突然変なこと言っちゃって……私達……もう寝るね……お休み……！」

京子は精一杯の作り笑顔でツナにそう言うと、ハルをつれて部屋へ戻って行った。

ツナはそんな今日を心配そうな眼差しで黙ってみることしか出来なかった。

獄寺たちも同じだった。

そんなツナ達の様子を、ずっと影で聞いていた一護は腕を組んだまま思い表情で深く考え込んだ。

そして、考えた末ある決断を下すことになる。



## 第74話：一護の決断

その日の夜遅く、一護はふと京子の自室まで訪れドアをノックしようとした。

すると、ドアの向こう側から京子のすすり泣く声が聞こえてきたのを一護ははつきりと聞いた。

そんな一護を見かけたのは、なのはだった。

「一護君・・・京子ちゃんに何か用？」

「えっ？ああ・・・なのはか・・・悪りー、ちょっと顔を貸してくれるか、なのは？」

「えっ・・・うん・・・」

一護はそう言うと、パジャマ姿のなのはを一度したまで連れて行き暗いリビングを照らす暖炉の前の机に座って、今日のツナと京子のことに関して話し出した。

なのは、一護の話を黙って聞いていた。

「・・・っー訳なんだ・・・」



「うん・・・そう・・・京子ちゃんがそんなことを・・・」

「・・・俺・・・あの時の京子の気持ちを汲んでやりたいけど・・・あいつがそれを許そうとしねえ・・・こう言う場合、一体どうすればいいと思う？ツナは・・・まだ分かつちやいないんだ。『守る』っていう意味を本当のところまで」

「・・・そうだな・・・京子ちゃんの覚悟は本物だと思っな。綱吉君と同じ痛みを共有したいって気持ちも嘘じゃないと思う。一護君の言う通り、綱吉君は少し傲慢かな。だったら・・・こういつ考えはどうかかな・・・」

「えっ？何かあるのか・・・」

「耳をちよつと貸してくれる。」

なのはにそう言われ、一護は耳をなのはの口元まで運んだ。

なのはは一護の耳元にあることをしてみてもどうかと提案を試みた。

すると、一護もそれに納得し、明日早速実行することにした。

翌日、二日目の修行の開始時刻になった。

一護はツナをつれて昨日と同じように超幻覚の中庭にやって来た。

ツナは早速ハイパー化をして、準備を整えていた。

「俺はいつでも準備万端だ・・・一護。早速虚化の訓練を始めよう・・・」

だが、一護はツナがそう言っているにも関わらず、ツナに背中を向けたまま何も喋らずにいた。

不審に思ったツナは一護に大きい声で呼びかけた。

「おい、一護!!聞いてるのか!?!」

ツナがそう言うと、一護はゆっくりと振り返った。

そして、暫くの沈黙の後ツナにこう言った。

「・・・悪りーな、ツナ。」今”のお前に修行をさせる意味はねえ・・・やるなら一人でやれ。俺は知らねえ・・・」

一護の言葉を聞いたツナは驚きを隠しきれないでいた。

そして、ハイパー化を解いて慌てて一護に問いただした。

「ちょ・・・なななな何言ってるんですか、一護さん!?!修行をしないって・・・一体どういうことですか!?!虚化の保持訓練は一護さんがいないと話にならないんですよ!?!って、一護さん聞いてるんですか!?!どうしてなんですか!?!応えてくださいよ!?!」

ツナは何も言わずに横を通り過ぎる一護に必死で呼びかけようとするが、一護はそれを無視して通り過ぎようとする。

そして、ツナとある程度の距離をとった時、一護は背中を向けたままツナにこう言った。

「……自分の胸に聞いてみりゃいい……」守る『っていうのが  
どういう意味なのかを……」

「え？」守る『……!？」

一護はそれだけを言うと、ツナの下を去っていった。

ツナは一護を追う事もなく、ただ頭の中で一護が修行をしないと云ったのか、そして去り際の言葉の意味を考えていた。

「（……どうしてなんだ!? どうして一護さんは……突然修行をしないって言ったんだ。俺……何か変なことでも言ったのかな!? それとも別の何かか……!? それに、最後のほうで一護さんが言ったあの言葉……あれは一体どういう意味なんだ!? 『守る』ってというのがどういう意味か……訳わかんないよ!」

ツナは一護の行動と言葉の意味が全く理解できずに、その場にしゃがみこんで両手で頭を抱えて困惑した。

一方、そんなツナとは対照的に一護は中庭を去ると邸内に戻り、京子達がいる食堂に向った。

京子はハルとヴィヴィオと共に皿洗いをしていたが、その表情は全くもって暗かった。

いつもの笑顔はなく、目は夜中のすすり泣きによりすっかり充血し赤くなっていた。

そんな様子を心配してヴィヴィオが声を掛けてきた。

「京子お姉ちゃん・・・目が真っ赤だよ、大丈夫？」

「えっ！？ああ・・・うんうん・・・何でもないよ、心配かけてごめんね。」

京子はヴィヴィオに向って作り笑いをし、その場を誤魔化した。

ハルはそんな京子を傍で見ていることが、耐えられなかった。

昨日の出来事に関して、まだ気持ちが割り切れていないとっついていだからだ。

「ん？ハルちゃん・・・私の顔に何か付いてるの？」

「えっ！？いえ・・・何でもありませんよ！ハルの思い過ごしです

よ、京子ちゃん！」

ハルは京子にそう言われたので、必死で手を横に振って平静を装った。

すると、そんな三人の下に一護がやって来た。

「おつ、いたいた。皿洗いしてる最中だったのか・・・」

三人は修行でここに来るはずのない人物の声を聞いて驚き、後に振り返ってみた。

すると、そこには確かに死覇装姿の一護が立っていた。

京子は思わず尋ねてみた。

「一護さん！どうしてここに！？ツナ君と修行してるんじゃないかなかったですか？」

「その筈だったんだが・・・ツナの奴がな・・・」

「あら、一護じゃな～～～～い～～～～」

そのとき、一護の背筋に猛烈な寒気が走った。

そして、おどおどしながら後を振り返ってみると、そこにはくねくねと動きながら強烈な好意を向けてくるセクトウールが立っていた。

「どうしたのこんな所で・・・はっ、まさか私に会うために修行を放棄してきたのね！いや〜ね、もう！！ホント私って罪な女ね〜」

「女じゃねーだろ！！男だろーてめえー！！それに、別にお前に会いに来た訳じゃねえよ！！気持ち悪いからそのくねくねとした動きやめろよ！..！」

「いいじゃないの別に。私の華麗で逞しい肉体が御気に召さないのかしら、一護〜〜〜」

「う〜〜〜〜〜いい加減にしろ！！！！！！！！！！」

一護は頭の血管が切れると、巻き布をつけたままの斬月でセクトウレを野球の要領で吹っ飛ばした。

セクトウレは見事に数十メートル向こうに飛ばされてしまった。

そんな様子を三人は啞然としてみていた。

そして、一護は斬月を背負いなおすと、京子にこう言った。

「京子、ちょっと話があるんだ。俺と一緒に来てくれないか？」

「えっ？私に・・・ですか・・・！？」

「ああ。済まねえが・・・ハルとヴィヴィオはここで待っていてくれないか。こいつは、俺達二人で話したいんだ。」

真剣な眼差しで一護がそう言うと、ハルもヴィヴィオをも快く了承してくれた。

「サンキューな、二人とも！！そんじゃ、京子・・・付いてきてくれ。」

「あつ、はい！じゃあ、ハルちゃんにヴィヴィオちゃん・・・お皿洗いよろしくね！」

「はい！任せて下さい、京子ちゃん！」

「いつてらっしゃい、京子お姉ちゃん。」

ハルとヴィヴィオは京子に元気よくそう言うと、一護に京子を任せただ。

一護は京子がある場所まで連れて行き、歩きながら昨日のことを話し始めた。

「昨日の夜・・・たまたまお前とツナの会話を聞いちゃったんだ・・・」

「え！？・・・ああ・・・はい・・・」

「ツナも冷たい奴だよな。まっ、あいつの気持ちも分からない訳じゃないけどな・・・なあ、京子。虚化のことを知りたがっていたよな？」

「えっ!!」

京子は一護の意外な一言に耳を疑ってしまった。

「俺で良ければ・・・全部教えてやるぜ・・・勿論、今のあいつの状況も全て・・・」

「で・・・でもそれじゃあツナ君に・・・!!」

「いいんだ・・・そうじゃないと意味が無いんだよ・・・この作戦を実行した意味がな・・・」

「え？作戦・・・!？」

京子は訳の分からないまま一護の後についていき、そして目的の場所まで到着した。

そこは、意外なところだった。





## 第74話：一護の決断（後書き）

### 次回予告

一護に連れられ京子がやってきたのは・・・ツナが修行をしている中庭だった。

一人で虚化保持のための訓練をし続けるツナを、一護と京子は黙って見続ける。

ポロボロになっていくツナを止めようと京子が走ろうとするが、それを一護が止める。

理由を聞かれたとき、一護は真剣な眼差しで京子にこう応えた・・・

次回、次元の破壊者・・・「守ることの本当の意味」

京子は、そのとき一護に何を聞かされたのか？

## 第75話：守ることの本当の意味

理由も良く知らぬまま一護に連れて行かれる京子。

そして、徐に一護が足を止めた。

そして、京子が改めてその場所をよく見渡してみると、そこはツナが修行をしている中庭だった。

「ここって……ツナ君が修行してる……」

「ああ。京子……あれ、見てみるよ……」

一護が京子にそう言って前方のほうへ指を指すと、20メートルぐらい先の岩場で一人虚化の修行を続けるツナの姿が見えた。

ナッツも一緒になって修行をしていた。

「ツナ君！！ナッツ君まで！！」

その光景に京子は驚いた。その時、京子の目に衝撃的なものが入ってきた。

ハイパー化したツナが右手を顔に近づけると、白と黒の入り交じった虚の仮面が現れそれを顔につけたのだった。

その姿を見た京子は一瞬身体中が恐怖で凍りついてしまった。

そして、暫く見た後・・・思わずツナの名前を言った。

「・・・・・・・・ツナ君・・・・？・・・・あれは本当に・・・・ツナ君なの・・・・・・・・？」

そんな京子を気になげながら、一護は隣で黙った様子でツナの様子を見ていた。

すると、つけた仮面がすぐに砕かれてしまい、激しい勢いで岩場に叩きつけられてしまった。京子はそれを見て居た堪れなくなった。

「ツナ君！！！」

そして、急いでツナのもとまで走っていきこうとすると、一護は京子の腕をつかみそれを止めようとした。

「放して下さい、一護さん！！！！ツナ君が・・・・ツナ君が！！！」

「今ここでお前が行った所で・・・・この問題は解決しねえんだ・・・・お前にとっても、ツナにとっても・・・・」

「えっ！？」

京子はそう言われると、一度走ることをやめて一護の指示に従うことにした。

二人は、再び目の前のツナの様子を見てみた。すると、満身創痍になりながらもナッツと共に身体のことを省みず再び虚化をするツナが目映った。

「ツナ君・・・どうして・・・あんなになってまで・・・無茶しないでって言ったのに・・・なんで!？」

すると、ツナの姿を見て心の底から心配している京子に対して、一護は真剣な様子で語りかけてきた。

「・・・あいつは・・・自分が傷つこうが関係ないんだ。大切な人を守りたいという一身で奴は平気で無茶をする。つくづく俺と似てるんだ・・・あいつは・・・」

「え?一護さんと・・・ツナ君が・・・ですか!？」

「ああ。あいつは俺と同じように、大切な人が傷つくことを・・・守れなかったときの事を恐れているんだ。だから強くなるうとする。敗北をしないために、守り抜くために。」

「守り抜く・・・ために・・・」

「特に、あいつにとってお前が一番守りたい人なんだ。だから、お前が傷つくことが一番あいつにとっては嫌なんだ。自分のことのために、お前をまきこき込んで怪我とかさしたくないんだ。」

「ツナ君が・・・そんなに私のことを・・・」

そう言われると、京子はまたツナの修行の様子を黙って見つめていた。

自分の目の前でいくら傷つこうが決してやめることなく修行を続けるツナを見ているうち、京子の手を握る力が強くなる。

すると、また一護が京子に語りかける。

「でもよ……この頃になって俺も漸く分かったんだ。本当に強い奴っていうのは……単純に人を傷つけないように守り抜ける人じゃないってことにな。」

「え！？単純に……？？」

「つまりだ……俺が思うに、『守る』っていう本当の意味は……人を悲しませない”ってことじゃねえかって”」

「人を……悲しませない……!？」

「今のあいつは、虚化とかよく分からないことに直面して気が動転してる。そして、自分でも訳分らないことにお前を巻き込んでしまうことがどれだけあいつにとって嫌なのか。だから、お前がいくら言っても自分の気持ちだけを押し通してお前を守り抜こうとしてるんだ。けどよ、あいつはお前を悲しませている時点で……『守る』ってことを履き違えてる。俺はあいつにそれを分かってほしくて、態と修行をしないうって言ったんだ。」

京子は一護の話を真剣な様子で聞いた後、昨日のことをもう一度振り返って見た。

あの時の自分とそれに対するツナの応答。

それをよく思い出してみると、京子の瞳には自然と涙が溜まっていた。

「・・・ツナ君・・・」

一護と京子はツナのそんな様子を暫く見た後、気付かれないようにそっとその場を後にした。

京子は自分のことをどんなに大切に思っているのか、その為に自分が傷ついて構わないというツナの気持ちを改めて知って、歩きながら涙を昨日の夜よりも多く流していた。

そんな京子に、一護はそっと肩に手を置いたのだった。

その頃、一護達の知らないところでは・・・

一人の男がこの世界に足を運んでいた。

男の名は・・・オベージヤ。

「……さて、じっくり待たせてもらうよ……最高の幻術使いが熟すそのときを……私個人としては、ティアナ・ランスターも、クローム髑髏もいたぶり甲斐があるが……やはり一番は……あの男……六道骸。」

オバージヤはアイゼンハウアー邸から数キロ離れた電柱の頂に立つて、静かにそのときを待っていた。

そう、ティアナとクローム、そして骸を最高の催眠を施す、その機会をずっと……

一方、泣いている京子を慰めたあと、一護は自分が知る限りの虚化のすべてとツナの現状を話した。

勿論、自分の虚化にまつまることも全て。

泣き止んだばかりなのか、京子の目は潤んで見えたが……京子は一護の話に黙って頷いた。

「……そんな感じだな……」

「……はい……」

「大体分かってくれたか……!?!?」

「……はい……大丈夫です……」



「（ツナには悪リーけど、勝手に話させてもらったぜ。ついでに今日のお前の様子もな・・・お前が京子のことをどれほど大切にしているかは分かる。けどよ、それで京子を悲しませてしまうのは・・・彼氏としては最低だぜ。」

「話してくれてありがとうございます、一護さん。」

「えっ！？ああ・・・別に良さそんなこと。」

「何だか・・・さっきより大分気持ちが楽になった気がします・・・ツナ君の気持ちもよくわかったし・・・私、ハルちゃんたちのところに戻りますね。一護さんも、修行頑張ってくださいね。それから・・・ツナ君のこともお願いしますね・・・」

「ああ・・・分かった。」

そう言うと、京子はいつもの笑顔で一護に感謝した後ハル達のもとへ戻っていった。

一護も京子の様子を見て少しホッとし、顔を綻ばせた。

そして、テーブルが立ち上がり移動しようとする、真之介が両腕を組んで立っていた。

「し・・・真之介！？」

「話は聞いたよ。そう言うことなら認めてやるよ・・・その代わりに、

ツナの虚化修行が再開されるまで・・・お前は俺と修行だ。いいな  
」？」

「・・・ああ・・・」

こうして、一護は真之介と共にほんの少しの間修行を受けることにな  
った。

その修行はどんなものは、また別の機会で話すとしよう。



## 第75話：守ることの本当の意味（後書き）

### 次回予告

一護がツナの修行をボイコットして、一週間が経った。

未だ理由も分からないまま、ストレスと不安が高まっていくツナ。

そんなある夜のこと、クロームとティアナが海岸線まで散歩に出たとき

二人の前に、予期せぬ人物が現れた。

次回、次元の破壊者・・・「催眠めいみんの始まり」

二人は・・・既に催眠に堕ちて始めていた。

## 第76話：催眠（ゆめ）の始まり

一護のボイコットから早くも一週間が過ぎた。

ツナ以外のメンバーは着実にフロントの仲間と共にコンビネーションプレーや新技の開発を順調に進めていた。

一護のほうも、真之介によって独自の訓練を受けていた。

だが、ツナだけは一向に虚化の保持が伸びず、行き詰った様子だった。

ツナのストレスと不安だけが大きくなるだけだった。

その日の夜、一護は自室に戻って休もうと廊下を歩いていると、一護を待っていたかのようにリボンが腕を組んでいた。

「よう、どうしたんだよ？」

「ちょっとな……一護、ツナの様子はどうだ？ツナは未だにボイコットをしたお前の考えが分からないままだぞ。」

「こればかりは……ツナ自身が一人で分かってもらわないといけないんだ。例え、カテキョーのお前の頼みでもな」

「俺は別に……ボイコットを止めるとは言わねえ。寧ろお前の判断は間違いじゃねーと思ってる。」

「リポーン・・・お前・・・」

リポーンは一護にそう言うと、一護の肩を足場にして地面に着地して、背中を向けたまま去り際にこう言った。

「俺も自分のことで今は忙しいから・・・一護・・・ツナのことはお前に任せる。」

「・・・ああ・・・」

そう言うと、一護とリポーンは暗い廊下を背を向けたまま歩いていった。

そして、次の日の夕方、訓練付けの毎日は流石に身体に悪いというアイゼンハウアーの提案で、ほとんどは午後の修行をいつもよりも2時間ぐらい早く終えた。

その後、各メンバーは自室に戻って休養を取ったり、違うメンバーと交流を取ったりしていた。

だが、ツナだけは頑なに修行を止めることなく中庭にずっといた。

一護はそんなツナを、見えないところで黙って見ていた。

それとは対照的に、ティアナは一度この世界の海が見たいという要望があつて、真之介に渡された地図をもとに夕日が光具合が一番綺

麗な海岸線に来ていた。

手すりに掴まりながら、ティアナはその光景に見とれていた。

「綺麗……どこの世界でも……やっぱり夕日って綺麗な  
のね……」

すると、そんなティアナの前に意外な人物が現れた。

後のほうで気配を感じてティアナが警戒し振り返ってみると、おどおどした様子で後をつけてきたクロームが立っていた。

「く……クロームちゃん！？脅かさないですよ。」

「……」

「謝ることないわよ。ほら、こっち来なさいよ……ホラ。」

ティアナに優しくそう言われると、クロームもお言葉に甘えてティアナの隣に立った。

修行を重ねるたび、同じ幻術を使うもの同士、何となく惹かれあっていたのだった。

そして、二人は徐に沈んでいく夕日を眺めた。

「夕日ってさ・・・私、なんか見てると凄いい心にくるっていうかさ・・・なんか凄くほのぼのするっていうのかな？あと、この世界の夕日ってね・・・私達のもといた世界によく似てるんだ。そう・・・まだ六課で訓練付けの毎日をしていたあの頃ね・・・」

「・・・ティアナ・・・さん？」

「いや、実はね・・・私今でこそ執務官っていう役に就いてるけど、昔は本当にどうしようもない甘ったれでさ、六課にいた頃につまらないミスショットをしたがために、スバルや他の皆にすっごい迷惑かけちゃってね。私ってさ、自分でも時々嫌になるくらい神経質でさ、それが裏目に出てなのはさんにはうんと厳しく叱られちゃってね。でも、あの時なのはさんが叱ってくれなかったら、今の私はここにはいないと思う。あっ、ご免ね！一人勝手にだらだら喋って！！ねえ、クロームちゃんにも、今の私があるのはこの人のお陰だっという人・・・いる？」

すると、クロームは顔を少し赤らめたあと、そのままの状態ですぐに口を開けた。

「・・・六道・・・骸様・・・」

「え？む・・・むくろ・・・！？」

ティアナは聞き慣れない人物の名を口にされ、少々戸惑いを抱いた。すると、クロームが説明を شدした。

「私の・・・命の恩人・・・。小さい頃に交通事故で内臓の多くを失った私に・・・骸様は幻覚で内臓機能を延命してくれた。今も骸



様の幻覚があるから、私はこうして生きていられる・・・だから、私にとって骸様は私の全て・・・」

「・・・そっか。じゃあ・・・その人のためにも、もっと強くなつて頑張ろう。早くこんな事件は解決して・・・元の世界に戻るようにね・・・」

「・・・ティアナ・・・さん・・・」

そう言うと、二人はお互いを見合つて心の底から笑い声を上げた。

クロームはそこまで大きな声を出さなかったが。

その時だったー・・・

二人が笑っていると、黒コートを着て革靴のようなものを履いた君の悪い男が近付いてきた。

「・・・随分と楽しそうだね・・・やはり素は女の子というところか・・・」

二人は左横を急いで見てみた。

黒いコートを着たその男は、気味悪い笑みを浮かべティアナとクロームを見続ける。

そして、男に警戒をしながらティアナが強い口調で尋ねる。

「ちょっと！あなた一体なんなの！？私達に何か用！？」

「おっとこれは失礼・・・気分を害してしまったようだね・・・何、大したことじゃないさ。私はただ・・・」

そう言うと、男は黒コートを徐に脱ぎ捨てるとー・・・

腰から緑色の柄をした日本刀を取り出し、抜き始めた。

「君達の実力を測りに来たただだよ・・・ティアナ・ランスター・・・クローム髑髏・・・」

二人は自分の名前を知っていて、尚且つ刀まで抜いてくるこの男から大きく距離を取って、ティアナとクロームは直ぐにクロスミラージュと三叉槍を取り出し警戒した。

「あなた・・・私のことを知ってるってことは・・・ひょっとして例の『<sup>アスタ・ファキ</sup>終末』って奴！？」

「ほう・・・そこまで知っているとは、流石だね・・・そう、私は『終末』・・・十二使徒の一人・・・」

そう言うと、男は徐に右の腕をまくと・・・ローマ字で『？』と書かれた腕を見せ、こう言った。

「クイント・エルトウダ第5使徒……オベージヤ・ネロ……」

「クイント……」

「エルトウダ……!?!?」

## 第76話：催眠（ゆめ）の始まり（後書き）

### 次回予告

ティアナとクロームの前に現れた新たな十二使徒・・・オーバー  
ジャ・・・

不気味な雰囲気を漂わせるオーバージャに、今までの修行の成果を見  
せるために戦いを挑む二人

だが、それをまるであしらうかのように刀を解放するオーバージャ。

不利な状況に立たされ、ピンチに陥る二人に・・・あの男がやって  
くる。

次回、次元の破壊者・・・「骸、来る！」

みんな、死ぬ気で見るよ。

## 第77話：骸、来る！

ティアナとクロームの前に現れた、第5使徒・オベージヤ。

ティアナとクロームはオベージヤから出される途轍もない殺気と威圧に身体がどうかしそうになっていた。

それでも、ティアナは冷静にオベージヤの様子を窺がう。

「（何て殺気と威圧感……！！こいつが、この間の終末の一人・クイントつてことは……つまり5番目。それって、十二人の中で5番目に強いってことなの！？それとも、5番目に使徒になってことか！？いずれにしてもよくわからない。でも……ここで倒しておけば、間違いなく敵戦力は確実に一人削れる！私とクロームちゃんならやれる！そのために、この一週間ずっと修行してきたんだから！）」

ティアナはそう心の中で決めると、後ろで武器を取って構えるクロームに指示を送る。

「クロームちゃん！早速修行の成果見せるわよ。『フォーマーシヨ  
ン・F』！……」

「……はい！」

そう言うと、ティアナはフェイク・シルエツトで無数の自分を作り出した。

そして、クロームはティアナの作り出した幻術に霧のボンゴレリングの力を加え、全てを実体を持った有幻覚に仕立て上げた。

「ほう……これほどの数の有幻覚を作り出せるとは……やはり君達は素晴らしい。」

「褒めても何もでないわよ。」

そう言うと、無数のティアナは高く飛び上がりクロスミラージユを物理破壊設定とした状態でシュートバレットをオベージャ目掛け発射する。

「シューーーーーーシューーーーーー!!!」

霧の構築作用で究極にまで高められたティアナの有幻覚から発射されるシュートバレット。

だが、オベージャは慌てた様子もなく高速移動で全弾を回避する。

地面に着地したティアナ達はオベージャを逃がすまいと直ぐに身体をよじる。

「逃がさないわよ!!!」

ティアナ達の銃弾がオベージャに全て照準が合わせられ発射される。

だが、オベージヤはそんなティアナを弄ぶかのように高速移動でかわし続ける。

その様子に、ティアナの怒りは燃え上がる。

「く!!ちよこまかちよこまかと逃げ回らないでよ!!」

「何を熱くなる必要がある？私を打ち抜くのなら、もっと冷静にならないと駄目だよ。それでは、君のお兄さんが教えてくれた精密射撃も、まるで無駄になる。」

「あなたなんか・・・私の兄さんのことを語ってほしくなんかないわよ!!!!」

ティアナの堪忍袋がとうとう切れた。

ティアナは冷静さを失いかった端から有幻覚の自分と共にオベージヤ目掛け乱射を続けるが、冷静さを失ったティアナの銃弾をかわすことなど、彼にとって造作も無いことは間違いない。

「・・・やれやれ、少しお灸をすえる必要があるようだな・・・」

そう言うと、オベージヤは刀を下に向けてゆっくりと回転し始め、解号を言った。

「水天逆巻け……『ねじばな掬花』」

すると、オベージヤの刀が解放に伴い三叉の槍状に変化した。

ティアナとクロームはそれを見て直ぐに気付いた。

「刀が……変わった……!?!?」

「まさか……斬魄刀!?!?」

「さあ……お仕置きの間だよ。」

そう言うと、オベージヤは片手首を軸に掬花を回転させ、槍撃の波  
濤で全ての有幻覚のティアナを圧碎した。

これには、流石の二人も驚愕した。

「そ……そんな!?!?」

「私達の作り上げた幻覚が……一瞬で……!?!?」

すると、オベージヤは掬花を直ぐにもとの刀に戻した。

そして、また違う種類の始解を解放した。

「起きろ『べにひめ紅姫』」



オベージヤの刀は能力解放と共に鍔の無い短めの直刀に変形した。  
ティアナとクロームは数種類の始解を使いこなすオベージヤに衝撃を受けた。

「そんな！？斬魄刀の解放が複数存在するなんて聞いてないわよ！  
！」

「知らなくても当然だよ。これは『複製斬魄刀』コピーさんほくとうと言ってね、様々な死神の斬魄刀の始解・卍解を自由に使うことのできる我々の武器だ。最も・・・オリジナルほどの能力が発揮出来ないのがネックだけどね。けど、それでも君達と遊ぶ分にはこれで、充分だ。啼け『紅姫』！」

そう言うと、オベージヤはティアナに向けて離れた敵に紅い斬撃を飛ばす技、『紅極破』ニギハクハを飛ばしてきた。

咄嗟のことで反応が遅れるティアナ。

すると、クロームがティアナの前に立ち、有幻覚の盾を作りティアナを攻撃から守ろうとした。

「クロームちゃん！！」

「だい・・・じょう・・・ぶー！！！！」

クロームは決して大丈夫など無かった。紅極破の威力が自分でも思っていた以上に協力で、有幻覚の盾を容易に破壊するほどのものだった。

そして、盾に輝が入り破壊されると、二人は直撃は避けたものの、技の威力で後方に飛ばされてしまった。

ティアナとクロームは傷だらけになりながら決して諦めず立ち上がるようにする。

「ほう……まだ立ち上がる力が残っているのか？大した精神力だ……だけど、君達の有幻覚は私には効かないと身を持って知ったはずだよ。それでも諦めずに向かってくるとは、ある意味愚かだよ。」

「……うっさいわね……昔から私は勝負は勝つまでやるものなの……それに、ここであんたを倒せば……みんなの負担が減るじゃないの……」

「……ボスや……みんなに……少しでも負担を軽くしたい……だから……私は負けない！私とティアナさんの幻術は……あなたなんかには破られたりしない！！」

クロームが芯の籠もった言葉を吐いたそのときだった。

突然、聞き覚えの無い青年の声が聞こえてきた。

ティアナは何処から聞こえてくるのか分からないその青年の声を必死で追った。

一方、クロームとオベージヤはその声を聴いた瞬間、うれしさのあまり心臓の鼓動が早まるのを感じた。

「おお・・・この声はまさしく！！！！」

「・・・骸・・・様・・・！？」

すると、クロームの身体から藍色の霧が立ち込めた。

ティアナがそれを見て驚愕する。

「な・・・何なのこれ！？クロームちゃん！？」

ティアナの理解が行き届くことも間もなく、クロームの全身は藍色の霧で完全に覆われた。

そして、徐々にその霧が晴れていくと、ティアナは驚愕した。

その霧の中にいたのはクロームではなく、同じ髪型で同じ武器をもったティアナよりも少しの背の高い青年が現れた。

「な・・・！？クローム・・・ちゃんじゃない！？あなた・・・一体誰なの！？」

「クフフ・・・そう動揺する必要はありません、ティアナ・ランスタール。あたたなや今回のことは全て・・・クロームから聞いておられますよ。」

「あ・・・あたしの名前・・・知ってるの！？それに今回のことまで、あなた本当に一体！？」

「おっとこれは失礼。自己紹介が未だでしたね・・・僕の名は、骸・・・六道骸。クロームのもう一つの姿・・・とでも言っておきましょうか・・・」

骸の名前を聞いたティアナは、その瞬間クロームが言っていた人物の名前を思い出した。

「そ・・・それじゃあ・・・あなたが・・・六道骸！？」

「おや？どうやらクロームから名前だけは聞いていたみたいですね。聞けば、あなたはクロームも一目ほどの幻術使いだと聞いています。さて・・・ご挨拶はこのくらいにして、そろそろ行きましょうが・・・ティアナ・ランスタール。」

「えっ！？あ、分かったわ。あなたがどれくらいの能力使いかは知らないけど・・・クロームちゃんが命の恩人って言ってたってことは、多分いい人なんでしょうね。」

「クフフ・・・それはどうでしょう？僕はこう見えてかなりの極悪人ですよ・・・」

クロームが骸に変わったことで、戦況は一変するのだろうか。

不適な笑みを浮かべ続けるオベージヤと骸。

この勝負、果たしてどんな展開を見せるのだろうか……

## 第77話：骸、来る！（後書き）

### 次回予告

ついに、クロームに変わって骸が登場してきた。

ティアナとの連携で、再びオベージヤに挑んでいく二人と・・・骸を待ち望んでいたとばかりに戦いを愉しむオベージヤ

骸の六道輪廻と幻覚、ティアナの銃射撃と幻覚の組み合わせは

オベージヤには何処まで通用するのだろうか？

次回、次元の破壊者・・・「究極の幻術」

みんな、正解して見ろよ。



そう言うと、オベージヤは一度複製斬魄刀を解くと、通常の刀のままで戦おうとした。

「いきますよ、ティアナ・ランスター・・・僕が彼を引き付けるときですから、その間にあなたは隙を見て精密射撃をしてください。よろしいですか？」

「オツケイ。任せといて！あいつに思い知らせてやる・・・兄さんが教えてくれた精密射撃が、どれ程のものなのか。」

「クフフ・・・では、頼みましたよ。」

そう言うと、骸は右眼の『六』と書かれた数字を『四』と変えた。

すると、右眼から闘オーラ気を出し、そのまま全速力で三叉槍を持ってオベージヤに攻撃を仕掛けに行った。

「まずはほんの肩慣らしからですよ・・・」

そう言うと、骸は三叉槍でオベージヤに攻撃を開始した。

オベージヤは不敵な笑みを浮かべたまま複製斬魄刀で槍の攻撃を向けとめては軽く流していく。

その光景がティアナの目には途轍もないものに思えた。

「ほう・・・大した棒術だな。一体何処でそんなものを覚えたんだ。」



「確か君は、復讐者ヴァインテイチェの牢獄に囚われているはずだと思っただが……」

「クフフ……確かに、僕の実体は未だあの退屈な牢獄の中ですよ。しかし、クロームの身体を媒介にすることで僕も実体化することが可能なんです。それに、この戦闘能力スキルは生まれる前に身につけたものですよ。」

骸の発言を聞いたティアナは訳が分からなくなった。

「えっ？生まれる前って……それじゃまだあなた赤ちゃんにもなっていないじゃないの……」

すると、それを聞いた骸がクフフと笑ったあとティアナに向ってこう言った。

「クフフ……『六道輪廻ろくうりんね』……という言葉をご存知ですか……？」

すると、骸の質問に対して戦いの最中にもかかわらずオベージヤが返答する。

「仏教用語の一つだ。衆生は死後、単純に黄泉の国に行くのではなく……それぞれ、地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人間道・天界道という六つの世界で生き死にを繰り返す様をいう言葉だ。」

「クフフ……流石ですね、オベージヤ。君の博識なところに感服しますよ……如何にもそうです。僕の右眼には前世に六道全てを回った記憶が焼き付いている。今のは、僕自身の格闘能力を上げる『修羅道じゆらどう』。舐めてかかると怪我をしますよ。」

すると、骸は三叉槍にボンゴレリングから霧属性の炎を灯し、先程以上の速度で攻撃を続ける。

「大したものだな・・・その自慢の格闘スキルがそれほどまでのものなら・・・証明して見せるがいい・・・」

「クフフ・・・どこまでも減らず口ですね・・・オベージャ・・・」  
そう言うと、骸の右眼が今度は『三』と表記されると、何処から湧いてきたのかは知らぬが、突然獰猛な生物達が次々に出現しオベージャの四肢に噛み付く。

「これは!?!」

「クフフ・・・相手を死に至らしめる生物を召還する『畜生道』。霧の構築作用で強化していますから、痛みは通常の数倍がありますよ・・・さあ、今ですよティアナ・ランスター!」

骸がそう言うと、無数の有幻覚のティアナがオベージャの頭上高くでクロスミラージュを構え、発射しようとしていた。

「インフィナイト・クロスファイアー! シュー! シュー! !!」

無数のクロスミラージュから撃たれる無限のクロスファイアーシュー! シュー!

骸は素早くその場から回避してティアナの銃弾に当たらないようにした。

畜生道で身体を自由を奪われ動くことの出来ないオベージヤに容赦なくティアナの攻撃が豪雨のように降り注いだ。

それは、まさしく剣林弾雨の光景そのもの。

ティアナは全弾命中の手ごたえを実感すると、有幻覚を解いて一人になり、骸の傍までやった来た。

「やったかしら・・・!？」

「いえ・・・この程度でくたばる男とも思えませんよ・・・」

そして、立ち込める土煙が晴れると骸の読みどおりの結果となった。

オベージヤは四肢には流石に畜生に咬まれた傷があったものの、ティアナの弾丸は瞬時に自分の周りに結界を施し殆ど攻撃を食らっていないかった。

「くっ！やっぱりそう簡単に倒させてはくれないようね！」

「そのようですね・・・」

そんな二人をあざ笑うかのように、オベージヤは軽く血をぬぐった後、二人に複製斬魄刀を下向きにして見せつけた。

ティアナとクロームはこの不可解な行動に警戒心を覚えた。

「なかなか愉しませてくれるじゃないか、二人とも。そうこなくてはいたぶり甲斐がない。」

「何ですって!!」

「クハハハ!! 実に不愉快なことを言いますね・・・我々をいたぶる? 言葉を慎んでください、オベージヤ。」

「おっと、これは失言だったか。注意するよ・・・けど、そろそろこちらまで遊びから授業の時間に移りたいんでね、ここからは気をつけてくれよ・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

すると、オベージヤは二人には聞こえないような小さい声で複製斬魄刀を解放した。

すると、ボロボロとなった地面から突然輝が入り、そこから巨大な竜巻がオベージヤを囲むように出現した。

「なんて奴・・・解号も言わずに解放できる訳!?!」

「クフフ・・・面白いですね。これが複製斬魄刀の力ですか・・・いいでしょう、受けて立ちましよう。」

そう言うと、骸はボンゴレリングに炎を灯すと、霧のボンゴレ匣に注入した。

中から出てきた霧フクロウVer. V（グーフォ・ディ・ネツビアバージョンボンゴレ）、ムクロウを直ぐさま形態変化させる。

「ムクロウ・・・  
カンビオ・フォルマ  
形態変化」

骸に指示に従い、ムクロウはD・スペードの魔レンズに変化。

骸はすぐにオベージヤが出現させた竜巻の正体を探り始める。

すると、骸は冷静な口調でティアナにこう言った。

「どつやら・・・あの竜巻は彼の霊圧で作り出された実体ですね。触れたものは如何なるものも切り刻み、粉碎する。そういう能力らしいですね。下手に近付けば、それこそ木っ端微塵です。」

「あいつ・・・厄介なもの出してきて!!」

「そう怒る必要もありませんよ、ティアナ・ランスター。僕と君のコンビネーションなら、あの程度の攻撃など、取るに足りません。僕に考えがあります・・・耳を隠してくれませんか？」

すると、骸はティアナにある一つの提案をした。

ティアナもそれを素直に聞き入れた。そして、魔レンズをつけたま

まの状態で骸はオベージヤへ突進していった。

オベージヤはそれを見るなり骸目掛け竜巻で攻撃する。

「血迷ったか・・・六道骸。自ら死を選んだか！」

竜巻が容赦なく骸に襲い掛かってくる。果たして、骸の運命は如何に？

## 第78話：究極の幻術（後書き）

### 次回予告

ボンゴレ匣の力によって、敵の正体を見破るだけでなく、強力な幻覚を作り出す骸。

そして、ティアナと連携によって・・・霧の真髓を基調とした攻撃でオベージヤを翻弄する。

やがて、霧の真髓に頭が混乱し万事休すとなるオベージヤ・・・

だがそれは・・・思いもよらぬものとなる。

次回、次元の破壊者・・・「催眠ゆめの終わり」

骸とティアナが最後に見たものとは・・・

## 第79話：催眠（ゆめ）の終わり

D・スピードの魔レンズをつけたままオベージヤの竜巻に突進していく骸。

オベージヤはそんな骸を嘲いながら竜巻の攻撃を仕掛ける。

「さあ・・・消えて鎮まれ、まやかしが!！」

オベージヤの声に従い、殺傷能力を持った竜巻の攻撃が骸目掛け飛んでくる。

しかし、骸は焦り一つ見せずそのまま突進し続ける。

そして、不敵な笑みを浮かべこう言う。

「クフフ・・・同じ様な台詞を十年後の世界でも聞いたとクロームから報告を受けています。同じ台詞をはかれるのは・・・流石の僕も少々飽きてしまいますよ・・・」

すると、骸に襲い掛かる複数の竜巻が突然何かによって動きを封じられた。

「なっ!?!？」



「なっ・・・あれは!？」

二人が驚愕するのも無理はない。

襲い掛かる竜巻の動きを止めたのは、先程までこの場にはいなかったものなのだから。

外見は、骸と同様の黒陽の制服に身を包んだゴリラの容姿をした男だった。

「ううう・・・コングチャンネル!！」

「何だそいつは!？一体何処から湧いて出てきた!？」

「クフフ・・・彼の名前は城島犬です。同じイタリアの刑務所からともに脱獄をした僕の古い付き人・・・とでも言っておきましょうか。今あなたが見ているのはD・スピードの魔レンズの能力によって僕自身の記憶から再現した実体です。勿論、それは有幻覚にとどまりますがね。」

「す・・・凄い・・・。これが六道骸。クロームちゃんが言って通り・・・幻覚を意のままに使いこなしている!」

骸の幻覚の使いっぷりに心底感服するティアナ。

そんな骸の作り出した有幻覚である城島犬を見て、親指を噛んで悔しがるオベージヤ。

「（くっ！ま・・・またしても幻覚如きに私の技が遮られた。バ、バカな・・・脳の記憶をそのまま幻覚として実体化させるなど・・・そんなことが可能だというのか！？）」

すると、竜巻を受け続ける犬の顔に微かだが切傷のようなものが入った。

すると、オベージヤはそれを見てあることに気付きほくそ笑んだ。

「ん！？そうか・・・そうか・・・そうか！！ははははあははは！何故かは分らんが、どうやらその男は有幻覚同様に実在していると認めたほうがいいだろう。だが、リアルすぎる故に当初の有幻覚同様実物以上の力が出せないことが致命的な欠陥らしい・・・」

「なっ！？」

ティアナはオベージヤの発言に驚きを隠せないでいた。

あの骸が作り出した幻覚の仕掛けをこつも簡単に見破られるとは思ってもいなかったのだから。

「余計なことを考えずに・・・頭数の増えた三人の子供を潰すと考えたほうが、手っ取り早いと見た」

「ほう・・・まただ。十年後の世界でクロームが戦ったグロキシニアという男同様、君の常識に縛られない対応能力には、驚くばかりですよ・・・オベージヤ。」

「常識だと！？我々『終末』には最初からそんなものはない。常識はこれから次元の破壊者様を作り変えるのだ。俗世間の常識を持ち合わせたところで無意味というもの。それに、常識に縛られるということは・・・自ら殻に閉じこもり快感を妨げることと同じだ。」

「クハハハ！君はどうやらグロキシニア同様・・・存外術士向きかもしれませんね・・・クハハハ！（ティアナ・ランスター・・・）」

「えっ!?!」

すると、ティアナの頭の中に突然念話で骸の声が入ってきた。

「（そろそろ作戦を始めますよ・・・準備はよろしいですか？）」

「（あっ・・・はい！わかったわ・・・こっちは何時でもいいわよ）」

「（わかりました・・・では、攻撃力を集中させて・・・一気に叩きます。）」

そう言うと、骸は右眼の『六』を『四』に変えてD・スペードの魔レンズの力によりもうひとりの人物を召還した。

それは、犬同様骸の付き人であり、気だるい表情をいつも見せる柿本千種であった。

そして、骸の念話を聞いていた犬も千種も骸の提案に応答した。

「オーケーびよん!!」

「……いくよ……」

そう言うと、千種はオベージヤに向かって走り出した。

そして、高く飛び上がると持ち前の遠隔操作武器「ヘッジホッグ」という側面から毒針を放つ刃物状ヨーヨーを操り、オベージヤに攻撃を仕掛ける。

オベージヤはそんな千種の攻撃を軽く竜巻であしらった。

「やはり容易い……六道骸……」

「それはどうでしょう?」

すると、骸が隙を突いてオベージヤの正面まで入り込み三叉槍で攻撃を仕掛ける。

骸の攻撃を複製斬魄刀で受け止め、払い続ける。

「芸のない!まだその格闘能力で私を倒すつもりか、六道骸。」

「クフフ・・・おや？君は言いましたよね・・・その格闘能力がそれ程のものなら、証明して見せろと。だから僕はその証明をしようとしているだけですよ、オベージヤ。」

「そうだったな。私としたことが、ついさっき言ったことをすっかり忘れていたよ。だが、貴様たちが四人で気張ったところで・・・この周囲の竜巻の数は十個。おつりが来る！」

確かにオベージヤの言うとおり、竜巻の数は十個。

悉くティアナのクロスファイアーシュートも、千種のヨーヨー攻撃も、犬の攻撃も思い通りにはオベージヤに届かず竜巻に遮られてしまふ。

そして、竜巻の一つが攻撃の間をすり抜けティアナに牙を向けて来た。

「行つたよ、ティアナ！」

千種が直ぐにティアナに向けて警告を発するが、ティアナの防御は完全には間に合わず、左腕に酷い深手を負ってしまった。

ティアナは痛みを必死で抑えながら苦い顔をしてその場にしゃがみ込んだ。

「ティアナ・ランスター・・・無事ですか？」

オベージヤの竜巻を三叉槍でガードしながら、ティアナの怪我を心

配する骸。

「ええ……これくらい……どうってことないわ……!!」

ティアナは腕から出る血を抑えながら必死で平静を装う。

それを見たオベージヤは興奮する。

「う~~~~んそそるぞ、ティアナ・ランスター!!」

「うるさいわねっ!! 気持ち悪いこと言わないでよ、この変体!!」

「クフフ……変体とは、実にいい響きですね……だが、あまり  
そう長く時間をかけるわけにもいかなりましたね……千種。」

「はい、骸様……行くよ、ティアナ……めんどいけど……」

千種はそう言うと、眼鏡を一度直す。ティアナもそれに応答する。

「……了解……いいわよ……」

ティアナがそう答えると、千種は黙ってオベージヤの元へ突撃して  
行った。

犬も竜巻を両腕で押さえながら千種に一言をかける。

「行ってらっしゃーい!!」

千種は再び高く舞い上がると、攻撃を仕掛ける寸前に骸の力により二人に分身をする。

「はっ！自棄になったか。余力で作ったたかだか二人程度の幻覚分身を見分けられぬと思ったか！実体はこっちだ！」

オベージヤは飛んでくる実体の千種のヘッジホッグだけを竜巻で防御し、幻覚の千種には見向きもしなかった。

「下らん！うっ！！」

すると、左腕には確かに防御したはずのヘッジホッグが突き刺さっていた。

そのとき、オベージヤは直ぐに確信をした。

「（幻覚に実体の針を潜ませたのか！？）」

すると、攻撃のためにオベージヤ向かってくる骸がこう言った。

「恥じることはありません・・・その昔、ボンゴレもグロキシニアという男も引つかかった手だ。」

「（この六道骸は・・・幻覚ではなく実体！？）眠れ！！」

二つの竜巻を同時に骸に仕掛けるオベージヤ。

しかしながら、それは幻覚だった。

「（なっ！？実体から幻覚に！？）うっ！！！」

すると、自分の左目に突然走る目を貫く激痛。それは実体であるティアナの銃弾だった。

「（銃弾！？本物の銃弾！？今度は、骸の幻覚に潜ませティアナから撃ち出された本物の銃弾！？）ええい！！はっ！？」

すると、そんなオベージヤの隙を見て多数に分身をした千種が攻撃をしようとする。

「次こそ幻覚！！（の筈！？）」

「だが・・・顔面を走る激痛が、実体かもしないという疑念を増幅させる。」

千種がそう言うと、無数の千種の針がオベージヤへ飛んでくる。

「防御だ！」

オベージヤの指示に従い針を防御しようとするが、防御の直前で針が全て消える。

「あつ、消えた！？」

「無駄！それは幻覚よ！！」

ティアナが腕を押さえながら立ち上がりそう言うと骸の不敵な笑い声が耳に入ってきた。

その声を聞いて焦りを見せるオベージヤ。



「クフフ・・・幻覚。有幻覚。幻覚に潜む有幻覚。有幻覚から生まれる幻覚。真実の中に潜む嘘。嘘の中に潜む真実。これが霧！」

すると、骸が防御をかくぐりオベージヤの正面にやってきた。

「（何時の間に！？ここでは防御が間に合わん！）」

「君の不幸は・・・術士の力を見誤ったところですよ。思惑通り、君は僕の立てた幻覚のサイクルの中で翻弄し、君を倒すことが出来た。所詮、十二使徒といつても僕と彼女の前では手の中で踊る道化でしたな」

「おのれー！！！！」

そして、骸の攻撃がオベージヤに直撃し決着がついた、かに思えた。

しかし、現実はずっと違っていた。

骸とティアナの腹部は刀で斬られ血を噴出していた。

これには流石の二人も驚きを隠しきれずにいた。

そして、徐にその場へ倒れこむ二人を嘲うかのように先程受けた傷など何処にもないオベージヤが不敵な笑みを浮かべこう言った。

「な~~~~んてね~~~~」

骸とティアナは着られた箇所を手で押さえ、汗だくになりながら才

ベージャを睨み付ける。

「ど………どういう………ことですか………!?」

「君は言ったな。術士を見誤るなど。だが、それは君たちのほうだよ……君たちはまんまと私が仕掛けた”術”に堕ちていたんだよ。」

「術……ですって……!?」

「君たちはあの時、一体誰に攻撃を仕掛けていたんだい？」

すると、オベージャは右手に突如同じ自分の人形を手に出現させた。そこには確かに骸の攻撃の痕とティアナの攻撃の痕がすっかり残っていた。

これには骸もティアナも目を疑った。

「……!」

「……い……いつの間に……!」

すると、そんなティアナの愕き方を見たオベージャは不思議がるように同じことを繰り返した。

「……何時の間に？」この手に持っていたさ。さっきからずっとね。ただ……今この瞬間まで私が”そうみせようとはしていないかった

”だけのことだ。”

「……………!?!?どういう意味です……………!?!?」

「直ぐに分かるさ。そら……解くよ。砕ける 『鏡花水月』きょうかすいげつ」

その瞬間、オベージヤの周囲を囲んでいた竜巻と攻撃を受けた人形はまるで鏡が割れるかのように砕け散り、元いた景色に戻り手に持つ人形も普通の複製斬魄刀に戻った。

この光景を目撃した骸とティアナは目を疑った。

特に、幻術使いの二人ならなおさらだろう。

そして、オベージヤは徐に手を放し刀を地面に突き刺した。

「この斬魄刀の名は『鏡花水月』。私のお気に入りだね……有するの能力は『完全催眠』かんぜんさいみんだ。」

「完全……催眠……!?!?」

「くつ……! 僕としたことが……」同じ幻覚”でまんまと引つかかるとは思いませんでしたよ……」

すると、そんな骸の発言を聞いたオベージヤはまたも不思議がった様子で骸の言葉を復唱する。

「同じ幻覚？」 そんな陳腐な言葉で片付けられる代物じゃないんだよ、こいつはね。鏡花水月の『完全催眠』は五感全てを支配し、一つ対象の姿・形・質量・感触・匂いに至るまで全てを”敵”に誤認させることが出来る。つまり、蠅を竜に見せることも、沼地を花畑に見せることも可能だ。」

「なっ！？ そんな・・・莫迦な・・・！？」

ティアナはその発言を聞いても、未だに納得することが出来なかった。

それは骸も同じだった。

「”幻覚”などという言葉で済ませるには高尚な力なんだよ。そして、その発動条件は・・・敵に鏡花水月の解放の瞬間を見せること。一度でもそれを目にしたものはその瞬間から完全催眠に堕ち、以降私が鏡花水月を解放するたび完全催眠の虜となる。」

「一度でも・・・目に・・・！！」

骸はそのときあることを思い出した。

それは、態々オベージヤが自分達に対して刀を向け、聞こえない声で刀を解放し竜巻を起こしたことだった。

「あれは・・・まさかそのための・・・！？」

「御名答。流石は六道骸・・・頭の切れが違うな。ティアナ・ランスターも奮戦してくれたようだが、どうやら授業はここまでのよう

だ。殺しはしないがそこで苦しみを味わうがいい・・・さようなら・・・私からの最高の”催眠”を骨の髄まで愉しんでくれたまえ。」

そう言うと、ティアナと骸は気がつかないうちにオベージヤに肩を斬られ、血を噴出した。

そして、二人は驚く事もままならぬうちに出血多量でその場に倒れ込み、動かなくなった。

骸は意識を失うと直ぐにクロームへと変わった。

だが、骸が受けた傷はそのままクロームにも伝わり、クロームも意識を失い出血多量の状態となった。

そして、そんな二人を一瞥してオベージヤは暗がりの海岸線の中に消えていった。



## 第80話：衝撃と現実

ティアナとクロームがオベージヤによる強襲を受け、無惨にも敗北したとは露知らず、一護達は食事の時間になっても戻ってこないティアナ達に不満を抱きながら、三人以外の全員はテーブルに座り待ちくたびれていた。

「おっせーな、あいつら！一体何処まで散歩に行きやがったんだよ！」

「たつくー！これだから女って奴はー！」

一護が頭に両腕を組んで文句を言うと、それに便乗して迎え側に座っていた獄寺も同じように不貞腐れる。

「ティアつたら・・・晩御飯の前には帰るって言ったのに？」

「何か事件に巻き込まれてないといいんだけど・・・それに、クロームちゃんも居ないみたいだし。」

なのはがそう言うと、全員は一度クロームの席に目を向けた。

「そうですね・・・クロームちゃんも一体何処に行っちゃったんでしょうか？」

「うん・・・もしかしたらティアナさんと一緒に居るのかもしれないね・・・それより・・・」

京子が悲しい目でそう言うと、全員は一護の隣の席のツナの席に眼を向けた。一護は溜め息をついた。

「たく！飯の時間だっていうのにまだ修行やってんのかよ・・・しようがねえ、俺が・・・」

「ああ待つてくれ、一護君。ここはわしが呼んでくるわい。」

すると、椅子から立とうとする一護をアイゼンハウアーが呼び止め代わりに自分が行くと言い出した。

「おっ、そうか。だったらお願いするぜ！」

「ああ・・・じゃあ、ちょっと行ってくるわい。」

そう言うと、アイゼンハウアーは机に立てた杖を取って中庭のほうまで歩いていった。

アイゼンハウアーが外に出たときには辺りは既に日が沈み暗くなるうとしていた。

そして、アイゼンハウアーが中庭のほうに行くとき目の前には未だに一人で虚化保持の訓練をし続けるツナがいた。

身体は満身創痍だというのに一向に止め様としないツナ。

アイゼンハウアーは複雑な眼差しで見ると、ツナの近くにまで来て一言かけた。



「・・・盛が出るの・・・綱吉君・・・」

すると、ツナもそれに気付きハイパー化を解いてアイゼンハウアーに答えた。

「あっ・・・アイゼンハウアーさん・・・どうしてここに!？」

「夕飯の時間じゃよ。訓練もこの辺にして腹ごしらえをしたほうがいいと思うんじゃないかな・・・」

すると、ツナは緊張の糸が切れたのか急に腹の虫が鳴り出し赤面した。

「はははは・・・はい・・・そうします・・・」

そして、二人はゆっくりと歩きながら今日の修行の成果について話をした。

「どうじゃ、修行のほうは？」

「ええ・・・見ての通り全然駄目ですよ。一護さんも相変わらずボイコットしたままだし・・・多分、修行が一番進んでいないのは俺だと思えます。」

「しかし妙じゃの・・・何故一護君は急に君の修行をしないと行って来たのかね？」

アイゼンハウアーは顎鬚を手でなぞりながら疑問に思った。

「俺にもさっぱりですよ……ただ、一護さんは俺が修行をもう一度してくださいって頼むと……決まってる言っんですよ。『守る』ことの意味が本当に分かるまでは駄目だって……」

「『守る』……か。」

すると、アイゼンハウアーは突然立ち止まりツナにこう言った。

「綱吉君……君はその言葉を聞いたとき、ズバリ『守る』とはどういう意味だと思った？」

「えっ！？俺……ですか？いや……色々考えては見たんですけど、やっぱり”大切な人を守り抜く”ことかなって思ったんですよ。でも、それを一護さんに言ったら……じゃあそれはどう意味かって言われて、益々訳分かんなくなっちゃいましたね。」

「大切な人を守り抜くか……確かにそれも”守る”ことじゃと思うな。だが、それを突き詰めていった先に何が本当の答えかを考えたことはあるかな？」

「え？突き詰めていった先に……！？」

「ああ……わしも嘗て先輩に同じことを言われたよ。こう見えても昔は政府の諜報機関で働いていたんだ。ある時、任務で命がけの戦いから満身創痍になりながらも無事に帰還したとき、わしの先輩と妹に物凄くしかれた。妹は泣きじゃくになりながらわしに抱きついたよ。何で無事に帰還したはずなのに、わしは叱れているんだ？それしたら先輩は言ったよ……お前は『守る』ことの意味を履き違えてると。そのときはわしは漸く気付いた。『守る』こととは、単純

に人を危険から守りぬくことだけでなく・・・”人の笑顔を絶やさぬこと”だと。」

「人の笑顔を・・・絶やさぬこと・・・!?!?」

「ああ・・・つまり言い換えれば、”人を悲しませないこと”一護君はきつと君にそれを分かってほしくてあんなことを言ったんじゃないのかな?」

そのとき、ツナは言われたことをもう一度思い返しながらここ一週間の自分を振り返ってみた。

すると、ツナは思いだした。

あの時、虚化のことや訓練の様子を見せてほしいと京子が言ってきたことを。

だが、自分はそれを自分の気持ちだけを押し通して京子を深く悲しませてしまっていたことを。

「（そうか・・・俺も同じか。自分の気持ちだけを押し通して、京子ちゃんの気持ちなんて全く考えもいなかったんだ。守ることは・・・本当に守るということは、人を悲しませない。そして、常に笑顔を絶やさないこと。俺は自分の中の下らない意地のために、京子ちゃんや周りの皆を悲しませてたんだ。だから一護さんはそれを俺に分かってもらうために・・・態とあんなことをしたんだ・・・俺・・・

・最低だ！！」

すると、ツナはその場に立ち止まりながら悔しさと京子に対する申し訳なさから涙が瀧のように流れてきた。

そんな様子を見て、アイゼンハウアーも徐にツナの肩に手を当て優しくこつ語りかける。

「誰も人の気持ちを見て見通せるほどの心眼など持たぬ。それは君の超直感でも同じことじゃ……だからこそ気持ちをきちんと伝えることは大切なんじゃ。さあ……涙を拭いて。守ることの意味をしつかり理解した”今”の君ならば、一護君も京子ちゃんも他の皆も分かってくれる。単純なものや言葉ほど……難しいものは無いんじゃ……」

「は……はい……（京子ちゃん……一護さん……みんな……ごめんね……俺……漸くわかったよ……本当の意味の『守る』ってことを。）」

ツナは右腕で零れる涙を脱ぎ去り、アイゼンハウアーと共に邸内に戻っていった。

食堂に戻ってきたツナとアイゼンハウアーを見た一護と京子は、ツナの表情を見て不思議に思った。

「ツナ君……顔……どうかしたの!？」

「ああ……傷とかなら分かるけど……なんか涙の痕のようなも

のが残ってるんな……」

「ああ……ちょっと色々ありましてね……京子ちゃん、一護さん……後で話がるんですけどいいですか？」

一護と京子は互いに不思議に思い顔を見合ったが、暫くして二人は微笑みツナに答える。

「うん……分かった。」

「ああ……いいぜ。」

「……ありがとう……二人とも……」

「おいおい……話はこれくらいにして一端飯にしようぜ！ティアナ達はまだ戻ってこないが、待ってたら飯が冷めちまう。二人には悪いが戴くとしようぜ。」

「……そうだね……ティアナとクロームちゃんも時機に戻ってくると思うし先に食べちゃおう。」

真之介の提案になのは達も賛同し、二人を抜きにして全員は食事を戴いた。

そして、夕食後ツナは先に京子に今回のことに関して謝罪をした。

ツナの謝罪を黙って聞いた後、京子は満面の笑みを浮かべありがとう、ツナ君とそれだけを言ってツナに返事をした。

そして、一護にも漸く『守る』ことの本当の意味を伝えてみた。  
すると、一護は鼻で笑いツナにこう言った。

「・・・分かってくれて嬉しいぜ・・・よーーーーーし！明日から  
修行再開だ！！」

「一護さん・・・はい！ありがとうございます！！」

そんな二人の様子を壁によっかかって聞いてリボンも、鼻で笑い  
今回の騒動がひと段落着いたのだと納得した。

なのはもそれを耳にいれ、同じように喜んだそうなの。

そして、数時間が経った午後八時。

未だに戻ってこないティアナとクロームを流石におかしいと思った  
全員は困惑しながら、二人を探しに行こうと話し合っていた。

「ほんなら、ティアナは私となのはちゃんとシグナムが。クローム  
ちゃんは一護君と茶渡君と真之介君で探すことにする。皆は私らが  
探しに行ってる間に二人が戻ってきたら直ぐに連絡をしてくれや。」

「了解。」

「よし、チャド・真之介いくぜ!!」

そう言つて、一護達が玄関を飛び出そうとしたそのときだった。

突然、セクトウーレが外周りから返ってきたが、どうも様子が尋常じゃなかった。

息を切らしかなり深刻そうな表情だった。

「セクトウーレ・・・どうしたんじゃ、そんなに慌てて・・・!!」

「何か見たのか!? ひょっとしてティアナ達でも・・・!?」

すると、一護にそう言われ一息つくと言・・・

セクトウーレは徐にこう言った。

「大変よ!!! 海岸線のほうを見回っていたら・・・血だらけになって倒れてるティアナとクロームが居たわ!!!」

その言葉を聞いた瞬間、全員は一瞬のうちに青ざめた。

そして、全員は急いでセクトウーレに案内されて海岸線のほうへ走っていった。

そして、そこで見たのは・・・

腹部と肩から出血多量で意識を失ったティアナとクロームだった。

京子やハル達は恐怖のあまり目を瞑り、その光景を信じたくなかった。

一護達男性陣やなのはにスバルといった年配組みは、ショックのあまり声を失った。

「な……これは……一体……!？」

「ティアナ……クロームちゃんが……!！」

「一体……誰がこんなことを……!！」

すると、一護とツナとなのはの間を通り抜け悲痛の叫びを上げながらスバルがティアナの元へ駆け寄った。

「ティ……ティ……ティア……!！」

「……!！」

スバルは泣きじゃくになりながら血だらけのティアナの元へ駆け寄り、ティアナを抱きかかえ意識を確認しようとした。

「ティア……!！」  
「しっかりして……!！」  
「ティア……!！」  
「目を開けてよ……!！」  
「ねえ、ティア……!！」  
「お願いだから私の声に答えてよ……!！」  
「ティア……!！」  
「……!！」



スバルの泣き叫ぶ声が、  
静まり返った夜の海にただただ虚しく響き  
渡る。

## 第80話：衝撃と現実（後書き）

### 次回予告

重傷を負ったクロームとティアナを必死の思いで織姫が治療する。

俺たちは織姫の治癒能力信じてただただ祈るばかり……

そして、どうにか命は取り留めることに成功し……目を覚ましたティアナ。

そして、ティアナの口から語られたことを聞いて……一護達は衝撃を隠しきれずにいた。

どうやら……ちんたらしてる時間はそんなないみたいだぞ……

次回、次元の破壊者……「十二使徒の恐怖」

みんな、死ぬ気で見るよ。

## 第81話：十二使徒の恐怖

一護達は直ぐにティアナとクロームを抱いて帰り、アイゼンハアー邸まで運んだ。

二人は急いで井上の治癒を受け始めた。

スバルを始め、一護やツナや他のメンバーも黙って井上の治癒能力を信じて待つことしか出来なかった。

そして・・・三時間後、井上がかなり衰弱した様子で一護達の前に姿を現した。

「井上!!!二人は・・・!?!」

「大丈夫・・・命に別状は無いみたいだから・・・暫く眠っていれば大丈夫だと・・・思う・・・」

すると、井上は意識を失い床に倒れそうになった。

一護は直ぐに井上を支えた。

そして、井上に慌てた様子で話しかけた。

「おい!井上!!!しっかりしろ!!!井上!!!」

「案ずるな・・・力を使いすぎて気を失ってるだけだ。暫く休ませ

「てやってくれ、一護。」

隣に居たルキアがそう言うと、一護もそれに納得して井上を肩に乗せて部屋まで連れて行った。

ツナやなのは達は直ぐにティアナとクロームが寝ている部屋まで駆け寄った。

ティアナもクロームも受けた傷もすっかり癒え、何事も無かったかのようにぐっすり眠っていた。

スバルはその様子に誰よりも安堵した。

そして、徐にティアナの手を握った。

「ティアア……良かった……ほんと良かった……」

スバルは涙を溜めながら眠るティアナの手を優しく握り続けた。

同じように、ツナや京子たちもクロームの手を握って目に涙を溜めながら安堵した。

他のメンバーもそうだった。

だが、真之介だけは浮かない顔をしたままだった。

やがて、一護が井上を部屋まで送り戻ってくると、全員はリビングに集まり静かに二人が目を覚ますのを待っていた。

「クロームちゃん・・・大丈夫かな・・・」

「うん・・・ただでさえ幻覚の内臓で命を取り留めているから・・・多少心配は残るけど・・・」

京子の不安のいっぱいの発言に隣に座るツナが同じ不安を募らせた表情と声色で答える。

すると、ティアナの様子をずっと見ていたヴィータが大急ぎで全員のところに戻ってきた。

「みんな！！ティアナが目を覚ましたぞ！！」

「えっ！？本当ですかヴィータ副隊長！！」

そう言うと、スバルや一護達は全員で押しにかけてティアナの元へ駆け寄った。

そして、スバルは直ぐに空ろな表情のティアナに自分がかかるかなどと質問する。

「ティア・・・私ができる！？自分のことは覚えてる！？なのはさんやエリオ達や一護達のことか！？」

スバルはそう言うとティアナの身体を激しく揺すり意識を確認する。

すると、ティアナは直ぐに我に帰りスバルにきつい拳骨を食らわす。

それを見た全員は心から安心する。

「うっさいわね!! あんたじゃあるまいし・・・覚えてるに決まってるでしょう!!」

「ティア・・・うん!! 良かった!! ホントに良かった!!!!!!」

そう言うと、スバルはよっぽど嬉しかったのかティアナに飛びつき有り余る力できつく抱きしめた。

ティアナは激しく痛がる中、なのは達がスバルに止める様に説得する。

なのは達に説得され慌てた様子でティアナから離れるスバル。

「ご・・・御免なさい!! 私つい!!」

「やれやれ・・・困った相棒を持つとお前も苦労すんな・・・ティアナ・・・」

リポーンがツナの肩に乗りながら皮肉を込めてそう言うと、ティアナも全くと言って肩をならした。

それを聞いた全員は思わず笑い声を出した。

スバルは赤面しながら必死で笑うのをやめるように説得した。

そして、笑いが収まり真面目な雰囲気になると、徐になのは真剣な

眼差しでティアアナに尋ねた。

「ティアアナ……散歩に出て行ってから今に至るまで、一体何があつたのかを……私達にきちんと説明してくれるかな……？」

すると、ティアアナは重い表情を浮かべると暫く沈黙し、そしてなのはに向つて返事をした。

「……はい……」

そして、なのははそれを聞くと一度ヴィヴィオのところまで退き、ティアアナが話し始めるのを待った。

他の全員も固唾を呑んでティアアナの口が開くのを待った。

そして、徐にティアアナが口を開いた。

「今日の修行が終わって、真之介君から貰ったメモを頼りに海岸線まで行って夕日を見ていたんです。途中、私の後を着いてきたクロームちゃんと一緒に、夕日を見ながら楽しく会話をしてたんです。」

「じゃあ……やっぱりクロームはティアアナさんのところに行つてたつてことか。」

山本がそう言うと、他のボンゴレ関係者も納得がいった。

そして、またティアアナの話に耳を傾ける。

「そしたら・・・私達の前に・・・この前来た『終末』の十二使徒の一人のオベージヤって奴に戦いを挑まれたんです」

「何！？あいつらの仲間か・・・！？」

一護がティアナにそう言うと、ティアナは黙って頷いた。

なのは達は十二使徒が現れたという事実を聞かされかなり動揺していた。

すると、真之介がティアナにこんなことを尋ねてきた。

「それで・・・奴はお前らに名前以外のことを何か言っていなかったか？」

「えっ？ああ・・・そう言えばあいつ自分のことを第5使徒クイント・エルトウダーって言ったかな・・・」

「クイント・・・つまり、5番目ってことか・・・」

日番谷が眉間に皺を寄せ腕組みをしながらそう言うと、真之介は深い溜め息をつき話し出した。

「だとしたら・・・お前らホント運が良かったな。」

「ん？それはどういう意味だ！？」

了平が真之介に尋ねると、真之介は全員のほうへ向いて徐に説明を始めた。



「十二使徒には、死神の世界で破面の頭目である『十刃』エスパーダが0から9までの数字を与えられているのと一緒に、それぞれ1から12までの数字を与えられ、身体に刻んでいる。数字の意味は、低いほうから次元の破壊者に対する忠誠心の高さを示し、1が一番高く12が一番低い。そしてそれと同時に、強さの序列をも意味する。1が一番強く12が一番弱い。今日ティアナとクロームが戦った相手は5番目。かなりの上位者だ。戦闘能力は相当なものだった。生き延びただけでもついてるほうだぜ。」

真剣な眼差しで全員にそう言うと、ティアナを始めてとして一護達は顔を凍りつかせた。

そして、真之介が顔を凍りつかせるティアナに向って戦いの詳細を問い詰める。

「それで、てめえとクロームはどうやって戦ったんだ!？」

「うん・・・修行の成果を見せるためにクロームちゃんと特訓したフォーメーションFで攻めたんだけど、あいつは・・・色んな死神の斬魄刀の始解・卍解を自由に使える複製斬魄刀って奴で私達のフォーメーションを容易に崩して、攻撃を仕掛けてきた。」

「コピー・・・斬魄刀・・・だと・・・!？」

一護達死神関係者は今迄耳にしたことも無い武器の名と能力を聞いて耳を疑った。

「ええ・・・最初は『掬花』・・・二つ目が『紅姫』。どれもこれ

も強力な力を持っていた。」

ルキアは掬花という単語を聞いた瞬間、全身を凍りつかせるようなものが走った。

一護も、紅姫の名前を聞いて驚愕した。

石田も恋次も日番谷も茶渡も衝撃的だった。

「それで・・・流石にこのままやれるんじゃないかって思ったとき、クロームちゃんから藍色の霧が出てきて・・・六道骸っていう人の姿に変わったの・・・」

骸という単語を聞いたツナ達は驚きを隠しきれずにいた。

ツナはすぐにティアナに駆け寄り問い詰めた。

「骸が！？骸が来たんですか！？ティアナさん！！！」

「落ち着け、ツナ！まずはティアナの話を最後まで聞け・・・」

リポーンに諭され冷静さを取り戻したツナ。

そして、？んでいた手を放しティアナの話を待った。

「骸さんは言ってたわ・・・今回の件は全てクロームちゃんから聞いているって。それで、私は骸さんと協力してあいつに幻術を駆使した戦法でいいところまで追い込んだ。でも、それは結局あいつの術中で踊らされていた。私と骸さんは全てあいつが仕掛けた術の中で術にかかっていると知らずに、攻撃をして勝ち誇っていた。実際

は、骸さんが奴に止めを刺す寸前で術が解けて、私も骸さんもあいつに斬られていた。」

「あの骸が・・・幻術で・・・負けるなんて・・・!?!?」

「信じられない・・・!?!?」

「な・・・何かの間違いじゃないんすか!?!?」

獄寺、大人ランボ、山本の順で驚愕し山本がティアナにそう尋ねると、ティアナは歯を食いしばってかなり悔しそうな表情で怒鳴り声を上げた。

「間違いなんかじゃないわよ!?!?!現にこうして私とクロームちゃんには傷を受けたのよ!?!?!骸さんだって、同じくらい酷い傷を受けてるのよ!?!?!間違いなんかで済むならこうしてなんかいないわよ!?!?!」

「ティアナ・・・落ち着いて!?!」

興奮状態のティアナになのはが優しく宥める。

ティアナも我に帰り冷静さを取り戻すと、さらに続けた。

「そう・・・幻術だったら私と骸さんにだって勝機はあったかもしれない。けど、あいつはそれ以上のもので私達を弄んだのよ!?!?!」

「それ以上の・・・もの? 一体なんだそれは、ティアナ。」

シグナムがそう尋ねると、ティアナは悔しさを必死で堪えながらこの単語を口にした。

「あいつが私達に使った……とんでもない能力……幻術の領域を遥かに凌ぐ力……それは……『完全催眠』……!!」

この単語を聞いた一護達の顔は一気に引きつった。

そして、一護が信じられないことを聞いたとき衝撃はツナやなのは達には想像もつかなかっただろう。

勿論、完全催眠に一番というほど精通している日番谷や恋次、浮竹はもっとそうだった。

「う……うそ……だろ……!?!」

「何で……藍染あいぜんの鏡花水月が奴らの手に……!?!」

日番谷がそう言うと、ツナが代表して日番谷に質問をした。

「あの……冬獅郎君……藍染とか……鏡花水月とか言ってるけど、それがティアナさんの言ってた完全催眠とどう関係あるのかな? 第一、その完全催眠っていうのもよくわからないし……」

すると、そんなツナ達の疑問に真之介が代弁を務めた。

「藍染っていうのはな……一護がこの間やったの思いで倒したば

かりの死神最大の宿敵だ。元五番隊隊長で死神としても最強レベルの男だった。ツナ達が未来で倒した白蘭の強さを1と考えたら・・・藍染の強さはその1万倍と考えるもいいんじゃないかという奴だ」

ツナ達は真之介の言葉に耳を疑った。

何よりもツナ自身が一番信じられないでいた。

「あの白蘭の・・・1万倍・・・!?」

「ああ・・・それで、その藍染つて奴が持ってた斬魄刀こそが鏡花水月で、能力は完全催眠。敵の五感全てを支配し、この世の事象・・・つまり事柄を使い手の意のままに操り誤認させる力。幻術とは、脳にあるはずの無いものを錯覚させる言わば観念を植え付けるもの。だが、完全催眠は観念はおるか事柄そのものを変えてしまうため、幻術と呼ぶには高尚過ぎる力なんだ・・・そして、さらに言えば鏡花水月の完全催眠は一度見てしまえば奴が鏡花水月を解放するたびに完全催眠下に入り、術に堕ちる。名前を言わずとも解放なんてしたら・・・勝ち目なんか無い!」

「そ・・・そんな馬鹿げた力が・・・あるのかよ!？」

「無いわけじゃねえな・・・人間なら絶対無理だが、死神ならあつても不思議じゃねえな。」

顔を引きつり目の色を変えるヴィータに、リボーンが落ち着いた様子で相槌を打つ。

そして、真之介に向かってのんびりともしていられないことを告げる。

「こいつはヤバイことになったな。こつちもそうのんびりと修行を  
してる時間もねえな・・・事を急がせなければ、俺達は元の世界に  
戻れることはおろか、生きて帰れるかも分からねえ・・・」

リボーンの言葉を真摯に受け止め、事の重大さを改めと痛感した一  
護達。

そして、話が済んで自室に戻った全員はー・・・

今日あったことが気にかかり、なかなか寝付けないでいた。

だが、メンバーの中で誰よりも焦っていたのはやはり真之介だった。

真之介は月明かりを部屋で眺めながら真剣に考え込み、修行のペー  
スを早めるかどうかを考えていた。

「（やはりここはもう少し修行のペースを早めたほうがよさそうだ  
な・・・ツナの虚化保持のほうは明日の一護次第で変わってくるが、  
なのはのほうは浮竹の指導で順調にいつてるみたいだし・・・それ  
から・・・今のボンゴレ連中のしているボンゴレリングは、過去に  
戻るときに力が大きすぎるという理由で再び枷をつけられ制御され  
ている。ここはやはり・・・あの男に頼んで枷を外してもらう必要  
があるな。）」

すると、真之介は世界を行き来するときを使う穴を発生させて、あ  
る場所へと向った。

果たして、真之介は一体何をしようというのだろうか？

## 第81話：十二使徒の恐怖（後書き）

### 次回予告

真之介の提案により、修行ペースがさらに早められることになった。ツナのほうも、漸く一護に認められ虚化保持の訓練が本格的に再開されることになった。

そして、修行ペースが早められ・・・ツナの虚化も形になってきた頃・・・

真之介は、ある人物を連れ来た。それを見たツナ達は・・・目を疑った。

次回、次元の破壊者・・・「フリーモI世の来訪」

みんな、卍解して見るよ。



## 第82話：I世（プリーモ）の来訪

ティアナとクロームがオベージヤに襲われた夜が開け、一護達全員は食事を済ませると真之介に呼び出され話を聞かされていた。

全員は真剣な様子で真之介の話を聞いていた。

「昨日の一件があつて、俺は夜中に色々と考えてたんだが・・・このままチンタラと修行をしても埒があかないと判断し、今日から修行のペースを今迄の数倍は早めようと思つているんだが、どうだお前たちは？」

「別に。俺は構わねえさ・・・連中が何時攻めてくるかもよく判らない以上、チンタラと修行をしている暇は俺たちには無いしな。そうだろ・・・お前ら！」

一護がそう言うと、ツナを始めとする全員は納得した様子で首を縦に振った。

真之介もそれを見て安心した。

「分かった・・・そんじゃ早速修行を始めるとするか。よし、はやてとリイン！！今日はいつも以上に苛めてやるから楽しみにしておけよな！！！」

「ちょ、ちょ・・・待ってよ！！！！何で私達ばかりやの！！！！！」

「そうですね！！リボーン君だっているじゃないですか！！！」

「あいつはプロのヒットマンであり、アルコバレーノ最強の男だ。苛め甲斐が無いからつまんんだよ！！！」

このとき、そんな発言を聞いていたツナ達は若干顔を引きつった。

リボーンはあの真之介をも唸らせるほどの力を持っている最強の赤ん坊。

ツナは改めてリボーンの恐ろしさを思い知ったそう。

そして、いよいよ一週間ぶりとなる一護とツナの虚化保持の訓練が始まるうとしていた。

今回から、ツナの提案により京子も特別に見学を許されることになった。

「いいのかよ、ツナ・・・京子を修行に巻き込んでも・・・」

「大丈夫ですよ・・・もう俺は京子ちゃんを悲しませたりなんかしませんから。たとえ危険が付きまとうことになって、俺が京子ちゃんを守りきれれば問題はありませんかから」

ツナの眼差しには、今まで無かった強い決意と覚悟がすっかり宿っていた。

一護もそれを理解するとほくそ笑み、徐に代行証を使って死神化し、



コンは恐怖のあまり鼻水と涙を流しながらその場にしりもちをついた。

すると、京子がそんなツナに対して応援のエールを送る。

「ツナ君・・・無茶だけはしないでね・・・あと・・・頑張つて！」

京子はツナに屈託の無い笑みを浮かべる。

ツナをそれを見ると何時もの眉間に皺を寄せるハイパー化のときの表情を僅かにだが綻ばせてこう言った。

「・・・ああ・・・わかつてる・・・」

「よし、いつちよ始めるかツナ!!」

「ああ・・・始めよう!!」

こうして、二人は同時に虚化して一気に真正面から突っ込んで行った。

その頃、ハルもヴィヴィオも京子同様他の人達の修行を見ることを許可されそれぞれ見学をしていた。

ヴィヴィオは当然、義理の母親であるなのはの修行の様子を設けられた観覧室から見ていた。

なのはバリアジャケットに身を包み、浮竹の厳しい指導の下特訓を受けていた。

「ほらほら！回避速度が落ちているぞ！その程度では瞬歩を最大限に活かした君の『星海』の能力を充分に発揮できないぞ！」

「はい！！分かっていきます！！！」

浮竹の見た目以上に素早い動きと、目にも留まらぬ斬撃がなのはに容赦なく追い討ちをかける。

なのはは浮竹の瞬歩をどうにかかわし距離を取ったところで、解放した星海に指示を送る。

「星空喜劇・第三幕……彦星<sup>ひしほし</sup>！！！」

すると、星海自身から光を帯びてチャクラムの姿の星海が二つに分離した。

そしてなのは左側の星海を勢いよくブーメランの要領で浮竹に投げつけた。

「えええええい！！！！！！！！！」

投げつけられた星海が高速回転をしながら浮竹に飛んでいく。

浮竹は飛んできた星海を刀で防御する。

すると、直ぐにもう一つの星海を背後から飛んできた。

浮竹はそれに気付くと瞬歩で移動し星海をかわした。

だが、二つの星海は追尾式となっており執拗に浮竹を狙い続ける。

浮竹は瞬歩を駆使し反撃の機会を窺がう。

すると、そんな浮竹の隙をついてなのはがレイジングハートで浮竹に砲撃を仕掛ける。

「シューーーーーー！」

レイジングハートから発射される魔法の砲撃が逃げ惑う浮竹に襲いかかる。

すると、浮竹は瞬歩で移動しながら自身の刀の解号を唱え始める。

「・・・波悉く我が盾となれ 雷悉く我が刃となれ・・・」

すると、一本だった浮竹の刀が能力解放に伴い、刀身が逆十手型の二刀一対型の斬魄刀に変化した。

「『ニウキキシツナ双魚理』！」

浮竹は一度その場で動きを止め、解放した双魚理の一方を発射され飛んでくるなのはの砲撃魔法に向けた。

すると、なのはの砲撃魔法は双魚理の片方の刃で受けた力を吸収し、

もう片方の刃から飛んでくる星海へ放出する。

なのはの砲撃魔法を喰らった星海は二つとも撃墜され、そのまま地面に落下する。

「そ・・・そんな！？あんなのありですか!？」

「悪いね・・・俺の隙を突いたところまでは良かったが、まだまだ詰めが甘いよ。」

悔しがるなのに対して、自信に満ちた表情を浮かべる浮竹。

その様子を窓ガラスを通して見続けるヴィヴィオ。

二人の戦いぶりにいつの間にか手に汗握っていた。

「凄い・・・!!なのはママの攻撃を・・・浮竹おじちゃんは何で弾き返しちゃった!!」

この二人の修行は一体何処まで突き詰めれば気が済むのかは、二人以外には分からないのであった。

一方、その頃ハルはデンジャラスな戦いの様子が見てみたいと真之介に懇願し、ハルはセクトウレの護衛のもとギリギリの距離まで近付き身体中を軋ませながらあの二人の戦いを見学していた。

そう・・・地下訓練場で食事もろくに取らずに戦い続ける雲雀恭弥と更木剣八の修行だった。

二人の戦いは当初から見るとさらにスケールを増していた。

「はひ！！あれが更木剣八さんですか・・・！！顔には刀傷、髪の毛は尖がっていて・・・その上あの最強でデングジャラスな雲雀さんを嘲笑うかのように攻撃しています・・・！！！！雲雀さん以上にデングジャラスで怖い人です！！！！」

ハルは剣八のあまりの恐ろしさに怯え、思わず泣き声をあげてしま

う。  
「確かに・・・ちょっとあの二人異常だわ・・・ろくにご飯も食べていないのにどうしたらあんなぶっ続けで戦ってられるのかしら・・・！！それに、雲雀君も今は剣八さんの攻撃を受け止めるので一杯って感じだし・・・逆にその剣八っていう人は殆ど太刀筋の見えない斬撃を仕掛け続ける・・・この修行・・・最早私達の手にも負えるようなものじゃないわね・・・！！」

そんな二人の様子に全く気付きもしない剣八と雲雀は、相も変わらず戦いを繰り返す。

剣八は当初とは比べ物にならないくらいの不気味な笑みを浮かべ、戦いを存分に愉しんでいた。

一方、雲雀は剣八の攻撃を受け続けることだけで手がいっぱい戦いを楽しむ用など無かった。



剣八と雲雀は互いに攻め合い続ける。

雲雀は雲属性の炎を纏わせたトンファーを、剣八は刃毀れだらけの刀を。

そして、激しい勢いでぶつかり合う二つの武器。

金属音を立てながら緊迫感を増していく。

剣八は不気味な笑みを浮かべたまま雲雀のトンファーを鷲掴みにし、雲雀ごと自分の下へ引き寄せ剣を突き刺そうとする。

雲雀はギリギリのところまで回避する。

雲雀が避けると、いつの間にか剣八の姿はなく雲雀は警戒心を強める。

すると、雲雀の耳に剣八が頭につけている鈴の音が聞こえ後ろに向きを変え武器を構えた。

案の定剣八は背後から斬撃を仕掛け来た。

「いいぞ！いい反応だ！！集中が増しているな！！二、三日前とは違ってちゃんと鈴の音が聞こえてるじゃねえか！！鈴も眼帯も、より戦いを楽しむためだけにつけてんだよ。そうやって有効利用してくれねえとつけている意味が無え。」

「ふん……ム力つくね……そうやってあなただけが戦いを楽しんでるのは一番気に入らないね……」

「ほう……やっぱりてめえは聞いたとおりの男だな。普段から兵と戦いを求め、戦いを楽しむことを目的としている。いいぞ……益々楽しくなってきたぜ！このまま簡単に終わらせるにはまだ早えー。出来るだけもっともつと長引かせていこうぜ、なア……雲雀恭弥！」

すると、剣八はさらに霊圧を上昇させて雲雀に闘争心をむき出しにした。

「いい加減……ふざけた事ばかりぬかさないでよ……僕も漸くそれなりに慣れてきたとこなんだ……さつさとあなたを咬み殺して終わりにする。」

すると、雲雀自身もいつの間にか身体から勝手に流れ出す霊圧と死ぬ気の炎を放出させ、剣八に対抗する。

そんな二人の様子を見てこれ以上は危険と判断した二人は直ぐにその場から避難した。

その後、この地下訓練場が跡形も無くなかったことは目に見えたことであつた。

そして、修行のペースが早まり訓練をし続けること早一ヶ月。

早期に回復したティアナもクロームも何の問題なく修行に参加でき

たことにより全員の修行は着実なものへと変わっていった。

ツナ自身も一護の扱きもあってか・・・漸く虚化もそれなりに維持できるようになってきた。

といっても、それは高々三分程度ではあったがー・・・

さて、一ヶ月が経った一護とツナが修行を続ける中庭ではー・・・

コンが見慣れた様子で見守る中、虚化したツナ何時ものように一護に厳しく扱かれ岩に激突していた。

「おら、さつさと起きろ！！この死に損ない！！今ので何回死んでると思っただよ、ボケ！！アレだろ！！『死ぬ気』っていうのは気持ちばかり死にまくるって意味で使っただろう！？チゲーよボケ！！」

「ひい~~~~~~~~！！！！一護さん・・・そんな無茶苦茶な！！！！！！」

「確かに・・・無茶苦茶だな・・・一護の奴・・・！」

呆れた様子で一護の身体を借りて見ているコン。

すると、そんな三人に元へ全速力で走ってくるものの姿が見言えた。

「ツナ君!!!一護さん!!!コンさん!!!お昼の支度が出来たからそろそろ上がりにはませんか!？」

京子がツナ達三人向かって大声で昼食の時間であると伝えた。

「は~~~~い!!!今行きます!!!」

「もう昼かよ!?!お前を苛めてるだけで三時間なんてあつという間に経っちまったな!!!」

「う~~~~その言い方はやめて下さいよ~~~~」

ツナは涙ながら一護に向って悲痛の叫びを上げた。

そして、昼食時間となって全員は食堂に集まった。

そして、徐にリボンが食事を取りながら一護にツナの修行の成果を聞いてきた。

「で・・・どうだ一護。ツナの虚化維持の調子は？」

「ああ・・・それなりには形になってきたと思っぜ!今やっと三分ちよい・・・カップめんが作れるな。」

「あの・・・それって褒めているんですか、一護さん!？」

ツナは少々不安になっていた。

一護の言うことはどうもあまり説得力に欠けるといっつか何といっつか・

・あまり釈然としないからであった。

すると、真之介が突然何かを思い出し全員にこんな話をしだした。

「そうだ言い忘れてたことがあったっけ・・・実はよ、ボンゴレの連中や一護達にはきちんと理解しているとは思うんだが・・・ツナ達が着けているそのボンゴレリングは全て、仮の姿だということに

」

すると、それを聞いたなのは達は一度食べるのをやめ驚きの表情を見せた。

「えっ！？綱吉君たちの着けているボンゴレリングが仮の姿！？どういうことそれ！？」

なのはがそう言うと、代わりに正面のほうに座っていた一護が答えた。

「実はな・・・ツナ達のボンゴレリングっていうのは73（トウリニセツテ）ってつう、なのは達の世界で言うところのロスト・ロギアって奴なんだ。」

「ロスト・ロギアやって！？何でそんな危険なものが綱吉君たちが持つてるん！？」

「ああ・・・ボンゴレリングはボンゴレファミリー初代ボスのボンゴレ一世とその守護者が、ファミリーの証として作成したのが始まりでな・・・ある時厳格な継承のためボスと門外顧問がそれぞれ候

補者を選定し、継承の式典においてハーフボンゴレリングっていう2つのリングを併せて1つのリングとして継承されるんだ。」

「だが、73の中でもボンゴレリングだけはその炎の最高出力を抑えるために本来の形状とは違う仮の姿にすることで今の状態に保つことが出来たんだ。ツナ達は十年後の世界から過去へ戻るとき、一世によって再び力を制御するためという理由で今の形に戻されたんだ。」

一護の後に続いてリボーンが補足説明を入れてきた。

「一世にとって・・・だってその人って何百年も前の人なんでしょう！？一体どうやってそんなことが！！」

ティアナを始めとする六課一同が驚いていると、真之介は咳払いをしてこう答えた。

「ボンゴレリングにはな・・・他の73には起きないものがあつてな・・・それは時代と継承を重ねるボンゴレの歴史そのものを写しとったもの。だから、その力は『縦の時間軸の奇跡』って言われる。」

「縦の・・・時間軸の奇跡・・・！？」

「ああ・・・ボンゴレリングに刻まれた時間には様々な人物の歴史も同時に刻まれている。大空のボンゴレリングには歴代のボスたちのあり方が刻まれている。そして、今回俺はそんなボンゴレリングの真の力を解放してもらうために、かれこれ一ヶ月前から入念に調べを済ませ今漸く連れてくる事に成功したんだ！」

「ああ？連れてくるって・・・一体誰をだよ!？」

恋次が不満そうな表情で真之介にそう言うと、真之介は例の如く指を鳴らした。

すると、またあの時の灰色のオーロラが現れ何者かが徐にこちらのほうへ歩いてきた。

そして、オーロラを抜け一護達の前に現れた人物を見た瞬間、全員は度肝を抜かれた。

ツナや獄寺は思わぬ事態に腰が抜け椅子から倒れてしまった。

「なっ!?!あ・・・・・・・・あああああああ・・・・・・・・!!!  
!?!?!?!」

「あっ・・・・・・・・あなた様は・・・・・・・・!?!?!?!」

「おいおいマジかよ!?!?!こんなことって!?!?!」

全員が驚くのも無理は無い。

そこに現れたのは本来もうこのようには居ない筈の人物だったのだから。

容姿は金色の髪をしているという以外はハイパー死ぬ気モードのツナと顔立ちが似ていて、黒い身の丈ほどのマントを羽織った男が立っていた。

「貴様か……俺をここに呼んだのは……」

「ああ……来てくれて感謝するぜ……」

その男と真之介は二人だけで会話をする。

一護達も話では聞いていたが間近で見るときには流石に目を疑った。

ボンゴレと六課側も、突然ここにやって来たその男の容姿に誰もが目を疑い頬を赤らめた。

そして、徐に顔を赤らめながらなのはが真之介に尋ねた。

「し……真之介君！？この人は一体！！！？どうして綱吉君と顔が似てるの！！」

「あつ、悪い悪いすっかり忘れてたぜ！この男こそ……ボンゴレファミリア初代ボスにして、ツナのひいひいひいじいちゃんである、ボンゴレ・フリーモボンゴレI世だ。」

「ボ……ボンゴレI世！？」





### 第83話：I世（プリーモ）とX世（デーチモ）

「つ……綱吉さんの……ひいひいひいおじいさんてことは……！？」

「つまり……綱吉さんはそのプリーモって人の直系ってことですか？」

恐る恐るキャラが真之介に尋ねると、真之介はああと一言返した。

すると、一護がその場から勢いよく立ち上がると、真之介に向かって慌てた様子で弁明を求めた。

「真之介、てめえどういうことだよ！！何で何百年も前の人間がここに居るんだよ！？そもそも実体なのか！？」

「実体に決まってるだろう！だったら、当の本人に直接聞いてみればいいだろう。」

真之介はそう言うと、一護に実際にプリーモに質問してみたらと提案してきた。

だが、一護もそうだが他のメンバーもどうも照れているのかプリーモに直接話しかけることに戸惑っていた。

すると、プリーモは徐にその場から歩みだしツナの下へ近付いていた。

「久しぶりだな、X世。<sup>デーチモ</sup>こうしてお前と再び声を交えるのはあの時以来だな……」

「えっ！？あの時!？」

ツナを始めとするボンゴレ関係者も一護もなのは達も何のことだか分からなかった。

すると、真之介がそんな全員に判るように説明をし始めた。

「そいつはな……俺が”大空のボンゴレリングに刻まれた時間の世界”から連れてきたボンゴレI世だ。」

「ぼ……ボンゴレリングに刻まれた時間の世界から連れてきた……!?!?おい、てめえどういうことだ!!俺たちにも分かるように説明しろよ!!」

腑に落ちないで居る獄寺は真之介に詳細を説明するように言い出し  
てきた。

「まあ……話せば長くなるんだが……ボンゴレリングの真の力を解放するに至って、まずはそれを解放できる人物、すなわちI世の力が必要だった。だが、単純に創成期の頃のボンゴレI世に遭いに行っても……もしかしたら、その当時のボンゴレリングはまだ原型の状態で、仮の姿もしていなかった場合……その枷を外す術など持ち合わせていないと俺は考えた。そこで、仮の姿になって厳格な継承がされるようになったボンゴレリングの歴史そのものの世

界で生きるI世に協力をしてもらおうと思いついた。だから、何とかリングの歴史の世界を俺の力で探してたんだ。この一ヶ月の間でな……」

「それじゃあ……I世のいうあの時って……！？俺達が白蘭との最後の戦いに勝利して過去へ戻るとき、オリジナルのボンゴレリングに再び枷をつけにきた……あの時って事！？」

「そういうことになる……どうやら、あの時から見たら……お前は少しばかり……強くなったらしいな、X世。」

プリーモは眉間の皺を少し綻ばせてツナにそう言った。

ツナは何だか照れくさくなって頬を綻ばせたまま何も言えず床に尻餅を続けた。

すると、真之介がさらに続けてきた。

「ただ……俺の力っていうのは本来”実在するパラレルワールド”から人を連れてくることは可能だが、”本来あるはずの無い記憶で出来た世界”に住まう人間、まして過去の人物を連れ来ることはかなり危険なことなんだ。」

「えっ！？危険って……一体どんなことが！？」

なのはがそう尋ねると、真之介は目を瞑り腕組みをしながら答えた。

「つまり、過去の人物を連れ来ることは次元に多大な影響が受ける可能性があるということだ。だから、浮竹や剣八のように長い時間ここに留める事が出来ないということだ。俺の力をもってしても、

居られるのはせいぜい24時間。まあ、それだけあれば充分だけだな。それより、お前の条件も呑んでやるからさっさとツナ達のボンゴレリングを解放してやってくれないか、I世。」

「・・・そうだな・・・X世。俺の右手の甲にボンゴレリングを翳せ・・・」

「えっ!?!あっ・・・はい!?!」

プリームにそう言われると、ツナは急いで言われたとおり右の中指に嵌めているボンゴレリングをプリームの右手の甲に翳した。

すると、プリームの右手の甲にIが刻まれた特殊なグローブをリングの前に翳すと、Iのエンブレムが光を帯びて輝き始めた。

そして、ツナのボンゴレリングや守護者のリングも再びあの時と同じ強い輝きを放った。

全員はあまりの眩しさに目を瞑った。

そして、徐にツナ達が目を開けると――・・・

七つのボンゴレリングは黒を基調とした模様でなく、守護者のリングは属性にあわせた色に、ツナのボンゴレリングもダイヤモンドを丁寧にカットしたような装飾になっていた。

それを見た一護となのは達は目を輝かせた。

「こ・・・これが・・・!?!」

「<sup>オリジナル</sup>原型のボンゴレリング・・・!?」

「綺麗な・・・!!」

なのは・フェイト・はやては興味深々にツナや守護者達のボンゴレリングを覗いた。

ツナの隣に座っていた一護やルキアたちも我先にとボンゴレリングを見るのに夢中となった。

「やれやれ・・・ミハーな連中だな・・・」

リボンや日番谷は冷めた様子で一護達の光景を見ていた。

すると、浮竹が徐にプリーモにこう尋ねた。

「プリーモさん！もし宜しければ我々と昼食を食べていってほしくないか？24時間という限られた時間、綱吉君や他のものとも色々話したいのなら、それが一番手っ取り早いと思うんだが・・・どうだろ？」

「・・・そうだな・・・こうして時間を取ってX世や守護者と話をする機会などもう無いかもしれないな。いいだろ、俺も混ぜさせてもらおう・・・」

「せやったら私の隣に座ってくれたらええ!!」

「ああ!!!!はやてちゃんズルイです!!!!リインの席に座ってもらうんですから!!!!」

「そんな小さい身体の座るところにプリーモ殿が座れるかよ!!!  
あの・・・宜しかったら俺の隣へ!!!」

「何を言っているんだい、君達。ここはマントの一番良く似合うもの同士僕の席の隣に。」

はやて、リイン、獄寺、石田はプリーモの不思議な魅力に魅了されて四人は席の譲り合いを競い始めた。

一護達はそんな四人を白けた様子で眺めていたそう。

すると、徐に一護がプリーモに席を譲ると言ってきた。

「プリーモさん、良かったらここ座れよ。ツナと話したいなら俺のところへ座ったほうがいいだろ。」

「あ、済まないな・・・ではお言葉に甘えて座らせてもどうぞ・・・」

その言葉を聞いた瞬間、争っていた四人はショックのあまり石化しそのまま暫く動かなくなった。

そして、一護は席を立つと後に立っていたプリーモに席を譲り他のところへ座った。

席順は、プリーモを挟む感じで右側にツナ。

左側にリボンとなった。全員は今一度ツナとプリーモの顔を良く見てみた。

「それにしても・・・」

「ホントこうしてみたら親子に見えてくるぜ！」

「だが、それでもハイパー化したツナと比較しても顔立ちは若干プリーモのほうがイケてるな！俺様が言うんだから間違いない！」

恋次の何の根拠も無い説明を聞かされ、一護達は白け目で恋次を凝視した。

「な・・・何だよ、てめえら！！その目は！！！！」

全員の態度に腹を立てた恋次は全員に怒りを露にした。

やがて、プリーモを交え再び昼食が始まった。

プリーモの始めてみる行動にツナ達は興奮が高まり、最早食事どころではない。

「ん？俺の顔に何かついていないか、お前たち！？」

プリーモにそう言われると、全員は照れた様子で茶を濁したかのように食事を続ける。

「でも、こうして見るとまるでツナ君が二人いるみたいでちょっと不思議かも？」



すると、ツナの隣に座っていた京子が徐にそんなことを言うと、ツナは食べるのを一度やめ恥ずかしくなる。

「えっ！？俺が二人！？きよ・・・京子ちゃんそれは無いよ！！俺なんかプリーモとは顔以外は全然似ても似つかないし、言ってみれば月とすっぱん。差が大きすぎるよ！」

「そうかな・・・私はそう思わない・・・」

すると、不思議がる京子に対してなのはが質問する。

「どうして京子ちゃんはそう思うの？綱吉君とプリーモさんが似ているって・・・」

「はい・・・やっぱり雰囲気か似てると思うんですよ。ツナ君もプリーモさんも・・・凄く優しい気持ちになれるところや、全てを包み込んでくれるような、そんな包容性を感じるんです。」

「京子ちゃん・・・」

すると、そんな京子の話を黙って聞いていたプリーモは徐に口を開いた。

「X世・・・お前はどうかやら俺の想像以上に恵まれているようだな・・・安心したぞ。」

「えっ！？プリーモ・・・！？」

「俺も正直、お前をX世として正式に継承したことに若干の不安があった。だが、今の彼女の一言で確信したよ。お前は守護者は勿論



うとした。

プリーモの意外な発言を聞いていたなのは達は照れた様子で笑っていた。

「にははははは・・・真顔で結構恥ずかしいこともいうだね、プリーモさんって・・・」

「なのはもユーノにあんな感じで結婚申し込まれたらどうする?」

「ふえ、ふえふえ、ふえふえふえふえふえふえフエイトちゃん!!!!!!  
何言ってるの!!!!??」

「その様子だと満更あいつと結婚したいって言ってるように思えるけどな・・・」

なのはをさらに追い討ちをかけるようにヴィータが攻めてくる。

「ヴィータちゃんまで止めてよ!!!!!!」

「えっ?なのはママ・・・ユーノお兄ちゃんと結婚するの!??」

隣に座っていたヴィヴィオが頑是無い笑みでそう言うと、なのはは顔を真っ赤にしながらヴィヴィオに否定をするが、スバルやティアナたちがさらにそんなのはに追い討ちを掛ける。

こうして、プリーモが混ぜた昼食はこんな感じで幕を閉じていくのであった。



### 第83話：I世（プリーモ）とX世（デーチモ）（後書き）

#### 次回予告

プリーモが俺たちの前にやってきた条件として、プリーモはツナに戦いを挑む。

突然のプリーモの言動に戸惑うツナだったが、一護に諭され虚化の成果も同時に果たすいい機会だと言われ

プリーモと戦う決心をする。そして、全員が見守る中・・・いよいよ、ボンゴレ最強と謳われた男との時空を超えた

決戦が今、幕を開ける・・・

次回、次元の破壊者・・・「ボンゴレを創りし男」

今明かされる・・・プリーモの実力とは！？

## 第84話：ボンゴレを創りし男

真之介の力によってプリーモがツナ達の下へ連れてこられた頃、世界の闇の中に存在する暗黒の領域……『邪の巣窟』イービル・ルガー。

ここは心の闇と負の感情で成り立った世界。

こここそが、次元の破壊者とその手下、終末の全員が壻とする場所である。

そんなイービル・ルガーに存在する唯一つの神殿、『アホカリブス黙示録』。

この中に創られた長い渡り廊下を歩く一人の男……ペロー。

彼は元来無口で無愛想なのだが、次元の破壊者に信頼と忠誠心はおそらく一番大きい。

ペローは何時も通りポーカーフェイスをしたまま、ある場所へ向っていた。

そして、目的の巨大な扉の前に立つと自分の名を言う。

「……ペロー……入ります。」

すると、巨大な扉がゆっくりと開放されていった。

そして、扉がすべて開かれるとペローは徐に部屋へと続く階段を上

り扉の向こうへ歩き始めた。

その中には、十一人の使徒とあの人物が待ち構えていた。

「……来たか。ペロー……丁度コーヒーを淹れたところだ……」

「……」  
そうこの人物こそ、あらゆる世界を破壊し秩序を壊そうとしている今回の張本人……次元の破壊者。

そして、その次元の破壊者は巨大な長方形型の会議用テーブルの中央に座り、自分で淹れた自家製のコーヒー豆から作ったコーヒーを十二使徒全員に配っていた。

彼の正面には左右に六人ずつ座れる席があり、ペロー以外の全員は着席しコーヒーを貰い勝手に飲んでいた。

中には苦くて飲まないものも居たが。

「……『きせき熙石』の覚醒状態は？」

ペローが自分の席に向かいながら次元の破壊者にそう尋ねる。

「八割だ。予定通りさ……」こちらにとって”はな。当然だ。単に多次元世界を破壊するだけでは私の望みは叶えられない。そして、おそらく真之介もこのことは知るまい……全ての世界で覆すことの出来ない倫理を唯一破壊するためには、『熙石』を含めた”三つの物質”と、そのよりしるとする”個体”が必要だということ……」

そう言うと、次元の破壊者は目の前のコーヒーを一口飲んだ。

ペローも自分の席に着くと、次元の破壊者が自ら入れたコーヒーを一口飲む。

「……相変わらず素晴らしい風味と香りですね……次元の破壊者様」

「ありがとうございます……ペロー。……一ヶ月前に話した指令を憶えているかい、ペロー？」

「……はい」

「そうか……実行に移ってくれ。決定権を与えよう。好きなものを連れていくといい。」

「……了解しました。」

ペローの返事を聞くと、次元の破壊者は残っていたコーヒーを飲み干しその場から立ち去ろうとした。

そして、その帰り際に次元の破壊者は十二使徒のあるものにこんなことを言った。

「……ああ、そうだ。君も一緒に行くかい？ドラコ……」

次元の破壊者にそう言われると、同じくコーヒーを飲み終えたその人物が返事をした。

「……いいですね。ちょうど運動不足ですね……身体がなま



つてたところですよ。俺の”虹色のおしゃぶり”もそろそろ死ぬ気の炎が喰らいたいつて言ってますし……」

「そうか……なら行って来るといい。」

次元の破壊者の不適な笑みが零れ、部屋全体は不気味な雰囲気で覆われる。

この男は……一体何を企んでいるのか？

一方、一護達は昼食を終え休憩がてらプリーモとの会話を楽しんでいた。

石田はマントをつけるプリーモに自分がデザインした白のマントを勧めようとするが、一護や恋次の反対もあってそれは叶わなかった。

プリーモは全員の話をも聖徳太子如く聞き入れ、応答する。

そしてツナでさえプリーモに全てを抱擁されてしまうのだ。

すると、そんな暖かい雰囲気をも堪能しているのはが、何かを思い出し真之介に尋ねた。

「そう言えば真之介君？プリーモさんを連れてきたとき、お前の条件を呑むからどうのここの言ってたような気がするんだけど……！？」

「え？ああ……そうだったな。確かに俺言ったわ……プリーモ

の条件を呑むから、枷を外してくれって。」

「条件？フリーモは一体何を条件に枷を外してくれたの、真之介君？」

ツナが真之介にそう尋ねると、全員に囲まれながら椅子に座っていたフリーモが徐に立ち上がりツナのほうへ向いた。

「X世・・・枷を外した代わりに俺の要望も聞いてほしい。俺が今こうしている間、お前と一度でいいから拳を交えたい・・・どうだ？」

フリーモの発言にツナや一護達は驚きを隠せなかった。

「十代目が・・・フリーモ殿と戦う!？」

「確かに24時間っていう限られた時間を使うにあたって・・・それはツナやフリーモの側にとってはまさに一石二鳥だけど・・・」

「フリーモさんって・・・そんなに強い!？」

すると、フェイトの何気ない一言を聞いたリボーンは、鼻で笑うとフェイト達にこう言った。

「当然だろう。ボンゴレイ世は歴代最強と謳われた伝説の男だ・・・ツナのXグロブの修行も、技の多くも全てフリーモの戦い方を参考にしたもんだからな・・・」

「おおお!!!良かったではないか、沢田!!!そんな伝説的な男と拳を交えられるんだぞ!!!ありがたく挑戦を受けたほうがいいぞ!

「！」

了平はツナの肩に手を力を込めて乗せると、ツナに挑戦を受けるように諭す。

ツナはというと、どうしようか困惑していたが、そんなツナに一護が一言こう言った。

「やってやれよ、ツナ！こんなチャンスもう無いぜ！！それに、この一ヶ月の間でお前がどれだけ変わったのかをみんなの前で見せる絶好の機会じゃねえか！」

「あつ！成る程・・・それもそうか・・・」

一護にそう言われると、ツナは一瞬考え込んだ。

そして、暫くしてツナは決断を下す。

「・・・分かりました。俺、プリーモと戦います！勝つ自身は正直ありませんけど、やるだけのことは全部やってみるつもりです！プリーモ、あなたの申し出・・・快く引き受けます。」

「そうか・・・それは嬉しいぞ、X世。ならば、早速始めよう。」

「ほんなら・・・二人には一護君と綱吉君がいつも修行している中庭に移動して戦ってもらおうとしようか！」

「そうですね！それが一番いいかもしれませぬ！」

はやての提案にエリオが賛成すると、他のメンバーも同意した。

そして、全員に案内されてプリーモは中庭に案内されてツナと一定の距離を取って向かい合った。

一護達はその様子を固唾を吞んで見守っていた。

そして、ツナは死ぬ気丸を服用し、ハイパー化した。

プリーモは最初から額に炎が灯っていたから戦闘準備は万全だった。

「どうやら準備は出来たようだな・・・X世。」

「ああ・・・相手にとって不足は無い・・・全力でいかせて貰うぞ、I世！」

全員は時空を超えて交えることとなるボンゴレの創始者とその十代目ボスとの戦いに目が釘付けになった。

そのとき、全員はプリーモから発せられる歴代最強と謳われた男の威圧を遠くからでも確かに感じた。

全員の額には自然と汗が流れ出ている。

「す・・・すげー・・・！！！！これがボンゴレを創りし男で、歴代最強と謳われた初代ボス・・・ボンゴレI世の威圧かよ・・・！！まるで・・・死神同士の霊圧のぶつかり合いのようだ！！威圧だけでどうかしそうだぜ！！！」

恋次は額から零れる多量の汗をぬぐいながらツナとフリーモの様子を見ていた。

「単なる男前だと思っただら……こんな凄い人やったんやな！」

「でもそれだけじゃないよ、はやてちゃん。威圧だけなら綱吉君だつて負けちゃいないよ……でも、フリーモさんの場合、数々の修羅場を潜り抜け勝ち続けた強者としての貫禄が彼の凄さを余計に引き立っているんだよ。」

「なのはの言う通りだぞ……ボンゴレイ世の力は絶大だ。おそろく、普通の人間レベルだったら間違ひなく最強の男だ。全ての色に染まりつつ、全てを飲み込み抱擁する大空……ツナ以外の歴代ボスにはなかった資質を持ちえているんだ。たとえツナがいくら強くなっても、一瞬でも気を抜けばそれこそI世の餌食だ。」

冷静な表情で解析をするのはとりポーン。

獄寺や山本、京子を始めてとするボンゴレの関係者はツナの勝利を心の底から祈っていた。

「十代目……ファイトです……!!」

「ツナ……!!根性見せるよ……!!」

「ツナ君……!!怪我はなるべくしないでね……!!」

それにつられて、一護やなのはたちも応援のエールをツナに向けて送る。

「沢田!!! 気張っていけ!!!」

「綱吉さん!!! 僕達応援していますから、頑張ってくださいね!!!」

シグナムとエリオがツナにエールを送る。

「綱吉君! 京子ちゃんやハルちゃんの前で格好いいところ見せてやりなよ!」

「ツナ! 負けたら貴様の顔に落書きしてやるぞ!!!」

死神側からは井上とルキアがエールを送る。そして、最後に一護がツナにエールを送る。

「ツナ!!! この一ヶ月でお前がどれだけ強くなったか、そいつに見せてやれよ!!!」

全員の応援を耳に入れると、ツナは自然と全員のほうへ振り返り顔を綻ばせた。

「……ありがとう……みんな。」

「本当にお前は恵まれているな、X世。さて……感傷に浸る時間はここまでだ。始めるぞ……X世。」

そう言うと、I世は両手のグローブ大空属性の炎を灯し攻撃の態勢に入った。

ツナもそれを見ると、同じようにXグロープに大空属性の炎を灯し  
I世と向き合った。

ついに始まる・・・時を越えた最強のボス対決・・・今、始まる。

## 第84話：ボンゴレを創りし男（後書き）

### 次回予告

ついに、ツナとI世の戦いが始まりやがった。

流星はI世だけあって、攻撃も防御もその切り替えし全てがツナを上回ってやがる。

ツナもI世に押されながらも、X BURNERや一護との修行で習得した虚化で勝負を挑もうとする。

I世の強力な攻撃に、ツナは何処まで着いていけるのか・・・

次回、次元の破壊者・・・「偉大なるI世」

みんな、死ぬ気で見ろよ。



**第85話：偉大なるI世（前書き）**

今更ながらツナの虚化です

安定した虚化のツナは色々悩みました。

## 第85話：偉大なるI世

ハイパー化したツナと、I世は互いに攻撃の態勢を取ると暫くは出方を伺い硬直する。

その間に虚しくも時間は過ぎていくのを助長するように強い風が二人の前を通り過ぎる。

一護達はその風を防ぎながら二人を見続ける。

そして、ついに二人は動き出す。

二人は同時に攻撃を仕掛けようと一瞬で移動する。

「き……消えた!？」

「いや違う……高速で移動しておるのだ!」

スバルの疑問にルキアがそう答えると、確かにその通りであった。

ツナとI世は人間としては信じられないようなスピードで移動しては拳をぶつけ、交し合いを続ける。

一護達は勿論のこと、リボーンでさえ呆気に取られるほどであった。

「す……凄い!!!今迄のボンゴレのスピードを遥かに上回るほどの速力と機敏さだ!!!」

「俺たちが修行で力をつけている間に、ツナもそれ以上の力をつけてたつて訳か！一護さん、あんた一体ツナにどんなこと教えたんすか？」

「別に。俺はただツナの虚化保持のために正面から向き合ってただけだぜ。特別なことは何も教えてないぜ！」

山本の質問に一護は意外にも漠然とした答えで応答した。

「だが、沢田のスピードも確かに凄いが・・・あのI世の速力と反応能力にも驚かされるな・・・」

日番谷がそう言うので、全員は一度I世の動きをよく見てみた。

日番谷の言う通り、以前よりも格段に成長を遂げたツナの速力にも焦り一つ見せずに冷静な対応能力でツナの攻撃を受け止め、逆に攻撃を仕掛けるI世の動きにも驚かされる一方であった。

「ほえ〜〜〜プリーモさん、何であんな早く動けん！？綱吉君といい勝負・・・いや、ひよつとしたら綱吉君のほうを押されてる！？ねえ、どう思うティア！」

「ひよつとしても何も、綱吉君の方が押されてるはよスバル。流石は歴代ボスで最強と謳われただけのことはあるわね・・・攻撃と防御の切り返しも反応能力も超一級ものね！」

すると、高速で移動しながら互いの拳をぶつけ合っていたツナとI

世は一度大きく距離を取った。

すると、直ぐにツナはナッツを取り出し肩に乗せる。

「ナッツを取り出したって事は……十代目はまさか!？」

「ああ……原型のボンゴリングの力を存分にI世に披露する気だな……」

リボーンがそう言うと、思惑通りツナはナッツを形態変化させI世のガントレットにした。

原型のボンゴリングの力によりナッツの形態も仮の頃の力と比べるとそれが顕著に現れ、赤を基調とするものになっていた。

「やるぞ……ナッツ!」

すると、ツナは炎を最大限まで噴射させI世に向っていった。

それを見たI世はほくそ笑みツナに迎え撃つ。

「俺と力技で勝負するつもりか……面白い……」

すると、I世はツナと同様に右手のグローブに全身の力と大空の炎を集中させ、死ぬ気の炎で出来た炎のガントレットを纏わせツナの攻撃を待ち構えた。

「来い……X世!!」

「・・・行くぞ!!」

ツナとI世は右手に集めた自身の究極の一撃をお互いにぶつけ合った。

「バーニングアクセラ!!!」

強大な炎の一撃がぶつかり合い、二人の周辺の地面はめくれ上がり巨大な爆風が伴った。

そして、強烈な光が発生し離れた場所で見ている一護達の視界を容赦なく降り注ぐ。

「くっ!!強烈だぜ・・・これは!!」

「なのはママ!!眩しい!!!!」

「ヴィヴィオ!!絶対にママのそば離れちゃ駄目だからね!!」

一護達は発生した強烈な光を手で遮りながら、片方の目だけでもツナとI世の戦いの様子を必死に見ようとした。

やがて、光が収まり両目が見えるようになるった。

そして、両目を使って全員が前を向いてみるとそこには既に大きく距離を取って牽制し合う二人がいた。

「ツナ君!!」

「はひー！ツナさんの技を相殺させちゃったんですか、プリーモさん！？」

「違う！僅かだけど・・・ボスの右手のほうを見てみて！」

クロームが京子とハルにそう指示すると、ツナの右手のグローブは僅かにだがクリスタルに輝が入っていた。

ツナも息を上がらせナッツもツナの肩の上でボロボロの状態となっていた。

「何と！？沢田のグローブに輝が入ったと！！！？？」

「ナッツ君もかなり酷いダメージを受けているし、綱吉さんもかなりのエネルギーを消耗した筈ですよ！？」

キャロが心配そうな眼差しでツナとナッツを見ていると、フェイト達は逆にI世のほうを見てみた。

I世のほうはと言えば、多少グローブから湯気は出ている者の、目立った外傷も息も上がりず全く表情を変えていなかった。

「う・・・嘘やろ・・・！？綱吉君のバーニングアクセルを相殺したとはいえ、表情何一つ変えていないなんて！？」

「やっぱり・・・只者じゃないね。リボンさんの言う通り、この戦い・・・一瞬でも気を抜けば間違いになくやられる！！！」

「でも、まだまだ綱吉君は負けてないよフェイトちゃん！この一ヶ月で綱吉君がどれだけ成長したかは、一護君や京子ちゃんが一番知ってるはずだから、ねえ二人とも！」

なのはにそう言われると、隣に居た一護と京子は頷いた。

「ああ！確かにI世は強いかもしれないが・・・ツナだってまだまだこれからだぜ！あいつの力は、こんなところで終わったりはしねえ！」

「そうですね。一護さんの言う通り、私はこの一ヶ月間ずっとツナ君の修行を見てきたんです。ツナ君がどれだけ強く逞しくなっただかを見ていた私と一護さんが一番理解しています。ツナ君は・・・負けません！」

すると、ツナはナッツを肩に乗せたまま両手のグローブに先程よりも大きな炎を生成し、それを連発してI世にぶつけていった。

「『フレイム・フィスト炎の拳』!!!」

連発される巨大な炎の塊がI世に襲い掛かる。

I世は炎の推進力でそれを上手い具合に避けながら、ツナと同じように死ぬ気の炎を加工した技を出してきた。

「『バーニングブラスト炎炎装弾』！」

それは茶渡の巨人の一撃同様、収束した死ぬ気の炎を勢いよく発射

すること、対象物を破壊するものである。

ツナは直ぐに右手の手の平と左手の手の甲を相手に向けて組み合わせ、四角形を作る独自の構えを取って、I世の攻撃を受けた。

爆風が晴れI世が空中でツナを確認すると、ツナは攻撃を受けることなく無傷の状態だった。

「なっ！？無傷・・・やって!？」

「けど、あの時確かにあの野郎はプリーモの攻撃をまともに喰らったはずだ!!なのにどうして!？」

ヴィータが驚愕してそう言うと、リボンがそれに返答する。

「あれは死ぬ気の零地点突破・改。I世が編み出したとされる技で、死ぬ気モードとは逆の境地にあるマイナスの状態に位置する技だ。ツナの場合、あれは完全なツナ独自の技で・・・炎の属性は問わず、相手の死ぬ気の炎のダメージを軽減するだけでなく、吸収して自分のエネルギーに変換することができるんだ。」

それを見ていたI世はほくそ笑み、期待感を膨らませる。

「ほう・・・俺の技を吸収するとは・・・流石だな、X世。それでこそ俺の認めた男だ!」

「今度はこっちからいかせて貰うぞ!」



すると、ツナはI世から奪った死ぬ気の炎をエネルギーを使い、先程異常の速度でI世に接近していった。

「……（やはりあれはエネルギーを吸収して自らの力とする技か！？）」

I世自身も直ぐに己の超直感でそれを見極め、背後に回り込んだツナを察知すると攻撃を仕掛けられる前にグローブの炎を大きくし、背後のツナ目掛け攻撃を仕掛ける。

「やべー！！読まれてやがる……！！」

「そう言や、あいつも超直感持つてんるだけか……？」

恋次と一護が焦りを見せながら、ツナを心配しているとツナ自身もI世の動きを超直感で予測し、ナッツに指示を出す。

「ナッツ……！！」

ナッツはツナの声に反応すると、一瞬のうちにI世のマントへ姿を変えI世の拳を防いだ。

「……！！」

I世はツナとナッツの反応速度とコンビネーションに感服する。

そして、ツナは右手を顔に近づけ軽く手で払うと……

一護とリボンと京子とコン以外の全員は驚きを隠せなくなった。

ツナは一護に言われたとおり虚化をして、爆発的に戦闘能力を上昇させた。

ツナの仮面はシンプルな髑髏状のもので、左右が血のような色の紋様に覆われている。

I世はこの姿のツナを見た瞬間、度肝を抜いた。

> i 5 5 2 3 | 7 0 9 <

「はひ！！あれがツナさんの虚化ですか！！」

「うん！最初は怖かったけど、もう前みたいに暴れたりはしないから安心して、ハルちゃん。」

「よっしゃ！ツナ、俺様との修行の成果を見せ付けてや・・・ぶっほ！！！！」

そう言うと、ぬいぐるみ状態のコンを一護が理不尽にも容赦なく踏みつける。

「おめえはただ京子にセクハラしようとしてただけだろうがよ！！」

「あれが綱吉君の虚化か・・・どうやら霊圧はかなり安定しているようだな・・・（一護君との修行で、どうやらほぼ完璧に虚化を使いこなせてるようだな。だが、それで本当にあの男を倒すことは

出来るのか！？いや、寧ろ力が巨大すぎるのではないか！？」

浮竹はそんな不安と危惧を抱えながら、虚化したツナを見上げた。

虚化したツナは高速の連打をI世に浴びせI世の動きを掌握する。

I世は先程までとは戦闘能力が格段に上がったツナの攻撃を防御することだけで精一杯だった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！！！！！！！！！！！」

そして、ツナの力に圧倒され後方に飛ばされる。I世は後方に飛ばされながらも炎の推進力でどうにか空中でバランスを保ち、ツナの急激な変化に驚くばかりだった。

「（何だあの姿は？何だあの力は？まるで何か別のものの力をー  
ー・・・・・・・・）」

すると、I世の眼前に虚化状態でX BURNERを撃とうとするツナが目に入った。

「・・・・・・・・終わりだ。X BURNER スーパードヴァ 超新星！！！！」

ツナは通常のイクスバーナーの炎圧に虚化したときの力も同時に加えた最終奥義をI世目掛け発射した。

通常の炎圧を超え、50万FVを超えた剛の炎と虚化の力が合さった絶大な力がI世に容赦なく襲い掛かる。

Ⅰ世は一度地面に着地し、グローブの周りに炎を集中させ、イクスバーナーを止めようとする。

最初は片手で止めようとしたが、余りにも力が巨大すぎて片手では無理と判断し、両手を使ってみた。

だが、それでもツナの技のパワーに身体が持たず、地面を削りながら徐々に後へ下がっていき・・・とうとう耐え切れなくなった。

「・・・・・・・・莫迦な!!!」

イクスバーナーが決まった瞬間、Ⅰ世はイクスバーナーに直撃しその場で超新星が爆発するが如く超弩級の爆発が発生した。

その衝撃は遠く離れた場所で観戦していた一護達にもしっかり伝わっていた。

全員は余りに常識離れたツナの技の破壊力に圧倒させながら、吹き荒れる風を避けようとした。

「!!!!・・・・・・・・どう・・・・どうなったんだよ一体!？」

「無茶苦茶な力使いやがるぜ!!!あいつ・・・・・・・・!!!」

「プリーモさん・・・大丈夫でしょうか!？」

スバルはツナの技の威力に驚きながらも、技を直撃したⅠ世の安否

を気遣っていた。

やがて、巨大な爆風が晴れてツナの姿が露になった来た。

ツナはナッツともども満身創痍となり、虚の仮面は碎け散り息を上げらせていた。

I世の周りの爆風はまだ晴れてはいなかったが。

「はっ、はっ、はっ、はっ！！」

ツナの姿を確認した一護達は、取り合えず安心してツナの名を叫んだ。

「ツナ！！！」

「十代目！！！！」

「沢田！！！！無事だったのだな！！！！」

京子やハルはツナの無事を確認すると、嬉しさのあまり涙を流し抱き付き合った。

一護やなのは達も少々焦りはしたが、ツナの安全を確認すると安堵のため息を吐いた。

「たく……冷や冷やさせるぜ……」

「せやけど……大した外傷もなくてホント良かったわ……ねえ、リボン君……ん！？」

はやてが何気なくリボーンにそう尋ねると、リボーンは何故だか浮かない顔をしたままI世のいるところ見続けた。

「どうしたん、リボーン君！？そんな浮かない顔して・・・？」

「・・・喜ぶのはまだ早いな。I世の力は俺達の想像を絶するものがあるからな・・・気は緩められないな。」

リボーンが真顔でそういつてる間、ツナは共に戦ってくれたナッツに感謝の言葉を掛けていた。

「・・・悪いな、ナッツ。いつも無理ばかりさせて。それと・・・ありがとう」

「ガウウ・・・」

ナッツはかなり嬉しかったのか、そう言われるとツナの右頬を舌で舐め始めた。

ツナはくすぐつたいといいながらもナッツの行為を素直に受け止めていた。

すると、ツナの身体に悪寒が走った。

そして、徐にI世が居るはずであろう爆風が収まりつつあるほうへ振り返ったとき、ツナや一護達全員は衝撃的な光景を目の当たりにした。

「・・」

何・・・・・・・・・・・・・・・・だと・・・・・・・・・・」

ツナはその光景が信じられず思わずその言葉を口にした。

ツナ達が見た光景とは、I世の周りにはいたるところに巨大な氷の塊が出来ており、I世自信もそれなりの傷と火傷はしているものの、呼吸も乱さず貫禄を見せ付けるかのようにツナの前に立っていた。

「・・・・・・・・やれやれ・・・・・・・・両手を使っても止め切れんとはな・・・・・・・・  
・少し驚いた。」

一方、その頃そんなI世の様子と周りに出来た氷の塊に六課一同は驚きを隠せずにいた。

「あの攻撃を受けて・・・・・・・・まだ立っているなんて・・・・・・・・」

「信じられない・・・・・・・・!!」

「それに・・・・・・・・何なんや・・・・・・・・あの氷の塊は!?!あんなもの、さっきまではなかったはずやで!?!」

すると、そんなはやての疑問にリボンが真顔で説明をし始めた。

「ありや、死ぬ気の零地点突破・初代エディションファーストって言ってな・  
・I世が開発した伝説的な技で、自らの死ぬ気の炎を強力な冷気に  
変換して対象を凍らせることができるんだ。」

「なっ!?!じゃあ、プリーモさんは綱吉君のX BURNERを凍

「らせたってこと!？」

ティアナが慌てた様子でリボンにそう尋ねると、リボンはああと言ってさらに続ける。

「あの技は現時点ではI世を除けばツナとボンゴレ9代目を使用することが可能だ。おそらく、虚化したツナのX BURNERを喰らう直前、I世は技の威力を凍らせることで軽減し、衝撃を最低限に抑えたんだろう。最も、I世自身もこれほどの威力だとは思ってもいなかっただろうな。」

そんな話をしているリボン達とは違い、ツナは自分の最大技がI世の手によってこちらも簡単に防がれてしまうものとは思っておらず、その光景を信じたくなかったのだった。

すると、徐にI世がツナにこう言った。

「今のが、全力かX世？」

ツナの応答を待つI世だが、ツナは何も言葉を発さずI世に驚くばかりであった。

「……どつやらそうらしいな……ならば最後はこちらの大技でしめさせてもらおうぞ。」

I世は軽く肩の汚れを手で払うと、全身に大空の死ぬ気の炎を纏い巨大な球体状のフィールドを発生させた。

ツナと一護達は何が起こるかわからずと惑うばかりだった。



そして、I世は纏わせた炎を一斉にツナ目掛けミサイルのように発射した。

「『フレア・ドライブ火炎の暴走』！！！」

ツナの頭上から襲い掛かる高速の炎の雨が一斉にツナ目掛け落とされた。

その瞬間、ツナの周りは巨大な炎と爆発音に見舞われ、一護達はツナの安否を気遣う。

「ツナ！！！！！」

「ツナ君！！！！！」

強烈な爆音と炎の雨が容赦なく降り続く。

一護やボンゴレ関係者やなのは達はI世の驚くべき能力に言葉を失った。

そして、炎の雨が降り止むと・・・爆風の中から攻撃を直に浴び、満身創痍で大火傷を負ったツナが意識を朦朧とさせながら辛うじて立っていたが、やがて全身の力が抜けてナッツはボックスに戻り、ツナはその場に倒れ込んだ。

「十代目！！！」

「ツナさん！！！！！」

「綱吉君!!!!」

一護達は全員急いでツナの元に駆け寄った。ハイパー化が解かれ、気を失っているツナをゆっくりと一護が起こし、井上に急いで介抱をするように頼む。

そして、井上が介抱をしているとツナが徐に意識を取り戻す。

「ツナ・・・大丈夫か!？」

「一護さん・・・・・・・・はい・・・何とか・・・俺・・・負けちゃいました・・・」

「そんなことはないぞ!! 沢田は極限よく戦った!! それは誰しも認めることだ!!!!!!」

「そうだよ。綱吉君はただ負けたんじゃないよ。全力を尽くして、あのプリーモさんにあんなに傷を負わせることが出来たんだよ。もっと自信を持って、ね!!」

了平やなのはを始めとするここに集まったメンバーに励まされると、ツナは自然と目から涙を流し嬉しくなった。

「・・・ありがとう・・・みんな・・・」

すると、そんな全員のところへI世がゆっくりと近付いてくる。

全員は一度I世のほうへ振り返り、今一度I世の身体の傷をよく見てみた。

すると、顔はポーカーフェイスを気取っているが実際はかなり辛そうな雰囲気醸し出していた。

一護は鼻で笑うと、I世にこう言った。

「あんたもそうだが・・・辛かったら素直にそう言えよな・・・」

「済まない・・・癖なんだ。それより、X世・・・」

「えっ!？」

ツナはI世に呼ばれると、重い身体を起こしてI世のほうへ目を向けた。

すると、I世はツナのほうへ近付きしゃがんで視線を落とすと、顔を綻ばせてツナにこう言った。

「強くなった・・・俺の想像を遥かに超えるほどに・・・」

I世にそう褒められると、ツナは父親に褒められたときと同じ気持ちになったように急に照れくさくて視線をそらした。

そんな様子を見ていた一護たちは笑いをこみ上げた。

すると、それを聞いたツナもI世も同調されるように一緒に笑いをこみ上げたのであった。



## 第86話：主要戦力結集

ツナとI世の激しい戦いが済み、あっという間に夜になった。

I世は全員に感謝をしつつ見送られながらもとの場所へ帰ろうとしていた。

一護やツナ、なのは達は短い時間ながらも一緒に居られたことを心底貴重だった実感している。

「ほんとに行っちまのうかよ。出来ればもう少しここに居ればいいのに。」

「折角の心遣いはありがたいが・・・俺は元々本来記憶だけの存在。あの男が言った通り、余り長い時間ここに居すぎるとそれこそX世やお前たちに迷惑を掛ける。」

「そうですか・・・じゃあ、今日は本当に来てくれてありがとうございまして。」

「ほんなら・・・機動六課ならびに死神、ボンゴレファミリーの全員・・・プリーモさんに敬礼！」

はやてがそう言うと、一護達全員はプリーモに綺麗に揃った敬礼をした。

プリーモもそれに応えるかのように同じように綺麗に揃った敬礼を

する。

そして、それが終わるとツナに最後の一言をかける。

「X世・・・今日は本当に楽しかった。ボンゴレを継いでくれたのが本当にお前でもよかったと思ってる。俺としても、こんな忌まわしい歴史をお前に託してしまったことを心の底から済まないと思ってる。」

すると、そのI世の言葉を聞いたツナが意外なことを口にした。

「いいえ・・・俺は今更そんなこと気にしたところでしょうがないですよ。寧ろ、この出会いは俺を変える為のいい機会だったんですから。大丈夫です・・・俺は皆と一緒にいるから、何でも乗り越えられますよ。あなたが残したボンゴレの歴史は、ちゃんと俺たちが受け継ぎ変えてみせますよ。」

ツナの覚悟の籠もった瞳と言葉を聞いたI世はほくそ笑み、真之介の出した灰色のオーロラを潜り抜けようとする。

だがその直前、I世は急に立ち止まりリボーンに一言をかけた。

「アルコバレーノリボーン・・・X世のことを任せただぞ・・・」

「ああ・・・俺に任せておけ！ツナの奴は俺が立派に教育してみせるからよ。」

「そうか・・・それから・・・黒崎一護。」

一護はI世に意外にも声を掛けられ事に驚きを隠せずに行った。

「短い間ながらも・・・X世を鍛えてくれたこと・・・感謝するぞ。」

「・・・ふん、礼なんかいらねえさ・・・こっちのほうが、逆に感謝してるほうなんだからな・・・」

「・・・ふん。」

I世は鼻で笑うと、ゆっくりと前を向いてオーロラの中へ歩いていった。

そして、全員に温かく見守られながらI世はオーロラと共に消えていった。

そして、I世が無事に帰って行ったその日の夜・・・一護とツナとなのはは真之介に呼ばれた。

「何だよ真之介。俺たち三人呼び出したりして・・・」

「何か大事なこともあるの?」

なのはがそう言うと、真之介は真剣な眼差しでこう切り出した。

「そろそろお前達には三人で一緒に修行をするときが来たかと思っ  
えさ・・・実際、ツナの虚化のほうは今日見たところかなり使える

ようになってきたし、なのはも浮竹の話の聞けば斬魄刀とレイジン  
グハートの併用も使いこなせるようになってきたしな。明日からは  
もう三人で一緒に修行をしてもいいじゃないかと思うんだが？」

「ほんと！良かった・・・俺、虚化それなりに扱えるようにはなっ  
てきたけどまだまだだと思ってたから・・・」

「実は私も！浮竹さんにはまだまだ手厳しく扱かれると思ってたん  
だけだな。」

「なのはが扱かれる・・・か。これじゃ、戦技教官としての面目丸  
つぶれだな・・・」

「ああ！！一護君それ結構気にしてたんだから、もう！！！」

なのはが一護の何気ない一言に頬を膨らませると、それを見ていた  
ツナと真之介は笑い出した。

それにつられて一護もなのはも笑いをこみ上げた。

「よし！そんなじゃ明日から三人で修行開始に全会一致ってことで決  
まりだな！いいか、くれぐれも手なんか抜くんじゃねえぞ！お前ら  
ここの主要戦力・・・俺らの要なんだからな！」

「分かってるよ。もっとも、こっちもいい加減あれ使わないと身体  
が鈍っちまいそうだからな。」

「俺も。なのはさんや一護さんに俺がどれだけ強くなったかを見せ  
てやりますよ。」



「二人とも自信満々のようだけど。年功序列っていうことを忘れてないでほしいな・・・私だってこの一ヶ月でどれだけ強くなったのかを、二人に見せ付けてやるんだから！」

三人には互いに火花を散らしあい、明日からの合同修行に向けて熱く燃え上がっていた。

それを見た真之介は安心したのか、鼻で笑うと徐にその場を後にした。

そして、いよいよその日がやって来た。

京子やヴィヴィオ、コンが見守る中三人は中庭に集まり、それぞれ別々の配置に着いた。

そして、一護は死神化・ツナはハイパー化・なのははエクシードモードで星海を開放し、お互いを睨み合った。

「準備はいい、二人とも！？私は年下だろうが訓練には手加減しないよー！」

「ああ・・・俺も同じだ。」

「おっと！ちょっと待ってくれ・・・俺はまだ準備が整っちゃいないぜ、ツナ・なのはー！」

ツナとなのはが同時に驚き、一護のほうを見つめてみた。

一護は二人よりも高い場所で自身に満ちた表情を浮かべる。

「どづいうこと、一護君！準備が出来ていないって!？」

「お前の武器はその斬月だろう・・・他に何が準備する必要があるんだ!？」

ツナがそう言つと、一護は鼻で笑つと徐に斬月を正面に突き出し、刺突のような構えを取るつた。

「てめえらにはまだ見せてなかった・・・俺の本当の力を。しっかり見とけよ、こいつが俺の・・・卍解だ!！」

「「なつ!?!?卍解!!!」」

すると、驚くツナとなのはを他所に一護の身体から黒い霊圧が滲み出しそして一護は大声で卍解と口にする。

「卍・・・解!!!!!」

すると、一護の斬月が凄まじい勢いの霊圧が飛び出し巨大な黒い霊圧の竜巻が一護とツナとなのはの周囲に発生した。

ツナとなのは霊圧の勢いに耐えながら、竜巻に囲まれ何も見えないでいる一護のほうを見ようとした。

「そう言えば、一護君にも……卍解が出来るってこと……真之介君から聞いてたっけ!？」

「俺の修行のときはそんなもの一度も見せなかった!?!ひょっとして、この時のためにとっていたのか!?!」

そして、徐々に黒い霊圧の竜巻が収まり一護の周りが晴れていった。ツナとなのは瞑っていた目を徐に開け、一護がいるほうへ目を向けてみた。

すると、二人の目に映ってきたのは……全てが漆黒の日本刀で、普通の日本刀より少し長く、卍型の鍔、柄頭に途切れた鎖がついており、一護本人は具象体斬月の黒いロングコートに似た独特の死覇装を纏った姿だった。

驚愕する二人に一護は徐に名を口にした。

「『天鎖斬月』」

「何だ……それは!?!そんな小さなものがお前の卍解だ……!?!」

「ただの斬魄刀にしか見えないよ……一護君!?!」

「だったら……試してみるか。俺の卍解とツナのハイパー化、な

のはのレイジングハートと星海。どちらが上をいつているのか。」

余裕の表情で二人を挑発する一護。

すると、ツナもなのははその挑発を受けて立とうばかりの表情を見せると、二人は互いに向き合いそんな不遜な一護を協力して倒そうと言ってきた。

「あんなこと言ってるよ、綱吉君。ああ言う調子に乗る子供には・・・少しきついお仕置きが必要だね・・・」

「ああ・・・俺たちの力をあいつは少し見くびってるようだ・・・なのは、あいつに目にももの見せてやるぞ。」

「ふふ・・・了解！」

そう言うと、なのはは笑顔でツナに返事をする和一護の方へ目を向ける。

ツナもナッツを取り出し戦闘態勢に入る。

「一護君と直接戦うのはこれが初めてだけど・・・あまり人を小ばかにするのも大概にしなよ。」

「ああ・・・自分の力に自惚れるのは俺たちに勝ってからにしろ！」  
すると、それを聞いた一護はそんな二人をさらに挑発するかのよう  
に鼻で笑う。

「別に自惚れてなんかいないさ・・・そういつてめえらこそ、自分

の力に溺れて俺の力を見縊るんじゃないぞ。」

一護、ツナ、なのはは互いをにらみ付け合い牽制し合う。

そして・・・不意に吹いた向かい風と共に三人は同時に適に向って飛び込んでいった。

その速度を最早常人の目で捉えることは不可能に近かった。

その頃、なのはとの修行を一段落終えて他のメンバーの修業を見回っていた浮竹は同じ隊で直属の部下でもあるルキアが修行をしている間接フロント組みの様子を緑茶を飲みながら温かく見守っていた。

「・・・ふむ・・・なかなかいい形になってきた・・・全員の動きも・・・」

ルキアを始めとする井上、クローム、ティアナのまとまりのある動きと連携を見て浮竹は生徒を優しく見守る教師のようにルキア達の成長を見届けいた。

すると、そんな浮竹の後からリボーンがやって来た。

「ふん。こんな処で呑気に茶なんか飲んでいやがるとはな・・・随分悠長だな。」

リボーンの声に反応して、浮竹は傍まで近寄ってきたリボーンに曇り気のない笑みで返事をする。

「ああ、リポーン君か。イヤなに……ちょっと休憩がてら見物をね。」

リポーンはそう言われると、浮竹の隣に胡坐をかいて座って四人の様子を見てみた。

「クロームたちも随分と遅くなってきたな……」

「そうだな。これから始まる決戦に向けて修行を続けて早一月。」

「それにしても……修業というわりには四人ともバカに楽しそうじゃねえか……」

「あ、君もそう見えるかい？朽木はな……昔から友達を作るのが下手な子でな。まあ、なかなか心を開かない所為なんだがな……」

「それを言うなら霧の守護者のクローム髑髏も同じだぞ。あいつは……幼い頃に愛情を全く見せない両親に育てられて、昔から心を閉ざしたままだった。だが、京子やハルにお陰もあつてか……最近は漸く心を少しずつだが開くようになってきやがる。」

「成る程……どこの世界でも、友達を作るのが得意な子もいれば下手の子もいるものなのか……」

浮竹はリポーンの話の聞くと、徐に手にもつ湯飲みのお茶を啜る。

「……昔な、死神の最大の宿敵だった藍染との決戦に備えてな……あの井上織姫ちゃんと朽木が一緒に修行した事があってね。今回も、また別の友達と仲良くなれたみたいで本当に良かった。良い友達が出来てよかった。」

浮竹は満面の笑みでそう言うと、それに水を差すかのようにリボーンが横から口を出す。

「……それが別の世界の人間でも……か」

そう言われると、浮竹は苦笑いを浮かべながらリボーンに言葉を返す。

「それを言つなよ。」

「……ふん、おっとこいつは失言だったな。だが、クロームもそう言う風に見れば……ルキアと同じことが言えるかもな。あんな生き生きとしたクロームを見たのは……始めてかもな……」

「どんな形であろうと、歩み道や場所は違ってても、友達つてのは良いもんさ。それにホラ何だ……あの子達は何だかんだ言つて結構似たもの同士なんだよ。真面目で、心優しい反面……それが逆に自分を追い込んでしまうことがある。同じようなものは自然と集まつて仲良くできるものさ。」

浮竹がそう言うと、リボーンも鼻で笑い納得した様子だった。

「そう言えば君こそどうしたんだこんなところまで？君の修行はどうしたんだ？」

「今ははやてとリインが真之介にみっちり扱かれているところだ。俺の修行は午後からだ……」

「そうか。色々大変だなそつちも。」

「ふん・・・大したことじゃねえよ。俺は世界最高のヒットマンだからな、あいつが俺を苛めてくるならそれ以上の力で苛め返すだけだからな。」

「はははは。実に頼もしいな君は・・・流石、アルコバレーノリボーンってところか。ところで、君の生徒の綱吉君と俺が見ていたなのは君が今一護君と修行しているはずだが・・・見に行かないのか？」

「そうだな・・・そろそろそつちも気になるし行ってみるか・・・」

浮竹にそう諭されたりボーンは、徐に立ち上がると浮竹の背に歩いていった。

「正直なところ・・・あの三人の中で誰が一番強いと思う？君は当然、綱吉君だって言うとは思っけどな・・・」

すると、そんな浮竹の質問を聞いたリボーンは鼻で笑つと意外なことを口にする。

「それは無えな。勿論ツナも強えが、なのはだつてめっちゃ強えぞ・・・でも、俺個人としての感想を言うなら、一番は一護だけだな・・・」

ニヒルに笑いリボーンは浮竹を後にし、中庭のほうへ向った。

そんなリボーンを見送りながら浮竹はしみじみとこんなことを思っていたのだった。



「・・・一月か・・・絆を結ぶには短く・・・力を蓄えるには更に短い時間だ・・・願わくば、この事件を解決し仮初の平穏が長く―――続いてほしいものだな―――」

そして、その四日後・・・事件は起きることになったのだった。

## 第86話：主要戦力結集（後書き）

### 次回予告

一護とツナとなのはが合同の修行を開始して四日後・・・

この世界の都市の中心に、黒腔を裂いて四人の十二使徒が現れ町を破壊し始めた。

その様子を映像で見た俺達は、直ぐに真之介とともに都市へ向かった。

ついに、俺達と十二使徒との全面戦争が勃発する。

次回、次元の破壊者・・・「強襲、十二使徒」

俺達は・・・勝ち残ることが出来るのか！？

第87話：強襲、十二使徒（前書き）

今回から更新のペースを一日一回に決めます。そのほうがこっちも何かとネタ集めに都合が良いので。

## 第87話：強襲、十二使徒

一護とツナとなのはが合同で訓練を始めて既に四日が経った。

そんな一心不乱に来たるべく決戦に向けて修行をし続ける一護達とは打って変って、この世界は次元の破壊者により破壊活動を受けずに今日まで平和と均衡を保ち続けている。

この世界の中心にはおよそ三億人以上の人と数百の生き物があつまり、変わることに無い日が無い一日を人々は何時ものように送る・・・  
・答だった・・・

そんな今日・・・人々の知らないところで奴らの間の手が伸びてきた。

一般人には決して見ることは出来ないが、この世界の都市の頭上の空が何やら歪み始めていた。

すると、その歪みは大きくなりやがて空を引き裂くように空間がゆがめられ黒い穴が現れた。

そう、ガルガンタ黒腔である。

その中からは・・・如何にも殺意と不気味な雰囲気を漂わせた四人のものが姿をあらわした。

全員は空中に足場を作ると、徐に下の方に広がるビルや有象無象を

神の如く見渡した。

「オウ？いゝい場所に出られてたじゃねえか！オマケに美味そうな餌の匂いもプンプンすんな」

「そそるなゝゝこうして見ると、人間っていうのはつくづく物好きな生き物だよな。何れ死にいくとわかっていながら群れて戯れる。そしてその戯れの中に自己を見出そうと必死になる・・・実に面白かったらありゃしない。」

そう言うのは、白い虎柄の毛皮を身に纏った大柄の男と馬のひずめの形をしたライターで煙草をふかす目の辺りだけを仮面で覆った細柄の男だった。

すると、二人の左隣に立つ若干まだ眠たそうに髪を掻き毟る中年の男が気だるい声を出す。

「ハアゝゝゝどうでもいいけどよ、何でわしがこんなことしなきゃいえねえんだよ・・・」

「バカ！仕事だからに決まってるだろうが！！つべこべと文句をいってる暇があるなら、シヤキつとしろよ！」

「ハアゝゝゝうるせーな・・・まったく、あの陰険めヘロ・・・何で態々わしを連れて行くんだよ！もつと暇そうな奴なら他にも沢山いる

だろうが！たく・・・かつたりー・・・早く帰ってもう一眠りして  
ーーー」

すると、その男はその場に胡坐をかいて全身の力を抜き始めてた。

すると、それを見た一番右側に立つ袈裟を身に纏った赤ん坊がこんなことを言い出す。

「まあそうがっかりするな。これが上手くいけば、おそらく臨時ボーナスが貰えるかもよ・・・」

すると、ボーナスという言葉聞いた瞬間その男の態度が一変した。

「何、ボーナス！？よっしゃあ！！！！そういうことならわしに任せろ！！！！早いとこんな仕事を終わらせて臨時ボーナスを貰うぞ！！！！うっしっし・・・ボーナスが貰えれば、プラモにゲームは勿論・・・あれもこれも好きなものが帰るぞ・・・！！！！」

男は一気に元気を取り戻してまだ貰えてもないボーナスの使い道を勝手に膨らましながら不気味な笑いと共に多量の涎を垂れ流していた。

それを見た三人は同じことを思った。

「「「（・・・・・・・・この守銭奴が・・・）」」」

そんな妄想を膨らます男をほっといて、この四人の中心となつていく袈裟を着た赤ん坊は残りの二人に今回の作戦を発表する。

「あいつはほっとくとして・・・それより今回の作戦だが、分かっ

ているとは思うが俺達は忠実にあいつの言われたとおりに動けば良いだけだ。つまり、おとなしく連中の目をこちらに向けさせれば一切問題ない。」

「ああ、分かってるさ・・・で、どうやって誘き出すのが一番手っ取り早いんだ・・・ドラコ?」

「取り合えずバトルマンガの定番なら・・・敵がヒーローを誘き出すによく使うのは手当たりしだいに町とかを破壊して関係ない奴を巻き込むこと・・・つまり・・・」

そう言うと、袈裟を纏った赤ん坊・・・ドラコは二人に真下のほうを指差した。すると、二人もそれを理解すると顔を見合わせ不敵な笑みを浮かべる。

「よーいし!!! いっちょやりますか、カバロ!!!」

「そうだな、ティグレ!!!」

すると、大柄の男ティグレと目の辺りを仮面で覆うカバロは一瞬でその場からいなくなり何処かへ行ってしまった。

すると、今迄妄想に耽っていた中年の男もそれに気付き慌てる。

「お、おい!!! お前ら。わしを置いて勝手に何処かへ行くんじゃない!!!」

中年の男も急いで二人の後を追うかのように瞬間移動でその場から消えた。

三人が居なくなつて一人となつたドラコは両手を袈裟で覆い隠すと、自分もやがて三人と同様移動をし始める。

「さてと……俺も”捕食”の時間とさせていただきますか……」

一方、そんな事などは露知らずアイゼンハウアー邸では相変わらずな様子で一護達は修行に明け暮れていた。

アイゼンハウアーはそんな全員の修行を中央モニターで確認しながら静かな部屋でのんびりと茶を啜っていた。

「ホウ……若い者は本当元気があつて良いな……まるで昔のわしを見ているかのようじゃな……昔はわしも政府の諜報部では歴代最強と謳われ、女子からは毎日のようにプレゼントが届いたものじゃな。今にしてみれば、それも全て懐かしく思えるの……」

そして、徐に目を瞑り昔の自分を思い返しながら手に持つ茶をまた啜る。

その時だった……突然、アイゼンハウアー邸全体に第一級警戒アラートが鳴り響く。

部屋のあちこちからはそれを知らせる赤いランプとサイレンの音が響き渡る。



アイゼンハウアーは勿論、邸内で修行をしていた一護達の耳にもしつかりとそれは入った。

「な・・・なんだ！？これは一体！？」

「もしかして・・・非常事態警報か何かかな！？」

「とにかく、行ってみましょうよ一護さん、なのはさん！！」

中庭で修行をしていた一護達は一端修行を中止してアイゼンハウアーの下まで急いだ。

他の者たちも続々と修行を中断して駆け足で集まってきた

。一護達が駆けつけた頃には既に真之介を始めとする全員が集まっていた。

「爺さん！！一体どうしたんだ！？」

「何かトラブルでも合ったんですか！？」

ツナが息をあげながらそう言うと、アイゼンハウアーが険しい表情を浮かべて中央モニターのスイッチを切り替えた。

「トラブルも何もこれを見てくれ・・・いよいよそのときが来たようじゃ・・・」

そう言うと、アイゼンハウアーは一護達全員に中央モニターを見るように指差した。

そして、全員が徐にモニター画面を覗いて見ると、そこに映し出されたのはとてもあさましい光景だった。

それを見た瞬間、一護達は凍りついた。

「なっ!?!なんだ・・・よ・・・こりゃ・・・!?!」

中央モニターに映っていたのは、この世界の中心都市が無惨にも破壊尽くされ見る影もなくなって高配した廃墟と多くの者が逃げることも虚しく血を流しながらビルの破片に押し潰され死んでいた光景だった。

崩れ落ちたビルからは未だに炎が昇り火の粉が逃げ惑うものへと移っていた。

「一体どういうこと・・・!?!何で町がこんなことに・・・!?!」

スバルが中央モニターの映像に愕然としながら、そう口にする。

すると、隣に立っていた真之介が何かに気付く。

「あ!おい爺!?!右上のほうのビルにカメラを目いっぱいアップしてくれ!?!」

「分かった!」

アイゼンハウアーは真之介に言われたとおり右上のほうをアップにした。

すると、そのビルの欄干に高笑いを上げながら喜ぶ大柄な男の姿を目撃する。

「何だこやつは！？こんな光景を目の当たりにして何故笑っている！？」

「落ち着け了平。おそらくあいつは十二使徒……いよいよ俺たちに戦争を吹っかけてきたらしいな……」

真之介の言葉を聞いた全員一瞬真之介を見たまま凍りついた。

「本当か、真之介！？それで、数は何体分かるか！？」

愕然とするルキアにそう言われると、真之介は自分の神経を研ぎ澄ませて作り出したコード状のものを中央モニターのプラグに接続すると、神経を研ぎ澄ませ数と位置をモニターのセンサーに表示した。

「ちょうど四方に一体ずつの四人……全員それなりの能力もあると見た。おそらく、俺たちを燻りだす為に態と町を破壊して気付かせようとしたんだ。」

「酷い……これがあいつらのやり方なの……！？これじゃただの殺戮じゃない！？」

フェイトが目を見開き十二使徒の非道な行動を信じられずに居ると一護は床におもいつきり拳を殴りつけて怒りを露にした。

「ふざけんな！！！！関係ない奴を巻き込んでまで俺達を燻り出すなんて真似しやがって！！！！それが連中のやり方かよ！！！！許さねー

「……絶対に許さねー……！！！」

「ああ……一護の言う通りだ……俺も今キレれるところだ……ツナ、怒りをぶつけるならあいつらを直接殴るまで取っておけ。獄寺たちもだ。」

リボンがそう言うと、ツナをはじめ守護者全員は込み上げる怒りを抑えながらも拳には力を入れ続けた。

「俺……正直こんなにイラついたのは初めてかもしれない……殺すやその手の類の言葉は使うことも聞くのも嫌いだけど……今だけは違う……俺は……心の底から……あいつらをぶっ殺したい！！！」

本来ツナは争いを好まず、殺すなどという乱暴な言葉を使うことも使われることも好きじゃないのだ。

だが、そんなツナが自らの口でその言葉を発したということは、ツナの怒りがどれほどのもの中を物語るのだ。

「十代目の言う通りだ……俺も頭の中にさつきからずっと殺意が込み上げて来ますよ。」

「そいつはお前だけじゃねえよ……私だってこんなに自分の中の殺意が込み上がったのは一度もねえ……なのは、いくらお前が止めても私はいつらを殺すぞ。」

「ヴィータちゃん……それは私だって同じだよ。こんなことの為に多くの命を弄び破壊を繰り返すだけの存在を……私は絶対に許さない。こうなったら、後には引けない。みんな……準備は出来

てるよね？」

無表情であるにもかかわらず静かな殺意を抱き全員に語りかけるのは。

すると、なのはに言われるまでもなく全員は既に殺意を抱きながら自分の武器を手に持ち、戦闘準備を万端にしていた。

「ほんなら・・・出陣と行こうか・・・命を弄び、破壊を尽くす哀れなものたちに裁きの一撃を与えに・・・」

「そうですね。これは最早戦争です・・・私達と世界の運命をかけた、我々と次元の破壊者達との全面戦争です・・・」

すると、ツナもハイパー化を済ませ今迄異常の殺意を抱いた死に気の炎を出す。

一護もなのはも瞳に悲しみと怒りの感情を宿すと、互いに皺を寄せ、それを見た京子やハル、そしてヴィヴィオは不安になる。

「ツナ君・・・・・・・・・・」

「ツナさん・・・・・・・・・・」

「なのはママ・・・・・・・・」

それに気付いたツナとなのはは三人のほうへ向き直ると、一度もとの表情を浮かべ三人を安心させようとする。

「大丈夫だ・・・俺はずっと二人の知ってる沢田綱吉でいる。だから

ら・・・待っててくれるか？」

「・・・はい！」

京子とハルは一度顔を見合わせ、ツナの言葉と表情を信頼して決意を込めて返事をした。

「ヴィヴィオ・・・そんな顔しちゃ駄目だよ。ほら、これで涙ふいて。」

なのははヴィヴィオを心配させまいと笑顔を作り、そっとハンカチを差し出す。

「なのはママ・・・うん！絶対帰ってきてね！！帰ってきて、元の世界に戻ったら・・・ユーノお兄ちゃんと一緒にまた三人でまた何処か行こうよ！！約束！」

「うん。勿論約束する！これが片付いたら、また三人で一緒に何処かに行こうね！」

なのははヴィヴィオにいつもの笑顔を浮かべると、ヴィヴィオと指切りをして約束を誓った。

ヴィヴィオをも目に浮かべていた涙もすっかり消え、同じように笑顔になった。

「よし。覚悟は全員出来たみたいだな・・・だったら先ずは敵戦力にあわせてチーム編成だ。敵は四方に一体ずつ・・・東西南北の敵を俺たちがチーム一丸となって叩き潰す。東は直接フロント組みと迎撃粉碎フロント組みが。西は間接フロント組みと近距離・遠距離

フロント組みが。南は特殊戦闘フロント組みと独立防衛フロント組み。まあ、雲雀と剣八はそのうち来るとおもうがそれまでは何とか耐えてくれ。そして、最後の北は俺達非常砲撃フロント組みと一護達主要戦力フロント組みが迎え撃つ。遺言は無いか？」

「無い。」

「同じく。」

「ああ、無いぜー！」

ツナ、なのは、一護の順でそう応える。他のメンバーもそれに同意する。

「よし！ならこれで行くぜ。爺、セクトウレ、浮竹・・・京子やハルにヴィヴィオのこと、頼んだぜ。」

「心配するな。腐っても鯛・・・歴代最強と称されたこのわしが着いているのじゃ、怪我は一切せん。」

「旦那様の言う通りだわ。私だって嘗ては歩く凶器と恐れられた男よ。この子達は死んでも守って見せるわ。」

「そうだな。護廷十三隊の隊長として・・・彼女達見はしっかり固めてみせるさー！」

一護たちはそんな三人の台詞を聞いて途轍もなく安心をした。

そして、真之介もそれを聞いて安堵をすると再び眼差しを戦闘モードに切り替えアイゼンハウアー邸を出発しようとする。

「頼んだぜ・・・行くぞお前ら。途中までの地図は俺の神経を伝つてお前の脳内に送り込む。油断はするなよ・・・本気で殺しに行け。」

「ああ・・・言われなくてもそのつもりだ・・・行くぜ！」

そう言うと、一護達は武器を手に取り家を飛び出していった。

京子は覚悟を秘めたツナの後姿をじっと見つめながら、ツナが無事に帰ってくることを心の中で祈った。

「（ツナ君・・・無理しないでね・・・出きれば怪我なんてしないで帰って来て・・・いつてらっしゃい。）」

京子をはじめ邸内で留守番を沸かされた六人は、真之介に連れられて高速で移動していく全員の後姿を見えなくなってもずっと見続けた。

今ここに・・・戦士達の命と誇りを賭けた戦いが始まるうとしていた。

先ずは東側から見てみよう。

真之介によって脳内に送り込まれた地図を頼りに直接フロント組みと迎撃粉碎フロント組みである茶渡・了平・スバル・恋次・獄寺・ヴィータの六人は、改めて儚くも破壊され無惨な姿となったビルと瓦礫の山を見て絶句していた。



「・・・ひでーな・・・何もここまですることはねえだろうに・・・」

あたりの光景を見て険しい表情を浮かべる恋次。

「くそ！！！！極限許さんぞ！！！！何処だ、十二使徒！！！！隠れてないで出て来い！！！！この笹川了平が裁きの鉄拳を貴様らに食らわしてやる！！！！」

「落ち着け、芝生頭！！敵に態々居場所を教えるようなマネするじやねえよ！！！！」

「そ・・・そうだよ了平君！少し落ち着こうよ！！！！」

獄寺とスバルが慌てた様子で怒りを叫び声にして表す了平を落ち着かせようとする。

「・・・それにしても妙だな・・・」

「ん？何が妙なんだ、ヴィータ？」

徐に独特のバリアジャケットに身を包んだヴィータが何か呟いた。

茶渡はヴィータの発言を気にかける。

「可笑しいとは思わねえか？この破壊行為が私らを誘き出すためのものならそろそろ敵も出てきて良いはずだぞ。それなのにこんな大

声をかけたところで敵の気配すらも感じない。どういうことだ？」

「確かに、ヴィータの言う通りだ。敵は俺たちが狙いのはずだ。何に何故気配すら感じない。」

茶渡が顎に右手を添えて考え込む。すると、獄寺が周囲の瓦礫から不自然な動きを耳で感じ取った。

「おい！てめえら気をつけろ！！近くに誰か居るぜ！」

獄寺の言葉を聞いた五人は直ぐに戦闘態勢に入り、敵が何時攻めてきてもいいようにしていた。

「漸く・・・敵も気配ぐらいは出してきたようだな・・・」

「極限に燃えてきた！！出て来い！！こそこそ隠れるなんて卑怯だぞ！！！！」

すると、了平の言葉を聞いたのか――・・・

前方で吹きあられる木枯らしの中に紛れ姿をはっきりしないものの、目的の人物はゆっくりとカランコロンと音を立てながら歩いてきた。

「卑怯・・・？わしにそんな言葉は通じないぞ。それに、物事なんてものは常に不条理で卑怯な手口で成り立ってるんだよ。そんな卑怯だらけのこんな世界に、卑怯なんて言葉は・・・ある種馬鹿みたい台詞だとは思わないか？」

そして、木枯らしが晴れて身構える六人の前に姿を現したのは――  
！・・・

六人の予想に大きく反したものだっただ。

「なっ！？なんだ・・・こいつは・・・！？」

「中年の・・・おじさん！？しかも・・・」

スバルがその男の容姿を見てみると、裸足にトイレサンダルを履いて全身を青い作業服で身を包み両腕を腕まくりしたなんと露骨で物臭を思わせる姿をしていた。

「何だ？わしの格好が何か問題あるのか！？」

その一言に六人は呆然とした。

そして、一度気持ちを切り替えした後ヴィータが強い口調で尋ねる。

「お前か！町をこんな風に滅茶苦茶にしたのは！！聞くが、お前も十二使徒の一人か！？」

「よくぞ聞いてくれたな・・・ああそうとも。わしこそは自称”十二使徒一の小金持ち”にして、自称”十二使徒一の足の臭い男ナンバーワン”にして、自称”サンダルを履かせたら無敵の男”・・・」

「・・・全部自称かい！？」「・・・」

男の発言に同じツッコミを入れる六人。

そして、男は右足のトイレサンダルを脱ぎ六人の前に足の裏を見せた。

すると、足らの裏を見る前に男の足から漂う強烈な悪臭が六人の鼻を苦しめた。

そして、悶絶しながらも獄寺が足の裏を見てみた。

すると、獄寺は意外なものを見て驚愕する。男の足の裏にはローマ数字で『XII』と書かれていたのだ。

「ウンデシーモ・エルトワーダ第11使徒……バカ・デ・サールだ!!」



## 第87話：強襲、十二使徒（後書き）

### 次回予告

東側に現れたのは・・・第11使徒、バカ・デ・サールだった。

余りにふざけた名前に獄寺達は笑いを込み上げる。

それに怒りを覚えたバカが、獄寺達の想像を絶する奇抜な技を仕掛けてきた。

しかし、どことなく俺たちにとって親しみのある顔をしているのは何故だろうか？

次回、次元の破壊者・・・「××使徒！バカ・デ・サール」

よろしくな！

ここでクイズを出題するぞ。

今回、新たに出てきた第11使徒バカ・デ・サールは誰をモデルに  
考え付いたかな？

正解は次回発表

## 第88話：××使徒！バカ・デ・サール

「どうだ！！わしの名前を聞いて腰が抜けたか！？なに、恥じることはない。それがこの世の摂理。ああ〜サインがほしいなら今のうちだぞ。今なら、わしの直筆漫画もつけてプレゼントするぞ！なっははははははははは！！！！！」

わしはサンダルを履きなおして、両腕を腰に当てると全てを出し尽くした感動と達成感を表現するためにふんぞり返って大笑いをした。

だが、わしが笑いを上げているにも関わらずー……

こいつらはわしを目が点となって見ているだけだ。

「はははははは……っておい、お前ら！！人が笑ってるのに何だよその態度！」

わしがそう文句をつけると、六人のうちの中心に立つ大柄な男から徐に口を開けた。

「……第11使徒ウンデシーモ・エルトウダ……」

「バカ………デ………」

「サール………!?」





「はははあははははあ！！余りにもおかしくてははははあはは！！笑えてくるんだけどあははっはは！！」

「私もこれには驚かされたぜ、あははあははははは！！！！きつとなのはに聞かしたらあいつも腹痛くなるな亜はははあはははあはは！！！！」

「はははは・・・俺もこんなに笑ったのは始めてかもな。あははははは。」

腹を抱えたり、その場に倒れ込んで笑い転げる様子を見たバカは我慢が出来なくなっていた。

「お前ら！！！！人の名前を聞いて莫迦にするのがそんなに楽しいのかよ！！！！それでも人間か！！！！」

わしは抑えきれぬ怒りの炎を奴らにぶつけた。

すると、地面で転げまわっていた赤髪の男と銀髪の男がゆっくりと腹を抱えた状態でわしに話しかけてきた。

「いやだつてよ！！！！笑つちまうもんはしょうがねえだろ！！！！つはあははあはは！！！！」

「しかもバカのくせに莫迦って言葉使ってるぜ・・・だっはははあはははあははは！！！！！！！！」

それに便乗するように先程よりも声量を上げて笑いを上げる奴ら。

これには流石の穩健派のわしも堪忍袋の緒が切れた。

「くそ！！！！人のこと散々バカにしゃがって！！！！こうなったら、哀れなお前らにわしが天罰を下す！！！」

わしはそう言うとき力いっぱい右足を後に振り上げ、奴らにしっかりと標準をつけて足を振り下ろした。

「喰らえ！！必殺・・・『自動追尾サンダル』<sup>リモコン</sup>！！！！！」

わしがサンダルを発射した瞬間、わしのサンダルは勢いの余り豪華の炎を巻き上げ奴らに向かって行った。

それを見た奴らも漸くことの重大性に気付き一度散開した。

「逃がさん！！！！もう一ちよだ！！！」

わしは左足のほうのサンダルも同じように発射した。

二つのトイレサンダルが炎を纏い逃げ惑う六人を執拗に追いかけて続ける。

赤髪の男はわしの予想外な攻撃にかなり動揺していた。

「何だよこいつは！？逃げてても逃げてても追い続けてきやがる！！！」

「くそ！！どっかの妖怪みたいな技使いやがって！！！」

「ふざけた名前の次はふざけた技まで使いやがって！！私がホンモ

「ノの技つて奴を教えてやるぜ！」

すると、わしのサンダルを交わしながら空中を滑空する派手な赤い服を着た小娘がハンマーを持って向ってきた。

「いくぜ、アイゼン！ フォルムツヴァイ！」

すると、小娘のハンマーは姿を変えてジェットエンジンのようなものを出しながら、回転かけて向ってくる。

「ラケーテンハンマー！！！！！」

ジャットエンジンのようなものの加速と遠心力が加わり勢いをつける小娘。

「でやあああああああ！！！！さっさとくたばりやがれ！！！！！」

「待て、ヴィータ！！ 奴を侮るな！！！」

そう語りかけたのは大柄な男だったか。

どちらにしろ小娘はそいつの言うことに耳を貸さずにわしに正面からぶつかってくる。

だが小娘、それがどれだけ愚かな行為かわからせてやるぞ。

「甘いぞ、小娘！！ わしの力を侮る出ない！！ 喰らえ、必殺……」

わしはそう言うのと左手の拳に全神経を集中させ怒りの情念をこめた一撃を小娘のハンマー目掛け殴りつけた。

「『バカはバカなりに、バカな悩み抱えてるんだよパンチ』!!!」

わしの怒りの情念の籠もった一撃が小娘のハンマー攻撃とぶつかり合い、威力が互いに消されていった。

「何!? 私の攻撃が!!!」

「おっさんだからといっても、わしはれっきとした十二使徒。小娘のハンマーを止められぬほど、わしは弱くない! 行くぞ、必殺・・・」

わしは今度は右手に神経を集中させ、右腕そのものを機械の腕のように高速回転させ威力をつけ、勢いをつけたところで小娘に目掛け発射する。

「『ブロウクン・リボルバー』!!!!!!」

至近距離で打ち出されたわしの技は防御のままならない小娘に狙いを定め襲っていく。

途中、小娘のデバイスがオートでバリアを発生させるが、わしのこの技は本来それをやぶるためのもの。

つまり・・・

「あつ!?!」

小娘がバリアを張ったところで意味など無いのだ。

小娘のバリアは多少攻撃を受け止めたもののすぐに輝が入り砕け散り、小娘の腹部に直撃する。

小娘は口から血を出して後方の地面に勢いよく叩きつけられた。

「ヴィータ副隊長!?!」

「なんて奴だ!?! 右腕を回転させて飛ばすなど、まるでロボットのような奴だ!?!」

「了平の言う通りだな・・・相手がそういう技を使うなら、ここは俺たちのほうが戦いやすな。」

すると、今度は大柄な男が右腕を盾の様な姿に変えると靈力を蓄えたパンチをわしに飛ばそうとする。

「茶渡殿!?!俺からの餞別も受け取ってくれ!?!」

そしたら芝生のような頭をした小僧が後に立つ武装したカンガルーに命令をして、肩の大砲からエネルギーを発射し大柄の男の右腕に打ち込んだ。

そして、極限までに高められた靈力のパンチをわしに発射する。

「『マキシмум・ディレクト』  
巨人の太陽』!?!?!」

凄まじい光を帯びながら発射された靈力のパンチ。

だが、それもわしにとってはどうってことはないのだ。

「はあああああああ！！！！！！」

大柄な男の渾身の一撃がわしまで届くとわしの周りに巨大な爆風と轟音が巻き上がる。

「よっしゃ！！クリーンヒットだぜ！！！」

「ああ。いくら奴でもこれで無傷な訳が無い！」

獄寺と恋次はスバルとともにヴィータのところまで駆け寄っていた。ヴィータもスバルの肩を借りて徐に立ち上がりバカに茶渡の攻撃が通ったことを確認する。

「茶渡が・・・やったのか・・・!?」

「攻撃は通りましたけど、これでどれくらいダメージを与えられるかは私にも見当つきません。」

そして、茶渡が見守る中徐々に弱まる爆風と轟音。

やがて、爆風が完全に晴れた瞬間――・・・

茶渡と残りの五人が見たのは信じられない光景だった。

「なっ!?!」

「そ……そんな……こんなことが!?!」

スバルがそう言って目に映っていたのは、茶渡の一撃を受けながらもそれを両足のサンダルで受け止めるバカの姿があったのだった。

「にゃっはあははははあは!!?!だから言っただろうが、自称”サンダルを履かせたら最強”だつて。お前らの攻撃如きこのわしに通用するとも思っただのか?甘い、甘すぎるんだよ!三日三晩徹夜して完成させるプラモの出来よりも甘い」

「何訳分かんねえこと言つてやがるんだ、てめえは!!大体、何でサンダルがそんなに頑丈なんだよ!?!」

「刺青野郎の言つ通りだぜ!そんなもの、武器として認められるかよ!ギャクマンガじゃあるまいし!?!」

「うるせー!?!!!ギャクマンガだろうがバトルマンガだろうが勝てばいいんだよ!!他人を蹴落としてまでも、自分が生き残るために手段は選ばん!それがわしの矜持だ!勝てばそれだけわしのところには報酬が入ってくる!」

「……報酬のためなんかのために……てめえは人を殺すのかよ!?!?!?!」

わしに怒りを露にして言ってきたのはあの小娘だった。



「当然だ。それが仕事なんだからな。」

それを聞いて小娘同様怒りを露にしたのは青髪をした女と赤髪の男だった。

「ふざけんなよ！！あんたみたいに人の命を仕事のための道具としてみない奴を、私は絶対に許さない！！」

「スバルの言う通りだ。最初からこいつらなんかに加減する必要は無かったんだ。べらべらと御託を並べる前に、俺達が全力でこいつをぶっ潰す！！」

すると、赤髪の男は刀を左側に逸らすようにした。

そして、大声を出して次の言葉をはいた。

「卍解！！」

すると、赤髪の男から莫大な量の霊圧が噴出した。

そして、奴が再び姿を現したとき奴は後に巨大な骨の怪物を従え、猿の毛皮を身に纏った姿で立っていた。

「狒狒王蛇尾丸」

「・・・成る程。卍解ってやつだな・・・面白いもんだな。だが、わしとやり合つにもまだ物足りない気がするがな。」

わしがそう挑発すると、他の五人も赤髪の男同様雰囲気を一変させていた。

あの小娘は家を軽がる破壊するほどの巨大なハンマーを作り出し、大柄な男は左腕を白を基調とした腕に変化させた。

銀髪の男も左腕に先程までなかった弓矢を持ち芝生頭の小僧も青髪の女も瞳を修羅のようにしていた。

「勘違いすんなよ。出れも恋次一人だけでやらせるなんて言っただけぞ。」

「刺青男だけにてめえは倒させてたまるかよ！！」

「タコ頭の言う通りだ！俺もいい加減殴りたくてうずうずしていたところだ！！貴様の顔に俺の極限怒りのストレートを食らわしてやるぞー！」

「そしたら、今度は戦闘機人モードの私があんたの大事なところに殺意の籠もった一撃を入れる！！」

「俺も二人と同じだ。バカ・デ・サル・・・俺達は今本気で怒っているんだ。悪いが、命の補償はしない！」

「・・・いいだろう。そこまで殺意があるのならば・・・わしも相應の力で相手をしてやろう・・・」

わしはそういうと、背中にしまっていた特注のバットを取り出し右手で握った。



## 第88話：××使徒！バカ・デ・サール（後書き）

### 次回予告

東側で獄寺たちが壮絶な戦いを繰り広げている一方、西側の山本達も敵に接触したみたいだぞ。

相手は、第6使徒でいつも煙草をふかす目の辺りだけを仮面で隠した男・・・カバロ・アンサンプル。

不気味な笑みで山本達を挑発するカバロと、それを真っ向から受け止める山本達。

気をつけるよ、仮にもそいつは十二使徒だ。どんな攻撃をしてくるか分からないぞ・・・

次回、次元の破壊者・・・「夢喰い馬」

みんな、死ぬ気で見るよ。

前回のクイズの答え発表。

もう殆どの人が分かったとは思いますが、一応発表するぞ。

答えは、こち亀の両津勘吉だ。

サンダルとか独特の表現を見れば分かると思いましたが。

声もラサル石井の声で想像して書いていました。

## 第89話：夢喰い馬

一方、西側の方へ向ったルキア達間接フロント組みと山本達近距離・遠距離フロント組みは、警戒を充分にしながら廃墟となった都市の中心を歩いていた。

「・・・ひでーな・・・まるで俺が十年後の世界で入江に聞いた白蘭の世界征服の話と大差ないみたいだぜー」

「人も町も・・・何もかもが滅茶苦茶に壊されてる・・・一体どうしてこんなことを!？」

井上の瞳に浮かぶ悲しみの涙。

他の五人も必死で込みあがってくる悲しみを抑えながらその怒りをぶつけるために、廃墟となった町に潜む敵を探し続けた。

「なかなか姿を現さんな。我々はもう既に奴らの敵陣に乗り込んでいるというのに・・・」

シグナムがまだ何か言ようとしたその時――・・・

何処からともなく六人目掛けて針のようなものが飛んできた。

全員はそれに気付くと散開し、奇襲攻撃をかわした。

そして、全員が再度固まり武器を取り出し戦闘態勢に入る。

「……いよいよお出でになったわねー奇襲攻撃とは、随分汚い手を使うものねー」

「汚いのが彼らのもつとうなんだろうね……さてーそこで隠れてるのは分かっているんだ。霊圧や気配をいくら消しても、滅却師である僕の知覚探査能力の前では無駄だよ……」

石田がそう言うと、廃墟となったビル群の影からその人物が瞬間移動をして六人の目の前に現れた。

その人物の容姿は、馬のひずめのライターで火をつけ煙草をふかす目の辺りだけを仮面で隠した男だった。

「ほう……こちらはそれなりに気配を消して待っていたつもりなんだがな。大層鋭い知覚能力を持っているようだな」

男の話し方はまるで六人を上からの目線で見下すような物言いだっ

た。  
「……褒め言葉として受け取っておくよ。君が十二使徒かい？」

「ああ。第6使徒……カバロ・アンサンプルだ。」

その時全員の背筋に緊張が走った。

特に、ティアナとクロームは顔を引きつりより警戒心を強めた。

「・・・セスタってことは6番目。ということは――あのオベージャよりも一つ下ってことよね・・・」

「おや？そう言うお前は確か――オベージャに無惨にも敗北したつていうティアナ・ランスターか。どうやら、執務官という割にはオベージャ曰く・・・結構気が短いようだ。平静を装うその姿もまた悲しきことよ・・・」

「何ですって!?!」

「止せ、ティアナ。敵の挑発に乗る出ない!」

「そうですね。ティアさん少し冷静になりましょう。」

ルキアとキャロの説得を聞いて冷静さを取り戻すティアナ。

そして、徐にシグナムが煙草をふかすカバロに話しかける。

「十二使徒ならば話は早い・・・ここで我々が貴様の首を貰い残りのものの始末に行くだけだ。悪いが、今の我々に手加減や殺さずなどという考えは無いからそのつもりでいてもらう。」

すると、それを聞いたカバロは鼻で笑うと同じように見下した物言いでこう話す。

「成る程・・・やはりお前は何もわかっていないようだな。俺には分かるぞ、その女。いかに歴戦の勇者とて・・・込みあがる恐怖の感情をいくら抑え込もうとしても、微かな動きがそれを俺に物語



る。」

「!?!」

シグナムは凶星を突かれ驚愕した。

他の五人も愕然とした。

あのシグナムが恐怖というものを感じているのかということ。

元六課のメンバーであるティアナとキャロは勿論、同じ剣士でもある山本には到底信じられなかった。

「恐怖とは常に俺たちの背中に付き纏った言わば”背後霊”のようなもの。それを除こうともがいたところで永劫不可能なこと。どんなに命を賭した戦いに勝ち抜いてきた戦士でも、市井の人間と同様な微かな恐怖には身体が無意識のうちに行動として現れてしまう。それは生き物としては極自然なことだ。本能的に恐怖を感じることは、自らの身を守るための大事なシグナルだからだ。だが・・・そんな恐怖も拭いきれないものに、俺を倒すことは出来ない。」

「言わせておけば・・・随分と饒舌だな。確かにお前の言う通り、恐怖を完全に拭いきることなどまず不可能。だからこそ私達は同じ恐怖を仲間と共有することで、それを乗り越えていける。貴様らには到底理解できぬことだがな」

シグナムは皮肉を込めてカバロにそう断言した。

すると、カバロは煙草を地面に落として足の裏で煙を消す。

「ふん。仲間と恐怖を共有か……。面白い。ならばその仲間とやらの結束を断ち切って、俺が貴様らの身体に最高の恐怖を叩き込んでやるう……」

すると、カバロは視線をルキア・キャロ・ティアナ・石田に向けて何かを脳に直接送り込んだ。

すると、唐突に四人の様子が一変した。

四人は同じように頭を抱え込み強烈な痛みみに苦しみだした。

「うっうっうっうっうっ！！！！なん……。だ……。この破裂しそうな……。痛みは!？」

「頭が……。痛い！！！！ああああああああ！！！！！！！！」

「くそ……。！！目の前が……。全然分からない……。うっうっうっうっうっ！！！！！！」

「どうなって……。居るんだ!? 奴に目を合わせた……。だけなのに……。ああああああああ！！！！！！！！」

四人の苦しみだす光景を見て井上・山本・クローム・シグナムは慌てた様子で四人の意識を確認する。

「朽木さん!?! どうしたの、すっかりして!?! 朽木さん!?! ティア

さんもキャロちゃんもしつかり!!」

「おい！石田さん！？どうしちまったんだよ!!」

「ティアナさん！？しつかりして・・・!!」

「貴様!!!ティアナたちに何をした!!!」

抑えきれぬ怒りの感情をカバロにぶつけるシグナム。

すると、カバロは鼻で笑い返事をする。

「ちよつとしたブレインコントロールって奴かな？俺はな・・・十二使徒の中で最も卑劣で陰険な戦いを得意とすることから、別名”冷たい戦士”コールド・ソルジャーと呼ばれている。今は、俺の能力の一つを使っただけだ。」

「能力・・・だと!？」

山本が険しい表情でそう尋ねると、カバロは再び煙草を取り出し火をつけ煙をふかす。

「お前たちは獾ほくという生き物を知っているか？人の夢を喰らいそれを糧とする空想上の生き物だ。中には、悪い夢だけを食らう変わった奴もいるがな。俺もそれと似たような能力を持っている。人の脳に焼付けられた記憶のうち、その6割を占めるという”良い思い出”だけを喰らい、”悪い思い出”を浮き彫りにし癌細胞の如く増加させる。そして、喰らった思い出がそのまま俺の力となり、良い思い出ほど力も上がる。そして、思い出を喰らい尽くされたものは精神を喰らい尽くされ死にいたる。これを名づけて、『夢喰い馬』カバロ・デ・モーデドゥラ・デ・スエノと



つの相手をするでしょう。山本、クローム……覚悟は出来ているな？」

「ああ……それがなきゃいままで戦ってこれなかったからな。そうだろ、クローム？」

「うん！みんなの為に、そして骸様のためにも……ここで絶対に負ける訳にはいかない！」

「ふん。まだその甘ちゃんなところが抜けないようだな……ならば甘さなど残らぬほど磨り潰すまでだ。」

カバロは徐に腰に手を当てた。

そして、そこから隠していたのかどうかも分からぬほど副の装飾と思いきんでいたものが姿を変え鎖付きの巨大な手裏剣になった。

「……暗器……『絶望の刃』。ハジャ・デ・ラ・デスベラクシヨン」

「「「なっ!?!」」」

「お前たちには過ぎた代物だな……さあ、始めようか……身の程知らずで惨めな虫虻共が。」

「……山本、クローム……援護しろ！」

「「……了解！」」

シグナムは二人そう言うと、先陣を切ってレバンティンを鞘に収めたままカバロに向かって行った。

「レバンティン・・・カートリッジロードと霊力吸収。」

シグナムの指示に従い、レバンティンはカートリッジをロードし周囲の霊力を吸収する。

そして、徐にシグナムが鞘から抜き出したときレバンティンの刀身はいつもの赤い炎と霊力が合さった特殊な色をしたものになった。

「クローム！有幻覚を作ってくれ！」

「はい！」

クロームは完全に力を解放したオリジナルのボンゴレリングに炎を灯す。

すると、シグナムが三人になる。

今回、オリジナルの霧のボンゴレリングで作り出したクロームの有幻覚はその欠点である本物以上の力を出せないというものを解消できたものとなっている。

「山本！ツーオンワンで行くぞ！」

「うっす！了解しました！」

山本はボンゴレボツクスの推進力を最大限まで発揮してその場で動かずに立ち尽くすカバ口の逃がさぬように超高速で円を描き死角を作らないようにする。

「時雨蒼燕流・・・特式十五の型『燕の旋回』」  
ギラメント・デラ・ローンディネ

完全に死角を奪われ逃げることの出来ないカバ口。

そこに一度幻覚となり再び有幻覚となって現れる三人のシグナム。

三人のシグナムは一斉に刃を下ろしカバ口を攻撃する。

「『鳳の鉤爪』！！』」  
セトラ・ディ・フエニキシア

そして、シグナム三人の一撃と同時に山本も加わり計四人の剣戟がカバ口を四方から襲う。

「「「「「おおおおおおお！！！！！！」」」」」

四人の攻撃が通り、カバ口の辺りは土煙が立ち込めた。

だが、四人には手応えが感じられなかった。

「「「「「エ！？」」」」」

すると、四人の頭上に高く飛び上がり鎖つき手裏剣を回しているカバ口がこう言っていた。

「見え見えなんだよ、阿呆が。」

「「「「!?!?!?!?!」」」」

その瞬間、四人の周りに血の雨が降った。

井上とクロームはそれを見て血の気が引いた。



## 第89話：夢喰い馬（後書き）

### 次回予告

カバロの能力によって、頭の中の思い出を喰らい続けられる四人。ルキアの場合、悪い思い出と呼べる出来事とは……嘗ての上司、志波海燕を刺し殺したこと。

ティアナは、親兄弟が幼い頃になくなったこと。

キャラはフェイトに保護される前までの出来事。石田は悲しき自分の両親との思い出だった。

四人はこの呪縛を解いて、正気に戻ることが出来るのか!?

次回、次元の破壊者……「贖罪の思い出」

みんな、正解してみてくださいよ。

## 第90話：贖罪の思い出

井上とクロームが青ざめた様子で出血箇所を抑えながら汗だくになる山本とシグナムを見つめる。

それに対して、そんな二人を莫迦にするように鼻で笑い上から目線をしつつ巨大な鎖付き手裏剣を振り回すカバ口。

「……………フ。入りが甘かったか……だが、まだ死んでないようだな。」

「はっ！はっ！はっ！はっ！くそ！……………どうなってやがる……………！？」

「私と……………山本のコンビネーションが……何故……………ああも容易く！？」

「阿呆が。貴様らの考えることなど手に取るように分かる。特に、剣に生きるものの考えほど……………読みやすいものなどない。ふう……………どうやらお前らはまだ判ってない様だから一つ教えておこう。」

「何……………！？」

「お前らは何か勘違いしているようだな……………剣と生きるというところを。」

「勘違い……………だと！？私や山本がそれを理解できていぬという口

だな。それは我々に対する侮辱と捉えるぞ！」

「侮辱？侮辱をしているのは寧ろお前たちのほうだ。いいか——剣は本来人を切り殺すための殺人道具。どんな綺麗ごとを並べたところで、それを覆すことなど出来ない。だが、お前たちはまるでそれを覆そうとしているばかりに俺に刃を向けてくる。そんな生半可な剣に対する向き方をしている限り、お前たちは逆に剣に身を滅ぼされる。お前たちも薄々感づいているはずだ……」剣に生きることを選んだ以上、誰かを切り殺さねばならぬときが来る。だが、自分には到底それが出来ない。だから自分はこれ以上の強さと覚悟を手に入れれぬ」と。

「くっ！！」

山本とシグナムは密かに心の中に思っていた本音を言い当てられ、苦悶の表情を浮かべた。

そんな山本達の様子を気にしつつ、井上は双天帰盾の中のルキア達四人の解放を懸命にし続けるものの、依然頭を抑えながら苦しみ続ける四人の姿に、井上は必死な様子で治療を続ける。

「朽木さん！石田君！ティアさん！キャロちゃん！待ってて……必ず私が直してあげるからね！」

そんな井上の様子を見たクロームは、三叉槍を握る力を強くし何があっても井上と山本達二人を全力で援護するのだと心に誓ったのだ。

その頃、一護達七人は北側の方を歩きながら敵の攻撃を警戒していた。

無惨にも廃墟となった町の光景に一護達は全員苦悶の表情を浮かべた。

「くそ・・・あいつら何てことしやがるんだ！一体町の連中が何したっていうんだよ！！」

「俺達を誘き出すためとは言え・・・無差別な殺戮をするなんて真似・・・これではマフィアと変わらないな。」

「少なくとも、ツナの言ってることを否定するつもりはない。ボンゴレもその他のマフィアも皆一人の例外もなく欲望のために無差別な人間の血を流すことなどいとわれない連中だ。だが、それをここまでの規模でやるとなると話が大幅違うぞ。ツナ、ここは最早戦場なんだ。戦うことだけに集中しろ。余計なことを考えてたら・・・死ぬぞ。」

「ああ・・・分かってる。」

真顔でリボーンの警告を聞き入れるツナ。

すると、なのはが何かに気付き突然歩くことを止めた。

「?なのはちゃん!?!どうしたんや、急に立ち止まって!?!」

「なのは・・・!?!?」

「……はやてちゃん……みんな……霊圧を研ぎ澄ませてみて、ティアナや石田君たちの霊圧がかなり弱まってる」

なのはにそう促され、霊圧を研ぎ澄ませる全員。

すると、確かになのはの言う通りティアナ達の霊圧にかなりの異常が生じていることが分かった。

「これは！？石田達の霊圧がかなり動揺してやがる！？」

「それだけじゃないな……何かの作用で頭の中を攻撃されてるらしいな。井上が懸命に治療を続けているが、未だ回復の兆候は見えず。急がないとやばいな。」

「くそ！！時間がねえ！手分けして奴らを探そうぜ！俺とツナとなのはで右側を探すから、真之介とはやて達は左側を頼むぜ！さっさと片してあいつらの援護に向わないと、石田たちが危ねえ！」

真之介が補足説明をした後、それを聞いた一護達は血相を変えてこの近くに居るであろう敵の探索に全力で乗り出そうとした……ちようどその時だった。

「探す必要なんてないさ……既にここに居る……」

一護達はその声を耳に入れた瞬間、背筋を凍らせ後に振り返った。

だが、そこには誰も立ってなどいなかった。

「何だ！？幻聴か・・・それとも!？」

「み・・・みなさん!!上を見てください!!!」

ラインが素っ頓狂な声を出して全員に上を見るように指示する。

全員が自分の真上を言われたとおり見てみると、そこで全員は愕然とする。

瞳に映ってきたのは、リポーンと同じ背丈をして僧侶が切る袈裟と烏帽子を被った赤ん坊が空中に浮いていた。

「・・・何だ・・・てめえは!？」

「リポーンと同じ赤ん坊の姿・・・!？」

「リポーン君・・・もしかしてアルコバレーノの知り合いとかじゃないよね!？」

なのはが困惑の表情を浮かべながら恐る恐るリポーンに恐る恐る尋ねる。

「そいつはねえな。アルコバレーノの七人の中にあんな奴はいねえ!そもそも、奴はおしゃぶりなんか持ってないしな」

リポーンのその話を聞いたその赤ん坊は、鼻で笑うと徐に胸の辺りを開く。

すると、そこにはリボンと同様に胸の中心に光り輝くおしゃぶりを持っていた。

リボンも全員も愕然とした様子でそれを見続ける。

「おしゃぶり……だと!? しかも……あの色……!?」

ツナが驚くのも無理の無いことだった。全員の瞳に映るそのおしゃぶりの色はアルコバレーノ七人の色である、赤・橙・黄・緑・青・藍・紫のどれにも当てはまらない。

いや、その全ての色を兼ねそろえた虹色に輝くおしゃぶりだったのだ。

「虹色の……おしゃぶりやって!?!」

「ありえーな……アルコバレーノのおしゃぶりはその名の通り、虹を司る七つの色に分類されているんだ。だが、あいつはそれを全て併せた虹色のおしゃぶりを持ってやがる。」

「てめえ!! 一体何者だ!? アルコバレーノでもないのに、何でそんなおしゃぶりを持ってんだよ!?!」

込み上げる疑問と怒りを直接謎の赤ん坊にぶつける一護。

「……俺は……オクターバ・エルトゥーダ第8使徒……ドラコ・マルクス。またの名を……」

「なっ!?! またの名を……!?!」

一護達が固唾を呑んでドラコのほうをじっと見つめる。

「真しんアルコバレーノ……オルフェウス。」

「……………!!???」「……………」

町の北側で一護達が第8使徒のドラコ、もとい真アルコバレーノであるオルフェウスと対峙しているその頃、井上の双天帰盾の中で未だもがき苦しみ続けるルキア達四人。

そんな四人の頭の中で浮き彫りになってくる自分の中の悪しき思い出……………

ルキアの場合はこうだ……………

……………南流魂街78地区「戌吊」(イヌヅリ)で育ち、恋次達と共におさない日々を過ごした後、真央霊術院に入学。

義兄である朽木白哉に拾われ朽木家の養子として迎えられ、護廷十三隊に入隊したものの……一般の隊士達とは大きな隔りがあり、上手く隊に馴染めずに居た。

そんなルキアの心を解き放ってくれたのが、当時の十三番隊の副官



である志波海燕だった。

十三番隊は隊長が体弱くてな！ほとんど俺が仕切ってたんだ！だから俺のこと、時々間違えて『海燕隊長』って呼んでもいいぜ！

海燕との凡庸な出会いこそが、ルキアの求めていたものだった。

そんな海燕を敬愛していたルキア。

だが、ある夜のことそれは突然起こった。

彼の妻である志波都がある虚に殺害され、それを代わりに始末にいった海燕もまたその虚に取り付かれ自我を失う。

ルキアは虚と同化した海燕を殺害する。

．．．．．朽木．．．俺の我儘につき合わせて．．．ヒ  
デー目に遭わせちまったな．．．悪い。キツかった。ありがとな  
お陰で．．．心は此処に置いて行ける．．．

（違う．．．違う．．．私は礼を言われるようなことは何一つして  
いない。私が救ったのは．．．私自身だ。）

その行動の動機の主体が自分の感情であったこともあり、この事件  
が心に暗い影を落とし、海燕の死に対し自責の念を抱え続けること  
になった。

．．．殿．．．．．燕殿．．．！．．．海燕殿．．．！．．．  
海燕殿．．．！！！！海燕．．．殿．．．

後に、ルキアは虚圏の戦いにおいて海燕を殺害したことは、破面のアールニーロ・アルルエリとの戦いにまで影響することになってしまふ。

醜い。醜い。私に救われる価値などありはしない。血を流してまでも救う価値などあつてはならない――．．．

同じように、ティアナの場合――――

．．．．．唯一の肉親だつた兄ティータ・ランスターとはティアナが10歳の時に死別している。

六課に配属された当初は、周囲の才能への劣等感や兄への想い、日々の訓練で自分が強くなっている実感が湧いて来ない焦燥感がティアナの心を一層不安にさせる。

そして、彼女にとって最もそれを顕著にさせたのが――．．．  
兄の叶えられなかった夢の実現だつた。

ティータは当時首都航空隊に所属する一等空尉だつた。

彼が亡くなったときの任務は、逃走中の違法魔導師を取り押さえること。

だが、手傷は負わせたものの取り逃がしてしまう。

その件に関して、当時の上官が心無いコメントをして一時期問題となった。

犯人を追い詰めながらも取り逃がすなんて、首都航空隊の魔導師としてあるまじき失態で、たとえ死んでも取り押さえるべきだった。

ティアナはその時まだ10歳。

たった一人の肉親を亡くして、しかもその最期の仕事が無意味で役にたたなかったと言われ、どんな気持ちだったかは自ずと分かるはずだ。

ティアナはそんな兄の無念を、叶えられず終わった夢を叶える為に無茶をしてまで奮闘した。

私は!!!もう・・・誰も傷つけないから!!!亡くしたくないから!!!だから・・・強くなりたいんです!!!

キャラの場合—————

……彼女が、力が強過ぎることを危惧した長老から故郷の集落を追放された。

アルザスの竜召還部族……「ル・ルシエ」の末裔、キャロよ。強すぎる力は災いと争いしか生まれぬ。済まんな……お前をこれ以上、この里に置く訳にはいかんのじゃ。

竜召還は危険な力……人を傷つける……怖い力……

その後各地を転々としていたところを時空管理局に保護されたが……

確かに、凄まじい能力は持つてはいるんですが……制御がろくに出来ないんですよ。竜召還だって、この子を守ろうとする竜が、勝手に暴れまわるだけで……とてもじゃないけど、まともな部隊でなんか働けませんよ。精々、単独で殲滅戦に放り込むくらいしか……

フェイトに保護される前までは、邪険に自分の身を扱われ本当の意味での自分の居場所を手に入れられないでいた。

考えたこともなかった……私の前にはいつも、私が行っちゃいけない場所があつて……私がいけないことがあるだけだった……

石田の場合……

……生き残った滅却師達が監視を受け続ける最中、（監視対象として）最後の滅却師だった祖父石田宗弦の生き方や信念に憧れ、幼少から志願し滅却師としての手ほどきを受ける。

しかしとある事件によって師匠である祖父を失い、これが原因で尸魂界関係者を異常に嫌っていた。

また、祖父石田宗弦を尊敬しているが、金にならないという理由で滅却師を否定する父・石田竜弦とは考え方の違いから反発しており、折り合いが悪い。

雨竜……お前、最近またお祖父さんの所へ通ってるらしいな。何度も言ってるだろう。もう行くのはやめなさい

で……でも

言い訳はするな。これも何度も言ってるだろう。死人を救うことに意味は無い。それは死神の仕事だ。お前は、生きている人を救う勉強をすればいい。私には興味は無い。お前には才能が無い。滅却師はお祖父さんの代で終わりだ……わかったな。

……と……父さんは……どうしてそんなに滅却師が嫌いな  
の……？

金にならないからだよ

当時の石田にとってこの一言はあまりにショックが大き過ぎた。

父さんにだつて見えているはずなのに・・・なのにどうしてあんなことが言えるんだ・・・！師匠せんせい・・・僕は強くなりたい・・・！強い滅却師になって・・・みんなを虚から守りたいです・・・！そうすれば、父さんもきつと滅却師のことを認めてくれる・・・

そんな思い出が四人の頭の中を蝕み、徐々に贖罪となったそれが頭の中を支配していく。

「ああああああああ！！！！！！僕は！！！！！！僕は結局何も守れないのか！！！！！！！！」

「あああああ！！！！！！私は！！！！！！兄さんの無念を本当に果たせているの！！！！！！誰か教えて！！！！！！」

「ああああ！！！！！！竜召還は危険な力！！！！！！私の本当の居場所なんてやっぱりないんだ！！！！！！！！」

「あああああ！！！！！！私に救われる価値などありはしない！！！！！！海燕殿を・・・海燕殿をこの手で殺した私に・・・存在する価値など、在りはしないのだ！！！！！！あああああ！！！！！！！！」

四人の苦しみ続ける姿と声を聞いた井上は、かなり焦りつっていた。

「朽木さん！！石田君！！！！しっかり！！！！もう少し頑張つて！！！！必ず・・・私が直して見せるから！！！！」

果たして、ルキア達はどこまで持ちこたえられることが出来るのか・・・



## 第90話：贖罪の思い出（後書き）

### 次回予告

北側の俺たちの前に現れた第8の十二使徒──ードラコ・マルクス。その正体は、生まれながらにして俺達アルコバレーノ七人の呪いをこの身に宿した真に呪われし赤ん坊──

真アルコバレーノのオルフェウスだった。

オルフェウスは、困惑する俺たちにこれ身をがしに次々とアルコバレーノの必殺技や七属性全ての炎を使ってくる。

そして、徐に取り出した虹のリングと虹の匣兵器ボックスを使ってきた。

そこから出てきたものは──俺たちの想像を遥かに超えたものだった。

次回、次元の破壊者・・・「虹不死鳥」

真アルコバレーノの実力が、今明らかになる・・・



## 第91話：虹不死鳥

「アルコバレーノ」……

それはイタリア語で虹を意味し、マフィア界最強の赤ん坊7人を指し、別名「呪われた赤ん坊」。

俺も含めた七人の赤ん坊、コロネロ・スカル・バイパー・風・ルーチエ（現時点で大空のアルコバレーノは欠番）・ヴェルデと俺リボーンは胸にぶらさげるおしゃぶり、つまり73（トゥリニセツテ）の一つを永遠に守り続けなければならない。

俺は、あの運命の日が起こる数日間のことを今も克明に覚えている。

アルコバレーノの七人が始めて全員で顔を合わせたのは、俺達が“イ・プレシエル・テイ・セツテ選ばれし7人”として、共通の仕事の依頼で呼び集められたときだ。まだ知り合って日が浅く、互いに警戒しあっていたし、信用なんてもんは最初からしていなかった。

そんなギスギスしていた俺達に、何の警戒心も無く接してきたのは  
……

大空のアルコバレーノである、ルーチエだった。

あいつは、全員に手作りクッキーを差し出してきた。

勿論、甘い者嫌いの俺に対してもな。

「あなたもいかが？」

「甘いものには興味が無えんだ。」

「そう。じゃあ、コーヒーはいかが？おいしいエスプレッソを淹れてきたの。」

「わかってねえな。俺が言っているのは————」

俺がまだ言おうとした矢先、ルーチェ（あいつ）は軽く笑い俺の言葉を妨げた。

「うふ。疑うのなら、私が先に毒見をしましょうか？用心深いヒットマンさん。」

その発言を聞いた俺と、アルコバレーノの成り損ないとなったラル・ミルチは驚愕した。

そして、あいつは変わらぬ様子でカップにエスプレッソを注ぎ込んだ。

「・・・分かった。貰うぜ——エスプレッソは好物だ。」

「素敵なのに・・・」

「ん？」

「素敵よ——そのくるんとしたもみ上げ。」

あいつは、俺のチャームポイントであるもみ上げを素直に褒めてくれた。

そして・・・俺達が赤ん坊となる時がやって来た。

気がついた時には、既に俺達はこの姿だった。

あの運命の後、俺達は永遠におしゃぶりを守らなくてはならない呪われた赤ん坊、アルコバレーノとなった。

俺達は誰一人としてあのふざけた状況を直ぐには受け入れられなかったんだ。

最初からこうなる運命だと知っていた、ルーチェ以外はな。

俺は長い放浪の後、この体を受け入れる決心をした。

そして、シャマルによって過去の経歴を抹消し今のリボンとなった。

そして、俺はツナと出会いあのおぞましい十年後の世界から戻った。

だが、今俺達の目の前にいるこいつは何だ？

アルコバレーノでもない奴が、何故虹色に輝くおしゃぶりを持つ！？

何故俺達と同じ赤ん坊の姿をしている！？

そして、真アルコバレーノとは一体なんだ！？

「……真……!?!」

「……アルコバレーノ……!?!」

「……オルフェウス……!?!」

俺と同様に、驚愕の表情を隠しきれないで居る一護・ツナ・なのはは思わず同じ言葉を繰り返す。

「どういうことだよ……!?!? アルコバレーノに虹色に輝くおしゃぶりを持つものはいない筈だ!?!? それに、真アルコバレーノなんてのも聞いたことねえぞ!?!?」

幾つもの多次元世界を旅し、多くを知り尽くしているはずの真之介も困惑していた。

「しかも……第8使徒ってことは、やっぱりこいつも次元の破壊者の手下の一人ってことやな。」

「そうですね! あなた一体どういうことなんですか!?! アルコバレーノはリボンさんの話の中に、あなたのような人の名前は出てきませんでしたよ! それに、その真アルコバレーノって何なんですか!?! リンたちにも説明してください!」

「ピーピーうるせーな……そんなに俺が何者か知りてえのかよ? はあ〜まあ、いいか……教えてやるぜ……」

ドラコは深く溜め息をつくとき空中から地面に徐に着地した。

「俺は普通のアルコバレーノと違い、生まれながらにして”アルコバレーノ七人の呪い”全てをこの身に宿した真に呪われし赤ん坊・故に、真アルコバレーノ。」

俺達はその瞬間、顔を引きつった。

そして、何よりも奴の言葉を一番信じられなかったのは俺だ。

俺達は本来生まれながらに呪いを受けた訳ではない。

元は普通の人間だった――

「生まれながらにアルコバレーノの呪いを全てこの身に宿した・・・!?」

「そつだ。俺はかれこれ既に100年以上この赤ん坊の姿で居る。この虹色のおしゃぶりを守り続けるために・・・お前らに分かるか？永遠に歳もとらずに同じ姿で居ることが、どれほど苦痛か。普通の人間ならば一生分かるまい。」

「そやけど、だからって何でこんなするん!?何の関係もない人をどうして無闇に殺したりするん!？」

「俺の怒りは常人には理解できぬ。こんなことをしたくらいで俺の気が済むわけではない。だがな、この体も長い間の末にかなり役に立ってきた。絶望に打ちひしがれ、生きる意味を失っていた俺に・・・」

・存在意義を覚えてくれたのは・・・次元の破壊者様だった。今の俺に出来るのは、あの方の邪魔になる不確定要素を全て取り除き――夢を叶えるために世界を壊し続けることだ。だから、お前たちにはここで消えてもらう。」

「くっ！！ふざけたこと・・・――」

その瞬間、歯を食いしばる一護の横をリボーンの銃弾が飛んでいった。

銃弾はまっすぐにオルフェウスの元へ飛んでいくが、軽くあしらうかのように避けられる。

リボーンの変貌振りにツナ達が思わず振り返る。

「・・・リボーン・・・お前――」

「・・・」

リボーンの眼差しは本気だった。

何時もの悪ふざけを助長するあの表情はいまは何処にもない。

この表情を見せたのは、ツナがアルコバレーノの試練を受けたあのとき以来だった。

「いきなり容赦なく銃弾を発射するとは――何がそんなに気に入らない・・・晴のアルコバレーノ・・・」

「てめえの言行その全てだ。悪いがてめえの相手は俺一人で充分だ・



の虹色に輝く半円状ドームが作り出され俺達を取り囲んだ。

「俺の能力の一つだ。全七属性の死ぬ気の炎を練り合わせた”虹の結果”。こいつは七属性の炎を単発でぶつけても破壊されない。勿論、死神や魔導師対策としての準備もしているからあしからず。」

「そんな！？ティアナ達の下へ向いたくてもこれじゃあ！？」

「くそ！！だったらてめえを倒すまでだ！！リボーン、この場合一人で戦うより全員のほうがてっとり早い！」

「・・・状況が状況だからなー俺もそうするとするか。だが、とどめぐらいは俺にやらせるー！」

「・・・わかった。お前の好きにしろ、リボーン。」

「・・・サンキュウーなツナ・・・いくぜ、カオスショット！！」

リボーンの必殺技、カオスショット。

黄色に輝くその銃弾はアルコバレーノ随一の攻撃力を誇る。

「ふん・・・カオスショット。」

「！！！！」

すると、オルフェウスは右手の指先からリボーンの必殺技であるカオスショットを放ってきた。



リボーンから打ち出されたカオスショットとぶつかり合い相殺された。

「！！リボーンと同じ技・・・だと!？」

「だったら・・・エクセリオン・・・バスター!!!!!!!!!!」

すると、今度はなのはがエクシードモードでスターライトブレイカーに匹敵すると言われるエクセリオンバスターを手加減なしでオルフェウスに発射する。

「魔法だろうが何だろうが俺には関係ない・・・喰らえ、マキシマムバースト!!!!」

オルフェウスは今度は左掌から、澄んだ青色をし鳥の形を思わせる一撃をエクセリオンバスター目掛けて発射した。エクセリオンバスターは先程のカオスショット同様、同士討ちされきれてしまった。

「なっ!?!?私の・・・エクセリオンバスターが・・・!?!？」

「しかも、あれは俺が最初に獄寺と一緒にコロネロの試練を受けたときにコロネロが使った必殺技・・・!?!？」

「どういうことだ?何故俺やコロネロの技を使える!?!？」

「言ったはずだ・・・俺はアルコバレーノ七人の呪いを全てこの身に宿したと。つまり、俺はお前たちアルコバレーノ七人の必殺技を使うことなど造作も無い。」

「だったら、直線肉弾戦に持ち込むまでだ。ほあああああああ！！！！！！」

一護は勢いよく斬月を持ち、全力疾走でオルフェウスのところまで駆け寄り斬月を振り下ろす。

「甘めー！！アーマード・マッスルボディ」

オルフェウスがそう言うと、肉体がボディビルダーの如く筋肉で膨れ上がり一護の斬月の刃を軽々と受け止めた。

「なっ！？斬月の刃を筋肉で止めただっ！？」

「スカルの必殺技、無敵の肉体・・・アーマード・マッスルボディだ。まさか一護の斬月の刃まで食い止めちゃうとはな」

一護は一端後に下がりツナとなのはの間に入り体制を練り直す。

「アルコバレーノの必殺技をあまり舐めるな。それ次ぎいくぞ・・・バイパーミラージュー！」

オルフェウスはバイパーミラージューの効力を発揮し、夥しい数の分身を作り出し俺達を取り囲んだ。

「なっ・・・何て数だ！？」

「はやてちゃん！！こんなに一体どうしましょう！！」

「落ち着くんや、リン！！数は増えても所詮は幻覚や！」

「本当にそうかなーエレットリコサンダー！」

その瞬間、無数の奴のおしゃぶりから緑色に輝く強力な電撃で、ヴェルデの必殺技のエレットリコサンダーが降り注いできた。

俺達は幻覚と思えないほどの強力な電撃に直撃し、動くことが出来なかった。

「くっ！！何て強い電撃・・・だ！！！」

「まさか・・・ヴェルデの奴の必殺技まで使うとはーな！！！」

「あかん・・・目の前が・・・眩んできた・・・！！！」

「このままーやれらるなんてマネ・・・出来ない！！ヴィヴィオと約束・・・したのに！！！」

「ははははあは！！痺れる痺れる！そのままもう一つプレゼントだ。これで最後だ・・・爆龍拳！！！」

そして、奴の何人かは風の必殺技である、赤い波動・・・爆龍拳を身動きの取れない俺達に放つ。

俺たちの周りに吹き荒れる爆発と轟音。

奴がもとの一人に戻り俺たちのなきがらを確認しようとした。

「死んだな・・・ん！？」

爆風が晴れたとき、映ってきたのは・・・ローマ数字で『？』と彫られた日本刀を持つ真之介の姿だった。

「真之介・・・お前、どうやって!？」

「俺だって自分と仲間の身を守る程度の力は持ち合わせてる。こいつは俺の武器の一つ、『トレス・ブレイド日本刀』。見かけと違い、結構いろんなことが出きるんだぜ。」

そう言うと、真之介は痺れて体の動けない俺達に向けて刀身を向けた。

すると、刀身から放たれる光の粉が降り注がれ自然と俺達の痺れは消えていった。

そして、傷もついでに回復させてもらい俺達は立ち上がり武器を奴に向ける。

「てめえ・・・よくもやってくれたな!この借りは何倍にもして返してやる!!!」

「オルフェウス・・・俺はお前を許さない!全力で、お前を葬り去る!!!」

「私も・・・ここからは本気だから。頭をかなり冷やしたほうが君のためにはいいのかもね・・・」

怒りの表情を浮かべる一護と、無表情ではあるが憤怒の感情を醸し出すツナとなのは。

その後で、リボンもはやてもリィンも同じように怒りを露にしていた。

「おっかねー・・・特に白き魔王の無表情な怒りほど怖いものは無いな。けど、本気でこようがどうしようが・・・真アルコバレーノの力がこの程度だと思ってる以上は、貴様らに勝ち目は無い。見な！！」

オルフェウスは胸元から徐にあるものを取り出した。

それは、虹色に輝くボックス兵器とそれに対応したリングだった。

「！虹色のボックス・・・まさかてめえ！！」

「その通り。貴様らにこの素晴らしき力の姿をその目に焼き付けるが良い・・・開匣！！」

奴は虹色に輝く死ぬ気の炎をリングに灯し、ボックス内部に注入した。

そして、強い光を放ちながらボックスが開かれた。

そして、俺たちの前に現れたものはー・・・

俺たちの想像を遥かに超えた代物だった。

「……………これは!？」

「……………鳥……………!？」

愕然とする俺たちの頭上で飛び回る虹色の炎を纏った巨大な鳳。

それは、伝説上の生き物である不死鳥であった。

「『フェニクス・デイ・アルコバレーノ虹不死鳥』……………俺の唯一の匣兵器だ。」



## 第91話：虹不死鳥（後書き）

### 次回予告

俺たちの目の前に、とんでもないボックス兵器を出現させたオルフェウス。

虹不死鳥はツナのX BURNERでさせ弾き返してしまう恐ろしい力を持った奴だ。

一護となのは、そしてはやてが霊圧と魔法で攻撃するもの・・・吸収したツナの死ぬ気の炎がそれを邪魔する。

そして、オルフェウスはそんな俺達に更なる恐怖を叩き込もうとする。

次回、次元の破壊者・・・「オルフェウスの豎琴」

みんな、死ぬ気で見るよ。



## 第92話：オルフェウスの豎琴

一護達の前に現れた虹色の炎を纏った巨大な不死鳥――

フェニチエ・デイ・アルコバレーノ  
虹不死鳥

その圧倒的な存在感に一護達は愕然とする。

「良い顔をしている・・・驚愕しているな。俺のボックス兵器をそこから辺のマフィアと同じ、凡百のものと一緒にするなよ。虹属性の炎を持つのは大空属性よりも少ない。もっとも、俺以外にこの属性を持つものは居ないけどな・・・」

「くっ！？ふざけもの出しやがって!!」

「かなりデカイな・・・これは流石に一人では無理だな・・・!!」

「だったら・・・みんなでやれば良いことだよ!!」

「なのはの言う通りだな・・・よし、ツナ・なのは・リボン！四人で先ずはあの鳥を潰すぜ!!」

そう言うと、一護・ツナ・なのはは高く飛び上がり虹不死鳥に向かって行った。

その様子が高みの見物とばかりに腕組みをしてオルフェウスは観察していた。

「ツナ、俺となのはが時間を稼ぐ間にお前は虚化をして強化したX BURNERを放ってくれ。」

「わかった。」

「よし……いくぜ、なのは！」

「了解！」

なのはは腰に指す斬魄刀を抜くと、すぐに星海と叫んで解放する。

なのは先ず魔法で大き目のバインドを作り出し不死鳥の身体を拘束する。

「星空喜劇・第五幕……『かきだいさんかく夏季大三角』！！！」

すると、バインドで拘束される不死鳥の頭上にまるでベルカ式の魔法陣を思わせるかのようなものが徐に頭上から降りてきて、不死鳥の動きを更に固める。

必死で身体を動かし抵抗をする不死鳥。

すると、そこから一護が容赦なく攻撃を仕掛けてくる。

「月牙天衝！！！」

身動きの取れないまま攻撃を直撃する不死鳥。

さらに、そこからリボーンが不死鳥の腹部目掛け銃弾を発射する。

「カオストルネード!!」

この技は、リボーンが真之介たちとの一ヶ月の修行の末作り上げた第二の必殺技である。

通常のカオスショットに高速回転を加えることで、貫通力を強化する。

リボーンの銃弾から発射されたカオストルネードが不死鳥の腹部に直撃し、不死鳥が激痛で声を上げる。

「今だ、ツナ・・・こいつを焼き鳥にしろ!」

リボーンにそう促されて、先程から虚化をして発射準備をしていたツナは照準をしっかりと不死鳥に向けてX BURNERを発射する。

「X BURNER スーパーノヴァ 超新星!!」

虚化によって強化されたツナの必殺技が容赦なく不死鳥目掛け飛んでいった。

「よっしゃ!これが通れば、あの鳥もただの焼き鳥や!!」

「はいですー!!」

すると、それを見ていたオルフェウスがほくそ笑み待ってましたとばかりにこう発言した。

「ふん・・・かかったな。」

オルフェウスがそう言うと、不死鳥は徐に口を開けると発射されたX BURNERを全て飲み込んでしまった。

この光景を見た一同は愕然とした。

「なっ・・・・・・・・！！？」

「何だと・・・・・・・・！！？」

「綱吉君のX BURNERを・・・飲んだ！？」

不死鳥はX BURNERをゆっくりと飲み込んでいく。

徐々に不死鳥の腹部が膨れ上がり傷が癒えていく。

「どうだ。ノアールの能力の一つだ。お陰でこいつの腹持ちはかなり持つはずだ。」

「腹持ち・・・・・・・・だと！？」

「そうだ。お前達も知っているだろう、死ぬ気の炎にはそれぞれ属性ごとに特性があることを。大空は調和・晴は活性・嵐は分解・雷は硬化・雨は鎮静・雲は増殖・霧は構築。そして、虹属性の炎の特性は「吸収」。」

「吸収……!?」

「ああ……こいつは七属性全ての死ぬ気の炎を吸収し自らの糧とすることができる。しかも、喰らった炎は俺のおしゃぶりと直結しているから、俺の力とすることも出来る。そして、吸収した炎の純度が高ければ高いほど……こいつの腹持ちが良い。もっとも、虚化の力も混じっているから……少し濃かったかもしれないがな……」

オルフェウスがノアールを一瞥すると、ノアールは腹を膨れ上がらせ満足そうにげっぷをした。

「さ……して、食事の時間は終わった。そろそろ食後の運動と行こうか……ノアール。」

すると、ノアールは一護達の鼓膜が破れるほどの咆哮を上げる。

その瞬間、ノアールを拘束していたバインドと夏季大三角が石化され粉々に砕け散った。

「……!大空属性の調和かよ!？」

「何て……やつだ……!？」

「くっ!！」

自身の魔法と斬魄刀の能力を容易く破られたことに、なのはは物凄

く悔しくなり歯を食いしばる。

ノアールは巨大な翼を広げ天高く飛び上がる。

そして、口を開くと口腔内から虹色の光を生成する。

「何だ・・・！？ありゃ！？」

一護が怪訝そうな表情を浮かべそれを見てみると、ツナの超直感が何かを感じ取りツナは急いで空中に浮かんだまま自分を取り囲むように大空の炎のバリアを作った。

そして、ツナがバリアを張った瞬間――・・・

オルフェウスは不敵な笑みを浮かべノアールに指示を出す。

「ふふ・・・行けノアール！！」ラッジ・デイ・アルコバレーノ「虹光線」！！！！」

ノアールは口腔内から生成した虹色の死ぬ気の炎を圧縮した光線をツナ目掛け発射した。

ツナは大空の死ぬ気の炎でそれを受け止めようとしたが、予想外なことが起こった。

「うー！！これ・・・は・・・！？」

ツナの大空の死ぬ気炎が見る見るうちに弱まり、かき消された。

そしてそのままツナは攻撃を直撃し結界の一番外側まで飛ばされ激突した。

ツナの身体は全身黒く焼け焦げ、大火傷を覆っていた。

辛うじて意識は保っていたもののまともに戦闘を行えるような状態じゃなかった。

「ツナ！！！！」

「綱吉君！！！！」

「どうだ！！ノアールの虹光線の威力は。大空の炎だけで防ぎきれらと思ったのか！？」

「てめえ！！どういう意味だよ！？」

「虹光線は七属性全ての炎を練り合わせたもの。つまり、それぞれの特性が全て使える代物なんだ。大空のバリアを張った所で、問題は無い。まず、分解と鎮静でバリアを弱めた後、活性と増殖で威力を強化させればいいだけのことだ。」

「随分とご都合な技だな、オルフェウス」

「ご都合結構。殺し合いどんな手を使っても勝てば良いんだ。マフィアだって同じだろうが。」

低い声で睨み付けるリボンに、自信満々な様子で弁舌をするオルフェウス。

一護となのはの悲痛な叫び声も虚しくツナは徐に空中から落下していく。

それをすかさず受け止めたのは、真之介だった。

真之介は地面に着地するとツナの意識を確認する。

「おい！！ツナ！！すっかりしろ、死んでねえか！？」

「ああ・・・何とか・・・大丈夫・・・だ・・・」

「待ってる！すぐに治療してやるからな！『癒しの閃光』！」  
ヒールینگ・パルス

真之介は手に持つ？日本刀の刀身をツナに向けた。

その時、刀身から優しい光が注ぎ込みツナの火傷が徐々に回復していった。

それを見た一護達も一先ず安心した。

「てめえ！！よくもツナにあんなもん食らわしやがったな！！同じ痛みをてめえにも味わらせてやる！！」

「だったら一護君！！私も行くよ！！」

「なのはちゃんが行くんなら・・・私もリインも参加させてもらおう！！リイン！！」

「はいですー！！」



はやてはリインとユニゾンをした。

一護も黒い霊圧を放ち卍解をする。

そして、三人はノアールから大きく距離を取って結界のギリギリのところまで下がる。

「三人で一気に片つけてやるぜ・・・」

そう言うと、一護は虚化をして霊圧を更に上昇させる。

なのはも星海を合体させて、浮竹との修行でその手ほどきを受け一護達との修行で漸く完成させたばかりの真砲撃魔法を放つ準備をする。

「レイジングハート、星海！ぶつつけ本番だけど、やれる!？」

レイジングハートも星海もなのはの質問に肯定をする。それを聞いたなのはも安心する。

「行くよ・・・一撃・・・一発!!!!!!」

なのはの足元に展開されるミッド式の魔法陣と込み上げる霊圧。

一護も虚化で強化した霊圧を刀身に溜める。

その二人の中央では、はやてが夜天の書を広げ詠唱を続ける。

「来よ、白銀の風、天よりそそぐ矢羽となれ—————」

はやてがそう言うと、ベルカ式の魔法陣が展開され正面には円い五つの魔法陣が展開させる。

「行くぜ・・・月牙天衝！！！！！！」

「『グランド・スター偉大なる星海』！！！！！！」

一護となのはが同時に自身の必殺技を無防備のままのノアールに向けて攻撃する。

なのはの新技、グランド・スターは砲撃そのものが星型の形をしており、その破壊力はスターライト・ブレイカーの10倍にもなる。

「はやてちゃん！！最後お願い！！」

「よっしゃ！これでお終いや！！」

はやては自身の杖であるシュベルトクロイツをノアールに向けると、五つの魔法陣からは白い光が発射されようとしていた。

これが、八神はやての使う超長距離砲撃魔法。

「フリースヴェルグ！！」

五つの魔方陣から発射されるSランク級の砲撃魔法と、一護となのはが放つ黒い斬撃と桃色の砲撃。

これら全てがノアールに直撃すると、その異質なエネルギーが触れ合い途轍もない反動風を巻き起こす。

全員はそれをどうにか防ぎきると、徐にツナと真之介の近くまで降りてきた。

「こんだけの攻撃を喰らって・・・無傷なんてことねえよな・・・!?」

「分からない。でも・・・可能性は無いと思うよ。」

「なのはちゃんの言う通りや。油断は出来へん・・・」

「・・・爆風が晴れるぞ。」

リボーンがそう言うと、一護達は改めてノアールとオルフェウスのほうに目を向けた。

そして、爆風が完全に晴れた際にあつたのは、全身を虹色の炎で身を包んで攻撃のダメージを軽減していたオルフェウスとノアールだった。

「くそ!! やっぱりこうなっちまうのかよ!?!」

一護が悔しそうな表情で歯を食いしばる。

「ふふ。虹属性の炎を舐めるなよ。それに、前に吸収したX BU RNERの力も加わってるから・・・この虹の鎧は簡単には破れないぜ。さて・・・ウォーミングアップはこれくらいにして、そろそろ本格的な運動と行こうか。」

「なっ！？本格的・・・どういうこと、それ!？」

なのははオルフェウスの口から放たれた不可解な発言に驚愕した。

「そのまんまだよ。今迄のは全部身体を暖める為のアップだったんだよ。だが、もう十分に身体は暖まったしそろそろ本気を出そうと思ってるな。」

「くそ!!!舐めやがって!!!」

「まあまあ・・・おっと、その前にお前たちに一つ神話を紹介しないとな。」

「神話・・・やって!？」

「その昔ギリシア神話にセイレーンと呼ばれる海の怪物が居た。そいつは海の航路上の岩礁から美しい歌声で航行中の人を惑わし、遭難や難破に遭わせる。歌声に魅惑されて殺された船人たちの死体は、島に山をなしたという。だが、ある時その歌声を鎮めたものが居た。」

「鎮めたもの・・・!？」

「そのものはある楽器を使って船乗り達の正気を保つことが出来た。そう・・・そのものはーオーオルフェウス。」

「「「「「「!!!」」」」」」」

「そして、俺のボックス兵器であるノアールの真の姿こそが、俺の真の力だ!!!」

「はっ！！まさか・・・お前・・・！？」

ツナの超直感がまた何かを感じ取った。

「流石はブラッド・オブ・ボンゴレ。その通りだよ・・・お前たちの目にもすっかりと刻み込むが良い、その美しき武器の姿をな！ノアール、カンビオ・ラ・オルマ形態変化！！」

「形態変化！？あいつもボンゴレボックスと同じような事が出来るのかよ！？」

ノアールはオルフェウスにそう言われると、翼を広げ炎を全身発火させた。

そして、そのまま大きさをオルフェウスの手元に入るほど小さくし姿を変えていった。

オルフェウスとはギリシア神話では諸国を旅する吟遊詩人だった。

ある時、セイレーンを歌声を鎮めるためにオルフェウスはある楽器を使った。

その音色はとても美しく全ての生き物を癒す音だった。

その楽器こそノアールの真の姿でありオルフェウスの武器その正体は—————

「オルフェウスの豎琴」

一護達はオルフェウスの手元に現れた虹色に輝く豎琴に目を奪われた。

弦はまるで宝石のように光り輝き、とても武器と呼ぶには高尚過ぎる姿だった。

「何だ……それは……本当に武器なのか!？」

「勿論。では早速音色を聞かせてやるぜ………交響曲一番『天球の水晶』」

オルフェウスは左手に持つ豎琴の弦を指で優しくなでた。

その瞬間一護達の耳に入ってくる癒しの音色。

だが、それは癒しと見せかけた恐怖の技だった。

音色を聞いた瞬間、一護達は身体中から自身の力が奪われていくことを感じ取った。

「なっ……これは……!？」

「身体中の力が……!？」

「吸い……取られている!？」



## 第92話：オルフェウスの豎琴（後書き）

### 次回予告

豎琴から聞こえてくる音を聴いた瞬間、俺たちの身体から死ぬ気炎や魔法、霊力が吸い取られていった。

どうにかそれを止めようとするが、奴は別の音源を使って俺達に攻撃を仕掛ける。

そんな苦戦する俺達と同じように、南に向った日番谷たちも交戦状態にあった。

相手は第10使徒のティグレだ。

巨大な破壊力を持つティグレに奮戦する日番谷達。

すると、そこに待ち望んでいた最強の二人がやって来た。

次回、次元の破壊者・・・「最強の雲と魔物」

みんな、卍解してみろよ



### 第93話：最強の雲と魔物

一護達は形態変化したオルフェウスのボックス兵器である豎琴の音色を聞いた瞬間、全身から力が吸いだされていくことに気がついた。音色とは反対に一護達の身体からは霊力や死ぬ気の炎、そして魔力が徐々に豎琴に吸収されていく。

「くそ！？力が・・・抜けて・・・！！！」

「苦しめ・・・苦しめ・・・虹属性の吸収によって死ぬ気の炎は勿論のこと、こいつの音色は人間の生命エネルギーをも吸い取ってしまう。死神の霊力も魔導師の魔力も根本的には生命エネルギーに変わりはない。死ぬ気の炎同様全員干物に用に全部吸い取ってやる。」

「舐め・・・やがって・・・！！！」

一護は霊力が多量に吸収されながらも、斬月を杖代わりにして自力で立ち上がり険しい表情を浮かべたままオルフェウスに向かって行った。

「ほああああああ！！！！！！！！！！」

「一護！！止せ！！！」

「一護君！！危険だよ！！！！」

ツナとなのはがその場に倒れ込んだまま一護の行動を止めようとする。

「駄目だぜ、人の言うことは素直に聞かないと・・・そんな悪い子にはお仕置きだ・・・」

オルフェウスは再び右手の指で弦を優しくなでた。

だが、今回は先程とは違う音色だった。

「交響曲第三番――『血塗れの天使』。」

その瞬間爪弾きだされ一護の耳に入る赤色の音色。

すると、その音色を聞いた一護は動きを突然止め全身から噴水のよう  
に血を噴出した。

「うあ” あああああああああああつ!!!!!!!!!!」

一護は血を噴出すとその場に倒れ込んだ。

「一護!!!!!!!!!!」

「一護君!!!!!!!!!!」

「一護さん!!!!!!!!!!」

ツナ達は血塗れになって倒れこんだ一護の安否を気遣い大声で名前

を叫ぶ。

「て……てめえ……一護に何をしたんだー！？」

全身の力が吸い取られて思うように身体を動かすことの出来ないリボンがオルフェウスに尋ねる。

「なぐに、聞き分けの無い短慮な餓鬼にちよつとしたお仕置きさ。普通のコウモリが目に見えない超音波を反響させて物体の位置を把握するのは有名な話だが、さっきの赤い音色は特殊な嵐の炎だったんだよ。俺の音色の場合炎の全ては反射せずに物体に吸収され、炎を浴びた奴は……嵐属性の分解力によってこうなる。」

「ベルフェゴールの……兄……ジルの使った……嵐コウモリ（ピピストレット・テンペスタ）の超炎破オンデ・スーベル・ファイアンマに似てるって……こと……か!？」

「お前たちの解釈ではそう言うことになるな……」

オルフェウスの技をまともに喰らい呼吸がままならないで倒れ込む一護。

「さて……コンサートはまだまだ始まったばかりだ。もっと俺の演奏を聞いてくれよ。」

すると、オルフェウスはまたもや右手を豎琴の弦に添えると今度はオレンジ色の音色を一護以外の六人に浴びせる。

「交響曲第二番——」『石と化する女神』」

ツナ達はその音色を聞いた。

すると、自身の両足が音色の作用で石化していくのが分かった。

「これは……!?!?」

「そー——大空属性の調和による石化だ。ここで変な手を使って逃げ回られたり攻撃される訳にはいかないんでな。大人しく足を止めて俺の演奏を聞いて貰おうか……ふふ……ふっはははははははははは……!?!?!」

その頃、残る南のポイントに向った日番谷達特殊戦闘フロント組みは、既に敵と遭遇し交戦状態に入っていた。

だが、余り不慣れな直接攻撃系の相手だったために勝負は難航し日番谷達のほうが敗色濃厚といったところだった。

「でりゃああああ!?!?!」

「ふん!!」

ストラダーで加速したエリオの槍撃をかわすや否や槍の先端を素手で握り、そのまま遠心力でビルへ投げ飛ばす男。

投げ飛ばされ傷を覆うエリオと、既に血を流し身体中を満身創痕にする日番谷・フェイト・大人ランボ。

そんな全員の他愛の無い様子に溜め息をついて虎皮のコートを着直す男。

「……他愛の無え。所詮はお前らは、第10使徒<sup>ディエス・エルトゥーダ</sup>……このティグレ・ケルビスの……敵じゃねえって事だ。」

すると、日番谷が正解状態で満身創痕の身体にもかかわらずティグレに向っていく。

「無駄だぜ。」

すると、日番谷の判断速度も追いつかぬ程の速力で日番谷の頭を鷲掴みにしてビルに投げつける。

背後に回ったフェイトも技を仕掛ける前にティグレに勘付かれ腹部に強烈な蹴りを入れられた。

「ぶっはー!!」

フェイトは口から血を吐き悶絶する。

「人間如きのスピードで、この俺様の背後をとろうなんて一生無理だぜ!」

そして、胸倉をつかみ大人ランボのほう目掛けフェイトを投げつける。

大人ランボもフェイトをキャッチしようとするが、勢いが強すぎてそのまま後ろのビルの壁に激突する。

「どうしたどうした・・・まさかその程度でもうくたばっちゃまったのかよ!？」

空中に浮かんでいたティグレが徐に地面に降りて、黒い土煙が巻きおこる日番谷達のほつをじっと見つめる。

やがて、煙が晴れて一箇所に固まる日番谷達四人。

険しい表情を浮かべたまま余裕の表情のティグレを睨み付ける。

「今だ嘗てこんなにも劣勢に立ったことは無いだろう。これが俺達十二使徒の実力だ! てめえら如きじゃ、俺に傷を負わすことなど一生掛かったところで無理だぜ。大人しく負けを認めて屍となつてろ!」

「・・・生憎・・・俺達は劣勢だろうが関係ない。身体が塵になるうが砕けようが、勝たなければいけない戦いの場で・・・引き下がる訳にはいかねえ。」

「そっー日番谷さんの言う通り。私達のこの戦いは、勝つための戦い・・・敗色濃厚でも好きに言えば良い。でも、あなたのその言葉、後で必ず後悔することになるわ!」

「僕達はーまだ負けてない!!」

「ボンゴレの雷の守護者を・・・あまり舐めないでほしい!俺だつて、やる時はやる男さ!」

四人の言葉を聞いたティグレは真顔から口元を緩めほくそ笑む。

「ふん。とことん頭の悲しい奴らだぜ。いいだろう・・・そこまで言うのなら思い知らせてやるうー貴様達の身体が塵と化してでも俺ら十二使徒の恐怖をな!!」

ティグレはそう言うと、巨大化させた右腕を振り上げ日番谷達を潰そうとした。

日番谷達も一瞬目を瞑り攻撃を覚悟した。

すると、思いもよらぬ事が四人の目の前に広がってきた。

何と、ティグレの巨大な右腕から突然血が噴出しその剥き出しの黒い身体にも傷がつけられ血を噴出していた。

「な・・・何!?!」

「どづいうことだ・・・!?!これは!?!」

日番谷やフェイトたちが怪訝そうにその光景を見つめる。

勿論、傷をつけられた当の本人が一番驚いているが。

「くそ!!誰だ!?!俺に傷をつけたのは!?!」

すると、ティグレの耳に見に覚えのない少年の低い声が入ってきた。

「うるさいよ・・・その君。その髪は明らかに校則違反だよ。そ





うなつてやがるんだ!!!」

ティグレが急いで出血多量の右腕を抑えていると、今度は雲雀の後から雲雀よりもかなり大柄な男が刃毀れした刀を肩に乗せて歩いてきた。

「・・・よう・・・随分と楽しいそうじゃねえか、俺も混ぜろよ。」

雲雀の後に立つ男の姿は異常だった。

髪は棘に用になっており先端には鈴がつけられ、日番谷と同じ白い羽織に死覇装を着ているものの、それはボロボロとなっておりとてもまともな奴には見えなかった。

そうーこの男こそ、日番谷もよく知る人物。

その名は・・・ー

「ぎ・・・更木!!!お前っ!!!」

「えっ!?じゃあこの人が日番谷さんの言っていた・・・」

「護廷十三隊最凶の戦闘狂・・・!?」

「十一番隊隊長・・・更木剣八!!!」

大人ランボの言った言葉を聞いたティグレは一瞬考え込み、そして不敵な笑みを浮かべる。

「更木剣八・・・おまけにボンゴレ最強の男雲雀恭弥か。こいつはついてるぜ！！まさかここに来てこんな大物に巡り合えるなんてな！！！！」

だが、そんなティグレの狂喜乱舞する様子にも二人の耳には聞こえていない。

寧ろ二人は揉めていた。

「君・・・あいつは僕がやるから邪魔しないでよ。」

「ああ！？そいつはこっちの台詞だ。てめえはすっこんでろ！あいつは俺の獲物だからよ！！」

「ふざけないでよ。なんなら先に君から噛み殺す事にするよ。」

「上等だ。あいつとやり合う前に、まずはさっきの続きから行くとするか！」

二人は完璧に日番谷達の理解の外にあった。

日番谷達は若干、いやかなり呆れた表情で二人の険悪ムードを眺めていたのだった。

そんな様子が一番腹を立てていたのは、ティグレであった。

「・・・貴様ら・・・俺を無視して何勝手に盛り上がってやがるんだよ！！！！」

ティグレは激しく憤る。

そして、切られた右腕を超速再生で復活させると今度は両腕を巨大化させてその上メタルコーティングをして二人に襲い掛かる。

「まずい！！更木、雲雀！！攻撃が来るぞ！！！」

日番谷の言葉を聞いた二人は咄嗟に別方向に移動し回避する。

すると、ティグレは標的を更木に向けて高く飛び上がる。

「はははあははは！！先ずは更木剣八！！貴様から料理してくれるわ！！！」

ティグレは地面で真顔のままの更木を見るや否や二つの巨大化させた拳を嵐如くぶつけて来る。

978

「『鉄槌の乱打』！！！」

その威力は、簡単に周囲のものを塵するほどのものだった。

周囲から巻き起こる多量の土煙が日番谷達の目に入る。

それにより、戦況の凄まじさが窺がえる。

「まだまだ！！！！てめえの足と腕は貰った！！！」

すると、ティグレは両腕の爪を煙が立ち込める方へ向けると、マシ

ンガンの如く爪の弾丸を勢いよく発射する。

「『鉤爪機関砲』! !」

雨のように無数に降り注ぐ巨大な爪の弾丸。

そして、全部の爪が発射され徐に煙の晴れて行くほうを見つめるテイグレ。

「・・・ふん、味気無ね。如何に更木剣八と言えども・・・これでは影も残るまい・・・」

「ひ・・・日番谷さん・・・更木・・・さんが! ?」

「大丈夫だエリオ・・・あいつはこんな程度で死ぬ奴じゃない。寧ろ、奴の死ぬ姿を考えほうが・・・どうかしてるぜ」

そう、更木の死ぬ姿を考えるほうがどうかしているのだった。

その時、日番谷と雲雀以外の全員は驚愕した。

煙が晴れた先にあつたのは、両肩にいくつもの爪を刺されていながらも笑いながら平然と立ち尽くす更木の姿だった。

「ふはははは・・・ふはははは。・・・何だ・・・終わりか?」

「.....! ! (おいおい、マジかよ! ?俺の『鉄槌の乱打』と『鉤爪機関砲』を喰らってー! ! まだ平然・・・立っているのか

よー！．．．！？こいつ、どういう神経してんだおい！？」

ティグレだけではない。フェイト達もあの攻撃を喰らってまともでは無いと思うが）に立っている更木の姿はまさに威容であり、畏怖の念を抱くほどだった。

「う．．．そ．．．！？」

「あんな攻撃をこれでもかと喰らって．．．！？」

「平気である上に．．．笑っているなんて．．．！？」

「あれが更木剣八だ。戦いのためになら自分の身体はそれを楽しむための道具として使う、そう言う男だ。」

そんな冷静に解説を加える日番谷を他所に、更木は徐に肩に突き刺さった鋭い爪を一本一本抜いていく。

「．．．やれやれ．．．この手の攻撃は、前に似たような喰らってるから．．．余り新鮮味が無いな。どうした、この程度で終わりじゃないだろう。俺を殺すつもりなら、もっとそれなりのもん出して来いよ。」

「くっ．．．貴様！？」

すると、齒を食いしばって悔しがるティグレの背後から雲雀が今迄の修行で身に着けて会得した強大かつ巨大な雲属性だけで出来たトンファーを持ってティグレの背中を攻撃した。

「何！？」

「言ったはずだよ・・・僕は風紀を乱すものを許さないって。さあ、噛み殺して上げるよ。」

ティグレは反応が間に合わず攻撃を直撃する。

そして、勢い余って前方のビルに激突しその反動でビルが崩れ去った。

「ちっ！余計なことしやがって！」

「君こそ・・・僕の獲物に手を入れないでよ。」

「まだ手なんか入れてねえよ！あいつが勝手に攻撃してきただけだろっが！」

雲雀と更木はまた口論をぶつけ合っていた。

そんな様子を気にしながらも、日番谷達は冷静に雲雀の戦力アップに驚いていた。

「更木はともかく・・・まさか雲雀の一撃がここまでとはな・・・」

「この一ヶ月の間に、雲雀君は私達が想像する以上の死闘をしてきたって事になりますよね!？」

「これなら・・・あいつを倒せるかもしれませんよ！」

「勝算は充分にこちら側にありますね。」



「  
・  
・  
・  
」  
悪魔化<sup>グレムリン</sup>  
」これが――俺の本当の姿だ――」



### 第93話：最強の雲と魔物（後書き）

#### 次回予告

真の姿を解放したティグレは、悪魔化の力で更木と雲雀を襲い掛かる。

だが、その圧倒的な力を前にしても敗色ムード一つ出さないことはおろか――

寧ろ戦いを楽しむ更木と雲雀。

そんな異常な二人を前にティグレは更に怒りを覚える。

危険な二人と危険な力をぶつけ合うティグレの戦い――

この勝負・・・最早日番谷達の出る幕ではないことは間違いなさそうだな。

次回、次元の破壊者・・・「悪魔VS死神と浮雲」

悪魔は、死神と浮雲にどう立ち向かうのか

## 第94話：悪魔VS死神と浮雲

日番谷達は忽然と姿を変えたティグレのを見ると、思わず唾を飲み込む。

「なんだ・・・!?!」

「これは一体・・・!?!」

「悪魔・・・」

「なのか!?!」

そんな驚くばかりの四人に対して、ティグレは不敵な笑みを浮かべ徐に説明をする。

「へへへ・・・そうだ。この姿は貴様らの言う通り悪魔。そしてそれが俺の真の姿。俺は体内の怒りエネルギーが頂点に達したとき、その力を解放して元の姿に戻ることが出来る。つまり、今までの俺の姿は仮の姿だったんだよ。」

「なっ!?!あれで仮の姿だったのかよ!?!」

「そんな・・・!?!」

日番谷もフェイトも愕然としていた。



「はつ。別に可笑しくて笑ってんじゃねえよ・・・嬉しいんだよ！  
！いいじゃねえか！！最高だ！！こうでなきゃいけねえ！！そうだ  
ろ、雲雀！！！」

「君に賛同するつもりはないけど、考えは同じだよ。まだまだこんなもんじゃ僕の気が晴れないからね・・・噛み殺すなら、徹底的にやらないとね・・・」

雲雀は完全に獲物を捕らえる肉食動物のような表情を浮かべると、口元を緩める。

そして、ボックスからロールを取り出しトンファーに殺気の籠もった雲属性の炎を灯す。

更木も嬉しさと興奮の余り刃毀れた自身の刀の刀身を不気味な眼差しを浮かべ舌で舐める。

「雲雀。てめえとの殺り合いはこいつの後だ・・・今は先にどっちがこいつを殺るかで競争といこうじゃねえか。」

「ふん。そんなもの、やる前から僕が勝つことは目に見えてるけどね・・・」

そして、闘争心剥き出しの二人は驚愕するティグレに武器を向けて同じ言葉を同時に吐く。

「「さあ、始めよう」ぜ・・・十二使徒」

二人はそう言うと、猛烈な勢いでティグレに向って走り出した。

「ちっ！何処までも癪に障る奴だ！！そんなに死にたければ望みどおりしてやるぜ！！！」

ティグレは二人同様勢いよく向っていく。

そして、右手の掌に作り出した暗黒物質で更木と雲雀に攻撃する。

「『ダイク・クラッシュ暗黒破壊』！！！」

二人は攻撃の寸前、互いに反対方向に避け攻撃から逃れた。

その破壊力は、周囲のものが容易に物質へと昇華されるという恐ろしいものであった。

これには、全員驚きを隠せなかった。

「見たか！これが俺の真の力！！迂闊に触ればてめえらもこうなる！！！」

そう言うと、ティグレはその悪魔の翼で大空へと舞い上がると空中に浮遊する雲雀に攻撃を仕掛ける。

だが、雲雀自身は待っていましたとばかりに自身も攻撃を開始する。

「ほう・・・俺の攻撃を受けても諸共しないとは・・・大した中学生だな。」

「君、強いね。僕は弱い奴には興味ないけど・・・強い奴との戦いなら大歓迎だよ。」

すると、雲雀は一度ロールを踏み台にして高く飛び上がるとトンフアーの炎を更に大きくしてなんと雲雀自身が高速で回転を始めた。

それはまさに、サイクロンと呼べるものだった。

「！なんだこいつは！！！」

思わずティグレも守りの体制に入る。

そんなティグレに容赦なく攻撃を仕替えてくる雲雀。

雲雀の生み出した新技・『浮雲ラッシュ・アマ・テラ・トランシトリエタの激怒』の高速回転が守りに徹するティグレの身体をじわじわと削り取る。

「くっ！！（何てパワーだ・・・俺の体皮をこつも簡単に削り取るとは・・・）」

ティグレは一端攻撃を受け流し後のほうへ回避する。

「余所見してんじゃねえよ！」

すると、ティグレの背後に待ち構えていた更木の剣戟が襲い掛かる。

咄嗟にティグレは暗黒物質を剣状に長く鋭く伸ばして更木の剣戟に

対抗する。

「はははあははは！！！どうしたどうした！！てめえの力はそんなもんかよ！？」

「貴様・・・・・・・・調子に乗ってるじゃねえよ！！！」

ティグレは更木を剣の一振りで地面まで振り落とす。

そして、地面に激突し土埃が立ち込めるところまで向って突進。

「貴様の刃毀れた剣なんかで、この俺が斬れるかよ！！！」

そう半ば焦りの声色でそう言うと、右手に持つ漆黒の剣を巨大化させ更木のところ目掛けて振り下ろす。

「死ね！！！！！！！！！！」

すると、土煙が晴れ更木が起き上がると――・・

振り下ろされる剣を見るや否や笑みを浮かべそれを素手で鷲掴みにして止めたのだった。

「なっ！？」

更木の行動にティグレも動揺を隠せずに居た。

「・・・・・・・・全く、どうしてこうも同じ台詞を吐かされるんだよ・・・・戸魂界にも虚圏にもいろんな奴が居た・・・・てめえの剣じゃ斬れねえだのとほざくうるせえ奴にも何度か遭った・・・・だがな」







うなことを言い始める。

「はっ、いいじゃねえか・・・そいつを待っていたぜ。」

「何!？」

「てめえだけ傷つけるだけじゃちょっと物足んなかったんだよ!漸く俺らに傷が出来たんだ・・・こっからは・・・今以上に愉しんで行けるぜ!!!!!!」

更木の異常なまでの戦いに対する様子を見たティグレや、フェイト・エリオ・大人ランボは敵味方関係なく恐ろしいと思った。

そして、隣に居る雲雀も更木の態度に当てられ同じような笑みを浮かべる。

「いいね・・・僕をここまでムカつかせたのは久々だよ・・・君は噛み殺すだけじゃ物足りないな・・・せめて、磨り潰して粉々にしてあげるよ・・・」

「はっ!この戦闘バカ共が!!だが・・・貴様らの気持ちは俺には分かるぞ・・・俺も久々に思う存分暴れられそうだ。貴様らの身体・・・俺が食して胃袋の中に入れておくぜ!」

そう言って、ティグレは右腕と左目を超速再生させ二人に向かって構えた。

更木も雲雀も血塗れになった羽織と学ランを脱ぎ捨てると剣とトンファーを構える。

そして、暫く睨み合った後――

闘争心を剥き出して飛び掛っていく。

その頃、アイゼンハウアー邸で留守番役を任されたアイゼンハウアーや浮竹を始めてとする七人は、一護達のことを心配で焦燥が消えないで居た。

「全く一護の野郎……一体何時までかかってんだよ……こんなことなら、俺様がいつてやればよかったか！ああ……姐さん……無事で居てくれよ！！！」

一護の身体の中に入ったコンがそわそわと動き回りながら落ち着かないで居る。

「心配するな。朽木も一護君たちも強い。今俺達に出来ることは……みんなの帰って来るこの場所と彼女達を守ることだ。」

「それはそうっすけど……」

浮竹の言い分にまだ焦りを完全に捨て去れないコンが曖昧な返事を返す。

すると、邸内に突然アラートが鳴り響く。

浮竹達は驚愕してアイゼンハウアーのいるモニタールームに足を運ぶ。

「何事だ!?!」

浮竹やコン、京子たちもモニタールームへ向うと険しい表情を浮かべたアイゼンハウアーが全員にそれを顕著に示す目にター映像を見せる。

「この家に向って夥しい数のドロイド兵のようなロボットがこちらに向ってくる。しかも、それだけではない!!なのはちゃんの住む世界で現れた物理兵器・・・ガジェット・ドローンから三型までもが攻めて来てる。どうやら・・・わしらのこともお構い無しに潰しに来たようじゃ。」

京子達は焦り恐怖で身を寄せ合い震え上がった。

「くっ!やはり迎撃するしかないか!!アイゼンハウアー殿、俺が迎撃に出る。あなたは邸内から俺のサポートをしてくれないか。」

「分かった・・・と言いたいところだが、今回はわしもセクトウーレも参戦する。」

意外な台詞を聞いた浮竹達は驚きを隠せなかった。

「しかし!相手はあんな危険な武器とかを揃えているんです!!ここは俺一人が行くべきでは!?!」

「心遣い有難う。だが・・・腐っても鯛。こつ見えて今も昔も身体は鍛えているし、嘗ては諜報部最強と謳われた男じゃ。老兵として自身と周りの身を守ることぐらいできる。それはセクトウーレとて同じ」

「そうよ、浮竹さん。私だって若い頃は敵なしと言われた格闘家だったんだから！心配しないでよ。」

そんなアイゼンハウアーとセクトウーレの返事を聞いた浮竹は止むを得ずそれを承諾することにした。

「分かりました・・・では、俺と一緒に三人で迎撃に出しましょう。コン君！君は家に残って彼女達の身の安全を確保してくれ。俺達が片付けるまで一歩も出るな！」

「わかった!!！」

「浮竹おじちゃん・・・・・・・・」

すると、ヴィヴィオが心配そうな表情でそう言うと浮竹は振り返り笑みを浮かべる。

「心配いらないさ。君のママも俺もみんなも・・・必ず元気で戻ってくるさ。だから、安心してくれ！」

浮竹は笑みを浮かべたままヴィヴィオの髪を優しくなでる。

そんな浮竹の態度にヴィヴィオも安心する。

「うん！」

「よし、久々に暴れるとするか・・・セクトウーレ・・・」

「はい・・・旦那様・・・」

「……さて……参りましょうか……」

浮竹・アイゼンハウアー・セクトウーレの三人は覚悟を決めた眼差しで正面玄関を出て行った。

そして、2キロに迫った敵を見つけると、敵も三人を見るや否や動きを止める。

浮竹は刀を抜き、アイゼンハウアーは下に來ていた防護服に身を包み背中に刺していた節棍を取り出し、セクトウーレは服を破り捨て鍛え上げられた筋肉を剥き出しにする。

「ここから先は一步も通さぬ！」

「ここで潰させてもらうぞ、ガラクタ共!!」

「いくわよ!!!!」

そう言うと、三人は機械軍団に向って走り出した。

機械軍団もそんな三人を迎え撃つために一斉に迎撃を開始する。

邸内でそんな戦いの生々しい様子を耳に入れる京子達。

「浮竹さんもアイゼンハウアーさんも……本当に大丈夫でしょう？」

「ハルちゃん・・・大丈夫だよ。きっと浮竹さん達が何とかしてくれるよ・・・今は信じよう。ツナ君やみんなが無事に帰ってくることを・・・」

「はい・・・もしハルたちにも戦うことが出来れば・・・こんなに辛い思いをしなくてすむのに・・・」

ハルや京子、そしてヴィヴィオはなのはやツナ達と違って自らの力で戦えないことに大きな憤りを感じ涙を流した。

そんな三人の様子を見たコンはそっとハンカチを差し出す。

「ほら・・・拭けよ。可愛い顔が涙で濡れるところは俺は見たくねえ・・・」

「コンさん・・・ありがとうございます・・・」

京子達はコンからハンカチを受け取り、順番に涙を拭き取る。

すると、そんな四人の耳に脳裏の中にかすかに残っていた思い出したくないものの声が入ってきた。

「何だ・・・護衛は一人か。」

四人は突然耳に入ってきたこの声に直ぐに反応し、声のするほうへ身体を向ける。

だがそこには誰もいない。

だがはつきりと声はしてきた。

「存外・・・真之介も沢田綱吉も無能だな・・・最も大事な素体を・・・無防備に近い状態で放置するとな・・・」

そして、京子達はそれをこの目でしっかりと目撃した。

何も無かったところに忽然と黒腔が開きある男が現れた。

「・・・それは・・・次元の破壊者に最も信頼される十二使徒・・・ペローだった。」



## 第94話：悪魔vs死神と浮雲（後書き）

### 次回予告

京子達の前に黒腔を裂いて突如現れたペロー。

ペローは、京子以外の三人を気絶させると・・・何かを話し出した。

京子はその話を断固否定するものの・・・ペローは強制的に話を持つていくために行動を移す。

一方その頃、そんなこととは露知らず市街地で戦いを繰り広げる俺達。

すると、突然戦いを遮るように十二使徒の真上から反膜が降り注いだ。

驚愕する俺達・・・すると、空に不気味な瞳が映し出され俺達に話しかけてきたのは・・・

次回、次元の破壊者・・・「明かされる目的」

みんな、死ぬ気で見るよ。

第95話：明かされる目的（前書き）

昨日は朝から用事があって投稿できませんでした

ですから一日遅れですけど今日投稿しました。

今週のジャンプまじハンパねーーーーー!!!

## 第95話：明かされる目的

アイゼンハウアー邸で黒腔が開かれ、恐怖を感じる京子達四人の前に姿を現すその男――ペロー。

ペローは徐にカーペットの上に足を踏み入れ、両手をズボンのポケットに突っ込んだまま京子達に向かってくる。

「・・・護衛が一人というのは拍子抜けだが・・・煩わしい連中が出払っていて、こちらとしては都合が良かった。話をするのに、時間を急ぐのはあいつ同様に合わんからな。」

京子達はペローの無表情かつ途轍もない殺気の籠もった瞳に動揺しながら、その場に立ち尽くす。

コンはペローの姿を見るや否や脳裏に残る始めての接触の光景を思い出す。

「・・・て・・・オ・・・オメーは・・・」

硬直するコンと京子・ハル・ヴィヴィオに静かに歩み寄るペロー。

蛇ににらまれた蛙同様四人は足が動かない。

「・・・ペロー・・・!?!?」

「何だ？俺の名を憶えているのか。お前に名乗った覚えはないんだがな。まあ良い・・・今は貴様に用はない。勿論、その後には居る女二人にもだ・・・少し・・・寝る。」

そう言うと、ペローはコン・ハル・ヴィヴィオの三人に向けて両目を向ける。

すると、三人は気を失いその場に倒れ込む。

その光景を見て気が動転する京子は、直ぐにコン達の意識を確認する。

「コンさん！！ハルちゃん！！ヴィヴィオちゃん！！！！すっかりして！！！！どうしたの！！！！」

何度も力いっぱいコン達の身体を揺するが、全く起きる気配すらない。

まるで死人のように――――

京子は涙目になりながらペローに怒りの表情を見せて問い詰める。

「あなた！ハルちゃんたちをどうしたの！」

「騒ぐな煩わしい。精神を混濁させて気絶してもらっただけだ・・・俺が用があるのはお前のほうだ・・・」

「えっ！？」

京子はペローの言っていることが分からなかった。

「……何故ペローは自分に用があるのか？」

「……何故自分なんかのために、コンやハルやヴィヴィオが傷つかなくてはならないのか？」

「俺と来い……女」

「!?!?な……」

京子かとペローの唐突な一言を聞いて問い直そうとすると、ペローが間髪居れずに言葉を挟む。

「喋るな。言葉は『はい』だ。それ以外を喋れば殺す。『お前を』じゃない……」

すると、ペローは困惑し動揺する京子にある映像を浮かび上がらせた。

そこに映し出されているのは……市街地で今も尚十二使徒と戦い傷ついていくツナ達仲間の姿だった。

「『お前の仲間を』だ」

「……」

「――京子はその映像を見た瞬間、頭の中がぐちゃぐちゃになりそうだった。」

「何も問うな。何も語るな。お前がその手に握っているのは仲間の首が据えられたギロチンの紐・・・それだけだ。理解しろ女。これは交渉じゃない・・・」

「・・・」

「命令だ。」

「伶俐冷徹なまでにその言葉を吐くペローと、何も喋れず気絶する仲間の前に立ち尽くす京子。」

「次元の破壊者様は生存するお前そのものがお望みだ。俺にはお前を無傷で連れ帰る使命がある。もう一度だけ言う・・・俺と来い、女。」

「このフレーズを聞いて井上織姫であつたなら――・・・」

「仲間を救うためと言って仕方なくその指示に従ったはずだ。」

「――だが、京子はペローのそんな理不尽な要求を聞き、顔を強張らせながらも次の一言を発する。」

「・・・嫌です・・・!!」

「・・・何・・・？」

ペローは京子の予想外な発言に心底驚いたことだろう。……  
勿論、この状況を仮に井上織姫が聞いても同じなはずだ。

「あなたが何で私のことを必要としているかは……分かりません。でも……そんなことをしたって、ツナ君やみんなが助かる保障なんてないし、第一ツナ君をもっと悲しませることなんて私には出来ない！！だから……あなたが何と言っても……私は絶対に……あなたの命令は受けません！！！！」

——京子の瞳に宿る覚悟は本物だった。

それは嘗てペローが今迄見たこともないものであった。——ペローの脳裏に同じ破面の悪友との記憶が蘇ってきた。

「……………そうか……………ならば止むを得ん……………」

すると、ペローは響転ソニートで京子の目の前に移動し、京子の腹部を殴りつけ気絶させた。

その頃、そんなこととは露知らぬ一護達は——満身創痍になりながらもそれぞれの場所で戦いを繰り広げていた。

「ははははあはあ！！まだまだこんなもんじゃ終わらないぞ！！交響曲第五番『暴風雨の鎮魂歌』レクイエム」

一護達と戦いを続けるオルフェウスは、苦しみ続ける一護達に今度は雨属性の音色を耳に届ける。

すると、その音色によって一護達の意識が徐々に遠のいていく。

なんとか一護達はそれに耐えようと気張るが————音色は容赦なく耳に入っていく。

「くそ……!!負けて……たまるかよ!!!」

「ふん。滑稽だな黒崎一護。そうやって気張ったところでどうにかなると思っっているのか?全く呆れ果てて言葉もねえな。仕方ない————最期ぐらいは綺麗な音色で絶命させてやる。」

そして、オルフェウスが再び豎琴に手を触れ弦を爪弾きだそうとした

————その時。

市街地の東西南北の空に歪みが生じ、光が十二使徒四人の真上に照射された。

「!!!ネガシオン反膜……!!!」

勿論一護だけでなく、東西南北で戦いを続けていた他の仲間たちも驚愕する。

山本・シグナム・クロームと戦っていたカバロもそれが降り注がれた瞬間、状況を理解し武器をしまい込み指を鳴らす。

「……ふん。……任務完了か……まあいい。充分に腹も膨れ



たところだ。」

すると、井上の双天帰盾の中で治療を受けていた四人も目を覚まし頭を抱えながら徐に起き上がる。

「朽木さん！石田君！ティアナさん！キャラちゃん！良かった・・・何ともない！！！」

「ああ・・・井上のおかげで精神は何とか喰われずに済んだが・・・それより何故反膜が・・・！？」

「どういうことだ！？あいつらは僕達を狙って来た筈だ！？なのにどうしてこんな・・・！？」

「あいつら・・・一体何を考えているつもり！？」

ルキアも石田もティアナも全く訳が分からなかった。

「・・・すると、キャラが何かに気付いたらしく全員に聞こえる声で空のほうを指差す。」

「みなさん！！空を見て下さい！！空の中止から異常なまでの高エネルギーギーを感知しました！！」

そして、全員がキャラの指差すほうへ目を向ける。

他で戦闘をしていた仲間もそれに気付き、天を仰ぎ見る・・・

そしてその瞬間から何やら不気味な黒い雲が一護達の瞳に映り徐々に顔のようになっていく。

「何だ……！？極限顔のようなものになっていくぞ！？」

「何が起こつてやがるんだよ！？」

了平と恋次以外の一同も騒然としている

「……そして、雲が顔の形に整うとそこから不気味な瞳が片方だけ現れ一護達を見つめる。」

「何だ……！？こいつは……！！！」

「……俺はそのとき、それを見た瞬間に全身に走る言い知れぬ憎悪や怨嗟などのありとあらゆる負の感情を感じた。」

「……いや、それだけではない……きつと俺は分かっていたんだ。」

「……こいつはもっと深い何かに溺れてしまった恐ろしい奴なんだと……」

「……真之介……ありや何だよ……一体！？」

すると、真之介は一瞬唾を飲み込みあの瞳を見ると……暫くしてから徐に俺達に話しかけてきた。

「……あいつこそ……俺達が迎え撃つ……最大の敵……」

「「「「「！！！！」」」」」

私達は真之介君の言葉で確信した

「……そう、あれこそ世界を破壊し秩序を捻じ曲げようとする張本人……」

「次元の……破壊者……！！」

俺達の以外の全員も真之介に言われる前に既に気付いていたのかもしれない。

すると、愕然とする俺達に

「……徐に奴が話しかけてきたのだった。

「……久しぶりだな、真之介。そして、始めまして……死神とボンゴレと魔導師諸君。お初にお目にかかる……私が次元の破壊者だ。」

その声と雲の様子はロボットと戦いを続ける浮竹達の目にもしつかりと映っていた。

「何だつて!？」

「あれが……次元の破壊者じゃと!？」

「一体どうなっているのよ!？」

困惑する俺達――

そして、ツナが身体を引きずりながらも自力で立ち上がり次元の破壊者に問い詰める。

「どういうことだ!？お前は俺達を潰すのが目的じゃないのか!？  
そのために十二使徒四人をここに送り俺達を誘き寄せ戦わせたんじゃないのか!？なのに――――何故反膜を降り注いで撤退しようとする!？」

「せや!！お前は一体何が目的で私らと奴らをここで戦わせたん!？  
目的は何なんや!？」

ツナとはやてが怒り交じりの声でそう言うと、次元の破壊者は瞳を閉じ悠々とそれに応える。

「どうやら君たちは大きな勘違いをしているようだね・・・」

「勘違い!？」

山本がそう言うと、次元の破壊者はそうだと一言言って更に話を続ける。

「私は一度も今回の件に関して、”十二使徒と君たちを潰し合っ

貰う”と命令した覚えはない。これは君たちを素体から遠ざけるための、言わば陽動だったのだよ。」

「陽動・・・ですって!？」

ティアナが驚愕の声を上げる。

「おい、てめえ!!素体ってどういうことだよ!?世界を破壊して・・・秩序をぶっ壊して死人を生き返らせるのがお前の目的じゃないのかよ!？」

真之介も次元の破壊者の言ってることが分からなかった。

すると、そんな真之介に次元の破壊者はやはりといった様子で真之介に真実を告げる。

「やはりお前もこればかりは知らなかったようだな、真之介。確かに、私の目的は・・・失った者の命を再び蘇らせること。それに間違いはない・・・だが、よもや君は”私が闇雲に世界を破壊して秩序を覆そうとしていた”と本気で思っていたのか？」

「!?!?!」

真之介を始めとする全員はその真実に一瞬耳を疑った。

「結論から言わせて貰えば、そんなことは常識的に不可能だ。”死んだものは決して生き返らない”、それは神がこの世を創る以前から定めていた不変の法則。あらゆるものは限られた時間で生を堪能しそしてある時死を迎える。だからこそ我々はそれに足掻こうと必死で抗い、奮闘する。しかしながら・・・結局どんなに気張ったと

ここで死を背けることなど出来ぬ。でもな・・・私はたった一つだけ”死から逃れ生だけを堪能する方法”を知っているのだよ。」

「生だけを・・・堪能する・・・方法!？」

なのはがそう言うと、次元の破壊者は東西南北に散らばる全員に三つの物質の映像を映し出した。

「多次元世界には神が定める以前に出来上がった神器・・・魔導師で言うところのロスト・ロギアが存在する。だが、それは最早ロスト・ロギアと呼ぶには絶対的な代物だがね・・・」

「絶対的な代物・・・!？」

「そうだ。今君たちが見ているものが・・・私が集めている死を払いのけるために必要な神器。一つ目は『熙石』と呼ばれる世界の成り行き・過程を意のままに操ることの出来る鉱石。ボンゴレの住む世界には73（トゥリニセツテ）というこの世を創造したという原石を加工したものがあるだろ。これはそれを遙かに上回る力を持った鉱石だ。」

それを聴いた瞬間、ツナやリボーンを初めボンゴレ関係者達は驚愕した。

「う・・・うそだろ・・・!？」

「事実だ。この世にはそれ以外のものはないのだ。さて、話を戻そう。二つ目が『空暈茂』と言う世界の全ての時間を司る宝玉。そして、三つ目が『秦沙』と呼ばれる最も重大な力である人の生き死にに作用を及ぼす砂だ。今私の元には既に完全覚醒状態のこの三つが

既に手元にある。」

そのとき、真之介は確信した。

「！！まさか・・・今迄世界を手や足り次第破壊してきたのは・・・  
・・・そいつを見つげ出すために！？」

「ご名答。その通りだよ・・・だが残念なことに完全覚醒状態にあるこの三つの神器を究極にまで力を発揮するためには、先程言った素体が必要不可欠なのだ。その素体の条件は・・・”周りから敬愛されると同時に、純粹かつ包容力のあるものによって愛を受けている者”でなくてはならない・・・そう・・・私の求めるその素体は・・・」

すると、喋り続ける次元の破壊者の近くに腕に何かを抱えたペローがやって来た。

それを見た一護達は身を震え上がらせた。

「あいつは・・・！？」

「ペロー！？」

「何か手に抱えてるけど・・・布で隠れて分からないよ！？」

「任務完了です・・・次元の破壊者様。」

「ご苦労・・・ペロー。序だからその布を取って彼らに見せ付けてくれないか。」

「……はい……」

そう言われると、ペローは無表情のまま右腕に抱えた布を徐に取り外す。

そこにいたのは紛れもなく気絶した京子だったのだから――

「あつ……京子……!!」

「京子!!……!!……!!」

「奥方!!……!!」

ツナ・了平・獄寺の三人はあまりの衝撃に思わず声をからして京子の名を叫ぶ。

「てめえ!!!京子をどうするつもりだ!??」

「これから彼女を連れ帰り、この三つの物質、『ユーボーグ新命』と融合させる。そしてそのとき初めて……私の念願が叶う。今回の働き、実に素晴らしいかったよ。いくぞ……お前たち。」

次元の破壊者にそう言われると、反膜を注がれた四人は黒腔へと消えていった。

ペローも京子を抱えたまま俺たちの前から消えようとしたときだった――ツナが猛スピードでペローの目の前まで接近し、ボロボロの身体のまま立ち塞がった。

「ツナ!!」



「綱吉君!!!」

「十代目!!!」

「沢田!!!」

俺達が地上からツナを叫ぶ。

そんな声を聞いても、ツナが目の前に立ち塞がっても全く表情一つ変える事のないペロ。

「……お前らに……京子は渡さない!」

ツナの怒りのこもった声を聞くと、腕に抱えられていた京子も目を覚まし徐にツナのほうを見る。

「う……私は……はっ!!!」

京子の目に映ってきたのは自分のことを最も気遣い、その大空のような優しさで全てを包み込んでくれるツナの顔。

「京子!待ってる!!!今行く……!!!」

「ツナ君!!!」

「……随分と威勢がいいな、沢田綱吉。俺を止められるとでも思っているのか?」

「止められるとかそんなことは関係ない・・・止めなきゃいけないから止めるんだ！京子は・・・返してもらおう！」

ツナはペローにそう言つと、炎の推進力を全開にしてペローの下へ近付いていった。

そして、拳に全力を込めるとその炎でペローに殴りかかるうとした。

「貰っ・・・！！！」

だが、現実はその上手くいくわけではなかったー

ペローは焦り一つ見せることなく左手を伸ばして手刀一本でツナの腹部を突き刺した。

「かつは！！！」

腹部を突き刺され腹と口から血を噴出すツナ。

「はっ・・・！！！！ツナ・・・君・・・！？ツナ君！！！！！」

京子が涙を浮かべながらツナに向かって手を伸ばす。

ツナも京子の手に向かって朦朧とする意識の中で手を伸ばすが、それは決して届くことはなく、ツナは力尽き地面に向かって落下していった。

「ツナ君！！！！！！！！！」





## 第95話：明かされる目的（後書き）

### 次回予告

次元の破壊者の策略にまんまと引っかかり・・・京子を連れ去られてしまった俺達。

了平は、京子を助けられなかった自分の無能さとツナのことを責めてツナに容赦なく殴りかかる。

止めようとするのは達と自責の念にかられ抵抗をすることもないツナ。

だが、そんな了平を逆に殴りつけたのは一護のほうだった。

困惑する了平に、一護は兄として役割を了平にむかって宣言し俺達の前から居なくなる。

そして、俺達は真之介によって一護が何故そこまでして守ることに拘るのかを聞かされることになる。

次回、次元の破壊者・・・「一護の過去」

みんな、正解して見ろよ。

ここで今迄出てきた十二使徒と次元の破壊者の声の発表だ。

コネホ・・・大塚芳忠

ペロー・・・浪川大輔

オベージャ・・・速水奨

バカ・・・ラサール石井

カバロ・・・鈴置洋孝

オルフェウス・・・石田彰

ティグレ・・・武虎

次元の破壊者・・・中田譲治

## 第96話：一護の過去

戦いとは実に残酷なものだ――

――人は何かを手に入れるために、何かの代償をなくして何も得ることは出来ない。

――何かを得るためには同等の対価が必要だ。

――だが、戦いとはそんな対価を払うことを無視して、力あるものによつて無理矢理原則を覆され、略奪・暴力・そして殺戮。

――それは人間が長い歴史の中で行ってきた行動の現われ。

そして、今回・・・戦いに敗れて自分達の大切なものの一部が奪い取られ、何も言えずに涙を流すものや、悔しさの余り壁に拳を殴りつけるものもいた。

一護達の奪われたものは・・・彼らにとってはかけがえのないものなのだから・・・

十二使徒ととの戦いに敗れ、ペローから京子を取り返すことも出来ずにそのまま傷だらけの身体を引きずって戻って来た一護達。

特に、今回最も心に受けた傷を抱えていたのは・・・紛れもない、ツナだった。

アイゼンハウアー邸に戻って治療を受けた全員は途方にくれていた。

――自分達の未熟さの所為で、大切な仲間の一人が敵の手に奪われてしまった。

――これからどうすればいいのか？

――一体どうやって奴らの手から京子を取り返せば良いのか？

――護達は全く分からずにいた。

だが、そんな淀んだ空気に更に追い討ちを書けるようなことが起る。

「……………俺は……………くっ！！！」

ツナの脳裏には昼間の戦いで、ペローの腕の中から自分に向けて手を伸ばし助けを請う涙を流した京子の姿が鮮明に焼きついていた。

恋人になったあのときも、それ以前るときからも……………京子だけは必ず自分の手で守って見せると心に誓っていたツナ。

例え自分の命が尽きようと、彼女の笑顔と幸せを守れるならなんでもする覚悟だった。

だが、自分は今回の戦いでそれを成し遂げることが出来なかった。

今のツナの中にあるのは、そんな自分に対する自己嫌悪と贖罪だけ

――



ツナはそんなことを抱えながらソファーに座りながら嘔り泣きながら、京子がくれた手作りのお守りを強く握り締めていた。

そんなツナの様子に全員もそっとうとしておこうと思いつながら、自分達も今度の戦いで以下に非力だったのかを思い知らせ、終始頂垂れていた・・・その時！

「沢田！！！！！」

一瞬の出来事だった。

ツナが徐にその声を聞いて顔を上げたかと思いきや、突然物凄い剣幕を浮かべた了平の鉄拳がツナの顔面にめり込むように入っていく、その衝撃でツナは後方に飛ばされ家具が置かれた場所に激突した。

「ツナ！！！」

「綱吉君！！！」

突然の了平の行動に動揺を隠せないのは達。

了平はそのままツナのほうへと向かい、殴りつけたツナの胸倉を乱暴に？むと再びツナの顔面に強烈な拳を何度も何度も入れ続ける。

「十代目！！！！てめえ、芝生！！！！何してやがんだよ！！！！！」

「やめてよ、了平君！！！！いたいどうしちゃったのさ！！！！！」

慌てて了平の行動を止めようと、獄寺とスバルが後から押さえ込んで止めようとするが、了平は激しく抵抗を続ける。

「放せ！！！タコ頭、スバル！！！何をするか！！！！」

「それはこっちの台詞だ、芝生！！！！いきなり十代目に何てことしやがる！！！！」

「そつだよ、了平君！！！！どうして綱吉君を理由もなく殴るの！！？」

「理由ならある！！沢田は・・・沢田は京子のことを守ると誓ったのに、それを破ったからだ！！！！」

「だからって、てめえが十代目を殴っても奥方が戻ってくる訳じゃねえだろ！！！！」

「貴様に何が分かるタコ頭！！！！これは俺と沢田の問題なんだ！！！！あの時・・・沢田が京子との交際を始めて俺に話したとき、俺と沢田はある一つの約束をした。”どんなことがあっても、その見に変えてでも必ず京子を守ります。だから、俺たちの交際を認めてくれないか”と。俺はその言葉と沢田の覚悟を信じて交際を認めたのだ！！！！だが、それがどうだ！！！！沢田は・・・沢田は京子を守れなかった！！！！だから、ここで俺が沢田に裁きの鉄拳を入れているのだ！！！！」

そう言うと、了平は強引に二人の手を払いのけると再びツナの胸倉を？み殴り続ける。

「沢田！！！！何故京子を守れなかった！！！！あの言葉と覚悟は、嘘であったのか！！！！俺はあのときの貴様の言葉を信じて京子をお前に任せたのだぞ！！！！なのに何故だ！！！！」

ツナはその時、殴られ続けて腫上がった顔で見たのは……了平の目につつすらと浮かぶ涙であった。

それを見たツナは、徐に目を瞑り了平に言葉を投げかける。

「……お兄さん……あなたの言う通り……俺は京子ちゃんを守り通せなかった。俺はどうしようもないダメな奴です……俺を殴ってあなたの気が済むのなら……俺を殴ってください。もうこんな俺に……守るなんて語る資格……ないんですから……」

それを聞いた了平は、込みあがる色んな思いを全て右の拳に集約させる。

「いいだろう……沢田がそこまで言うのなら……俺は俺の気が済むまでお前を殴り続けよう。たった一人の大切な妹を傷物にしてくれた……貴様への怒りが全て治まるまでな!!!!!!!!!!」

了平は全ての思いを右拳に収束して、今迄で一番重い拳をツナの顔面にかけて殴りつけようとした。

「ツナさん!!!!!!」

「!!!!ツナ!!!!!!」

「ボス!!!!!!」

「!!!!綱吉君!!!!!!」

「十代目!!!!!!」

ハルやクローム、そして彼を慕う人間や様々なものがツナの名前叫んだ。

ツナ自身も、今回の一撃を一切避けるつもりは毛頭なく・・・目を瞑った状態で了平の拳を全て受け入れようと思った。

「……ところが、それは思いもよらぬもので覆されることになる。

了平が渾身の思いを込めた右ストレートが入ろうとしたとき、了平の右腕を何者かが？んで動きを止めてしまった。

「!?!」

了平が後振り返ってそれを確認すると、そこにいたのは無表情の状態で愕然とする了平を見下ろしている一護がいたのだ。

ツナも徐に両目を開けてそれを見たときには流石に驚いた。

「い……一護……さん!?!」

「一護殿!? 一体……何故……」

了平がまだ何かを言いかけたとき、一護は了平がツナにやったのと同じように顔面に了平よりも強い右ストレートを入れて、後ろの壁のほうへ飛ばした。

これには全員衝撃を隠せないで居た。

「く……黒崎君!？」

「おい、一護!! 貴様何を……っておい、一護! 一護!!!」

一護はルキアの応答に伝えることもなく、壁に激突して顔に手を当てる了平の下に足を運ぶ。

そして、何が起こったのかを把握できないで居る了平が自分の目の前に立つ一護に尋ねる。

「一護……殿……何故……」

と了平がまた何か言いかげようとすると、間髪居れずに一護は了平の顔面に鉄拳を入れる。

「い……一護さん!!!」

「黒崎!! 一体何をしているんだ!?! やめないか!!!」

急いで石田や茶渡、シグナムや山本が一護の行動を止めようとする。

その間に、ハルとフェイトがツナの顔を手当てをし一護の行動を黙って見ていた。

そして、四人によって動きを止められた一護は……殴られたショックで朦朧とする了平に向かって静に心の奥に抱えていた了平に対する怒りを言葉にする。

「てめえ……さつきから聞いていれば……ふざけた事ばかりぬかしやがって! 確かに、ツナは京子を守れなかった……それは

認めるざる事実だ。でもな・・・だったらお前は兄貴として、何故京子を守れなかったんだよ!!!」

「!!!」

意識が朦朧とする了平も、一護が最後に言った言葉だけはしっかりと聞こえた。

「兄貴だったら・・・恋人以上に後から生まれてきた妹や弟を守るのが務めだろ・・・けど、何時までも自分が京子を守るなんてことは出来ない・・・だから、お前はツナに京子を任せんじゃねえのかよ!!!お前は・・・それを兄貴として、妹のことを守ってくれとツナに託したんじゃないかよ!!!それなのに・・・こんなやり方で八つ当たりかよ・・・」

「一護・・・君・・・」

「一護・・・さん・・・」

一護の声色に若干の悲しみが籠もっていた――

そして、そんな一護の言葉に何も言えずにただただ愕然とする了平に、一護は――

「ふざけんな!!!それが兄貴としての態度かよ!!!そんなことをしたところで、京子は帰ってこねえし、京子が余計に悲しむだけだろうが!!!お前は・・・そんなに妹の悲しむ顔が見たいのかよ!!!」

その言葉を聞いた了平はそのとき、京子の顔が悲しみて歪んだ様子

が浮かび上がった。

「京子……………」

「今のてめえに…………今のてめえに…………兄貴を名乗る資格なんてねえ!!!!!!!!!!」

一護はそう了平に怒鳴りつけると、石田達の手を強引に振り払って深い悲しみを抱え込み静に全員の前から姿を消したのだった。

了平は一護に言われた言葉がよっぽど応えたのか、壁に背中をつけたまま何も言えずに死人のような表情を浮かべていた。

そんな了平をシグナムがそっとしゃがみ込んで大丈夫かと言って宥める。

そして、全員は一護のあそこまで悲しい表情は見たことがなかったのか、困惑していた。

「フェイトちゃん…………一護君…………物凄く辛そうだったね……………」

「うん…………何か深い事情があるのかな……………」

「…………何か一護にも…………俺たちには言えないような過去があるのか……………」

リボンが帽子を被りなおして、低い声でそう言つと…………見かねた真之介が溜め息をつくなり全員に話しかけた。

「・・・やれやれ・・・どいつもこいつもしょうがねえな。お前ら、ちよつとこつちのほうに固まってくれないか。俺が説明する・・・一護が何故あそこまで兄貴というものに強い思いがるのかと、一護が誰よりも守るということに拘泥する・・・本当の意味を・・・」

全員は困惑しながらも、真之介の言われたとおりに来賓用の長机が置かれた場所まで来て固まる。

ツナもなのはの横に座りながら、了平に殴られた顔をハルから渡されたタオルで抑える。

了平も死んだ様子のままシグナムの横に座り、他のメンバーも各々適当な場所に座り込む。

その間に真之介はアイゼンハウアーが持ってきた映写機に自身の持っていたメモリーを差込みパソコンで操作をしながら、スクリーンに映像を映し出そうとしていた。

全員は何を映し出そうとしているのか全く見当がつかないまま、真之介の語りが始まった。

「・・・昔々、あるところに一人の少年が居た。その少年は、髪の毛の色を除けば何所にでも居る普通の少年だった。」

すると、目の前のスクリーンに画像処理された映像が鮮明に映し出された。

そこには、家族と一緒に幸せそうにするオレンジ色の髪が特徴の少



年が映っていた。

「友達と一緒に学校に行つて遊んだり、家族と一緒に幸せな毎日を送つて、そんな幸せな毎日を送るはずだったんだ……だけど、少年が9歳の頃、悲劇は起こった。それは6月17日の梅雨の日のこと……少年はかっぱを着てお母さんと一緒に降りしきる雨の道を歩いてた。川の水は連日の雨で増水していた……そんな川の近くに女子が立っていた。少年はそれを見て危ないぞというつもりでその近くまで行つて……ふと気がついた時には……少年を庇おうとしたのか、彼のお母さんが血塗れになつて死んでいたのだった……」

真之介は説明を加えながら映像を切り替えてそのときの映像を全員に見せた。

すると、ツナ達はその映像に顔を歪ませながら……その少年が誰なのかが直ぐに分かつたのであつた。

「これ……!?!」

「一護君……!?!」

ツナとなのはがそう言つと、全員はやはりという表情を見せながら映像を見ていた。

「その出来事の所為で……一護は一切笑わなくなつてしまった。自分や家族が大好きだったお母さんを、自分の所為で奪つてしまった……そんな贖罪を一護は今でも抱えているんだ。そして、月日は流れ……一護が高校生になつたときだった。あいつの世界を大きく変える出来事がやつて来た。それこそ……死神、朽木ルキア

との出会いだ・・・」

真之介はそう言うと、今度は高校生になった一護とルキアとの邂逅するシーンを皆に見せ、話を続ける。

「ルキアだと・・・なんでこんなものが・・・!?」

「恋次、細かいことは気にするな。でだ・・・その日の晩、一護の家族は一護の強大な霊圧に誘き寄せられた虚に襲われた。一護も家族を守るうとしたが・・・そんな一護を助けるために今度はルキアが重症を負ってしまう。」

真之介は再び映像を切り替え虚に身体を咬まれて血を噴出すルキアの映像を見せた。

全員はその映像を見て全身を震え上がらせる。

「このときばかりは、一護もどうしようもないかに思えたが・・・ルキアが最後の賭けを一護に言ってきたんだ。」

すると、真之介はパソコンを操作して映像だけでなくそのときの声を流したのだった。

・・・家族を助きたいか・・・?

!!当たり前だ・・・あるのか!?方法が!?

貴様が・・・・・・死神になれ!!

!!な・・・・・・

貴様がこの斬魄刀を身体を中心に突き立て・・・そこに私が力を注ぎ込む！出来るかどうか分からぬ。だが他に方法はない！！

「一護はそれを受け入れ、ルキアの死神の力を引き継ぎ死神代行となった。出会いの切っ掛けはなのはとユーノとも似てるけど、こっちのほうがより命がけだったということだ。」

「・・・・・・・・」

なのはもツナも他のメンバーも何も言えずにただただ映像を見続けるだけ。

「それからと言うもの・・・あいつの壮絶な死神代行ライフは始まった。高校生活と両立させながら虚退治をするのは骨の折れるものだった。そんなある時、クラスメイトの井上が死んで虚となった実の兄に襲われる。」

すると、今度はそのときの映像を全員に見せる。

井上はかなり複雑そうな思いでそれを見ていた。

「自我を失い、井上を襲う実の兄に・・・一護は怒りを露にこう言っただ。」

てめえな・・・兄貴つてのが・・・どうして一番最初に生まれてくるか知ってるか・・・？後から生まれてくる・・・弟や妹を守るためだろうが！！それを兄貴が妹に向って”殺してやる”なんて・

・・・死んでも言うんじゃないよ!!

その言葉を聞いたなのはや了的平のような兄弟の居るものは、深くその言葉の意味が心に伝わった。

「過去の事故から、一層そういうことを強く抱くようになった一護だからこそ言える言葉だ。そして、また暫く時が過ぎて終業式が近付いた頃・・・ルキアが突然一護の目の前から姿を消した。だが、追っ手がやってきたんだ・・・誰かと言えば、同じ流魂街出身で幼馴染でもある六番隊副隊長の恋次と、そのルキアの義兄である六番隊隊長の朽木白哉だった。」

全員はスクリーンに映し出される恋次と始めてみるルキアの義兄に言葉を失った。

「まあ、俺と一護は・・・当時は複雑な事情があって敵同士だったんだよ。」

「一護はルキアを連れ戻すために恋次に戦いを挑んだが、隊長である朽木白哉の力に圧倒され・・・敗北」

スクリーンに映し出される胸を貫かれて地面に血を流しながら横たわる一護。

「あの・・・一護さんが・・・!?!?」

「うそ・・・でしょう!?!?」

山本やティアナはこれまで、一護の実力をこれでもかと見てきているので流石に衝撃が大きかった。

「敗北した一護は為す術もなくルキアを連れて行かれてしまった。そのときも、雨が降っていた・・・瀕死の状態の一護を助けたのは、嘗て尸魂界を追放され・・・現在は死神相手に怪しげな商品を買っている元十二番隊長、浦原喜助だった。一護は浦原の特訓を受けて、失った死神の力を取り戻し、斬月を手に入れた。そして、石田・茶渡・井上と案内役の夜一とともに尸魂界へと向った。」

真之介は説明をしながらパソコンで尸魂界の様子を皆に見せた。

「そこでも一護は命がけの実践を繰り返した。何度も敵に斬られては血を流し、倒れては立ち上がる。しかも、相手がかなりの強敵だったから尚更だ。死神の活動拠点・瀨霊廷に侵入した一護が最初に戦ったのが、剣八の部下・・・斑目一角。その次は一度現世で戦った恋次。そして、極めつけは最凶の死神更木剣八。人間同士の戦いとは比較にならないほどの血生臭い戦いに、一護は否応なく飲み込まれていった。」

スクリーンに映し出されるそれらの戦いの映像が、なのはやツナ達の目に入ってくる。

あまりに常識を超えた戦いの様子に、死神メンバー以外の全員は絶句する。

「そして、漸く死刑囚となったルキアの元にたどり着いたかと思えば・・・再び白哉が立ちはだかる。一護も成長した力を白哉に見せようとするが、それを夜一の手により遮れてしまう。始解状態だけの一護に卍解を会得している白哉が相手になったところで勝ち目はない。そう判断した夜一は一度強引に一護を連れ帰り、ある修行をさせた。」

「ある修行・・・!?!」

「ああ。白哉に打ち勝つために選んだのは・・・死神としての斬魄刀戦術の最終奥義、卍解の会得だった。」

すると、今度はそのときの修行の様子がスクリーンに映し出された。

「転神体を使って斬月を具象化させた一護は、とんでもない速度で戦い方を吸収していき、本来ならば才ある死神がまともによって十数年とかかる卍解の習得を・・・あいつは、たった三日足らずで習得した。」

「たった三日!?!」

「一護君・・・・・・凄いやというか何と言うか・・・!?!」

フェイトの驚愕の言葉に、なのはも後に続けて驚きの声を上げる。

ツナ達ボンゴレのメンバーも、六課の前線メンバーや隊長人も一護の資質に驚くばかり。

「あいつをそこまで動かしたのは、他でもない・・・ルキアを救うという強い信念だったんだ。そして、習得したばかりの卍解を使い、白哉との最終決戦に向った。激闘の末・・・一護の強い思いが白哉の刃を砕き、勝利した。」

卍解をした一護と、同じく卍解をした白哉の刃がぶつかり合い、白哉の刃が砕かれて一護の攻撃が通り勝利を収める映像が映し出された。







## 第97話：潜入、黙示録

「・・・知らなかった・・・一護さんやルキアさんたちに、こんなことがあつたなんて・・・」

ツナやなのははスクリーンに映されている今までの一護の戦いの記録やルキア達の間起こったことに愕然とする。

「あのオレンジ頭も・・・本当は結構可愛そうな奴なんだな・・・」

獄寺自身も今までの一護のイメージを訂正し、少し改めたようにそう言う。

「私にも・・・似たような経験があつたけど・・・あいつの場合、9歳のころだから・・・相当シヨックよね・・・」

過去に10歳の頃にたった一人の肉親をなくしたティアナも一護の幼少の頃の悲しき事件に同情をする。

「その後もな・・・然程時も置かずに、戦いは続いた。」

真之介はそう言うと、今度は一護達が最も意味を為す戦いのときの映像を見せる。

それに関して、日番谷が説明を開始する。

「俺達死神を欺き、世界を潰そうと企んで破面と隊長格二名を連れ従えて反旗を翻した、元五番隊長・藍染惣右介による反乱。中でも、十刃との死闘は今でも鮮明に残っている。」

日番谷の説明と同時に映し出される死神と十刃との熾烈な戦い。

その全てが、ツナやなのは達の戦いの常識を根本から変えてしまったことに間違いはない。

「そんな時、藍染の計画によって井上が虚圏に拉致される。井上を救い出すために、一護や私達は浦原の手によって黒腔を開いてもらい、虚圏に侵入。だが、流石にそう簡単に前に進める訳ではなかった。次々と私達の前に立ちちはだかる破面達が悉く邪魔をする。」

ルキアがこのときの出来事を映像を見ながら全員に説明をする。

そして、ある程度の映像を見せた後に真之介が最も重要な映像を見せる。

「勿論、それは一護とて同じだった・・・あいつが最も苦戦したのは・・・おそらく、第4十刃であるウルキオラ・シファアとの激突」  
「

真之介はスクリーンに映し出されるウルキオラと一護との全ての戦いのシーンを全員に見せる。

「十刃の中でも最強クラスに入るウルキオラに、一護の刃は幾度となく砕かれた。あの虚化した一護ですら、ウルキオラの帰刃、<sup>レスレクシオン</sup>『黒翼大魔』の前に圧倒される。」

「レス・・・レクシオン・・・!?」

はやてが聞き覚えのない単語に首をかしげ、真之介に尋ねる。

「破面側の刀剣解放の正式名称だ。破面は、刀剣解放することによって刀の形に封じている力の核を解放して真の力と姿を見せることが出来るんだ。特に、第4以上の十刃の帰刃は・・・奴らの宮殿を破壊してしまうという危惧から、場内での解放を禁じられていたんだ。」

「なっ!?!?とういうことは・・・前に攻めてきたあのコネホって奴も帰刃そいつが出来ることかよ!?!?」

山本が驚愕の表情でそう尋ねると、真之介は黙って頷く。

「しかも、お前らが見ているこのウルキオラの場合は・・・十刃の中で唯一二段階目の解放、刀剣解放第二階層レスレクシオン・セグンダ・エターバを成し遂げている。これがそうだ・・・」

真之介がパソコンのキーボードを操作すると、西洋の悪魔を連想させる姿となったウルキオラが映し出される。

ツナやなのは達は変わり果てたウルキオラの姿に絶句する。

「その戦闘能力は実に恐ろしく強大で、虚化状態の一護ですら全く手も足も出ない状態だったんだ。そして、俺はこういう映像は余り見せたくないんだが、事実を知ってもらうためには致し方ないと思っセロ・オスキュラスている。ボロボロになった一護に止めをさすためにウルキオラは黒虚閃で一護の胸を貫く・・・その結果がこれだ。」

真之介は険しい表情をしたままあのときの悲惨な映像を見せる。

ウルキオラによって胸を貫かれて無表情となってしまうた一護に、

全員は目を疑うと同時にその惨過ぎる映像に目をそらすのであった。

「このときばかりは・・・あいつも井上や石田ももう助からないと思っただろう・・・一護もあの攻撃で死んでしまったのではないかと。だが、あいつは死ななかった・・・何故なら。」

そう言うと、真之介はその続きの映像に切り替えた。

ツナ達はその映像を見たときに、それは本当に一護なのかと自分に問い直すように目の前の光景が信じられなかった。

「・・・真之介・・・こいつは・・・!?!?」

普段滅多に驚かないリボンでさえ、あまりにも違いすぎる一護の姿に愕然とする。

一護の姿は外見は2本の角と仮面紋のついた仮面、白い肌、胸の孔と虚の特徴を色濃く残しており、髪も長髪に変化していた。

「・・・完全虚化。再起不能となった際、織姫の助けを求める声に呼応するように、内面さえも虚に近い状態に変貌した一護の姿だ。

変貌後はウルキオラを打ちのめす程の大打撃を与えたが、仲間の声は一切届かなかった。」

映像から窺がえる、心までも完全に虚と化した一護の行動になのは達は言葉を見つけられずにいた。

「その後何とか正気は取り戻して、ウルキオラとの戦いに勝利はしたものの・・・あいつはこんな勝ち方を納得してとは思ってないけどな。まあでも・・・これで大体あいつの概ねの過去は分かった

だろ。あいつは、過去のこういつた経験から、ツナやなのは達以上に守るっていうことに関して強いこだわりを持っているんだ。それを顕著に示したあいつの言葉を最後に聞いてほしい。」

真之介は最後に映像を巻き戻して斬月との修行のときの様子を見せた。

刀を折られて、満身創痕になりながらも決して諦めることなく立ち上がろうとする一護の姿が映し出される。

その映像を見て、恋次自身も共に修行に明け暮れた一護の日々と、嘗ての白哉との戦いのことを思い出していた。

・・・まだ立ち上がるのか・・・一護・・・！

斬月にそう言われると、一護は口元を緩めて返事をする。

・・・あたりめーだろ・・・

・・・・・・何？

一護がから発せられる言葉に驚愕する斬月。

誓ったんだよ・・・絶対に助けるってな・・・

・・・誓い・・・だど？誰にだ

斬月がそう尋ねると、一護は恋次以外の全員の予想に反した言葉を

ぶつける。

誰でもねえよ・・・

・・・

・・・ただ俺の・・・)

そして、徐に立ち上がると同時に斬月に向って一護は力強くこの言葉を吐き捨てた。

魂にだ！！！！

ルキアを助けると誓った一護。

その譲れぬ思いは、誰にでもない・・・ただ己の魂に誓ったものだった。

そして、最後のこの映像を見せた後真之介の話は全て終わり、ツナやなのは達、そして死神達は長い長い沈黙を保ったのであった。

その後暫くして、一人淋しく静まり返った海岸線を眺めながら今日の戦いのことを振り返る一護がポツンと立っていた。

その表情はやはり重苦しく、それでいて凄く悲しそうであった。

「・・・・・・・・」

一護がどこか物思いに耽っていたときだった。

後のほうから足音が聞こえて、ふと振り返ってみるとそこに居たのは……どこか硬い表情をしたなのはだった。

「……なのは……」

一護は低い声でそう言つと、言葉の変わりに作り笑いを返してくるなのはを自分の下まで呼んだ。

「……」

「……」

中々言葉が出ずに重い空気が漂い続ける二人。

それを打破するために、なのはが先陣を切つて話をしだす。

「……真之介君やルキアさんたちにね……色々聞いたんだ……」

「え？色々つて……何をだよ!？」

「一護君の今までの戦いのこととか、過去にあった事件とか……かな。」

「何!!!あの野郎……人の過去勝手にべらべらと喋りやがって……なのはじゃねえんだぞ!!!」

一護は真之介の勝手な行動にかなり憤りを感じていた。

「まあまあ・・・真之介君も悪気があつてした訳じゃないしさ!!  
それより・・・本当に一護君は、私や綱吉君なんかよりも濃い経験を  
してきたんだね・・・」

「まっ・・・俺の場合は特別だけどな。けど、俺から言わしてみれば・・・お前やツナだってよっぽど濃い経験をしてきていると思うけどな。」

「え?」

なのはの呆気ない声が一護の耳に入ってくる。

「だってよ、お前は9歳の頃に魔法少女になって僅か数ヶ月で命がけの実践を繰り返して、ツナだって突然マフィアのボスになれたと言われて、否応なく戦いの渦に巻き込まれてしまった。しかも、二人は俺と違って生身の人間の状態でだぞ。充分濃いと思うけどな。」

「うん・・・でも、やっぱり私や綱吉君も・・・君ほど血を流して戦った覚えはないよ。胸を貫かれて死にかけたこともね・・・」

「ああ!!そんなものまで見せられたのかよ!?あいつ・・・一体何所でそんなもの撮ってたんだよ!??」

「それはよく判らないけど・・・でも、あの映像を見せられて・・・私や綱吉君、そしてみんなも・・・どうして一護君が人一倍守るということに関して強い思いを抱くのが、よく分かったよ。お兄さんとしての思いもね。」



「……ああ……そうだ、了平どうしてる!？」

「大丈夫。あの映像を見た後で、了平くんも漸く一護君のしたことを理解して……自分が綱吉君にしたことを深く反省していたかな。私が外に出るときは、泣きじやくになりながら謝っていたよ。」

「そうか……まっ、俺も多少やりすぎた感じはあったんだけどな……問題は、これからのことだ」

「うん……」

二人は険しい表情をした状態で徐に雲がかかった暗い空を見上げた。

「……俺達がなんとしても……京子を取り戻してやる……」

「そうだね……綱吉君やハルちゃんたち、了平君のためにも……絶対……!!」

二人がそんな固い決意を胸に抱いて空を見上げていた、その時だった。

「……いたいた……やっぱりここかよ。」

二人は後ろから聞こえる聞き覚えのある声に気付き後へと振り返った。

そこに居たのは、真之介とツナであった。

「ツナ・・・真之介!？」

「どうしたの・・・二人して・・・!？」

「・・・一護さん・・・なのはさん・・・ちょっと真之介君の話を、聞いてくれませんか？」

真剣な眼差しを浮かべるツナの言葉を聞いた二人は、一度顔を見合  
わせたが、どうやらただ事ではないと察知してツナの言葉を聞き入  
れた。

「わかった。話してくれ・・・」

「よし・・・良いかお前ら・・・よく聞けよな。実はな・・・  
- - - - -」

真之介は真剣は様子で三人に重大な話をしたのであった。

話を聞き終えた三人はあまりに衝撃的な内容に驚きを隠せずに居た。

「なっ!?! そいつは・・・本当かよ!?!」

「ああ。俺も今の状態じゃゲートを開けていられるのは精々4、  
5分が限界だ。明日にならないと充分に力を発揮することが出来な  
い。だが、そんな悠長なことは言ってられない。これからお前ら三  
人だけで・・・京子を連れ戻しに行ってくれないか？」

「京子ちゃんを・・・私達・・・三人だけで・・・!?!」

なのはは真之介の言葉にかなり困惑していた。

すると、ツナは右手に握っていた京子がくれたお守りをオレンジ色のジャケットの内ポケットに閉まって、決意を露にした。

このジャケットの内ポケットも、京子とハルがつけてくれたものなのだ。

「……俺は行くよ……行って……絶対に京子ちゃんを連れ戻す！！例え、俺の命に代えてでも……京子ちゃんは必ず助け出してみせる！！！」

「綱吉君………」

そんなツナの言葉を聞いた一護は、鼻で笑うとツナに返事をした。

「ふん。たく……お前の命がなくなったら、京子が逆に悲しむだけだろうが。危なっかしくて一人じゃ任せられねえな……俺も当然行くぜ。何もお前だけが京子を助けたいわけじゃないしな！」

一護は自信に満ちた笑みを浮かべツナの顔を見た。

「一護さん………！！！」

「もう……危なっかしいはこっちの台詞だよ。男の子二人だけじゃ心配で仕方ないよ。ここは一番年上の私が同行するのは当然じゃないの。少しでも無茶するようなら……徹底的に叩きのめしてあげるから、そのつもりでね！」

なのはも一護につられる様になのはも二人に笑顔を向けて返事をした。

「なのはさん……………!!ありがとうございます!!二人とも!」

「おお……怖いね……流石は管理局の白き魔王だ。」

「もう真之介!!それ違うから!!!!」

なのはは顔を赤面させて断固その言葉を否定したのであった。

「冗談半分だ。さて……覚悟の決まったところで……早速準備に取り掛かるとするか。」

そう言うと、真之介は急いでフルメンテをしたなのはのレイジングハートと、ツナのボンゴレボックスを二人に手渡す。

「メンテナンスは済ませた。完全解放状態の力で戦える。それから……一護、こいつを受け取れ。」

すると、真之介は懐からスターフルーツのような形に酷似した発効する結晶を手渡す。

「何だ……こいつ!?!」

「俺が何時も肌身離さず持ち歩いているお守りだ。気休めとして持つとけ……」

「……そうか。サンキューな真之介。有難く借りていくぜ!」

そして、その場で一護は死神化をして、ツナもハイパー化・なのもエクシードモードになって真之介の準備を固唾を呑んで見守っていた。

真之介は特殊な液体を指につけて地面に魔法陣によく似た紋章を描いていき、そして自身の両腕にも同じようにその紋章を描いていきながら両手を組んで詠唱を始める。

「永遠の遙か彼方に存在する幻惑の空間よ、我が契約を交わすもの、真之介の名の下に選ばれし三人の戦士を導く、幽玄の道を現したまえ！―！」

すると、真之介の真下の紋章と両腕の紋章が赤く光りだし、そのまま両腕を前へと突き出す。

その瞬間、目の前の空間が歪み始めて空間が裂けて三人の目に暗黒の世界が広がってきた。

その中央には、荘厳な造りをしたその中で唯一の建造物の姿をはつきりと確認できた。

「何だ・・・あの建物は！？」

「次元の破壊者が拠点としている宮殿、アホカリブス『黙示録』。おそらくあそこの最深部に京子は居るはずだ。勿論、十二使徒の連中もな。いいか・・・この『邪の巣窟』イービル・ルガーの中は普通の世界とは大きく異なり、一度足を踏み外せば永遠の闇に飲み込まれて消滅する。そうならないように、一心不乱になって前に進み続ける。そうすればアホカリブス『黙示録』の内部に到着するはずだ。」

「……わかった。」

「……真之介君……ちょっとヴィヴィオに伝言、いいかな？」

「……何だ？」

真之介がそう言った後、なのはは暫く沈黙してから言伝を頼んだ。

「私達が京子ちゃんを連れ戻して、無事にこの事件を解決できたら……約束どおりユーノ君と一緒に三人でお出かけするから、なのはママが戻るまでいい子に待っていてねって。」

「……わかった。一護やツナは何かあるか。」

「……みんなには……先に行っているとだけ伝えてほしい。」

「ああ……あいつらも明日になったら追っかけてくるから、無事な再会を祈ってるって……ルキア達に。」

「……その言葉……ちゃんと言っとくぜ。」

そして、三人はもう一度覚悟を決めて「……一護の一声と共に『アポカリプス黙示録』目掛けて『イービル・ルガー邪の巣窟』に向かって行った。

「行くぜ」

三人は絶対に京子を助けるといふ強い思いを抱いて中に飛び込んでいった。

三人が入って直ぐに、入り口が閉ざされ元通りの空間に戻ってしまった。

「・・・死ぬんじゃないぞ・・・明日になったら、直ぐに追いかけてやるからな・・・」

真之介はそう言うと、静に海辺を後にしてアイゼンハウアー邸に戻るために足を運んだ。





## 第97話：潜入、黙示録（後書き）

### 次回予告

俺達が少し休んでいる間に、ツナと一護となのはは先に京子奪還に向けて次元の破壊者の待つ宮殿に足を運んだ。

俺たちも直ぐに準備を整えツナ達の下に急ぐ。

そして、たどり着いた俺たちの目の前に広がっていたのは・・・

宮殿とは全くいえないような広大な景色だった。

そして、ツナ達もまたそんな広い空間の中でロボット達の妨害を喰らっていた。

いよいよ、最終決戦へと突入する。

次回、次元の破壊者・・・「京子を取り戻せ」

みんな、死ぬ気で見るよ。

## 第98話：京子を取り戻せ

現在、一護・ツナ・なのはの三人は『邪の巣窟』<sup>イビル・ルガー</sup>の内部を一心不乱に突き進んでいる最中だ。

そうしなければ、周囲を漂う夥しい数の闇に身体も心も奪い取られ、消えてしまいかもしれないからだ。

「くそ！何て居心地の悪いところだ！！見も心もどうにかしそうでぜ！？」

「真之介君の言っていたとおりだ。ちょっとでも気を抜けば、忽ち闇に飲み込まれちゃう！」

「そうならないために、今はただ前だけを見て進むしかない！」

ツナは何時も以上に険しい表情を浮かべたまま、一護となのはと共に闇の中を進んでいく。

そして、その最中ツナは心の中で京子を早く助けたいと強く渴望するのであった。

「（待ってる京子・・・必ず俺がお前を助ける！）」

一方、処変わって此処はアイゼンハウアー邸。

真之介は次の朝直ぐにこの事情を全て全員に話したのであった。

「何！？十代目が奥方を取り返しに！？」

「そんな！？いくら一護さんやなのはが一緒だといえ・・・」

「極限それは危険すぎるぞ！！」

「あいつら・・・どっちに分があるのか判っているのか・・・」

リボンが低い声でそう言うと、他のメンバーもざわつきだしてしまった。

「なのはママ！なのはママは何て言ったの、真之介さん！？」

かなりの動揺を露にしているヴィヴィオが真之介に尋ねる。

「ああ・・・その件に関してなのはから言伝を預かってるぜ。」私達が京子ちゃんを連れ戻して、無事にこの事件を解決できたら・・・約束どおりユーノ君と一緒に三人でお出かけするから、なのはママが戻るまでいい子に待ってて」と。

「なのは……」

「なのはちゃん……」

「なのはママ……」

フェイト・はやて・ヴィヴィオの三人を始めとする六課一同はかなり複雑な顔をしていた。

いくら、エースオブエースと言われるのはでも、今度ばかりは相手が悪すぎる。

例え最強クラスの男二人が居ても無事に帰ってこれる心配はない。

「こうしてはおられぬ。皆、直ぐに私達も一護達を追いかけるぞ！」

ルキアの発言を聞いた全員は、それに了承し各々準備を整えていた。

そんな中、ボックスをチャックしている獄寺の前にハルがやってきて声を掛けてきた。

「……あの……獄寺さん……」

獄寺は後ろから聞こえてきたハルの声を聞いて振り返ってみたが、そこには何時ものハルの明るい表情はなく、極めて悲しみでいっぱ

いの表情であった。

「・・・ハル・・・」

そして、ハルは声を殺したように胸の思いを全て獄寺にぶつけた。

「・・・ハルは本当に役立たずです・・・皆さんみたいに戦う力もないし・・・かといってこれといった技能もありません。京子ちゃんみたいにツナさんを元気に出来るわけでもありません・・・それなのに、京子ちゃんをあっさり敵方に拉致されてしまい、ハルはそんな自分が情けなくて・・・凄く・・・悔しいです!!」

ハルの目から零れる大粒の涙が、床に零れる。

獄寺の表情は困惑と何か別の思いでいっぱいであった。

獄寺はここまで本気になって悲しむ姿のハルを見たことがないのだ。

「だから・・・獄寺さん!!ハルからの一生のお願いです!ハルの大切な・・・ツナさんにとっての一番大切な・・・京子ちゃんを・・・救ってやってください!!」

声をからして獄寺に深々と頭を下げるハル。

それを見た獄寺もそんなハルの肩を軽く手で叩くと、泣いているハルを見ないで決意を込めた声色で返事をする。

「たりめーだ。十代目の右腕にかけても、奥方はこの俺が必ず救い出してみせるぜ！安心しろ、アホ女が悲しませないためにも、約束は守るぜ……」

それを聞いたハルは、心の底から嬉しさが湧き上がった。

「……ハルは……アホなんかじゃ……ありません……」

そして、全ての準備を整えたボンゴレメンバーや六課一同、そして死神関係者は真之介によって開けて貰った『邪の巣窟』の目の前に立っていた。

「よし。準備完了！爺さん、セクトウーレ……後のことは任せた。ちゃんとハルとヴィヴィオのこと守ってくれよ。」

「心配戦でもええ。同じ鉄は二度と踏まぬ……」

「旦那様の言う通りよ。必ずこの二人は無傷で守り通して見せるわ。」

「済まない、二人とも……本当ならば、俺も傍で付き添っていた

いのだが・・・」

浮竹が昨日の出来事もあってかまだ何か心のどこかに迷いのようなものがあつたようだが、アイゼンハウアーとセクトウーレの説得もあつてか、浮竹は真之介達と共に同行することになった。

「いいじゃよ。御主は死神でわしらはただの人間。戦いにおいて重要視されるのはどちらか自ずと分かるじゃろ」

「・・・分かりました。では、昨日の失敗は必ずや挽回してみせる。」

「フェイトママ。みなさん！」

「うん？どうしたのヴィヴィオ・・・！？」

フェイトや他のメンバーが思わずヴィヴィオの言葉に振り返ると、ヴィヴィオはそんな全員にエールを送る。

「絶対に無茶だけはしないでね！」

全員はヴィヴィオの口から発せられた言葉以外にも驚いた。

これは、本来ならばなのはや京子のようなものがいう言葉なのだか

ら————

「……うん！勿論そのつもりだよ！」

「安心してよ！私は頑丈だけが取り得の女だから！それに他の皆だって案外打たれ強いんだから！」

「案外は……余計よ！」

そう言うと、ティアナはスバルの頭に強烈な拳骨を入れた。

それを見た一同は急に緊張の糸が切れたのか思わず笑いを込み上げた。

「……よし！そんじゃいつちよ行くか！」

真之介の掛け声と共に、全員は『邪の巣窟』に飛び込んでいった。

「ネエ~~~~~~~~さ~~~~~~~~ん!!!!!!!!!!!!!!必ず返ってきてくれよ!!!!!!」

一護の身体を借りたコンがルキアに向けて最後の言葉を送る。

そして、全員が空間の中に入り終わると自然と『邪の巣窟』の穴は閉じてもとの空間に戻った。



そして、そんな『邪の巣窟』の奥の奥に存在する唯一の宮殿――  
アホカリブス  
『黙示録』

この宮殿の最深部では既に次元の破壊者とペローなどの十二使徒の数名が拉致した京子を特注の台に貼り付けて、新命との融合作業に入ろうとしていた。

その間、依然京子は気絶したままであった。

「……ペロー……例のものを……」

「はい……次元の破壊者様……」

そう言うと、ペローは背中に担いでいた西洋の棺を京子が貼り付けられた台の真下に設置する。

その時、京子も目を覚ました。

「う……ここは……!? あっ! あなたは……!? 一体あなたは私に何の用があるの!?!」

京子は動揺しながら目の前に立つ素顔を隠している次元の破壊者に

尋ねる。

「これからお前は私の悲願の為に、抛り代となってもらう・・・お前の真下にある棺が分かるか？」

そう言われ、京子は直ぐに真下にある黒い棺を見る。

「何・・・これ・・・！？どついつことなの？」

「言葉を慎め。次元の破壊者様に対する態度ではないな・・・」

「ペロー、止せ。大事な身体なのだ・・・あまり乱暴に扱わないでくれ。」

「はっ、申し訳ありませんでした。」

ペローはそう言うと、次元の破壊者の前から姿を消して何処かへと消え去った。

暗く陰気な雰囲気が漂うその部屋には、京子と次元の破壊者二人だけとなった。

「・・・私には嘗て、この世で最も愛した婚約者が居た。結婚を間近に控え、私は有頂天となっていた・・・だが、運命とは実に残酷なものだ。私の愛するものは、突然何も言わずに私の前から姿を消した。それから私は、どんな手を使ってでももう一度婚約者を蘇らせるために、あらゆる世界を破壊し、この三つの神器とその素体となるお前を見つけ出した」

「そんなこと！？あなたは間違ってる！死んだ人は決して生き返らないし、例えそうだとしても、そんなことをしたって婚約者さんは喜んだりしないよ！」

「・・・お前に何が分かる？周りのものから愛され、そして最も愛するものに包まれて暮らしているお前に何が分かる？お前には分かるのか？愛するものを失ったときの悲しみと無念が、どれほどまでのものなのか？」

すると、次元の破壊者は指を鳴らす。

その瞬間、京子の目の前の新命が光り輝きだし、京子の周囲を未知なる物質が取り囲みだし京子を包んでいく。

「はっ！？」

突然のことに訳が分からないで居る京子に、次元の破壊者は話を続ける。

「この世に生きるものは全て、輪廻という枠に収められ生き死にを繰り返す。だが、それは必ず別の形で行われるものであり、決して前世に生きた形で繰り返されることはない。この新命はそれを取り払い、媒介と融合することによってこの世の理を無視して生き物を蘇らせることができる。まさに、髪の領域を軽々と超える代物だ。」

「そ、そんな！？いや！！嫌！！嫌だ！！ツナ君！！！！お兄ちゃん

「!!!みんな!!!」

京子の瞳に溜まる涙がこのくらい部屋の中で一番輝いているように思えたのは、気のせいか。

京子の恐怖で泣き叫ぶ声が部屋中に響き渡る中、未知なる物質が京子へと群がるように集まり京子を完全に取り囲んでしまったのであった。

「・・・もう少しだ・・・もう少しでお前と再開できる・・・だからあと少しだけ、待っていてくれかい・・・渚なほ・・・」

次元の破壊者はおそらく婚約者の名前であるその名を叫ぶと、静に棺へと近付きその窓から顔を覗き込んだ。

一方、その頃無事に『黙示録』内部に到着した一護達三人は困惑していた。

というのも、着いてみたと思えば眼前に広がってきたのは宮殿の内  
部とはとても思えぬほどの広大な空間であり、そこを三人で走っている  
と、早速とばかりに夥しい数のロボット達が現れ行く手を遮っているのだ。

「エクセリオンバスター!!!!!!」

なのはから放たれるエクセリオンバスターによって、漸くほぼ全てのロボット達を排除した一護達。

「よし！大分時間食っちゃったが急ぐぜ！」

「ああ（うん）！！！」

と一護達が再び急いで足を動かそうとしたとき、またしても邪魔が入る。

「おいおい、一体何をそんなに慌ててるんだよ!？」

三人はこの危機覚えのある声を耳に居れ、背筋を凍らせた。

「この声は・・・!？」

一護とツナとなのはが声のするほうへ目を向けると、目の前の崖の上に立っていたのは・・・一番最初に自分達を襲撃してきた男、コネホが不敵な笑みを浮かべ立っていた。

「てめえは!!！」

「コネホ!!！」

「くっ!!!!うおおおおお!!!!!!」

すると、ツナがイクスグロブの炎圧を最大限にして勢いよくコネホに向かつて行った。それを見たコネホは響転で移動し、ツナの腹部を力強く蹴って地面に落下させる。

落下したツナは激しく地面に食い込まれてしまう。

「ツナ！！てめえ、よくもやったな！！」

「態とじゃねえよ。ほんの歓迎の言葉のつもりさ。ようこそ、俺らが宮殿……『黙示録』へ。」

コネホはそう言つと、崖の上から地面に飛び降りた。

それを見た一護もツナの代わりにコネホに瞬歩で飛び込んで行き、斬月を振りかざす。

「ほああああ……！！！」

コネホは腰に挿していた刀を抜いて、一護の斬月と鏢迫り合いを交わす。

「またのこのことやられに来たのかよ、おい？」

「違う！京子を返せ！！あいつはてめえらなんかの者じゃねえ！！！」

「ふん。」

二人は一度距離を大きく取って牽制しあう。

一護はその間にツナとなのはのもとまで下がり、二人に注意を呼びかける。

「ツナ、なのは！気をつけろ！！」

「ああ！」

「うん！」

すると、そんな三人の周囲を囲むように何所から湧いてきたのか知らぬが、再び先程倒したはずのロボット達が一護達を覆い隠そうとする。

「やれやれ・・・せつかく苦労して手に入れた大事な素体なのによ・・・お前らが邪魔をするから、あの子は死の間際まで人間的な恐怖と苦しみを味わうことになるんだぞ。それでも彼氏としてはいいのかい・・・な、沢田綱吉。」

「貴様！！！！！」

「あなた達・・・絶対に許さないんだから！！！！！」

「てめえら！！！！邪魔だ！！！！！！！！！！！」

一護は込み上げる怒りを全て、自らの斬撃に結集させて周囲の口ポット達を吹き飛ばして行った。

その威力は今迄何度も模擬戦を繰り返しているツナとなのはの想像を絶するほどの破壊力であったことは間違いない。

すると、同じく広大な空間を駆け足で移動していたルキア達の目にも一護の月牙天衝が目映った。

「朽木さん！あれって!?!」

「ああ。一護の月牙天衝だ。」

「という事は、ツナとなのはもあっちにいるのは間違いなさそうだな。急ぐぞ、お前ら!」

リボーンの指示を聞いて全員は再び駆け足で移動を開始した。

全員がそんな一護達のもとに急いでいる間に、一護とツナとなのはは続々と集まってきた十二使徒との熾烈な戦いを繰り返していた。

一護は前に雲雀と剣八が戦った第10使徒のティグレ、ツナはコネホ、なのはは山本とシグナム達が戦ったカバロと対戦中であった。

一護は通常状態のティグレの攻撃方法に苦戦を強いられながらも、必死に抵抗を続ける。



なのはも魔法と解放した星海を駆使して、カバロの攻撃をどうにか避けながらも戦いを続ける。

ツナも虚化して嘲笑うコネホに多種多彩な大空の炎の加工技をコネホにぶつける。

「ほう・・・どうやら俺が想像していた以上に虚化を使えるようになったか。これなら俺も遊び甲斐がありそうだな」

「黙れ!!!」バーニング・サラマンダー『**火炎山椒魚**』!!!!」

ツナは右拳の大空の炎を巨大化させて波のようにしたものをコネホに当てようとする。

慌ててその攻撃を回避して、安全地帯に逃げるコネホ。

一護もツナもなのはも一度同じ場所に固まり、背中を向かい合わせにして周囲を囲むコネホ達に武器を向け続ける。

「はっ、はっ、はっ!」

「これじゃあ、ちっとも先に進めないよ!」

「くそ!!! 一体どうすれば!?!」

一護達が険しい顔を浮かべて困惑していたそのときだった。

自分達の真上から、一護の中では何度も聞いたことのあるあの男の  
声が聞こえてきた。

「何だ！？この声は・・・！？」

「何だか凄い怖い居心地なのはどうして・・・！？」

「なっ！？この声は・・・！！」

「はははははあははははあはははははははははははあはははは  
ははあは！！！！！！！！」

すると、三人やコネホたちが真上を見ると、そこから降りてきたの  
は――莫大な霊圧を垂れ流しながら物凄い形相で笑っている剣八  
であった。

剣八が落下した瞬間、その衝撃で地面が地割れを起こし足場を崩し  
た。

三人は慌てて別の場所へと足場を移し、下りてきた剣八を見る。

勿論、ツナとなのはが剣八を間近で見るのはこれがはじめてである。

「何だ・・・あいつは！？」

「死神！？でも一体あの人は！？」

「やっぱり、剣八か！！」

「何！？あいつがか！？」

すると、剣八は徐に起き上がると刀を一振りして一護達に一言告げる。

「そこ、危ねえぞ！」

その瞬間、一護達が避難した場所までもが地割れを起こして崩れ始めていった。

急いで崩れていく地面を渡りながら安全な場所まで避難する三人。

「無茶苦茶な人だね。」

「ああ・・・ある意味雲雀以上だな・・・」

「ああいう奴なんだよ。てめえこそ、いろんな意味であぶねえぞ！」

剣八の出現によって、少し取り乱すコネホやティグレ。

「くそ！更木剣八め！！この間の借りは返させて貰う・・・」

「それは僕が許さないよ。」

すると、ティグレに向けて後から雲属性の炎を帯びたトンファーが奇襲をかけてきた。

素早くそれを回避して体制を整えるティグレと、その攻撃したものを別の場所から眺める一護達。

「雲雀！！」

ツナが既にロールを取り出して殺気を剥き出しにしている雲雀を見て驚愕する。

「何してるの、沢田綱吉。君はさっさと笹川京子を取り戻しにでも行ったら。彼は僕の獲物だ・・・」

「雲雀君！」

「全く・・・相変わらずな奴だな・・・」

それを崖の上から見ていたコネホは深い溜め息を漏らす。

「やれやれ・・・何なんだよ、次から次と・・・」

その時、コネホの後から雷を帯びた氷の竜が背中から襲い掛かってきた。

それを察知したコネホが反射的に刀を抜いてそれを受け止める。

それに気付いた一護達三人も後を振り返ってみると、崖の上には既に日番谷を始めとするメンバー全員が既に集まっていた。

「何をモタモタしてやがる！！」

日番谷の一喝が三人の耳に入る。

「十代目！今、お助けに参りました！！」

「なのはさん！！もう安心してくださいね！！」

獄寺とスバルもツナとなのはに向けて大声を出して言葉を送る。

「獄寺・・・みんなも・・・」

「スバル！フェイトちゃんたちも！！」

なのはは思っていた以上に早く来てくれた仲間の援軍を見て、嬉しさでいっぱいになった。

「ダメツナのくせに格好つけようとするなよな。それじゃ俺のカッコよさが目立たないぜ、ツナ！」

「一人よりも、皆のほうがいいですよボンゴレ！」

「リボン・・・ランボ・・・」

「全く・・・君の無鉄砲さには心底うんざりさせられるよ・・・黒崎。」

「黒崎君！助けに来たよ！！」

「石田・・・井上まで！！」

「なのはちゃん、一人で行くなんて水臭いで！そのためのあたしら

「が何のためにおるんや!?!」

「またへまやつて無茶されちゃ、私も流石にぶち切れるぜ。」

「はやてちゃん・・・ヴィータちゃん!?!」

「早く行け!黒崎、沢田、高町!?!」

日番谷がそう言つと、一護達は全員にこの場のことを任せて先へと急いでいくことにした。

「わかった、頼んだぜ!?!」

「済まない、みんな!」

「フェイトちゃん、みんな!後のことはご免ね!」

そう言つて、三人はその場を後にして京子が居る最深部のほうへと急いだ。

崖の上からそれを見届けた真之介たちも、いよいよ行動を開始する。

「よし!俺らも行くぜ!なるべくチームで固まって戦うぞ!?!」

「おっしや!?!」

各々、真之介の指示を聞いて掛け声を出すや否やいつものチームに分かれて十二使徒やロボット達のほうへ戦いを挑んでいった。







## 第98話：京子を取り戻せ（後書き）

### 次回予告

いよいよ、十二使徒との最終決戦が始まった。

まず、最初に戦い始めたのは・・・バカ・デ・サールと迎撃フロント組みの三人だ。

この前のお返しをするためと言って、普段絶対にコンビプリーの整わない獄寺たち三人の意思がピッタリと揃う。

そんな三人に対して、とうとうバカも本気の技を使い出す。

次回、次元の破壊者・・・「迎撃フロントVSバカ・デ・サール」

みんな、正解して見ろよ。

## 第99話：迎撃フロントVSバカ・デ・サール

真之介達は一齐にチームごとに散らばり、襲い掛かってくる夥しい数のロボット達に向かって攻撃を開始する。

「喰らえ！マキシマムキャノン・フルドライブ極限太陽全力全快！！！」

了平が茶渡とスバルと走りながら晴のボンゴレリングの炎を帯びた右ストレートをロボット達に向けて攻撃する。

それに反応するかのようには、茶渡もスバルも攻撃を放つ。

「リボルバーシュート！！！」

「エル・ディレクト巨人の一撃！！！」

三人の攻撃がほぼ同時に放たれたことで、向ってくるロボット達は悉く破壊されて、影も形も残らなくなった。

次に、山本達近距離・遠距離フロント組みも順調にロボットを破壊していく。

「フリード、ブラストバーニング！」

キャラは修行中に習得したフリードの新たな攻撃技で襲い掛かるロボット達を迎え撃つ。

「ファイア！！！」

真の姿に戻ったフリードの口から放たれる通常のブラストレイの数  
十倍の熱破壊能力を有した火炎弾がロボットを次々に焼き尽くす。

「やるな、キャラの奴・・・よし、だったら俺も！」

すると、山本はボンゴレボックスから小次郎と次郎を取り出し、形態変化させた後に初代雨の守護者との継承で使っていた朝利雨月の技を体現する。

「使わせてもらっぜ・・・朝利雨月の技。『九頭竜・川崩れ』！」

すると、山本は雨の炎を纏った小刀三本を投げつけた後長刀で一振りすると、その一振りが昔中国で氾濫する川の急流を九頭竜と言って例えたかのように、途轍もない力を持った雨の竜がロボットどもを容易く洗い流す。

まさに、これぞ雨の守護者の使命と言っても過言ではない。

「山本ばかりに良い格好はさせてられぬ。私にも騎士としての誇りがあるのだな！」

すると、シグナムはカートリッジをロードして刀身に炎を灯すや否や、それを地面に突き刺して大技を放つ。

「山本がそう来るな私はこれだ！ 『九頭竜陣』<sup>くすりゅうじん</sup>！！」

その瞬間、シグナムのレバンティンの炎が地面に流れ込み、まるで噴火する火山が噴き出るかのように地面の割れ目から灼熱の炎が口ポットを燃やし尽くす。

「流石は烈火の将、シグナムさんだ。でも……滅却師<sup>クインシー</sup>の力も負けてはいないよ」

石田は銀嶺弧雀を解放すると、霊力を極限までに圧縮し、それを巨大な弾丸として発射する。

「『<sup>リヒト・クーゲル</sup>光の弾丸』！！」

銀嶺弧雀から発射される最早弓の形状をほとんど為していない光の弾丸が、ロボットの一体に直撃すると、連鎖反応を起こすように周りに居るロボットも次々と爆発して跡形もなく消え去る。

また、ルキア達後方支援中心の間接フロント組みも、地上で熾烈な戦いを繰り広げる。

「次の舞・白漣（まぎのまい・はくれん）！」

「バリアブル・デストロイアー！！！」

背中合わせになったルキアとティアナは、各々自らの技でロボット  
の軍勢を次々と蹴散らしていく。

ちなみに、ティアナのこの技は修行中に思いついたものをルキア達  
の協力もあって完成させたオリジナル技であり、ランクのほうもA  
AAとかなり高レベルなのだ。

「孤天斬盾（こてんざんしゆん）、私は拒絶する！」

井上也修行中の間に自身の唯一の攻撃手段である孤天斬盾の威力強  
化に成功し、今はこうやって向って来る多くの敵に売っても一体だ  
けでなく数の多くの敵を破壊できるまでに成功した。

「ボスやみんなが頑張ってるのに、私だけ役立たずなんて出来ない  
！」

クローム自身も気合を入れて、得意の三叉槍を駆使した体術ロボッ  
トの身体を突き刺したり、一刀両断をしたりして戦いを続けていた。

そして、獄寺や恋次・ヴィータが主体の迎撃フロント組みも攻撃を

繰り返してはロボットの数を減らしていく。

「つぶれて消えろ!!」

「てめえらにかかずらってる暇はねえんだ!!! フライムサンダー  
!!!」

「咆えろ、蛇尾丸さびまる!!」

ヴィータはグラーファイゼンのハンマーヘッドを使って、鉄球4発に貫通やその他の機能を添加したものを打ち出し、獄寺は雷の炎を加えたフレียมアローを放ち、恋次は蛇尾丸の刃節を可能な限り延ばして、ロボットを破壊する。

そして、漸く全てのロボットが破壊されて残骸のみとなった。

「思った以上に数が多かったな・・・」

「まっ、私のグラーファイゼンの敵じゃなかったぜ。」

「喋ってる時間はねえ! 早く十代目の後を追って奥方を救出するぜ  
「!」

「「おっ!!」」

三人は急いで残骸となったロボット達の上を踏み越えてその場を立ち去ろうとしたが、それを待ってましたとばかりに都合よく十二使徒が邪魔をする。

「ふふ・・・此処から先へは行かせんぞ、貴様ら。」

駆け足で急いでいる三人の前に現れたのは、前に一度対戦経験のある十二使徒、バカ・デ・サールだった。

バカはあの時と同じように、蒼い作業服にトイレサンダル、そして腕まくりの状態で腕組みをして立っていた。

「なっ！お前は・・・！！！」

「ウンデシーモ・エルトウダ  
第11使徒・・・。」

「バカ・デ・ラサール」！！」

最後のヴィータが言った一言を聞いて思わずバカはギャグ風の崩し顔と古典的な転び方で倒れてしまう。

「こらあ！！ギャグ風の崩し顔させやがって！！誰がバカ・デ・ラサールだ！？わしの名前はバカ・デ・サール！人をこち亀の両津勘吉と一緒にするな！！！」

「るっせー！！そんな紛らわしい名前のほうがいけねーんだろっ  
！！！」

「そっだそっだ！！大体、その格好だってこち亀の両さんと同じだ  
ろっが！！！」

「うるせー！！これが一番動きやすい格好なんだ！わしのファッ  
ションセンスに文句をつけるな！」

「何がファッションセンスだよ！？てめえなんかな・・・何を着た  
ところで服に着られるのがオチなんだよ！」

恋次の最後の言葉を聞いたバカは、脳の血管が確かに切れるのを感じた。

「くそ！！！！わしを本気で怒らせたな！！！！もう我慢ならん、貴  
様らここで蜂の巣だ！！！」

すると、両さん・・・いやいや、バカは背中から例の戦いで使った  
特注のバットを二本取り出し両手に持つ。

「へっへ・・・『秘儀・無敵バット二刀流』」

「またあのバットかよ！？しかも今度は二本か！？」



「つくづくイラつくな・・・たかがバット如きで私らをボロボロにしようなんて!!」

「だが、結果的にこの間はそうなっちまっただろうが！」

獄寺の一言を聞いて、恋次達はあの時の戦いのことを思い出し複雑な表情を浮かべる。

「・・・確かにそうだったな・・・だが、どうもあの時は俺達の中に脱ぎ捨て切れていない甘さがあったのが敗因だったのかもな・・・」

「恋次の言う通りだ。私も心の奥底で余裕で勝てると思い込んでやがったみたいだな・・・けど、同じ過ち二度としねえ。私はもうあのときみたいな思いをするのはごめんなんぞな!!」

ヴィータの脳裏には、嘗ての事故でなのは守りきれなかったときの思い出が蘇ってきた。

そして、二度とあんな悲しい思いはしたくないという決意を込めて、グラーファイゼンの握る力を強くする。

「ああ・・・俺だってそうだ。十代目の右腕として奥方や十代目を守れなかったことは・・・全て右腕である俺の責任だ。だからこそ、ここでめえを倒して・・・必ず奥方を取り返して見せるぜ！」

「だったら・・・ここは個人戦はやめて・・・三人で力合わせたほうが良いよな・・・」

「ふん。まあ……今回は私もそれが一番の適作だと思っぜ。」

「足手まといになんかなるんじゃねえぞ……刺青！」

「バカ野郎……てめえのほうこそ、俺様の邪魔はするなよ……  
タコあたま。」

すると、恋次は刀を左横にそらしてそれを自身の前に持つてくる。

「卍解！」

その瞬間、恋次のまわりに発生する霊圧の嵐が恋次を覆い隠す。

「こつちだつて行くぜ！瓜、カンビオ・フォルマ形態変化！」

獄寺自身も、フレイムアローと瓜を合体させてGのアーチェリー弓矢へと変化させる。

「あたしだつて、今回の修行……もとい喧嘩でただ何もしなかつたわけじゃねえ！行くぞ、アイゼン！」

「イツツサー！フォルムフォース！」

ヴィータの声を聞いた、グラーフアイゼンはカートリッジを二発口  
ードする。

すると、グラーフアイゼンの形状が今まで見たこともないものへと  
姿を変える。

それは、ギガトンハンマーほどの巨大さはないものの、ヴィータの  
背丈を遥かに凌ぐほどの大きさで、形状そのものもどちらと言えば  
大工事のときに使う金槌と言ったほうが適切だろう。

「ニュー・フォルム新型、アイアンハンマー！」

そして、獄寺とヴィータの準備が完了すると同時に恋次も霊圧の渦  
の中から姿を現す。

「こつこつおひびくおめ狒狒王蛇尾丸！！」

その時、バカはあのとときに戦った三人とは違う何かを感じ取った。

「（何だこいつら！？まるであの時とは別人のようだ・・・！？ま  
るで、このわしを本気で潰そうとしている目・・・いや、何かを意  
地でも守ろうとしている目だ。）」

そして、そんな三人を見たバカは不敵な笑みを浮かべる。

「ふん。おもしろい！どうやらわしもこの間よりは楽しめそうだな・  
・だが、これだけは忘れるなよ。いくらお前たち三人が束になっ  
てかかるうと、最後に笑うのはこのわしだ!!」

「それは違うぜ！最後に笑うのはこの俺たちだ！」

「おうよ！見せてやるぜ、破壊の騎士ヴィータと鉄の伯爵グラフア  
イゼンの真の実力をな！」

「俺たちの本気を見て、腰抜かすんじゃないぞ・・・両津勘吉!!」

「貴様!! わしはバカ・デ・サールだ!!」

そう言うと、怒りを露にしたバカが三人に突撃していた。

「来るぞ！先ずは俺から行く。二人は後から来い！」

「「よっしゃ!!」」

すると、恋次以外の二人は一度その場から離れて蛇尾丸を操作して  
バカに攻撃する。

「せりゃああああああ!!!!」

蛇尾丸が怒涛のように走ってくるバカ目掛けて口を開く。

バカもそれを予想して二本の無敵バットで蛇尾丸の口を押さえるが、威力が前に戦ったときよりも上がっていることに驚く。

「くそ！この前よりも威力が上がってるじゃねえか！！」

と、苦しげな表情を浮かべるバカの後ろから獄寺がホバーに乗って攻撃を仕掛ける。

「果てる！赤竜巻の矢！！！！」  
トルネード・フレイムアロー

放たれたものに気付いたときには既にバカの背中に遭っており、バカの表情はさらに苦しみで曇る。

「くっ！！！！これはまともに受けたらかなり熱い！！」

すると、それを見た恋次が突然蛇尾丸の操作を緩めると大声でヴィータに向かって合図を出す。

「今だ、ヴィータ！ぶちのめせ！！」

「はいよ、恋次！！行くぜバカ・デ・サール・・・私の取って置きをくらいな！！」

すると、ヴィータは発生させた大型の鉄球にさらに靈力と付加させた強化版をアイアンフォームのグラーファイゼンで渾身の一撃を込めて打ち出す。

「うりゃああああ！！！！！」

『飛翔する大地』グランドフリーゲン！！！！

そして、その鉄球の一撃がバカの腹部に激突してバカは後方数十メートルまで飛ばされ、岩に激突する。

「まだまだ！俺たちからのプレゼントも序に喰らいやがれ！！刺青、やるぜ！」

「おっしや！！！」

すると、恋次と獄寺はほぼ同時にガトリングアローと狒骨大砲をバカの下まで放つ。

「融合奥義！」ダイナマイト・パブリンキング『大炸裂狒狒王』！！！！

これは即興で考え付いた二人のオリジナル技だが、その威力は凄まじいものである。

直撃の瞬間、爆発の威力と爆風は今までに見たこともないようなも

ので、それは広大な空間に居るもの全てが確認できるほどのものであった。

「仕上げだ!!」

ヴィータはそう言うと、グラーフアイゼンを今度はギカントフォームに変化させて狙いを定める。

「轟天爆砕!!」

その瞬間、ギカトンフォームのグラーフアイゼンのハンマーヘッドがビルほどの大きさまでに巨大化し、全ての状況破壊を可能とした切り札を全ての思い込めて振り下ろす。

「終わりだ!!ギカトンシューク!!!!!!」

そして、最後のヴィータの一撃が爆発を起こすバカの下に振り下ろされ、更に爆発を伴う。

三人は一度安全な場所まで下がると、爆発が収まるまで岩陰に身を潜めた。

「やったか!？」

「わからねえが・・・とりあえずは無傷の筈ねえだろうな。」

「ああ。恋次の言う通りだ。あれだけ念入りにやったんだ・・・後は奴の生命力次第だな・・・」

そして、漸く爆発と爆風が落ち着き岩に激突したバカの姿が見えてくる。

三人は息を呑んでそれを見ると、粉々になった岩の周辺から・・・爆風とハンマーの直撃を食らって身体中が焼け焦げて全身を血塗れにして苦しんでいるバカの立ち上がろうとする姿が目に見えた。

「よし！致命傷を負わせたぜ！」

「流石の無敵バット二本でも・・・私らのあの攻撃までは、防ぎきれなかったようだな。」

「おし！後は止めだけだ！！」

そう言つて、恋次達が動き出すとしたとき――バカの身体中から突如黒い体毛のようなものが生え出し、バカの身体を覆い隠す。

突然のこの出来事に三人は動揺をする。

「なんだなんだ！！??? 一体どういふことだ!??」



「何だよあの気持ち悪りー毛は!?!」

「うえ!!あの毛・・・どんどんあいつの全員を覆い尽くしていくぜ!?!」

そして、見る見るうちに体毛がバカの体を埋め尽くしたときには、既にバカは傷を癒して立ち上がっていた。

「はははあはははあは!!!!!!よくもこのわしをあんな目にあわせてくれたな!!!!このお礼はこれでたっぷりと換えさせてもらうぞ!!!!!」

バカの姿は最早人間というより、ゴリラや原始人に近い状態だった。

「何だよ、そいつは!?!」

恋次が徐に異様な姿をしたバカにそう尋ねる。

「へへ・・・わしは元々生まれつき原始人に近い遺伝子を持っていてな・・・それを次元の破壊者との契約によって、生命エネルギーが残り僅かとなったとき、その遺伝子を覚醒させて野性の力を手にすることが出来るんだ。」

「野性の方だつて!？」

「そうだ!これぞわしの最強にして最終形態……その名も、『リ現<sup>アル・ゴリラ</sup>使猿人』だ!!!」



第99話：迎撃フロントVSバカ・デ・サール（後書き）

次回予告

真の姿になったバカの攻撃力の上昇は、凄まじいものだ。

その圧倒的な破壊力に、次々と傷ついていく恋次・獄寺・ヴィータ  
絶望的な状況に立たされ、もう為す術もないかと思われたとき

三人の脳裏に、どうしても譲れぬ思いが交錯し、再び立つ力を与える。

次回、次元の破壊者・・・「吹き荒れる疾風」

よろしくな!!

## 第100話：吹き荒れる疾風

恋次・獄寺・ヴィータは変わり果てたバカの容姿に声も出ない。

寧ろ、逆に恐怖を感じていたりもする。

そんな三人の表情を見て、すっかり見た目は原始人に近い姿になったバカがゆっくりと近付いてくる。

「ふふ・・・いい顔だぞ・・・これが本当の畏怖というものだ。さあ、恐怖しる愚かなる侵入者よ。貴様らの目の前に居るものが、貴様らにとっての最期に見たものになることは間違いない。」

すると、バカは一瞬にして三人の目の前から姿を消した。

「何！？くそ！何所行きやがった!？」

恋次が必死に霊圧を探って探そうとするが、全くもって効果なし。

「野郎！何所から出てきやがるわからねえ!!！」

獄寺も警戒心を強めて、周囲の様子を警戒していると奴はそんな獄寺の背後に回りこんだ。

「そう警戒しなくてもいい・・・わしも貴様の後だ。」

「「「！」「」」」

そして、三人が気付いたときにはバカは右腕で獄寺の腹部を殴りつけて獄寺を勢いよく飛ばした。

「獄寺！！てめえよくも！！」

ヴィータがギガトンハンマーでバカを殴りかかろうと振り下ろすが、バカは焦り一つ見せず右手の人差し指一本でハンマーヘッドを受け止めた。

「何！？指一本で！？」

「どうした小娘・・・全然力が入っていないぞ。それとも、それが貴様の限界なのか？ならば、今度はわしから貴様に格の違いを思い知らせてやる。喰らえ！！！」

そして、再びバカは獄寺同様ヴィータの腹部目掛けて右の拳を入れるが、今度は直ぐには飛ばされず一度強烈な痛みを全身で感じ、多

量の血を流した後で岩場に飛ばされ激突する。

「グイータ!!!くそ!!!」

怒りを覚え、狒狒王蛇尾丸を操りバカに攻撃を仕掛ける恋次。

「あいつらの仇だ!!!行け、蛇尾丸!!!『狒狒大津波』!!!」

これは、狒狒王蛇尾丸の力によって地面を操りまるで津波のような土砂を敵方に向けて攻撃するという技で、恋次が修行の間<sup>ひひおつなみ</sup>に会得した大技の一つだ。

「ふん!たかだか土砂の津波なんかで、今のわしが倒せるか!」

そう言うと、バカは口を開くと空気を身体中に吸い込みにを破裂寸前のところまで溜め込むと、一気にそれを向って来る土砂の津波に向けて吐き出す。

「これぞ、ホントの・・・『空気砲』だ!!!」

バカの口内から放出される巨大な空気の塊はそのまま土砂の津波を押し戻し、恋次のところまで跳ね返す。

「莫迦な！？空気の気圧だけでこんなことが！？」

避けきれずに自身の大技を直に受け止めてしまった恋次は、獄寺とヴィータが飛ばされた岩場のほうまで流されてしまい、土砂が堆積して三人は身動きできない状態となった。

「はははははは！！見たか、これが格の違いだ！貴様ら程度の力では、到底今のわしには手も足も出まい！おとなしく次の一撃で楽にしてやる！」

すると、それを聞いた三人は血を流し満身創痍で意識が朦朧とする中でもバカのほうを見て、返事をする。

「な……舐めんじゃ……ねえよ！誰がてめえなんか……やられる……かよ……！！！」

「私も同じだ……こんなところで……くたばる……訳には……いかねえんだよ！！私が死んだら……誰がなの……ことを空で……守るんだよ……！！！」

「俺も……俺にも……超えなきゃならねー……もんがあんだよ……！！それを超えられないまま……死ぬわけには……いかねえ。」



「やれやれ・・・往生際が悪い奴らだ。分かっているのか？今ので見たとおり力の差は歴然。お前たちとわしでは天と地ほどにも隔たっている。それなのに、まだやろうというのか？実に下らん！」

「うる・・・せーよ・・・勘違いすんな・・・俺達が戦っているのは・・・勝つか負けるなんかのためじゃねえ・・・勝たなきゃいけないから戦ってるんだ・・・！！！」

「ああ・・・大切なものを取り返すためにも・・・諦めるわけにはいかねえ！！！」

「それによ・・・俺たちの使命はあくまで迎撃・・・迎え撃つ敵をこの身が引き裂かれようと、そこで食い止める義務がある！！だからなんとしても・・・てめえはここで俺達がぶっ倒す！！それで仕舞いだ！！！」

「・・・そうか・・・なら、仕方ない・・・いくらいつても聞かぬバカに、口でどうこうしたところで無意味なことだ。じゃあせめて・・・武力で貴様らの五体に分らせるまでだ。」

すると、バカは全身の力を頭に集中させる。

そのとき、頭の両側からは牛の角のようなものが生えてきたではないか！？



「（妙だな・・・あの赤髪の正解・・・まだ消滅していない!? 本来死神の正解が消えるのは、持ち主が意識的に解くかないしは持ち主の死期が近く意思に反して消滅するのかのどちらかだ。だが、それが消えていないということは・・・奴はまだ死ねないということか・・・!?)」

その頃、獄寺・ヴィータ・恋次の三人は朦朧とする意識の中で、この戦いにおける自分の非力さと無念の情を悔やんでいた。

「（すみません・・・十代目・・・俺は・・・あなたの大切な笹川京子を・・・守れませんでした・・・今までよく平気で・・・十代目の右腕なんて・・・軽口を叩いてしまい・・・申し訳ありません・・・こんな俺じゃ・・・右腕は愚か、ファミリーの全員なんかよりも遙かに下ですね・・・けど、俺はあなたと出会えて・・・本当に嬉しかった。あなたが居てくれたから・・・俺は変わったんです。あなたが十代目で・・・本当に良かった。だからこそ、俺は・・・あなたの一番大切な人を守りたかった・・・あの方は・・・奥方は本当にあなたのことを心から心配し、愛していました・・・なのに俺は・・・また・・・!!)」

「（・・・何だ・・・これは・・・!? 目の前が・・・真つ赤だ・・・いや、真つ赤なのは私のほうか・・・!? くそ!! 私・・・こんな奴に・・・やられちゃうのかよ・・・!! ふざけんな・・・私には・・・まだやらなきゃならないことが山ほどあるんだ!! 私がこので死んだら・・・はやてやシグナム達・・・それに、なのはは誰

が守るんだよ！！空でなのは守ってやっるのは・・・私だけなんだぞ・・・！！もう二度と・・・あんな思いをするのは御免なんだよ！！それなのに・・・身体が・・・言うことを聞かない・・・！！チクシヨ・・・もう・・・はやくとも・・・なのはとも一緒に笑うことも・・・泣いたりすることも・・・怒ったりすることも・・・出来¥ねえのかよ！！）」

「（・・・くそ・・・息が・・・できねえ・・・身体中が・・・悲鳴を上げて・・・全然動こうとしねえ・・・全く・・・つくづく嫌になるぜ・・・超えたいものがあるのに・・・それを超えようと思っただけで・・・ちつとも前に出ようとせず・・・月に向って咆えるだけの自分が・・・！！威勢ばかりで・・・いざとなったら何も出来ねえ野良犬だ・・・俺は・・・！！死にたくねえ・・・俺はこんな奴にやられて・・・死ぬなんて・・・絶対にやだ・・・！！まだ・・・諦められねえ・・・超えたいものが俺にはあるんだ・・・朽木隊長を・・・超えるんだ！！！！！！）」

その時、三人の頭の中には死の間際の人間の如く今までのことが走馬灯のように駆け巡ってきた――・・・

獄寺の場合は、この事件に巻き込まれる前の平和な並盛での一日のこと。

偶々、京子と道端であったときの会話の一部である。

安心してください、奥方！この十代目の右腕であるこの俺が居る限り、十代目にも勿論奥方にも手は出させませんよ！大船に乗ったつもりで任せてください！！

うふふ。うん、ありがとうね獄寺君！

いえそんな、滅相ありません！そのような大それたことは何もしていませんし、右腕としては当然のことです！

そうなんだ。でも、こうして考えるとツナ君も本当に幸せ者だね・  
・獄寺君みたいに、こんなになって心配してくれるいい人が沢山居て・  
・私、ちょっと羨ましいな・  
・

そんなことはありませんよ。俺や山本達が十代目を気遣うのは部下としては当然のことですし、俺から言わしてみれば・  
・俺たちなんかよりも奥方のほうが一番十代目のことを気にかけていると思いますよ。

え？そ、そんな！？私なんて・  
・皆から見たら全然・  
・

いいえ。あなたは誰よりも十代目を気にかけていらっしやる。現に、毎日学校に行く途中でも言った後でも十代目の口からは何度もあなた様の名前が出ていますよ。そのときの十代目の顔といたらもう嬉しいそうのなんのって！俺はあれほどまでに十代目が喜んだ顔を見たことはありません。つまり、それだけ奥方の存在や心遣いが十代目にとって活力になっているのかは、俺でなくても気付いていますよ。

ツナ君が・・・そんなに私のことを・・・!?

はい!ですから、あまり暗い顔は為されしないで下さいね!あなたは十代目の仰るとおり、いつも笑っていて下さい。俺達はそんな大空の太陽を守るための剣なんです。もし、大空の傍で太陽が陰る時には・・・そのときは俺達が陰るものを全て取り払いましょう。

・・・獄寺君・・・うん!ありがとう・・・じゃあ、そのときはお願いするね。ツナ君を守る嵐の守護者さん。

はい!勿論であります!

一方、ヴィータの脳裏にはなのはとの会話が浮かんできたのであった。

それは、六課が解散して3年経った時のこと・・・一緒に二人で喫茶店でお茶を楽しんでいたときだ・・・

しっかしなのは・・・本当に良かったのか?昇進辞退してまで、教導官の仕事選んだことは?

うん。空を飛ぶことしか私には能がないから。それに、昇進なんて最初から興味はないし・・・私が管理局（こく）にいるのは、自分の生かせる分野を多くの人に教えて、何れ自分の空で羽ばたいて貰いたいからだよ。

全く・・・お前は毎度毎度そればっかだよな・・・そんなことで  
ヴィヴィオの奴にまた叱られるぜ。

もう！それとこれとは話が全然違うよ！それにヴィヴィオだって・  
・私がこの仕事を続けることにに関して、何ら文句一つこぼさない  
し。でも、そのせいでいつも寂しい思いをさせてるんじゃないかっ  
て、時々不安になるのも事実。

だったら・・・早く結婚でもして落ち着いたらどうだよ。

ヴィ、ヴィータちゃん！！そんな私結婚なんてまだ！！

何顔赤くしてんだよ。それとも何か、ユーノとはまだ友達以上恋  
人未満の状態を続けるのかよ？

だから！！ユーノ君とはその・・・結婚なんて・・・何と云うか  
・・・その・・・！！！！

満更嫌でもないじゃないのか。ヴィヴィオだってユーノのこと大  
分懐いてる様だし、そろそろ長年のこの平行線の関係にでも終止符  
を打ったらどうだ。

もう！！ヴィータちゃんの意地悪！！

また、恋次の頭の中には・・・一護とのとある会話が駆け巡  
ってきた。

え？白哉を越す！？まだ諦めてないのかよ！？

何だよその言い分は？まるで俺が絶対に隊長を超えられねえって言ってるようにも思えるぜ！

イヤだってよ、お前一度白哉にボコボコニやられたんだろ？

うっ、うるせーな！！あの時は、もう少しのところで隊長を追い詰めたんだ！！だから、いずれ隊長を超えてみせる！！そのときには、てめえの力じゃ手も足も出ねえほどになってるぜ！

何だと！？一度負けた奴が偉そうによく言うぜ！俺は一度白哉に勝ってるんだぜ！お前が白哉を倒せたときには、俺はてめえのその10倍は強くなってるぜ！！

だったら俺はその100倍に強くなってるぜ！！

おっと、訂正する。俺はその1000倍だ！！！！！！

俺も訂正するぜ！！！！俺はその10000倍だコノヤロー！！！！

！

てめえ！！！！ガキの喧嘩じゃねえんだぞ！！！！

うるせー！！！！ガキなのはどっちだよ！！！！俺はこっ見えてもてめえの何倍も年取ってるんだぞ！！！！



関係ねーよ！！よしそれならどっちがガキなのか此処で決着つけてやろうか！！

上等だ！！俺様の前に跪かせてやるぜ、一護！！！！

そんな会話が頭の中を駆け巡って暫くしたときだ、三人は意識をはつきりさせてほくそ笑むと、血塗れでボロボロとなった身体を徐に起こして立ち上がった。

この光景を見たバカは驚きを隠せない。

「莫迦な！？わしの『破滅の告知』をもろに喰らって・・・まだ立ち上がるなど・・・貴様ら、本当にどうなってるんだ！？訳が分からん！？」

「へっ！てめえには一生判ないだろうな・・・例えからだかボロボロになるとも・・・決して折れない強さが世の中にはあるってことかな！」

「私らの身体な・・・お前なんかに傷つけられて壊れるほど・・・軟じゃねえんだよ・・・！！」

「それによ・・・心残りっていうものが随分とあってな・・・仮に死んでも、ちつとも成仏出切る気がしねえ・・・」

腕や身体のいたるところの傷を抑えながら言葉を発する獄寺・ヴィ  
ータ・恋次の三人。

その光景を見たバカの動揺は大きくなるばかりだ。

「ぬぬ！！精神が既に肉体を凌駕しているという口か！？ふざける  
な！！何故そこまでして立ち上がる！？一体貴様らは何のために戦  
つてるんだ！？一体、誰の為に戦う！？」

「はっ！そんなも決まってるだろ！」

「ああ！私らが戦ってるのは……誰のためでもねえ……」

「ああ……俺達が戦うのは……ただ俺達自身の……」

そして、恋次がそう言った後三人は声をそろえて同じことをバカに  
向かって言いきった。

「……魂のためだ！！！！」

それを聞いたバカは困惑と同時に焦燥を憶えて、その焦燥感を拭い  
きれないまま三人に攻撃を仕掛ける。

「く~~~~~くそが!!!!!!!!!!!!!!」

それを見た三人は傷を受けている身体にもかかわらず信じられない速度で移動して見せた。

「何！？そんな莫迦な！？」

その時、驚きで背中がから空きになっているバカに向けて獄寺が攻撃を仕掛る。

「てめえに、ボンゴレ嵐の守護者の戦い方をじっくりと見せてやるぜ！！」

そして、獄寺は狙いを定めてGの弓矢からトルネード・フレイムアローを打ち出す。

トルネード・フレイムアローを背中に喰らったバカは、先程以上に威力が上がったトルネード・フレイムアローに驚愕し、悲鳴を上げる。

「ぐあああああ！……！（何だこれは！？威力が段違いだ！！炎圧があがっているのか！？炎圧はいわば覚悟の大きさ。まさか、そ

れだけの覚悟が・・・今の奴には、あるというのか!？」

そして、悲鳴を上げて苦しみだすバカに容赦なくバリエーションを変えた炎の矢を放っていく。

「常に攻撃の核となり、休むことのない怒濤の嵐!！」

それはまさしく怒濤の嵐。

絶え間なく打ち出される炎の矢が次々と爆風が収まらることも待たずにバカの身体に直撃する。

一度その攻撃から回避するために、焼け焦げた身体を煙の外に出すバカ。

「くそ!これでは身体がもたん!」

とその時、バカの上空から機会を窺がっていたヴィータがギガトンハンマーを持って構えていた。

「!!!」

「私の名は鉄槌の騎士ヴィータ!そしてこいつは鉄の伯爵グライフアイゼン!この二つがある限り、破壊できないものなんてねえ!!」

「!!」

そう言っていると、驚愕するバカに向って渾身の力を込めた一撃を振り下ろす。

「いつけー!!!! ツェアシュテルングスハンマー!!!!」

ギカトンハンマーのハンマーヘッドに出現したドリルによって、棒業と装甲を抜けた衝撃と回転を加えられた魔力が対象内部へと拡散し、内側から破壊尽くすヴィータの大技。

それが今バカの真上に振り落とされ、バカはどうか両腕で防御をしようとしても、傷ついたからで十分な防御ができるはずもなく、攻撃をくらいと広い空間のほうへ飛ばされる。

「だああああああ!!!!!!」

飛ばされるバカを見た獄寺は身体に流れる全ての死ぬ気の炎を集約して、バカに狙いをつけて発射する。

「葱付けだ!!! 『五大要素の炎矢』!!!!」  
エレメント・フレイムアロー

通常の嵐の死ぬ気の炎に混じった、雨・晴・雷・雲の計五つの炎の

矢が見事狙い通りにバカの胸を貫通。

バカは貫通されて血を噴出す箇所を手で抑えながら、地面に落下する。

「だあああああ！！くそ！！！！ふざけやがって！！！！わしはただ死なんぞ！！！！まだポーナスも何も貰ってないんだ！！！！新しいブラモもゲームソフトも・・・買わないうちに死んでたまるか！！！！」

すると、そんな汗だくと苦悶の表情を浮かべるバカの瞳に恋次の蛇尾丸に残り全ての魔力と死ぬ気の炎を与えているヴィータと獄寺の姿が目映った。

「何だ・・・！？何をしようっていうんだ！？」

そして、力を全て受け取り力を蓄えた恋次は、最後の力を出し切って三人全ての思いと覚悟を込めた一撃をバカに向けて発射した。

「これでホントに仕舞いだ！てめはここでくたばりやがれ、バカ・デ・サール！行くぜ・・・これが俺達迎撃フロントの最強採集奥義・インフェルノ・デストロイアー地獄業火弾！！！！！！！！！！」



まっ、失敗など誰にでもあるものだ。大切なのはこの先で二度と同じ過ちなしないことだ。

このバカモーリーーン!!!両津!!!貴様という奴は!!!!!!  
一体毎度毎度何度口をすっぱくして言えば気が済むんだ!!!!!!

「(そうだ・・・わしは本当は両津勘吉だったんだ・・・あれから随分と部長の声を聞いていないな・・・あのうざったくも優しかった部長の濁声が懐かしいな。そう言えば、わしはもう何十年も前に死んだんだった・・・けど、それを次元の破壊者がわしの遺伝子を勝手に持ち出して、両津という人間の記憶を全て抹消して・・・バカ・デ・サルという存在を作り出したんだ・・・でも、わしはあいつらのお陰で・・・漸く誰にも縛られることもなく、安心して死ねる。もう、わしは・・・警察官としてこんな酷いことはしたくない!」

その時、消滅していくバカの脳裏に嘗て自分が両津として生きていた頃の懐かしい人々が迎えに来た。

「なっ!?!あれは・・・!?!」

「先輩!!!早く来てくださいよ!!!」



「両さん!!お帰りなさい!!」

「両ちゃん!!早くこっちに来なさいよ!」

「中川・・・寺井・・・麗子・・・!?!?」

消えかけていく意識の中でバカ・・・いや、両津は確かに、派出所で勤務していた嘗ての同僚の姿を見た。

その他にも、亀有商店街の面々や葛飾署の警察の人達・・・両津に関わった様々な人間。

そして、忘れてはならないこの人もー・・・

「こら、両津。何をぐずぐずしておる。早くこんか!一分遅れるごとに、始末書追加だぞ。」

「・・・ぶ・・・部長・・・!?!」

そのときの大原部長の表情は、いつものように強張った感じはあったものの、両津にとってはとても優しく見えた。

そして、両津は顔を綻ばせると嘗て生きていたときの制服にいつの間にか身を包み、静に仲間の下へ歩いていきながらこんな自分を救ってくれた恋次・獄寺・ヴィータに感謝の言葉を残した。

「ありがとうよ……お前たち。お前たちがわしを倒してくれて本当によかった。おかげでわしは……漸くみんなの下に帰れるんだからな……」

そして、三人が見守る中現実の世界の第11使徒、バカ・デ・サールは炎の中に消えていった。



## 第100話：吹き荒れる疾風（後書き）

### 次回予告

獄寺達はついに、宿敵バカ・デ・サールを倒した。

だが、まだまだ油断は出来ねえ。

十二使徒はあと、11人もいるんだ。

そんな中、ルキア達間接フロント組みが戦っているのは――

ティアナとクロームを追い詰めたあの男、オベージヤだ。

オベージヤは、余裕のつもりなのか・・・今度は自身の斬魄刀で相手をするといつてきた。

一体、あいつはどんな能力を持っているのか？

次回、次元の破壊者・・・「悪夢再び」

オベージヤの陰湿な戦い方が四人を襲う。

## 第101話：悪夢再び

恋次・獄寺・ヴィータ達迎撃フロント組みは全ての力を降り注ぎ、十二使徒の一人・・・バカ・デ・サールを撃退。

三人はその場に手を突いたりして、傷の具合を確認しては険しい表情を浮かべ肩で息をする。

「はっ、はっ、はっ、はっ・・・やったぜ・・・」

「ああ・・・けど・・・これじゃあ暫くはまともに動けないな・・・」

「くそ！力の回復を待ってる余裕はこっちにはねえのに・・・！！」

三人は身体中の力全てをバカを倒すことだけに費やしてしまい、今では立つことさえままならない状況だ。

「けど・・・今の状態じゃ移動することも出来ないことに違いはねえ・・・一先ずここは、一度傷を癒してから奥方奪還に行くほうが得策だ。」

「だな・・・だったら、早いとこ傷の手当をしようぜ・・・」

「ああ。ちよつと待ってる・・・今薬を出すからよ・・・」

恋次は卍解を解くと、ボロボロの死覇装の懐から真之介に渡された薬を取り出し自分と獄寺・ヴィータに使った。

治療の最中で、三人は急がなくてはいけないという焦燥感が常に頭に浮かんでいた。

その頃、間接フロント組みはというと・・・直接フロント組みと共にロボット達の殲滅をした後で、広大な空間を駆け巡り、はるか前方に佇む宮殿のようなものを目指していた。

「！この霊圧・・・恋次たちか!？」

ルキアが茶渡やティアナ達と走っているときに、遠く離れた場所で戦いを終えた恋次達三人の霊圧等を感じた。

「そのようですね・・・ということは、さっき消えた巨大なほうの圧は・・・十二使徒!」

「みたいだね、ティア!しかもその相手は・・・」

「おお!俺達が前に戦ったあのバカ・デ・サールという奴のものに極限間違いない!」

「良かった！獄寺君もヴィータさんも、それに恋次君も無事で！朽木さん、そうと分かったら急ごう！」

「ああ、そうだな！よし、行くぞ！」

ルキアの掛け声と共に全員は先程よりも走る速度を上げて宮殿のほうへ向った。

全員が宮殿の正面の門へ到着すると、まるで全員を誘い出すかのようにあからさまに門が開いていた。

「門が開いている・・・！？俺達を誘い出すつもりか？」

「上等じゃない。そこまでして私達を倒せる自身があるってことね・・・」

「おお！！ならばその誘い、極限申し受けるぞ！！そして京子は必ず俺達が助け出す！！！」

「よし！だったらここは慎重に行こう。何が出てくるか分からぬからな。」

ルキアの言葉を聞いた全員は、正面の門を潜るとそこからは音を立

てないように走り、慎重に内部へ進んで行った。

内部は驚くほど広く、幾つもある長い廊下が全員を惑わす。

すると、そんな長い廊下を進んでいた全員の目に二つに枝分かれした道が飛び込んできた。

「枝分かれだね・・・」

「ここは全員で行きたいところだけど、効率的に京子ちゃんを探すならやっぱり二手に分かれるほうが良いわね。」

「ティアナの言う通りだ。ここは俺達直接フロントと間接フロント組みの別々で行動するほうがいい。」

「そうですね。じゃあ、ティア！私達は左を探すから、ティア達は右のほうをお願い！」

「オッケー。それじゃあ、後出会いましょう！」

こうして、直接フロント組みは左方向に、間接フロント組みは右方向にそれぞれ分かれて進んでいった。

間接フロント組みは暗く陰湿な雰囲気を醸し出す一本道の廊下を只管走っていた。



「たく！一体何時まで続くの横の道！」

「確かに長いな。クローム、疲れてはいないか！？」

「うん・・・大丈夫・・・」

「もう少しだけだから、頑張ろうねクロームちゃん。」

井上の励ましを貰ったクロームは頬を少し赤らめながら、元気を取り戻して走ることに専念する。

その時、四人の目の前に光が差し込んできた。

「ようやく出口か。気をつけるよ三人とも・・・」

「・・・はい！」「」

そして、ルキア達が長い廊下を抜けて入り込んだ場所は・・・ざっと見て1000人以上が収容できるような巨大なホールが目の前に広がってきた。

「・・・これは・・・！」

「何なのこれ・・・!? 随分広いけど・・・!?」

「ホール・・・みたいだね・・・」

「・・・一体ここは!？」

すると、怪訝そうにしているそんな四人の下にあの男が徐に現れるのであった。

「ようこそ・・・間接フロント組みの諸君。随分と遅い到着だね・・・」

四人は耳に入ってきた突然の声に顔を歪ませる。

しかも、ティアナとクロームにとっては余計にそうさせてしまう。

「この・・・擦れた声は・・・まさか!？」

「・・・オベージヤ・・・!?!」

クロームの発言を聞いたルキアと井上が驚愕する。

「なっ！？本当かそれは！」

「この声の人が・・・ティアナさんやクロームちゃん、そして骸さんを追いつめた・・・オベージヤ！？」

そして、大きな不安を抱え込む四人の前に、徐に前方の階段を下りて不気味な笑みを浮かべて登場するオベージヤ。

オベージヤ本人だと確認する四人は、自身の武器をおもむろに取って構える。

「おやおや、そう強張る必要はないよ。力は抜いたほうがいい・・・余計な力は本来の実力を半減させる。」

「あんたに言われずとも分かってるつもりよ。」

ティアナは腸で煮えくり返るオベージヤに対する怒りの念を必死に抑え、平静を装い応答する。

「おや？随分と賢くなったようだね、ティアナ・ランスター。あのときの屈辱を晴らすつもりだと思っていたから、てっきり頭に血が上っているとばかり思っていた。」

「お生憎、私は仮にも執務官よ。子供じゃないの。」

「そうか、それもそうだね。しかし、今日はこの間とは大分違うよ  
うだ・・・間接フロントの残りの二人を連れてきての再戦という形  
で捉えていいのかな？」

「何を勘違いしている？我々は貴様を倒しに来たのではない。京子  
を救出に来たのだ。」

「あなたとの決着は今はどうでもいい！早くここを通しなさい！」

クロームは三叉槍を強く握り締めて、オベージヤに強い口調でそう  
断言した。

「・・・成る程。私と戦うつもりは毛頭ないという訳か。だが残念  
だが、君たちが私に用がなくても私はここで君たちと戦う義務があ  
る。次元の破壊者様がいる最深部へ行かす訳にはいかない。君たち  
がこれ以上土足でこの奥に入るとはすなわち、次元の破壊者様を  
危機にさらすことになる。悪いが、君たちはここで絶命してもらおう。」

「  
そう言うと、オベージヤはコートを開くと腰にぶら下げている日本  
刀に手を掛けた。」

ティアナとクロームはこの間の戦いから、オベージヤの持つ刀には  
注意を光らせていた。

「また性懲りもなく、複製斬魄刀って訳ね。鏡花水月で一気に私らを倒すって寸法ね・・・」

しかし、ティアナの言葉を聞いたオベージヤは鼻で笑うと意外な言葉を返してきた。

「何を言っているんだい、君は？今回はそれを使わずとも君たちを充分に倒せるよ。この間は、ほんのデータ集めのためと遊びのつもりで使っただけに過ぎん。だが、今回は私も本気だ・・・なので、今日は特別に私自身の斬魄刀かたなで君たちをお相手しよう。」

「」「」「なっ！」「」「」

愕然とする四人を他所に、オベージヤは自身の刀を見せびらかすようにゆっくりと抜いていく。

「斬魄刀を持つという事はすなわち・・・貴様も死神か？」

「」名答。但し・・・そんな名前は既に2000年以上もの昔に捨てたさ・・・」

「2・・・2000年以上・・・!？」

ティアナを始め、ルキアも井上もクロームもその時間の長さに驚きを隠せない。

「ああ。君たちはそんな途方もなく大きな数字を聞かされてもぴんとこないと思うだろうがな。さて、御託は正直嫌いなんだ・・・早速だけでも使わせてもらおうとするよ。」

すると、オベージヤは刀身を上に向けると左手の人差し指を刃に押し付けて血を噴出す。

「来るぞ、みんな!どんな能力が分からぬ!」

「ええ。来るなら来て見なさいよ。」

「うん!私だって、いつまでも治療することだけしか出来ないわけじゃないんだから!」

「ここであなたを倒して、京子を助ける!」

全員は自身の武器を構えてオベージヤの不可解な様子を険しい表情で見つめる。

オベージヤはそんな四人の視線を一先に求めずに、己の刀の名を静に呼ぶ。

「むげんついでつ夢幻追悼・・・『やみからす闇鴉』」

その名を呼ぶのと同時に、オベージヤの左手の人差し指から流れ落ちる赤い血の滴。

それが床に付着した瞬間、オベージヤの持つ闇鴉の刀身が光を始め、零れた血もそれと同時に広がり始める。

「何だ！？血が広がっている？」

「気持ち悪いわね・・・何が起きるっていうのよ!？」

やがて、その血はある程度の大きさまで広がると徐に人の背丈ほどにまで盛り上がる。

この奇怪な様子にただ愕然とする四人と、それを不敵な笑みを浮かべて喜ぶオベージヤ。

そして、血の盛り上がりはやがて人間の形へと変貌し、形が具体的なものへと変わった瞬間に血の色はなくなりその人間の姿そのものに变化する。

その数は二人。

だが、その二人の姿を見たルキアとティアナは一気に顔を青ざめた。

何故なら――

「そ……そんな莫迦な……!？」

「あ……なんで……こんな……ことが!？」

目を開いて驚愕するルキアとティアナ。

井上もクロームも目の前に現れたその人物達の顔を見て、背筋を凍らせる。

その人物が誰なのかは……オベージヤ自身の口から開かされることとなる。



「君達に紹介するまでもないが、一応名前くらいは話しておこう。君たちから見て左側に立つ人物が、ティアナ・ランスターの実の兄、ティーダ・ランスター。そして右側に立つのが、朽木ルキアの義兄・朽木白哉だ。」

オベージヤにそう言われたティーダと白哉は、瞑っていた目を徐に開いてルキアとティアナを見つめて話しかける。

「・・・少し見ない間に、随分綺麗になつてね・・・ティアナ。」

「ルキア・・・」

自分たちに向って話しかけてくるティーダと白哉の声を聞いたルキアとティアナは真っ白になる。

「・・・兄さん・・・どうして・・・!? 死んだはずじゃないの!」  
「?」

「白哉兄様・・・何故此処にいるのです!?!」

「どづいことー!?!どづして死んじゃったはずのティアナさんのお

兄さんがここに！？それに白哉さんまで！！」

「幻覚・・・なの？私でも分からない！？」

すると、そんなクロームの疑問にオベージヤが丁寧に答え始めた。

「これは幻覚に極めて近いがそうではない。これは『闇鴉』の能力である『夢幻召還<sup>むげんしょうかん</sup>』を使ったものだ。」

「夢幻・・・召還ですって！？」

「そうだ。朽木ルキアとティアナ・ランスターの脳の中にあつた人物に関する記憶のうち、最も色濃い人物の記憶を具現化したものだよ。そのために、私は代償となる血を差し出したという訳だ。これから君たちにはこの二人と殺しあってもらう。」

「「「「！！！」」」」

殺し合うという言葉聞いた四人の背筋は凍りついた。

「そんな・・・兄様を・・・兄様を私達で殺せと！？」

「あなたね・・・人の肉親を殺し合わせるなんて、何所まで歪んでるんよ!!!」

「悪いが、歪んでいるのは生まれつきでね。君たちがどう思うがそれは自由だが・・・だが、あまり迷っている時間はないぞ。何しろ闇鴉の能力で具現化した人物は全て私の言いなりだ。早くしないと君たちのほづが殺されるよ。」

「なっ!!!」

すると、目の前に居た筈の白哉は瞬歩でいつの間にかルキアの背後へと移動し斬りかかって来た。

ルキアは咄嗟の判断で白哉の直撃は避けたものの、背中に僅かな傷を負ってしまっ。

「ルキアさん!!!」

ティアナが援護にかかろうと走り出したとき、またしてもそれを遮ろうとばかりにティーダが行く手を阻む。

「はっ!!!兄さん!!!」

「余所見をしちゃ行けないよ、ティアナ。お前の相手は僕だ・・・」  
すると、ティードは持っていた銃型のデバイスでティアナに向けて発砲する。

ティアナはティードから打ち出された魔法弾を皮一枚でかわすが、その後も容赦なくティードはティアナに向けて得意の精密射撃で攻撃してくる。

ティアナは久しぶりに見た兄の精密射撃を避けることで精一杯だった。

「ティアナさん！朽木さん！！」

「まずいわ！これじゃあ二人とも危ない。織姫さん！私がオベージヤの持つてる闇鴉を壊すから、援護して！」

「分かった！」

クロームと井上はそれぞれ戦いを繰り広げているルキアとティアナたちの隙間を通り抜けて霧の幻術で身体を見えなくしてオベージヤに近づく。

すると、それに気付いたオベージヤが霧の幻術で姿を隠している二人に向けて鬼道を放つ。

「破道の五十八 『?嵐』」

オベージヤは左手を前に差し出すや否や隠れている二人に向けて竜巻を放つ。

二人は竜巻を受ける直前で三天結盾で身を固めたものの、威力が巨大だったために霧の幻術が解けて姿が見えてしまう。

「くっ!!! 凄い風!!!」

井上が険しい顔で盾に向かって吹き付ける竜巻を抑え込もうとする。

「ほう、大した防御力だな・・・だが、これならどうかな・・・破道の八十八 『飛竜撃賊震天雷砲』」

その瞬間、今度は竜巻から巨大な光線へと変わり井上とクロームに向って打ち出される。

井上の盾はその威力に圧されて盾そのものが崩壊し、井上とクロームはそれに直撃してしまった。

それを白哉と戦っているルキアは二人の名を叫ぶ。

「井上!!!!!!!!!!クローム!!!!!!!!!!」

「余所見をするでない、ルキア。」

白哉は動揺するルキアとは対照的に、何時ものポーカーフェイスを保った状態でルキアに刃を向ける。

ルキアは白哉の剣戟を防ぐことにで手一杯。

そして、攻撃を喰らった井上とクロームのほうだが、幸いにも霧のボンゴレリングが咄嗟に作り出して結界によって、粉々になることはなかったものの、最早その状態では立って歩くことさえ出来ない。

二人のボロボロの服の下の肌につけられた火傷が、二人の意識を更に遠のかせる。

そんな様子をオベージヤは擦れた表情で見つめていた。

これが、オベージヤという元死神の戦い方なのだー……



## 第101話・悪夢再び（後書き）

### 次回予告

狡猾なやり方で間接フロント組みの四人を苦しめるオベージヤ。

白哉と対峙するルキアは、傷つき倒れている織姫とクロームと、ティアダと戦っているティアナのが気になって集中できない状態だ。

そんなルキアに容赦なく剣戟を銜える白哉。

ルキアは袖白雪を解放するのだが、やはりレベルが違いすぎる。

白哉は格の違いを見せ付けるために、自身も刀を解放する。

次回、次元の破壊者・・・「散りゆく千本の刃」

白哉の千本桜が、ルキアを襲う！



## 第102話：散りゆく千本の刃

現在、黙示録内部で繰り広げられている間接フロント組みの戦いは、非常に深刻なものだ

オベージヤの斬魄刀、『闇鴉』の能力である『夢幻召還』によって呼び出された死んだ筈のティアナの兄、ティーダとルキアの義兄である白哉が呼び出され、二人は否応なくオベージヤの意のままによって操られルキアとティアナを苦しめる。

井上とクロームがそれをどうにかせんと、オベージヤの刀の破壊を試みるが、即座にオベージヤに気付かれ逆に返り討ち。

瀕死の重傷を負った井上とクローム。

さて、この戦いの行方は一体どうなってしまうのか……!?

それでは、今の状況を確認しよう。

現在ルキアは具現化した白哉の攻撃を辛うじて受け流しているという状況だ。

一方のティアナも、兄ティーダの射撃に翻弄されていつもの調子が出せていない。

最も、いつもの調子を出すという言葉は今の二人には到底縁のない

様にも思える。

考えても見たまえ。

どちらもルキアとティアナにとっては、唯一の肉親であり、最も尊敬し敬愛するものには変わりはない。

それが例え敵に操られた人形であったとしてもだ。

表面上では割り切れていても、心の仲間では割り切れない。

「くっ！！シュート！！」

ティアナは兄の射撃から逃げ回りながら僅かな隙を狙ってシュートバレットを放つ。

しかし、動揺するティアナの射撃をかわせぬほどティータは弱い。

まして実の妹の銃弾をかわすことなど造作もないこと。

発射に至るまでの筋肉の癖も、ちょっとした気の緩みも全てがティータには分かっている。

ティータはティアナの弾を避けて、ティアナの心を更に惑わす。

「まだ僕が偽者ではないかと疑っているようだね、ティアナ。残念ながら僕は本物だ。教えたはずだよ、射撃型にとって最も危険な行為とは何か？それは……」

ティードはデバイスをティアナの頭上から狙い撃ちをして発射する。

「はっ!!」

「私情に捕らわれ、狙えるはずの標的を逃してしまうことだよ！」

ティードは真顔でティアナ目掛けて銃弾の雨を降らせる。

頭上に降り注ぐ銃弾の雨を何とかかわすティアナは、瞳に映るティードの姿と昔のティードの姿を重ね合わせる。

「（今の銃弾といい、さっきの言葉といい……あれは確かに昔兄さんが私に教えてくれたものだ！でもやっぱり私には信じられない!!いや、それ以上に……兄さんと殺しあうことなんて出来ない!!でも、ここで私が兄さんを斃さないと、井上さんやクロームちゃん、それにルキアさんだって救えない!？くそ!!こんなときにどうすれば……!?)」

「また隙を見せたね、ティアナ。」

「し!!しまった!!」

動揺して周りが見なくなっているティアナに、隙を見たティエダがデバイスを構える。

ティアナが後を振り返ってクロスミラーージュを取り出したときには、もう遅かった。

「ご免ね、ティアナ・・・バリアブルシュート」

ティエダのデバイスから発射されたバリアブルシュートがティアナに直撃する。

その瞬間、轟音と爆風が発生する。

それを横で満身創痕になったルキアの目に映る。

「ティアナ!!!くそ!!!」

ルキアは急いでティアナの下に急ごうとするが、直ぐに白哉の妨げが入り行く手を塞ぐ。

「!に、兄様!!!」

「貴様の相手は私だ。他の事に気を散らすのでない。」

白哉は怜悯冷徹な態度と表情でルキアに何の躊躇いをもなく剣を振るう。

ルキアは剣戟に耐え切れず後ろの壁に激突する。

辛うじて起き上がるぐらいの意識はあるものの、白哉相手に完全なる防戦一方状態だ。

「くっ……このままでは……!!」

意識をどうにか保ち、徐に起き上がるルキア。

そこに間髪居れずに白哉の強靱が襲い掛かる。

「なっ!?!」

「終わりだ、ルキア」

白哉の剣がルキアの首もと目掛けて降り注がれる。

ルキアは咄嗟に鬼道を放って白哉の攻撃を回避する。

「破道の三十三 『蒼火墜』!!」

ルキアの左手から放たれる蒼い炎が白哉の攻撃を妨げる。

その隙にルキアは急いで逃げ回る。

「（危なかった・・・あれを喰らっていたら間違いなく終わりだった・・・だが、これでは容易に井上やティアナの援護に行けぬ！あの程度の目暗ましでは、時間を稼ぐことなど到底皆無。くそ！やはり勝負を仕掛けるしかないのか！？）」

逃げ回りながらルキアの辿り着いた結論はこれだ。

「くっ、止むおえん！舞え、『袖白雪』！」

ルキアは袖白雪を解放して、白哉と対峙することにした。

白哉自身もそれを待ち望んでいたようで、自然と刀を握る力も強くなる。

「漸く決心がついたようだな・・・ルキア・・・」

「申し訳ありません、兄様！今回のこのような行為・・・甘んじて罰は受けます！」

ルキアは白哉にそれだけ言うと、地面に刀を突き刺して技の発動を促す。

「次の舞 『白漣』！」

ルキアの刀から発生する強大な冷気を帯びた攻撃が敢えて待ち構える白哉に向けて放たれる。

「破道の五十四 『はいえん 廃炎』」

白哉は左手から白漣に向けて円盤状の炎を放ち、ルキアの攻撃を焼き尽くす相殺させる。

「なっ!?!」

ルキアは自身の技が詠唱破棄した鬼道でこつも容易く破られたことに愕然とした。

「（莫迦な!?!いくら本物に近い兄様とはいえ、私の袖白雪の攻撃を・・・詠唱破棄した五十番台の破道で打ち消すなど・・・）」

「その程度の攻撃で、私の動きを捉えられると思ったか・・・ルキア・・・」

「くっ!?!」

「・・・どうやら未だ分かっておらぬ顔をしておるな・・・ならば

仕方ない……」

白哉は徐に目を瞑ると、自身の斬魄刀を身体の中心に持っていき、刀身の側面を自分とルキアに見えるようにする。

ルキアもそれを見て、これから白哉が何をしようとしているのかは自ずと見当がついた。

「はっ……ま……まさか……!？」

驚愕してその場を動くことさえ出来ないルキアに、白哉は斬魄刀を解放する。

「散れ 『千本桜』せんぽんざくら」

その瞬間、刀の刀身が桃色の光を帯びると直ぐに花びらが散るようにして刀身が消えた。

消えた刀身は桜の花びらとなって、その千枚の花びら全てがルキアに向って襲い掛かる。

ルキアは直ぐに攻撃を避けようと動き回り、袖白雪や鬼道を駆使して花びらを落とすにかかる。



「剛炎の鎧・柔炎の剣・哀れなる断罪者と共に閻魔の制裁をその身に宿せ！破道の六十一 『業炎地雷』！！！」

ルキアは両手から六十番台の鬼道を放った。

『業炎地雷』は、対象物をその灼熱の炎で焼き尽くし、それと同時に地雷の如く付随して爆発を起こすといふかなりの攻撃力を秘めた技。

その効果と特性を上手く利用し、襲い掛かる千本桜の花びらを次々に落としていく。

さらにルキアは修行の末に新しく編み出した袖白雪の次なる舞を同時に浴びせる。

「肆の舞 『白霜雨』！！」

ルキアは袖白雪を天に翳すや否や、徐に満月を描くように刀を回しだした。

回し終わると、切っ先を地面に突き刺す。

その瞬間、天井から降り注ぐ氷の雨が桜の花びらに付着するや否や凍結し、動きを封じる。

平たく言えば、日番谷の最大技である『氷天百華葬』の威力を落とすとして、華を雨にしたようなものである。

ルキアの技によって、大半の花びらが焼かれたり凍りずけになったにもかかわらず、白哉は顔色一つ変えない。

「ほう・・・随分と技を磨いたようだな。だが・・・その程度の攻撃だけで、千本桜の攻撃を防ぎきれれると思うな。」

その時、凍結されていたはずの花びらが自身の力によって氷を砕き出てきた。

焼き尽くされたはずの花びらも、やはり暫くすると直ぐに復活して今度は巨大な塊となってルキアに向って来る。

「なっ!?!」

ルキアもこればかりにはどうすることも出来ず、そのまま千本の桜の塊を直撃した。

そして、花びらが全て散ってしまったときには・・・ルキアは身体中を切り刻まれて血まみれとなって倒れていた。

「・・・お前にも一度教えたはずだ。私の千本桜とは、解放とともに刀身部分が無数の刃となって舞い散り、対象を斬り刻む。無数の刃が光に当たることで桜の花弁を思わせるからその名がついている。お前は確かに成長はした・・・だが、私の剣に立ち向かうには・・・まだ早すぎる。」

白哉は徐にルキアの下まで近付くと、身体中を切り刻まれ意識が朦朧とするルキアに向けて刃を突きつける。

白哉の直ぐそばで気絶するティアナに向けて同じように銃を突きつけるティード。

その光景を遠くはなれたところで高見の見物というふうに腕組みをしたままほくそ笑むオベージヤ。

「止めだ、ルキア……」

「さようなら、ティアナ……」

白哉とティードが無表情のまま刀を振り下ろし、銃弾を発射しようとした……

その時……

突然二人の身体が藍色の霧となって原形を留めることはなくなりそのまま消え失せてしまった。

「……!!これは!!」

驚愕する三人は、直ぐに辺りを見回すが本物のルキアもティアナも見er限り見つからない。

「・・・成る程・・・そう言う訳か。どうやら、私の気付かないうちに君も参加していたようだね・・・」

オベージヤが何かに気付き誰も居ない筈の壁に向って話し出す。

「クフフ・・・やはりお気付きになりましたか。流石ですね・・・オベージヤ。」

この独特の不気味な声でもうお判りいただけるだろう。

オベージヤがかつて自らの手によって切り伏せたはずの男・・・六道骸である。

骸はクロームの身体を媒介にし、霧の幻術を使って姿を現した。

骸の傍らには、攻撃を受けて気絶している仲間が居るが、不思議なことにその傷は決して致命傷と呼べるようなものはなかったのだ。

「お久しぶりですね・・・オベージヤ。今回はさらにゲストが居るようですね・・・」

「どういうことかな？君はあのとときの傷で当分は動けないはずだと思っただがな・・・」

「確かに、あの時は確かに僕も流石に危なかったですね。しかし、井上織姫の能力によつて・・・クロームの身体を通じて僕の身体のほうも治癒されたんですよ。そして、この一ヶ月間の間に・・・君を倒すためにずっと対策を練っていたんですよ・・・オーバー ज्या。」

「君が私を倒す・・・！？ほう、して・・・それはどのようにかね？」

「クフフ・・・それはこれからたっぷりとお見せしてあげますよ。僕をあれほどまでにコケにしたことを、その身を以って知るといいですよ・・・」



## 第102話：散りゆく千本の刃（後書き）

### 次回予告

骸が参戦してくれたお陰で、四人のほうは何とか助かった様子だ。

しかし、依然形勢はオベージヤ側に有利なものとなっている。

オベージヤは白哉とティータに指示を下し骸を追い詰める。

すると、骸もそれを待ち望んだとばかりにD・スペードの魔レンズで何かを呼び出した。

一体、あいつは誰を呼び出したのか？

次回、次元の破壊者・・・「霧の三人」

みんな、死ぬ気で見るよ

## 第103話：霧の三人

六道骸が窮地に陥っていた間接フロント組みの戦いに急遽参戦。

だが、骸が戦いに散じたからと言って決して動揺一つ見せないオベージヤ。

だが、何故か今回の骸は前に戦ったとき以上に自身に満ちた表情だ。

骸は一体どんな秘策を考えているのであろうか……！？

「クフフ……相も変わらずまた汚い手で女性を苦しめていたんですか？どうやら君は僕でさえも歪んでいると思ってしまうほどの男らしい……」

「君に言われたくないな……マフィア殲滅の為に無差別に善良なマフィア関係者まで皆殺しにするよな極悪人な。」

「僕から言わせてみれば、マフィアは全て同じです。どんなに綺麗ごとを並べたり吐いたりしたところで、やっていることは皆同じだ。ボンゴレも例外ではない。」

「ならば聞こう……それほどまでにマフィアを恨んでいる君が、何故ボンゴレや今回の事件に加担する？」

「勘違いも甚だしいですよ……オベージヤ。僕がクロームを代行



人としてボンゴレ霧の守護者になったのは、自らの手で沢田綱吉を乗っ取るためですよ。そして、その身体を使いボンゴレの権力を欲しいままにし世界の全てのマフィアを殲滅する。その邪魔をさせる訳にはいきませんよ・・・今回のようなことで彼が腑抜けになってもらうのも、乗っ取り甲斐がなくて正直困りますしね。」

「成る程・・・決して誰かを救うためではないということか。だが、君一人で何が出来る？見ての通り、そこで倒れている女性三人は最早戦う力すらない。そして目の前に居るのはこの私と兵二人。いくら霧の幻術使いの君でも、我々を相手に一人で応戦できるとは考えられん。」

「クフフ・・・言っただけですよ。君を倒すために秘策を練っていたと・・・僕が何の策も無く君ほどの相手に無謀で立ち向かう訳ありません。」

「ふん。いいだろう・・・ならばその秘策とやらたつぷりと見せてもらおう。行け、あの不遜なパイナップル頭をもぎ取れ！！」

オベージヤは白哉とティードに向って指示を下し、骸を襲わせた。

対する骸は、向って来る二人の男を見ても顔色変えることなくボンゴレボックスを取り出し、ムクロウを形態変化。

それを見たオベージヤが骸を嘲笑う。

「また性懲りもなくD・スペードの魔レンズ（それ）か。何を召還しても無駄だ！」

「クフフ・・・甘く見てもらっては困りますよ。今回は原型のボンゴレリングがありますし、同じ轍は踏まない。今日はスペシャルなゲストを御呼びいたしましょう・・・君もびっくりするような。」

骸はD・スペードの魔レンズの効力を使って、自身の頭の中にある人物の記憶を鮮明に具現化した。

レンズから投影される藍色の霧が徐々に人間の姿となって、白哉とティーダの下に現れる。

そして、白哉の剣・ティーダの銃弾を骸によって召還されたものたちが受け止めた。

その召還されたものを見て、白哉もティーダも・・・オベージヤも驚愕した。

「クフフ・・・以前僕の下に真之介という男がやっていますね。彼はその時何れオベージヤとの再戦のときに役に立つであろうという憶測から、ある本を置いていきました。その本には、死神のことに関する情報と写真が満載でしたね・・・僕はその中から彼をチョイスしました。ご紹介致します・・・元護廷十三隊三番隊長、市丸ギンです。」

白哉の振り下ろされた刃を受け止めていたのは、常に薄ら笑いを浮かべたような顔をしている不気味な死神、市丸ギンであった。

ギンは脇差に酷似した自身の斬魄刀で薄ら笑いを浮かべ白哉の刃を受け止める。

「なんや・・・随分血走つてまんな、六番隊長さん。僕、久々の登場なんやから、もうちょい・・・手加減してもよろしんちゃう。」

ギン是不気味な笑いを浮かべると、霊圧をぶつけ合つて白哉を後に下がらせた。

一方、ティードの銃弾を受け止めた・・・いや、これは霧の幻術によつて防壁を作り出し遮断したというべきか。

「おやおや、もう一人紹介しないといけませんね。彼はつい最近、ボンゴレの守護者の継承のときにわざわざ来ていただいた初代のボンゴレ霧の守護者・・・そう、D・スピード本人です。」

霧の防壁が崩れると、出てきたのは首から魔レンズをぶら下げて藍色で骸によく似た髪形をした男が立っていた。

「ん~~~~・・・まさかこんなところに呼び出されるとは思っていないませんでしたよ、六道骸。」

「クフフ・・・そう落胆することはありませんよ。ただ、あなたはいつものにしてくださればいいのですから・・・」

「そうですか。ならばそうさせてもらいましょう。」

D・スピードは不敵な笑みを浮かべると霧の幻術で分身を作り出し、ティードを取り囲む。

ティードもそれに動揺しながらも、狙いを済ませてD・スピードを打ち貫いていく。

「大した幻術ですね。でも、そんなもので僕の目を眩ませるとでも思ったんですか？」

ティードは周囲のティアナと同じ砲撃魔法陣を展開して全てのD・スピード目掛けて発射する。

「クロスファイアーシュート！」

ティードはティアナ以上に切れと威力のあるクロスファイアーシュートを全弾発射する。

しかし、着弾と同時にD・スピードは霧と成って消え失せる。

他の弾も同様のことが言える。

「くっ！本体は何所だ？出てこい！」

ティーダが徐々に冷静さを失い焦りを見せる。

すると、そんなティーダを隠れたところで見ていたD・スピードは徐にティーダの下に近付き声を掛ける。

「ん~~~~・・・動揺してますね。私はずっとここにいますよ、ティーダ・ランスター。」

「はっ！後か！！」

ティーダが声に気付いて後を振り返って銃口を向けたその時。

ティーダの身体は突然金縛りにあったかのように自由が利かなくなつた。

「な・・・これは一体・・・!?」

不思議に思いティーダが目の前を向いてみると、そこに見えたのは・  
・  
・  
・

魔レンズを手に持ち自分自身をずっと見つめているD・スピードであつた。

「き……貴様!!何を……した……!?!?」

「ん~~~~・……大したことではないですよ。私の魔レンズで見つめられたものは全て金縛りにあつたように身体の自由を奪われる。そしてその瞬間から君は私の操り人形だ。さあ~~~~死者は死者らしく黄泉の国に帰るがいい。」

D・スピードはガイダをそのまま見つめると、ティータ自身は自分の意思で動かしているわけでもないのに勝手に両手が首元に近付き自分で自分の首を絞め始めた。

何とか拒絶しようとして力を入れるものの、手は首を絞めることをやめない。

悶絶し苦しみ続けるティータをD・スピードは真顔で見つめる。

やがて、ティータの身体が変色し始め元の血の液体に戻って姿を消したのであつた。

「ん~~~~・……妹と殺しあうなんて真似は、君自身も望んでいなかったはずですよ……ティータ・ランスター」

その頃、互いの斬魄刀で斬り合いを続ける白哉とギン。

ギンはいつものペースで表情を強張らせる白哉に言葉を掛ける。

「そんな力入れんとも・・・もつと楽にいこうやないの、六番隊長はん。」

「黙れ。兄けいには関係のないことだ。これ以上そのふざけた表情を見せるなら、容赦はせぬぞ。」

「ほんと怖いな〜この顔は生まれつきなんやで〜それに、僕はただ君と楽しく戦いたいだけやで。」

「私は貴様と楽しく剣を交えたいとは思っておらぬ。」

そう言うと、白哉はギンと一度距離を取ると持っていた刀の刀身を地面に向けて放した。

刀は地面に吸い込まれるように消えていくと、今度は白哉の足元から巨大な千本の刀身が立ち昇る。

ギンは薄ら笑いを浮かべたままそれをじっと見つめる。

「卍解。『千本桜景敵』」

せんほんざくらかげよじ

直後それらが一斉に舞い散り、始解時を遙かに上回る数の刃と化す。

その総数は数億枚とも言われ、桜色の濁流とも捉えられるその無数の刃を縦横無尽に操る事で、攻防一体・死角皆無の完全なる全方位

攻撃が可能となる。

「いや〜〜こうして間近で見るとホンマ凄いな、六番隊長さんの  
卍解は・・・」

「無駄口は叩かせぬ。」

白哉は無表情であるが、怒りが籠もった状態で手を使い千本桜の花  
びら全てを固めて速力を上げたものをギンにぶつけようとする。

ギンはそれを見るなり瞬歩で移動し、まるで白哉の攻撃を弄んでい  
るかのようにひらひらとかわし続ける。

「貴様・・・図に乗るな。」

「図に乗るなんて・・・とんでもない。ただ、案外六番隊長さんの  
卍解もそこまで早くないんやなと思っただけですよ。ああ・・・そ  
れとも僕のほうが早いんかな。」

「不遜も大概にするがいい・・・」

白哉は更に速力を上げてギンを千本桜で覆い隠す。

ギンは千本桜の中で愛も変わらず薄ら笑いを浮かべていた。



「あかんな・・・これじゃあ僕も折角出てこれたのにまたお蔵入りになってしまう。しゃあないな・・・」

すると、ギンは天を渦巻く千本桜の花びら目掛けて刀の刀身を向けて、名前を呼ぶ。

「射殺せ 『神鎗』」

その瞬間、ギンの刀身が如意棒のように伸びていき、千本桜の天井を突き抜ける。

すると、天から雨のように大量の槍を降ってきて自分を覆い隠す千本桜全てを突き刺して脱出してきた。

白哉もギンのこの技には度肝を抜いた。

「・・・何だ貴様、その技は？」

「『鎗紗雨』言うてな・・・結構僕好きなんやで。さて、六番隊長さんの卍解も見せてもらったことやし、そのお礼に・・・僕のも見せてあげるわ。」

すると、ギンは大幅に距離を取って白哉と向かい合う。

白哉はギンの攻撃に備えて自身の周囲に千本桜全てを配置させる。

「正解……『かみじのやじ神殺鎗』」

それは一瞬の出来事であった。

白哉の空気が凍りついた。

白哉は一瞬腹部に感じた何かを確かめるために見てみると、そこには千本桜の防御もままならないままに身体を貫通したギンの刃がそこにはあった。

腹部から流れ出る多量の血が、白哉の意識を遠のかせる。

口からの吐血も事の重大さを顕著に表す。

そんな、白哉を見たギンはたまにしか開けない目を開けて不気味に笑っていた。

白哉は血を吐き出したまま血の液体に戻っていき、消滅した。

「あっけなかったかな……もうちょっと、楽しめたと思ったのに。」

その二つの戦いが終結したのを、三叉槍で攻撃を仕掛ける骸と戦うオベージヤは勘付いていた。

「ほう……君の作り出した幻術が私の闇鴉の夢幻召還を上回ったか……」

「クフフ……どうですか、これが僕の真の実力ですよ。さあ、どうしますかオベージヤ。形勢逆転です。」

「何を世迷言を。忘れた訳では在るまい……君は一度鏡花水月を見ているのだぞ。私はその気になれば、何時でもそれを使うことも出来る。いや、既に使っているかも知れんぞ。」

「クフフ……虚栄を張るとはらしくないです。君は今複製斬魄刀を持っていない。ですから、鏡花水月の完全催眠に堕ちることもない……」

骸はそう言うと、オベージヤから距離を取り再び加速して向っていく。

「確かにそうだな……だが、それでも君と私との力の差は分かりきっている。どんな手を使おうとも、君は私には勝てない。破道の九十、『黒棺』」

オベージヤは骸の周囲を黒い物質で囲むんで骸を閉じ込めた。

やがて鬼道がとけると、骸の姿はなく跡形もなく消え去っていた。

「ふん。哀れな男だ・・・私と再戦などしていなければもう少し生きながらえていられたのに・・・」

オベージヤは鼻で笑い刀を納めて残りの三人も始末しようとその場を動き出そうとしたその時・・・

オベージヤは何者かに背中から刺されて身動きが取れないで居た。

出血箇所を抑えて何があつたのかを確認しようと思つて後を振り返るオベージヤ。

「何だ・・・何故こんなものが・・・!?」

「秘密を教えようか・・・オベージヤ君。」

「!!!」

オベージヤは自分と非常に良く似た男の声を確かに後から聞いた。

そして、徐に後を振り返ると底に立っていたのは・・・嘗て死神を欺き世界を転覆させようと企てた兆本人、藍染惣右介が立っていた。

「き・・・貴様は!!!」

「やあ。君も鏡花水月を使うことが出来るんだってね・・・骸君から聞いているよ。」

「莫迦な！？六道骸はさっき私が殺したはず・・・！？」

「クハハ！！どうやら、君は大きな勘違いをしているようですね・・・オベージヤ。」

オベージヤは部屋から聞こえてくる骸の声に耳を傾けた。

そして、未だに存在が消えないで居るD・スピードと市丸ギンの姿を見たときだった。

二人は霧の姿になるや否や一つにまとまりある人物の姿になった。

それは、さっきまで戦っていたはずのあの六道骸の姿であった。

「六道骸！？ではさきほどの・・・フェイクか？」

「クフフ・・・今更気付きましたか。やはりあなたは色々とぬけているようですね。所詮君は複製斬魄刀がなければ、別にたいしたほどの男では在りませんでしたね。さて、終わりにしてください・・・」

藍染惣右介。」

「いいとも。さあ、私の刀をよく見るんだ・・・これで君は僕の刀の虜となる・・・」



「『ふうすいばくし風水縛止』。これが君の世界だよ……」

藍染はそう言い残すと、藍色の霧となって消えていきホールに残ったのは骸と間接フロント組みのメンバーだけであつた——

## 第103話・霧の三人（後書き）

### 次回予告

あのオベージヤを斃した骸。

やはり何だかんだいって、只者じゃねえな……

さて、次なる相手は直接フロント組みのほうだぞ。

その相手は、オベージヤよりも階級が一つ上の第4使徒のモーンつてやつだ。

気をつけろよ、どんな手段を使うか分からないからな……

次回、次元の破壊者……「アルティメット・ウォー」

みんな、正解して見ろよ。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2478j/>

---

次元の破壊者～死神とマフィアと魔導師

2010年10月8日22時58分発行